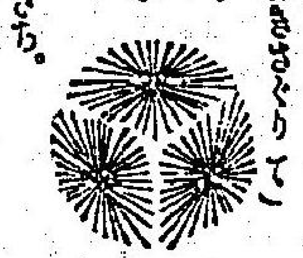
みづあふひ ナ。水葵。水草の名。なぎをいふ。畿内にて、
みづあぶら ナ。水油。すきあぶらなどの、かたまりたるものにむかへて、つねの、かみにつくるあぶらをいふ。
みづあみ ナ。水浴。みづあびに同じ。
みづあめ ナ。水飴。あめの、やはらかにねりたるもの。
みづいはひ ナ。水祝。みづあびせともいふ。はじめて、妻をまうけたる人に、年のはじめに、水をあびせていはふをいふ。滑稽雑談(あらたにめとりし男に、歳首、ことみづをいはふとて、水をあぶする事あり、これを、みづいはひ、みづかけなどいふ)

水いはひの図

みづいれ ナ。水入。すゞりがめ。
みづいろ ナ。水色。みづあさぎの、さらにうすきもの。
みづうちさを ナ。水打竿。船をつかふ竿。催馬楽(蜑小舟、さして入江の、瓶楫、みづうつ竿の、音のみぞする)
みづうまや ナ。水驛。踏歌のとき、ひとをもてなすに、酒肴のみにて、ことそぎて、饗膳をもちひぬをいふ。また、饗膳をもちひて、いかめしくするを、飯驛といふ。夫木二(たそれをか、聲もふけぬる、竹川の、みづうまやには、かげもさやらじ)源初音(夜も、やうくあけゆけば、みづうまやにてこそそがせたまふべきを)
みづうみ ナ。湖。みづの、くがにたゝひて、ひろくして、うみのごとくなれるところ。万廿(うらくもし、布勢の湖に、蜑舟に、まかぢかいぬき、あろさへの、そでふりかへし)和名(湖、大池也和名三豆宇美)
みづうるし ナ。水漆。草の名。いそがねさうに同じ。
みづえ ナ。瑞枝。みづくしくさしたるえだ。
みつえり ナ。三襟。みつの小褄を、ひとつにあはせてきるをいふ。女の衣服にいふ詞なり。貞丈雑記
みづおしろい ナ。水白粉。みづにてときたるおしろい。
みづおち ナ。鳩尾。むなぼねのさきのくぼむところ。
みづおち ナ。水落。かけひなどの、みづのおつるところ。
みづおと ナ。水音。みづのながるゝおと。
みづかがみ ナ。水鏡。みづのおもての、すみて、もののかげの、きよくうつるをいふ。夫木十(池の面に、影をさやかに、うつしても、水鏡みる、をみなへしかな)
みづかき ナ。跣。水禽の、脚の指のまたに、つきつきたる膜にて、水禽の、水をかきわけてゆくもの。和名(跣和名美豆加木鳧足指間有幕相連著者也)
みづがき ナ。瑞籬。たまがき。やしろのめぐりのかき。拾衣三(思ふこと、なるともなしに、ほどきす、賀茂のみづがき、たゞね來にけり)和名(瑞籬俗云美豆加岐、一云以賀牧)
みづがき ナ。瑞籬。崇神のみかどの大和の宮の名。
みづがきの マクラ。瑞籬之。みづがきの宮は、崇神のみかどのおほましし宮にて、ひさしきむかしの御世なれば、ひさしにかけていふ。万十三(拾垣、久時ゆ、こひすれば、わがおびゆるむ、あさよひごとに)
みづかけ ナ。水掛。みづいはひに同じ。
みづかげ ナ。水影。みづにうつるかげ。源椎本(河添柳のおきやしなびく、水影など、おろかならずおかしきを)
みづかげくさ ナ。水陰草。草の名。いねの異名。藻塩草(まさ、たゞ、水のほとりの草なりともいへり。万十(天の川、水陰草の、秋風に、靡くをみれば、時は來ぬらし)
みづかけふるまひ ナ。水掛振舞。みづいはひに同じ。
みづかげん ナ。水加減。みづをもちふるほどらひ。
みづかけろん ナ。水掛論。たがひに、これとおさふべきあかしもなくて、いさゞらにあらそふをいふ。
みづかさ ナ。水嵩。みづのかさ。みづのたゝひたるぶんりやう。散木(ふりそめし、日をかぞふれば、みづかさの、ひさしくなりぬ、さみだれのそら)
みつかし ナ。草の名。いしやたふしに同じ。
みづかしは ナ。水柏。水草の名。葉は、半夏の葉に似ておほきく、花は、あろくして、春のはじめにさく。
みつかど ナ。三角。三稜。みつのかど。みつのすみ。
みつかど ナ。三稜。草の名。かやのたぐひのくさにて、くきに、みつのかどめきたるところあるもの。
みづかね ナ。水銀。金の名。しろかねいろのかねにて、みづのごとくながるゝもの。本朝粥(黒方は土にて、沈の氣、まなくうるほせ給ひて、ふしごとに、みづかねの露をすゑさせたまひて)和名(汞和名美豆加禰水銀別名也)

みづかねのかす ナ。汞粉。むらや。みづかねに、みやうばんの、みづにときたるをまぜて、ひにやきたるものにて、おしろいなどにもちふるものなり。和名(汞粉和名美豆加禰乃加須 焼時飛著釜上之名也、俗名之水銀灰)
みづかねのけぶり ナ。銀粉。むらやをとるべきのすゝ。和名(銀粉和名美豆加禰乃介布利 焼朱砂爲水銀、其上黒烟名也)
みづかねほり ナ。水銀掘。みづかねをほりとるを、業とするひと。七十一番職人歌合(みづかねほり、あかきなや、丹生の深山に、ほる金の、みづから人は、思入りぬる)
みづかぶり ナ。水被。みづを、かしらよりあぶるをいふ。
みづがめ ナ。水瓶。のみみづをもりてたくはふるかめ。散木(たらひして、あしたには、すゞぐべき、みづがめは過ぎれ、とりぬものかは)和名(水瓶和名美豆加米)
みづから カヘ。自。おのれ。古今(万葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめたまひてなん)
みづから ツ。自。そのみまさしく。源帚木(あさら御身をなどいふに、みづから、ひきひがみをかきさぐりて)
みつからまつ ナ。三唐松。紋所の名。みつのからまつをくみあはせて、まろきかたちにゑがきなしたるもの。



みつき ナ。見付。みえ。ほかよりみるかたち。
みつぎ ナ。貢。調。たみの、としぐ、そのたなをさゝめて、みかどにたてまつるものをいふ。万一(やまつみの、まつる御調と、春過には、花かざしもち、秋たてば、紅葉かざせり)崇神紀(此謂男之弭調、女之手末調也)
みつぎ ナ。給與。まかなひ。たすけ。おくり。
みづき ナ。承鞚。みづつきに同じ。
みづき ナ。水の名。高きものは、二三丈許なるもあり。葉は、うめもどきに似て、すこしあつくして、冬はおちず。また、花は黄色にて、その狀、蘭花に似たり。
みづき ナ。水城。あろのめぐりに、みづをたゝへたるところ。いにしへ、筑紫に、おほきなる堤をきづきて、水をたゝへたる事あり。万六(ますらをと、思へるわれや、みづぐきの、水城のうへに、なみだのごはん)
みつぎいと ナ。調絲。つきの絲をおるいと。夫木一(調絲、てこらが布を、晒ると、見しは花の、盛なりけり)
みつぎうま ナ。貢馬。みつぎにたてまつるうま。
みつきすこどり ナ。三月兒子鳥。うぐひすの異名。藻塩草(さ、ほとゝぎすの異名。秘藏抄(五月雨の、雲間をなきて、すぐるなり、思ひすがほの、みつきすこどり)
みづきは ナ。水際。みづのきは。みづのほとり。
みづきはたつ サ。ヒトリ。四。水際立。みづくしくきはだつ。
みつぎぶね ナ。貢船。みつぎものをはこぶふね。万十二(四方の國より、たてまつる、美都奇能船は、堀江より、みをびきしつゝ、あさなぎに、かぢひきのぼり)
みつぎもの ナ。貢物。みつぎにたてまつるもの。
みづぎれ ナ。水切。みづの、かれてなくなるをいふ。
みつく ワ。カク。四。見付。みならふ。狹衣二(若宮は、とよなくみつきたまひてなれむつびたまふに)
みつく ワ。カナ。シニ。見付。たづぬ。みいだす。この語は、地方によりては、みつけるを下一段にいふ。後撰(一姿、花見にいでたりけるをみつけて、文を遣しけりける)
みつぐ ワ。カケ。四。貢。たすく。おくりす。徒然草(あなかしこ、ききさしたち、何方をもみつぎたまふな)
みづく ワ。ヒトリ。四。水漬。みづにつく。みづにひたる。みづにつかる。万十(ちゝのみ、いもがひてきさね、つくしなる、美都久あらさま、とりて來までに)
みづくかばね ナ。水漬屍。みづにひたるかばね。万十八(うみゆかば、美都久かばね、やまゆかば、くさむすかばね、おほきみの、へにこそしなめ)
みづくき ナ。水莖。もじのあと。ふでのあと。源幻(ふりおつる御なみだの、みづくきになかれそふを)
みづくきのをか ナ。水莖岡。地の名。近江にあり。まさ、讃岐にもありといふ。古今(みづくきの、岡のやかたに、妹とわれと、寝てのあさけの、霜のふりはも)
みづくぐり ナ。水潜。みづのそこにいるをいふ。
みづくさ ナ。水茨。みづのなかにいでくるくさ。
みづくさ ナ。水草。みづとくさと。源若菜(その夕まで、水草きよき山のすゑにてつとめ侍らんとてなん)
みづくさし サ。ヒ。水臭。こゝろあさし。なさけうすし。
みづぐすり ナ。水藥。みづにとかしたるくすり。
みつぐそく ナ。三具足。佛前のかざりものにて、香爐と花

瓶と坩盞とをあはせていふとなへ。

みつぐち ナ。兎缺。いぐち。くちびるのさけたるひと。

みづぐち ナ。水口。かけひなどの、みづのおつるくち。

みづぐちなは ナ。水蛇。蛇の一種。水中にすむもの。形、常の蛇のごとくにて、黒くきばみて、斑なる紋あり。

みづくみ ナ。水汲。流人の妻をいふ。伊豆、八丈島にて、

みづくむ ワ。ヒトリ。四。水含。みづけをふくむ。著聞十八（曉行法師、ひとのもとへまゐりたりけるに、瓜をとりいでたりけるが、ころくなりてみづぐみされて）

みつくり ナ。箕作。みをつくるを、なりはひとするもの。三十二番職人歌合（みつくり。いさゝらは、ふるみのそでを、いふぜん、人のひいづる、事をなしても）

みつぐりの マクラ。三栗之。みつぐりとは、ひとつの毬に、実のみつある栗をいふ。さて、みつぐりの、中の物なればと、なかにかけていふ。万九（三栗乃、中にむかへる、さらし井の、たえずかよはん、そこにつまもが）

みづぐるま ナ。水車。みづをながしかけて、まはすやうにしたるくるま。夫木廿七（冬来ては、田川にたてる、みづぐるま、こほりのくさび、うちそへてけり）

みづぐるま ナ。水車。まひくむしをいふ。上総にて、

みづくろひ ナ。身繕。みのつくろひ。遊仙窟（婉調）

みつくろふ ワ。オナ。四。見繕。みとゝのふるに同じ。

みつくわい ナ。密會。ひそかにいであふをいふ。

みづぐわし ナ。水菓子。このみなどのくふもの。

みづけ ナ。水気。みづのけ。みづのうるほひ。

みつけう ナ。密教。まんだらしゆうに同じ。

みづけぶり ナ。水烟。みづの、きりのごとくたつもの。

みつける ワ。カケ。シ。見付。みつくを見るべし。

みつご ナ。三子。ひとたびの産に、みつの子をうむをいふ。公事根源（東豎子といふは、内侍司の被官にある者にて云々。これは、みつごをもちひらるゝにや）

みつご ナ。三子。みつばかりなるをさなご。

みづこ ナ。嬰孩。おご。うまれて、ほどなきこ。

みつこく ナ。密告。つみををかしたるひとなどをみいでて、おほやけに、ひそかにつぐるをいふ。

みづごけ ナ。水苔。みしぶ。みづのさび。みづのあか。

みづこし ナ。水漉。みづぶるひに同じ。

みづこひどり ナ。水乞鳥。鳥の名。かもせみなどにや、いまださだかならず。山家集（山里は、谷のかけひの、たえぐに、みづこひどりの、声きこゆなり）

みづこぼし ナ。水翻。ちやたんのみづなどをすつるもの。三十二番職人歌合（ひむちうり、風呂火鉢、瓦灯、泥りをけ、みづこぼし、よきあきなひと、奈良の土かな）

みづごり ナ。水垢離。こりといふに同じ。

みつさかづき ナ。三盃。おほぶきの、みつかさねてもちふるもの。婚禮などのいはひにもちふるものなり。

みづさき ナ。水先。みづのながれむかふかた。

みづさきあんない ナ。水先案内。ふなぢのあんない。船の案内して、暗礁などさけのりあけしむるやうにするもの。

みづさし ナ。水差。ものにさすみづをいるゝうつは。茶釜にさすは、柄杓にてくむやうにし、花瓶などにさすは、手あり、口ありて、そゝぎてさすやうにしたり。

みつだそう ナ。密陀僧。まだうみつに同じ。

みづざらへ ナ。水浚。みづをさらへて、きよむるをいふ。

みつし ナ。密旨。ひとにしらせぬおほせごと。

みづし ナ。御厨子。づしをたふとびていふことなへ。源氏末（文どもなど、みさまよひいでゝは、からき御厨子なる色々の紙なる文どもひきいでて）輿入記（くろだな云々、みづしとは、この棚の下を、四方やさぎて、舞戸をして、からおやうおろすやうにしたるをいふなり、すこし秘するものなどいるべきなり）

みづし ナ。御厨子。みづしところにあるをんな。落窪（あこぎ、御手水、かゆ、いでてまゐらんとおもひて、みづしにやかたらひましとおもへど）

みつじ ナ。密事。ひめて、ひとにしらせぬこと。

みづしごと ナ。水仕事。みづをつかふしごと。

みつしつ ナ。密室。みつじなどをかたらふへや。

みづしどころ ナ。御厨子所。禁中の、供御のものをとゝのふるところ。また、貴人の家の膳所。また、厨房などをあつかふところ。役撰（みづしどころにさぶらひけるに、きづあるよしをなげきて）宇拾え（昔の、みづしどころにつかひける女の、ありと

むかりはきこえけれども）

みづしめ ナ。御厨子女。だいどころのをんな。

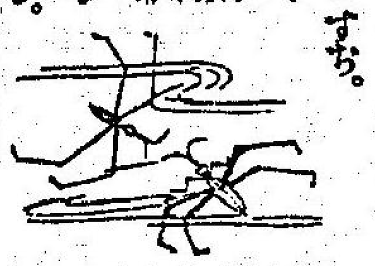
みづしも ナ。水霜。つゆの、なかば、しもとなりたるもの。

みつしゆう ナ。密宗。まんだらしゆうに同じ。

みつしよ ナ。密書。みつじをかきたるかきもの。

みづすぢ ナ。水筋。みづのながれいづるすぢ。

みづすまし ナ。水馬。虫の名。形、すこし、蜘蛛に似て、むつの足あり。さうの鬚ありて、全身あかくくろずみたり。常に、水の上に浮びあるきて、水かるれば、そこをはなれて、ほかにうつる。



みづすまし ナ。鼓虫。まひくむしをいふ。東京にて、

みつせう ナ。密詔。ひとにしらせぬみことのり。

みつせがは ナ。三瀬川。さんづがは。拾遺（三瀬川、わたるみさをも、なかりけり、何に衣を、ぬぎてかくらん）

みづせき ナ。水堰。みづのながれをせくをいふ。

みつせつ ナ。密接。ひまなく、すきまなくつくをいふ。

みづぜめ ナ。水攻。しろをかこみて、きうをみづびたしにし、また、みづのてをやききなどするをいふ。

みづぜめ ナ。水責。みづをもて、がうもんするをいふ。

みつそう ナ。密奏。ひそかにそうもんするをいふ。

みづそこ ナ。水底。みづのそこ。みづのさこ。

みづた ナ。水田。ふかだ。ぬまだ。どろやうきた。

みづたき ナ。水葱。菜名。ぬなみくけをいふ。筑紫にて、

みづたで ナ。水蓼。野菜の名。たでといふに同じ。但し、一種の草あり。葉は、うまごでの葉に似て、茎あかむらさき。常に、よく、溝などの水のほとりにおふ。

みづたでを マクラ。水蓼。たでは、穂をつむものなれば、ほづみにかけていふ。万十三（みてぐらを、ならよりいでて、水蓼、穂積にいたり、鳥網はる、さかてをすぎり）

みづたて ナ。水蘇草。草の名。いちやくしやうに同じ。

みづたま ナ。水玉。みづの、くだけてとびちるもの。

みづたまづき ナ。瑞玉盞。たまのさかづきのうつくしきもの。古事記（ありきぬの、みへの子が、さゝがせる、美豆多麻宇伎に、うきしあぶら、おちなづさひ）

みづたまり ナ。水溜。みづのたまり。新六二（雨すぐる、たのきのさけの、水溜、ありそつましき、世を如何せん）

みづたまる マクラ。水溜。みづは、いけは、よくたまるゆゑに、いけにかけていふ。古事記（美豆多麻流、余佐美能、伊気の云々、いやをこにして、いまぞくやしき）

みつだん ナ。密談。みつじのさうだん。

みづち ナ。蛟。をろちのたぐひにて、よつのあしあるもののなりとぞ。和名（兼名苑云、蛟、日本紀私記用大虬二字）

みつちや ナ。痘痕。かほにつきたる、もがさのあと。

みづぢやう ナ。御図帳。諸国の田畠の事をのせたるものにて、いにしへ、民部省にそなへられたり。

みつちよく ナ。密勅。ひとにしらせぬみことのり。

みつつう ナ。密通。ひとにかくれて志のびあふをいふ。

みぞなどのうへにいふことなり。

みづつき ナ。承鞚。くつわの、たづなをとほすあな。和名（承鞚、辨色立成云、承鞚、美豆岐、俗云三都々岐、一云七寸）

みづつく ワ。ヒトリ。四。水漬。みづにつく。みづにひたる。また、みづをふくむ。土佐（池めいてくぼまり、みづつけるところあり、ほとりに、松もありき）

みつづけ ナ。蜜漬。みつにつけたるつけもの。

みづづけ ナ。水漬。水飯。みづをかけたるおもの。宇拾七（冬は、湯づけ、夏は、みづづけにて、物をめすべきなり）

みづつたふ マクラ。水伝。みづつたふ、水のながれつたふ磯まれ、波かゝりて、みづつたふゆゑに、いそにかけていふ。万二（水傳、磯の浦まの、いそつゝじ、もくさくみちを、まさみなんかも）

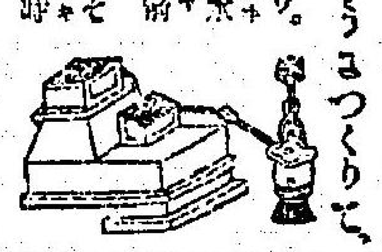
みづつての マクラ。水伝。みづつたふに同じ。萬葉集の水傳を、よみたがへたるなり。新六四（みづつての、磯間のつゝじ、さかりし、海のいさりび、よるをやれみる）

みづて ナ。水手。あしでを見るべし。著聞五（柵機まうしけるかさあり、湖海のなかに、みづてまで）

みづてうし ナ。水調子。てうしの、きはめてひくきもの。常に、三味線などの調子のうへにいへり。

みづでつぽう ナ。水鉄砲。みづをとばしさすてつぽう。竹の筒の中に、また、ほそき竹をさして、水をすひあげさせては、おしいだすやうにしたるものにて、おほきなるもの、ちひさきものなど、さまぐなるあり。

みづどけい　ナ。水時計。漏刻。ろうこく。水をもて、時をさぐるやうにしたるもの。下文を見るべし。貞丈雑記（漏刻といふものあり。銅の盤に、水をいれて、盤の下に、穴ありて、水のしたゝりおつるやうにつくりて、その盤の水の中に、箭をたつるなり。その盤を、漏壺といひ、その水を漏水といひ、その箭を、漏箭といひ、その箭に、刻目をつけおくを、漏刻といふ。その刻目の数は、四十八きざむなり。一時の間を、四刻づゝにきざめるものなり。この箭を、水の中へたておくとき、水もりて、水のかさへるにしたがひて、箭の刻目、段々にみゆるなり。子の時に、刻目ひとつみゆるは、子のひとつといひ、ふたつみゆるは、子のふたつといふ。以下、是に准じ知るべし）



みづとり　ナ。水鳥。みづにすむとりをすべていふ。濱松玉（たゞ、みづとりの、くがにまどへるこゝちして）

みづとりの　マクラ。水鳥之。みづとりには、鴨もありて、鴨の羽のあをきものなれば、あをにかけていふ。また、すべて、水鳥は、殊にあわたゞしくたつものなれば、たつにも冠らせていふ。万九（あきのつゆは、うつしなりけり、水鳥乃、青羽乃山の、いろづくみれば）同四十（水鳥乃、多々武いそぎに、いものらに、ものいはず來にて、おもひかねつも）

みづとるたま　ナ。水取玉。すゐしやうのたぐひの、うるほしきたま。月のひかりにてらして、露をとるにもちふる玉なり。和名（水玉、一名、月珠和名、美豆止留太萬 水精也）

みづな　ト。水菜。野菜の名。かぶらなに似て、葉ほそながく、きざやかなるにて、ひとつの株より、あまたの葉、くきだちていづ。その菜、常に、水をそゝげば、よくしげるといふ。また、そのたぐひくさ〴〵あり。

みづなか　ナ。水中。みづのなか。貫之集（水中に、ありとしけれ、春たちて、氷とくれば、おつる志らたま）

みづながし　ナ。火災。くわじ。天武紀（失火焼多）

みつながしそ　ナ。御綱柏。かしその、みつまたにて、さきのとがりたるもの。いにしへ、さけをもるにもちひたり。古事記（御綱柏者、悉投棄於海）

みづなぎ　ナ。水葱。水草の名。なぎをいふ。大和にて、

みつなのこの名　ナ。御綱近衛。みつなのすけのところ見るべし。新六（かすくには、みつなのこの名、ひきつれて、すゞむみそしの、そでぞのどけき）

みつなのすけ　ナ。御綱助。みつなのこの名。大舎人寮の官人なり。大舎人寮の官人は、行幸のとき、御輦につきたる御綱などをとる事あるゆゑにいへり。枕草九（行幸にならぶるものは、何にかあらん云々、みつなのすけ、中少将などいとをかし）

みづなは　ナ。水縄。ふねにもちふるなは。

みづなは　ナ。水縄。ひきのべて、ひずみをうかゞふなは。

みづなみ　ナ。水波。みづにたつなみ。また、志らなみ。堀川百首（みづなみの、もちでのてるを、みえつるは、あじろに氷魚の、よるにぞありける）

みづなみ　ナ。水波。女の上家の名所に、淡海といふ所あり。これをいふならんといへり。千載（よかせてか、上総の國の、水波に、けさこそ冬は、たちそめけれ）

みづなると　ナ。水鳴子。そうづがらりすな見るべし。

みづにす　ワガケ。カ。寫水。すつ。ながす。やめとなす。

みづぬき　ナ。水抜。つゝみなどの、みづをながすところ。

みづねずみ　ナ。水鼠。鼠の一種なり。形、常のねずみのごとくにて、水の中をあさりて、魚をとるもの。

みづのあき　ナ。水秋。あきのけしきの、みづにうつりてみゆるをいふ。得子（龍田川、みねのもみぢの、ちらぬば聞れ、そこにぞ水の、秋はみえける）

みづのあその　マクラ。水泊之。あわは、あとなくきゆるものなれば、うたかた、きゆなどにかけていふ。後撰（黒川、たえずながるゝ、水のあわの、うたかた人に、あはできえめや）拾遺（あなこひし、そのうは人を、みづのあわの、きえかへるとも、志らせてしがな）

みづのうみ　ナ。湖。みづうみ。散木（水の海を、おつる涙に、なりにけり、あふべきほども、なきときくより）

みづのえ　ナ。壬。えとの名。かのとのつぎ。

みづのえ　ナ。水江。地の名。丹後にあり。また、攝津にもありといふ。新古（あしづの、さゞ入江の、みづの江の、世にすみがたき、わが身なりけり）

みつのかがみ　ナ。三鑑。をさまれる世をいふなるべし。この語は、もろこし、唐太宗の、銅をかんがみ、古をかんがみ、人をかんがみるといへりし故事よりいひいでしなるべし。新六（くもりなき、みつのかゞみの、とほかくは、みさくかひある、世とこそはきけ）

みつのがしそ　ナ。三角柏。みつながしそに同じ。新千（みつのがしそといふかしこをおこせて）

みつのくるま　ナ。三車。ほとけのみちをいふに同じ。もと、この語は、法華経にみえたる譬の語にて、羊車、鹿車、牛車をいふ三車をいへり。月詣集（この世をうしと心に、かけつれば、みつの車に、みちびかれなん）

みづのと　ナ。水粉。むぎこがしをいふ。東國、西國にて、

みつのたからのとり　ナ。三寶鳥。ぶつぽふそうに同じ。弁内侍日記（すぐされ、ひめどりのやうにて、今すこしおほきなり、とにかくに、かしこき君が、御代なれば、みつのたからの、とりもなくなり）

みづのたみ　ナ。水民。魚の異名。散木（溺されて、なますけおりと、みつるより、水民さへ、憐きやなぞ）

みづのて　ナ。水手。みづのかさ。みづをくみとるところ。

みづのと　ナ。癸。えとの名。みづのえのつぎ。

みつのとも　ナ。三友。琴と詩と酒と。源氏末摘花（琴ぞぞ、なつかしきかたらひぐさとおもへるときゆれば、みつの友にて、今ひとくさやうたてあらんとて）

みつのはじめ　ナ。三始。さんしに同じ。

みづのはな　ナ。水花。水草の名。はちすの異名。藕頭草

みづのはる　ナ。水春。はるのけしきの、みづにうつりてみゆるをいふ。古今（なみのはな、おきからさきて、ちりくめり、水の春とは、風やなるらん）

みづのみ　ナ。水吞。みづをのむにもちふるうつはもの。

みつのみち　ナ。三徑。ひとのいへにあるみちにて、門にゆくみち、井にゆくみち、厠にゆくみちの、みつのみちをいふ。夫木廿（かりそめに、みつのみちをも、をしへずば、ひとつのかどを、いかで志らまし）

みづのみびやくしやう　ナ。水吞百姓。まづしきひやくしやう。ひとにやとはれてよなさりするひやくしやう。

みつのをのこと　ナ。三絃琴。樂器の名。さみせん。琵琶のたぐひのものにて、胴は方形にて、猫の皮をもてはりたるに、ながき棹をつけて、棹に、みすぢの絃をかけて、撥をもてかきならすやうにしたるもの。

みづのをのみかど　ナ。水尾帝。清和のみかどをまうす。

みづのをやま　ナ。水尾山。山の名。丹波國、桑田の郡にあり。名寄（うちつけに、みづのをやまの、あきかぜぞ、いまにたぎつ、おとをぞきく）

みつば　ナ。三葉。草木のおひいでて、葉のみつなりつきたるころ。拾遺（みやまぎの、ふたばみつばに、もゆるまで、きえせぬゆきと、みえもするかな）

みつば　ナ。三葉。野菜の名。みつぜりに同じ。

みづは　ナ。罔象。神の名。みづをつかさどりたまふかみ。和名（罔象、日本紀云、罔象和名美豆波 水神也）

みつない　ナ。暗鬪。ひそかに、かくれてうつをいふ。

みづばかり　ナ。準。こゝくみの、いへなどをたつるとき、もちふるものにて、みづをもりて、そのたひらなると、たひらならざるとをうかゞふもの。また、あるくは、つりさげて、ひずみをうかゞふみづなはのたぐひをも、いへり。新六（あしびきの、山にかけたる、みづばかり、かたさびりにも、おつる瀧かな）和名（準縄、和名美豆波加利）

みづはき　ナ。水樋。みづをながしやるくち。

みつばぐさ　ナ。三葉草。前胡。草の名。山にいでくる草にて、葉は三葉にて、たけてのち、莖は、枝をいだし、秋のころにいたりて、枝の末に、ふくくむらさきさみる花をひらきて、傘の狀をなす。この草、なほ、たゞひおほくもして、根は、常に、藥にもちふ。

みづはぐむ　リ。ヒトリ。四。瑞歯頂。としおいて、歯のぬけたるのち、またさらに、うるはしき歯のおひいづるをいふとぞ。夫木四十（つくまぜ、よらひのかみを、ゆふにして、みもすそ川の、みづはぐむまで）

みづはさす　リ。ヒトリ。四。瑞歯差。みづはぐむに同じ。続世継（*みづはさしたる媼の、枝にかゝりたるか）

みづはじき　ナ。水彈。ぽんぷ。みづでつぽう。

みつばぜり　ナ。三葉芹。野菜の名。芹の一種にて、なよやかの莖に、みつの葉つけり。葉は、ひろくおほきくして、緑に、こまやかなる刻あり。夏の初、きざみたる花さ

あいだし　名・水産　さけの一種。

あいだち　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだて　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだま　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだみ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだめ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだも　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだや　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだよ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだら　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだり　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだる　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだれ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだろ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだわ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだを　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだん　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんご　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんす　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼう　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうず　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうら　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがい　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるい　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつ　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかた　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなし　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

あいだんぼうずぐさのきのこのかさのうらのひだのいろのちがいによるしゅるいのべつのしかたのはなしのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづきのつづき　名・植物　ヒノキ科の常緑高木。

いと、針目までや、みとほしつるとてぞらふ）
みとみる　ワ。カケ。カニ。見々。とりぐみる。拾玉（そゞ空此、年へぬる身れ、耳たれて、みとみる人れ、後生のつの）
みとむ　ワ。カケ。シニ。認。たしかにみさだむ。
みども　カヘ。身共。われ。われら。豊前、豊後の人の詞。
みともなし　サ。ヒ。無見度。みたもなしに同じ。
みとらしの　マクラ。御執之。みとらしとれ、弭を、みとらしといふ類にて、弓の事をいふ。されば、ゆみにかけていふ。万一（朝には、とりなでたまひ、夕には、いよせたてし、御執乃、梓弓の、なかはずの、音すなり）
みどり　ナ。見取。かんど。かんなやう。
みどり　ナ。緑。碧。もえぎいろ。また、あゐいろ。拾玉（うちむれて、若菜つみつゝ、そるの野の、みどりをさけて、きゆすなくなり）同（越の山、ゆきげのくも、これのきて、みどりをさくる、かりのもろごゑ）
みどりいろ　ナ。緑色。碧色。もえぎいろ。また、あゐいろ。
みどりご　ナ。嬰兒。としのふさうみつむどりなるちご。万廿（ゐがせては、こふとはしわらし、小兒の、夜泣をしつゝ、寢がてらくれ）拾遺（あふ事れ、かたゐざりする、みどりごの、たゝん月にも、あむじきやする）
みどりごやま　ナ。嬰兒山。山の名。河内國、交野の郡にあり。方與集（きがごとや、うきねれなくと、ほととぎす、みどりごやまに、いりてこそきけ）
みどりぬ　ナ。緑沼。みどりにみゆるぬま。夫木（緑沼に、うきさる蓮、紅に、水にごるなり、波たつなゆら）
みどりのはやし　ナ。緑林。ぬすびとの異名。夫木二十（そやすぎよ、人の心れ、横田山、緑の林、かげにかくれん）
みどりのほら　ナ。緑洞。せんどう。おりゐのみかどのおすまひどころ。風雅（くもやるき、みどりのほらに、すむ月の、うき世の中に、かげれたえなき）
みとる　ワ。カケ。四。見取。みてとる。みてさとる。源落葉（御心をとめて、おぼさるゝ事なめりとみとりて）
みとる　ワ。ヒトリ。シニ。見惚。みてほれぐしくなる。
みとれる　ワ。ヒトリ。シ一。見惚。みてほれぐしくなる。
みどろ　ナ。水泥。どろといふに同じ。
みどろし　サ。フ。水泥。なづみがちなり。散木（懸草を、さしにはつめる、船なれば、楫もみどろし、心せよ波）
みどろめく　ワ。ヒトリ。四。水泥のごとくあり。
みとをか　ウ。三十日。つごもりをいふ。筑後にて、
みな　ナ。蜷。貝の名。にな。螺に似て、おほきさ、指のかしらむかり、まさ、殻あつくして、色あをくくろぞめり。和名（河貝子和名、美奈　蜷上黑小狭長似人身者也）
みな　ツ。皆。のこらず。あるかぎりすべて。古今（寛平の御とき、藏人所のをのこども云々、みな、歌よみけるついでに）徒然草（そのあし、みななりにけり）
みなあか　ナ。皆赤。すべてあかきをいふ。
みなうら　ナ。水占。みづのうらなひ。みづをさゝるとき、のつじうら。万廿（妹にあはず、ひさしくなりぬ、にぎし川、きよき瀬ごとに、美奈宇良はへてな）
みなかす　ワ。カケ。四。見流。みすぐす。みてとらず。
みなかみ　ナ。水上。かみ。ながれのかみ。みづのおこるところ。古今（おちたぎつ、瀧のみなかみ、としつもり、おいにけらしな、くろきすぢなし）
みながみな　ソ。皆々。みなのこらず。みなことぐく。
みながら　ソ。我ながら。源空蝉（つゝむ事なきにしもあらねべ、身ながら、心にもえまかすまじくなん）
みながら　ソ。皆ながら。みなのこらず。古今（紫の、一本ゆゑに、武藏野の、草はみながら、あはれとぞみる）
みなぎ　ナ。皆黄。すべてきいろなるをいふ。
みなぎしやま　ナ。水岸山。山の名。越中にありといへど、さだかならず。夫木廿（おしそめて、みなぎしやまの、あさがすみ、やらけもみえず、たちにけらしも）
みなぎは　ナ。水際。みぎは。万廿（船ぎほふ、堀江の川の、美奈伎波に、きゐつゝなくれ、みやこどりかも）
みなぎらふ　ワ。ヒトリ。四。漲。みなぎる。齊明紀（飛鳥川、瀰儺蟻羅毘つゝ、ゆく水の、間もなくも、思ほゆるかも）
みなぎる　ワ。ヒトリ。四。漲。みづのいきほひつよくしてあふれんとす。徒然草（生住異滅のうつりかはる、まことの大事れ、たけき河の、みなぎりながるゝがごとし）
みなくぐり　ナ。水潜。みづのきさはくぐりいるをいふ。新六三（さゝはのみ、にほのかよひの、みなくぐり、いりぬるいそれ、みらくすくなし）

みなくち　ナ。水口。みづのくち。田に、みづをせきいるゝくちところ。伊勢（みなくちに、われやみゆらん、かはづさへ、みづのなかにて、もろごゑになく）
みなくちまつり　ナ。水口祭。みなくちをまつるまつり。
みなくれなゐ　ナ。皆紅。すべてくれなゐなるをいふ。
みなくろ　ナ。皆黒。すべてくろきをいふ。
みなげ　ナ。身投。みづから、みをなげてしぬるをいふ。
みなこさもどり　ナ。鶚鵙。みさごの異名。藏玉集（沖津島、猿田彥に、岡居して、水虫ならず、みなこさもどり）
みなてもち　ナ。三日餅。みかのもちひに同じ。
みなごろし　ナ。鏖。ひとりものこらずころすをいふ。
みなしがひ　ナ。身無貝。うつせがひに同じ。
みなしぐり　ナ。無實栗。くりのみなし。堀川百首（これもさこそれ、みなしぐり、朽葉が下に、うづもれめ）
みなしご　ナ。孤。をさなごの、ちゝはゝなくて、うしなひさるものの。万代（たらちねの、おやにおくれし、みなしごの、うきなきが身は、かぎりけるかな）
みなしぐさ　ナ。白薇。草の名。莖も、葉も、靑やかにて、そのさま、柳に似たり。また、夏の末、秋の初にいさりて、あかき花さく。和名（白薇和名、美那之古久佐、一云久呂久佐、一云阿末奈）
みなしも　ナ。下流。かはしも。ながれのすゑ。みづのおつるところ。拾遺（思ふをもあるし、山川の、みなしもなりし、もろびとも、うごきなきは、まもりあげて）
みなしろ　ナ。御名代。なしろをたてていふなるべし。
みなしろ　ナ。皆白。すべてしろきをいふ。
みなす　ワ。カケ。四。看做。みてそれになす。源松風（大殿もの君を、うつくしげなりと、世人もてさわぐれ、なほ、時代によれば、ひとのみなすなりけり）
みなすさう　ナ。皆蘇芳。すべてすはうなるをいふ。
みなせ　ナ。水無瀬。地の名。攝津國、島上の郡にあり。古今（題しらず、ことにいでて、いはぬばかりぞ、水無瀬川、したにかよひて、こひしきものを）
みなそこ　ナ。水底。みづのそこ。拾遺（みなそこの、色くさりはや、かゝるらん、よる人もなき、瀧の白糸）
みなそこふ　マクラ。水底經。みなそこふれ、水底な經かよふにて、なにかぶらせていふれ、をれ、魚のなにて、魚れ、水底をかよふものなれば、なり。仁德紀（瀰儺曾虚赴、弘瀰能烏苔咩を、たれやしなはん）
みなそそぐ　マクラ。水注。みなそゝぐれ、水そゝぐにて、をにかぶらせていふれ、をれ、魚のなにて、魚れ、水をおるものなれば、水よりいへば、そゝぐといふべければなり。おびはかぶらするもおなじ意なり。古事記（美那曾々久、淤美能袁登賣、ほ陀りとらすも）武烈紀（瀰儺曾々矩、思瀰能和倶吾を、あさりつなるのこ）
みなづき　ナ。水無月。さつきのつぎのつき。伊勢（水無月のつごもり。いとあつき頃に、宵れあそびをりて）
みなづきの　マクラ。水無月之。なごしにかぶらせていふれ、水無月のおほむらへを、なごしのむらへともいへれなり。六帖（みなづきの、なごしのやまの、よぶことり、おほぬさにのみ、こゑのきこゆる）
みなづきばらひ　ナ。水無月祓。みなづきのおほむらへ。
みなと　ナ。水門。みづのいでいりするくち。古今（年ごとに、紅葉ながす、龍田川、湊や秋の、泊なるらん）
みなと　ナ。湊。ふねのいでいりするところ。新後（ふきおくる、風のたよりも、あらすげの、みなとをされて、いづる船人）和名（湊、水上人所會也和名、三奈止）
みなといり　ナ。湊入。ふねの、みなとにいるをいふ。万二十（湊入の、あしわけをぶね、さはりおほみ、いまこんわれを、よどむとおもふな）洞九（水門入は、船こぐごとく、ゆきかくれ、ひとのいふとき）
みなとえ　ナ。湊江。えの、みなとにつゞきたるところ。
みなとがは　ナ。湊川。河の名。攝津にあり。千載（湊川、浮寝の床に、きこゆなり、生田の奥の、さをしかの聲）
みなとがみ　ナ。湊紙。紙の名。すくものきろきもの。
みなとしらみ　ナ。湊白。よの、なみのくぐをあくるころ、うみのうへのきろくみゆるをいふ。秘訣
みなとだ　ナ。湊田。みなとにあるた。新後拾（五月雨に、なほ水ふかき、湊田れ、急ぐ早苗も、とりぞねつる）
みなとだ　ナ。湊田。神樂歌の曲の名。神樂歌（美奈止多に、くゞひやつをりや、とろちなや、とろちなや）
みなとぢ　ナ。湊路。みなとのみち。新勅（みるめかる、蜑のゆきゝの、みなとぢは、莫來關も、さはするなくに）

みなとぶね　ナ。湊船。みなとのふね。続後拾（有明の、月のでしほの、みなとぶね、今やいるらん、千鳥なく也）
みなとやま　ナ。湊山。山の名。摂津にあり。新勅（湊山、をこえてふく、潮風に、絵島の松は、波やかくらん）
みなながら　ソ。皆ことごとく。宇拾五（仏をも、ここにてつくりまへ、つくりいだしさてまつりさまへらん日、みなみちらをりておそふべきなりといひけれど）
みなになる　ソ。ヒトリ。四。皆なくなる。のこりなくなる。著聞十（水飯も、鮎のすしも、みなになりにけり）
みなのがは　ナ。美奈能川。河の名。常陸国、筑波の郡にあり。後撰（つくばねの、みねよりおつる、みなのがは、こひぞつもりて、ふちとなりける）
みなのわた　ナ。河貝子腸。みなのわたは、河貝子をいふ。貝のわたまで、河貝子のわたは、きはめてくろきものなれば、くろにかけていふ。万五（美奈乃和多、迦黒漏侯髪は、いつの間か、霜のふりけん）
みなれ　ナ。水緒。ほばしらのけたにつくる綱にて、帆をあげさげするにもちふるもの。いにしへ、ほづなをしめなはといへるはこれなるべしといへり。船用集
みなひと　ナ。皆人。すべてのひとのこらず。源桐壺（みなひと、なみだをおとしさまふ、みかどそねましまして）
みなふ　ナ。米納。みつきなどのきざそをさまうけをいふ。
みなほす　サ。カク。四。見直。みておもひなほす。源帚木（みなほしさまふ、後瞬もやと、思ひさまへなどさめきましを）

みなまた　ナ。水派。みづのまた。字鏡（派弥奈万太、又和加留）
みなみ　ナ。南。ひがしにむかふとき、みぎにあるかさ。
みなみ　ナ。南風。みなみのかたよりふくかぜ。万十八（南ふき、ゆきげまさりて、いみづ川、ながるみなとの）
みなみうけ　ナ。南向。みなみおもて。みなみのむき。
みなみおもて　ナ。南面。みなみにむかへるかさ。源若紫（みなみおもて、いときよげにしつらひさまへり）
みなみかぜ　ナ。南風。みなみのかたよりふくかぜ。
みなみごち　ナ。南東風。みなみによりてふくひがしかぜ。
みなみな　ソ。皆々。みなのこらず。みなことごとく。
みなみのとの　ナ。南殿。なんでん。しんでん。
みなみのみち　ナ。南海道。みなみのかたにあるくにぐに。なんかいだうを見るべし。北山抄（南海道南乃道）
みなみまくら　ナ。南枕。かしらを、みなみのかたにしてふすをいふ。神道にては、常に、死人を、このさまにふさしむる事なり。ぎよしんなるを見合すべし。
みなみむき　ナ。南向。みなみのかたのむき。
みなむしろ　ナ。水席。みづのそこにあるいしをいふとぞ。夫木二十（こがくれて、なみのをりしく、たにぞの、みなむしろにも、月ぞすみける）
みなむすび　ナ。蜷結。ひものむすびかたの名。あそびむすびのごとくにて、ながくちひさくむすびさるもの。
みなん　ナ。未男。武家の役の名。おみなんに同じ。
みなもと　ナ。源。みづのもと。みづのいづるところ。

みなもと　ナ。源。氏名。嵯峨帝の弘仁五年、皇子信と申すに賜ひし氏にて、源、平、藤、橘を合せて、四姓と云ふ。
みならす　ワ。カク。四。見馴。つねにみる。源胡蝶（くるしき御有様を、みならしさてまつりし事はなうりしかど）
みならひ　ナ。見習。みてならひおぼゆるをいふ。
みならふ　ワ。カ。四。見習。みてならひおぼゆ。源若紫（もとより、みならひきこえさまはでならひさまへれば）
みなり　ナ。身形。みのさま。みのよそほひ。きもののさま。狭衣三（おんくはおりしげなる御みなり、もざつきなど、げには、これこそあるべきほどなれど）
みなる　ワ。カケ。シニ。見馴。つねにみる。拾遺恋草（年月は、昨日ぞつりの、心地して、見馴し友の、なきぞ多かる）
みなれがほに　ソ。見馴顔。みなれさるさまに。千載（昔にか、集めしものを、思出て、見馴顔にも、とぶ螢かな）
みなれごろも　ナ。身馴衣。みなれさるころも。源若菜生（かさみにそへさまふべき身馴衣も、しほされされど）
みなれざを　ナ。水馴竿。みづになれさるさを。拾遺（大井川、くだす筏の、水馴竿、みなれぬ人も、恋しかりけり）
みなれそなる　ワ。ヒトリ。シニ。水馴磯馴。なれむつむ。海人などの、みづになれ、いそになれて、ものになれむつむよりいひいでさる語なるべし。源総角（あさむかなるかさらひにさま、みなれそなれて別るるほどに）
みなわ　ナ。水泡。みづのあわ。万六（初瀬女の、つくるゆふばな、三吉野の、瀧の水沫に、さきにけらずや）

みなせがくれ　ナ。水瀬隠。みなせのきは。新六（探山川、此方彼方の、落合の、みなせがくれに、ながるる流木）
みにくい　サ。見醜。みにくしを見るべし。
みにくし　サ。ヒ。見醜。みるめをろし。みめをろし。この語は、常に、みにくいと、しなひにいふ。源桐（いふかひなくおもはれまて、それは、老いて侍ればみにくきを、きはあらだ、衆は、それよりもみにくくて、くろき衣などを着て）神武紀（大醜、此云[illegible]）
みにくやかなり　サ。醜。みめをろし。源浮舟（翔れ、ことはおもひでめ兄弟の、みにくやうなるもとひしく）
みにくやかに　ソ。醜。みにくく。みめをろく。
みぬく　ワ。カク。四。見抜。みとほす。みやぶる。みすかす。
みぬま　ナ。水沼。みづのぬま。万十九（大君は、神にしませば、水鳥の、すだく水沼を、都となしつ）
みね　ナ。峰。やまのうへのたかきところ。やまのうへのとがりさるところ。和名（峯和名、三禰。云々、山尖高處也）
みね　ナ。刀背。かたなのせのところ。
みねいも　ナ。峰芋。つくねいもをいふ。上野などにて、
みねのさ　ナ。峡間。みねのくぼみさるところ。堀河次郎（惜しや、野焼にもれし、峯の、村草隠、雉子なく也）
みねぎり　ナ。木の名。きはめてかさき木にて、これを、きるには、斧もきるるかとりなりといふ。下野の日光山などにある木にて、杖などにつくれり。
みの　ナ。蓑。雨のふせぎにきるものにて、菅などにて、

毛を垂れさる如く編みなしさるもの。和名（蓑和名、美能）
みの　ナ。蓑。草の名。もくさのたぐひ。荒田などにいでくる草にて、葉は似てちひさくして、夏のはじめ、ちひさき実をむすぶ。和名（蓑和名、美乃）
みのうへ　ナ。身上。ものごとの、かげみにかかりてあるをいふ。拾遺（さそすのつぎりどころに、身のうへなげきて、ふるかれに、みえこし梅は、さきにけり、誰まれとか身、あはれとやすや）
みのかさ　ナ。蓑笠。みのとかさと。朗詠集（鬼すらも、都の内と、みのかさを、ぬぎてや今宵、人にみゆらん）
みのがす　ワ。カケ。四。見遁。みさるままにしてゆるす。
みのがひ　ナ。蓑貝。貝の名。いそがひに同じ。
みのがみ　ナ。美濃紙。紙の名。美濃国よりいだす一種の紙にて、生漉にて、半紙よりもひろくしてあつし。
みのがめ　ナ。蓑亀。亀の一種なりともいひ、また、常の亀の老いさるなりともいふ。形、常の亀のごとくにて、甲の後に、緑の毛のごときものをげくおひて、およぐときは、水の面にうかぶ。

みのがらかす　ワ。カケ。四。見遁。みのがすに同じ。
みのぐさ　ナ。蓑草。さきめに同じ。さきめは、みのにするゆゑにいふなるべし。赤染衛門（みるさやま、ふきもの露の、つゆけさは、かりこころみし、野辺のみのとは）
みのけいよだつ　ワ。ヒトリ。四。身毛弥起。すごくおそろしくて、

みさ、とりさそのいでくるやうなおぼゆるをいふ。拾心集（されば、怖しく、身の毛いよだちん時まれ）
みのけだつ　ワ。ヒトリ。四。身毛弥起。みのけいよだつ。
みのけよだつ　ワ。ヒトリ。四。身毛弥起。みのけいよだつ。
みのさやけし　サ。ヒ。見明。みるにさやけし。万廿（渚には、あぢむらさわぎ、島廻には、こぬれ花さき、ここばくも、見乃佐夜気吉か、たまくしげ、ふたがみやまに）
みのしろ　ナ。身代。ひとのみなうりさるしろ。
みのしろごろも　ナ。蓑代衣。みののかはりにきるころも。後撰（ふるゆきの、蓑代衣、うちきつつ、春来にけりと、おどろかれぬる）
みのたけ　ナ。身長。ひとのみのたかさ。
みので　ナ。水手。みなくちをいふ。上総にて、
みのを　ナ。薺苨。草の名。苗は、桔梗に似て、根は人参に似さりといふ。また、花はつりがねにてころしといふ。薬にもちふる草なり。和名（薺苨和名、佐久佐奈一云美乃波）
みのぶ　ワ。カケ。シニ。見伸。のびらかにしてみる。源紅葉賀（みかへりさるさま、いとうみのべされど、まなそは、いさくくろみおちいりて、いみじくそつれそうけさり）
みのむし　ナ。蓑虫。虫の名。木の枝につく虫なり。木の、芽いでんとする頃に、古葉はまくことあり。この虫、その古葉のきさきる中さいできて、巣をつくる。長さ一寸ばかり、形、む

ねりさる文のごとくにて、ともすれば、絲をむきて、枝にかかる事あり。秋の末、ちかとのいふ際にてなく、枕草三(みのむし、いと哀なり云々、八月ばかりになれば、ちゝよく〱と、はかなげになく、いみじく哀なり)

みのも ナ。水面。みづのおも。散木(にごりなき、みのもの月の、やどらずば、いかであさぢの、數をしらまし)

みのやま ナ。美濃山。催馬樂の呂の曲の名。催馬樂(美乃也万に、しゞにおひたる、たまがしは、とよのあかりに、あふがたのしさや、あふがたのしさや)

みのり ナ。御法。ほとけのみちを、うやまひていふとなへ。源注(たえぬべき、みのりながらぞ、たのまるゝ、世々にとむすぶ、なかのちぎりを)

みのる ワ。ヒトリ四。實。みなる。みむすぶ。みいでく。新撰樂記(登祭)三代實錄(瑞登世之穴給波)

みのわた ナ。三臟。ひとのはらにあるもの。六腑のひとつなりといへどさだかならず。和名(三臟和名美乃和太)

みば ナ。見榮。みえ。ほかよりみゆるところ。

みばえ ナ。實生。草木の、實よりおえいでたるもの。草木また、接木などもあるゆゑに、それにむかへていふ。

みばえ ナ。見映。みてもえあるをいふ。

みはかし ナ。御佩。おもせさまふたち。後拾(みはかしたてまつるとて、むすびつけて侍りける)

みはかしを マクラ。御佩乎。みはかしをのなれ、よの言にて、たちかかくそへたる辭なり。されば、つるぎに冠らすれば、同物を、かさねていふところなり。万三十(御佩乎、劔池の、はちすばに、たまれる水の)

みはなやま ナ。御墓山。山の名。河内國、石川の郡にありといふ。玉葉(きえはしぞ、うしとおもいれ、みはなのやま、まづたつくもの、ゆくへしらせよ)

みはからひ ナ。見計。みて、よきほどをもとむるをいふ。

みはからふ ワ。カナ四。見計。みて、よきほどをもとむる。太閤記九十(よき國をみはからひ、それがし、國をふるべし、そのときけしやういくさしたまふな)

みはかり ナ。御盤。そのたらひ。古拾(以天御盤伐六餘小峽之材而造瑞爾衆作御浴及舟腹)

みはし ナ。御階。きんちゆうのきし。おほとののきざはし。源桐壺(御階のもとに、皇子たち、かんだちめつらねて、ろくども、しなじなにたまはりたまふ)

みはしのやま ナ。御階山。山の名。石見國、那賀の郡にあり。夫木(さこさきも、つくぐくもなし、きみが代の、みはしのやまの、うごきなければ)

みはつ ワ。カケ。シニ。見果。みをはる。古今(命にも、倶りてをしく、あるものは、みはてぬ夢の、さむるなりけり)

みはなす ワ。カク四。見放。みはなつに同じ。

みはなつ ワ。カケ四。見放。みすつ。めをはなつ。源桐(いとみはなちがたき御ありさまなるにことつけて)

みはば ナ。身幅。みのはば。その人の衣服の、身にあたるところにもちふる布帛の幅をいふ。

みはやす ワ。カナ四。見榮。はえをつけてみなす。みてほめはやす。古今(やまたかみ、ひともすさめぬ、さくらばな、いたくなわびそ、われみはやさん)

みはらし ナ。見晴。ながめ。のぞみ。けしき。

みはらす サ。カケ四。見晴。ながむ。ひろくとほくのぞむ。

みはり ナ。見張。めをつけてまもるをいふ。

みはる ワ。ヒトリ四。見張。めをおほきくひらく。めをつけてまもる。宇拾十(火をともし、太刀をぬき、目をみはりて、おのおのたちすくみて)字鏡(瞋、大開目、目彌波利太利)

みはるかす ワ。カナ四。見晴。ながむ。ひろくとほくのぞむ。山家集(天王寺へまゐりけるに、片野など申すわたりすぎて、みはるかされたるところの侍るを)

みひんき ナ。身貧。みのひんき。まづしさのひんき。

みひろし サ。ヒ。御火白。おまへのひあかし。おまへのかがりびあきらかなり。散木(御神樂の、そでふるほどは、とのもりの、とものみやつこ、みひあかしたけ)

みひらく ワ。カケ四。見開。みそむ。はじめてみいだす。

みぶ ナ。御封。莊園のたぐひにて、その地より、いだすべき、貢物の租のみをたまふもの。太上天皇、皇子などのもとにまゐらするものなり。源鈴虫(御封の物ども、國々の御莊、御牧などより、たてまつるものども、よくしかるべきは、皆、かの三條の宮の御倉に納めさせたまふ)

みぶくし ナ。籤。ふぐしといふに同じ。万一(かたまもよ、みぶくしもち、布久思毛與、美夫君志毛知)

みぶくてんむ ナ。壬生官務。くせんむを見るべし。

みふす ワ。カケ。シニ。見伏。みきえむ。みさだむ。宇拾三(かくすぐ思ひみふせて、きさ、くるれば、よく〱きこしめていらんとするに、なほおそろしくおぼえて)

みふだけづらる ワ。ヒトリ。シニ。御簡をのぞかる。殿上人の、昇殿するものは、その名を、日給の簡といふものにかきつけさるを、罪などあれば、その簡をとりのけらるゝ事あり。てんじやうびとのところ見合すべし。源須磨(つひにみふだけづられて、つかさもとられて)

みふたつになる ワ。ヒトリ四。身篇二。むらみごもるこうまる。

みふねやま ナ。御船山。山の名。大和國、吉野の郡にありといへり。万三(みよし野の、御船乃山に、たつくもの、つねにあらんと、わがおもはなくに)

みぶん ナ。身分。みのほど。みのぶんげん。

みふゆ ナ。三冬。かみなづきとしもつきとしはすとの。まさ、ただ、ふゆといふに同じ。十六夜日記(ころは、みふゆたつはじめの、さだめなきそらなれば)

みぶり ナ。身振。みのあつかひ。[illegible]。

みぶるひ ナ。身振。さむさなどにおひて、みのふるふをいふ。新六三(ふゆのいけの、かものうきねの、みぶるひは、げにもさむさの、ほどぞしらるゝ)

みほ ナ。鵆。水鳥の名。にほどりをいふ。上網にて、

みほ ナ。三保。地の名。駿河にあり。玉葉(きよみがた、ふじの煙や、きえぬらん、月影みがく、みほの浦波)

みほすすみ ナ。御穂須々美命。たけみなかたに同じ。

みほつひめ ナ。三穂津姫。たかみむすびの神の御子。

みほどりの マクラ。鳰鳥之。にほどりのに同じ。にほみどり、おなじひびきのこゑにて、やくやくかよはしもちひたり。古事記(美本杼理能、加豆伎、いきづき、しなざかふ、さゝなみ路を、すくすくと、わがいませば)

みほん ナ。見本。あきなのなかより、ひとつをとりいでて、ほかのもおなじといふこころにてしめすもの。

みぼめ ナ。身褒。みづから、われをほむるをいふ。枕草五(あまりなる御みぼめなるをかしくて)

みほる ワ。カケ。シニ。見惚。みて、ほれぐとなるをいふ。

みま ナ。御馬。たふときひとのもとせさまふうま。

みまうし ザ。ヒ。見惡。みんこともうし。源舟浮(あざなる御本性こそ、みまうきふしもまじれ)

みまかひ ナ。御馬飼。みまをかふひと。古事記(御馬甘)

みまかる ワ。ヒトリ四。身罷。去る。なきひととなる。古今(或人、男女、もろともに、人の國へまかりけり。男まかりいたりて、すなはちみまかりにければ)

みまき ナ。御牧。たふときひとのもとせさまふまき。源鈴虫(國々の御莊、御牧などよりたてまつるものども、はかぐしきさまのは、皆、かの三條の宮の御倉に)

みまぐさ ナ。御秣。みまにかふまぐさ。催馬樂(屋止自文、美万久左とりかへ、まゆとじめ)

みまくほし サ。フ。欲見。みまほしに同じ。

みまさか ナ。美作。催馬樂の呂の曲の名。催馬樂(美万左加や、くめの、くめのさらやま、さらくに

みまさり ナ。見優。みるまゝにやうくよくなるをいふ。源橋姫(三の宮の、かやうにおくまりさらんあさりの、みまさりせんこそおかしかるべけれと)

みまし ナ。御座。おましに同じ。新撰(木のもとに、きこふさつす、からにしき、大宮人の、みましよかせん)

みまし ナ。汝。いまし。なんち。續紀九(美麻斯乃父止坐天皇乃、美麻斯爾賜志天下之業止詔大命乎)

みまそかる ワ。ヒトリ四。御座。いますかるに同じ。伊勢(むかし、田村のみかどと申すみかどおはしましけり。その時の女御たかきこと申すみまそかりけり)

みまのみこと ナ。御孫命。天神の御孫を申す言にて、なかむら、天皇を申す。續紀五十(あまつかみ、美麻乃彌己止の、とりもちて、この豐御酒を、いかたてまつる)

みまもる ワ。カケ四。見護。こなたをみ、かなたをみる。空穂上(ひとぐもおほくみまもしたまへば、一人をして、ものおもはぬなきさまにならなし)

みまもり ナ。見護。つぎくにみてゆくをいふ。

みまわる ワ。カケ四。見廻。つぎくにみてゆくをいふ。

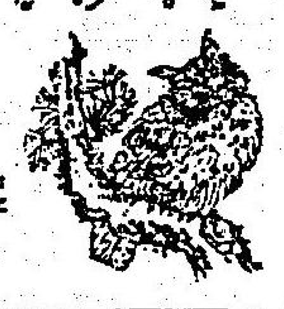
みまひ ナ。見舞。おとづれ。とぶらひ。

みまふ ワ。カケ四。見舞。おとづる。とぶらふ。

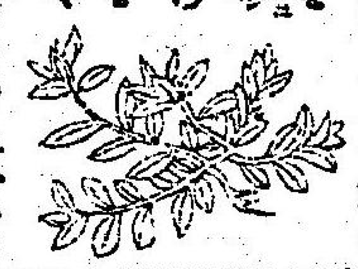
みまへ ナ。御前。おまへに同じ。古今(神垣の、御室の山の、さかきばは、神のみまへに、しげりあひにけり)

みみぼし　サプ、欲見。みぐるし。源紅葉賀（つきせぬこのみど、ろもみぐるしうなりにけれど）
みみまま　ナ、身隨。みの、こゝろのまゝになるをいふ。
みみまん　ナ、未滿。いまだ、そのかずにみたぬをいふ。
みみや　フ、御厩。みまやをつゞめいへり。源夕霧（みまやには、かしらを御馬にうつしおきて）
みみ　ナ、耳。かほのみぎひだりにありて、もののこゑをきくところ。また、器物の取手のたぐひの、物の端にひきいだしさるものをもいふ。和泉式部集（きくひとの、みゝさゝむしも、秋風は、ふきあらせそ、ゑそのこゑかな）
みみ　ナ、耳。たけをいふ。佐渡などにて。和名（耳和名美々、出醫學者也）
みみあか　ナ、耳垢。みゝくそ。みゝのあか。
みみうち　ナ、耳打。ひとのみゝに、くちをさしよせて、ひくきこゑにて、ものびやうにかたるをいふ。
みみかき　ナ、耳掻。みゝのなかのあかをかくもの。
みみがくもん　ナ、耳學問。ひとにきゝて、おぼゆるをいふ。
みみかしがまし　サプ、耳喧。かしがましといふに同じ。榮花月宴（かまびすしう、みゝかしがましきまでの御祈ども、あるしみず、いとしみじき事におぼしさとふ）
みみがたし　サヒ、耳固。みゝにぶし。源常夏（耳かたからぬ人のためこそ、身にはあむ風もふきそふらし）
みみちかし　サプ、耳近。みみぢかしに同じ。
みみどほし　サプ、耳遠。みみどほしに同じ。

みみがね　ナ、耳環。みみくさりに同じ。
みみききき　ナ、耳聞。きくことを、やくとするひと。塵袋一（この禿の體こそところえね、たとひ、京中のみゝきゝの爲なりとも、たゞふつうの童にてこそあれかし）
みみききく　ワ、ヒトリ、四、耳聞。きくといふに同じ。狹衣一（さるみゝざまきらじと用意しさまへど、岩間の水のつぶくときこえさまふべき人間のほどださま）
みみくさり　ナ、耳環。みゝたぶにはめさるもの。外國の女などの飾にするもの。和名（釋名云、穿耳施日璫和名美々久佐利、本出於蠻夷、蠻夷婦女、輕浮好走、故以此當鎮）
みみくせ　ナ、耳癖。みゝのくせ。狹衣二（きゝにくゝぺうもなくひとりごちふまふを、中納言の佐のみゝくせには）
みみくそ　ナ、耳糞。みゝあか。和名（耵聹、耳垢也和名美々久曽）
みみぐるし　サプ、耳苦。きゝぐるし。小島口號（當座のいさづらごとれ、なかなかみゝぐるしうて）
みみこすり　ナ、耳擦。みゝうち。あてこすり。
みみしひ　ナ、聾。つんぼ。みゝのきびさるひと。きくことのいできぬひと。和名（聾和名美美之比、耳不聞聲也）
みみず　ナ、蚯蚓。虫の名。土中にすむ虫なり。長さ二三寸ばかり。狀、かみひねりのごとく、色あかくくろずみて、横に、刻目あり。この虫、なほ、そのたぐひおほけれども、おほかた、雨ふるときは、土中よりいでて、空にされる夜は、ものさびしらになく。和名（蚯蚓和名美美須）
みみずがき　ナ、蚯蚓書。もじのかきさまの、みみずのくねりさるごとくにて、おとけなくあるをいふ。發心集（紙と筆とをたまへ、あらくかきつけんといふ、すなはちとらせされば、手もさなきてえかゝず、ひづつにかきつけさされたがちみゝずがきなり）
みみせせのほね　ナ、完骨。みゝのうしろに、たかくあらはれさる骨ね。和名（完骨和名美々世々乃保禰、耳後大骨也）
みみだし　サプ、耳立。みゝだちてあり。
みみだつ　ワ、ヒトリ、四、耳立。ことぞは、かどありてきこゆ。みゝやすくなくてあり。源若菜（おもふひとにこそ、たゞならずみゝだつこともおのづからいでくる事なれ）
みみたび　ナ、耳朶。みゝのきさにうちたれさる、むら。和名（耳朶和名美々太比）
みみたぶ　ナ、耳朶。みみたびに同じ。
みみだらひ　ナ、耳盥。つのだらひに同じ。
みみだり　ナ、聤耳。耳の病。みゝのなかより、うみしるのいづるもの。和名（聤耳和名美々太利、耳生膿汁也）
みみだれ　ナ、聤耳。耳の病。みみだりに同じ。
みみぢかし　サヒ、耳近。きゝなれゐてさとりやすし。
みみづか　ナ、耳塚。京都にあり。豐臣太閤の、朝鮮を征伐せしとき、敵の、耳鼻をそぎてうづめさるところ。
みみつきに　ソ、耳付。みゝをふせまほしく。とくきかまほしく。狹衣二（せうそこなどしけれど、みづからいきさいれねは、このめのとれ、いとみゝつきにおぼえけれど、たゞいま、かくたのむ母のいびちぎりされど）



みみづく　ナ、木兎。鳥の名。おほきさ兄鷹ばかりにて、身は、まろくきさらなる文あり。頭れ、猫のごとく、また、鬼に似て、角ぞみさる毛の、耳のごときものあり。まさ、眼も、猫に似てよくくるめく。この鳥の眼れ、晝れ、物をみること得ずして、夜れ、よくみるといふ。その聲、ほいくといふがごとし。拾玉（いほりさす、かさやまぎしの、みゝづくも、いかにきゝなす、峰の松風）和名（水兎和名都久、或云、美美似鵄而小、兎頭毛角者也）
みみどなる　ワ、ヒトリ、四、爲身成。みぶさつになる。むらみさるてうさまる。平家九（あづらは、身々となりてのち、なさなきものをそさて、なきひとのかさみにもみむやとおもへども、それをみんたびごとには）
みみどほし　サヒ、耳遠。きゝなれずしてさとりがさし。



みみな　ナ、耳菜。草の名。葉のさま、すこし、鼠の耳に似て、むらひおひていづ。また、蘩れなぐくして、やゝ、蕨草のごとし。この草、冬より春にかけて、くゝきげりて、まろきおひさきき花をひらく。枕草七（みゝなさら草なを、子どものもてきさるを、何とか、これをいふといへど、とみにもいはず、いさなど、これかれみあわせて、みゝなくさとなんいふといふものあれば、うべなり、きゝ聞顔なるはなどもいふ）

みみなぐさ　ナ、耳菜草。草の名。みみなに同じ。
みみなし　ナ、耳梨山。山の名。大和にあり。万一（かぐやまれ、うねびををしと、耳梨と、あひあらそひき、神代よりかくにあるらし いにしへも、さるにあれこそ）
みみなり　ナ、耳鳴。のぼせにて、みゝのなるをいふ。
みみなる　ワ、ヒトリ、シニ、耳馴。きゝなる。つねにきく。源若菜（みゝなれ侍りにけりやときこえさまふ）
みみにたつ　ワ、ヒトリ、四、耳立。みみだつを見るべし。狹衣二（月ごろ、目とまることも、耳にたつこともおほかりつれど、せめてこゝろのくせにはやとおもひけちつるを）
みみね　ナ、下帶。をんなのきさおびをいふ。上總にて。
みみのけもの　ナ、耳衣。うまをいふとぞ。下文を見るべし。嵯峨野物語（馬れ、むかし、唐國よりきさりしとき、みゝのけものといひて、すべてまれなりしかば）
みみのえ　ナ、耳朶。みゝたぶをいふ。豐後などにて。
みみのびく　ナ、耳朶。みゝたぶをいふ。東國にて。
みみばさみ　ナ、耳挾。をんなの、みゝにさしはさむくろのごときもの。下髮の、頰にかゝるをふせぐにもちふるものなり。空穗藏上（御かさぐ、或れ、みゝはさみをしさまひて）源宿木（むらみゝはさみしてそゝくりつくろひていさきて居さまへり）
みみひとつに　ソ、耳一。ほれひとりのみゝに。源宿木（むらしよりさこゆるみさまなどを、かの御耳ひとつにれこそ、ゐるさせながら、人れ、まだ、かさむにもきくまじきさきは、さまよく、めやすくぞいひなしさまふを）

みみふりたつ　ワ、ヒトリ、シニ、耳振立。みゝをたつ。きゝんとするさまにいふことな。空穗上吹（松風のをはきひびきは、のどかなる聲をならべあはせさまふにれ、とり、けだもの、やまおし、やまびと、みゝふりたてぬれなりき）延喜式（高天原爾耳振立聞物止）
みみふる　ワ、ヒトリ、カニ、耳旧。きゝふるす。めづらしからずきこゆ。源若菜（朝夕のあそびに、耳ふり、目なれさまひ）
みみへん　ナ、耳偏。からもじの偏の名にて、耳の字を、偏にしさるもの。耶、耿、聒、聡、聰、聯のたぐひ。
みみめどり　ナ、耳目鳥。うぐひすの異名。秘藏抄（みゝめどり云々、やこうぞのの、むなふみちらし）
みみやう　ナ、水島の名。いんちやうに同じ。
みみやすし　サヒ、耳易。きゝやすし。きゝてさとりやすし。空穗嵯峨院（かゝれば、みゝやすくきこえさまひて）
みみよりに　ソ、耳寄。みゝつきに。みゝをよせて、きかまほしく云々、みく。住吉（三の君、ねがひまさりさまひさるに云々、みゝよりにこそたのまれさまへかし）
みみらく　ナ、美禰樂。島の名。みみらくのしまのところ見るべし。袖中抄（みゝらくの、わが日本の、島ならば、けふもみかげに、あはましものを）
みみらくのしま　ナ、美禰樂島。島の名。肥前國、值嘉郡にあり。そこにてれ、夜になれば、死にさる人あらはれて、親子あひみる事ありといふ。蜻蛉一（いづこと、音に

のみきく。みみくの、きこえくれまし、人な聲ねん)
みみせ ナ耳垂。みみたぶに同じ。
みみかたぶく ワ.ヒトリ四.傾耳。みゝをよせてきく。秋草五(なびかくさ、耳をかたぶけてきゝみよ)
みみきく ワ.ヒトリ四.聞耳。きくといふに同じ。空穂.嵯峨院(かゝる耳ひとつきにこの枝もなう、すぐれて門ましまして、おほやけ、ひとはきくとものにこ)年家一(うき耳なにき うちをらましを御なげきありける)
みみをすます ワ.ヒトリ四.澄耳。みゝをきづめてきく。著聞六(人々も、耳をすましてこそきこえけれ)
みむく ワ.ヒトリ四.見向。そのかたにむきてみる。
みむらやま ナ.三村山。山の名。近江にあり。新勅(時雨るる、三村山の、紅葉ゞ、たがおりけし、錦なるらん)
みむろ ナ.御室。みもろ。かみをまつりたるところ。
みむろやま ナ.御室山。山の名。大和にあり。古今(立田川、紅葉ながる、かみなびの、御室の山に、時雨ふるらし)
みんか ナ.民家。たみのいへ。ゐなかびとのいへ。
みんかん ナ.民間。ぶんみんのあひだ。
みんけん ナ.民權。ひとの、身體、財産などをたもつ權利。
みんこ ナ.民戸。ひとのいへ。
みんじ ナ.民事。かねのかしかりなどのうつたへ。
みんしん ナ.民心。みんじやう。たみのこゝろ。
みんじやう ナ.民情。みんしん。たみのこゝろ。
みんせん ナ.民選。みんかんよりのえらび。

みんぞく ナ.民俗。ぶんみんのところぜ。
みんぽふ ナ.民法。けんり、ぎむのうへのおきて。
みんぴ ナ.民費。ぶんみんよりいだすいりやう。
みんぶきやう ナ.民部卿。たみのつかさに同じ。
みんぶのたいふ ナ.民部大夫。官人の名。民部省の丞をやめて、受領となりたる五位の人をよぶとなり。
みめ ナ.見目。かほ、かたちなどの、ひとのめにうつくしきところ。枕草九(法師の云々、顔たちよくよみ、みめのきよげなるにつけても、女はおなごりれて)
みめ ナ.御妻。貴人の妻をあがめていふことば。
みめい ナ.未明。よのあけんとして、まだあけぬとき。
みめうに ソ.微妙。たえにくはしく、うるはしく。
みめかたち ナ.見目形。みめといふに同じ。太平廿二(容貌の醜美とて、みめかたちなどかくす)
みめぐらす ワ.サ.ヒ.見廻。こなたをみ、かなたをみる。源氏蓬生(御くまびのまらうど、ちかよりきて、やうやくみなとらして、世君のみえぬをもとめて)
みめとよがら ナ.見目辛柄。みめとふをかひと。宇拾一(二十七八なる女、云々、みめときら、すぐさありさまは、いみじかりけるが、たゞひとりありけり)
みめづ ワ.カ.シ.二.見愛。みてめづ。みてよろこぶ。空穂.國譲
(うつくしきさまもあり、みめでたきさまもあり)
みめよし サ.ヒ.見目好。かほよし。きりやうよし。

みもすそがは ナ.御裳濯川。河の名。伊勢神宮の邊にある河なり。但し、五十鈴川と異なり。後拾(君が代は、つきじとぞ思ふ、神風や、御裳濯川の、すまん限りは)
みもたなしらず ソ.身不知。みもしらず。みもしられて、万一(家忘れ、身も多な不知、かもじもの、水に浮きゐて、せらつくる、我御門に、知らぬ國より、巨勢道より)
みもだえ ナ.身悶。くるしみて、みをうごかすをいふ。
みもち ナ.身持。みのもちかた。みのおこなひ。
みもち ナ.身持。つはり。にんしん。くわいにん。
みもと ナ.身許。みのうへ。すじやう。
みもの ナ.見物。めづらしくみゆるもの。樂花榮(みな御覧ずと云々、世人、いみじきみものになんしける)
みもひ ナ.御水。もひをあがめていふことば。催馬樂(飛鳥井、あすかゐに、やどりはすべし、おけ、かげもよし、みもひもさむし、みまくさもよし)
みもろ ナ.御室。やしろ。かみをまつりたるところ。万三(いは社なる、御幣をたてて、枕邊に、いはひべをすゑ)
みや ナ.宮。おほとの。また、かみをまつりたるいへ。玉葉(神風の、朝日宮の、みやうつし、影のどかなる、世にぞありける)伊勢(惟喬の皇子と申す皇子おはしましけり、山崎のあなたに、みなせといふ所に、宮ありけり)
みや ナ.宮。たけのその。皇子、皇女、皇孫などを申す。源氏葵(齋院も云々、きさいばらの女三宮のゐさせ給ひける宮なれど、みかどもきさきもいとことに思ひきこえさせ給ふ宮なれば)

みやう ナ.見積。みるさま。みるかたち。みるさう。
みやうが ナ.冥加。かみほとけのめぐみ。十訓六(これすでに、冥加の冥加つきにけりとおもひて)
みやうが ナ.茗荷。よはすぐれてよきたぐさの。(名香は、からのひやくぶのかうをたきさまへり)
みやうぎ ナ.名香。魚の名。なよしをいふ。伊勢こと。
みやうくわ ナ.猛火。さかんなるほのほ。平治一(ところどころ、火をあげたり、みやうくわ空にみちて)
みやうくわん ナ.冥官。おほくはあるやくにん。十訓六(冥官とあされたりつるに云々、冥官、ひとり、補道となりかへしつるぞときいふとも、有國をべるべきなど、その故は、その道の者にあらずして、その祭をつとむ、その科なきにあらずと申すに)
みやうごにち ナ.明後日。あさて。あすのつぎのひ。
みやうじ ナ.名字。氏、姓の外に、別に、そのすむ地の名などをとりて、家の名としたるもの。
みやうじん ナ.明神。かみといふに同じ。もと、その稱は、式内のたふとき神社をさしたるものにて、名神大とさしたるものあるによりたるなりといふ。
みやうじやう ナ.明星。星の名。あかぼしに同じ。
みやうじやう ナ.明星。神樂歌。あかぼしに同じ。
みやうしゆ ナ.明主。かしこきしゆくん。
みやうしよ ナ.冥助。かみほとけのたすけ。
みやうせき ナ.名跡。おやのあとめ。おやのあとしき。

みやうせんじやう ナ.名詮自性。その名は、かねてそのひとのありさまのあらはれてみゆるをいふ。
みやうだい ナ.名代。ひとのかはりにたつをいふ。
みやうつし ナ.宮遷。せんくう。宮をうつすをいふ。又、神殿を、本社にうつすをいふ。玉葉(神風の、朝日宮の、みやうつし、影のどかなる、世にぞありける)
みやうてう ナ.明朝。あすのあさ。つぎのひのあさ。
みやうにち ナ.明日。あす。けふのつぎのひ。
みやうねん ナ.明年。あくるとし。ことしのつぎのとし。
みやうぼう ナ.冥罰。かみほとけのとがめ。
みやうぼふはかせ ナ.明法博士。大學寮の博士にて、律令格式の書をあきらめて、學生にをしふるもの。
みやうもん ナ.名聞。破邪の山の城をとりて、御寺するものなりき。色をよくして、すきをほしり、常に、飲食をもちひ、きて、珠をなどにはもちひ。
みやうぶ ナ.明暗。あすのよ。つぎのひのよ。
みやうぶ ナ.命婦。五位の女官をよぶとなり。但し、五位より上の官人の妻を、外命婦とい、五位以上の女官を内命婦といふ。また、内侍司の判官の次位の女官なり。
みやうぶ ナ.名簿。なづきに同じ。宇拾十(たちまちには、みやうぶをかきて、ふみをまゐらせて)
みやうぶく ナ.冥福。のちのよのさいはひ。さいはひにさるのち、なきひとの、くけんをまぬがるゝをいふ。
みやうみやうごにち ナ.明々後日。あさてのつぎのひ。

みやうもく ナ.名目。もののな。もののとなへ。
みやうもん ナ.名聞。よのきこえ。みのほまれ。宇拾三(四年がほどあひだ、みやうもんにのみおもひさきにたり)
みやうり ナ.名利。みやうもんとりえきと。撰集抄一(名利を、長くすてきてなん後へ、ひとつこそ付けれとて)
みやうり ナ.冥利。みやうがとりやくと。
みやうりよ ナ.冥慮。かみほとけのおぼしめし。
みやうわう ナ.明王。ほとけのみちたまもるかみ。
みやぎ ナ.宮木。みやをつくるざいもく。古今(杣人は、宮木ひくらし、足引の、山の山彦、よびとよむなり)
みやぎ チ.宮城。地の名。陸奥にあり。古今(みさぶらひ、御笠とまうせ、宮城野の、木の下露は、雨にまさかりぞ)
みやぎもり ナ.宮木守。みやぎをまもるひと。拾遺(筑波や、近江宮の、名のみして、霞たなびき、宮木守なし)
みやく ナ.脈。ちのかよひぢ。これに、動脈、靜脈とのあり、心臓よりおこりて、諸方にすみゆくを、動脈といひ、すみゆきてかへりきたるを、靜脈といふ。
みやく ナ.脈。醫師は、手をとりて、その脈のひきなるうちをおらへて、これを、脈をみる、また、脈をとるといふ。
みやくかん ナ.脈管。ちのかよふすぢ。
みやくみやく ナ.脈々。みやくといふに同じ。
みやぐちみる ワ.ヒトリ.カ.見脈。みやくのところ見るべし。
みやくだみる ワ.ヒトリ.カ.見脈。みやくをうかがふ。
みやけ ナ.宮家。屯倉。みかどの御料の田。又、その田の

なかいた　名・医療　なかいたのこと。

なかいたぎょう　名・医療　なかいたを回し、木の枠に張った布の表面に薬を塗る作業。

なかいたぬり　名・医療　なかいたに薬を塗ること。

なかいたぼう　名・医療　なかいたを回すための棒。

なかいたまわし　名・医療　なかいたを回す人。

なかいれ　名・医療　なかいたを入れること。

なかいれぼう　名・医療　なかいたを入れるための棒。

なかおし　名・医療　なかいたを押すこと。

なかおしぼう　名・医療　なかいたを押すための棒。

なかがい　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための貝殻。

なかがいぬり　名・医療　なかがいで薬を塗ること。

なかがいぬりぼう　名・医療　なかがいぬりに使う棒。

なかがき　名・医療　なかいたの表面に薬を塗ること。

なかがきぼう　名・医療　なかがきに使う棒。

なかがみ　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための紙。

なかがみぬり　名・医療　なかがみで薬を塗ること。

なかがみぬりぼう　名・医療　なかがみぬりに使う棒。

なかぎり　名・医療　なかいたを回すための綱。

なかぎりまわし　名・医療　なかぎりを回す人。

なかぐち　名・医療　なかいたの入口。

なかぐちぼう　名・医療　なかぐちに使う棒。

なかぐちまわし　名・医療　なかぐちを回す人。

なかぐるま　名・医療　なかいたを回すための車。

なかぐるまぼう　名・医療　なかぐるまに使う棒。

なかぐるまわし　名・医療　なかぐるまを回す人。

なかこ　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための道具。

なかこぬり　名・医療　なかこで薬を塗ること。

なかこぬりぼう　名・医療　なかこぬりに使う棒。

なかこまわし　名・医療　なかこを回す人。

なかさし　名・医療　なかいたを差すこと。

なかさしぼう　名・医療　なかさしに使う棒。

なかさしまわし　名・医療　なかさしを回す人。

なかじき　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための敷物。

なかじきぬり　名・医療　なかじきで薬を塗ること。

なかじきぬりぼう　名・医療　なかじきぬりに使う棒。

なかじきまわし　名・医療　なかじきを回す人。

なかしごと　名・医療　なかいたの表面に薬を塗る仕事。

なかしごとぼう　名・医療　なかしごとに使う棒。

なかしごとまわし　名・医療　なかしごとを回す人。

なかしょ　名・医療　なかいたを置く場所。

なかしょまわし　名・医療　なかしょを回す人。

なかすき　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための道具。

なかすきぬり　名・医療　なかすきで薬を塗ること。

なかすきぬりぼう　名・医療　なかすきぬりに使う棒。

なかすきまわし　名・医療　なかすきを回す人。

なかぞえ　名・医療　なかいたの数を数えること。

なかぞえぼう　名・医療　なかぞえに使う棒。

なかぞえまわし　名・医療　なかぞえを回す人。

なかだし　名・医療　なかいたを出すこと。

なかだしぼう　名・医療　なかだしに使う棒。

なかだしまわし　名・医療　なかだしを回す人。

なかだな　名・医療　なかいたを置く棚。

なかだなぼう　名・医療　なかだなに使う棒。

なかだなまわし　名・医療　なかだなを回す人。

なかつぎ　名・医療　なかいたを担ぐこと。

なかつぎぼう　名・医療　なかつぎに使う棒。

なかつぎまわし　名・医療　なかつぎを回す人。

なかつぼ　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための壺。

なかつぼぬり　名・医療　なかつぼで薬を塗ること。

なかつぼぬりぼう　名・医療　なかつぼぬりに使う棒。

なかつぼまわし　名・医療　なかつぼを回す人。

なかて　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための手。

なかてぬり　名・医療　なかてで薬を塗ること。

なかてぬりぼう　名・医療　なかてぬりに使う棒。

なかてまわし　名・医療　なかてを回す人。

なかとり　名・医療　なかいたを取ること。

なかとりぼう　名・医療　なかとりに使う棒。

なかとりまわし　名・医療　なかとりを回す人。

なかなおし　名・医療　なかいたを直すこと。

なかなおしぼう　名・医療　なかなおしに使う棒。

なかなおしまわし　名・医療　なかなおしを回す人。

なかにし　名・医療　なかいたを西に置くこと。

なかにしぼう　名・医療　なかにしに使う棒。

なかにしまわし　名・医療　なかにしを回す人。

なかぬき　名・医療　なかいたを抜くこと。

なかぬきぼう　名・医療　なかぬきに使う棒。

なかぬきまわし　名・医療　なかぬきを回す人。

なかのかず　名・医療　なかいたの数。

なかのかずまわし　名・医療　なかのかずを回す人。

なかのこと　名・医療　なかいたに関すること。

なかのことまわし　名・医療　なかのことを回す人。

なかのり　名・医療　なかいたに薬を塗ること。

なかのりぼう　名・医療　なかのりに使う棒。

なかのりまわし　名・医療　なかのりを回す人。

なかばこ　名・医療　なかいたを入れる箱。

なかばこぬり　名・医療　なかばこで薬を塗ること。

なかばこぬりぼう　名・医療　なかばこぬりに使う棒。

なかばこまわし　名・医療　なかばこを回す人。

なかばし　名・医療　なかいたの端。

なかばしぼう　名・医療　なかばしに使う棒。

なかばしまわし　名・医療　なかばしを回す人。

なかはり　名・医療　なかいたを張ること。

なかはりぼう　名・医療　なかはりに使う棒。

なかはりまわし　名・医療　なかはりを回す人。

なかひき　名・医療　なかいたを引くこと。

なかひきぼう　名・医療　なかひきに使う棒。

なかひきまわし　名・医療　なかひきを回す人。

なかひだ　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための道具。

なかひだぬり　名・医療　なかひだで薬を塗ること。

なかひだぬりぼう　名・医療　なかひだぬりに使う棒。

なかひだまわし　名・医療　なかひだを回す人。

なかぶた　名・医療　なかいたの蓋。

なかぶたぬり　名・医療　なかぶたで薬を塗ること。

なかぶたぬりぼう　名・医療　なかぶたぬりに使う棒。

なかぶたまわし　名・医療　なかぶたを回す人。

なかぶち　名・医療　なかいたの縁。

なかぶちぬり　名・医療　なかぶちで薬を塗ること。

なかぶちぬりぼう　名・医療　なかぶちぬりに使う棒。

なかぶちまわし　名・医療　なかぶちを回す人。

なかぶね　名・医療　なかいたを入れる船。

なかぶねぬり　名・医療　なかぶねで薬を塗ること。

なかぶねぬりぼう　名・医療　なかぶねぬりに使う棒。

なかぶねまわし　名・医療　なかぶねを回す人。

なかへや　名・医療　なかいたを置く部屋。

なかへやぼう　名・医療　なかへやに使う棒。

なかへやまわし　名・医療　なかへやを回す人。

なかまき　名・医療　なかいたを巻くこと。

なかまきぼう　名・医療　なかまきに使う棒。

なかまきまわし　名・医療　なかまきを回す人。

なかまど　名・医療　なかいたを焼く窯。

なかまどぬり　名・医療　なかまどで薬を塗ること。

なかまどぬりぼう　名・医療　なかまどぬりに使う棒。

なかまどまわし　名・医療　なかまどを回す人。

なかみ　名・医療　なかいたの中身。

なかみぬり　名・医療　なかみで薬を塗ること。

なかみぬりぼう　名・医療　なかみぬりに使う棒。

なかみまわし　名・医療　なかみを回す人。

なかむき　名・医療　なかいたを向けること。

なかむきぼう　名・医療　なかむきに使う棒。

なかむきまわし　名・医療　なかむきを回す人。

なかめ　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための道具。

なかめぬり　名・医療　なかめで薬を塗ること。

なかめぬりぼう　名・医療　なかめぬりに使う棒。

なかめまわし　名・医療　なかめを回す人。

なかもち　名・医療　なかいたを持つこと。

なかもちぼう　名・医療　なかもちに使う棒。

なかもちまわし　名・医療　なかもちを回す人。

なかや　名・医療　なかいたを置く家。

なかやぬり　名・医療　なかやで薬を塗ること。

なかやぬりぼう　名・医療　なかやぬりに使う棒。

なかやまわし　名・医療　なかやを回す人。

なかゆき　名・医療　なかいたの表面に薬を塗るための道具。

なかゆきぬり　名・医療　なかゆきで薬を塗ること。

なかゆきぬりぼう　名・医療　なかゆきぬりに使う棒。

なかゆきまわし　名・医療　なかゆきを回す人。

なかよせ　名・医療　なかいたを寄せること。

なかよせぼう　名・医療　なかよせに使う棒。

なかよせまわし　名・医療　なかよせを回す人。

なかわり　名・医療　なかいたを割ること。

なかわりぼう　名・医療　なかわりに使う棒。

なかわりまわし　名・医療　なかわりを回す人。

みやまがは　ナ。深山川。みやまのかは。新六（深山川、こなさかなさの、落合の、みなぞこくれは、めぐる流木）

みやまがらす　ナ。深山烏。みやまはすむからす。また、一種の烏あり。おほきさ、鳩ばかりにて、深山の穴はすむといふ。夫木廿（雪ふれば、みやまがらすの、たぐひして、梢のこずゑは、さぎぞむれゐる）

みやまぎ　ナ。深山木。みやまのき。詞花（あやしくも、さが深山木の、もゆるかな、思ひ人は、つけてしものを）

みやまざくら　ナ。深山櫻。みやまのさくら。拾遺（片山は、畑やく男、かのみゆる、深山櫻は、よきてをやけ）

みやまざと　ナ。深山里。みやまのさと。元真集（嵐ふく、深山里なる、女郎花、うしろめたくて、かへるけふ哉）

みやましきみ　ナ。深山樒。木の名。木のさま、葉のさま、すべて、常のしきみのごとくにて、たゞ、葉すこしかさし。夏の初、まろきちひさき花さきて、あかき實を結ぶ。

みやまだ　ナ。深山田。みやまのた。万代（深山田の、おくての稻を、刈つみて、まもる假庵は、幾世へぬらん）

みやまつぐみ　ナ。深山鶫。みやまはすみさるつぐみ。續後拾（花洛二年百首歌たてまつりけるとき、みやまつぐみ、大和路を、たえずかよひし、そりのみや、まづくみみけん、ゐでのたまみづ）

みやまつばくら　ナ。深山燕。鳥の名。あまどりは同じ。

みやまとべら　ナ。深山石楠草。いしやだらしは同じ。

みやまどり　ナ。深山鳥。鳥の名。狀、すゞめよりもちひさく、頭いくらうくして、冠のごときものあり。また、翅に、くりくりあるみさるは、まだらなる文あり。なく聲うるそしといふ。三夢詹葉（さむつらば、よるれ來てねよ、みやまどり、ゆまれ木の葉も、みちしふくなり）

みやまべ　ナ。深山邊。みやまのほとり。新古（これまでも、花ゆゑ人の、待れつる、春もくれぬる、深山邊の里）

みやまゐり　ナ。宮參。うぶすなまゐりは同じ。

みやめぐり　ナ。宮巡。神宮をおがみめぐるをいふなるべし。夫木三卅（ひさらおびの、とけよといのる、みやめぐり、まづゆきあひの、ちぎりうるせん）

みやもり　ナ。宮守。みやのまもりをするひと。

みやもとらやも　ツ。宮殿。都邸。たふときいへもいやしきいへも。みやもわらひなも。月清集（かぎりありて、春あけぐさは、なる年を、宮も藁屋も、いそぎくらしつ）

みやり　ナ。見遣。とほみ。みせむし。蜻蛉（なみかけの、みやりはたてる、小松原、心をよする、ことぞあるらし）

みやる　ワ。カナ。ロ。見遣。めをつけてみる。とほくみる。みをさす。万十（春されば、ふゆのくさぎき、みえずとも、これは見將選、きみがあさりは）源末摘花（めづらしきさまのしされば、さすがはうちみやられさまふ）

みやゐ　ナ。宮居。みやどころ。新後撰（まきもくの、たまきの宮は、あとたれて、みやゐふりぬる、五十鈴川上）

みゆ　ワ。ヒトリ。シニ。見。めにうつる。めにあらる。この詞は、地方によりては、みえるとも下一段はいふ。万十五（むこのうみの、そこよくあらし、いさりする、ふきのつりぶね、なみの上は見由）

みゆ　ワ。ビトリ。シニ。見。まみゆ。ひとはあふ。ひとはたいめんす。拾遺一（いみじげなるもろまありさまはてみえぬるこそ、いとゐんかさなくさびしげれ）

みゆき　ナ。行幸。みかどのいでまし。拾遺（大井川、河邊の松は、こととはん、かかるみゆきや、ありしむかしも）

みゆき　ナ。深雪。ゆきといふは同じ。古今（故里は、吉野の山し、ちかければ、一日もみゆきふらぬ日はなし）

みゆきどり　ナ。深雪鳥。鳥の名。きじの異名。藻鹽草

みゆづる　ワ。カナ。ロ。見讓。みてゆづる。みてうつす。源澪標（みゆづる人もなく、たどひなき御有様はなん）

みゆるす　サ。カナ。ロ。見赦。みのがす。みとがめず。源夕顔（さりとも、鬼なども、我をみゆるしてんとのさまふ）

みよし　ナ。船首。ふねのへさきはつけたる木にて、波をきりてすみゆくやうにしたるもの。

みよしの　ナ。三吉野。地の名。大和はあり。また、武藏はもあり。續後拾（みよし野の、たのむのかりも、ひたぶるに、きみがかたにぞ、よるときくなる）

みよしの　ナ。三芳野。名香の名。おんの一種なり。

みよのし　ナ。三世師。過去、現在、未來の師といふ。慈鎭をいふ。夫木卅八（みよのしの、御名となへつる、法師まれ、罪もやこよひ、のこらざるらん）

みより　ナ。身寄。縁はいふことぞ。下文を見るべし。身文

雜記（脇のみより、たふさきといふ事、みよりとれ、脇の右なり、たふさきとれ、脇の左なり。みよりれ、惣を左手はするて、我が身の方へよりさる方なる故、身寄といふ。たふさきれ、たなさきともいふ。手のさきをいふ事なり。誤することる左の手先といふ事なり）

みより　ナ。身寄。しんぞく。うからやから。

みより　ツ。三回。みたび。千載（ともしして、箱根の山に、あけはけり、二より三より、あふとせし間は）

みよりつざき　ナ。身寄翅。たかのみぎのつばさ。みよりを見合すべし。續古（ましろの、みよりのつばさ、身はそへて、なほゆきむらふ、うだの御かりぞ）

みら　ナ。韮。野菜の名。にら。蒜のたぐひにて、蒜よりもちひさくして、ひとつの根より、あまたの葉いでて、株ごちてあげる。万廿（きそづくの、岡の久君美莖、されつめど、こはものさなふ、せなとつまさね）

みらい　ナ。未來。のち。のちのとき。いまだこぬとき。

みらいえうごふ　ナ。未來永劫。みらいいつまでも。

みらいき　ナ。未來記。ゆくすゑのことをかきさるふみ。

みらのねぐさ　ナ。細辛。草の名。さいしんを見るべし。和名（細辛、一名、小辛 和名美良乃禰久佐、一云比木乃比太比久佐）

みりん　ナ。味淋。酒の名。みりんしゆは同じ。

みりんしゆ　ナ。味淋酒。酒の名。もちごめをむして、麹をあえぜて、燒酎はひさしてかもしなしさるもの。

みる　ナ。海松。海草の名。海中の石はつきていでくるものにて、枝あげくして、棒齒は似て、色みどりなるもの。万五（綿もなき、布肩衣の、美留のごと、さゝけさがれる、かゞふのみ、肩はうちかけ）和名（海松云々、水松、狀如松而無葉 和名上同、楊氏漢語抄云、海松 和名美流 俗用之）

みる　ワ。カナ。カ一。見。めをつかふ。めはうつる。めはうけとる。この語は、みるのるをそぶきて、みるらんなどいふべきを、みらんとのみいふこともあり。貫之集（さくらばな、千年みるとも、うぐひすも、これもあく世れあらじとぞおもふ）古今（春たてば、花とやみらん、しらゆきの、かゝれる枝は、うぐひすのなく）

みるいろ　ナ。海松色。染色の名。萌黄のくろずみさるものをいふ。西三條裝束抄、海松襲まさ。襲の色目はて、表れ萌黄、裏の青なるものをいふ。胡曹抄

みるくひ　ナ。海松食。貝の名。いがひは同じ。

みるちや　ナ。海松茶。みるいろのごときちやいろ。

みるぶさ　ナ。海松房。みるの、ふさやかは、えだはつきさるもの。髮削のときはもちふるものなり。かみそぎ見合すべし。源葵（はかりなき、ちひろのそこの、みるぶさの、おひゆくさきれ、われのみぞみん）

みるみる　ツ。見々。みながら。みるがうちは。風雅（三吉野の、吉野山の、春霞、たつをみるみる、なほ雪ぞふる）

みるめ　ナ。海松。みるは同じ。後撰（みるめかる、かさぞあふみは、なしときく、玉藻をさへや、蜑はかづらぬ）

みるめ　ナ。見目。みること。古今（伊勢の海の、あさなゆふなは、かづくてふ、みるめは人を、あく由もがな）

みるめかぐはな　ナ。觀目嗅鼻。地獄の閻魔大王のかたはらは、並はするさる善惡ふさりの人頭をいふ。このものよく、亡者の善惡をしりさくといふ。

みるめのせき　ナ。見目關。地名。近江はあり。夫木（あふ事れ、なほ片絲の、我むくり、見目關は、許やれせん）

みれん　ナ。未練。まだ、よく、ものごとはなれぬをいふ。宇拾八（御前の隨身みなおりさるは、未練のものこそあらめ、以長おりざりつるれとおほせらる）

みろ　ワ。見。みよ。東國の人のいふことぞなり。

みろく　ナ。彌勒。菩薩の名。夫木廿一（とぐこひの、金の御嶽の、金ならば、みろくの世はも、あそきしものを）

みろくぶつ　ナ。彌勒佛。みろくといふは同じ。

みわ　ナ。盆。神酒。さけをかもすかめ。かみはたてまつるさけ。堀川次郎（千早振、眉錦の森は、みわすゑて、ねぎをかけるる、紅葉ちらすな）和名（神酒 和語云 美和）

みわ　ナ。三輪。地の名。大和はあり。古今（わが庵れ、みわの山本、戀しくば、とぶらひ來ませ、杉たてる門）

みわき　ナ。見分。みて、よしあしなどをきらうをいふ。

みわく　ワ。カナ。ロ。見分。みわきをなす。源玉鬘（おほくの年へさる目はれ、ふさしもみわかぬなりけり）

みわけ　ナ。見分。みわきといふは同じ。

みわする　ワ。カナ。シニ。見忘。かつてみしをわする。

みわた　ナ。水曲。かはわだ。みづの、めぐりいりてよどみ

さるところ。玉葉（山川の、みをさはよどむ、うるさの、のせはむすべる、うすごほりかな）
みわたし ナ。見渡。とほくみやらるゝところ。拾玉（ほとゝきす、森の梢の、みわたしは、中宿求むる、松の一村）
みわたす ワ。カナ。四。見渡。とほくみやる。むるちは、ひろくとのぞむ。後拾（みわたせば、みやこはちかく、なりぬらん、すぎぬる山は、かすみへだてつ）
みわもり ナ。酒盛。さかもり。散木（なびしつる、けさのみわもり、数そひて、さやぎの早苗、とりもやられず）
みを ナ。水脈。ふねのゆきかふすぢ。万二十（神山の、山下とよみ、ゆく水の、水尾したえずば、のちも我が妻）
みを ナ。道路。みちのすぢ。古事記（追伏坂之御尾）
みをぎ ナ。澪標。みをつくしに同じ。また、神事のとき、信濃の入りくるを祭する標木をもいふ。古訓 栞
みをくだく サ。ヒトリ。四。砕身。いたくほねをる。
みをくわんず サ。ヒトリ。カ。観身。みをはさせる。類花珠衣（心うき事と、身を観じおぼすも、とをりはいみじ）
みをこなす サ。ヒトリ。カ。粉身。いたくほねをる。
みをさめ ナ。見収。みることのをはり。
みをしるあめ ナ。知身雨。みのうへのほどをしるあめ。是れ、来べきひとの、雨ゆゑは来ずといふをききて、さる人のよめる歌の詞にて、雨ゆゑ来ずば、雨はさうへの楽あると楽なきとのほどをしるものといふ心なりとぞ。されど、それは、古今集の歌の意にて、歌は、たゞ、歌の異名のごとくなれり。古今（かずくは、思ひおもほず、とひぞるみ、身をさる雨は、ふりぞまさされる）和泉式部集（みし人は、さすられてふる、袖はこそ、身をさる雨は、いつもをやまね）
みをじるし ナ。澪標。みをつくしに同じ。夫木八（廣瀬川、波の跡の、みをじるし、水錆そふらし、五月雨の頃）
みをたつ サ。ヒトリ。シニ。立身。みをおこす。よにあらるゝようになる。新千（いまもなほ、たのみぞさるる、むかしせし、身をたてそめし、賀茂の河波）
みをつくし ナ。澪標。みをのあるしにたつるくひ。万二十（水咫衝石、てうつくして、おもへるを、こゝにきもとな、いめにしみゆる）土佐（みをつくしのもとよりいでて、難波の津を来て、かえじりにいる）
みをつくし ナ。澪標。名香の名。おんの一種なり。
みをつむ サ。ヒトリ。四。抓身。とがみにおもひくらぶ。拾遺（ほどもなく、きえぬる雪は、かひもなし、身をつみてこそ、あはれをおもへ）拾玉（誰もみな、とが身をつみて、おもふべし、命はをしき、ものをあらずや）
みをぬすむ サ。ヒトリ。四。偸身。ぬすみをぬすむ。ひそみつかくれつゝ、ひそかに、ことをなす。
みをびき ナ。水脈引。みづすぢをしるべしてゆくをいふ。万十（たてまつる、みつぎの船は、堀江より、美乎妣伎しつゝ、あさなぎに、かぢひきのぼり）
みをびきのふね ナ。水脈船。みづすぢをしるべしてゆくふね。和名（水脈船美乎比岐能布禰）
みをもむ サ。ヒトリ。四。揉身。これかれにおもひなやむ。
みをやま ナ。水尾山。山の名。近江国、高島の郡にあり。夫木二十（みをやまの、そまのされ木の、かさおろし、すてられながら、ふしはさすれず）
みをわく サ。ヒトス。シニ。分身。みをさく。後撰（身を分る、事の難さに、増鏡、影ばかりをぞ、君にそへつる）

む

くちびるにふれていづる
ひとつのこゑにて、むと
うとかよふるこゑなり。

む ナ。六。むつ。みつに、みつなあそせさるかず。古事記（一二三四五六七八九十）
む ナゲキ。嘆。う。をゝ。いらへのこゑ。字拾（ささしやれといへば、ひけなる声にて、むといらへてたち）
む サケ。無。なし。よからぬ。
む ナ。ドスケ。未来のことをいふにもちふる辞。この辞は、形状言のうへにおけば、まくとも、まくともなり、せばといふ辞のうへにおけば、まとなり、どやかなどにかよふときは、ゐとなり、のべては、まくとも、いひ、音便にては、うとも、んとも、いふ。古今（秋霧は、けさはなたちぞ、佐保山の、ははその紅葉、よそにてもみん）拾遺（もろともに、ちりし辛のみ、こひしくて、ひとりみまうき、をなざりかな）夫木六（山城の、いとさ

の岡の、いそつらじ、いそまくほしき、をなのいろかな）万二（飛鳥川、あかでみてさし、蘇我君、ながるゝ水も、のどかならまし）古今（花の木は、あらざらめども、さきにけり、ふりにしこのみ、なる時もがな）同（うゑしうゑば、秋なき時や、さかざらん、花こそちらめ、根さへかれめや）同（山科の、音羽山の、音にだに、人のあるべく、せがにひめらも）万十二（うちひさす、都の人は、都賀麻久れ、みしひのごとく、ありとつげこそ）平家五（からめうと申すもの、一人も候はざりしは）
むいか ナ。六日。むゆかに同じ。
むいちもつ ナ。無一物。もの、ひとつもなきをいふ。
むえき ナ。無益。むやく。なにのようにもたゝぬをいふ。
むえん ナ。無縁。ゆかりもなく、ちなみもなきをいふ。十訓六（無縁なる法師の、人の許にて、物こひけるに）
むえんづか ナ。無縁塚。つらの、ゆかりのひともなくなりさるひとの、くやうにとてつきたるもの。
むか ナ。六日。むゆかに同じ。
むかう ナ。向。むかひ。おもてのかた。
むかう ナ。無何有。むかうのさとに同じ。
むかう ナ。無効。あるしなきをいふ。かひなきをいふ。
むかうづら ナ。向面。むかひさるかほ。むかひさるおもて。
むかうのさと ナ。無何有郷。なにものもなく、なにごともなきところ。荘子といふからぶみにみえたる譬のことばなり。万十六（こゝろをし、無何有乃郷に、おきたらば、藐孤射の山を、みまくちりけん）
むかうば ナ。向歯。むかば。うへのまへば。
むかうみず ナ。向不見。あのし、むしやのむくいき。
むかうそむる ワ。ヒトリ。四。張向。おひてとなりておらそふ。
むがく ナ。無学。ものしらず。がくもんなきひと。
むかご ナ。零餘子。ぬかご。やまのいものみ。
むかされ ナ。被迎。よめいりをいふ。羽前、羽後、信濃にて、
むかし ナ。昔。すぎしとき。すぎさしき。ひさしきあと。常に、十年、まれ、十七年をへたるを、ひとむかしといひならへり。後撰（ことのねに、たえせぬ露は、おくらんや、むかしおぼゆる、まとゐしされど）
むかし リ。昔。すぎしときに。すぎにしよに。ひさしきおとに。伊勢（むかし、男、うひかうぶりして、奈良の京、かすがの里に、あるよししして、かりにいにけり）
むかし サフ。両向。おもむし。万八十（白玉の、いほつゝどひを、手にむすび、おこせん海人は、牟賀思久もあるか）
むかしいま ナ。昔今。むかしといまと。源梅枝（かうどもれ、むかしいまのとりならべさせさまひて）
むかしかたぎ ナ。昔堅気。としよりのかたくなしきを云。
むかしがたり ナ。昔話。むかしばなし。むかしのものがたり。新古（あやしくも、かへさは月の、くもりにし、むかしがたりに、夜やふけにけん）
むかしぐさ ナ。昔草。木の名。たちばなの異名。藻鹽草
むかしざま ナ。昔様。むかしのさま。源胡蝶（まろを、むかしざまになずらへて、母君と思ひないたまへ）
むかしづくり ナ。昔造。むかしのつくりざま。築花語（殿のつくりざま、初は、こざいに昔造なりしかば、屋のたけいとみじかう、うちおそれ事おほかりしを）
むかしだなし ナ。昔話。むかしがたり。むかしのはなし。
むかしび ワ。昔風。むかしのさまにあり。この語は、上二段にそゝらくべき語なれども、むかしびの外は、その例をみいでず。十訓五（高陽院の御探は云々、探くむかしびさらん方は、いみじきためしと申すべし）
むかしびと ナ。昔人。むかしのひと。としおいたるひと。散木（かずねじまをみてよめる、むかしびと、いかなるかずね、さらされて、この名にしも、名をのこしけん）
むかしぶ ワ。カナ。四。両向。むかしくおもふ。
むかしべ ナ。昔方。むかしに同じ。古今（むかしべや、今もこひしき、時鳥、ふるさとにしも、なきて来つらん）
むかしべびと ナ。昔方人。むかしびとに同じ。土佐（むかしべびとの母、一日、かたときもわすれねど）
むかしやう ナ。昔様。むかしざま。むかしのふり。狭衣三（これは、つよきもじづかひ、むかしやうにそべる）
むかつく ワ。ヒトリ。四。嘔噦。へどをつかんとす。方言（胸心）
むかづく ワ。ヒトリ。四。向付。まへにむく。まへにせまる。
むかつを ナ。向峯。むかひのみね。万四十（遅早も、汝をこそまさめ、牟可都乎の、椎の小枝の、あひはたがはじ）
むかつをのへ ナ。向峰上。むかひのみね。万十二（見渡せば、向

かがみ　名　鏡（金属・石・ガラスなどで作った、物の姿を映して見る道具。古くは銅製で裏に模様があった。）

かがみいし　名　鏡石（表面が鏡のように光る石。）

かがみいた　名　鏡板（床の間の正面の壁。）

かがみうら　名　鏡裏（鏡の裏。）

かがみおもち　名　鏡餅（神仏に供える、丸く平たい餅。）

かがみがわら　名　鏡瓦（鏡の形をした瓦。）

かがみぐち　名　鏡口（鏡の縁。）

かがみこ　名　鏡子（鏡の小さいもの。）

かがみざ　名　鏡座（鏡の裏の、鏡を支える台。）

かがみじり　名　鏡尻（鏡の裏の、鏡を支える台。）

かがみだい　名　鏡台（鏡をすえる台。）

かがみだて　名　鏡立（鏡を立てる台。）

かがみつき　名　鏡月（鏡のように丸い月。）

かがみとぎ　名　鏡研（鏡を磨くこと。）

かがみとぎし　名　鏡研師（鏡を磨く職人。）

かがみとぎや　名　鏡研屋（鏡を磨く店。）

かがみどころ　名　鏡所（鏡を作る所。）

かがみのかね　名　鏡鉦（鏡の形をした鉦。）

かがみのこおり　名　鏡氷（鏡のように平らな氷。）

かがみのしも　名　鏡霜（鏡のように光る霜。）

かがみのつき　名　鏡月（鏡のように丸い月。）

かがみのもち　名　鏡餅（神仏に供える、丸く平たい餅。）

かがみばこ　名　鏡箱（鏡を入れる箱。）

かがみばり　名　鏡張（鏡を張ること。）

かがみびらき　名　鏡開（正月に供えた鏡餅を下げて食べること。）

かがみぶた　名　鏡蓋（鏡の蓋。）

かがみぶち　名　鏡縁（鏡の縁。）

かがみぶね　名　鏡船（鏡のように平らな船。）

かがみまち　名　鏡町（鏡を作る町。）

かがみもち　名　鏡餅（神仏に供える、丸く平たい餅。）

かがみやま　名　鏡山（鏡のように平らな山。）

かがみわり　名　鏡割（鏡餅を割ること。）

かがむ　動　屈む（体を曲げて低くする。）

かがめる　動　屈める（体を曲げて低くする。）

かがやか　名　輝（光り輝くこと。）

かがやかす　動　輝かす（光り輝かせる。）

かがやかせる　動　輝かせる（光り輝かせる。）

かがやかに　副　輝に（光り輝いて。）

かがやき　名　輝（光り輝くこと。）

かがやく　動　輝く（光り輝く。）

かがやける　動　輝ける（光り輝いている。）

かがやこう　動　輝こう（光り輝こう。）

かがやさす　動　輝さす（光り輝かせる。）

かがやし　名　輝し（光り輝くこと。）

かがやす　動　輝す（光り輝かせる。）

かがやせる　動　輝せる（光り輝かせる。）

かがやり　名　輝り（光り輝くこと。）

かがやる　動　輝る（光り輝く。）

かがよう　動　輝う（光り輝く。）

かがよえる　動　輝える（光り輝いている。）

かがよこう　動　輝こう（光り輝こう。）

かがよさす　動　輝さす（光り輝かせる。）

かがよし　名　輝し（光り輝くこと。）

かがよす　動　輝す（光り輝かせる。）

かがよせる　動　輝せる（光り輝かせる。）

かがより　名　輝り（光り輝くこと。）

かがよる　動　輝る（光り輝く。）

かがり　名　篝（夜間、魚を集めるために焚く火。）

かがりび　名　篝火（篝の火。）

かがりぶね　名　篝船（篝火を焚く船。）

かがる　動　縢る（布の端を縫う。）

かがわ　名　香川（香川県。）

かがわけん　名　香川県（四国の県。）

かがわし　名　香川市（香川県の市。）

かがわら　名　瓦（屋根を葺く焼き物。）

かがわらけ　名　土器（素焼きの器。）

かがわらぶき　名　瓦葺（瓦で屋根を葺くこと。）

かがわらや　名　瓦屋（瓦を焼く家。）

かがわん　名　香川湾（香川県の湾。）

かがん　名　下顎（下あご。）

かがんこつ　名　下顎骨（下あごの骨。）

かがんし　名　下顎枝（下顎骨の枝状の部分。）

かがんしょう　名　下顎症（下顎が異常に発達する症状。）

かがんたい　名　下顎体（下顎骨の体部。）

かがんとう　名　下顎頭（下顎骨の関節突起。）

かがんぶ　名　下顎部（下顎の部分。）

かがんや　名　下顎野（下顎の領域。）

かがんれつ　名　下顎裂（下顎の裂け目。）

かき　名　柿（果物の名。）

かきあう　動　掻き合う（互いに掻く。）

かきあげ　名　掻き揚げ（野菜などを細かく切って揚げること。）

かきあげる　動　掻き揚げる（掻き揚げる。）

かきあつめる　動　掻き集める（掻き集める。）

かきあらす　動　掻き荒らす（掻き荒らす。）

かきあらわす　動　掻き表す（掻き表す。）

かきあわす　動　掻き合わす（掻き合わす。）

かきあわせる　動　掻き合わせる（掻き合わせる。）

かきいだく　動　掻き抱く（掻き抱く。）

かきいだす　動　掻き出す（掻き出す。）

かきいれ　名　掻き入れ（掻き入れること。）

かきいれる　動　掻き入れる（掻き入れる。）

かきうつす　動　掻き写す（掻き写す。）

かきうつる　動　掻き移る（掻き移る。）

かきえがく　動　掻き描く（掻き描く。）

かきおく　動　掻き置く（掻き置く。）

かきおこす　動　掻き起こす（掻き起こす。）

かきおさえる　動　掻き押さえる（掻き押さえる。）

かきおさめる　動　掻き収める（掻き収める。）

かきおとす　動　掻き落とす（掻き落とす。）

かきおとる　動　掻き劣る（掻き劣る。）

かきおぼえ　名　掻き覚え（掻き覚えること。）

かきおもう　動　掻き思う（掻き思う。）

かきおもす　動　掻き思す（掻き思す。）

かきおもせる　動　掻き思せる（掻き思せる。）

かきおもり　名　掻き思り（掻き思ること。）

かきおもる　動　掻き思る（掻き思る。）

かきおもわす　動　掻き思わす（掻き思わす。）

かきおもわせる　動　掻き思わせる（掻き思わせる。）

かきおろす　動　掻き下ろす（掻き下ろす。）

かきかえす　動　掻き返す（掻き返す。）

かきかえる　動　掻き返る（掻き返る。）

かきかく　動　掻き書く（掻き書く。）

かきかける　動　掻き書ける（掻き書ける。）

かきかこう　動　掻き書こう（掻き書こう。）

かきかさす　動　掻き書さす（掻き書かせる。）

かきかし　名　掻き書し（掻き書くこと。）

かきかす　動　掻き書す（掻き書かせる。）

かきかせる　動　掻き書せる（掻き書かせる。）

かきかり　名　掻き書り（掻き書くこと。）

かきかる　動　掻き書る（掻き書く。）

かきかわす　動　掻き交わす（掻き交わす。）

かきかわせる　動　掻き交わせる（掻き交わせる。）

かきかわる　動　掻き交わる（掻き交わる。）

かきかん　名　柿羹（柿の羹。）

かきくう　動　掻き食う（掻き食う。）

かきくえる　動　掻き食える（掻き食える。）

かきくこう　動　掻き食こう（掻き食こう。）

かきくさす　動　掻き食さす（掻き食かせる。）

かきくし　名　掻き食し（掻き食うこと。）

かきくす　動　掻き食す（掻き食かせる。）

かきくせる　動　掻き食せる（掻き食かせる。）

かきくり　名　掻き食り（掻き食うこと。）

かきくる　動　掻き食る（掻き食う。）

かきくわす　動　掻き食わす（掻き食わす。）

かきくわせる　動　掻き食わせる（掻き食わせる。）

かきけす　動　掻き消す（掻き消す。）

かきける　動　掻き消える（掻き消える。）

かきこう　動　掻き来こう（掻き来こう。）

かきこえる　動　掻き越える（掻き越える。）

かきこおる　動　掻き凍る（掻き凍る。）

かきこす　動　掻き越す（掻き越す。）

かきこせる　動　掻き越せる（掻き越せる。）

かきこみ　名　掻き込み（掻き込むこと。）

かきこむ　動　掻き込む（掻き込む。）

かきこめる　動　掻き込める（掻き込める。）

かきこもる　動　掻き籠もる（掻き籠もる。）

かきさがす　動　掻き探す（掻き探す。）

かきさげる　動　掻き下げる（掻き下げる。）

かきさす　動　掻き差す（掻き差す。）

かきさせる　動　掻き差せる（掻き差せる。）

かきさだめる　動　掻き定める（掻き定める。）

かきさます　動　掻き覚ます（掻き覚ます。）

かきさめる　動　掻き覚める（掻き覚める。）

かきし　名　掻き来し（掻き来ること。）

かきしぐれ　名　柿時雨（柿の実が熟する頃の時雨。）

かきしぶ　名　柿渋（柿の渋。）

かきしぶる　動　掻き渋る（掻き渋る。）

かきしめる　動　掻き締める（掻き締める。）

かきす　動　掻き来す（掻き来させる。）

かきすえる　動　掻き据える（掻き据える。）

かきすかす　動　掻き透かす（掻き透かす。）

かきすかせる　動　掻き透かせる（掻き透かせる。）

かきすかる　動　掻き透かる（掻き透かる。）

かきすくう　動　掻き救う（掻き救う。）

かきすくえる　動　掻き救える（掻き救える。）

かきすくこう　動　掻き救こう（掻き救こう。）

かきすくさす　動　掻き救さす（掻き救かせる。）

かきすくし　名　掻き救し（掻き救うこと。）

かきすくす　動　掻き救す（掻き救かせる。）

かきすくせる　動　掻き救せる（掻き救かせる。）

かきすくり　名　掻き救り（掻き救うこと。）

かきすくる　動　掻き救る（掻き救う。）

かきすさぶ　動　掻き荒ぶ（掻き荒ぶ。）

かきすさぶる　動　掻き荒ぶる（掻き荒ぶる。）

かきすさぼる　動　掻き荒ぼる（掻き荒ぼる。）

かきすさむ　動　掻き荒む（掻き荒む。）

かきすさめる　動　掻き荒める（掻き荒める。）

かきすさる　動　掻き荒る（掻き荒る。）

かきすさわす　動　掻き荒わす（掻き荒わす。）

かきすさわせる　動　掻き荒わせる（掻き荒わせる。）

かきすさわる　動　掻き荒わる（掻き荒わる。）

かきすてる　動　掻き捨てる（掻き捨てる。）

かきすべる　動　掻き滑る（掻き滑る。）

かきすまし　名　掻き澄まし（掻き澄ますこと。）

かきすます　動　掻き澄ます（掻き澄ます。）

かきすめる　動　掻き澄める（掻き澄める。）

かきすり　名　掻き来り（掻き来ること。）

かきする　動　掻き来る（掻き来る。）

かきせる　動　掻き来せる（掻き来させる。）

かきそえる　動　掻き添える（掻き添える。）

かきそこなう　動　掻き損なう（掻き損なう。）

かきそこなえる　動　掻き損なえる（掻き損なえる。）

かきそこなこう　動　掻き損なこう（掻き損なこう。）

かきそこなさす　動　掻き損なさす（掻き損なかせる。）

かきそこなし　名　掻き損なし（掻き損なうこと。）

かきそこなす　動　掻き損なす（掻き損なかせる。）

かきそこなせる　動　掻き損なせる（掻き損なかせる。）

かきそこなり　名　掻き損なり（掻き損なうこと。）

かきそこなる　動　掻き損なる（掻き損なう。）

かきそこなわす　動　掻き損なわす（掻き損なわす。）

かきそこなわせる　動　掻き損なわせる（掻き損なわせる。）

かきそめる　動　掻き染める（掻き染める。）

かきそろえる　動　掻き揃える（掻き揃える。）

かきたおす　動　掻き倒す（掻き倒す。）

かきたおる　動　掻き倒る（掻き倒る。）

かきたす　動　掻き足す（掻き足す。）

かきたせる　動　掻き足せる（掻き足せる。）

かきたたく　動　掻き叩く（掻き叩く。）

かきたたける　動　掻き叩ける（掻き叩ける。）

かきたたこう　動　掻き叩こう（掻き叩こう。）

かきたたさす　動　掻き叩さす（掻き叩かせる。）

かきたたし　名　掻き叩し（掻き叩くこと。）

かきたたす　動　掻き叩す（掻き叩かせる。）

かきたたせる　動　掻き叩せる（掻き叩かせる。）

かきたたり　名　掻き叩り（掻き叩くこと。）

かきたたる　動　掻き叩る（掻き叩く。）

かきたち　名　柿立（柿の木の立ち姿。）

かきたつ　動　掻き立つ（掻き立つ。）

かきたてる　動　掻き立てる（掻き立てる。）

かきたる　動　掻き来る（掻き来る。）

かきたれる　動　掻き垂れる（掻き垂れる。）

かきたわす　動　掻き垂わす（掻き垂わす。）

かきたわせる　動　掻き垂わせる（掻き垂わせる。）

かきたわる　動　掻き垂わる（掻き垂わる。）

かきちらす　動　掻き散らす（掻き散らす。）

かきつく　動　掻き付く（掻き付く。）

かきつける　動　掻き付ける（掻き付ける。）

かきつこう　動　掻き付こう（掻き付こう。）

かきつさす　動　掻き付さす（掻き付かせる。）

かきつし　名　掻き付し（掻き付くこと。）

かきつす　動　掻き付す（掻き付かせる。）

かきつせる　動　掻き付せる（掻き付かせる。）

かきつり　名　掻き付り（掻き付くこと。）

かきつる　動　掻き付る（掻き付く。）

かきつわす　動　掻き付わす（掻き付わす。）

かきつわせる　動　掻き付わせる（掻き付わせる。）

かきつわる　動　掻き付わる（掻き付わる。）

かきつけ　名　柿漆（柿渋を塗った漆。）

かきつける　動　掻き漆ける（掻き漆ける。）

かきつこう　動　掻き漆こう（掻き漆こう。）

かきつさす　動　掻き漆さす（掻き漆かせる。）

かきつし　名　掻き漆し（掻き漆くこと。）

かきつす　動　掻き漆す（掻き漆かせる。）

かきつせる　動　掻き漆せる（掻き漆かせる。）

かきつり　名　掻き漆り（掻き漆くこと。）

かきつる　動　掻き漆る（掻き漆く。）

かきつわす　動　掻き漆わす（掻き漆わす。）

かきつわせる　動　掻き漆わせる（掻き漆わせる。）

かきつわる　動　掻き漆わる（掻き漆わる。）

かきつぎ　名　柿接ぎ（柿の接ぎ木。）

かきつぎ　名　柿継ぎ（柿の継ぎ木。）

かきつぐ　動　掻き継ぐ（掻き継ぐ。）

かきつける　動　掻き付ける（掻き付ける。）

かきつこう　動　掻き付こう（掻き付こう。）

かきつさす　動　掻き付さす（掻き付かせる。）

かきつし　名　掻き付し（掻き付くこと。）

かきつす　動　掻き付す（掻き付かせる。）

かきつせる　動　掻き付せる（掻き付かせる。）

かきつり　名　掻き付り（掻き付くこと。）

かきつる　動　掻き付る（掻き付く。）

かきつわす　動　掻き付わす（掻き付わす。）

かきつわせる　動　掻き付わせる（掻き付わせる。）

かきつわる　動　掻き付わる（掻き付わる。）

かきつけ　名　柿漆（柿渋を塗った漆。）

かきつける　動　掻き漆ける（掻き漆ける。）

かきつこう　動　掻き漆こう（掻き漆こう。）

かきつさす　動　掻き漆さす（掻き漆かせる。）

かきつし　名　掻き漆し（掻き漆くこと。）

かきつす　動　掻き漆す（掻き漆かせる。）

かきつせる　動　掻き漆せる（掻き漆かせる。）

かきつり　名　掻き漆り（掻き漆くこと。）

かきつる　動　掻き漆る（掻き漆く。）

かきつわす　動　掻き漆わす（掻き漆わす。）

かきつわせる　動　掻き漆わせる（掻き漆わせる。）

かきつわる　動　掻き漆わる（掻き漆わる。）

むぎめし　ナ麦飯。むぎいひを見るべし。
むぎゆ　ナ麦湯。むぎをいりて、ゆにせんじたるもの。
むぎわら　ナ麦藁。むぎのくき。
むぎわらざいく　ナ麦藁細工。むぎわらにてしたるさいくもの。箱子、人形など、さまざまなるものあり。
むぎわらだい　ナ麦藁鯛。たひの、なつのたびめにいげるものをいふ。中国、また、四国などにて。
むぎわらへび　ナ麦藁蛇。蛇の一種なり。形、常の蛇のごとくにて、頭より、尾にいたるまで、総に文あり。また、色もきばみて、すこし、むぎわらの色に似たり。
むぎをしき　ナ麦折敷。ひやむぎなどをもるをしきなり。
むく　ナ椋。木の名。木の肌、けやきのごとく、葉へかしに似て、かしよりも、うすくしてあさく、また、面さらめきて、物をみがくにもちふべし。秋の末、くろくむらさきがみたる実をむすぶ。あぢもひとあまくあまし。和名(抄一名〓椋　無久)
むく　ナ無垢。ひとへろにて、まじりもののなきをいふ。
むく　ワ。カ。ロ。剥。かはをそぐ。字拾(この字なむきつく、すきりにきれい、そやく、其の前になるなり)
むく　ワ。ヒトリ。ロ。向。おもてを、そのかたになす。ちくかたぶきよる。続日紀(からくにの、柾上にたちて、おほさしれ、ひれふらすも、やまとへ向きて」武烈紀)
むく　ワ。ヒトリ。シニ。剝。かは、おのづからはなる。この語は、地方によりていふ、むけるを下一段にもいふ。

むく　ワ。カ。シニ。向平。むらしむ。まつろはしむ。あさむしむ。万十(ちはやぶる、神を言向け、まつろはぬ、人をもやはし)玉葉(うきことも、世が身にむけて、こりと、おもひなすにれ、うらみもなし)
むくい　ナ報。こたへ。かへし。古今(我をおもふ、人をおもはぬ、むくいにや、わがおもふ人の、我をおもはぬ)
むくいぬ　ナ尨犬。むくげいぬに同じ。徒然草(むくいぬのあさましくおいさらぼひて、毛はげたるをひかせて、このけしきたふとくみえて候ふとて)
むくいる　ワ。ヒトリ。カ。二。報。むくゆを見るべし。
むくげ　ナ木槿。きばちすに同じ。撰集抄(西行法師の歌、むくげの葉をもひはやきてつけ侍りて)
むくげ　ナ和毛。にこげに同じ。
むくげいぬ　ナ尨犬。犬の一種、身こえて、毛の、むくくさえたるもの。和名(〓和名無久〓〓犬也)
むくげさる　ナ毛猿。猿の名。またを見るべし。
むくさかに　ツ茂〓。茂げくさかりに。〓〓(又、四方の国〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓)
むくたけ　ナ椋茸。茸の名。むくにはひでるたけ。
むくち　ナ無口。ものいふことのすくなきをいふ。
むくつけ　サ。恐。おそろしきなり。源氏(女しくむつけや、こたへやきにいとおそろしなる山どもに、例の御さきもおほせぬなれや)
むくつけし　サ。ヒ。恐くて、おそろしきなり。伊勢(むくつけきこと、人ののろひごとは、おふものにやあらん、おはぬものにやあらん)大和(いとむくつけしとおもへど、めづらしきことなれば〓ひきく)
むくつぶり　ナ鳰。水鳥の名。にほをいふ。東国にて。
むくと　ツ 〓。俄にねぎあがるさまにいふことば。
むくどり　ナ椋鳥。鳥の名。形、ちひさく、鳩に似て、頭いたるく、翅は黒白の斑あり。常に、あまくむらがりて、喧しくなき、また、椋の実をくらふ。

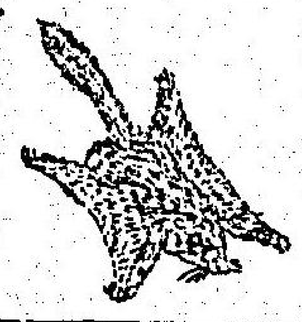
むくのえのき　ナ椋榎。むくの木をもて、つやつやとみがきなすをいふ。長明無名抄(これは、むくのをのみがきして、そなたなりける御歌なり)
むくのみいろ　ナ椋実色。くろいろのあさみのあるなるべし。烏帽子の塗色などはいふなり。せ一殿人衆合(ゑぼしをぞ、いらにせん、きみらはこのみ、やせやまひ、むくのみいろは、身いたりけり)
むくみ　ナ浮腫。みづれのごとくふくれるをいふ。
むくむ　ワ。ヒトリ。ロ。浮腫。みづれのごとくにてふくる。
むくむくし　サ。フ。茂老肥。むくむくとあり。むつけし。更料(こころもえらぬ人をやしなうてまつりて云々さき、いとむくむくしくなむ)
むくむくと　ツ茂老肥。あつく、こえて、こえやきりて。著聞十(あるひさしのやぶれより、毛むくむくとおいたるるほどきかひをさしられて)

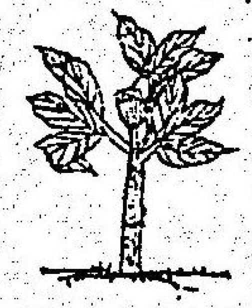
むくめく　ワ。ヒトリ。ロ。蠢。うごめく。空穂上(みのむしのやうにてやむくめきあらん)今昔(我、いくらもいきも出れず、頭をさげてむくめきあひたり)
むくゆ　ワ。ヒトリ。カ。二。報。こたへをなす。かへしをなす。この語は、地方によりては、むくいると上一段にもいふ。拾遺恋草(いまいまさ、せきのむかしみ、たえ参ききて、くにはむくいん、ためをこそおもへ)
むぐら　ナ葎。ちがやのたぐひの、にわなどにしゆるなにとなきくさをいふ。源氏(むぐらは、にし、ひんがしの御門をも、とぢこめるぞたのもしけれど)
むぐらのかど　ナ葎門。むぐらにうづもれたるかど。よをのがるるいへ。源氏(世にありと、また知られぬ、さびしくあれたらんむぐらのかどに)
むぐらのやど　ナ葎宿。むぐらのかどに同じ。新古(たえてやは、思ひありとも、如何せん、葎の宿の、秋の夕暮)
むぐらふ　ナ葎生。むぐらのおひたるところ。また、むぐらのかど。万四(いかならん、ときにか妹を、葎生の、きたなきやどに、いりませなん)
むくらん　ナ木蘭。染色の名。もくらんに同じ。
むぐらもち　ナ鼹鼠。うころもちをいふ。武蔵などにて。
むぐり　ナ潜。もぐりに同じ。
むぐり　ナ鳰。水鳥の名。そびをいふ。加賀にて。
むぐる　ワ。ヒトリ。ロ。潜。くぐる。またいりこむ。
むくれう　ナ木工寮。こだくみのつかさに同じ。

むくれにし　ナ木槵子。木の名。むくろじ。葉のさま、むくげに似て、うすくほそやか。花、黄白にして、そのさま、槐のごとくにて、長く穂をなす。花の後、ほそなどくし。うつさに似たる物の子を結ぶ。この実の中、黒き丸子ありて、常に、羽子などにもちふ。和名(〓〓〓〓〓〓〓〓〓)
むくろ　ナ骸。み。からだ。〓〓(〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓)
むくろごめに　ツ体籠。むくろもともに。枕草六(几帳の許よりより入れて、むくろごめによりかへをかふむ)
むくろじ　ナ木槵子。むくれにしを見るべし。
むくろもち　ナ鼹鼠。うころもちをいふ。中国にて。
むくゑて　ナ〓〓。果の名。いちじゆくに同じ。
むくゑん　ナ無官。いまだつかさなきをいふ。文明集(四十余になるまで、無官にて侍るよし申し侍るに)
むくゑんのたいふ　ナ無官太夫。官なくして、四位、五位の位のみをもてる人のとなへ。また、公卿の子の、いまだ元服せずして、五位になれるものをいふ。
むけ　ナ向平。むくこと。むけること。むくること。万十(ものふの、八十伴雄を、まつろへの、向けのまにく、おいびとも、〓〓〓〓)
むげちない　サ無慙。なさけなきをいふ。東国にて。

むげない　サ可愛。あはれなるをいふ。豊後にて。
むげに　ツ無下。おもひのほかに。ひらぶる。きはめて。ひなびなしく。沙石集(御数のみち、御念珠なきこそ、むげにはおぼえ〓〓)空穂藤原(〓〓〓〓〓〓〓〓いとん方なけれど、むげにまさるものをやらん)
むげん　ナ夢幻。ゆめまぼろし。十訓三(げに、この世は夢幻のほどなり。国の欲ふ、王の位よしなしとおぼしめしりて、たちまち、十善の王位をすてて)
むげん　ナ無間。きはもなく、かぎりもなきをいふ。
むけんぢごく　ナ無間地獄。あびぢごくに同じ。
むける　ワ。ヒトリ。シニ。剝。むくを見るべし。
むこ　ナ聟。婿。むすめのをとこ、むすめのをつと。和名(〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓)同〓。云、女子之夫為婿、字亦作聟〓〓〓
むこ　ナ鳥の名。みぞごゐをいふ。近江などにて。
むご　ナ無期。いつをはかるとはかりなきをいふ。枕草六(いつしとまつに云々、つれづれとてくるをいふ、いにぞ、いつなりぬやなどいひて、まちわびなどいひて)
むご　ナ〓〓。〓〓をいふ。〓〓などにて。
むごい　サ惨然。かはゆし。あはれなり。
むこいり　ナ聟入。むこになるべきひと〓〓〓〓〓〓。
むこがね　ナ聟がね。むこになるべきひと。伊勢(むかし、〓〓〓云々、このむこがね、よみて、おこせたりける)
むこぎ　ナ五加木。灌木の名。高さ四五尺ばかり。茎に刺あり。

むみ、るの子に、くろき剣あり。葉べ、すこし人参の葉に似て、五葉づゝなるものなり。茎のすゑ、夏のころ、くろき花ひらきなどして、くろい實をなすなり。
むしび ナ。寄戦。むしなるをさな。
むしし サ,ヒ。悠然。かたゆし。あはれなり。
むしとよう ナ。簡謀。むしをいふ。問題など。
むたなし サ,ブ。悠然。かたゆし。あはれなり。
むこどり ナ。婿取。むこをまうくるをいふ。太平記（たゞむこどりするとて、むすめのやうに）
むこに ツ。婿期。いつまでもさてなく、大和（いりていとく久しかりければ、むこにまいりたりけるを）とりかへ（婿ぜんとほしけれど、むこはいでさりけり）（門を明けければ、むこにあけざりけれど）
むこひきで ナ。婿引出。むこにおくる引出物。
むこん ナ。無根。ねなしごと。あとかたなきこと。
むごん ナ。無言。ものをいはぬをいふ。修業の行ふのをいひ行ふなり。方丈記（しゞかにおもひ、無言をせんとおもひ、一人なれば、口業ををさめつべし）
むこやうし ナ。婿養子。むすめにめあはすべきやうし。
むごらし サ,ブ。惨然。かなし。あはれなり。
むさ ナ。武者。むしや。ものゝふ。字鏡三（大太郎がとられて、武者のまろのおそろしき由などかたりけるなり）
むさ ナ。武左。さんむらのところ見るべし。
むさい ナ。無菜。やもめ。つまなきをいふ。

むさい ナ。無才。さえなし。けうらもし。
むさう ナ。夢想。ゆめのつげ。ゆめのさとし。
むさう ナ。無雙。ならびなし。ひとつにみゆるもの。
むさう ナ。無想。おもふことなし。字鏡十（かゝる事をのみつくりしかば、むさうにおぼえて）同（なにおもひもなく、いみじうのどかに、むさうにおぼえし）
むさえ ナ。無詮。むなしくかひなきをいふ。
むさえ ナ。無定。さだまりなきを、いつまでもなきをいふ。
むささび ナ。鼯鼠。獣の名。深山の木の梢などにすみ、形ねずみのごとく、おほきさ、猫のごとく、身に翅ありて、とぶ。

むさゝびうし（翅にて飛びかけりて、山のかたちを見たまへ）和名（鼯鼠和名毛美 云無佐々比）

鼯鼠。能從高而下、不能從下而上、常食火烟、聲如小兒者也）
むさし ナ。武蔵。くにの名。
むさし ナ。無様。さまあし。けうらもし。
むさしあぶみ ナ。武蔵鐙。あぶみの、上の輪の中の鉄の、みじかく、左右ともにかけたるもの。

むさしの ナ。武蔵野。草の名。
むさね ナ。鱮。魚の名。
むさのしろ ナ。武者所。
むさぼる ワ。貪。あくまでほしがる。

むさむさし サ,ブ。閑。むさくとあり。世俗立要集（もりひへなさくし、ざくろいやまくし）
むさむさと ツ。閑。むさくろしく。見教訓（夜がたり、手足あらはに、爪さうなど、むさくとして、あらしこの、ことものつめて、くみかひて、足は、的もく取るもなく）
むさん ナ。無慚。なさけのものゝなきをいふ。
むざん ナ。無慙。もうでまをうらむなどいふ。またおほのところなきをいふ。源平（我なさんの法師にて、四事の中に、やぶる戒いおほらめど云々）
むし ナ。虫。生物の名。うなぎ、けらのもの、けだもの、のもの、みな、むしと云ふ。
むし ナ。蒸。あたゝむをいふ。字鏡三（今いむしてなほれり）
むし ナ。無子。
むしあつし サ,ヒ。蒸熱。むしてあつし。
むしあゆ ナ。魚の名。

むしえらみ ナ。撰虫。秋の夜、野辺をさまよひて、鈴虫、松虫などのよくなくをえらびとるをいふ。
むしかご ナ。虫籠。むしを入るゝかご。
むしがれい ナ。蒸鰈。
むしくひ ナ。虫食。むしのくひたるあと。
むしけら ナ。虫螻。
むしけん ナ。虫拳。
むしけら ナ。虫螻。むしといふに同じ。人のけがらはしきをいふ。

むしこ ナ。昆虫。きりぎりす。

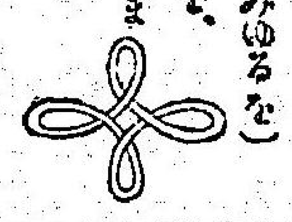
むしたれきぬ ナ。虫垂衣。

むしつ ナ。無実。あらぬことを、おほせつくるをいふ。
むじな ナ。貉。獣の名。たぬきに似て、鼻とがりて、穴に隠れて住む。和名（貉 似狐而善睡者也）

むしなつかひ　ナ。絡匱。きつねつかひのたぐひ。
むしのすおり　ナ。虫巣織。織物名。てぐすむしを見るべし
むしのたれぎぬ　ナ。牟垂衣。むしたれぎぬに同じ。
むしだ　ナ。醜。むしかめごを見るべし。
むしだむ　ワ。カナ四。蟲食。むしくひになる。枕草十(月に、昔を思ひいでて、むしむみたるかはほりとりいでて)
むしひ　ナ。無慈悲。おもひのこころなきをいふ。
むしぶすま　ナ。蒸衾。あたたかなるふすま。古事記(牟斯夫須麻、にこやが下に、たくぶすま、さやぐが下に)
むしぶろ　ナ。蒸風呂。ふろの、ゆげにてむすやうにしたるもの。病人の、身を暖むるなどにするものなり。
むしへん　ナ。虫偏。かなもじの偏の名にて、虫の字を、偏にもちひたるもの。蚓、蛙、蛾、蜘のたぐひ。
むしぼし　ナ。曝干。なつのころ、書籍などを、日にてらしてさらすをいふ。蟲喰にさせじとてする事なり。
むしむろ　ナ。蒸室。かうぢをかもすあたたかなるむろ。
むしん　ナ。無心。なにのこころもなきをいふ。また、おもひやりもなく、ひとに、ものをこひなどするをいふ。
むじん　ナ。無盡。たのもしに同じ。
むじんかう　ナ。無盡講。たのもしのくみあひ。
むじんざう　ナ。無盡藏。そうざいに、志かけありて、おぶらの、ひさらに、たえずかかるやうにしたるもの。
むじんなり　サ。無心。こころなし。おもひやりなし。ふのにかんがへなし。落窪一(うきてこころなしとえみられさるやうにこそ、人にしられぬ人は、むじんなるこそよけれとてものしげにおぼしたり)
むじんに　ツ。無心。こころなく。おもひやりなく。そのにかんがへなく。狭衣一(よろづに、むじんに、ものすさまじきひとざまにやとぞおぼしこられたまへど)
むしめがね　ナ。蟲眼鏡。めがねの、志かけありて、ちひさきものを、おほきにみするやうにしたるもの。
むしめし　ナ。蒸飯。こはいひに同じ。
むしもち　ナ。蒸餅。まんぢうのたぐひをすべていふ。
むしもの　ナ。蒸物。ゆげのねつにてむしたるもの。大和(少將はれ、ひろき庭におひたる菜をつみて、むしものといふものにして、ちやうせんにもりて)
むしや　ナ。武者。つはもの。いくさびと。よろひをきたるもの。宇拾十(ちからつよく、こころたけく、むくつけきあらむしやの、おのづからいで来て)
むしや　ナ。蟲屋。むしこ。また、まつむし、すずむしなどをとりておきなふいへ。夫木廿(すみなれし、もとの、のむらや、志のぶらん、うつすむしやに、虫のこぶるれ)
むじやう　ナ。無常。よの、まぼろしのごとくにてさだめなきをいふ。撰集抄四(無常、もし、高位をもぐらはれ、天子ぞ、ひとり、この世にはとどまりたまふべき)
むじやう　ナ。無情。なさけなきをいふ。おもひなきをいふ。
むじやうしよ　ナ。無常所。はか。あざしの。とりべの。拾遺一(神明寺の邊に、無常所まうけて侍りけるが)
むしやうに　ツ。無性。あてもなく。かぎりもなく。
むしやき　ナ。蒸燒。うむしやきに同じ。
むしやざうり　ナ。武者草履。こどものそくざうり。
むしやしゆぎやう　ナ。武者修行。武士の、武術を修行するために、あまねく、諸國をめぐりありくをいふ。
むしやどころ　ナ。武者所。院の御所のまもりとして、北面のさぶらふところ。ほくめんを見合すべし。
むしやぶぎやう　ナ。武者奉行。武家の役の名。武者の進退を察るものにて、合戰の時は、軍中の事を指揮す。
むしやわらぢ　ナ。武者草鞋。むしやざうりに同じ。
むしゆく　ナ。無宿。やどなし。やどるべきいへなきもの。
むじゆん　ナ。矛盾。ものごとのあとさきそろはぬをいふ。また、ひとのならひのこころくなるをいふ。
むしよ　ナ。墓所。むろどころ。平家一(一天の君、崩御なりてのち、御墓所へおさしたてまつるときの作法は、南北二京の大衆ことごとく供奉して)
むしよくげふ　ナ。無職業。つねのなりはひなきをいふ。
むしよけ　ナ。蟲除。むしのがいをのぞくまじなひ。
むしりげ　ナ。毟毛。鹿の革にいふことぞ。秋のころ、夏の、ふるげの、ながくのびて、秋のみじかき毛にまじりたるを、むしりのけたるものをいふ。貞丈雜記
むしりこた　ナ。毟綿。ぬのの、ぬりをけにかけてひきのむしさるをいふにや。ぬののひきさるれ、きぬのうへよりきる事もあり。宇拾十(猿の云々、顏と尻と

れあかくして、むしりこたを著たるやうに、いろなく志ろきが、毛はおひあがりたるさまにや)
むしる　ワ。カナ四。毟。けをつまみてひきぬく。宇拾四(この雉子を云々、いけながら、毛をむしらせければ)著聞六十(鳥をとらへて、毛をつるりとむしりてけり)
むしろ　ナ。席。筵。ひとのゐるところ。また、人のゐるところなどにしくものにて、藺、蒲などにておりたるものをすべていふ。和名(筵、和名、無之呂、竹席也)
むしろ　ソ。寧。もし。もしくは。かへりては。おなじくは。
むしろうち　ナ。筵打。むしろをおるひと。七一職人歌合(むしろうち、てしきむしろかひさまへ)
むしろだ　ナ。席田。催馬樂の呂の曲の名。催馬樂(牟之呂太のや、むしろだの、いつぬき川にや、すむつるの)
むしろだ　ナ。席田。地の名。美濃にあり。また、筑前にもあり。新拾(むしろ田に、ちとせをかねて、すむたづも、きみがよはひに、志かじとぞおもふ)
むす　ワ。ヒトリ。四。產。おひいづ。なりいづ。万一(河上の、ゆつ石むらに、草武左受、常にもがもな、常處女にて)
むす　ワ。カケ。四。蒸。うむすに同じ。大和(少將されし、ひろき庭におひたる菜をつみて、むしものといふものにして、ちやうせんにもりて)字鏡(牟須)
むす　ワ。ヒトリ。シ二。咽。むせぶといふに同じ。この語は、地方によりては、むせるとしも下一段にいふ。万三(わぎもこが、うゑし梅の木、みるごとに、こころ咽つつ、なみだしながる)
むすう　ナ。無數。かずのかぎりなきをいふ。
むすこ　ナ。息。なのこ。をとこのこ。源宿木(御むすこの公達、たち、この御とののゐどころのみやづかへを)
むすこご　ナ。息子。むすこといふに同じ。
むずと　ツ。無手。とみに。ちからをこめて。著聞廿(手をむずととりてけり、とられてひきいつべしけれども)
むすばえる　ワ。ヒトリ。シ二。結。むすばる。字鏡(結伊止牟須波々留)
むすび　ナ。結。むすびたるところ。万廿(こまにしき、紐の結も、ときさけず、いはひてまてど、驗なきかも)
むすび　ナ。摶飯。おものの むすびかためたるもの。
むすびうま　ナ。結馬。うまをひきいだすときのさまをいふことぞ。下文を見るべし。今川大双紙(むすびうまをほどく事、むすぶといひ、ひきてゐるとき、尻を、引手の右へあざらな、むすぶといふなり)
むすびかた　ナ。結方。ひもなどをむすぶありさま。
むすびがみ　ナ。結髮。もとどりをとりてむすべるかみ。
むすびとうだい　ナ。結燈臺。とうだいの一種。三本の竿をよせて、中のところをむすび、末をねぢひらきて、立鼓の形にたてなして、その上に、あぶらざらをのせ、あぶらをもりてともすやうにしたるもの。

むすびのかみ　ナ。産靈神。たかみむすび、かむみむすび、二柱の大神を申す。この大神は、天地のはじめのとき、あらはれたまひし大神にて、萬の物、萬の事をむすびいで、今も、常に、そのむさぼきをなしたまふ大神なり。
むすびだな　ナ。結棚。けづりむなのごとくつくりむなを、さまざまのいとにてかざりなしたるもの。
むすびぶくろ　ナ。結袋。ふくろの、くちをむすぶやうにしたるもの。拾遺(ものへまうりける人の許に、ぬさを、むすびぶくろにいれてつかはすとて)
むすびぶし　ナ。結節。むすびて、ふしとなりたるところ。
むすびぶみ　ナ。結文。せうそこぶみの、をしなむすびたるもの。源葵(ひきむすびたる文、御枕の許にあり)
むすびめ　ナ。結目。むすびたるところ。狹衣四(色々の紙なる文ども云々、むらさきの紙のなべてならぬさまにて、むすびめなども、たゞいまとみゆるを)
むすびゐげた　ナ。結井桁。紋所の名。ひもを、つぎつぎいれちがへゆきて、ゐげたのさまにむすびたるを象りたるもの。



むすぶ　ワ。カナ四。產。うむ。つくりいだす。
むすぶ　ワ。カナ四。結。とりあはせて、はなれぬやうにす。ひもなどの、はしとはしとを、ひとつにくみあはす。また、なそりのかためをなす。また、むすびぶしをつくる。万三(あはぢの、ぬじまのさきの、はまかぜに、いもが結し、ひもふきかへす)

むすぶ ワ。カ゚四。掬。みづをすくふ。古今（むすぶ手の、雫ににごる、山の井の、あかでも人に、わかれぬる哉）

むすぶ ワ。ヒトリ。四。凝。こる。かたまる。千載（おきながら、葉末にむすぶ、露ごとに、光をさけて、やどる月かな）

むすぶのかみ ナ。産霊神。月下老人。むすびのかみ。また、男女の縁をつかさどりたまふかみ。拾遺（きみみれば、むすぶの神ぞ、うらめしき、つれなきひとを、なにつくりけん）十六夜日記（まもれたゞ、ちぎりむすぶの、神ならば、とけぬうらみに、たれまよはさじ）

むすぼほる ワ。ヒトリ。シ二。結。むすぼる。拾遺（春くれば、柳の糸も、とけにけり、むすぼゝれる、わがこころ哉）

むすぼる ワ。ヒトリ。シ二。結。むすびたるごとくなる。とけがたくなる。こゝろはれやかならず。この詞れ、地方により、むすぼれると下一段にいふ。万十八（ねもごろに、おもひ弁須保礼、なげきつゝ、あがまつ君が、ことをはり、帰りまゐりて）山家集（なぎねより、袖ぞぬれける、なみなべし、露むすぼれて、たてるけしきは）

むすぼれる ワ。ヒトリ。シ一。結。むすぼるを見るべし。

むずむずと リ。噛みくだきつゝ。かゆくおぼえて。宇拾二（なき云々、三十筋ばかり、むずむずとをりくふ）

むすめ ナ。娘。めのこ。をんなのこ。をんな。源若紫（大納言の御むすめ、ものしたまふときゝたまへしれ）同夕顔（むすめなど、さとりつどひたるほどにて）

むすめご ナ。娘子。むすめをいふに同じ。

むせい ナ。無性。ぜにをおぼせられぬをいふ。

むせかに リ。俗。あくらう。鶉記（寥然ム世カ）

むせかへる ワ。ヒトリ。ロ。咽返。いたく、むせぶ。新後撰（下には、岩間の水の、むせかへり、もらさぬほどは、袖ぞぬれける）源澪（このひとぐも、むせかへるさまなれば、いとくゑむるべきかたもなきを）

むせき ナ。無籍。にんべつに、そのなきをいふ。

むせぶ ワ。ヒトリ。ロ。咽咽。のどはふさがる。ものはとどこほる。もの[illegible]らむ。万二（まそでもち、なみだをのごひ、牟世比つゝ、かたらひすれど）続千（ふきおろす、あらしの山は、春くれて、ゐせきはむせぶ、花のしらなみ）玉葉（かぜむせぶ、檜原の志ぐれ、かきくらし、あなしのたけは、かゝるむらくも）

むせる ワ。ヒトリ。シ一。咽咽。むすぶを見るべし。

むそく ナ。無足。ちぎやうなきひとをいふ。貞丈雑記（禄なきひとを、無足といふことぞ、近世の詞にはあらず、昔よりあり、鎌倉年中行事、正月十七日御的の條に、無足のひと、射手人数に参るとき云々とあり）

むそぢ ナ。六十。よそひのろくじふ。

むた リ。共。ともに。まにく。ひとつに。あらひて。万二（波の共、かよりかくより、玉藻なす、よりねし妹を、露霜の、おきてしくれば）同十（春霞、たなびく共に、柳の、枝くひもちて、うぐひすなくも）

むだ ナ。徒。いたづらなるをいふ。かひなきをいふ。

むだあそび ナ。徒遊。いたづらなるあそび。

むだいに リ。無代。ないがしろに。なほざりに。謡曲（たれか、仏法を無代にし、讒罪をあひまねく）

むたいに リ。無益。あぢきなく。あぢきなし。よこさまに。

むだう ナ。無道。そのことの、みちにかなはぬをいふ。浄瑠璃三（衛門殿、むだうなやうなれど）

むだがき ナ。徒書。いたづらにかきすさびたるもの。

むだく ワ。カ゚四。抱。いだく。万十四（上野、あそのまそむら、可伎武太伎、ぬれどあかぬを、あどゝあがせん）

むだぐち ナ。徒口。いたづらなることば。

むだごと ナ。徒事。いたづらなること。

むだじに ナ。徒死。いぬじに。いたづらじに。

むだづかひ ナ。徒遣。いたづらなるつかひ。

むだに リ。徒。いたづらに。むやくに。むように。

むだな ナ。徒花。あだなるに同じ。

むだなし ナ。徒話。いたづらなるはなし。

むだぼねをり ナ。徒骨折。いたづらなるほねをり。

むだん ナ。無檀。てらに、だんなきをいふ。

むだもの ナ。徒物。いたづらなるもの。

むち ナ。鞭。ほそきつゑの、うまをうちてはしらするもの。和名（輪和名、無知、俗云無知、所以策馬駆遅也）

むち ナ。無智。こゝろのさときなきをいふ。宇拾六（聖なれど、無智なれば、かやうにすかされけるなり）

むぢ ナ。無地。おりものなどの、あやなきものをいふ。

むちうつ ワ。カ゚四。鞭撻。むちをもてうつ。

むちとい サ。怜然。おそれなるをいふ。武蔵の田舎にて、

むちさし ナ。鞭差。うまやのとねりをいふ。貞丈雑記 平治、源氏れ、むちさしまでも、おろかなる者れなきものを）

むちつみ ナ。館。たちに同じ。和名（館和名、多知 一云無知豆美）

むちやくちや ナ。無茶苦茶。とけもなく、ふしなすをいふ。

むちやむちやに リ。無茶々々。とけもなく、ほどけなく。

むちゆうに リ。夢中。こゝろもそらに。ゆめのやうに。

むつ ナ。陸奥。国の名。みちのくに同じ。みちのくをよびあやまりたるなりといふ。むつのくに見合すべし。

むつ ナ。魚の名。おほきさ四五寸ばかり、鰓、そえに似てまろく、鰭かたくして、尾のところに、岐あり。

むつ ナ。六。みつに、みつなあはせたるかず。

むつ ナ。六時。むつどき。とりのとき。うのとき。

むつ コテ。睦。むつまじき。古今（むつごとも、まだつきなくに、あけぬめり、いづらは秋の、ながしてふ夜は）

むつおよび ナ。六指。不具の名。いつゝあるべきゆびの、むつあるもの。和名（駢拇 此間云無豆於与比）

むつかし サ。ブ。難。煩。みだりがはし。きたなし。むくつけし。いとはし。うるさし。枕草八（むつかしげなるもの、ぬひもののうら、猫の耳のうち）十訓一（おほきなる蜂云々、うちむれて、いくらともなく、いりあつまるさま、いとむつかしくみえけり）狭衣（せちにひきよせさまかなあな、むつかし。あつく侍るにとひこしろひさまへる御おもひいとおもし）

むつかし サ。ブ。不安穏。かるし。たやすからず。

むつがたり ナ。睦語。むつごと。むつまじきものがたり。堀川百首（うづみびの、あたりは冬ゆれ、まとゐして、むつがりする、ことぞうれしき）

むつかる ワ。ヒトリ。四。憤。むつかしくおもひていきどほる。大和（むつかりて、おや、はらからのいふ事もきかで、法師になりぬる人れ）空穂物語（ゆるしてまつりさまたねれ、よるひるぞむつかりおはします）

むつき ナ。襁褓。うぶぎ。うまれいでたるほどに、はじめてきする衣もの。また、小児の、小便などの用に、腰にまくもの。六帖一（うぐひすの、ふゆごもりして、うめる子れ、春のむつきの、なかまでありける）弱花（睦月一日、子うみたる人に、むつきつかはすとて）

むつき ナ。睦月。としのはじめのつき。玉葉（春霞、かすみなれたる、景色哉、むつきも数き、日数と思ふに）

むづく ワ。カ゚。シ二。憤。むつかる。新六五（おのづから、手枕むづし、ねなほれれば、それおもむずと、妹むづけたる）

むつごと ナ。睦言。むつまじきものがたり。をとこをんなのなかにいふことぞ。古今（むつごとも、まだつきなくに、あけぬめり、いづらは秋の、ながしてふ夜は）

むつだま ナ。睦魂。むつまじきたま。むつびあへるこゝろ。

むつと リ。悧然。いかりて。おかほでりて。

むつどき ナ。六時。とりのとき。うのとき。

むつのく ナ。陸奥。国の名。みちのくに同じ。みちのくをよびあやまりたるなり。山家集（むつのくの、おくゆかしくぞ、おもほゆる、つぼのいしぶみ、そとの浜風）

むつのつかさ ナ。六衛府。むつのゑふ。左右の近衛府、左右の衛門府、左右の兵衛府。年中行事歌合（御禊たまふ、けふの為とや、菖蒲草、六司も、かねてひくらん）

むつのはな ナ。六花。雪の異名。回国雑記（推なべて、草木は緑る、色もなし、雪れ六の、花をみるらん）

むつのまよひ ナ。六迷。ろくてんに同じ。

むつのみち ナ。六道。ろくだう。佛家にていふ。冥途のゆきかよるべき道にて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人のむつなをいふ。玉葉（たづねよと、年ふるやどな、よそはみて、むつのみちには、あしもやすめず）

むつのせ ナ。六輪。ろくどうのりんゑをいふ。

むつのを ナ。六絃。やまとごと。六帖（むつのをの、よりめごとまで、香に匂ふ、ひく少女子が、袖やふれつる）

むつび ナ。睦。したしみ。承久軍物語（一門の中にても、ことさら、兄弟のむつびなむし申ししはたがはず）

むつぶ ワ。ヒトリ。カ二。睦。むつまじくす。へだてなくまじはる。六帖三（風ふけば、よどをむつぶる、みづとりの、うきねなのみや、わぬ寝をさらん）源総角（としごろ、なれむつびきこえさまへるを）

むつまかに リ。睦。むつまやかにに同じ。

むつまじ ザ。ブ。睦。なかよし。なのらひあるし。この詞れ、

今れ、むつまじいといをそへていふ。伊勢（むつまじと、君れ志らずや、みづがきの、ひさしき世より、いはひそめてき）源氏夕顔（みしひとの、けぶりを雲と、ながむれば、ゆふべの空も、むつまじき哉）神代紀（親昵）

むつまじい ザ。睦。むつまじを見るべし。

むつまやかなり サ。睦。むつまじ。なららひ志さし。

むつまやかに ツ。睦。むつまじく。なららひ志さしく。なららひうるわしく。字鏡（睦 大志加尓、又伞豆万也加尓）

むつものがたり ナ。睦物語。むつがたりは同じ。源氏若菜（かの、まさひとどもきつぎりし御中のむつものがたりは、すこしかさりいでさまへりし事を）

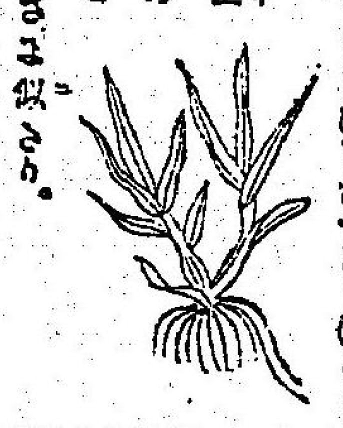
むつやぐるま ナ。六矢車。紋所の名。やぐるまの、矢のかずをむつにして、まろくゑがきなしたるもの。

むつゆび ナ。六指。不具の名。むつおよびは同じ。

むつらぼし ナ。六連星。星名。すむるなをいふ。東京にて、

むつる ワ。ヒトリ。シニ。睦じさあらそる。むつびてなれまつそる。人丹集（花にてふ、こゝにてつねは、むつれなん、のどけからねば、みるひともなし）狭衣三（そでよりぐさてなくいれさまへるを、よろこびてむつる〻、いとうつくしうらうさし）

むづれぐさ ナ。草の名。莖の高さ二三尺、むらり、莖のさま、葉のさまは、葉のごとくにて、穗は、蕘のごとくに似たり。



むて ナ。無手。からで。ては、ものをもたぬをいふ。

むてつぞふに ツ。無手法。ものごとのさきまへもなく。

むてん ナ。無點。かへりてんなどのなきもの。

むどくに ツ。無德。かひなく。いきほひなく。落窪二（みな、ひとぐ、いとむとくにある御車の、ぬしさちなどもらふ、いとむづかしうて）狭衣三（いで、その翁も、こはてれ、いとむとくにこそ侍らめ）

むとむ ワ。カケ。シニ。求。もとむに同じ。

むなあげ ナ。棟上。やづくりのとき、むねらなどたてそりてのち、ことは、むなぎをなきおどるをいふ。

むないた ナ。胸板。よろひの、むねにあたるところ。

むながい ナ。鞅。むながきを見るべし。

むながき ナ。鞅。馬具の名。うまの尾より胸のかさにかくるくみを。和名（楊氏漢語抄云、班賀無奈加岐）

むながわら ナ。棟瓦。やのむねをふくかはら。七一職人歌合（ひむざぶき、このむながわらがおそき）

むなぎ ナ。鰻。うなぎに同じ。万廾（石麻呂に、我ものきうす、夏瘦によしといふものぞ、武奈伎とりめせ）

むなぎ ナ。棟木。やのむねにおくおほきなるき。

むなぎあげ ナ。棟木上。むなあげに同じ。

むなぐに ナ。空國。むなしきくに。神代紀（膂宍之空國）

むなぐら ナ。胸椋。こゝろもの、えりの、むねにあたるところ。人を捕ふる時、手をのべて、そこをつかむ事あり。

むなぐるし サ。フ。胸苦。むね、つかへたるごとし。

むなぐるま ナ。空車。からぐるま。ものをのせぬくるま。空穂藤原君（むなぐるまは、稻、鹽つみてもてきたり）

むなげ ナ。胸毛。むねのけ。夫木廾（池水は、うるべるなしの、むなげもて、さむきけしきの、なきがあやしき）

むなごと ナ。空事。むなしきこと。かりそめごと。万十二（おほろかは、心おもひて、牟奈許等も、親の名たつな）

むなさき ナ。胸先。こゝろさき。むねのみづおちのあたり。古事記（入槃須至于心前哈伊佐知夜也）

むなざんよう ナ。胸算用。こゝろはみつもるをいふ。

むなさわぎ ナ。胸騒。こゝろのうごきさわぐをいふ。騒くことのむなさわしきときなどにある事なり。

むなし サ。フ。空。虚。ものなし。ことなし。からにており。いたづらにており。この語れ、今れ、むなしいといひなそへていふ。源少女（むなしき事にて、人の御名やけさんとのつまへば）新勅（あすもありと、思ふこゝろに、はからされて、けふもむなしく、くらしつるかな）

むなしい ザ。空。虚。むなしを見るべし。

むなしきから ナ。空殼。むなしくなりたるあとのからだ。源氏御法（むなしき御からにても、今ひとたびみたてまつらんのこゝろざしかなふべきをりれ）

むなしだのみ ナ。空頼。むなしきたのみ。いたづらなるたのみ。六帖三（伊勢の海の、なぎさはよする、うつせがひ、むなしだのみは、世をつくしつゝ）

むなしで ナ。空手。むなで。からで。神代紀（空手）

むなしぶね ナ。空船。からぶね。ものをのせぬふね。

むなち ナ。胸乳。むねとち。古事記（掛出胸乳）

むなづかへ ナ。胸支。むねの、つかへておぼゆるをいふ。

むなづもり ナ。胸積。こゝろにみつもるをいふ。

むなで ナ。空手。からで。むなしで。山家集（水たらふ、入江の眞菰、かりかねて、むなでにすぐる、五月雨の頃）

むなひげ ナ。胸髭。むなげ。むねにそえたるけ。

むなふだ ナ。棟札。むなあげのとき、むなぎにうつふだ。建てたる年月、まさい、人名などを志るしたるもの。

むなぼね ナ。鳩尾骨。むねにならびたる骨ね。宇拾十（頸ほそく、むなぼねれ、ことにさしいでていらめき、そらふくれて）和名（鳩尾骨 和名無奈保禰）

むなみる ワ。ヒトリ。カ一。胸見。むねをみる。かうべをたれてみる。古事記（おきつとり、牟那美流とき、そさぎも、こしころし、いとこやの、いものみこと）

むなわけ ナ。胸分。志かなどの、むねにて、くさをおしわくるをいふ。万廾（ますらをの、よびたてしかば、さをしかの、牟奈和氣ゆかん、秋のはぎはら）

むなね ナ。空閨。むなしくぬるをいふ。つまはなれてぬるをいふ。六百番歌合（浪のうへ、くだす小舟の、むなねして、月はうらむし、妹ぞこひしき）

むに ナ。無二。ふたつなきをいふ。たぐひなきをいふ。

むにす ワ。ガ。カ。無。なきはなす。いたづらはなす。

むにむざんに ツ。無二無三。ひたすらはすみて。

むにんじま ナ。無人島。すみたるひとなきしま。

むね ナ。胸。心。のどとむらとのあひだのひろきところ。また、こゝろをいふは同じ。和名（胸云々和名無禰）

むね ナ。旨。ことのこゝろ。濱松三（つぶさなる事の旨を、きこしめし申させさまへんやよく候はん）

むね ナ。宗。おもだちたるもの。かなめとあること。宇拾二（その里はとりて、むねとあるもののゆめは）続世継六（むねとれ、詩つくりさまふ事をこのみて）

むね ナ。棟。やのうへの、きそめてたるきところ。七一職人歌合（のきづけを、まづふきそむる、ひさしやの、まどむねおもね、懸もするかな）和名（棟 釋之棟和名無禰）

むねあく ワ。ヒトリ。ロ。胸開。こゝろ、それやかはなる。源紅梅（思ひいでさてまつるも、胸あく世なく悲しきを）

むねあけ ナ。棟開。腰の名。いたごしは同じ。

むねあげ ナ。棟上。むなあげは同じ。

むねあげ ナ。棟上。腰の名。むねたてを見るべし。

むねあて ナ。胸當。そらがけのたぐひ。小兒などの、夏のころ、裸はなるとき、胸のところをおほふもの。

むねいたみ ナ。胸痛。やまひにて、むねのいたむをいふ。

むねうち ナ。刀背打。かたなのみねにてうつをいふ。

むねけ ナ。胸氣。むねのやまひ。空穂田鶴村鳥（中納言、このむねけといふ心地なんとて、昔ざま、ひとまどそもしさまひし御琴、いつになりはべるらん、宮、音とのへる琴をてきさぐりはかきならししを、人きゝけりとて）

むねさく ワ。ヒトリ。シニ。胸裂。くるしさは、むねもさくるやうにおぼゆ。蜻蛉（今れなみぎも、水無月の、木陰はさぶる、うつせみの、むねさけてこそ、なげくらめ）

むねさわぐ ワ。ヒトリ。四。胸騒。むなさわぎす。狭衣三（みゝとゞまりて、なにとなうむねさわぎて）

むねたがふ ワ。ヒトリ。四。胸違。おもひたがふ。こゝろはさわぐ。濱松八（その年、その頃、たれがしな、御使にてめされて候ひしに、よも御わらひれ候ふまじ、もし、むねたがひてや候ふと申しさりけるは）

むねたたき ナ。胸叩。せきぞろのたぐひのものもらひ。下文を見るべし。嬉遊笑覽（むねたゝき云々、頭は、あみさる頭巾のやうなるものをき、裸にて、腰は、餅ぞでをつけさり。手して、胸をたくにはよりて、名はおへるなり）三二職人歌合（やどごとは、春まうらんと、ちぎりしれ、花のためなる、むねたゝきかな）

むねたて ナ。棟立。腰の名。むねあげ。下文を見るべし。貞丈雜記（棟立の事、むねあげともいふ云々、腰の屋根をそらせて、棟を、たかくたてたるなり）

むねつぶらかし サ。フ。胸潰。くるしさは、むねもつぶるゝばかりはあり。空穂藤原君（よさき御心は、むねつぶらかしき事をきゝさまひて、物もおぼえさまはず）

むねつぶらはし サ。フ。胸潰。くるしさは、むねもつぶるゝばかりはあり。源胡蝶（ひとぐ志げくなみゐされれ、いとむねつぶらはしくおぼさる）

むねつぶる ワ.ヒトリ.シニ.胸潰。くるしさに。むねもつぶるゝやうにおぼゆ。竹取「(これハ、この御子にまけぬべしと、むねつぶれておもひけり)」

むねさ ナ.宗徒。むねとあるところ。

むねと ソ.宗。もつぱら。山家集「(家の風、むねきくべき木のもとハ、今ちりなんと、おもひこそのそ)」

むねとして ソ.宗。もつぱらとして。おもなることとして。空穂物語「(つくものを業として、遊をむねとして、くまたちり、すなどりなすめるものの)」

むねところ ワ.ヒトリ.回.胸處。むなさきす。

むねにしむ ワ.ヒトリ.回.胸染。こころにしむやうにおぼゆ。拾遺「(こひしきハ、ひろきはけぞ、みえなくに、いかなるところ、むねにしむらん)」

むねのひまあく ワ.ヒトリ.回.胸閑。こころおだやかになる。源氏「(思ひむすぼゝるゝ事ども、すこしづゝ晴るゝまゝに、こよなく、胸の開くこゝちしさまや)」

むねのひまなし サ.ビ.胸無隙。こころに。おもひのたゆるときなし。源氏「(宮ハ、いかなるにつけても、むねのひまなく、やすからぬものをおぼす)」

むねのはしりび ナ.胸走火。こころのまどをいふ。むしりびを見るてふ。古今「(人にあはん、つきのなきには、おもひおきて、むねはしりびに、心やけをり)」

むねはしる ワ.ヒトリ.回.胸走。こころさわぐ。むなさきす。空穂物語「(心もあらくしく、おそろしくおぼえ、むねなんさしりし)」枕草子「(びんなき所にて、人にものをいひけるに、胸のいみじうはしりける、など、かくハあるといひけるいらへに、逢坂ハ、胸のみつねに、はしりゐの、みつくる人や、あらんとおもへば)」

むねひしぐ ワ.ヒトリ.シニ.胸拉。むねつぶるに同じ。狭衣「(いかなるぞりも、むねひしげさるやうにて、いとおぼつかなう、のこりゆかしきよのつねなり)」

むねひらく ワ.ヒトリ.回.胸開。こころのびやかになる。

むねむねし サ.ブ.宗々。おもだちてあり。源氏「(姫君ハ、けはひしなども、むねむねしきひともなかりけれバ)」

むねん ナ.無念。ものおもひなきをいふ。十訓抄「(無念と思ひて、人をも恨みず、ひとしくてあり居て、色をも、くろく、日におもいて)」

むねわるし サ.ブ.胸悪。こころよからずかなしきなり。

むねをつぶす ワ.ヒトリ.回.胸潰。くるしさに、むねもつぶるゝやうにおもひなやむ。狭衣「(五月の夜の事なども、おぼし出るに)」

むのう ナ.無能。なすことあたはざるをいふ。

むのざきのおう ナ.射干玉。くろみのすぢをいふなるべし。夫木「(ものをもひ、みだれてぞおもふ、たれにかは、いまはなけりん、むのさまのすぢ)」

むはふ ナ.無法。おきてのなき、みちにかなはぬをいふ。

むはふもの ナ.無法者。むはふをおこなふもの。

むばら ナ.荊棘。荊棘。灌木の名。うばらに同じ。

むばらぎき ナ.荊棘の若枝なりといへど、さだかならず。拾遺集「(むばらぎき、手にもなりたらで、春の野の、やちのまへを、きりてつゝれん)」

むび ナ.無比。ならぶべきもの無きをいふ。

むびやう ナ.無病。やまひなきをいふ。

むふんべつ ナ.無分別。ものごとに、わきまへなきをいふ。

むべ ナ.郁子。植物の名。うべ。蔓草にて、その花ほきなり。灌木の状をなせり。葉の状あけびに似ておほきくして、かたく、夏のはじめ、むらさきの白くしてうすくむらさきみある花をひらき、花ののち、くろくむらさきかみある実の、長瓜よりもおほきなるをむすぶ。あまくしておいし。和名「(郁子、一名、野木瓜、和名、牟閉)」

むべ ソ.宜。うべに同じ。古今「(ふくからに、秋の草木の、しをるれば、むべ山風を、あらしといふらん)」

むべむべし サ.ブ.宜々。うべうべしに同じ。枕草子「(かうざりさまざま、むべむべしき所の前栽はいとよし)」

むへんほつかい ナ.無辺法界。ものごとの、はてもなく。ためしもなくて、このほかなきをいふ。

むぼう ナ.無謀。ものごとに、かんがへなきをいふ。

むほん ナ.謀反。ほんぎやく、きみにそむきて、くにをかたぶけんとするをいふ。平家「(今年、いかなる心にて、むほんをハ、おもたたれけるぞといひに)」

むほんしんわう ナ.無品親王。くらゐなきみこ。新続古「(無品親王、伏見に侍りしころ、萩のあしき、ともしどに、蝶子をつけてたてまつるとて)」

むま ナ.馬。獣の名。うまに同じ。和名「(馬和名、無萬)」

むまかひ ナ.馬飼。うまかひに同じ。和名「(馬人、和名、無萬加比)」

むまき ナ.牧。うまきに同じ。和名「(牧、無萬岐)」

むまきぬ ナ.馬衣。うまの、せよりもりにかけておほふところも。和名「(馬衣云々、和名、無萬岐沼)」

むまご ナ.孫。うまごに同じ。和名「(孫、和名、無萬古)」

むまごめひ ナ.離孫女。むひのむすめ。和名「(離孫云々、姪之子為離孫、和名、無萬古女比)」

むまごひ ナ.離孫男。むひのむすこ。和名「(離孫云々、姪之子為離孫、男古比)」

むまぜみ ナ.馬蟬。蟬の一種にて、くろくしておほきなるもの。和名「(馬蜩、一名、蚱蟬、和名、無萬世美)」

むまびる ナ.馬蛭。蛭の一種にて、ことにおほきなるもの。和名「(馬蛭、一名、馬蟥、和名、無萬比流、蛭之大也)」

むまや ナ.駅。うまやに同じ。和名「(駅、和名、無萬夜、牛馬舎也)」

むみ ナ.無味。あぢなきをいふ。

むみやうね ナ.無名異。鉱の名。あかくして、あをみある土のごときもの。石見、佐渡などよりいだし、薬となす。

むむき ナ.麦。むぎに同じ。和名「(麦、和名、無木)」

むむそ ソ.半々。くちをふさぎてものをいふこと。

むめ ナ.梅。うめに同じ。和名「(梅、和名、無米)」

むもれぎ ナ.埋木。うもれぎに同じ。

むやう ナ.無益。ものの用なきをいふ。

むやく ナ.無益。むやうに同じ。

むやくし サ.ブ.無益。やくなきさまなり。

むやひ ナ.舫。ふねとふねとをつなぎて、むすびあはすこと。夫木「(なみのうへに、くさす小舟の、むやひして、月をうけたり、いそのまとしも)」

むやむやのせき ナ.有耶無耶関。出羽の名所。陸奥とのさかひにありといふ。夫木「(ものゝふの、いづさいるさに、むやむやのせき)」

むゆか ナ.六日。むいか。

むよく ナ.無欲。よくなきをいふ。

むら ナ.村。むれ。ものの、ひとつにあつまりてあるをいふ。

むら ナ.群。むれ。ひとつにあつまりてあるもの。

むらい ナ.無礼。ぶれい。空穂物語「(一夜のむらいのありもやしけん)」

むらかみ ワ.ヒトリ.回.群。むらがるに同じ。

むらがる ワ.ヒトリ.回.群集。ひとつにむれてあつまる。

むらがりあつまる ワ.ヒトリ.回.群集。むれてあつまる。ひとつによりあつまる。

さらえる　さらえる　さらえる　

むりよく　ナ。無力。ちからなく、いきほひなきをいふ。

むる　ワ。ヒトリ。シ二。群。ひとつにあつまる。ひとつにつどふ。この語は、地方によりては、むれるを下一段にいふ。古事記（むらとりの、わが群いなば、ひけとりの、わがひけいなば）古今（おもふどち、春の山辺にうちむれて、そこともいはぬ、たびねしてしが）

むるゐ　ナ。無類。たぐふべきもののなきをいふ。

むる　ワ。ヒトリ。シ二。蒸。いきる。ねつでる。

むれ　ナ。群。ひとつによりあつまれるをいふ。

むれだつ　ワ。ヒトリ。四。群立。むれてたつ。後撰（女郎花、草村ごとに、むれだつは、誰まつむしの、聲にまよふぞ）

むれらかに　ソ。群。ひとつにあつまりて。おほさうどひて。宇拾九（物は、むれらかに得さることぞよけれ、細々に得んをのぞまふ見ろき事なりといひて）

むれる　ワ。ヒトリ。シ一。群。むるを見るべし。

むれる　ワ。ヒトリ。シ二。蒸。いきる。ねつでる。

むれゐる　ワ。ヒトリ。カ一。群居。むれてゐる。貫之集（人の家に、まれうどおほく来て、柳桜の下にむれゐて）

むろ　ナ。室。つちをもてぬりめぐらしたるいへ。いへのなかのこもりかなるところ。また、ただ、いへをもいふ。万十一（新室の、かべくさかりに、到ましつきね、草のごと、よりあふをとめは、君がまにまに）催馬楽（桜花、こゝろやすくも、みゆるかな、むろまれ風も、ふらじとおもへば）（さて、人のむろにいきされば、檜の木を、人のたくひ）和名（室和名、無呂）

むろ　ナ。榁。木の名。葉の状、ひのきに似て、檜の木のごとくひらます。また、枝ほそくして、下にむきて垂る。この木、夏のはじめ、莟をいだして、うすわうき花さく。和名（榁、一名、河柳、和名、無呂）

むろあぢ　ナ。室鰺。魚の名。鰺の一種、おほきなるものにて、常に、蒲魚などにするもの。この魚、播磨の室津におほく、とるゝゆゑにかくよべり。

むろくしき　ナ。無六鐵。そつべきぞもおほねただひ、すべて、ものごとにふれてさはりなきをいふ。

むろざき　ナ。室咲。むろにいれてさかせたるはな。

むろつみ　ナ。館。たちに同じ。

むろのき　ナ。榁。木の名。むろに同じ。新六（時雨れど、秋の色さへ、離磯には、緑かはらず、たてるむろの木）

むろのわせ　ナ。室早稲。むろにおほしたてたるわせ。拾遺愚草（たねまきし、むろのわせ、おひにけり、おりたつ田子の、雨もまちこに）

むろのやしま　ナ。室八島。かまど。陰陽家に、民の、竈をさらひて、来年の吉凶をうらなふ事ありて、その時の竈をいふとぞ。散木（ならひする、むろのやしまの、ことひには、みのなりそでん、ほどぞしるき）

むろまち　ナ。室町。地の名。京都にあり。後亀山天皇の天授四年、足利義満、室町御所をかまへしよりこなた、足利将軍の代を、室町ともよびならへり。

むろんに　ソ。無論。ろんなう。もちろん。もとより。

むろや　ナ。室屋。むろに同じ。神武紀（忍坂の、於朋務廬夜に、人さはに、いりをりとも、人さはに、来いりをりとも）古事記（合於其旣室）

むゐ　ナ。無位。いまだくらゐなきをいふ。

むゐ　ナ。無為。おだやかにて、することもなきをいふ。

ん

ん　テ。メニナ。未来をいふむの音便。むを見るべし。

ん　テ。メスケ。ボ。うちけしのず、また、ぬの音便にいふ。

はなにかかりていづるこゑにて、つねは、む、ぬ、に、うなどのこゑのおんびんにもちふ。くちびるはふれていづるひとつのこゑにて、ムとんとをかさなれるこゑなり。

め

め　ナ。女。妻。をんな。また、ひとのつまとなりたるをんな。後撰（さざめさるめも持らず、ひとりふしをのみすと）竹取（たけとりのおきな云々、めのおうなにあづけてやしなはす）和名（妻和名、米）

め　ナ。海布。うみくさのくふべきものをすべていふ。にぎめ、あらめなど。伊勢（世を海の、蜑とぞ人を、みるからは、めくはせよとも、たのまるゝ哉）

め　ナ。芽。草木の、葉の、まづはもえいでたるもの。

め　ナ。目。いきもののかほにあるものにて、もののいろ、もののかたちをみわくるもの。和泉式部集（なかなかは、なかなかめかねつ、かへしてきる、まめのみさめつゝ）宇拾四（これをみつけさとく人なし、稀有のさきらなと、目をむなしうみつけたるほどは）

め　ナ。目。あな。ひま。すきま。散木（おもはんと、たのめし事は、あみのめは、たまらぬ風の、心なりけり）

め　ナ。目。みえ。めはみらるゝとき。次草（かかるめみんとおもひかけけんやとあやしがる）

め　ナ。目。めもりはつけたるしるし。はかりを知りせくるところ。源氏（つゆをおもみ、たえぬばかりの、おもやぎは、いくめかけたる、こがねなるらん）

め　ナ。目。とおめ。ひらくべきところ。堀川次郎（野風のみ、さびしき旅の、草枕、やどりゆひめは、蟋蟀なく）

め　ツ。目。もののあどりをかぞふるはいふことなむ。

め　テ。メスケ。未来をいふむ。もちふる詞のむのそむらきなり。むを、どまれ、やかなどはかかるとき、めとなる。古今（花の木は、あらざらめども、さきはけり、ふりしこのみ、なる時もがな）同（うつしうゑば、秋なきときや、さかざらん、花こそちらめ、根さへかれめや）同（やましなの、おとはのやまの、音にだに、ひとのしるべく、わがこひめかも）

めあか　ナ。目垢。めよりいづるあかのこりたるもの。

めあかし　ナ。目證。ぬすびとなどをさらへるとき、それをみあらはすべく、ぬすびとのごとくしたるもの。

めあき　ナ。目明。めのみゆるひと。めくらはむかへていふことなり。今川大双紙（読書ないとす事云々、さりながら、めあき、めくらによりてかはるべし）

めあざみ　ナ。女薊。草の名。かまな。葉のさま、茎のさま、花のさま、すべて、あざみに似て、ただ、葉のやせたると、茎に、刺なきとのみ、あざみと異なり。

めあて　ナ。目當。みて、あてとするもの。太閤記三（すゝみくる勢をばうち見て、松田が旗本をめあてはつるべしといはれしひきてぞみえける）

めあはす　サ。カケ。シ二。妻。つまのたんなをせさす。この語は、地方によりては、めあはせるを下一段にいふ。和名（妻和名、齊也、與夫齊體也、又用美妻嫁、一云米阿波須）

めあはせる　サ。カケ。ヒトリ。シ一。妻。めあはすを見るべし。

めい　ケ。命。いのち。左傳（つこものの名は、命を造り、兄弟、ことごとく、のちの名をかざりなくほろびそこて）

めい　ナ。命。おほせ。さしず。いひつけ。

めい　ナ。銘。ものにしるしつけたるもじ。ものに、きざみつけたるもじ。拾玉（このくにの、なにれのうらの、おほでらの、かくのめいこそ、まことなりけれ）

めいあん　ナ。名案。よきかんがへ。よきおもひつき。

めいうん　ナ。命運。いのち。めぐりあはせ。

めいか　ナ。名家。よきいへ。きこえたかきいへ。

めいかう　ナ。名香。ちんかうのよきもの。

めいぎ　ナ。名義。なのこころ。となへのすぢ。

めいきやう　ナ。明鏡。くもりなきかゞみ。

めいく　ナ。名句。よきことば。すぐれたることば。

めいくさ　ナ。女軍。よわきいくさ。神武紀（女軍）

めいくん　ナ。明君。かしこききみ。すぐれたるきみ。

めいげつ　ナ。明月。くもりなきつき。あきのこのつき。

めいげつ　ナ。明月。名香の名。ぢんの一種なり。

めいげん　ナ。鳴弦。つるうちを見るべし。

めいさいに　ソ。明細。こまやかに。つまびらかに。

めいさく　ナ。名作。よくつくりたるもの。

めいさん　ナ。名産。きこえたるくにづもの。

めいし　ナ。名刺。なふだ。なのふだ。みやうぶ。

めいし　ナ。名詞。なことばを見るべし。

めいしん　ナ。名臣。かしこきおみ。すぐれたるけらい。

めいじん　ナ。名人。わざはすぐれたるひと。

めいしや　ナ。眼醫者。めのやまひをなほすくすし。

めいしやう　ナ。名匠。ひじり。みちにすぐれたるひと。

めいしゆ　ナ。銘酒。そうめいしゆのたぐひのさけ。

めいしよ　ナ。名所。などころ。なのきこえたるところ。

めいしよう　ナ。名称。な。よびな。となへ。

めいず　サ。カケ。カ。命。おほす。いひつく。さしづす。

めいすう　ナ。命數。いのちのかぎり。うんのなりゆき。

めいせん　ナ。銘仙。織物の名。つむぎのたぐひ。

めいそう　ナ。名僧。かしこきそう。すぐれたるそう。

めいてい　ナ。酩酊。さけによくゑひたるをいふ。
めいど　ナ。冥途。よみぢ。なきひとのゆくところ。十訓抄一（冥途あり、代語を論ぜず、罪なきを主とす）
めいどう　ナ。鳴動。なりひびきてさわぐをいふ。
めいにち　ナ。命日。きにち。そのひとのみまかりしひ。
めいばう　ナ。名望。よせの、おもくきこゆるをいふ。
めいはく　ナ。明白。あきらかにて、うたがひなきをいふ。
めいほふ　ナ。名法。よきのり。よきおきて。
めいひつ　ナ。名筆。よきふで。よきかきもの。
めいふ　ナ。冥府。みやうくわんのゐるところ。
めいぶつ　ナ。名物。くにつもの。そこになだたるもの。
めいぶん　ナ。名分。めいぎのぶん。めいぎのほど。
めいぼ　ナ。名簿。みやうぶ。なづき。詳開五（侍の名簿のそこばくは、能いうくよみとかきさりけり）
めいぼく　ナ。名木。よききき。すぐれたるざいもく。
めいぼく　ナ。面目。めんぼく。宇楼下（大臣どもの、この國の爲の、かぎりなきめいぼくをひろめんと）源少女（おしのごひさまふを御師のてうち、うれしく、めいぼくありと思へり）同夕霧（強てほちてかへりいらん事のめいぼくなく、佛も、つらく見えさまふべき事を、心をおこしていのり申しさまふ）
めいぼくさ　ナ。目疣草。草の名。いぼくさに同じ。
めいまう　ナ。迷妄。まよひ。まどひ。
めいめいに　ソ。銘々。おのおの。ひとつ〳〵。末森記（御ことば、めい〳〵に御かけさぶらひて）

めいめいぼん　ナ。銘々盆。めい〳〵にそなふるをしき。
めいもく　ナ。瞑目。めをふさぐをいふ。
めいやく　ソ。盟約。ちかひ。ちぎり。やくそく。
めいよ　ナ。名譽。ほまれ。よききこえをおふをいふ。
めいり　ナ。名利。みやうりに同じ。
めいれい　ナ。命令。おほせ。さしづ。いひつけ。
めいれう　ナ。明瞭。あきらかなるをいふ。
めいろ　ナ。目色。めつき。めもと。めくばせ。
めいわう　ナ。明王。かしこききみ。すぐれたるみかど。源花宴（めいわうの御世、四代をなんみたてまつりぬれど）
めいわく　ナ。迷惑。まよひまどふをいふ。こまるくるしむをいふ。平治五（兵衛佐を助けさせ給へかしとなげき給へば、重盛も迷惑せられけるが、涙をおさへて）
めいわくがる　ワ。ヒトリ。四。迷惑。めいわくにおもふ。
めう　ナ。妙。たへなるをいふ。すぐれてよきをいふ。
めうが　ナ。蘘荷。野菜の名。めがに同じ。
めうががひ　ナ。蘘荷貝。貝の名。にしのたぐひの貝にて、ふさつつきたる状など、すこし、蘘荷のかたちに似たり。
めうがさう　ナ。蘘荷草。草の名。高さ一二尺ばかり、葉の状など、すべて、めうがのごとし。夏のはじめ、葉ないさし、きろくちひさき花さきて、穂の状をなす。

めうきち　ナ。名吉。魚名。なよしをいふ。伊勢、尾張にて、

めうけい　ナ。妙計。よきかんがへ。よきもくろみ。
めうけん　ナ。妙見。菩薩の名。北辰をまつりたるもの。
めうし　ナ。牝牛。をんなのうし。宇拾二十（賀茂のまつりの日、まめざうにて、たふさぎばかりをして、からさけ、太刀にさきて、やせたる女牛にのりて）
めうじ　ナ。苗字。みやうじに同じ。
めうだう　ナ。馬道。めだう。十訓一（太后宮にまゐりて、めうだうにたたずみけるに、うちより、人の音のあきさしてきこえければ、さりげなくひきとられて）
めうちひさく　ワ。ヒトリ。四。目をあぐ。枕草二十（さうと、目うちひさきてよむだらにも、いとたふとし）
めうらん　ナ。水鳥の名。にほをいふ。遠江にて、
めうつし　ナ。目移。これをみ、それをみて、めをうつすをいふ。源柱槙（きさふちもなくやつして云々、玉をみがけるめうつしは、ところもさまらねど）狹衣二（なのめならぬめうつしはれ、されなからも、めざましく、なさけなきところぞみえさせまつりて）
めうつり　ナ。目移。みるめの、さま〴〵にかはるをいふ。榮花しで（としごろ、堀川のさとりのありさま、御めうつりは、まづおぼしいでらるべし）
めうない　ナ。水鳥の名。にほをいふ。信濃にて、
めうほふ　ナ。妙法。たへなるみち。くしびなるおしへ。
めうへ　ナ。目上。親などの、それよりうへにたつひと。
めうやく　ナ。妙藥。きくことのたへなるくすり。

めうよう　ナ。妙用。たへにくすしきはたらき。
めうれい　ナ。妙齡。としさかりなるよはひ。
めおぼえ　ナ。目覺。めじるし。みさすれぬしるし。
めおや　ナ。女親。もゝ。をんなおや。落窪一（めおやのおもせはいさにむひなき身とまりて）
めが　ナ。蘘荷。野菜の名。めうが。形、しもみに似て、葉ひろく、莖なかやらなり。夏のすゑ、株のめぐりに、竹の子に似たる芽をいだして、花さく。香、しもみに似てかうばし。和名（蘘荷和名米加）
めか　ナ。牝鹿。をんなのしか。和名（牝鹿日咫和名米加）
めかい　ナ。目搔。猿の名。めごをいふ。東國にて、
めかかう　ナ。目赤。あかまふさをひきさげて、めをあかくあらはして、ちごをおどすたはぶれ。大鏡五（たかうなのかはを、男のおよびごとにいれて、めかかうして、ちごをおどせば、顔あかめて、ゆしゆうおちさる）
めかかやく　ワ。ヒトリ。四。目耀。めひかる。字鏡（瞬目加々也久）
めかく　ワ。カナ。シニ。目搔。めをつけてねらふ。
めかくし　ナ。目隱。すがたをみせぬやうにするをいふなるべし。今物語（ひじりの屋なれば、めかくしはふけきいでて、くるまをもやくやくせけるに）
めかくし　ナ。目隠。遊戯の名。一人の小兒、手拭などにて、目をゆひふさぎて、他人をおひまはすたはぶれ。
めかけ　ナ。妾。かけめ。てかけ。をんなめ。
めかご　ナ。目籠。竹の名。ちひさきざる。

めかし　ソ。ダ。サ。フ。の如。めきてみゆ。源紅葉賀（そこなくくみるまひけんひとなる、ものめかしさまひて）
めかしてく　ソ。目貫。めすなどく。盛衰卅（将門、なりふし、髪をみださして、くしげづりけるが、あまりによろこびて、大童にて云々、形繪、めかしてくみとめて）
めかず　ワ。ヒトリ。四。飾。かざる。よそほふ。
めかた　ナ。目方。はかりにかかるおもり。
めかつら　ソ。桂。かつらに同じ。和名（桂、一名、楓和名女加豆良）
めかど　ナ。目角。めのちから。めのするどさ。まさ、ものをみるめの、するどくあるさまをいふ。
めがね　ナ。蒔料。めとすべきをんな。つまとさだむべきをんな。空穂藏開（つさなき身はありとも、おのがおねを、人にはらせしめていありなんや）
めがね　ナ。眼鏡。めにかけて、ものをみるだうぐ。
めがねし　ナ。眼鏡師。めがねをつくりひさすひと。
めがそら　ナ。牝瓦。かはらの、やのむねに、あふのけてふくもの。和名（瓦和名女乾瓦也）
めかり　ナ。甲乙。とふのおかなきとなるをいふ。
めかりうつ　ワ。ヒトリ。四。凝眸。ながしめにみる。ひとみをつけて、そるるはのそむ。遊仙窟（眦笑）
めかりぶね　ナ。海布刈舟。をとめのたぐひをとりにゆくふね。万七（いそにはたち、沖邊をみれば、藻藻刈舟、あまこぎいづらし、かもかけるみゆ）
めかる　ワ。ヒトリ。シニ。目離。めをなる。みることやむ。万三（佐保すぎて、奈良のたむけに、おく幣されは、妹を目不離、あひみしめとぞ）古今（くるとあくと、めかれぬものを、梅の花いつの人間に、うつろひぬらん）

めかるかへづ　ナ。目離蛙。さざなならず、但し、蛙は、よくねむるものなれば、ことは、めをさまして、なくをいふともいひ、まされ、短夜のねむりをもよほすをいふともいへり。夫木五（つとめすと、寐もせで、よるをあかす身は、めかる蛙の、こゑうなきこそ）
めかれ　ナ。目離。みることのやむをいふ。ひとはあはずなるをいふ。伊勢（おもへども、身をしわけねば、めかれせぬ、雪のつもるぞ、わがこころなる）
めぎ　ナ。女木。きの、をんなだちたるもの。
めきき　ナ。目利。ものの、よしあし、まされ、まことなるとさそならぬとを、みわくるをいふ。
めきたなし　サ。ヒ。目穢。みることきたなし。妊婦はいふことなり。妊婦は、穢色をみすれば、その色かかるといふ事あるよりいへり。散木（ささそむる、萩たちくせ、女郎花、きのえをすいき、めきたなき）
めぎみ　ナ。女君。ひめぎみ。まさ、いへとうじ。狹衣一（この隣の駿河のめぎみこそ、もののなさけありて、いまんことならんといひしか、いひはやらん）
めく　ナクロ。ロ。四。の如。めく。のごとくあり。拾玉（外面なる、楢の木陰は、みくろひて、まださき秋めく、夕月夜かな）
めぐい　ナ。愛憐。めぐしを見るべし。

めく

めくぎ　ナ。目釘。かたなのつかをとむるくぎ。
めぐさ　ナ。目草。草の名。もつかに同じ。
めぐし　サ。ヒ。愛憐。いとほし。かなし。あはれなり。この語は、羽前、羽後などにて、今もめぐいといふ。万十八（父母を、みれば、たふとし、妻子みれば、めぐしうつくし）
めぐす　ワ。ヒトリ。サ。交合。まぐはひするをいふ。上総にて。
めぐすり　ナ。目薬。めのやまひをなほすくすり。
めくせ　ナ。目瘢。めのくせ。まみ。めは、ひとくせのさきあるをいふ。宇拾十（我この石をとりて、後にめくせあるものをぞみつるとおもひて）
めくそ　ナ。目屎。めのあぶら。めよりいづるきたなきもの。
めくちはだかる　ワ。ヒトリ。四。目口開。あきれて、めもくちもあくをいふ。宇拾廿（殿上人、皆見てこれをきくに、あさましく、目口はだかりておぼゆ）
めくばす　ワ。ヒトリ。二。眴。めくはせ。めにてそのこころをしらす。伊勢（世をうみの、あまとし人を、みるからに、めくはせよとも、たのまるるかな）源若（あなかまとめくはせたまひて）
めくはせ　ナ。眴。めくばすこと。そのこころをしらするをいふ。十訓二（築地めくはせしけれど、そのときぞ、この語のためにさせけるを心得て）
めくもり　ナ。目眩。めをくもりてみるをいふ。

めぐみ　ナ。恵。あはれみ。いつくしみ。古今序（ひろき御めぐみのかげ、筑波山の麓よりも、しげくおはしまして）大鏡（神仏のめぐみ、かうむれるに似たり）
めぐみのつゆ　ナ。恵露。めぐみをつゆにたとへいふ。
めぐむ　ワ。カ。四。恵。あはれむ。いつくしむ。なさけをかく。
めぐむ　ワ。ヒトリ。四。萌。くさきのめいづ。風雅（春雨に、めぐむ柳の、浅緑、かつみるうちも、いろぞそひゆく）
めくら　ナ。盲。めしひ。めのみえぬひと。
めくらかす　ワ。カ。四。眩。めくらます。
めくらなぎ　ナ。魚の名。
めくらぶみ　ナ。盲文。
めぐらし　ナ。廻。
めぐらしぶみ　ナ。廻文。
めくらじま　ナ。盲縞。織物の名。

めくらごよみ　ナ。盲暦。
めくらむ　ナ。
めぐらす　ワ。カ。四。廻。めぐるやうにす。
めくらべ　ナ。目比。
めぐり　ナ。廻。まはり。めぐること。
めぐりあはせ　ナ。廻合。まはりあはせ。
めぐりあふ　ワ。ヒトリ。四。廻合。めぐりてあふ。

めぐ　めさ　めし

めぐりどほ　ナ。廻遠。
めぐりみづ　ナ。曲水。めぐりみづのとよのあかり。
めぐりみづのとよのあかり　ナ。曲水宴。公事の名。三月の上の巳の日におこなはる。
めぐる　ワ。ヒトリ。四。廻。まはる。
めぐる　ワ。ヒトリ。四。巡。めぐりゆく。
めくるめく　ワ。ヒトリ。四。眩。めまひす。
めげかんりん　ナ。
めげる　ワ。ヒトリ。下二。
めこ　ナ。妻子。めとこ。

めさき　ナ。目先。
めざく　ナ。
めざし　ナ。目刺。
めざす　ワ。カ。四。目指。
めざし　ナ。
めざと　ナ。

めざとし　サ。ヒ。目聡。
めざまし　サ。ヒ。
めざましがる　ワ。ヒトリ。四。
めざましくさ　ナ。
めざむ　ワ。ヒトリ。下二。目覚。
めされる　ワ。
めし　ナ。召。
めし　ナ。食飯。
めしあがりもの　ナ。

めしあがる ワ.タ.ロ.自.上。きこしめす。くひさるふ。
めしあぐ ワ.カ.シ.ニ.召.上。めしあぐる。とりのぼせさるふ。
めしあはせ ナ.召合。すまひのもじのたかはせ。七月二十八日にある事なり。内きたを見合すべし。
めしいだす ワ.カ.ロ.召.出。よびいだしさるふ。また、めして、つかさにつく。清輔抄（臨時祭に四位陪従をいみさなめしいだされて、殿殿になまりして）
めしいづ ワ.カ.シ.ニ.召.出。めしいだすに同じ。源夕顔（右近をめしいでて）
めしいる ワ.カ.シ.ニ.召.入。よびいれさるふ。源竹川（あけくれ云々、侍従もけぢかうめしいれて）
めしうど ナ.召人。めしうるひと。をんなめのたぐひ。栄花後悔（おほくのめしうどきもあつらるほどにさぶらひければ）蜻蛉（大殿、とばどもに、御めしうどの内侍のすけのおぼえ、たゞ、塗の北の方にて）
めしうと ナ.囚人。ゆるうとに同じ。
めしか ナ.目鹿。鹿の名。めびのちびきもの。
めしこむ ワ.カ.シ.ニ.召籠。おしとりていでぬやうにする。宇拾ヨ（たしかにめしこめて警衛せよ）
めしとめ ナ.召留。おしとめていでぬやうにすること。著聞九（弓矢をとる身の、かかる目にあひて、めしとめらるるは）
めしどやう ナ.召放。めしぶみに同じ。

めした ナ.目下。こなどの、これより劣るにたつひと。
めしたき ナ.飯炊。くりや。おものをかしぐひと。
めしつかひ ナ.召仕。めしつかふひと。また、なんなめのたとひ。
めしつかふ ワ.カ.ロ.召使。よびとりてつかふ。源玉鬘（おまへちかくめしつかはせさるまて）
めしつぎ ナ.召次。めしつぎのとねり。また、院の女房にて、とりつぎなどをするもの。宇拾ヨ（ちかうめしつかふ侍、御出居へ参らせさまきといひければ、よろこびて参りにけり。このめしつぎしつる侍）
めしつぎ ナ.飯椹。いひびつ。おものをいるるうつは。
めしつぎどころ ナ.召次所。めしつぎの居るところ。
めしつぶ ナ.飯粒。いひぼ。めしのつぶ。
めしつぎとねり ナ.召次舎人。とりつぎなどをするとねり。源宿木（めしつぎとねりなどの中に）
めしとる ワ.カ.ロ.召捕。めしとる。おほせにてとらふ。太鏡（兵をつかはしてめしとらしめ）

めしのつづみ ナ.召鼓。公事根源（閑門などありて、めしのつづみをうちしむれば、御居、列して、門に入る）
めしはなつ ワ.カ.タ.召放。そのひとのみをさなびいだす。源梅枝（このきみ、めしはなちてかたらひさまふ）
めしびつ ナ.飯櫃。いひびつ。おものをいるるうつは。
めしひ ナ.盲。めくら。めのまひみるひと。和名（盲和名米之比）
めしぶみ ナ.召文。ひとをめす状をいふ。庭訓往来
めしもの ナ.召物。めしさるふもの。きもの。
めしもり ナ.飯盛。
めしや ナ.飯屋。
めします ワ.カ.シ.ニ.召.

めしとり ナ.貴賤。さなじりに同じ。
めしるし ナ.目標。めのさるし。みるときのさるし。
めしろ ナ.目代。もくだいに見るべし。
めじろ ナ.眼白。鳥の名。鶯に似て、背の色青みあり、眼のめぐりに、まろき輪あり。
めしるし ナ.飯燎。いひけ。おものをもる。
めす ナ.雌牝。鳥、獣、魚、虫などにいふ。
めす ワ.カ.ロ.召.食.飲.着.乗。たやすきひとの、それをのたまふ。万三（ひんがしの）
めす ワ.カ.ロ.見。みそなはす。万十
めす ワ.カ.ロ.召.任。そのつかさになす。古今
めす ワ.カ.ロ.召.食。万六十（宮庭の水郷の園を）
めずりなます ナ.眼膜腺。

めた ナ.目。
めだか ナ.目高。魚の名。
めたけ ナ.女竹。たけの名。
めだし ナ.芽出。
めだたし ナ.目立。
めたき ナ.目焚。

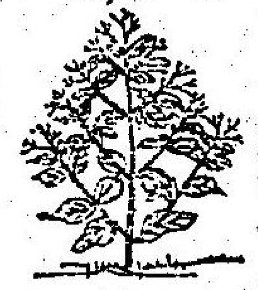
めだたし サ.フ.目立。めざましく見ゆ。
めだつ ワ.タ.ロ.目立。
めだま ナ.目玉。
めたり ナ.目垂。
めだもの ナ.目高物。
めつかひ ナ.目遣。めの、ものをみるさまをいふ。
めつかち ナ.片目。
めつき ナ.目付。

めつき ナ目付。めの、ものをみるありさま。
めつき ナ滅金。銅などに、金銀をぬりて焼きつけたるもの。その仕方によりて、さまざまの名あり。
めつき ナ穴一。あなうちをいふ。東京にて
めつきやくす ワサカ滅却。ほろぼす。つぶす。
めつきり ソ目切。ひときは。ひときはきはだちて。
めつく ワカ二目付。めをつけてみる。源氏(倶生)なるびらびらとこのかたには、さりげなくてめつけよ。
めつけ ナ目附。武家の役の名。かんさつ。國郡のありさま、諸人の挙動などを監察して具状するもの。
めつこ ナ愛子。めづるこ。万葉(母にまうりつや、目豆子のとじ、父にまうりつや、みめづこのとじ)
めつさうな ナ滅相。ことのほかなり。こちたいなり。
めつす ワカ滅。つぶす。ほろぼす。
めつたに ソ濫多。めさと。みだりに。ようしやなく。
めつたなし ナ濫多無。よるべなきものなし。
めつたむしやうに ソ濫多無性。たゞむしやうにしたがふ。
めつぞ ナ目瞑。めのひきつりたるひと。
めつたう ナ滅亡。ほろぶることをいふ。盛衰(たまく、盛衰八、蒸…)
ま學するところは、まさ。頸宰のらべ、天下の滅亡ら
めつぱふかい ナ滅法界。むちやくちやにかはる同じ。
めつぷり ナ目張。たびたびにらみあはせをいふ。
めつぶし ナ目潰。からきのめそうちつぶすもの。砂灰なきを、紙に包みて、飛礫のごとくなげるものなり。

めつぶかる ナ目潰。めつぶらに同じ。
めつぶる ワヒトリシ二目瞑。めとぢる。宇拾せ(みるまにお坂ゐるそらなたて、目つぶれたる女人なき云々、何せんかせんとのりあげれど)
めつぼ ナ目壺。めのあな。ひきみのあるところ。
めつめんにち ナ滅門日。ひさる日。暦の上にていみなさて、この日はつしまざれば悪しとていや。
めづあり ナ目頼。みつもり。みるのみのかんぐ。
めづらかなり サ珍。めづらし。源氏(このおましどころの、いとめづらかなるもかさじけなくて)
めづらかに ソ珍。めづらしく。伊勢(女、京の人は、めづらかにやおぼえけん、せちに思ふ心なんありける)
めづらし サフ珍。めづべきあり。つねになくてまれなり。よのつねにあらず。この頃は今は、めづらしいとにいなそへて云々。万八(布勢見と、せがおもふ君は、秋山の、初紅葉に似てこそありけれ)拾遺(春くれば、山田なまづせうちみる、いそのみの、めづらしげなき、山田なれども)諏訪紀(希見此云梅豆邏志)
めづらしがる ワカヒ二珍。めづらしと見る。
めづらしがる ワカヒ二珍。めづらしとおもふ。源頼(物と思ひさまひて云々、市国の御かざみまありさまへれば、ひとびとめづらしがりみたてまつる)
めづらしびと ナ珍人。めづらしきひと。まれにきたるひと。空穂記(すなはち、めづらしびとなるもさうとこそ、こは、これかれもしらえけるは)
めづらしむ ワカヒ珍。めづらしとおもふ。住吉(ひとめづらしみやる中に云々、なほしのこゝちして、いとむつましく、あはれにこそなどいへば)
めづらどり ナ珍鳥。鳥の名。ほとゝぎすの異名。夫木(歌人の、むれても遊ぶ、めづらどり)
めづらなり サ珍。めづらし。夫木(時人の、むれてもにや、めづらなり)
めづらに ソ珍。めづらしく。めづらかに。
めて ナ馬手。たづなをとるかたの手。みぎのかたの手。宇拾(かためおて、めてうしろさまにして)
めでくつがへる ワヒトリ愛覆。ひどくめづ。
めでさし ナ馬手差。めてにさすたんとう。
めでしる ワヒトリシ二愛痴。めでておろかになる。空穂(仲忠めでしれて、大将のみづけうまつるめでるを、うちなきて、ものもまはめでる)
めでたい サ可賀。めでたし。よろこばし。
めでたし サヒ可愛可賀。めづべし。うるはし。よろこばし。古今(のこりなく、ちるぞめでたき、さくらばな、ありて世の中、はてのうければ)栄花物語(大将はなちとのくだりたまはず、いとめでたし)
めでのさかりに ソ愛盛。さかりにめでてやすむ。万葉(たかひろる日のみかど、天下さ、)

なしさまひし、家の子と、えらびさまひて)
めでさわぐ ワヒトリ愛騒。めでてもてさわぐ。伊勢(家なかきてかへりてやりけり、めできさわいけり)
めでなやむ ワヒトリ可愛。めでてあわぐ。源氏(みるに、めでやさて、何事もみなまさるまじう)
めでゆする ワカ二愛揺。めでてもてゆする。源少女(もろしきるもて迎りつつくほしげなる世の女となりとなん、そのこゑ世にめでゆすりける)
めど ナ蓍。草の名。めどぎ。草の状、よもぎのごとくまた、もろこしなるもの、栞すぐらかにて、ひとつの株より、数十本のくきたちて、秋のころ、枝の末ごとに、むらさきばみたる花さく。その茎を、易の筮木とせり。和名(菁和名、女止、以其茎為筮者也)
めど ナ蓍。草の名。たまくもしくをいふ。古今(二條の后、東宮のみやすんどころと申しける時に、めどにけづりばなさせりけるに、よまさせさまひける)
めど ナ針孔。めどほの針の
めどぎ ナ筮。著木。易のうらないにもちゐる串にて、そのかずは、五十本あり。それを、やうにひきさき、さうらうさうさとして、卦の名をあらはすもの。
めどぎ ナ筮。めどに同じ。
めどぎ ナ蓍萩。草の名。めどに同じ。(蒙堅女之久佐、又女止久佐)
めどほり ナ目通。めざきめのまへ。かぼのまへ。

めときる ワヒトリ目照。めとなれすてあり。源少女(むなし、卿目をもりさまひしをめのすなるを)
めどり ナ雌鳥。をんなのとり。和名(雌和名米止利)
めとりぐくり ナ目取夾纈。くくりそめの、ところどころを、らくりかさねもの、大和(うきのもなびけば、めとりぐくりの狩衣、うるはしきなども)
めどりぞ ナ雌鳥羽。めどりのつばさ。鵲羽は、そのつばさを、左の方にちり、右の方へむけて拾ふなり。
めなう ナ瑪瑙。玉の名。色は、あかきもの、まろきもの、めなきものあり。紅白きらなるなるもありて、はしりさきほれり。和名(瑪瑙俗音女奈字)
めなし ナ無目。めあきのこと。
めなしかつま ナ無目籠。めあさなく、かたくあみたるかごを、いふ。
めなもみ ナ豨薟。草の名。茎、すぐすぐとして、枝は、みつの種を、花をやけり、秋のころ、黄いろなる小さき花さく。徒然草(めなもみといふ草あり)



めならぶ ワカ二日雙。つねにみる。源氏(ありしょうにへさりけりもの、かくらしめなくありしよりも、あらざることをこそ、ありしより...)
めならす ワカ二目馴。つねにみる。めなれて、めならす人々の、今いとてゆきさんれ給ふ
めならぶ ワヒトリ目雙。めのまへにみえならぶ、みつらぶるべくならびあり。徒然草(いたせん、つねきもの)

めならべ ナ目雙。めならぶ人々、うるわしけり。伊豆、八丈島まで
めなる ワヒトリ目馴。めにみなる。つねにみる。源氏(紅葉賀(これは、たゞめなれぬさまなれ...なんとて))
めなれぎ ナ目馴木。みなれたる木。源(彼方のきし、岸の御心。目馴木のめぎれてたかる時ものな)
めにあまる ワヒトリ目余。みるにたへず。源氏(ひとりにかかる)
めにかかる ワヒトリ目懸。みるにかかる。源氏(…)
めにかく ワカ二目懸。みる。めにふれしむ。みるこそせけす。西園寺殿百首(ひとさしの、そらとの蛍を)
めにたつ ワヒトリ目立。めだつに同じ。玉葉(徒然とみえるもの、めにたつ)
めにまる ナ目卜る。めでまさる。みるにまさる。
めにつく ワヒトリ目付。めにつる。あまたになく、みるにたえぬ。
めにとまる ワヒトリ目留。めとまる。めにつく。
めにもなる ナ目穴。元真集(目はつくれ、すべりなけれど)
めぬき ナ目貫。めくぎのかざりにつくる。かなもの。まさ、もののすえれたるところ。拾遺(白銀の、めぬきの太刀を、さげはきて、奈良の都を、ねるは誰が子ぞ)
めぬけ ナ目脱。魚の名。めもを、いふ。陸奥、南部まで。

めのいとま　ナ。目暇。めをつかふをいふ。また、めをつかはぬときをいふ。源若菜(かたぶみみるまなる、目のいとまいりて、念仏もけだいするやうは、やくなうてなん)
めのおと　ナ。乳母。むかしはかたりて、おごりは、たはぶれをもくむるをんな)和名(乳母、日本紀師説女乃於止、言妻妹也)
めのこ　ナ。女子。をんなのこ。伊勢(その家のめのこどもいでて、うきみるの、彼はよせられさるひろひて)
めのこご　ナ。女児。めのこは同じ。
めのこざん　ナ。目子算。ものをかぞふるに、そろばんをもちひずして、ひとつひとつはかぞふるをいふ。
めのさきに　ナ。目前。めのまへ。たちまち。
めのたま　ナ。目玉。めだま。まなこ。ひとみ。
めのと　ナ。乳母。めのおとは同じ。後拾(おぼつかなくも、思ひける哉ちもなくて、博士の家の、めのとせんとは)和名(乳母、日本紀師説女乃於止、云々乳母、和名、米乃止)
めのとご　ナ。乳母子。めのとのこ。須(みさてまつる人もなかりけれど、侍従などいひし御めのとごのみこそ、年頃、あくがれいでぬものにてさぶらひつれど)
めのまへ　ナ。目前。まのあたり。古今(この世にも、早くなりなん、目の前に、つれなき人を、昔とおもはん)
めのわらは　ナ。女童。をんなのわらは。源明石(めのわらはの、いときなう侍りしより、思ふところ侍りて)
めのわらはべ　ナ。女童部。めのわらはは同じ。詞花初(世の中の、宮とのわら、家々のめのわらはべを)

めのわらべ　ナ。女童部。めのわらは。和名(童女、女乃和良倍)
めのゑんな　ナ。美女。つまのゑんな。水鏡(その犬の子、すこしおとなびて、この宮の女をみるたびごとにほえしかば、かの宮の女いみじくおぢて)
めばえ　ナ。芽生。草木の、芽づるはもえいづるもの。
めはじき　ナ。茺蔚。草の名。葉へ、とりかぶとは似て、うすくして、毛あり。茎へ、後ぞみて、すこし、麻は似さり。この草、夏のころ、葉のあひだは、うすくむらさきなる花をひらく。和名(茺蔚、和名、女波之木)
めはそらに　ソ。目空。めはみずて。枕草一(御硯の墨すれと仰せらるるは、めはそらにのみして)
めはたき　ナ。瞬。またたきは同じ。
めはちぶんに　ソ。目八分。めよりうへは、まゆとひとしく、たかくささげてたちさるをいふ。
めはな　ナ。目鼻。めとはなと。源柏木(火取をとりよせて、殿の後はよりて、さといらけさせられ云々、こよなる灰の、目鼻はいりておぼえて、物もおぼえず)
めはや　ナ。目早。魚の名。めざくをいふ。伊勢はて。
めはやし　サ。目早。めすゞどし。みることそやし。うとくねの記(ひとみさくべくもあらず、ちひさくかきつくれど、めむらき山服もやとつましながら)
めはりぐさ　ナ。目張草。草の名。をつるなをいふ。西国はて。
めばる　ナ。目張。魚の名。身のさま、すこし、鯛は似て、うろこほそく、色まだらなり。また、眼きわめておほきく、

く、目のことくにおほきくして、みたりさるがごとし。
めひ　ナ。姪。はらからはおとなれるひとの、うみたるむすめ。和名(姪云々、兄弟之女為姪云々和名、米比)
めひも　ナ。陪紐。いれひもを見るべし。
めびる　ナ。小蒜。こびる。和名(小蒜和名、古比流、一云米比流、生薬味、可常和食之、至五月葉枯、取根噉之、甚薫臭、性辛熱者也)
めふ　ナ。馬部。うまやのとねり。巡爵(とりのくされ、馬部、吉辞はまかせて、禁獄、流罪はやと、おそれくなのき居るまひけり)
めぶかに　ソ。眼深。まぶかに。字鏡(窅、深目也、目不可)
めぶんりやう　ナ。目分量。みるのみのぶんりやう。
めぼし　サ。目欲。いちじるし。めだちてあり。
めほのぼの　サ。目仄。めあきらかならず。めほのぐらし。字鏡(瞙、目疾也、明之貝、目保乃保乃志、又目走比)
めま　ナ。牝馬。めのうま。和名(牝馬、一名、騲馬和名、米馬)
めまうけ　ナ。娶。つまのをんなをまうくるをいふ。蜻蛉花さき(御娶はなりさきまひぬ、御めまうけのほど、兄君はとまなうまはりさまひぬめり)
めまぐるし　サ。目紛。みえしらがひてせはしし。
めまじろき　ナ。瞬。まじろき。源東屋(右近めまじろきをして、かさとらしくぞおぼすらんといふも)
めまつ　ナ。雌松。まつの、をんなだちたるもの。
めまひ　ナ。眩暈。やまひなどにて、めのくるめくをいふ。
めみえ　ナ。目見。たふときひとはまみゆるをいふ。

めん　ナ。面。かほ。つら。おもて。
めん　ナ。面。おもてがたを見るべし。
めん　ナ。雌牝。をんな。鳥、獣、魚、虫などはいふ。
めんえき　ナ。免役。えだちをゆるすをいふ。
めんえつ　ナ。面謁。めみえは同じ。
めんがた　ナ。面形。おもてがたは同じ。
めんきよ　ナ。免許。ゆるし。官の、その事をするをゆるすも、師の、その藝をするをゆるすをもいふ。
めんくわい　ナ。面会。ひとはいであふをいふ。
めんくわん　ナ。免官。つかさをさるるをいふ。
めんけんす　サ。瞑眩。めくるめく。めまひす。
めんざい　ナ。米砕。こめの、うすはてくだけさるもの。
めんさう　ナ。面相。おもざし。かほいろ。かほつき。
めんざう　ナ。面識。いへの、なんどのひさきところ。
めんざんし　ナ。綿撒糸。もめんをちひさくきりて、そのいとをほぐしさるもの。薬はひさしなどして、創口などはあづるはもちふるものなり。
めんじやう　ナ。免状。めんきよのかきもの。
めんしよく　テ。面色。かほいろ。かほつき。めんさう。
めんしよく　ナ。免職。やくをやめらるるをいふ。
めんす　テ。麪子。うどん、さうめんのたぐひを、すべていふなべ。今川大双紙(人前はて、めんすくふ事云々、きさ、めんすを代、背をすぐはして、そつてくふ也)
めんず　ワ。カケ。カ。免。ゆるす。つみをゆるす。

めんせき　ナ。面積。ひろさをはかりさるもの。
めんぜん　ナ。面前。めのまへ。まのあたり。
めんだう　ナ。馬道。めだう。長門平家十(主上をば、時忠卿いざき奉りて、雪の御所のめんだうはたちさまふ)
めんだう　ナ。面倒。わづらはしきを、せづらはしきをいふ。
めんだうなり　サ。面倒。いとなし。せづらはし。
めんだうに　ソ。面倒。いとなしく。せづらはしく。
めんだん　ナ。面談。まのあたりでのさうだん。
めんつう　ナ。面桶。めしおけ。おものをもるをけ。
めんてい　ナ。面體。おもざし。かほかたち。
めんどり　ナ。面取。かどを、なだらかはけづりさるもの。
めんどり　ナ。雌鳥。めどりは同じ。
めんどりで　ナ。雌鳥羽。めどりばは同じ。平家十(二百餘人、源氏、なぎさはあがり、楯を、めんどりばはつきならべ、ここをかけよやとぞまねきける)
めんだい　ナ。目鯛。魚の名。めだひをいふ。遠江はて。
めんざう　ナ。面像。おもざし。かほかたち。
めんぴ　ナ。面皮。かほ。かほのかは。めんぼく。
めんぷ　ナ。綿布。もめんのおりもの。
めんぷ　ナ。面部。かほのうへ。かほのところ。
めんぷく　ナ。綿服。もめんのきもの。
めんぼう　ナ。面頬。かほのすべてはつくるかなめん。
めんぼう　ナ。綿帽。むぎおすきを見るべし。
めんぼく　ナ。面目。ほまれ。また、ほまれをたもちてある

をいふ。狭衣二(よろこびかしこまりてこそ侍れ、これはすぎさる面目さぶらふべきやうなし)枕草四(おなじ事をいふ、めんぼくある事なりきとて云々、おなじ事どもをいひて)空穂楼上(いさや、心などの思ふやうはよくもあらずや、御ためもめんぼくなくこそ)
めんみつに　ソ。綿密。くはしく。こまやかは。
めんめん　ナ。面々。おのおの。ひとりびとり。著聞廿(侍五人ぐせられさり、めんめんはきらめきさる中は)
めんもく　ナ。面目。めんぼくは同じ。
めんやう　ナ。綿羊。獣の名。ひつじの一種はて、角なくして、毛のやはらかはてながきもの。常は、毛をかりて、羅紗などのおりものはもちふるものなり。
めんようなる　サ。奇怪。あやし。ふしぎなり。
めんるゐ　ナ。麪類。うどん、さうめんのたぐひ。
めめぐるし　サ。目紛。めまぐるしは同じ。
めめざこ　ナ。目々雑魚。魚の名。めだかをいふ。京都はて。
めめし　サ。女々。をんならし。をゝしくなし。諸躍一(かくからりそびあて、めらしく、ぬろとなはするれ、おぼろげのこころざしはあらじ)
めもあはず　ソ。目不合。まどろまず。月詣集(霜さゆる、杉の板間の、めもあはず、誰まつ袖は、月こほるらん)
めもあやなり　サ。目も、かがやくばかりなり。空穂蔵開(めもあやなるひかりそびてなんありける)
めもあやに　ソ。目も、かがやくばかりは。著聞十六(侍ども、

めもめやにおぼえて、ゆゝしき事して）

めもきりて ツ。目もくもりて。めもくらみて。源氏（御くしかきなでつくろひ、おろしたてまつりたまひしを、おぼしいづるに、めもきりて（いみじ））

めもすまに ツ。目もやすめずに。散木（めもすまに守るたなひの、隙をなみ、とける御法の、閑もいとなし）

めもたたかず ワ。目不瞬。またゝきもせず。宇拾二（梢をたてて、大衆を、めもたゝかず、おくらめもせずしてまもりて、一時ばかりおはするに）

めもと ナ。目許。めざし。めつき。めのほとり。

めもゐるに ツ。目もえならに。和泉式部集（めもゐるは、かく村雲の、へだつとも、推量まへ、思ひおこせよ）

めもらひ ナ。眼病の名。ものもらひに同じ。

めやす ナ。目安。みよし。また、うれへぶみをいふ。

めやすがき ナ。目安書。めやすにかきたるかきもの。

めやすし サ。ヒ。目易。みぐるしくなし。みるめやすらかなり。山家集（みさびゐし、池のおもての、きよければ、やどれる月も、めやすかりけり）枕草三（下女のきたなげなれど、年おいて、物の例など志りて、おもなきさましたるも、いとつきぐしうめやすし）

めやすばこ ナ。目安箱。うれへぶみをいるゝはこ。

めやに ナ。目脂。めのやに。めあか。めくそ。

めやみ ナ。目疾。がんびやう。めのやまひ。

めゆひ ナ。目結。めぞめ。くゝりぞめ。平家十（年のよはひ二十ばかりなる女房の、色ありくきよげにて、髪のかゝり、まみのうつくしさ、めゆひのかたびらきて、そめつけのゆまきして、湯殿の戸おしあけて）

めゆひ ナ。目結。めゆくし。めをゆひふさぐをいふ。

めらう ナ。女郎。めのわらは。沙石集二（あさましなどいふばかりなくて、めらうをよびてくるに）

めらめらと ツ。火の、おそくもゆるさまにいふことば。竹取（早やきてみるさまをいへば、火の中にうちくべてやかせたまふに、めらめらとやけぬれば）

めり ナ。減耗。めらるなどのへるをいふ。

めり ワ。ヒ。タ。カ。ナ。現在の想像をいふにもちふる辭。この辭、もと、むとありとのくみあひていできたる辭なれども、めらとはいへるにはあらず、その證をみいでず。古今（立田川、紅葉みだれて、ながるめり、わたらば錦、中やたえなん）伊勢（むかしの花をぬひて、笠もかなゝ、めるめる人に、きせてかへさん）源花宴（人のめうつしも、たゞならず、おぼゆべかめれど）同若菜（尼君、その程まで、ながらへさせ給はなんと、のぞましめりき）

めりかり ナ。甲乙。こゑの、あがるとさがるとをいふ。

めりこむ ワ。ヒトリ。四。滅込。めりとなる。おされてへる。

めりやす ナ。目利安。莫大小。織物の名。織目の、編目のごとくなりて、伸縮するやうにおりなしたるもの。

める ワ。ヒトリ。四。減。へる。すくなくなる。胡琴教録（むちおとの、をなやらならず、めりさるなど、きつの撥皆をいひて、世のえせものに似たるなり）

めれう ナ。馬寮。うまのつかさを見るべし。

めろう ナ。女郎。めのわらはをいふ。東國、西國にて。

めを ナ。女男。をんなとをとこ。

めをうちたたく ワ。ヒトリ。四。瞬。またゝきす。今昔廿（ほとけうつけられて、目をうちたゝきてあり）

めをきえむ ワ。ヒトリ。シニ。極目。みるめのおてもなくてあり。好忠集（おもねさす、いもとのやまも、みえぬべく、目をきえあてて、てれるなつかな）

めをくえす ワ。ヒトリ。シニ。瞬。めくそすに同じ。狭衣二（心得てもやる雑色どもは、目をくぜすれば）

めをくばる ワ。ヒトリ。四。配目。めくばりす。枕草廿（目なくばりつゝ、踏みゐるこそ、罪得らんとおぼゆれ）

めをこやす ワ。ヒトリ。四。肥目。よきものをみならしむ。疑林（一時がめをこやして、何にかはせん）

めをすます ワ。ヒトリ。四。澄目。めをおちつけす。著聞六十（ふしぎの事など、目をすましてみゐる所に）

めをそばむ ワ。ヒトリ。シニ。側目。そばめにみる。にくみてにらむ。源桐壺（上人なども、あいなくめをそばめつゝ）

めをそらに ツ。空目。めもみずて。枕草廿（たてぶみなども、目をそらにてとりさるこそをかしけれ）

めをたたく ワ。ヒトリ。四。瞬。めをうちたたくに同じ。

めをたつ ワ。ヒトリ。シニ。注目。めをつけてみる。源紅葉（このやうなる殿上人などにも、めをたてつゝけしきばむ）

めをつく ワ。ヒトリ。シニ。注目。めをとゞめず。みることを、やめず。いほぬし（もみぢの、色のあるは、めをつけて、くらまのやまに、よるたどるな）

めをと ナ。夫婦。ふうふ。いもせのかたらひするもの。

めをとく ワ。ヒトリ。四。解目。めをするどくす。空穂物語（土器とりて云々、目をときて、みなまもりたまふ）

めをとくぎ ナ。夫婦釘。ふねのともをかさねるくぎ。

めをとづか ナ。夫婦塚。ひよくづかに同じ。

めをとぶね ナ。夫婦舟。ふたまたぶねに同じ。

めをぬすむ ワ。ヒトリ。四。偸目。ひとめにふれぬやうにす。

めをはる ワ。ヒトリ。四。張目。おそろしくおもふ。万三十（さきこに、おふみの海の、おきつなみ、来よる濱邊を、くれくれと、ひとりぞ我がくる、妹が目を欲り）

めをまはす ワ。ヒトリ。四。眩暈。めまひす。おあん物語（氣のよわき婦人なぞれ、部隊は目をまはして難儀しさ）

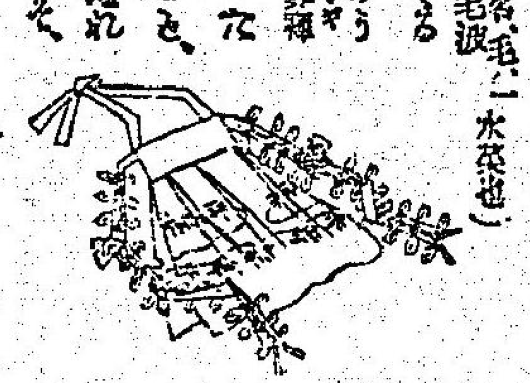
めをゆふ ワ。ヒトリ。四。結目。めゆひす。守物語（この帽、目をやむよしいひければ、云々、あちこちと、めをゆひて、ひさぶろのあたまもゆひしもの[illegible]）

も

くちびるにふれていづる、ひとつのこゑにて、ムを弱とかきなれたる者なり。

も ナ。藻。海草の名。また、水草の名。海布のたぐひにて、[illegible]、水にいでくるものには、絲のみだれたるがごときもの、籠の葉に似たるがごときものなどあり。古今（あまのかる、藻にすむむしの、われからと、音をこそなかめ、世をばうらみじ）和名（藻、和名毛、水草也）

も ナ。裳。をんなのこしにつくるもの。むらさきの、おもきかさまのうへにつく。但し、上代には、[illegible]をもいへることし。万十（君がため、山田のさはに、ゑぐつむと、ゆきげの水に、裳のすそぬれぬ）源夕顔（そでぐち、裳のすそ、かざみなど、物の色いと清らにて）



も ナ。喪。まうことをいふ。ひとの志にたるをいふ。また、おやなどのうせたるなげきにこもりゐるとき。

も テ。ナゲキ。よ。かな。万四（上野の、黒檀のねろの、葛葉がた、かなしけころは、いや遠ざかり来も）後撰（春くれば、木隠おほき、夕月夜、おぼつかなしも、花陰にして）

も テ。オス。亦。また。おなじことのかさなれるをいふ。[illegible]こゝろのうらぞ、まさしかりける）同（[illegible]）

も テ。[illegible]。万十四（かみつけの、佐野田のなへの、むらなへに、ことはさだめつ、いまはいかにせも）

も ツ。今。いま。また。このうへ。

もいを ナ。諸魚。魚の名。形、めばるに似て、目ちひさし。きた、鱗、長くして赤く、尾、赤くして、岐なし。

もう ナ。牟。うしをいふ。小兒の語なり。

もうこ ナ。蒙古。むくり。支那の地の名。長城の北、西比利亞の南なる大沙漠のあるところ。増鏡三（そのころ、蒙古おこるとかやいひて、世の中さわぎたちぬ）

もうす ナ。帽子。そうのいたゞくかうぶし。

もうまい ナ。蒙昧。こゝろのさとりのひらけぬをいふ。

もうる ナ。毛織。織物の名。外國よりくる織物にて、絨子に似て、緯総あり。また、金毛織、銀毛織などあり。

もうろう ナ。朦朧。おぼろにてさだかならぬをいふ。

もうを ナ。鯥魚。魚の名。もいをに同じ。

もえあがる ワ。ヒトリ。四。燃上。もえて、ほのほあがる。

もえいし ナ。燃石。いしずみ。せきたん。

もえいづ ワ。ヒトリ。シニ。萌出。もえていづ。万八（石激、たるみの上の、早蕨の、萌出春に、なりにけるかも）

もえがら ナ。燃殻。もえたるあとにのこりたるかす。

もえぎ ナ。萌木。もえでたるき。夫木七（おひにける、庭の萌木の、小樹さ、そこそくとなき、涙とまらで）

もえぎ ナ。萌黄。萌と黄とまじりたるごときいろ。

もえぎ ナ。萌黄。襲の色目。表は薄青にて、裏の縹なる

ものをいふ。枕草六（いまれ、紅梅いきでもありぬべし。されど、もえぎなどのにくけれど）

もえぎいろ ナ。萌黄色。もえぎのいろ。

もえくさ ナ。燃草。ひをもやすにもちふるもの。

もえくひ ナ。燼。もえさし。和名（燼和名毛江久比火餘木也）

もえこがる ワ。ヒトリ。シニ。燃焦。もえてくろくなる。字拾十（我ひとり、つきせぬ煩悩の炎にもえこがれて）

もえさし ナ。燼。もえくひ。もえのこり。続経記三（くべさるもえさしをおつとり、すびつおしにじりて）

もえしまでらう ナ。柴。まきをいふ。越中にて。

もえたつ ワ。ヒトリ。四。燃立。もえあがる。拾遺（鳥部山、谷に煙の、もえたゝば、はかなくみえし、我としらなん）

もえのこり ナ。燼。もえさしてのこりたるもの。

もえる ワ。ヒトリ。シ一。燃。もゆなるべし。

もか ナ。旅人宿の下女をいふ。伊勢、美濃にて。

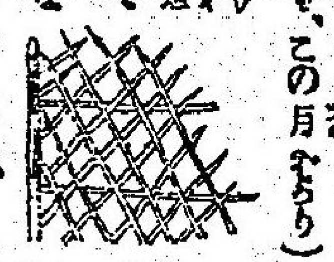
もかう ナ。帽額。みづひきのたぐひ。御簾のうへのかざりに、よこに、ながくひきそふるものなりとぞ。枕花みむとて（おはします所の御簾のもかうもやれされば、宮、検非違使にあひたる御簾のへり哉と）紫式部日記（すゞれのそし、もかうさへ、ころぐにかそりて）

もがく ワ。ヒトリ。四。苦悶。くるしみてもだゆ。

もがさ ナ。疱瘡。病の名。もうさう。顔、手、足などに、ほろしいできて、瘡となりて、いゆるものにて、顔にも、そのあとのこるもありて、人にうつる事、きそめてむやし。続古事談五（もがさといふ病れ、新羅国より起りたり。筑紫の人、魚をかひける舟をはなれて、かの国につきて、その人うつりやみてきたれりけるとぞ）和名（皰瘡、唐韻云、皰面瘡也、類聚国史云、仁寿二年、皰瘡流行、人民疫死、皰瘡此間云裳瘡）

もがみがは デ。最上川。河の名。出羽にあり。古今（最上川、上れば下る、稲舟の、否にはあらず、この月ばかり）

もがり ナ。虎落。やらひ。竹の先のとがりたるを、うちちがひにくみあはせて、垣のごとくゆひめぐらしたるもの。また、枝ある竹木などをうゑならべて、稲などの物をかけてほすれうにしたるをもいふ。



もがりだけ ナ。虎落竹。もがりにもちふるたけ。三十二職人歌合（たけうり、てあさりの、よき枝あれば、そるもうし、花のかこひの、もがりざけめせ）

もかりぶね ナ。藻刈舟。もをかりとりにゆくちひさきふね。拾遺（もかりぶね、いまぞなぎさに、来よすなる、みぎはのたづの、こゑさわぐなり）

もぎ ナ。裳着。女子の、はじめて、もをきそむるいはひ。拾遺（北宮のもぎの屏風に）源宿木（十四になりたまふとし、御裳きせたてまつりたまはんとて）

もぎき ナ。捩木。えだなき木。堀川次郎（かれはてて、もぎとなりし、昔より、焼すてられん、日をぞ欺ふる）

もきぬ ナ。喪服。もふく。源夕霧（きぬのいろいとこくて、つるばみのもぎぬひとかさね、そうちぎ着たり）

もぎり ナ。藻切。かまのたぐひの、もをきるもの。

もく ナ。木目。もくめに同じ。枕草五（めでたきもの、からにしき、かざりだち、つくりぼとけのもく）

もぐ ワ。カ。四。捩。ねぢてひきちぎる。堀木（もぎとつる、梢をみれば、いたずらしく、あさりをならふ、やへざくらかな）夫木廿（世の中は、せきどにふせぐ、さるもぎの、もぎれそてぬる、身にこそありけれ）

もくえう ナ。木曜。すゐえうのつぎ。七曜を見るべし。

もくか ナ。目下。めのまへ。まのあたり。

もくきん ナ。木琴。楽器の名。よこながきはこのうへに、たては、おまるのたいぜきいたをとなしたるもの。板は、あつきところ、うすきところなどあるゆゑに、うてば、さまぐの音のいづるものなり。

もくきよ ナ。黙許。しらぬさまにてゆるしおくをいふ。

もくぎよ ナ。木魚。木をほりくぼめて、内をうつろにして、うてば、ポコぐと鳴るごとくしたるもの。僧の、読経の時、念仏の時などにうちならすものなり。

もくぐうにん ナ。木偶人。でく。にんぎやう。

もくげき ナ。目撃。まのあたりみるをいふ。

もくこく ナ。木斛。木の名。葉は、たがひちがひにつきて、茎にあつく、また、艶をもてあれば。夏のころ、洗了花に似たる、よひらのちさき花さきて、実をむすぶ。こ

の木、四時、ときは、常に、葉の間に、紅紫なるまじふ。

もくこん ナ。目今。いま。まのあたり。さしあたり。

もぐさ ナ。艾。草の名。よもぎに同じ。

もぐさ ナ。艾。きう。艾の葉をほしかたくして、綿のごとくもみなしたるもの。医師などの、病をいやすために、背などにうゑて、火をつけてやくものなり。

もくざう ナ。木像。きにてこしらへたるにんぎやう。

もくざう ナ。木造。きにてこしらへたるもの。

もくさく ナ。茂咲。くさの、しげくさくおひいでたるところ。

もくさく ワ。ヒトリ。四。茂咲。しげくさく。万三（水つたふ、磯の浦回の、岩つゝじ、木丘開道を、またみなんかも）夫木三（もくさくの、美豆野をみれば、こゝもでか、あしげのこまぞ、くさづきにける）

もくさん チ。目算。めづもり。みつもり。

もくじき ナ。木食。このみのみをくひてゐるをいふ。

もくす ワ。ヒトリ。カ。黙。もだす。くちをつぐむ。

もくせい ナ。木犀。木の名。葉は、ほそながきいびつにて、かたくあつくして、ぬくりは、刻あり。秋のころ、ちひさき花、葉の間にむらがりさく。色は、しろきもの、黄なるものありて、香しき事いはんかたなし。

もくぜん ナ。目前。めのまへ。まのあたり。

もくた ナ。升麻。草の名。とりあしをいふ。京都にて。

もくだい ナ。目代。めじろ。国司の、任におもむかぬとき、かはりて、その事をあつかふもの。また、武家の眼代をもいふ。十訓六（目代献し申すは、国司、おほきは腹たてて、季春、国民の身にて、かく程の狼藉をしいだしたる云々、理に申すべからずとぞいそれける）

もくづ ナ。藻屑。ものくづ。また、なき、水中のめくさをいふ。金葉（みさつみの、そこのもくづと、みしものを、いかで空の、月となるらん）

もくづび ナ。藻屑火。もくづをたく火。千載（藻屑火の、いさり火を志ぐる、漁舟、ほのみなりしに、思ひそめてき）

もくてう ナ。木鳥。官の名。衛府の舎人の、衛門の尉をかねたるもの。左衛門の尉をかねたるは、左木鳥といひ、右衛門の尉をかねたるは、右木鳥といふ。

もくてき ナ。目的。めど。めあて。

もくと ナ。目途。めど。めあて。めあて。

もくねんと ツ。黙然。だまりて。くちをふさぎて。

もくば ナ。木馬。きにてこしらへたるうま。

もくはい ナ。木盃。きにてこしらへたるさかづき。

もくふよう ナ。木芙蓉。灌木の名。ふようは同じ。

もくめ ナ。木目。きめ。いさなどはあらそれたるあや。

もくもくと ツ。黙々。だまりて。くちをふさぎて。

もくよく ナ。沐浴。ゆあみ。みそぎ。字拾廿（持経者もくよくして、きよまりありていであひぬ）

もぐら ナ。葎。草の名。むぐらに同じ。和名（葎和名毛久良）

もぐら ナ。鼹鼠。獣の名。うごろもちをいふ。西国にて。

もくらに ナ。木蘭。木の名。木は、やなぎのごとく、葉はかつらに似たり。また、花の香、すべて、蘭に似て、夏の初にさく。和名（木蘭、一名、林蘭、和名毛久良迩）

もくらん ナ。木蘭。木の名。もくらにに同じ。

もくらん ナ。木蘭。染色の名。黒くあかみたるいろ。西三條家記装束抄（木蘭まさ。総色は、経の黒は、緯の黄なるをいふ）

もぐらもち ナ。鼹鼠。うごろもちをいふ。西国にて。

もぐり ナ。潜。おきてをくぐりてたちまじらくをいふ。

もぐる ワ。ヒトリ。四。潜。くぐる。また、はいりこむ。

もくれい ナ。目礼。めつきにてゑしやくするをいふ。

もくれう ナ。木工寮。たくみのつかさに同じ。

もくれん ナ。木蓮。木の名。もくらにに同じ。

もくれんじ ナ。木槵子。木の名。むくれにしに同じ。字拾一（不動袈裟といふけさかけて、木槵子の念珠のおほきなるくりさげたる聖法師いり来てたてり）

もくろく ナ。目録。ものごとのおぼすぢの、めやすのごとくにかきたるもの。また、おくりものなどの志なぢをとりまとめて、ありつるやうに、うへがきして、落窪三（みな、もくろくしてかへしたまふ）

もくろみ ナ。目論見。かんがへ。くはだて。

もくろむ ワ。カ。四。目論見。かんがふ。くはだつ。

もけ ナ。木瓜。木の名。木は、からなしに似て、葉あつく、光つやあるなり。春の末、あかき花さきて、瓜のごとき実を結ぶ。和名（木瓜、一名、楙、和名、毛介。本草、其実如小瓜也）

もと　ナ。許。もと。もとろ。古事記（ちはやぶる、うぢのわたりに、さをとりに、はやけん人し、わがもこにこん）

もとほる　ワ。ヒトリ。ロ。歪廻。くねりゆく。さすらふ。空穂上楼（ものもおぼえずあそしきまで云々、こぎりくもてにげて、たふれもてよびつゝいけバ）源氏（おきぶれはえたちもおなりとさまよふ。かゝる、よまひの末は、せんくさりの子はおくれさぶらひてもてよふる事を恥かなきさまよふ）古事記（何何盈既）

もころ　サ。如。ごとし。ごとく。ごとき。万七（松の木の、なみたるみれバ、いへびとの、われをみおくると、たゝりし母已見）同九（地はふし、きらみたけびて、如己男に、まけてハあらじと、かけはきの、小太刀とりはき）

もころも　ナ。裳衣。うねめなどのきるきもの。前花新釜（せうきさなげなき女いとも五六十人ばかり、もころもをいやもの、いとさろうきせて、さろき笠どもきせて、幽黒くろうらはつけ、紅、あをうけはさうせさせて）

もころを　ナ。如己男。せがごときをとこ。万九（如己男に、まけてハあらじと、かけはきの、小太刀とりはき）

もさ　ナ。延者。ゐなかものをよぶことば。

もさう　ナ。模造。かたをうつしてつくりたるもの。

もし　カヘ。汝。おぬし。ひとをよびくるときのことば。

もし　サ。ピ。茂。さげし。万二（みづつたふ、磯のうらミの、いそつゝじ、木丘さくみちを、またみなんかも）

もし　ソ。若。あるひハ。さやうにもあらバ。源若菜（かことてらいさし、もしおもふやうならん世の中をまちいでさらバと、御方はきこえつけるを）

もじ　ナ。文字。もんじ。ことをしるすしるし。ことぞなきるすなし。また、ただ、ことぞをもいふ。古今序（神代はれ、歌のもじもさだまらず云々、人の代となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともじはよみける）浜松一（ふとバむすんじとのたまへバ、たちそき、ふきれ、あぢきなき文字なりと申せバ）

もじ　ナ。文字。経の表の方をいふ。經内みて、

もじぐさり　ナ。文字鎖。いまやうなどの一首の語をて、前句のことむじりの文字を、後句のかしらにつけて、次第によみゆくものをいふ。夫木五（つらなれる、艶なかきて、玉草の、もじぐさりして、賜るかりがね）

もしくば　ソ。若。もしハ。あるひハ。新後拾十（若久波）

もじごゑ　ナ。字音。からもじのこゑ。

もじづかひ　ナ。文字遣。もじのつかひざま。ことぞのいひまわし。狭衣三（今様の手は云々、つよきもじづかひ、むしやうにて侍る、されおらせさせまへりや）

もしぞ　ソ。若。もしくハ。源明石（待ちけん、なかなか夕暮、もしもものあやなるあけぼのなどやうにきこえさせして）

もしほ　ナ。藻鹽。もよりとりたるしほ。藻な、蟹やうのもののせ、汝をくみかけてハほし、くみかけてハほしくして、汝の煮みたるとき、更に、汝をかけてあらひて、そのあらひたる汁を煮て、白鹽につくりなすといふ。また、その汝をかけたる藻をやきてもるともいへり。ものがらなりと。汝の藻鹽をも見合すべし。

もしほ　ナ。藻鹽。草の名。うみべにそゆる草にて、そのいき、茎に似たりといふ。また、この草は、陰して、ち、やきて、旅にもりて、汝水をそそぎ、その水を、釜にいれて、煮れバ、やがて、白鹽となるといふ。大和本草

もしほき　ナ。藻鹽木。もしほをにるとき、かまどにたくたきぎ。千載（さみだれは、あまのもしほぎ、くちにけり、浦辺はけぶり、たえてほどへぬ）

もしほぐさ　ナ。藻鹽草。もしほをとるとき、あぼみづをかするもの。もしほを見るべし。狭衣三（いまさらに、日に、二度、三度、もしほぐさかきつめつゝ、うらみきこえさせさまさま、あまの濱屋はあまりぬべし）

もしも　ソ。若。もしまた。もしあるひハ。

もじやう　ナ。文字様。もじのさま。源梅枝（左手のさうしども、心々にちなうおかしき云々、文字やう、石などのたゞずまひ、このみかきさまへるひらもあめり）

もしゆう　ナ。毛朱。怪鳥の名。ねぶのたぐひなるべし。玉葉二（もしゆうとハ、鼠の唐名なり。かやうのものまでも、皇居にけねんをなしけるにや）

もず　ナ。鵙。百舌。鳥の名。形、もとに似てちひさく、嘴を頸とハ、すこし、鷹のおもかげに似たり。もずのそやにえのところ見合すべし。和名（鵙、一名鶪楊氏漢語抄云、伯労、毛受、一云鵙）

もすそ　ナ。裳裾。ものすそ。新古（いとなきり、田子のもすそも、みなれぬ、ころの五月雨）

もずのくさぐき　ナ。鵙草茎。もずといふ鳥の、くさをくゞるをいふとぞ。万十（春されバ、伯労鳥之草具吉、みえずとも、われハみやらん、きみがあたりバ）

もずのそやにへ　ナ。鵙速贄。もずといふ鳥の、夏のころ、蛙、小鳥などをとりて、木の枝などにつらぬきおくをいふとぞ。俊頼集（垣根なれ、もずのそやにへ、たてけり、まてのたなさに、しのびかねつゝ）

もそろ　ナ。醨。うすきさけ。和名（醨和名之流、一云毛曽呂、酒薄也）

もぞろもぞろに　ソ。徐々。そろくと。やつくと。出雲風土記（河船之毛曽呂毛曽呂爾國来國来引来縫國者）

もだ　ナ。默。くちをつぐむをいふ。ものをいはぬをいふ。万十（あけりとも、あらずしあらバ、默然もあらん、このやまぶきを、みせつゝもとな）

もだく　ワ。カケ。シ二。擡。もちあぐ。たかくあぐ。土佐（都ちかくなりぬといふをよろこびて、やなぞこより、頭もたげて）枕草二（火桶のそばに、足をさへもたげて）

もだいなし　サ。ヒ。無勿體。もつたいなし。かたじけなし。

もだす　ワ。カケ。シ二。寄。よす。たてながらよせおく。

もだす　ワ。カケ。ロ。默。くちをつぐむ。ものをいはず。

もだせ　ナ。苴。菌。たけをいふ。上野、下野にて、

もだせかく　ワ。カケ。シユ。耕耕。よせかく。もたせておく。

もだひ　ナ。甕。さけをいるゝかめ。和名（兼名苑注云、字亦作甖、和名毛太非）

もだふ　ワ。ヒトリ。シ二。悶。おもひなやむ。もづらひくるしむ。この語は、地方によりてハ、もだゆると下一段にいふ。顯政集（日をへつゝ、そふるつらさな、おもにはて、もだえもつべき、こゝろなそすれ）狭経二（いので、これにむくいせんともだえさまなど）

もだへる　ワ。ヒトリ。シ一。悶。もだふを見るべし。

もだま　ナ。藻玉。魚の名。ふのたぐひなり。長さ三四尺ばかり、余身もひいろにて、肉あつく、脂おほし。

もたまふ　ワ。カケ。ロ。持。もちたまふ。空穂藤原（子をめきたひらにもたまへる、あそものは、ふことにも、けしうはあらじものとのたまへバまうでさまひ紀）

もたらす　ワ。カケ。カ。齎。もちてわらす。もちてゆく。

もたり　ワ。カケ。カ。持有。もちてあり。貫之集（かひがねの、山里みれバ、あしたづの、命をもたる、人ぞすみける）

もたる　ワ。ヒトリ。シ二。凭。よりそふ。よりかゝる。この語は、地方によりてハ、もたれると下一段にいふ。伊勢（ひとりは、あてなる男もたりけり）

もたれる　ワ。ヒトリ。シ一。凭。もたるを見るべし。

もたれる　ワ。ヒトリ。シ一。食滯。くひたるものとゞこほる。

もち　ナ。黐。木の名。木の形、ひめつばきのごとく、葉は木斛に似て、さらにつやゝかなり。この木ハ、その皮をむぎて、水にひさして、搗きて、滓をのぞけバ、脂のごとくにて、きはめてねばりあるものとなる。鳥などをとるに用ふるものなり。和名（黐和名毛知、所以黏鳥也）

もち　ナ。餅。食物の名。もちひを見るべし。七一職人歌合（もちひうり、あさらなるもちまゐれ）

もち　ナ。望。つきのまどかなるとき。陰暦の十五日。伊勢（そのころ、水無月のもちばかりなりけれバ、女、身に、かさひとつふたついできにけり）

もち　ナ。持。うたあはせなどに、かちまけなきをいふ。亭子院歌合序（されど、歌はもちどもにさしける）

もぢ　ナ。綟。工匠の道具。そでがらみのごとくしたるもの なるべし。和名（鉄、漢語抄、毛遅、綟也）

もぢ　ナ。也。とらのおほきすくなきをそろるにいふことぞ。和名（鯆鰐云々、鯆六頭飛也、一頭、飛魔毛遅）

もちあぐ　ワ。カケ。シ二。擡。もたぐ。たかくあぐ。

もちあそび　ナ。玩。もてあそびものに同じ。

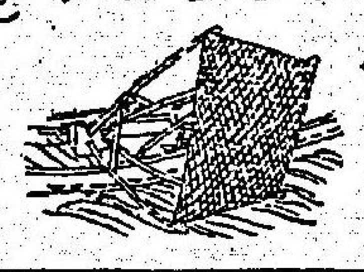
もちあふ　ワ。ヒトリ。四。持合。つりあひをたもつ。

もちあみ　ナ。持網。うををとるあみなり。網の四隅に、竹をそりて、ふなさによせかけて、魚をおひいれてとるやうにしたるもの。山家集（みるもうきハ、うなそこにくる、いろくづを、のがらるるでも、あさむもちあみ）

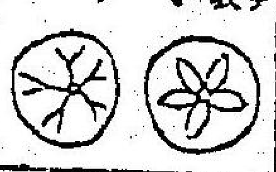
もちいつく　ワ。ヒトリ。四。持齋。いつくに同じ。古事記（此三柱神者、胸形君等之以伊都久三前大神者也）

もちいひ　ナ。餅。食物の名。もちひに同じ。

もちがひ　ナ。飯貝。貝の名。うみうなぎの一種なり。形、



ひらくしてまろく、色いろひいろにして、表に、枝葉の花のごとき紋あり。また、菱まれ、ちひさき孔ありて、孔のめぐりに、いつすぢの枝つきたる文をいだせり。



もちがゆ ナ。望粥。もちがゆに同じ。枕草一（十五日に、もちがゆのせくまゐる。かゆの木ひきかくして、家の御達、女房などのうかがふを）

もちきたり ナ。持來。うまれつき。もとよりあるもの。

もちきび ナ。餅黍。黍の一種。きびのもちに同じ。

もちきよまはる ワ。ヒトソ。ぶ。持淸。きよまはるに同じ。

もちくされ ナ。持腐。もちてゐながらもちひぬをいふ。

もちくだち ナ。持口。うけもちていふこと。

もちこす ワ。カゞ。ロ。持越。もちてこす。もちこさるる。

もちこたふ ワ。ヒトソ。シ。持耐。ひさしくたへつゞく。

もちごめ ナ。糯。米の一種。もちのよねに同じ。

もちざを ナ。黐竿。とりもちをつけたるさを。

もちしほ ナ。望潮。もちのみちしほ。望の日の潮。夫木廿（天の原、そらゆく月の、もちしほの、みちにけらしな、難波江の浦）

もちずりぐさ ナ。捩摺草。草の名。葉は五六寸ばかりなり。葉は、稲のたぐひに似てやはらかなり。春の末、葉の中より茎をいだして、うすあか色の花さく。

もちだし ナ。持出。こなたよりもちていづるをいふ。

もちつき ナ。餅搗。もちひをつくるをいふ。

もちづき ナ。望月。もちのよのつき。陰暦の十五日の夜の月。和名（望月和名毛知都岐）

もちづき ナ。望月。地の名。信濃にあり。後撰（望月の、駒より遅く、いでつれば、たどるたどるぞ、山はこえける）

もちづきの マク。望月之。もちづきは、かくるところなく、みちたりてあるものなれば、たたふるにかけていふ。万二（望月乃、満波之計武跡、天之下、四方の人の、大船の、おもひたのみて、天水、あふぎてまつに）

もちづきのこま ナ。望月駒。望月といふ牧よりいだせる馬をいふ。信濃国にあり。拾遺（あふさかの、関の清水に、かげみえて、いまやひくらん、望月の駒）

もちつつじ ナ。羊躑躅。いはつゝじに同じ。和名（羊躑躅和名以波豆豆之、一云毛知豆豆之、羊誤食之、躑躅而死、故以名之）

もちつつじ ナ。羊躑躅。襲の色目の名。表はむらさきにて、裏はくれなゐなるものをいふ。

もちどりの マク。黐鳥之。もちどりは、黐にかゝりて、離れがたきものなれば、かゝるにかけていふ。万五（父母を、みれば貴し、妻子みれば、めぐしうつくし、世の中は、かくぞことわり、もち鳥の、かゝらはしもよ、ゆくへしらねば）

もちなぞ ナ。黐竿。とりもちをつけたるさを。

もちなや ナ。持成。もてなすこと。

もちなら ナ。望田。...

もちならず ワ。ナカシ。持前。つねにもちてなりゆくさま。

もちにげ ナ。持逃。人のものをもちてにぐるをいふ。

もちのき ナ。黐樹。木の名。もちの木に同じ。

もちのひ ナ。望日。もちのひに同じ。

もちのよね ナ。糯米。米の一種。もちひにつくるねばりあるこめ。和名（糯和名毛知乃与禰、黏米也）

もちばな ナ。餅花。もちひの、ちひさくつみきりて、やなぎのえだなどにつけたるもの。年のはじめ、床のかざりなどにするもの。

もちひ ナ。餅。穀物の名。もちごめをむして、うすにてつきたるもの。

もちひかがみ ナ。餅鏡。かがみもちに同じ。

もちひさり ナ。餅...

もちひる ワ。カミニ。用。ようにあて、ことにあつ。

もちふ ワ。カミニ。用。もちひるに同じ。

[illegible]

もちゆまはる ワ。カ。ロ。持齋。ゆまはるに同じ。祝詞式（大多須支尼事...）

もちを ナ。鐇。工匠の道具。もちをに同じ。

もぢる ワ。カ。ロ。捩。ねぢゆがむ。よぢる。

もちろん ソ。勿論。

もちろんなり ケ。勿論。

もつ ワ。カ。ロ。持。

もつかう ナ。木香。

もつき ナ。...

もつく ナ。...

もづく ナ。水雲。海草の名。

などにうちて、水のうへにみだれうかぶ。常に、跡にひきいれて、くひものとす。和名（水雲毛豆久）

もつけ ナ。物怪。ひとへなるをいふ。羽後、秋田にて。

もつけのさいはひ ナ。僥倖。こぼれさいはひに同じ。

もつこ ナ。畚。もつこをいふ。土佐にて。

もつこ ナ。魚の名。肥後にて。

もつこぼう ナ。畚棒。あふごをいふ。

もつさう ナ。盛相。ものをもりてくるをいふ。下人などにあたふるにするものなり。

もつさうめし ナ。盛相飯。もつさうにもりたるめし。

もつしゆ ナ。沒收。つみびとのものをとりあぐるをいふ。但し、裁判所などにてすることなり。

もつたい ナ。勿体。ものごとのものものしきをいふ。

もつたいない ナ。勿体無。もつたいなしを見るべし。

もつたいなし ケ。勿体無。かしこし。たふとくてかたじけなし。この語、今は、もつたいないといふ。

もつつけ ナ。物付。宇拾一（大童子、うちみて、あなれ、勿躰なき主のかたや）今川大双紙

もつての外 ソ。以外。ことの外。おもひの外。

もつとき ソ。今時。いまとし。なほすこし。

もつとも ナ、尤。ことわりにかなへるをいふ。

もつとも ソ、尤哉。もとも。すぐれて。このうへなく。竹取（中納言よろこび給ひて、おもしろき事にもあるかな、もつともえ忘らざりけり）宇拾三（陰陽師のいふごと、おはせらるゝ事、もつとも道理なり）

もつとも ソ、尤。ただし。さりながら。

もつぱら ソ、専。もはら。ひたすら。ひとむきに。

もつにふ ナ、沒入。もつしゆといふに同じ。

もつる ワ、ヒトリ、シニ段。いとの、みだれてむすぼほるゝをいふ。此語は、地方により、もつれると下一段にいふ。

もつれ ナ、縺。みだれ。あらそひ。ごたく。

もつれがみ ナ、縺髪。もつれたるかみ。みだれたるかみ。

もつれる ワ、ヒトリ、シニ段。もつるを見るべし。

もて ナ、面。おもて。万十（あが母の、そすれもさざれ、

もて ナ、以。もって。古今（まちすむの、にごりにあまつ難波根を、ふりはけみつゝ、旅れあはむね）

もてあがむ ワ、カテ、シニ、持崇。たいせつにす。たふときものにあつかふ。源木（親などたちそひもてあがめて、おひさきこもれる窓の中なるほどは）

もてあそび ナ、玩。もてあそびもの説幻（この宮ねよりを、もてあそびにたてまつりて）

もてあそびもの ナ、玩物。なぐさみにもちふるもの。新古（やまとうたは、家々の、もてあそびものとして、

こともの花のこれる木の下かさく、おもひの露もれふかくまなびそれもあらそはず）

もてあそぶ ワ、カケ、四、玩。なぐさみものにす。源御法（この對の前なる紅梅と櫻とは、花のをりくには、心とゞめて、もてあそび給へ云々とおもえさまうて）

もてあつかふ ソ、カケ、四、持扱。あつかひなやむ。あつかひにいふ。夫木廿（やまがらの、まなすくなみの、とはかくまもてあつかふ、こゝろなりけり）

もてあます ワ、カケ、四、持餘。てはあまる。そのものをあつかふにちからたらずして、せんすべなくてあり。

もていづ ワ、カケ、シニ、持出。もちていづ。とりいだす。源宗花（袖口など、踏歌のをりおぼえて、ことさらめきもていでたるぞ、まづ、藤壺ざえりをおぼしいでらる）

もてきたる ワ、カケ、四、持來。もちてきたる。枕草廿（もてくると、京はきつきてなんあてきたりける）

もてく ワ、カケ、カ、持來。もちてきたる。伊勢（かゝるやおそきと、ちるものをとりてみなのみて）

もてさわぐ ワ、ヒトリ、四、持騒。さわぐに同じ。伊勢集（風さへも、あてさわぐ哉、櫻花、心をさへも、散に委せで）

もてしづむ ワ、カケ、シニ、持鎮。しづむに同じ。源槇（こゝら世をもてしづめるる御こゝろみなみだされて）

もてつけて ワ、持付。とりなして。たしなみて。つゝしみて。源幻（こゝろにくゝもてつけて、なほさて、人よりはまさりされとみゐるまつけてれと）同木槿（もどかりもだちて、

みるをはもてつけて、みなるゝまゝに、心もけしうはあらず侍りしかど、たゞこのにくき方ひとつなん）

もてなし ナ、款待。あしらひ。たしなみ。とりあつかひ。きやうおう。空藤瀾（あやうじにてそでなされされど、さま、もてなし、なまめきてゆるし）

もてなす ワ、カケ、四、款待。あしらふ。とりあつかふ。きやうおうす。山家集（なかくには、さまぐ雲の、かゝるこそ、月をもてなす、飾なりけれ）源顔夕（たづきなしとおもひさるを、もてなしたすけつゝさぶらはす）

もてなやみぐさ ナ、持悩種。もてなやむくさはひ。源壺桐（天の下にも、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひきいでつべうなりゆくに）

もてなやむ ワ、カケ、四、持悩。あつかひなやむ。源東屋（いさゝかうしも、何かは、くるしきまでもてなやまし）

もてならす ワ、カケ、四、持馴。もちてならす。つかひてならす。源顔夕（あふぎごらんずれば、もてならしさるうつりが、いとあぶうなつかしうて）

もてはなる ワ、ヒトリ、シニ、持離。かけはなる。源澪標（おとぶを、もてはなれてもおぼしさらぬなり）

もてはやす ワ、カケ、四、持栄。ほめそやす。後撰（何に菊色そめかへし、匂ふらん、花もてはやす、君も來なくに）

もてひがむ ワ、カテ、シニ、持僻。おもひゆがむ。源若菜（かるくしうもてひがみたる事を、人もやゝもりきかん）

もてまゐる ワ、ヒトリ、四、持参。もちてまゐる。源若菜（伯耆、

きんを、みづから、もてまゐりて）

もてやすらふ ワ、ヒトリ、四、持休。もちてやすらふ。源手習（御髪なかきいでし給へるが、いとおどろしくおかしげなるはなん、忘られ、鋏をもてやすらひける）

もてゆく ワ、ヒトリ、四、持行。もちてゆく。枕草六（御せるものひとへ、かの坊はなどいひてよなもてゆけば）宇拾二（この山ゆるぎもちはけり、これ如何くとのゝしりあひさる程は、たゞくづれにくづれもてゆけば）

もと ナ、本元原。下根。ね。もさ。かぶ。おこり。はじまり。拾遺（うぐひすの、なきつる聲は、おそもれて、花のもとにぞ、我は來にける）拾遺（深の、ふぢさく松の、梢まで、もとの緑も、みえずぞありける）玉葉（山路の苔は、まつさけの十もをおひて侍りけるを）

もと ナ、故。舊。むかし。古今（いそのかみ、ふるからふ野の、もとがしは、もとの心は、忘すられなくに）

もと ナ、許。ところ。おるところ。源末摘花（大輔の命婦と、三々、父君のもとを、まきまでゆきかよふ）

もと ナ、本。うたのかみのく。五七五の句。枕草二（歌どもの本おほせられて、これが末いひにとおほせらるゝに、すゞろ、よろひ、こゝろはかりて）

もとあら ナ、本荒。もとのおほきく、あらくしきをいふ。好忠集（宮城野の、やけふの荻も、ふるよもり、もとあらはなられ、なぞしぞふるふ）

もとあらのかづら ナ、本荒蔓。突蔓。もとのまばらなるあふひかづら。新六六（あふひとる、頃はもしなれば、神山の、もとあらのかづら、かくれども なし）

もとあらのかへで ナ、本荒楓木。もとのまばらなるかへで。夫木十五（うゑてみる、もとあらのかへで、もみぢむを、まるも忘られも、なりはおそする）

もとあらのこはぎ ナ、本荒小萩。もとのまばらなるこはぎ。續後撰（みやぎみは、をじろなくなり、すその なる、もとあらのこはぎ、えなやさくらん）

もとあらのさくら ナ、本荒櫻。もとのまばらなるさくら。夫木四（とがやどの、もとあらのさくら、はらねども、こゝろをかけて、みればたのもし）

もとあらのすゝき ナ、本荒薄。もとのまばらなるすゝき。夫木廿一（たびゞとの、身はあむ野邊の、あきかぜは、もとあらのすゝき、つゆこぼれつゝ）

もどかし サフ、擬くべくあり。おもふやうにならで、こゝろいらだゝし。拾遺（我ながら、ふと、もどかしき、心かな、おもはぬ人は、何かこひしき）空穂俊蔭（かたちよりはじめ、まじらひさるさまなどの、もどかしきところなく、かどくしく、目もおよぶすぐれされば）

もとがしは ナ、本柏。もとをあるかしは。おほきなるかしは。まき、ものおもなるもの。古今（石上、ふるからの、小野の、もとがしは、もとの心は、わすられなくに）狹衣一（このみさて、もとがしはは、おもはずれど）

もとかた ナ、本方。もとのかた。まじめのかた。

もどき ナ、擬謗。そしりあらぢをあげつらふをいふ。源夕霧（まけてれおちじと、そのいできらをするないふ。心をあらさなくて、人のもどきをおひ給ふべき事を）

もどき ナ、擬。のこぎりの、ものはそきもの。

もときん ナ、元金。もとで。もとのかね。

もどく ワ、カケ、四、擬。それはあらぢをあげつらふ。拾遺（あざなりと、ひともどくる、ものしもぞ、それなのあさりを、すぎてはする）空穂俊蔭（父をもどきて、高麗人と、文をつくりかはしければ）

もとくだつ ワ、ヒトリ、四、本降。よそひおとろふ。よそひ、すゑになる。古今（さゝの葉に、ふりつむ雪の、うれおもみ、もとくだちゆく、わがさかりはも）

もとこ ナ、許。もとに同じ。垂仁紀（常在左右）

もとこびと ナ、侍者。おもとびと。垂仁紀（左右舎人）

もとごめ ナ、元込。鐵砲の一種。たまを筒口よりこめずして、火藥のあなよりこむるやうにしたるもの。

もとしげき ナ、本滋。催馬楽の呂の曲の名。催馬楽（毛止之介支、もとしげき、きびの中山、むかしより）

もとしの ナ、木篠。あしの、すゑのかれて、もとのやうになりてたちさるをいふ。堀川百首（冬さむみ、すゑの枯葉も、おちそてて、もとしのばかり、たてる蘆かな）

もとじめ ナ、元締。もとのとりしまり。

もとす ワ、カテ、四、戻。もとにかへす。むじめにかへす。

もとすゑ ナ、本末。もとをすゑと。源宿木（もとすゑおも

もと

ね歌、くちとくうちつけなどしくさん）

もとだち　ナ、本立。ねざし。源、椎本（椎本かきもとひ、前栽のもとどもも、すこしうちなしたるして）

もとだね　ナ、元種。原料。もとのたね。もととなるもの。

もとつか　ナ、本香。もとのか。源、紅梅（もとつかのにほへる君が、袖ふれば、花もえならぬ名をやちらさん）

もとつくに　ナ、本國。もとのくに。万六（くさづつみ、病あらせず、すむやけく、かへしたまはね、本國べに）

もとつな　ナ、本綱。もとのつな。後拾（ゆふだすき、御所山の、ならのはの、もとつなになりぬ、さかき葉の）

もとつひと　ナ、本人。もとのひと。万十八（本人、ほととぎすをや、めづらしみ、今や汝が來る、こひつゝをれば）

もとつめ　ナ、前妻。もとのめ。好色集（もとつめのうら、かぎりと、みえしより、たれならすらん、とこのさむしろ）

もとつるぎ　ナ、本劍。もとのつるぎ。古事記（品陀の日の御子云々、さちもたる大刀、母登都流岐、すゑふゆ、冬木のす、からがしたの、さやさや）

もとつめ　ナ、本妻。さきのめ。字鏡（嫡 毛止豆女）和名（前妻 和名毛止豆女 一云古奈美）

もとで　ナ、元手。資本。もとのかね。たねきん。

もとどり　ナ、髻。かみの、うなじのあたりにてつかねたるもの。枕草（むさくなるもの、髻の、もとどりわかなちらさふ）和名（髻 和名毛止々利）

もとな　ナ、徒。無端。わけもなく。万十（おもなく、秋の月夜の、ものもふに、夜のねられぬは、ひとりつ、本名）

もとね　ナ、元値。もとのあたひ。もとのねだん。

もとの　ナ、旧。もとの。ひとつま。拾遺（女のまれ、ふる男をよりそひ、もとのつまにかへりけれ）

もとのめ　ナ、前妻。さきのめ。和名（前妻 和名毛止乃米 一云古奈美）

もとは　ナ、本葉。もとのは。新六（おもふどち、まとゐせる夜は、まだ來ず）

もとはら　ナ、本原。もとのはら。

もとへ　ナ、本方。もとのかた。古事記（母登幣波、君をおもひで）

もとほす　ワ、カ、四、廻。めぐらす。もとほしこし御稲を、ゆまはりし、

もとほととぎす　ナ、本時鳥。万廿（大殿の、この廻の）

もとほり　ナ、廻。めぐり。

もとほり　ナ、臺子。毛止保利。

もとほる　ワ、ヒ、リ、四、廻。めぐる。まはる。万四（いにしへの）

もとほろふ　ワ、ヒ、リ、四、廻。もとほるに同じ。古事記（神風の、伊勢の海の、おひしに、波比母登富呂布、したゞみの、い這ひもとほり、うちてしやまん）

もとみや　ナ、本宮。もとのみや。ほんけのやしろ。

もとむ　ワ、カ、シ、二、求。たづぬ。えんとす。ほしくのぞむ。この語は、地方によりては、もとめるを下一段にいふ。佛足石歌（くすりし、毛止乃よきひと毛止米…）字鏡十（…り逢ふまでたけぬものゆゑ）

もとめうしなふ　ワ、カ、四、求失。みうしなふ。古（ねんずもとめうしなひて、あしたに、烈しくまつりてありけるをみて）

もとめご　ナ、求子。東遊の曲の名。源若（求子とうたふ末つかた、上達部は、…）

もとめる　ワ、カ、下一、求。もとむを見るべし。

もとも　ナ、最。尤。もつとも。すぐれて。このうへなく。

もとゆひ　ナ、元結。もとどりをゆふもの。かみひねりにて、ひものりなどにてつくる。但し、いにしへは、男のもとどりをゆひしなり。古今（きみこそ…）和名（毛度由比 以組束髮也）

もとより　ワ、固。むかしより。貫之集（梅の花、もとよりみずて…）

もとろうつ　ワ、ヒ、リ、四、戻打。轉倒。かへりうつに同じ。

もど　もね　もの

十（歸を、足にのせて、その板数をふまりしをやまからのもどりうつやうにとびくるとなり）

もどりがけ　ナ、戻掛。かへさ。かへらんとするみち。

もどる　ワ、ヒ、リ、四、戻。反。もとにかへる。さかさまになる。さしさわりぞく。夫木（つくしぶね、うらみをつみて、もどるには、あしやまねても、おもねをぞする）

もどろ　ナ、斑。まだらといふに同じ。

もどろかす　ワ、カ、四、斑。まだらにす。まぎらす。枕草（あなはらの衣すりもどろかしたる水干といふもの着て）

もどろく　ワ、ヒ、リ、四、斑。まだらになる。まぎる。右京大夫集（もちしの、たまつむふねの、もどろけば、おもひさまめん、かたもおぼえず）

もどろく　ワ、カ、シ、二、斑紋。まぎらはす。

もなか　ナ、最中。まなか。さいちゅう。拾遺（水の面にてる月なみを、數ふれば、今宵ぞ秋の、もなかなりける）

もぬけ　ナ、蛻。もぬけがら。

もの　ナ、物。

もの　ナ、者。

もの　ナ、鬼。

ものあはれ　ナ、物哀。

ものあらがひ　ナ、物爭。ものあらそひ。

もの

ぐひこそ、なべく、心おされ侍りぬべけれとて）

ものいうま ナ。物射馬。やぶさめなどにはなれさるうま。

ものいはぬはな ナ。物不言花。ものいふむなよむべて、桃、桜などの類の花をいふ。拾之集（桜の、梅はよきれて、たちくれば、ものいはぬ花も、人まねきけり）

ものいはひ ナ。物祝。もののいはひ。ものごとのよろこび。

ものいひ ナ。物言。ことばづかひ。また、ものあらそひをいふ。拾遺（こゝにしも、なにならふらん、をみなべし、ひとのものいひ、さがにくき世に）

ものいふ ワ。ヒトリ。四。物言。かたる。ことばをつらふ。万廿（ありぎぬの、さゑさゑしづみ、いへの妹に、毛乃伊波受きて、おもひぐるしも）拾遺（ひとはものいふときゝて、さぞふりけるぞとこのもとに）

ものいふはな ナ。物言花。うつくしきをんな。女のうつくしきな、花にたとへていふことな。

ものいみ ナ。物忌。もののつゝしみ。和泉式部集（ものいみにこもり居るひとのもとより）

ものいみ ナ。物忌。伊勢神宮に奉仕する童女の名。

ものいみ ナ。物忌。ものいみのときのしるし。柳の木たれにはとしらべ、まれ、忍草に、物忌のよしなしるしなどして、冠、簾などにさすなりとぞ。枕草二（烏帽子に、ものいみつけたるは、今日さるべき日なれど、功徳の方にはさはらずとみえんとにや）

ものいり ナ。物入。いりめ。いりひ。つひえ。

もの

ものう ザ。物憂。懶。ものうし。空穂蔵開（うへ、おなものうや、こゝにとまりなさや、とのたまふに）

ものうい サ。物憂。懶。ものうしを見るべし。

ものうし サ。ヒ。物憂。懶。いとものうしくおぼえて、こゝろ、ものはすゝまず。この語は、今は、ものういとしていはい、ふ。拾之集（夏かげに待て、夏は今は、おもふらん、扇の風も、今はものうし）古今（春たてど、花もにほはぬ、山里は、ものうかる音に、うぐひすぞなく）

ものうじ ナ。物倦。ものはうむをいふ。源玉鬘（人のものうじして、さりなき山里にかくれ居はけるを）

ものうたがひ ナ。物疑。ものごとのうたがひ。枕草八（くるしげなるもの云々、さりなくものうたがひするをとこに、いみじうおもはれる女な）

ものうひうし サブ。物初々。ものごとうひくし。源玉鬘（今は、ものうひくしくなりぬべき御程にもあらじた、年頃の御物語などもきこえさほしきに）

ものうんじ ナ。物倦。ものはうむをいふ。源玉（おぼえ（？）し中に、これは、ひと等おしなべてのきそはおもさぎりしひとの、ものむきものうんじをして）

ものうらみ ナ。物恨。ものごとのうらみ。源若菜（ものうらみしたまふなど、いとよくなしきこえたまふ）

ものうらやみ ナ。物羨。ものごとのうらやみ。夫木十（天津風、ゆきさらふ秋の、夕暮は、物羨も、せられぬる哉）

ものうらかに ツ。物長閑。ものごとうららかに。源柏木（三

もの

月はなれば、空のけしきもものうらかにて）

ものうり ナ。物賣。あきびと。ものをうるひと。宇拾十（この事な、ものうりあやしうおもへども）

ものおき ナ。物置。ものをおさめおくところ。

ものおそろし サブ。物怖。ものごとおそろし。なにとなくおそろし。好忠集（日くるれば、下葉をぐらき、木の下の、ものおそろしき、夏のゆふぐれ）

ものおぢ ナ。物怖。ものごとにおそるゝをいふ。源夕顔（ものおぢをなん、わりなくせさせたまふ御ほんじやうにて、いかにおぼさるゝにか、右近もきこゆ）

ものおぼえ ナ。物覺。きゝさるなどをせすれぬをいふ。

ものおもしろし サ。ヒ。物面白。ものごとおもしろし。なにとなくおもしろし。源御法（三月の十日なれば、花盛にて、空の気色なども、うららかにおもしろく）

ものおもはし サブ。物思。ものおもひがほなり。うれへがほなり。源榊（こゝは、ものおもはしきひとの、月日へるべきさまへらんほどをおぼしやるは）

ものおもひ ナ。物思。ものをおもふをいふ。うれへにしづむをいふ。古今（ともしふれば、よそひはおはぬ、きゐれど、たなをしみれば、ものおもひもなし）

ものおもひがほに ツ。物思顔。ものおもひのさまに。うれへさるおもゝち。源帚木（いとものおもひがほにて、あれさる家の露けきをながめ）

ものおもひぐさ ナ。物思草。ものおもふくさむひ。源花散里（

もの

なりく、あまさの人のものおもひぐさなり）

ものおもふ ワ。ヒトリ。四。物思。ものをおもふ。うれへにしづむ。古今（夏山に、なくほとゝぎす、こゝろあらば、ものおもふ我に、聲なきかせそ）同（なきわたる、雁の涙や、おちつらん、ものおもふ宿の、萩の上の露）

ものかき ナ。物書。かきて。いうひつ。ものかかく、やく。

ものかきやく ナ。物書役。ものかきのかくやく。

ものかくし テ。物隠。ものをつゝみかくすをいふ。源浮舟（けしきあるまうと殿、ものかくしはなぞといふ）

ものかげ ナ。物陰。もののかげ。かくれさるところ。

ものがしら ナ。物頭。武家の役の名。旗、鉄、弓、鉄砲の足輕、同心などをひきゐるもの。

ものがたし サ。ヒ。物堅。つゝしみふかくてたしかなり。

ものがたらふ ワ。ヒトリ。四。物語。ものごとかたらふ。伊勢（それな、かのまめをとこうちものかたらひて）

ものがたり ナ。物語。ものごとのはなし。また、むかしばなしなどをかきたるさうし。伊勢（夜ふくるまで、酒のみ、ものがたりして、あるじの御子ゑひて）

ものがたりどころ ナ。物語所。ものがたりをするところ。栄花みねのゆめ（こゝろやすきものがたりどころは、殿上人などの、かの御かたの細殿をぞしける）

ものがたりふみ ナ。物語書。ものがたりのさうし。

ものがたりゑ ナ。物語繪。ものがたりのさまな、ゑにかきたるもの。源絵合（ものがたりゑこそこゝろへみえて、み

もの

どころあるものなれとて）

ものがたる ワ。カケ。ロ。物語。ものごとをかたる。

ものがなし サ。ブ。物悲。ものごと、こゝろにしみておぼえさり。山家集（やまおろしに、鹿の音たぐふ、ゆふぐれぞ、ものがなしとは、いふにやあるらん）

ものから ナ。スエ。物ながら。なれど。より。から。古今（今はとて、かへすことのは、ひろひおきて、おのがものから、かたみとやみん）同（ほとゝぎす、汝がなくさとの、あまたあれば、なほうとまれぬ、おもふものから）空穂国譲（一おやしく、入れすむものから、おさせぬところとは、おもひしぞろし）後撰（伊勢へまかりける人に、とくいなんところもとなるときゝて、旅の調度などとらする

ものきき ナ。物聞。武家の役の名。ものぎゝみのたぐひ。

ものぎたなし サ。ヒ。物穢。ものごと、なにとなくきたなし。源明石（古の事なもみしりてものきたなからず）

ものぎよし サ。ヒ。物清。ものごと、なにとなくきよし。源東屋（家の内もきらくしく、ものきよげにすみなし）

ものぐさ ナ。物臭。もののくさむひ。また、ものをいふは同じ。拾遺（たねなくて、なきものぐさは、おひにけり、まくてふ事は、あらじとぞおもふ）

ものくさし サ。ヒ。懶。ものうし。こゝろ、つとむることをするす、ます。十訓四（そらは、果報な期せん事云々、かやうの事なおもふものは、心の、いさりてものぐさく、性の、

もの

きそめて不覺なるがいたすところなり）

ものぐぶぎやう ナ。物具奉行。武家の役の名。よろひの奉行にて、旅行のときなどにはおくるゝもの。

ものぐらし サ。ヒ。物暗。けしき、なにとなくくらし。

ものぐるをし サブ。物狂。ものぐるほしに同じ。撰集抄三（この聖入れ、哉、ものぐるをしきやうをなんしたまへりける云々、清水の瀧の下によりて、合子をいふ物に、水をうけて、かくれどころをなん洗ひたまふ）

ものぐるひ ナ。物狂。きちがひ。こゝろのくるひさるをいふ。著聞六十（これは、法金剛院の惣門に侍るものぐるひなりと申して）和名（顚狂訓、太布流、俗云毛乃久流比）

ものぐるひ ナ。物狂。草名。おきなぐさをいふ。飛驒にて、

ものぐるほし サブ。物狂。こゝろのくるひさるさまなり。きちがひのごとし。枕草四（夜もおき居てなげゝば、きく人ものぐるほしとさらふ）同（白山の觀音、これきやさせたまふなといのるもものぐるほし）

ものけだまる ナゲキ。物承。ものうけたまはる。但し、よびかけにはいふことなり。源帚木（ものけたまはる、いづくにおはしますぞと、かれたる聲のをかしきにていもる。おきさせたまへと、きこえさするに）とりかへばや二（ここ）栄花山（ものけたまはれど）隠さまへるは、はしよりて、ものけたまはるとある聲に、うちおどろきてみあげたまへれば）

ものげなし サ。ヒ。無物氣。ものぞといふべきほどにもな

あいかた　名　相方　（相手）

あいかわらず　副　相変わらず　（以前と変わらないさま）

あいきょう　名　愛嬌　（愛らしさ）

あいさつ　名　挨拶　（応答の言葉）

あいず　名　合図　（知らせ）

あいそ　名　愛想　（愛嬌）

あいだがら　名　間柄　（関係）

あいて　名　相手　（対手）

あいにく　副　生憎　（都合悪く）

あいまって　連語　相まって　（互いに作用して）

あう　動　会う　（人に）

あう　動　合う　（一致する）

あえて　副　敢えて　（強いて）

あおい　形　青い　（色）

あおぐ　動　仰ぐ　（上を見る）

あおぐ　動　扇ぐ　（風を送る）

あおじろい　形　青白い　（顔色）

あおむけ　名　仰向け　（上向き）

あかい　形　赤い　（色）

あかす　動　明かす　（夜を）

あかす　動　明かす　（秘密を）

あかす　動　飽かす　（金を）

あかつき　名　暁　（夜明け）

あかり　名　明かり　（光）

あかるい　形　明るい　（光）

あかるい　形　明るい　（性格）

あき　名　秋　（季節）

あき　名　空き　（空間）

あきらか　形動　明らか　（はっきり）

あきらめる　動　諦める　（断念）

あきる　動　飽きる　（嫌になる）

あく　動　開く　（戸が）

あく　動　空く　（席が）

あく　動　明く　（夜が）

あく　動　飽く　（満足）

あくび　名　欠伸　（眠気）

あくまで　副　飽くまで　（徹底的に）

あくまで　副　あくまで　（最後まで）

あくまで　副　飽くまで　（極端に）

あくまで　副　あくまで　（どこまでも）

あくまで　副　あくまで　（本来）

あくまで　副　あくまで　（原則）

あくまで　副　あくまで　（例外なく）

あくまで　副　あくまで　（一貫して）

あくまで　副　あくまで　（終始）

あくまで　副　あくまで　（全く）

あくまで　副　あくまで　（絶対に）

あくまで　副　あくまで　（必ず）

あくまで　副　あくまで　（決して）

あくまで　副　あくまで　（どうしても）

あくまで　副　あくまで　（何としても）

あくまで　副　あくまで　（是非とも）

あくまで　副　あくまで　（ぜひ）

あくまで　副　あくまで　（なんとか）

あくまで　副　あくまで　（なんとかして）

あくまで　副　あくまで　（工夫して）

あくまで　副　あくまで　（努力して）

あくまで　副　あくまで　（精一杯）

あくまで　副　あくまで　（全力で）

あくまで　副　あくまで　（懸命に）

あくまで　副　あくまで　（一生懸命）

あくまで　副　あくまで　（真剣に）

あくまで　副　あくまで　（本気で）

あくまで　副　あくまで　（冗談ではなく）

あくまで　副　あくまで　（嘘ではなく）

あくまで　副　あくまで　（事実として）

あくまで　副　あくまで　（現実として）

あくまで　副　あくまで　（客観的に）

あくまで　副　あくまで　（主観的に）

あくまで　副　あくまで　（個人的に）

あくまで　副　あくまで　（私的に）

あくまで　副　あくまで　（公的に）

あくまで　副　あくまで　（社会的に）

あくまで　副　あくまで　（法的に）

あくまで　副　あくまで　（道徳的に）

あくまで　副　あくまで　（倫理的に）

あくまで　副　あくまで　（宗教的に）

あくまで　副　あくまで　（哲学的に）

あくまで　副　あくまで　（科学的に）

あくまで　副　あくまで　（論理的に）

あくまで　副　あくまで　（合理的に）

あくまで　副　あくまで　（経済的に）

あくまで　副　あくまで　（政治的に）

あくまで　副　あくまで　（軍事的に）

あくまで　副　あくまで　（外交的に）

あくまで　副　あくまで　（内政的に）

あくまで　副　あくまで　（国際的に）

あくまで　副　あくまで　（国内的に）

あくまで　副　あくまで　（地域的に）

あくまで　副　あくまで　（全国的に）

あくまで　副　あくまで　（世界的に）

あくまで　副　あくまで　（歴史的に）

あくまで　副　あくまで　（伝統的に）

あくまで　副　あくまで　（慣習的に）

あくまで　副　あくまで　（習慣的に）

あくまで　副　あくまで　（日常的に）

あくまで　副　あくまで　（定期的に）

あくまで　副　あくまで　（不定期に）

あくまで　副　あくまで　（臨時に）

あくまで　副　あくまで　（緊急に）

あくまで　副　あくまで　（至急に）

あくまで　副　あくまで　（速やかに）

あくまで　副　あくまで　（迅速に）

あくまで　副　あくまで　（正確に）

あくまで　副　あくまで　（厳密に）

あくまで　副　あくまで　（詳細に）

あくまで　副　あくまで　（簡潔に）

あくまで　副　あくまで　（明瞭に）

あくまで　副　あくまで　（曖昧に）

あくまで　副　あくまで　（漠然と）

あくまで　副　あくまで　（具体的に）

あくまで　副　あくまで　（抽象的に）

あくまで　副　あくまで　（一般的に）

あくまで　副　あくまで　（特殊的に）

あくまで　副　あくまで　（普遍的に）

あくまで　副　あくまで　（個別的に）

あくまで　副　あくまで　（総合的に）

あくまで　副　あくまで　（分析的に）

あくまで　副　あくまで　（体系的に）

あくまで　副　あくまで　（組織的に）

あくまで　副　あくまで　（計画的に）

あくまで　副　あくまで　（意図的に）

あくまで　副　あくまで　（偶然に）

あくまで　副　あくまで　（必然的に）

あくまで　副　あくまで　（自然に）

あくまで　副　あくまで　（人為的に）

あくまで　副　あくまで　（人工的に）

あくまで　副　あくまで　（天然に）

あくまで　副　あくまで　（物質的に）

あくまで　副　あくまで　（精神的に）

あくまで　副　あくまで　（肉体的に）

あくまで　副　あくまで　（心理的に）

あくまで　副　あくまで　（生理的に）

あくまで　副　あくまで　（病理的に）

あくまで　副　あくまで　（解剖的に）

あくまで　副　あくまで　（生物的に）

あくまで　副　あくまで　（化学的に）

あくまで　副　あくまで　（物理的に）

あくまで　副　あくまで　（数学的に）

あくまで　副　あくまで　（統計的に）

あくまで　副　あくまで　（確率的に）

あくまで　副　あくまで　（偶然的に）

あくまで　副　あくまで　（必然的に）

あくまで　副　あくまで　（論理的に）

あくまで　副　あくまで　（合理的に）

あくまで　副　あくまで　（経済的に）

あくまで　副　あくまで　（政治的に）

あくまで　副　あくまで　（軍事的に）

あくまで　副　あくまで　（外交的に）

あくまで　副　あくまで　（内政的に）

あくまで　副　あくまで　（国際的に）

あくまで　副　あくまで　（国内的に）

あくまで　副　あくまで　（地域的に）

あくまで　副　あくまで　（全国的に）

あくまで　副　あくまで　（世界的に）

あくまで　副　あくまで　（歴史的に）

あくまで　副　あくまで　（伝統的に）

あくまで　副　あくまで　（慣習的に）

あくまで　副　あくまで　（習慣的に）

あくまで　副　あくまで　（日常的に）

あくまで　副　あくまで　（定期的に）

あくまで　副　あくまで　（不定期に）

あくまで　副　あくまで　（臨時に）

あくまで　副　あくまで　（緊急に）

あくまで　副　あくまで　（至急に）

あくまで　副　あくまで　（速やかに）

あくまで　副　あくまで　（迅速に）

あくまで　副　あくまで　（正確に）

あくまで　副　あくまで　（厳密に）

あくまで　副　あくまで　（詳細に）

あくまで　副　あくまで　（簡潔に）

あくまで　副　あくまで　（明瞭に）

あくまで　副　あくまで　（曖昧に）

あくまで　副　あくまで　（漠然と）

あくまで　副　あくまで　（具体的に）

あくまで　副　あくまで　（抽象的に）

あくまで　副　あくまで　（一般的に）

あくまで　副　あくまで　（特殊的に）

あくまで　副　あくまで　（普遍的に）

あくまで　副　あくまで　（個別的に）

あくまで　副　あくまで　（総合的に）

あくまで　副　あくまで　（分析的に）

あくまで　副　あくまで　（体系的に）

あくまで　副　あくまで　（組織的に）

あくまで　副　あくまで　（計画的に）

あくまで　副　あくまで　（意図的に）

あくまで　副　あくまで　（偶然に）

あくまで　副　あくまで　（必然的に）

あくまで　副　あくまで　（自然に）

あくまで　副　あくまで　（人為的に）

あくまで　副　あくまで　（人工的に）

あくまで　副　あくまで　（天然に）

あくまで　副　あくまで　（物質的に）

あくまで　副　あくまで　（精神的に）

あくまで　副　あくまで　（肉体的に）

あくまで　副　あくまで　（心理的に）

あくまで　副　あくまで　（生理的に）

あくまで　副　あくまで　（病理的に）

あくまで　副　あくまで　（解剖的に）

あくまで　副　あくまで　（生物的に）

あくまで　副　あくまで　（化学的に）

あくまで　副　あくまで　（物理的に）

あくまで　副　あくまで　（数学的に）

あくまで　副　あくまで　（統計的に）

あくまで　副　あくまで　（確率的に）

あくまで　副　あくまで　（偶然に）

あくまで　副　あくまで　（必然的に）

あくまで　副　あくまで　（論理的に）

あくまで　副　あくまで　（合理的に）

あくまで　副　あくまで　（経済的に）

あくまで　副　あくまで　（政治的に）

あくまで　副　あくまで　（軍事的に）

あくまで　副　あくまで　（外交的に）

あくまで　副　あくまで　（内政的に）

あくまで　副　あくまで　（国際的に）

あくまで　副　あくまで　（国内的に）

あくまで　副　あくまで　（地域的に）

あくまで　副　あくまで　（全国的に）

あくまで　副　あくまで　（世界的に）

あくまで　副　あくまで　（歴史的に）

あくまで　副　あくまで　（伝統的に）

あくまで　副　あくまで　（慣習的に）

あくまで　副　あくまで　（習慣的に）

あくまで　副　あくまで　（日常的に）

あくまで　副　あくまで　（定期的に）

あくまで　副　あくまで　（不定期に）

あくまで　副　あくまで　（臨時に）

あくまで　副　あくまで　（緊急に）

あくまで　副　あくまで　（至急に）

あくまで　副　あくまで　（速やかに）

あくまで　副　あくまで　（迅速に）

あくまで　副　あくまで　（正確に）

あくまで　副　あくまで　（厳密に）

あくまで　副　あくまで　（詳細に）

あくまで　副　あくまで　（簡潔に）

あくまで　副　あくまで　（明瞭に）

あくまで　副　あくまで　（曖昧に）

あくまで　副　あくまで　（漠然と）

あくまで　副　あくまで　（具体的に）

あくまで　副　あくまで　（抽象的に）

あくまで　副　あくまで　（一般的に）

あくまで　副　あくまで　（特殊的に）

あくまで　副　あくまで　（普遍的に）

あくまで　副　あくまで　（個別的に）

あくまで　副　あくまで　（総合的に）

あくまで　副　あくまで　（分析的に）

あくまで　副　あくまで　（体系的に）

あくまで　副　あくまで　（組織的に）

あくまで　副　あくまで　（計画的に）

あくまで　副　あくまで　（意図的に）

あくまで　副　あくまで　（偶然に）

あくまで　副　あくまで　（必然的に）

あくまで　副　あくまで　（自然に）

あくまで　副　あくまで　（人為的に）

あくまで　副　あくまで　（人工的に）

あくまで　副　あくまで　（天然に）

あくまで　副　あくまで　（物質的に）

あくまで　副　あくまで　（精神的に）

あくまで　副　あくまで　（肉体的に）

あくまで　副　あくまで　（心理的に）

あくまで　副　あくまで　（生理的に）

あくまで　副　あくまで　（病理的に）

あくまで　副　あくまで　（解剖的に）

あくまで　副　あくまで　（生物的に）

あくまで　副　あくまで　（化学的に）

あくまで　副　あくまで　（物理的に）

あくまで　副　あくまで　（数学的に）

あくまで　副　あくまで　（統計的に）

あくまで　副　あくまで　（確率的に）

しつれ、朝廷につかへまつるひとをすべていへり。万六(物部の、八十伴雄の、うらぎへて、ことなみあけば)源総角(いふするものゝふ、めでたきなりとも、みてはうちゑまれぬべきさましたまへれば)

もののふし　ナ。物節。近衛の舎人の中にて東遊をよくするものをいふ称なりとぞ。空穂祭使(右近の中将、少将、ものゝふしらひきゐて参りたり)源松風(近衛府の名ざきをねり、ものゝふしどもさぶらふは)

もののふの　ナ。物部之。ものゝふは、たけくいちむやきものなれば、うちはかけていふ。‖うらは、いづはおなじく、いちむやきをいふ語なり。ちはやぶるのところ見合すべし。‖やそは冠らするは、物部は、幾氏もあればなり。また、‖なごとは冠らするは、男は、猛きものなればなり。また、‖いそは冠らするは、物部は、いさむ事あればなり。万三十(物部之、氏川とらり、などめらは、逢坂山は、手向草、幣とりおきて)同(物部乃、八十心を、天地は、思ひたらむし)同六(物部之、八十伴雄の、うちそへて、里なみあけば)同十(秋野はは、今こそゆらめ、母能乃布能、乎等古をみなの、そなにほひみよ)同八(物部乃、石瀬之社の、ほとゝぎす、今もなかぬか、山の常陰に)

もののべ　ナ。物部。ものゝふ。また、姓の名にいふ。

もののほん　ナ。物本。ものごとをかきたるほん。

もののまぎれ　ナ。物紛。ものごとのまぎれ。源少女(うとくしければ、御遊などもけどほきを、けふは、もののまぎれにいりさちまへるなめり)

ものむかなし　サ。ビ。物寂。なにとなくむかなし。六帖四(ともすれど、なにそもあるし。ゆめのうちは、ものそらなくて、やみはしものを)

ものむち　ナ。物恥。ものごとをむづるをいふ。源末摘花(ものむちをみあらむさんの御心も、ことはなくて)

ものむづかし　サ。プ。物難。ものごと、なにとなくむづかし。源少女(かきみは、ものむづかしく胸つぶれて)

ものまみ　ナ。物食。まぶつくふ。和名(沙庵和名、加仁乃毛乃波美)

ものむり　ナ。物張。てんぐさ。てうや。拾玉(それもいさ、爪は藍まび、ものむりの、あらしとりおく、薄姿よ)

ものび　ナ。物日。まつりなどあるひのとなへ。

ものふかし　サ。ビ。物深。ものごとふかし。風雅(霞みあへず、猶ふる雪は、空さえて、春ものふかき、掘炎の許)

ものふる　ワ。ヒトリ。カ二。物古。ものごとふるくなる。源若紫(ものふりたる所の、いとゞひとすくなは淋しければ)

ものほし　ナ。物干。あらひたるきぬなどをほすところ。

ものほしざを　ナ。物干竿。ものほしは同じ。

ものまう　ナゲヤ。物申。たのむ。ひとのいへはゆきて、あんないをこふときのことば。どうれと見合すべし。

ものまうす　ワ。ヒトリ。ロ。物申。ものをまうす。古今(うちわたす、をちかたびとは、ものまうすわれ、そのそこは、しろくさけるは、なにのはなそも)

ものまうで　ナ。物詣。さんけい。神仏はまうづるをいふ。源椎本(ものまうでのなかやどり、往来のほどの、なほざりごとは、けしきばみけて)

ものまさ　ナ。戸者。かりもがりのほど、なきひとのきぬをきて、さぶらひくるひとはあふひとをいふとぞ。神代紀(以鶏為戸者、以鶺鴒為哭者)

ものまなび　ナ。学問。ものごとのみちをまなぶをいふ。

ものまね　ナ。物真似。もののまね。十訓一(さやうのものまねするを、おのれが徳とするなりといひて)

ものまねび　ナ。物学。ものごとのまなび。源手習(門田の稲かるとて、ところにつけたるものまねびしつゝ)

ものまへ　ナ。物前。ものごとのあるまへかた。

ものまゐり　ナ。物参。さんけい。ものまうで。

ものまゐる　ワ。ヒトリ。四。物参。おものなどまゐる。源少女(物まゐりなどしさまへど、更はまゐらで、昼さまひぬるやうなれど、心も空にて、ひと志づまるほどに)

ものまをす　ワ。ヒトリ。ロ。物申。ものをまうす。古事記(山城の、筒木宮に、物能麻袁須、あが兄君は、涙ぐましも)

ものみ　ナ。物見。けんぶつ。また、ものをみるところ。また、もののさまをうかゞふひと。枕草三(おぼつかなきもの云々、ひとのかほみしらぬものみ)

ものみぐるま　ナ。物見車。ものみのひとののりたるくるま。枕草十(二條の大路に、立ちたてて、物見車のやうにてたちならべたることなかし)

ものみだかし　サ。ビ。物見高。ものみはきそひたつなり。

ものみぐさ　ナ。物見草。楓の名。かへでの異名。ことよせ

ものみな　ナ。物皆。すべてのもの。万十(物皆は、新しきよし、たゞひとは、ふりたるのみし、よろしかるべし)

ものみぶね　ナ。物見船。ものみのひとののりたるふね。

ものむつかし　サ。プ。物難。ものごと、なにとなくむつかし。狭衣一(つれぐはおぼさるゝまゝに、雨雲さへたちせさりて、ものむつかしきなぐさめは)

ものめかし　サ。プ。物。ものめかしておりもつくしくており。山家集(あられまぞ、ものめかしくは、きこえける。かれたる楢の、柴の落葉に)

ものめかす　ワ。カゲ。四。物。ものとみゆべくなす。ものくしくなす。源藤袴(何事もなのめならぬ御有様を、ものめかしいでさまふは、いかなりける御心にか)

ものめで　ナ。物愛。ものごのみ。源蜻蛉(ものめでするさかき人まで、身はあみて、深は、めでたしと見奉る)

ものものし　サ。プ。物々。ものとしてみるべくあり。おもくし。とこころせし。もつさいらし。この語は、今は、ものくしいと、いをそへていふ。山家集(山ふかみ、こぐらき峰の、こずゑより、ものくしくも、ささるあらしか)空穂国譲(獎たけはあまりて、ものくしうきよげなる人の、こゝろにくゝみそろあるなり)

ものものしい　サ。物々。もののしを見るべし。

ものもらひ　ナ。物貰。かたゐのたぐひをすべていふ。

ものもらひ　ナ。物貰。眼病の名。まぶたのうちべなどはいでくるつぶさるちひさきもれもの。

ものやはらかに　ソ。物柔。ものごとやはらかに。源帚木(律のしらべは、女の、ものやはらかにかきならして、簾の内よりきこえたるも、今めきたる物の声なれば)

ものやみ　ナ。物病。やまひ。わづらひ。伊勢(いみで、この男はものやまひをと思ひけり、うちいでん事かたくやありけん、ものやみになりて死ぬべきときに)

ものゆゑ　テ。スエ。物故。ものなから。ものなるに。ものなるよりは。伊勢(むかしなる、睦ましかよふ心なきまりとて人の、あらぬものゆゑ)狭衣三(いさや、ながからざらんものゆゑ、中々ならん嘆などのあらんこそいと苦しかるべければ)長門平家物十一(かなはぬものゆゑ、敵に、後をみせんもうたてく候ふ)

ものよし　ナ。物吉。病の名。らいびやうの異名。

ものよみ　ナ。物読。あやうしなどを、つねによむひと。

ものよりことに　ソ。世のつねとかはりて。枕草五(行事の蔵人のかいねり、物よりことにきよらはみゆ)

ものいふ　ワ。ヒトリ。四。物言。ものなどいふ。古今(三月のついたちは、忍のびは、人にものいひてのちは)

ものわすれ　ナ。物忘。ものごとのわすれ。貫之集(古は、なほたちかへる、心かな、恋しき事は、ものわすれせで)

ものわびし　サ。プ。物侘。ものごとなにとなくわびし。源明石(いともの心びしき事かずしらず、さしもさ、ゆくさき、恐しき御有様は、心づよくしもえおぼしたゝず)

ものわびしらに　ソ。物侘。ものごと、なにとなくさびしげに。古今(いのちとて、つゆをたのむに、かたければ、ものわびしらに、なく野辺のむし)

ものわらひ　ナ。物笑。ものごとのわらひぐさ。源行幸(物笑ひたへぬれ、すべりいでてなんなどよめける)

ものゑんじ　ナ。物怨。ものごとをゑんずるをいふ。源帚木(かろぐしきものゑんじすべきにもあらず、世のたうりをおもひとりてうらみざりけり)

ものを　ナゲキ。物。ものなるを。などて。源葵(故宮の、いとやんごとなくおぼしときめかしさまひしものを)

ものをしみ　ナ。物惜。をしみて、いさしがさくするをいふ。枕草十(いかに、いやしくものをしみせさせさまふ宮とて、我れ、うまれさせさまひしより、いみじうつかうまつれど、おろしの御衣ひとつたまはぬぞ)

もは　ナ。藻。海草の名。もとはは同じ。延喜式(奥津藻菜、辺津藻菜至万氏附)和名(藻和名毛、一云毛波　水菜也)

もは　ナ。大葉藻。海草の名。あまもは同じ。

もはん　ナ。模範。てほん。ものごとののりとするもの。

もはや　ソ。最早。いまはや。いまとなりては。

もはら　ソ。専。まさく。すべて。むねと。ひとむきに。ひたすらに。古今(ある琴の、もはらたえぬる、時にこそ、人のこひしき、こともありけれ)竹取(もはら、さやうのみやづかへ、つかうまつらじとおもふを)

もひ　ナ。盌。水。みづなもるうつは。また、たゞ、みづなる

いふ。武烈紀（たまけには、いひさへもり、柁摩蓁比こ、みづさへもり）催馬楽（飛鳥井に、やどりはすべし、おけ、かげもよし、美毛比もさむし、みまくさもよし）和名（椀字亦作碗、辨色立成云、小盂也、末里、俗云毛比）

もひとり　ナ。主水。もひとりのつかさのひと。

もひとりのつかさ　ナ。主水司。宮内省の被管。正、佑、令史などいふ官人ありて、漿、かゆ、氷室などの事をつかさどるところ。和名（主水司毛比止里乃豆加佐）

もふ　ワ。カク。田。思。おもふ。万十九（あまくもの、そきへのきはみ、わが念有、きみにあわれん、日はちかづきぬ）

もふく　ナ。喪服。ものいみにきるつるばみのころも。

もぶし　ナ。諸伏。魚の名。形、こひに似て、肥えて、首ふとく、鱗かさし。また、全身黒ずみて、尾は赤ずみあり。

もぶしつかぶな　ナ。藻臥束鮒。つぶなの、藻のきさにかくれさるもの。万四（おきべゆき、辺にゆきいまや、妹がため、わがすなどれる、藻臥束鮒）

もぶね　ナ。喪船。ひつぎをのせさるふね。古事記（喪船）

もほのすも　ソ。如思。おもふごとくも。おもふやうにも。万十四（まつがうらに、さわゑうらだち、まひとごと、おもほすなもろ、わが母抱乃須毛）

もま　ナ。鼯鼠。獣の名。むささびをいふ。薩摩にて。

もみ　ナ。鼯鼠。獣の名。むささびに同じ。

もみ　ナ。籾。米の、皮をかぶれるもの。和名（籾和名毛美）

もみ　ナ。蛙。虫の名。かへづに同じ。撥吟集（苗代に、みくむらりある、蛙なや、吉野の国栖は、もみといふらん）應神紀（國樔者云々、亦嘗蝦蟆爲上味、名日毛瀰）

もみ　ナ。揉。もむに同じ。紫式部日記（殿をはじめたてまつりて、舞うちさまふ。紙のおちそひいときまさなし）

もみ　ナ。樅。木の名。木の状、檜の木に似て、皮は、よこすぢあり。葉は、松のごとく、また、椎にも似て、實は、松の實のごとし。和名（樅、松葉柏身和名毛美）

もみ　ナ。紅絹。きぬの、あかくそめさるもの。

もみうり　ナ。採瓜。瓜の名。あさうりに同じ。

もみがら　ナ。籾殻。もみの、こめをとりさるあとのから。

もみがれ　ナ。揉草。やわらかにもみなしさるつくりくさ。

もみすずめ　ナ。籾雀。もみにすだくすずめなるべし。定家卿三百首（秋の田に、かるてふ稲の、もみすずめ、餌をうとむにや、鷹にかからん）

もみだす　ワ。カケ。ル。揉出。もみておしいだす。

もみぢ　ナ。紅葉。このはの、あきのすゑになりて、あかくいろづきさるもの。古今（みるひとも、なくてちりぬる、奥山の、もみぢはよるの、にしきなりけり）

もみぢ　ナ。紅葉。木の名。かへるでに同じ。

もみぢ　ナ。絳染。襲の色目の名。表はくれなゐにて、裏の青なるもの。雁衣鈔（蘇芳まで、表は赤色に、裏は濃き赤色なりともいへり）後成卿女集（くれなゐに、うしほやそめし、山姫の、もみぢがさねの、衣手のもり）

もみぢがさ　ナ。紅葉笠。小唄の名。三味線にて歌ふもの。

もみぢがさね　ナ。紅葉襲。襲の色目の名。もみぢを見るべし。夫木卅五（たつたひめ、ときのみけしや、これならん、もみぢがさねの、ころもでのもり）

もみぢがり　ナ。紅葉狩。もみぢをみそやすあそび。

もみぢす　ワ。ヒドリ。カ。紅葉。もみづ。このはあかくいろづく。後拾（もみぢせば、あかくなりなん、をぐらやま、あきまつほどの、名にこそありけれ）

もみぢどり　ナ。紅葉鳥。獣の名。鹿の異名。藻鹽草

もみぢのにしき　ナ。紅葉錦。もみぢの、うるはしくて、にしきのごとくなるをいふ。古今（この度は、ぬさもとりあへず、手向山、もみぢのにしき、神のまにまに）

もみぢのはし　ナ。紅葉橋。あまのがはのはし。かささぎのはしのたぐひなり。新古（ほしあひの、ゆふべすずしき、天の川、もみぢのはしを、わたる秋風）

もみぢば　ナ。紅葉。もみぢに同じ。後撰（紅葉ばを、分けつつゆけば、錦きて、家にかへると、ひとやみるらん）

もみぢばの　●●。紅葉之。もみぢは、ことに、ちりすぐるを、をしむゆゑに、すぐにかけていふ。万二（沖津藻の、なびきし妹は、黄葉乃、過伊去等、玉梓の、使のいへば）

もみぢふ　ナ。紅葉斑。あかくきざみさるあや。

もみぢみ　ナ。紅葉見。もみぢがり。新拾（如何して、ありし心を、なぐさめん、紅葉見にとも、さそはれぬ身は）

もみぢむしろ　ナ。紅葉席。もみぢの、ちりて、むしろをしきたるごとくなれるもの。後撰（草枕、もみぢむしろに、

かへさらば、心をくだく、ものならましや）

もみづ　ワ。ヒドリ。カニ。紅葉。このは、あきになりて、あかくいろづく。古今（ものごとに、秋ぞ悲しき、もみぢつつ、うつろひゆくを、かぎりと思へば）同（雪ふりて、年のくれぬる、時にこそ、つひにもみぢぬ、松もみえけれ）

もみない　ザ。無味。うまくなきをいふ。摂津、河内にて。

もみぬか　ナ。籾糠。もみがらに同じ。

もみよね　ナ。籾米。かちしねに同じ。

もみれうぢ　ナ。揉療治。あんま。あんぶく。もみとり。

もみゑぼし　ナ。揉烏帽子。うるしぬりのゑぼしの、やはらかにもみなしさるもの。兜の下にきるものなり。

もむ　ワ。カナ。ロ。揉。てなもておしすりくす。おしすりくして、やわらかにす。万十六（細螺な、いひろひもち来て、石もちて、つきやぶり、早川に、あらひすすぎ、辛塩に、こごと毛美、たかつきにもり、机にたてて）落窪ニ（何の仇にて、とにかくに、恥をみせさまふらん云々、何者ならんとて、北の方、手をもみさまふ）

もむ　ワ。ヒドリ。シニ。議。いりみだる。あらそふ。こんざうす。この語は、地方によりては、もめると下一段にいふ。

もむない　ザ。無味。うまくなきをいふ。摂津、河内にて。

もん　ナ。門。かど。また、いへのいりくちのかまへ。

もん　ナ。紋。あや。もやう。もんどころ。枕草三（ふるさめみ、あやの紋にても、こともの よりは おかし）

もん　ナ。文。ぜにのかずをかぞふるときのことば。一文はひとつ。ぜにのところ見合すべし。

もんか　ナ。門下。もんのうち。また、もんじん。

もんかう　ナ。問拷。とがめ。かんがう。十訓六（小大進を召しけれども、かるもんかうをおふ事は、心憂きものにおぼしめさるゝやうのあればこそとて、やがて、仁和寺なるところにこもり居にけり）

もんがまへ　ナ。門構。いへのいりくちのかまへ。

もんかん　ナ。門鑑。もんのいでいりにもちふるてがた。

もんきりがた　ナ。紋切形。つねのれいとしさるをいふ。

もんく　ナ。文句。ぶんしやうのことば。また、くちことば。

もんぐわい　ナ。門外。もんの外。かどのそと。

もんくわん　ナ。文官。ぶんくわん。大臣よりはじめて、納言、辨など、すべて、武官ならぬ官人をいふ。

もんげん　ナ。門限。もんの、あけたてのぢこくのさだめ。

もんこ　ナ。門戸。かどぐち。いへのいりくち。

もんごん　ナ。文言。ぶんしやうのことば。

もんざい　ナ。文才。ぶんさい。ぶんしやうをつくるなどのぶんがくのうへのさい。源少女（ひろきところをあらはしほどは、文才をまねぶにも、琴、ふえのあらべにも）

もんざうのしやう　ナ。文章生。大學寮にてがくもんするがくしやう。源帚木（まだ文章の生に侍りしとき、かしこき女のためしをなんみさまへし）

もんざうはかせ　ナ。文章博士。大學寮の博士にて、文章の事をつかさどるもの。源藤裏（むつましくおぼすもんざうはかせめして、願文つくらせさまふ）

もんじ　ナ。文字。もじを見るべし。

もんじん　ナ。門人。でし。をしへご。もんせい。

もんしや　ナ。紋紗。あやの、あやをおりいだしさるもの。

もんじやうしやう　ナ。文章生。もんざうのしやうに同じ。

もんじやうはかせ　ナ。文章博士。もんざうはかせに同じ。

もんじやく　ナ。文籍。ふみ。しよもつ。源總角（文籍にも、祭といふ事あるべくや、なにがしのをしへも、よくおぼしさるらんとおもひさまふるを）

もんしゆ　ナ。門主。もんぜきのぢゆうぢのそう。

もんじゆ　ナ。文殊。菩薩の名。拾遺（かびらゑに、共ちぎりし、かひありて、もんじゆの御顔、あひみつる哉）

もんじよ　ナ。文書。ぶんしよ。かきもの。かきつけ。空穂藤原君（志あるを云々、かくのごとく、ひとのなげきのぞきさまへて、ひとのなげきねがひみつべしをなん、もんじよにいへる、まことにあるものなり）

もんせい　ナ。門生。でし。をしへご。もんじん。

もんぜき　ナ。門跡。法親王の、住持として居さまふ寺のとなへ。また、その住持の僧をもいふ事あり。

もんぜつ　ナ。悶絶。もだえてきぜつするをいふ。

もんぜん　ナ。門前。かどのまへ。七一番歌合（月はさすは、勧学院の、もんぜんは、たらはる道の、人ぞまれなる）

もんぞ　ナ。文書。もんじよに同じ。空穂蔵開（ふみのせうもちといふものみさまふとてなん、もんぞといふもの

みさまつきぬれば、せけんのな侍らぬものなり）
もんぞふみ ナ文書。もんじよといふに同じ。空穂物語（さるもんぞふみなどをさへ、たづねいでられ、さらん、いとかしこきこと、よろづのふみどもなどぐして）
もんだい ナ問題。とひくることのだい。
もんだふ ナ問答。とふとこたふると。狭衣三（問答どもの、おとらじとあらそふくちぎその事どもも）
もんち ナ門地。いへがら。たふときいへ。
もんちやく ナ悶着。いさかひ。あらそひ。さわぐ。
もんちゆう ナ問注。ぎんみ。うつたへ。著聞廿（争論の事ありて、六波羅にて、問注すべきにさだまりにけり）沙石集三（おそれいりさるよし、御披露さぶらへとて、それを、問注はまけてかへりしを）
もんぢゆうしよ ナ問注所。もんぢゆうをするところ。
もんちりめん ナ紋縮緬。ちりめんの、あやあるもの。
もんつき ナ紋付。こそでの、もんどころあるもの。
もんてい ナ門弟。でし。みでし。もんじん。
もんと ナ門徒。しゆうもんのもんじや。
もんど ナ主水。もひとりをあやまりたるとなへ。
もんどころ ナ紋所。いへのしるしに、はなとりなどのかたち、さまざまにゑがきなしたるもの。
もんとしゆう ナ門徒宗。しんしゆうに同じ。
もんどのつかさ ナ主水司。もひとりのつかさに同じ。
もんどりのつかさ ナ主水司。もひとりのつかさに同じ。

もんにん ナ文人。もんざうのしやうに同じ。空穂吹上（陸の臣は、文人がくしやうなどつきなみぬ）
もんにんぎざう ナ文人擬生。もんざうのしやうを、ぎざうといふ。源少女（もんにん、ぎざうなどいふなる事どもより、うちはじめ、すべくしうしもてさまへれど）
もんば ナ紋羽。もめんの、あつく、まとけなくぶちさるごとくにて、なめなるあやあるもの。
もんばつ ナ門閥。いへがら。たふときいへがら。
もんばん ナ門番。かどもり。もんのばんにん。
もんぴ ナ門扉。かど。また、とびら。太平記（蔵貝、不侍なりといへども、舞家の門扉をして、譜代、弓箭の名をけがせり云々、本国にかへりて、義兵をあげ、先朝のおんきんなやすめたてまつらんと存ぜさるが）
もんまう ナ文盲。もじをよむことのいできぬひと。
もんめ ナ匁。文目。銭、また、秤目にいふ語。銭にては、小判の一両を、千にわけたるひとつにあたり、秤目にては、一文目を千あつめたるを、貫といふ。
もんゐん ナ門院。にようゐんに同じ。
もめ ナ揉。てんざう。あらそひ。さわぐ。
もめん ナ木綿。くさきのな。また、くさきなるを、いとにひきておりたるおりもの。綿武者騒記（木綿の雨羽服を、引手綿にきせさてまつる）
もめんいと ナ木綿絲。もめんの、いとにひきさるもの。
もめんおり ナ木綿織。もめんいとにておりたるもの。

もめんがつぱ ナ木綿合羽。あまぎぬをいふ。
もめんぎれ ナ木綿切。もめんおりのきれはし。
もめんちぢみ ナ木綿縮。もめんおりのちぢみ。
もめんもの ナ木綿物。もめんおりのもの。
もめんわた ナ木綿。もめん。くさきのこと。
もめる サ。揉。もむを見るべし。
もも ナ桃。木の名。果の名。木のさま、桜に似て、葉は、すこし、梅の葉に似て、ながくして、いろあをし。春のすゑ、花さきて、夏のすゑ、実をむすぶ。実は、皮に、毛のごときものありて、肉の味あまく、また香気あり。花は、おほきもの、ちひさきもの、あり。実も、また、そのたぐひによりて異なり。和名（桃子和名、毛々）
もも ナ桃。襲の色目の名。表は紅、裏は紅梅なるをいふ。胡曹抄。また、表は白、裏は紅なりともいへり。胡曹抄、薄紅梅
もも ナ股。あしの、こしにつづきたるところ。雍州式（向股）和名（股也）
もも ナ百。ひやく。とを、とを、あわせたるかず。また、たゞ、おほくのかずのあまたなるをいふ。万廿（百に千に、人はいふとも、月草の、うつし心を、わがもためやも）
ももいろ ナ桃色。染色の名。くれなゐのうすきいろ。
ももいろどり ナ百色鳥。いろいろさまざまのとり。
ももか ナ百日。もゝのひかず。また、小児のうまれて、百日にあたる日をいふ。この日、餅などつきなどして

いそふ事あり。狭衣三（一品の宮の、いみじうゆかしがらせさまひしかば、百日のほどにまゐらせさてまつり）
ももかは ナ桃皮。やまもゝのかは。煎じいだして、汁として、ふるくあかざみさるいろをそむるにもちふ。
ももからみ ナ百絡。いくすぢともなく、おほくからみさるをいふ。万代（宮木ひく、ねりそのつなの、もゝぢみ、よせるけしきも、みえぬ君かな）
ももくさ ナ百草。木の名。まつの異名。家国草
ももくさ ナ百種。おほくのさな。拾遺（百種に、八十種そへて、たまひてし、乳房のむくひ、けふぞさがする）
ももぞえ ナ鼯鼠。獣の名。むさゝびをいふ。東国にて、
ももくま ナ百隈。あまたのくま。万二（毛母久麻の、道は来ましを、まさきさには、八十島すぎて、わかれかゆかん）
ももこゑどり ナ百声鳥。ほとゝぎすの異名。家国草
ももさかぶね ナ百尺船。おほきなるふねをいふ。さかを見合すべし。万十（百船、船かづき、いるゝ、やうらなし、人は来れとも、その名はのらじ）
ももさへづり ナ百囀。いくさびともなく、あまたさへづるをいふ。堀川次郎（つれづれと、なにはつけても、さぎもん、もゝさへづりの、とりなりせと）
ももしき ナ百敷。おほうち。もゝしきのを見合すべし。源末摘花（もゝしきはゆきたふ人の、きくおもりやれとてあしよそてるも、あいなう、いかぎもの、てきさまをんと）
ももしきの マクラ。百敷之。もゝしきとは、五百磯城といふべきなり。つゝめる語にて、五百磯といふものの、おほきをいひ、磯城とは、石をたゝみさる、かこひのめしきをいひ。さて、おほみやはかぶらせていふは、古上の宮にましましける宮は、堅固なるべきをもて、ほめさゞふるまにいふなりとぞ。古事記（毛毛志紀能、淤富美夜比登は、うづらとり、ひれとりかけて）
ももしぬの マクラ。百小竹之。もゝしぬとは、あまたの草の、しなえさるをいへるにて、そのやわらかなる、なよなよと、めるを、ぬともいへば、ぬはかけていふ。万三（百小竹之、三野王、にしのうまや、たててかふこま、東のうまや、たててかふこま）
ももしね マクラ。百小竹。もゝしねは、もゝしぬのうつりさるにて、ぬはかけていふ。万十三（百岐年、三野之国の、高北の、泳宮に、日むかひに、ゆきなびかくを）
ももじり ナ桃尻。うまにのりながら、そのしりのすわらぬをいふ。さて、すわりゐて、ひざをうごかすくせをいふ。徒然草（馬などに、むかへはおこせさらんは、もゝじりにておちなんは、心うかるべし）長門本平家六（六度まで、御落馬あり。世の人、桃尻とぞ申しける）
ももず ワカ。カ。鵯。ひよどりといふ。甲斐にて、
ももぞめ ナ桃染。染色の名。たふそうに同じ。
ももだち テ。股立。はかまの、みぎひだりのもゝのそばあくところ。今昔廿（女、袴のもゝだちをひきあげて、みすれば）雅装（もゝだちを、いろいろにくみさる絲してつかまり、つかりやうならふべし）
ももたらず マクラ。百不足。やそは八十、いは五十にて、八十も、五十も、百のかずにたらぬゆゑに、もゝたらず、といひて冠らせていふ。また、やまに冠らするは、八十のやのおとにかけさるなり。古事記（倭者、百不足、八十坰手隱而侍）万一（もゝたらず、五十日太にとつくり）同廿（百不足、山田道を、なみくもの、うつくしづまと、かたらはず、わかれしくれど）
ももだる マクラ。百足。もゝだるは、もののみちたらひさるをいへるなれば、ゆたけくして、かずのあまさなるにかけていふ。古事記（毛々陀流、都紀賀延は、ほづえは、天をおへり、なかつえは、あづまをおへり）
ももち ナ百千。かずの、かぎりもなくあまさなるをいふ。月詣集（おちこちの、ねざめにすぐる、あくれこそ、あちのひとの、そでぬらしけれ）
ももちだる マクラ。百千足。もゝだるといふに同じ。古事記（毛々知陀流、夜邇波もみゆ、くにのほもみゆ）
ももちどり ナ百千鳥。おほくのとり。古今（百千鳥、さへづる春は、物ごとに、あらたまれども、我ぞふりゆく）
ももづたふ マクラ。百傳。もゝづたふとは、百のかずにかぞへつたふといふ意にて、いそや、八十などにかけていふ。また、ぬでに冠らするは、ぬでは、すゞにて、驛路の鈴は、あまたの野山を、つぎつぎにこえゆけば、百までもかぞへつたふべければ、鈴をおもひよせさるなり。

ゆ

ゆ

ゆ

は、おそしきみぞといふ事、おのづから、世にもりきこえ、女のもとにつかはしける）

もる　ワヒトリ、シ二、洩、漏。すきまよりいづ。ひめたるあらはる。ぬけておつ。この類れ。地方によりて、いれるを下一段にいふ。新勅（うらしのひ、おつるなみだの、まもらさの、もれこぼれても、ちりぬべきかな）

もるめ　ナ、守部。もりべに同じ。後撰（もるめのみ、数多みゆれば、三笠山、しるくいふ、なしてゆく）

もるやま　ナ、守山。山の名。近江にあり。古今（白露も、時雨もいたく、守山れ、下葉のこらず、色づきにけり）

もれる　ワヒトリ、シ二、洩、漏。もるを見るべし。

もろ　ナ、諸。両。ふたつの、あまたの。もろくの。拾遺（おきるみし、とよのみそぎの、もろびとの、君しもろもの、な、おもそするらん）宇治十（万里小路殿に、ふりたる家のもろなりとの中へおちいりにけり）

もろあし　ナ、諸脚。みぎひだりのふたつのあし。

もろい　サ、脆。もろしを見るべし。

もろうすあを　ナ、諸浅青。襲の色目の名。表も裏も、あをに、諸青なるものをいふ。狩衣

もろうた　ナ、諸歌。ふたりして、ひとつのうたをうたふをいふなり。若聞六（後鳥羽院御時、大嘗会のこ、庭火の本歌をうたひけるに、楽所の人長にて、もろうたを仰せごとして）

もろおう　ナ、諸老。線色の名。羅綾、どもに香なるもの。

もろおたがへり　ナ、諸返。歳の、としのようなるもの。

もろかづら　ナ、葛蘰。あふひのかづら。但し、桂と葵をそへるをいふなり。後拾（足引の、山におふてふ、もろかづら、諸共まてそ、いらまほしけれ）

もろがみ　ナ、諸神。あまたの神。神の御代より、諸神のいのちいたれ、君が世の為

もろくち　ナ、諸口。ふたつのくち。

もろくち　ナ、諸口。馬にいふことば。

もろごころ　ナ、諸心。もろともに、こころをあはするをいふ。

もろごし　ナ、諸越。もろこし、唐土をいふ。

もろこし　ナ、諸越、唐土。から。むかしの名。

もろこしがはら　ナ、諸越原。地の名。相模にありといふ。

もろこしきび　ナ、諸越黍。蜀黍。たかきびに同じ。

もろこしのよしののやま　ナ、諸越吉野山。たとへにいへる、さることぞなり。世に、かる山のあるにあらねど、吉野の歌によめる、吉野山れ、大和にこそあれ、唐土にあるべきやうなけれども、もしありて、その人の、そこにこもるとも、いづくまでもといふ意にみるなり。古今（もろこしの、吉野の山に、こもるとも、おくれんと思ふ、我ならなくに）

もろこしぶね　ナ、諸越舟。からぶね。もろこしよりきたるふね。夫木廿（うなさかや、もろこしのおきに、かゝりきる）

もろこしぶみ　ナ、諸越文。漢文字。もろこしのふみ。

もろこしもじ　ナ、諸越字。もろこしのもんじ。

もろこえ　ナ、諸子魚。魚の名。形、もなに似て、長さ二三寸ばかり。頭ちひさく、鰭にほひもあし。腹のあるりに、まうへ、すこしあるところあり。

もろごゑ　ナ、諸声。かひおもなをいふ。からびなりかひをいふ。六帖三（みどりの、鶏しまちの、声ならべには、ちからをたて、もろにはなせ）

もろごゑ　ナ、諸声。もろともにいふこゑ。伊勢（ホロには、我やみゆらん、蛙さへ、水の下にて、もろ声になく）

もろし　サ、脆。もろし。こぼれやすし。くづれやすし。この語は、今にいふ、もろいと、しなびにいへ、新古（あらしふく、みねのもみぢの、日にそへて、もろくなりゆく、わがなみだかな）源鈴（阿闍梨から紙れ、もろくて、あさゆふの御手ならしにも）

もろせ　ナ、諸瀬。ふたつして、もろともにとゞるをいふ。まや。六帖三（但馬なる、ゆきの白波、もろせまで、おもひしものを、ひとのたぞみん）

もろたぶね　ナ、諸手船。かたの、あまたのれるふね。

もろて　ナ、諸手。もろの手。山田頭も、おびせけり、諸手に入れ、引てらなん）

もろてん　ナ、諸典。ふたつのてんにいふとなり。

もろともに　リ、諸共。かれこれともに。かれもこれもひとつになりて。拾遺（もろともに、なりしのみ、こひしくて、ひとりみまらん）

もろなり　ナ、諸生。木の名。果の名。くみに同じ。和名（胡類子　和名、久美、一云、毛呂奈里）

もろね　ナ、諸寝。ともね。ひとつね。

もろは　ナ、諸刃。かたなのその、うちおもてよりとぐやうになりたるもの。万十一（つるぎたち、諸刃のうへ、ゆきふれて、死なるもなん、こひつゝあらずは）

もろはく　ナ、諸白。よきさけ。酒をかもすとき、米も、麹も、共に、みろくつきしらげるをもちひるもの。

もろそで　ナ、諸袖。ひきのひさひさのふくそのをいふ、あはせを見合すべし。拾玉（年なへて、師も言らなん、もろそでを、一方ならず、かくるぶつ）

もろはだ　ナ、諸肌。みぎひだりのかた。

もろはだぬぎ　ナ、諸肌脱。もろそでをぬぐをいふ。

もろはな　ナ、諸橘。襲の色目の名。まるはなに同じ。

もろとやま　ナ、諸山。山の名。筑紫にあり。夫木（諸楽山の、時鳥、なれてみあれの、ところやまうらん）

もろひざ　ナ、諸膝。ふたつのひざ。みぎひだりのひざ。

もろびと　ナ、諸人。もろくのひと。拾遺（かざしもし、祭のみさきの、諸人の、君しもるもの、おもさするなん）

もろは　ナ、諸羽。やつかはに同じ。

もろぶし　ナ、諸伏。もろとともにおきふし。詩社にて、東遊に、駿河舞を、求子をとて、もとのふりをいふなり。

もろみ　ナ、諸味。さけの、いまだしばらずして、かすもともにあるものをいふ。和名（醍醐）

もろむき　ナ、諸向。むきをあはすして、あなたもこなたもおなじくむくをいふ。万廿（武蔵野の、かもかくも、君がまにく、我はよりにを）

もろむき　ナ、諸向。草の名。まさ。うらじろ。

もろや　ナ、諸矢。ふたつの矢。てをりがあてんとするとき、ふ矢を、すこしひきのして、宝を、さめみて、よくみんためなて（候ふ）

もろもろ　ナ、諸々。ひとつ、かまれもまい。（かゝまれもとくいひつ、かの人々のくなかる）土佐

もろもち　ナ、諸み。あまた、これかれ。万二（もろもちにて、この海道にさけくときます、鈍米まで）紫花山（これれ、もろくにまもりて、いみじうときめきたまへど）

もろや　ナ、諸矢。ちやとおとやと。拾遺（ひく人も、なしとおもひし、梓弓、今ぞうれしき、もろやしつれば）

もろやしろ　ナ、諸社。もろくのやしろ。

もろをりど　ナ、諸折戸。みぎひだりにひらく、ひらきど。宇拾十（六條坊門、万里小路辺にふりたる家のもろをりどの中へおちいりにけり）

や

のどよりいづるひとつのこゑにて、いはゆるかなのかけるこゑなり。されば、いの、おやなどとかなれる、そじまりのこゑなり。

や　ナ、屋。家。いへ。ひとのすむやうにかまへたるもの。沈類十（屋れ、まるや、あづまや）貫三（あるうちに、あるや、たとへばおりさりて）

や　ナ、矢。ゆづるにかけているもの。篠竹のごときすぐな竹をきりて、本に、羽をそぎ、末に鏃をすげたるもの。万三（ますらをの、弓末ふりおこし、おつる矢を、後みんひとは、かたりつぐがね）

や　ナ、楔。矢。くさきの、おほきとしきのあひだにさすもの。また、材木などをさるとき、そのさきぐちにさしてさるもの。和名（楔和名、夜）

や　ナ、谷。たに。やまとやまとのあひだのくぼみ。

や　ナ、八。やつ。よつに、よつをあはせるかず。

や　ア、弥。いや。あまきなるをいふこと。

や

や ナゲキ。呼びかくるこゑ。おどろくこゑ。後拾（おもひいづる、こともあらじと、みえつれど、やといふにこそ、おどろかれぬれ）浜木綿（物は思ひいる心地して、やとおびゆれど、[illegible]）

や ナゲキ。よといふに同じ。万五（あまざかる、[illegible]、みやこへ。おくりまをして、[illegible]）古今（[illegible]）

や ナ、ナゲキ。疑ふことば。とひかくることば。[illegible]万十（みどりこの、ためこそ乳母は、もとむといへ、乳のめ我きみや、乳母もとむらん）古今（夜やくらき、みちやまどへる、ほととぎす、わがやどをしも、すぎがてになく）同（名にしおはば、いざこととはん、みやこどり、わがおもふひとは、ありやなしやと）同（今日こずば、明日はゆきとぞ、ふりなまし、きえずはありとも、花とみましや）

やあ ナゲキ。呼びかくるこゑ。おどろくこゑ。やといふに同じ。和田酒盛草子（やあ、[illegible]）

やあはせ ナ矢合。たたかひのはじまり、そのはじめに、ただひは、やのみをいふなりや。平家四（那合、その勢一千五百餘人、ときつくり、やあはせして）

やあら ナゲキ。嗟。おんとなどをさけびいだすこゑ。

やい ナゲキ。呼びかくるこゑ。定頼集（あなうやいとめてそ[illegible]、かくつららん、物をおもひせで）

やい

やいう ナ夜遊。よあそび。よあるき。

やいくさ ナ矢軍。やあはせのみのいくさ。

やいさし ナ炙串。やいぐし。鳥肉なども、おぼろものはするとき、さすくし。和名（楊氏漢語抄云和名久之、炙宍串也）

やいごめ ナ焼米。やきごめに同じ。堀河百首（瓜、やいごめ、なぎ、みな、みやびなどをたてまつれるなり）

やいつこ ナ奴。やつこ。いやしきひと。神功紀（[illegible]）

やいと ナ灸。きう。もぐさ。やいとう。

やいとう ナ灸。きう。もぐさ。[illegible]（[illegible]ず程は例ならぬ事ありて、やいとうなどしけるに）

やいとばな ナ灸花。草の名。[illegible]。上總にて、

やいばり ナ焼鍼。やきばりに同じ。

やいだ ナ刃。[illegible]

やいばた ナ焼畑。野山などをやきて、畑として、さるところ。和名（[illegible]）

やいん ナ夜陰。よる。よさり。やいん。

やう ナ様。さま。ゆゑ。さけ。空穂四（宮は、この御やうにて、おもしげなりとぞ、[illegible]）宇拾三（やうそ候ふらんとて、牛飼のせをまつりて候ひて）

やう ナ楊。やなぎの名。[illegible]。

やう

やういく ナ養育。やしなひそだつるをいふ。

やういろ ナ容色。[illegible]

やうか ナ養家。やしなひとなりてゆきたるいへ。

やうか ナ八日。なぬかのつぎ。[illegible]

やうかう ナ影向。ほとけのあらはれいでましたまふをいふ。大鏡八（[illegible]）

やうかう ナ洋行。せいやうにゆくをいふ。

やうがく ナ洋學。せいやうのがくもん。

やうがくしや ナ洋學者。[illegible]

やうかん ナ羊羹。菓子の名。[illegible]

やうき ナ陽氣。[illegible]

やうき ナ陽気。[illegible]

やうきう ナ楊弓。[illegible]

やうきひ ナ楊貴妃。名香の名。[illegible]

やう

やうぎん ナ洋銀。かねの、まろるねにさるもの。

やうご ナ洋語。せいやうのひとのことば。

やうごなし ナ、[illegible]。やんごとなしに同じ。[illegible]

やうさん ナ養蠶。こがひして、[illegible]。

やうさん ナ洋算。ひつさん。算術の一種。西洋にて[illegible]

やうし ナ養子。やしなひごに同じ。

やうし ナ洋紙。せいやうのかみ。

やうじ ナ楊枝。[illegible]

やうじ ナ[illegible]。

やうじん ナ洋人。せいやうのひと。

やうじやう ナ養生。[illegible]

やうしゆ ナ洋酒。せいやうのさけ。

やうしよ ナ洋書。せいやうのまきもの。

やうしよく ナ洋食。せいやうのくひもの。

やうす ナ様子。[illegible]

やうず [illegible]

やう

[illegible]

やうせい ナ[illegible]

やうそう ナ[illegible]

やうだい ナ[illegible]

やうち ナ家内。[illegible]

やうちやう ナ[illegible]

やうつり ナ[illegible]

やうでう ナ[illegible]

やうなし [illegible]

やうのもの ナ[illegible]

やうだいきう ナ[illegible]

やうそく ナ[illegible]

やうふ ナ[illegible]

やうふう ナ洋風。せいやうのてぶり。

やうふく ナ洋服。せいやうじんのきるきもの。

やう

やうぶん ナ[illegible]

やうぶん ナ養分。[illegible]

やうへき ナ[illegible]

やうほ ナ養母。[illegible]

やうめい ナ[illegible]

やうめいのすけ ナ[illegible]

やうやう [illegible]

やうやう ナゲキ。[illegible]

やうやうし [illegible]

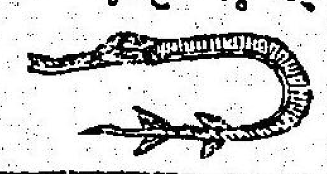
やうやうと [illegible]

やうやく [illegible]

やうら ッ、稍々。やゝも。皆隆の人のいふことば。
やうらう ナ、羸老。おいびとをいふなるべし。
やうらうがき ナ、獲婁郎。なちらうがきをいふ。伊勢すて、
やうらく ナ、瓔珞。たまをぬきつらねて、かしら、むねなどにかけてかざれるもの。佛像などにあり。
やうらくびけ ナ、瓔珞苔。苔の名。おほごけに同じ。
やうれ ヵ、汝や、おのれ。やよなんぢ。宇拾十(人の家にいり居て、従者をよびて、やうれ、御前の庭をみてこそ、あやしうおぼえて、やうれとよべ、このみてことてやらつる男、ふみて(に來て)
やうれ苔 ナ、瓔珞。たまやうれんけに同じ。
やおと ナ、矢音。いるやの、ものにあたるおと。
やおも ナ、八面。よもとよものむかひ。のように。
やおもて ナ、矢面。いるやのきたるおもて。平治中(但し、大衆集の、やおもてにすゝんで)
やおれ ヵ、己。やおのれ。やよなんぢ。十訓五(あやしくおぼえて、やおれとよべ、このみてことひつる男うちみてに云々。目も、心もおよび候はずと申しけり)
やか ナ、宅。や、いへ。源氏(宿直人のあやしき家しろ。夜行うちして、やかの辰巳の隅の崩(いとあやふし)
やか ナ、八日。なぬかのつぎのひ。まさ、ひるのやう。
やかう ナ、夜行。やぎやう。よまはり。枕草三(殿貫のすけのやかう、かりきぬすがたもいとやしげなり)
やかう ナ、屋號。いへのな。あきびとのいへのまな。

やがき ナ、屋垣。いへのかき。住吉(やかきよりのぞけば、すのこよりかりなる姿、よのまもきこゆ)
やがく ナ、夜學。よるのまなび。よるするがくもん。
やかず ナ、宇。いへといふに同じ。まさ、もんをいへといひぞ。和名(宇、和名抄加宇也、宇、門屋之稱也)
やかず ナ、家數。いへのかず。いへ。
やかず ナ、矢數。やのかず。あまたのや。
やかぜ ナ、矢風。やとりおとるかぜ。矢木(照射すき、秋の山道に、いる人の、弓の矢風に、紅葉ちるらし)
やかた ナ、屋形。いへのかたちにつくれるもの。また、たいめうなるひとのおほやけ。古今(ふくきの、門のやかたに、炊をあれと、網てのあきけの、霜のふりける)
やかたくるま ナ、屋形車。やかたのきけあるくるま。
やかたぶね ナ、屋形船。やかたのきけあるふね。東鑑(御舟には、六合の扇子をする云々、屋形船を飾りて)
やかたを ナ、屋形尾。たかのをいふこと。鷹の尾の數十三あるものなり。堀川百首(やかたをの、真白の鷹を、ひきすゑて、宇多の鳥立を、狩くらしつ)
やかつかみ ナ、宅神。いへをまもるかみ。いへのかみ。土御門院御集(相木の森の下家をまもるらむ、やかつがみ、おきこえけむ、宅給御を、まつるところ)
やがて ッ、頓。すなはち。たちまち。そのまゝ。元典集(一

剋踏の、宣葉の露も、たまらじを、やがてかつらの、ころもがへ、一月まで待りしましよ、やがてきたりて侍りしに)
やかまし サ、喧嘩。かしがまし。さわがし。
やがみ ナ、八上。地の名。石見にあり。萬三(妹が袖、さやにも見えず、つまごもる、屋上の山の、雲間より、さわたる月の、をしけども、かくらひくれど)
やかん ナ、射干。獣の名。きつねの異名。但し、成說には、狐に似たる一種のけものなりともいふ。木蘭(やかんを、狐と申し侍りしに云々、その獣をも)
やかん ナ、射干。うか。まんそう。
やから ナ、親族。うから。まんぞく。万え(親族ども、いよりつどひて)
やから ナ、黨。たぐひ。ともがら。十訓二(いにしへや、賢才にあらずして云々、世にたちまじらん、やから、かしこく思ひて、つゝしむべきものなり)
やがら ナ、箭。やにするたけ。今、一種の名のなにもなるすきものあり。和名(箭竹(夜加良))
やがら ナ、魚の名。形さよりに似て、身の前ろくして、なほきはきんもみにて、口は、細長のさきに似たり、ほそながくして、尾の末のほそき糸のごときものをひきたり。
やぎ ナ、山羊。獣の名。やまひつじに同じ。



やきいし ナ、焼石。をんじやく。石の火にあぶりてやきて、腹などをあたゝむるやうにしたるもの。落窪二(御やきいしあてさせ、さまざまとおきのれど)
やきいん ナ、焼印。いんの、ひにやきておすもの。
やきいも ナ、燒芋。さつまいもの、あぶりやきたるもの。
やきうら ナ、焼占。ひをかけてせうらをいふ。
やきおいた ナ、焼鎧。やきにほをいふ。女の鎧なり。
やきがね ナ、燒金。やきいんをするときなどの、かねの、ひにやきたるもの。また、こがねの、まじりものなくふきたるをいふ。玉の(いろな)
やきがま ナ、燒鎌。やきうのするときのかま。祝詞式(彼方之繁木本乎、燒鎌乃敏鎌以氏打掃事之如久)
やきがね ナ、燒金。こがねの、やきがねにしたるもの。
やきくさ ナ、燒草。ものをやくにもちふるくさ。
やきぐし ナ、串。やいくしを見るべし。
やきぐり ナ、燒栗。くりの、あぶりやきにやきたるもの。宇拾十(雜首云々、田鼠にうちみ、さまひをやきくり、ゆでぐりして、かきなきにおひたり)
やきごて ナ、燒鏝。こての、ひにやきてもちふるもの。衣などのすとき、熨斗のごとくにしてつかふものなり。
やきごめ ナ、燒米。にひしねの籾を、あぶりやきに燒きて、臼にいれて、搗きひらめて、皮をのぞきたるもの。和名(稲今案俗云燒米、夜木古女、可用稲米二字焼稲為米也)

やきしほ ナ、燒鹽。しほの、なほのるにいれ、あぶりきてやきたるもの。色あらくなりて、味よし。
やきたち ナ、燒太刀。やきばのすることきたち。万え(燒太刀の、たかみおしねり、まちきほひ、とりおひて)
やきたちの マクラ、燒太刀。やきばかれ、燒刃の利き太刀なれば、とゝかけていふ。また、太刀の鞘をいざりて、身に佩くものなれば、なり。万四(あきなひは、音のみしなけ、夜夜多知加)
やきたちを マクラ、燒太刀乎。太刀のいさりにかけていふ。万四(夜夜多知乎、刀奈美能陸良能)
やきつぎ ナ、燒繼。やきもののこはれたるを、くすりをもちひて、さらにやきてかためたるもの。
やきつく ワ、シニ、燒付。やきて、いろなどをそめつくる。
やきつけ ナ、燒付。やきて、いろなどをそめつくるをいふ。宗玉大神經(太刀ニ云々、けばり、なども)
やきどうふ ナ、燒豆腐。あぶりやきにやきたるたうふ。
やきなまし ナ、燒鈍。くすりをかけてやきたるもの。
やきば ナ、燒刃。かたなの、やきてきたへたるもの。

やきはた ナ、燒畑。たのけぶりをたつるところ。
やきはた ナ、燒畑。やきはたに同じ。
やきふ ナ、燒麩。ふの、あぶりやきにしたるもの。
やきみそ ナ、燒味噌。みその、あぶりやきにやきたるもの。
やきみやうばん ナ、燒明礬。みやうばんのやきたるもの。藥などの、さまざまの用にもちふるものなり。
やきめし ナ、燒飯。にぎりめしのあぶりやきにしたるもの。
やきもち ナ、燒餅。もちの、あぶりやきにやきたるもの。
やきもち ナ、燒餅。ねたみくねりて思ふこころをいふ。源氏物語(近隣の在家へ、小宿をさせて、やきもちといふものをかもして、邪悪さまにならはれけるとぞ)
やきもちたひ ナ、燒餅鯛。やきもちといふ。ひとつまるものなりといふ。
やきもの ナ、燒物。すゑもの。せとものゝたぐひ。つちをもて、うつはものをやきなしたるをいふ。
やきもの ナ、燒物。さかなの、あぶりやきにしたるもの。
やきものぐすり ナ、燒藥。すゑものにもちふるくすり。
やきものし ナ、燒物師。すゑものゝつくりてに同じ。

やぎやう　ナ。夜行。よめぐりに同じ。源氏 東屋（とのゐびとの声あやしき声して、夜行うちして、やの辰巳の隅のくづれ、いとあやうし云々。かゝる人のともびとこそ、心はうきてあれなど、いひあへるも）

やぎやうぎす　ワ。ヒトリ。カ。背立。ひらたつに同じ。

やきよう　ナ。夜興。よるのきやう。よるのあそび。

やきゑ　ナ。焼絵。やきたるひもて、もやうなどをやきつけたるもの。嬉遊笑覧三（白尾は、山鳥の尾をもてそぎさりけるを、羽本一寸ばかりおきて、三浦小太郎時盛と焼絵しさりけるを、よつびいて、ひやうとはなつ）

やく　ナ。役。つとめ。えだち。空穂 藤原（いさゝかなき役をなん云々、つかうまつりつるは、いとこそからう侍りつれ）落窪二（かゝよりの事をさばものうけにしさせられ、何を役にせんとてならんとせめられて）

やく　ナ。厄。わざはひ。さいなん。やくどし。大鏡（三十三をすぐさく、相人なども申しあひさりしかば、岡寺は、やくをてんじさふらふとうけたまはりて）

やく　ナ。約。ちぎり。やくそく。いひかはし。

やく　ワ。カク。四。焼。炙。ひをつけてもやす。ひをもてつよくあぶる。あぶりものとなす。万葉（おもしろき、野をばな焼そ、古草に、新草まじり、おひはおふるがに）

やく　ワ。ヒトリ。シニ。焼。炙。ひつきてもゆ。ひにつよくあぶらる。あぶりものなる。こがれてくろくなる。この語は、地方によりては、やけると下一段にいふ。源氏 橋姫（かゝる程に、すみたまふ宮やけにけり）神代紀（焦之）

やぐ　ナ。夜具。ふすまのたぐひのよるもちふるもの。

やくおとし　ナ。厄落。やくはらひ。やくをはらふまじなひ。

やくかい　ナ。厄介。せわをしてたすくるをいふ。

やくかいにん　ナ。厄介人。ひとのせわになれるもの。

やくがたり　ナ。役替。やくめのかはるをいふ。

やくがひ　ナ。夜久貝。やくのまだらがひに同じ。空穂 楼上（へやくがひを、つきまぜてぬりされば、きらくとす）新猿楽記（阿久夜玉、夜久貝、水精、琥珀）

やくがひ　ナ。夜久貝。やくがひにてつくりさるさかづき。枕草子（公卿、殿上人は、かはるぐ、盃とりて、はては、やくがひといふもの、男などのせんどはうつてあるぞ、御前は、女ぞいでてとりける）

やくがへ　ナ。役替。やくめをかふるをいふ。

やくがら　ナ。役柄。やくめのすぢ。やくめのたち。

やくぎ　ナ。役儀。やくめ。おほやけのつとめ。

やくくわん　サ。訳官。ほんやくをつかさどるやく。

やくざい　ナ。薬剤。くすり。また、くすりのてうがふ。

やくざい　サ。無用。かたくなをいふ。近江にて、

やくさう　ナ。薬草。くすりにもちふるくさ。

やくざみ　ナ。流鏑馬。やぶさめをいふ。関東にて、

やくさむ　ワ。ヒトリ。四。不平。やむ。なやむ。わづらふ。神代紀

やくし　ナ。薬師。如来の名。更級（こゝろもとなきまゝに、とうしんに、薬師仏をつくりて、てあらひなどし）

やくしや　ナ。役者。かぶきのわざをするひと。

やくしゆ　ナ。薬種。くすりにあはするもの。

やくしゆ　ナ。薬酒。くすりざけ。くすりをいれたるさけ。

やくしよ　ナ。役所。つかさ。おほやけびとの、おほやけのことをとりあつかふところ。竹崎五郎絵詞（たけざきのかさめし役所のいしついちのまへさ）

やくせき　ナ。薬石。くすりといふに同じ。

やくぞう　ナ。役送。てなが。きふじ。中務内侍日記（御まいのぜんは女房、やくそうの女房はこじやうらふ、あいしらどころの北向は北にさぶらふ）

やくそう　ナ。役僧。そのてらのやくをつとむるそう。

やくそく　ナ。約束。ちぎり。いひかはし。宇治拾七（やくそくの僧のかりゆきて、物をうちくひて）

やくそくごと　ナ。約束事。すくせ。いんえん。のさりごと。

やくたい　ナ。薬代。くすりをもとむるあたひ。

やくたいし　ナ。薬袋紙。紙の名。がんぴしのたぐひにて、あつくきざみさるもの。常に、薬をつゝむにもちふ。

やくたいなし　サ。ゼ。無益。むやくなり。ことわりなし。

やくぢやう　ナ。約定。やくそく。いひかはし。

やくと　ソ。役。やくめのやうに。後拾（やくとのみ、枕の下は、たえされて、煙たえせぬ、床の浦かな）枕草七（御前などは、やくとまゐりてほめたゆるに）

やくと　ソ。役。ことさらに。武蔵の人のいふことぞ。

やくそう　ソ。役。ことさらに。参河の人のいふことぞ。

やくとく　ナ。役得。そのやくをつとむるによりて、さきまりたるたまもののほかに、ものをうるをいふ。

やくどし　ナ。厄年。そのひとは、わざはひあるとし。陰陽家にていふ事にて、その人のうまれたる年によりて、禍ありといふ。たとへば、男は、二十五、四十二、六十一、女は、十九、三十三、三十七を、厄年とし、殊に、男の四十二、女の三十三は大厄として、その前年を、まへやく、翌年をうしろやくとよび、ものいみして、つゝしむ事あり。いはれなき事なり。さとふべからず。空穂 楼上（左のおほとの、やくどしにおぼせりとてせられねば）

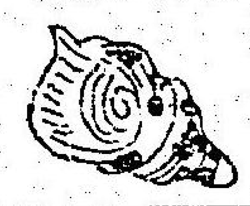
やくなし　サ。ヒ。無益。むやくなり。狭衣三（生公達のかげめでて、やくなしとて、三河守などにつけて）

やくなん　ナ。厄難。わざはひ。さいなん。

やくにたつ　ワ。ヒトリ。四。役立。もののようにかなふ。

やくにん　ナ。役人。つかさびと。やくめあるひと。

やくのまだらがひ　ナ。夜久斑貝。貝の名。にしのたぐひのおほきなるかひにて、くちのみちまぎらなるあやあるもの。琉球の玻璃といふ島よりいづるをいふ。和名（錦貝夜久乃斑貝、今按、本文未詳、但、俗説、西海有夜久島、彼島所出也）



やくば　ナ。役場。やくしよに同じ。

やくはう　ナ。薬方。くすりをあはするみち。

やくゑん　ナ。弼木煙。やくゑんといふところにて、てらちのおほけりたるゆらをいふとぞ。祝詞式（天皇我朝廷、伊加志夜久波叡能如久仕奉利）

やくだらひ　ナ。厄払。わざはひをはらふまじなひ。

やくびやう　ナ。疫病。えやみ。ときのけ。ねつびやう。

やくびやうがみ　ナ。疫病神。えやみをはやらするかみ。

やくびやうだな　ナ。疫病棚。わびしげなるをいふ。京都にて、

やくぶん　ナ。訳文。ほんやくしたるぶんしやう。

やくみ　ナ。薬味。かやく。くはへぐすり。

やくめ　ナ。役目。やくとしてつとむるつとめ。

やぐもさす　ナ。八雲刺。やぐもたつに同じ。万三（八雲刺、出雲子等が、黒髪は、吉野の川の、沖になづさふ）

やぐもたつ　マクラ。八雲立。やぐもたつは、出雲の、あまさかるくに、出雲は、いづるくもといふべきをつゞめたる詞にて、たゞ同じ意の詞をかさねたるなり。古事記（夜久毛多都、伊豆毛夜幣賀岐、つまごみに、やへがきつくる、そのやへがきを）

やぐら　ナ。八座。もちざに同じ。後拾（やぐらのつくさはそなへりて、いつつのいとまもさまさげなし）

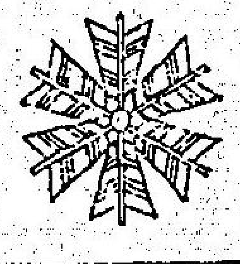
やぐら　ナ。櫓。たかどの。いへのうへに、きさいへをかさねたるごとくつくりさるもの。また、やぐらのごとくにて、たかくかまへたるものをもいふ。

やぐら　ナ。櫓。いそやをいふ。相模、鎌倉などにて、

やぐらだいこ　ナ。櫓太鼓。やぐらにてうつたいこ。芝居などの興行のとき、人をあつむる為にうつものなり。

やぐらのつかさ　ナ。八座。もちざに同じ。ことぞよせ

やぐるま　ナ。矢車。やをうゑならべて、くるまのごとくしさるもの。風車などに用ゐるものなり。下の図は、その矢車をゑがきたる紋所の絵なり。



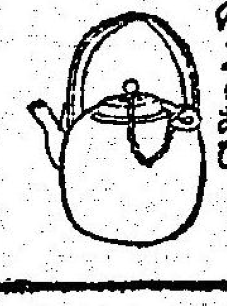
やくれい　ナ。薬礼。くすしにむくゆるくすりのしろ。

やくろう　ナ。薬籠。くすしのたづさふるくすりばこ。

やくて　ナゲキ。耶久和。まりをこふときのこゑ。遊庭秘抄（これ、鞠侍らんとおもふとき、声をいだして、鞠をこふなり。この上は、さまぐのこひやうあり。或は、やくせ、或は、ありくさ、まさ、あり、まさ、をとこふ）

やくわい　ナ。夜会。よるのくわい。よるのよりあひ。

やくわん　ナ。薬罐。どびんのごとくなるものの、あかがねにてつくれるもの。常に、湯をわかすなどにもちふ。



やくわんあたま　ナ。薬罐天窓。はげあたまに同じ。

やくゐん　ナ。役員。やくにんといふに同じ。

やくゑん　ナ。薬園。やくさうをうゑたるその。

やけ　ナ。焼。もののおもふやうならぬをいきどほるあまり、ころしおきへたることをもおこなふをいふ。

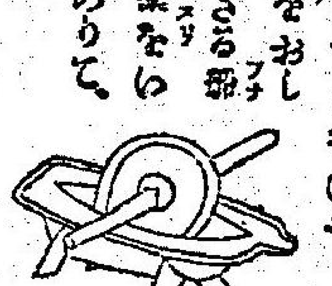
やけしに　ナ。焼死。ひにやけてしぬるをいふ。

やけど　ナ。火傷。ひにやかれてつきさるきず。

やけの　ナ。焼野。のびにやけたるの。夫木廿（いとほしや、まだ兎なる、うなゐとも、焼野にあさる、茄花ぬく也）

やけばた　ナ。焼畠。やいばたに同じ。万代（人のすむ、里

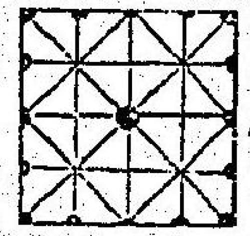
の変色になりにけり。山路の末の、跡のやけむら
やけむら　ナ。焼斑。やけむらむら。後撰(けんとよりへ、跡の池原、あさけして、君つみぬる、世にをそえん)
やけなはぬだつ　ワ。ヒトリ。シニ。焼賜至。やけなおこす。
やけふ　ナ。焼生。やけのこ、くさのおひるるをいふ。
やけぶ　ナ。夜業。よるのわざ。よるのなりはひ。
やけぼくひ　ナ。焼木杭。もえさし。もえなひ。
やけぼり　ナ。焼跡。もののやけてのこるをいふ。
やけん　ナ。焼研。くすりおろし。薬をおしくだく道具。鐵などにてつくりたる船形のひきものにて、その中に車なれ車に、鐵の輪のごときものありて、おしくだきくだくるもの。



やけやま　ナ。焼山。のびなどにてやけたるやま。
やける　ワ。ヒトリ。シ。焼。焼炙。ねさましく、おもひこがるる。
やけやまはな　ナ。焼山花。やらやにと同じ。新六(焼山の、下蕨を、まさこそゆかめ、さゆる白雪)
やけるすおこす　ワ。ヒトリ。シ。焼起。やけのこころになる。
やこうち　ナ。八小路。やまちなりをいふ。信濃にあり。
やこがひ　ナ。夜光貝。貝の名。やくのまたらがひに同じ。
やごころおもひかね　ナ。八意思兼命。おもひかねに同じ。
やごとへ　ナ。夜渡。やまげひに同じ。
やごとなし　ナ。やんごとなしに同じ。宇津三(これならぬやごとなき人の御ぞなきもこそまされ、それまかくやいせんぞる)

やごとなし　ナ。無止事。やんごとなしに同じ。
やごの　ナ。姿鶏。やさめをいふ。尼鶏などにて。
やごろ　ナ。矢頃。やをななつに、ほどよきころ。
やさかのまがり　ナ。八坂瓊。にぎやかの、あけぼのに、ほむくなくをいふ。千載(思ひね、こゆる瑜路は、夜をふかみ、やよるのさむ、昔をぞえむる)
やさい　ナ。野菜。あをもの。あをな、おほねのたぐひ。
やさか　ナ。八尺。ささうのなさをいふ。万葉十一(つまたらぬ、八尺のなげき、なげくとも、おもふべきなみと)
やさかし　ナ。家賢。ほしいままに、ひとのいにはりて、ものをむさぼるをいふ。罪人をそしむなどにあり。
やさがた　ナ。優形。やせたるかたち。
やさかどり　ナ。八尺鳥。やさかどりは、にほどりのたぐひにて、いきづくにかけていふ。にほどりのなひとずべし。万葉二十(おきにすむ、小鴨のもころ、也左可杼利、伊伎豆久(いき)なを、おきてきぬかも)
やさかのまがたま　ナ。八坂瓊曲玉。みくさのかんだからのひとつ。古事記(八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠)
やさかびと　ナ。八坂陵。なかしらそに同じ。
やさかむ　ワ。ヒトリ。四。痩。やす。かじく。垂仁紀(苦羸)
やさき　ナ。鏃。やじりに同じ。
やさけび　ナ。矢叫。やな、ものにいかでさるときにこゑたくさけぶをいふ。夫木抄(道おほき、羽鶴の御狩の、やさけびに、のぼりゆけの、雉ぞきこゆる)

やさし　ナ。ア。優。しなやし。みやびなり。けなげなり。ほそやかなり。この語は、今はやさしいをなえていふ。万葉五(世の中を、うしとやさしと、おもへども、とびたちかねつ、鳥にしあらねば) 紫式部日記(御前にて御遊びありしこそ、ひとやさしく侍りしか) 徒然草(へ怖しき者のさま、臥所の床にはいやさしくなりて、さる顔に(しとどやさしくこそ)
やさしい　ナ。優雅。やさしなるさま。
やさしがる　ワ。ヒトリ。四。優娩。やさしとおもふ。拾芥三(なそとも去ると云ぞ、やさしがりて、ふぢものいひしものはいみしりぞにくき)
やさしだつ　ワ。ヒトリ。四。優度。やさしげにふるまふ。後京極(けんのひらきれ、やさしげならしささこそぞとけれど)
やさかり　ナ。八道行成。すごろくのたぐひ。今、十六むさしむさしといふもの、その一種なりといふ。すなはち、一人を、十六人にてかこみて、その一人は、八道を、さまぐににげまはりて、のがれんとするたたかひなり。和名(八道行成 和名 夜佐)



やさつかむ　ワ。ヒトリ。四。痩。やさしたつに同じ。

(まのみやさかみすぎてねぶりめなら、例の平懐のものよりうるはしとなん申し候ふ)
やさびる　ワ。ヒトリ。シニ。慢。やさしくかり。木師抄(謡は、音もちひがく、やさびれたるものなれば、さてよくとうつくしびれ、おもしろからんとすれど)
やさもみ　ナ。野蚕。えんしよ。なさけなかよするみ。
やさむし　ナ。ア。姫。ふぶきや。きはめてやさし。世俗立要集(餅はむさくし、さくろはやさしく)
やさをとこ　ナ。优男。みやびを。やさしきをとこ。けなげなるをとこ。平家(やさをとこに、いふ。時にのぞんで、なさけなう。尼師をやぶありらん)
やさをんな　ナ。優女。やさしきをんな。けなげなるをんな。
やし　ナ。椰子。木の名。果の名。熱帯地方にいでくるものにて、幹のすぐして、枝なし、なかのごとく、葉は、ひろくおほきして、梢にのみあつまりつく。春のころ、葉の間より、なかき穂をいだして、ほそきなる花をひらき、夏の末にいたりて、桃に似たるおほきなる実をむすぶ。実に、酒のごとき汁ありて、そのきころの人は、常にのみものとすといふ。

やし　ナ。香具子。うみにすむいきもの。形、ひとのきかしらに似たり、人をみれば、海の上に浮かびかくるるといふ。下文を見るべし。和名(海坊主 和名 夜以 此物含咖啡蟲見人即没海中)

とりとひとをするもの。
やしうま　ナ。野駄。みせものなどを、なりはひとするもの。
やしき　ナ。屋敷。おのれ、みづからいひだすして、ひとのあいにつきてわるきよしものをいふ。
やしき　ナ。屋敷。家をかまへたるところ。
やしきり　ナ。屋敷割。やしきのわりあて。
やしなひ　ナ。養。やしなふ、はぐくみ。それはうまれもののこやし。
やしなひおや　ナ。養親。やしなひの、おやとするひと。
やしなひご　ナ。養子。とりご。やしなひてそだつめるこ。ものなど。信綱は、蘇鐵末の子なり云々。しなひだなりて、伊賀大夫といふ)
やしなひたつ　ワ。ヒトリ。四。養立。そだつ。おほしたつ。
やしなひむすめ　ナ。養女。やしなひてとするむすめ。
やしなふ　ワ。ヒトリ。四。養。そだつ。はぐくむ。おひたつ。す。こやしをあたふ。仁徳紀(みちぞを、なみのめな。たれ爾國さる、人の子の、まさなりて、ものにはひけれ)
やしぶし　ナ。玄孫。ひこのこ。新撰(あの子の、ん) 和名(玄孫 曾孫之子為玄孫 和名 夜之夜古)
やしほ　ナ。八入。そめものを、いくたびもいれてそむるをいふ。万葉十(くれなゐの、八入にそめて、おこせたるころものすそも、とほりてぬれぬ)

やしほぢ　ナ。八潮路。うみのはるかなるをいふ。延喜式(祝詞 八百会 万八百遠乃八鹽道之、潮乃八百會爾坐須)
やしほをりのさけ　ナ。八鹽折酒。いくたびもつくりかへたるさけ。古事記(八鹽折之酒) 神代紀(八醞酒)
やしま　ナ。八洲。おほやしま。おほやまと。古今序(あきつ御うつくしみの波、やしまのほかまでながれ)
やしま　ナ。八島。小國の名。三味線にてうたふもの。
やしまぐに　ナ。八島國。おほやまとのくに。古事記(八千の、神のみことは、夜斯麻久爾、つままきかねて)
やしまのひよめ　ナ。八島士奴美。
やじん　ナ。野人。いなかびと。むげなるひと。
やしん　ナ。野心。
やしや　ナ。夜叉。鬼神のたけくあらくしきもの。
やしよく　ナ。夜食。よるになりてくふもの。
やじり　ナ。鏃。やさき。矢のさきにつくるとがりたるかね。和名(鏃)
やしろ　ナ。社。やしろ、ものをまつるところ。
やしろ　ナ。社。かみをいつきまつるところ。万十二(くにぐの、夜之呂の神) 古今(神のやしろのあたりをまかけるをり)
やす　ワ。ヒトリ。シニ。痩。やせ。もののたぐひ。

ぐしくなる。この語は、地方によりては、やせるを下一段にいふ。万六(こひまみに、さけはこふらし、たまひくるゝ、つかれをくへど、飼養に夜須)

やすい　ナ。安眠。安眠。おちつきてねむるをいふ。

やすい　サ。安。易。便易。やすしを見るべし。

やすかむ　ワ。ヒトリ。四。安　やす。崇神紀(夜須伽牟)

やすけ　ナ。弱介。うそをつくをいふ。九州にて。

やすし　サ。ヒ。安。易。便易。こゝろよし。なやみなし。てうるはしきなり。するときかろらか。また、ものゝあらはいやし。この語は、今は、やすいとしもいに、いふ。古今(けふのみと、春をおもはぬ、ときだにも、たつことやすき、花のかげかは)枕草四(うちやみて、ひとやすき事、たしてまもり侍らん、さらばなどぞのたまへば、侍らんといへば、それをせらして)

やすち　ナ。馬陸。虫の名。あまびこに同じ。

やすで　ナ。馬陸。虫の名。あまびこに同じ。

やすね　ナ。安寝。やすきねむり。やすきねざん。

やすまく　ナ。休幕。みやすまくのところ見るべし。

やすまる　ワ。ヒトリ。四。休。やすくなる。空穂俊蔭(朝にゆき、夕にかへりし、ひとのなさも、やすまりし)

やすみ　ナ。休。まはきをやめていこふこと。

やすみしし　ヲ。安見知之。やすみしゝは、安らかにみそなはしまろしめすといふ意をつゞめる語にて、おほきみにかけていふ。仁徳紀(夜輸瀰始之、和我於朋枳瀰は、うなそく、我をききそこ)万一(八隅知之、我大王の、かしこくも、とりなでたまふ、ゆふがは、よせてしかてし、みとらしの、あづさの弓の)

やすみどころ　ナ。休所。やすむところ。源桐壺(かうぶりしたまひて、御やすみどころにまかでたまひ)

やすみび　ナ。休日。まはきをやめていこふ日。

やすむ　ワ。ヒトリ。四。休。まはきをやめ、いこふをやむ、こゝろをやむ。古今(しかしては、やすくぞなくに)

やすむ　ワ。ダ。シニ。休。やすましむ。この語は、地方によりては、やすめるを下一段にいふ。源手習(人の家ありけるにとゞめて、けふばかりやすめたてまつる)

やすむしろ　ナ。安席。やすらかにゐるむしろ。あんせんなるむしろ。仁徳紀(みしろの、さらしき山も、こもりこそ、やすむしろも、しのとのたひなどすてにいふ)

やすむすび　ナ。安牟須比命。むすびの神の御子。

やすむんず　ワ。ダ。ガ。安。やすくす。おちつかしむ。

やすめ　ナ。休め。ものをやすめていこふところ。

やすめところ　ナ。休所。こゝちよきところ。国津伊の国、花なしみれへの、いのたひなすべていふ。

やすめもじ　ナ。休辞。こゝろにもちもあるのみにて、こゝろなきもの。

やすめぐこら　ナ。休所。みそひともじの歌の、第三の句をいふぞ。源玉鬘(あさはとおりいひ、いつもじ、やすめどころにうちおきて、ことのちのつゞきなり)

こゝちすなどの、あめりなどをはなふ)

やすめる　ワ。ダ。シ。休。やすむを見るべし。

やすもの　ナ。安物。あたひやすきもの。また、そまつなるもの。

やすやすと　ソ。易々。やすらかに。おだやかに。

やすら　ナ。殿の、おぼつかなるいふ。中国にて。

やすらかなり　サ。安。やすらかにあり。おだやかなり。落窪(うちとけたさまぬいかにやすらかなり)

やすらかに　ソ。安。やすく。おだやかに。源椎本(やすらかに、またしとなき、ふるまひいふるいと、かたらなり)

やすらけし　サ。ヒ。安。やすらかなり。おだやかなり。続日本紀(天皇我朝廷乎、平久安久、足御世乃花御世爾)

やすらに　ソ。安。やすらかに。おだやかに。催馬楽(あさむの、こがねのことく、たまもとよく、きよくかへよく、こくび也須良尓、ねむさせるる)

やすらふ　ワ。ヒトリ。四。休。躊躇。やすむ。また、ためらふ。みあとせてあり。万十(木の間より、移ろふ月の、かげをしみ、たちやすらふに、さよふけにけり)空穂俊蔭(せちにそのもしまれど、とまくやすらひて)

やする　ナ。鑢。かねをおしすりてけづるたぐひ。鋼にて、刀のごとくつくりて、うらおもてに、たてよこに、ほそきぎざみめをつけたるもの。七十一職人歌合(うらめしや、人のこゝろの、あらやすり、ひきめぬとは、のどれぬ、など)和名(鉛子利、所以利鋼鐵也)

やせい　ナ。野生。のやまにおひてそだちたるもの。

やせおとろふ　ワ。ヒトリ。シ。二。痩衰。やせておとろふ。金鏡(やせおとろへて、姿も、ほしげにやつれたりけれど)

やせかくし　ナ。痩隠。たびを見るべし。

やせがくし　ワ。ヒトリ。シ。二。痩。やせてちひさくなる。

やせがたち　ナ。痩形。やせたるかたち。やせしすがた。

やせがは　ナ。八瀬川。せのおほきかは。夫木(八瀬川の瀬々の岩はに、堰あめて、水ひきかくる、小野の荒代)

やせがまん　ナ。痩我慢。まけじだましひのがまん。まけなるも、なほ、まけぬおもちにもてなすたぐひ。

やせかむ　ワ。ヒトリ。四。痩。やす。崇神紀(夜西珂務)

やせからむく　ワ。ヒトリ。四。痩せてほねたくあらはる。枕草三(さびしき人と見しこゑをうるよし。すりやうなど、おとなだちたる人に、やはき人しと、あまりやせからめきたる、心にくからぬさまと)

やせぎす　ナ。痩形。やせがたちに同じ。

やせこける　ワ。ヒトリ。シ。二。痩せてほねとかたとになる。

やせさらぼふ　ワ。ヒトリ。四。痩せてほねとかはとなる。宇治拾二(さきより、ありて、いたはりけり、たけたかき僧の、やせさらぼひて、みるにたふとげなり)

やせしんだい　ナ。痩身代。やせほそりたるしんだい。

やせじょたい　ナ。痩所帯。やせほそりたるしょたい。

やせぞこなふる　ワ。ヒトリ。シ。二。痩損。やせて、からだそこなふ。狭衣四(あけくれ、音をのみなきしづみ、いみじうやせそこなひたれうちとけたまへるを)

やせち　ナ。瘠地。つちのこえてなきところ。うまなき地をいふ。やせちにてよくいできるところ。

やせつち　ナ。瘠土。やせちのつち。

やせつぼち　ナ。痩形。やせたる。やせたち。

やせどころ　ナ。瘠地。やせちに同じ。神代紀(瘠地)

やせのぼる　ワ。ヒトリ。四。痩。やせてほねのあらはる。源氏古(大殿は、ゆくとやせのぼりて、かたちもとまらぬ)

やせほそる　ワ。ヒトリ。四。痩細。やせてほそくなる。源桐壺(こまかなるやせほそりしさまにて、かくてもうちかはしなれば、まめまめしき事のかぎりなきもきこえて)

やせぼうし　ナ。痩法師。やせたるぼうし。やせほそりたる法師。

やせむま　ナ。痩馬。やせたるむま。

やせやせ　ナ。夜前。ゆうべ。きのふのよる。

やせやせなり　サ。痩々。いたくやせてあり。源夕霧(いたくわづらひしたまへる、やせやせになりて、あはれげなり)

やせやせに　ソ。痩々。いたくやせて。源椎本(うちながめて、こゝろばかりひきそへて、おなじ事にてやせやせなりしを)

やせやまひ　ナ。痩病。みのやせほそるやまひ。東北院職人歌合(へうたん、つきひにしたがひ、やせやまひとおもひしも)

やせる　ソ。痩。やすを見るべし。

やせろく　ナ。夜食。よるのしょくじ。

やそ　ナ。八十。やつを。とをあはせたるかず。また、たくさんのかずにいふ。万十(ことよせの、八十のちまたに、ゆふけとふ、うらまさにのれ、妹はあはむよし)

やそ　ナ。邪蘇。耶蘇の名。きりしたんを見るべし。

やそ　ナ。夜そやれ。後撰(ふかくなくて、おなじころに、なりましを、おもはぬちぎりの、おもはぬものを)

やそ　ア。ナゲキ。よ。あはれ。後撰集(律木に、おのがひきかたみ、もみぢ葉の、なく音を、今ぞなかなる)

やそう　ナ。旅人宿の下女をいふ。難波にて。

やそうぢびと　ナ。八十氏人。あまたのうぢびと。神楽歌(もろもろの、香をかぶしみ、ともくれは、せ世々のうぢびと、まざめせりける)

やそかかげ　ソ。八十鏡。あまたのかがみをかけて、あまたのかかみをならして。万十(王の船の、つなしとるや、八十楫貫、こぎでん船に、おくれてならん)

やそかぬき　ソ。八十楫貫。あまたのかぢをかけて。万十(難波津に、御船おろすゑ、八十梶ぬき、かへらむ)

やそかみ　ナ。八十神。あまたのかみ。古事記(八十神)

やそくま　ナ。八十隈。あまたのくま。いろく、仏足石歌(みあとつくる、いしのひびきは、あめにいたり、つちさへゆすれ、ちちははがために)

やそくまぢ　ナ。八十隈道。八十のみちくま。あまたのくま。河隈の八十隈おちず、万一(かけて忍ぶる、河隈の、八十隈おちず)

やそくまぢ　ナ。八十隈路。みまかりさるひとのゆくところ。万三（ももたらず、八十隈坂に、たむけせば、すぎにしひとに、けだしあはんかも）
やそくまで　ナ。八十隈路。やそくまぢに同じ。古事記（僕者於百不足八十坰手隱而侍）
やそけう　ナ。耶蘇教。きりしたんに同じ。
やそぢ　ナ。八十。よそぢのそらじふ。
やそまがつひ　ナ。八十禍津日神。おほまがつひに同じ。
やたい　ナ。屋臺。やねあるだい。ねりもののくるま。
やだいじん　ナ。矢大神。さだいじん。神社の門にたてさる隨身のごとき人形。かどのそきのところ見るべし。
やたいみせ　ナ。屋臺店。うりものをのせさるだいにて、いづこにても、みせをいださるゝごとくしさるもの。
やたかがみ　ナ。八咫鏡。みくさのかんだからのひとつ。
やたがらす　ナ。八咫烏。烏の名。神武の御の、大和國に、いらせたまひし時、その御軍を導きたてまつりし烏なり。発安敵（いそれびて、みるいめさめて、耶馱賀羅須、せれとぞふらり、みちいそしへし）
やだけ　ナ。矢竹。やがら。やにもちふるすぐきたけ。
やたけに　ソ。彌猛。いやたけく。いよくもやりて。
やたてら　ナ。奴等。やつこども。万二（八多籠良我、よるひるいもず、ゆく道を、我いことごく、みやぢにぞする）
やたて　ナ。矢立。たびにたづさふるすゞり。盛衰記（矢立の硯をとりよせて、宇治川先陣と、剛者とを、次第を、

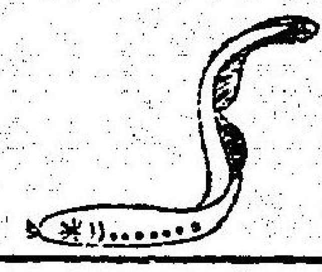
明々に注して、鎌倉殿へ見参にいるべしと）
やだね　ナ。矢種。えびらにさしさるやのかぎり。
やだの　ナ。矢田野。地の名。越前にあり。新古（矢田野は、淺芽色づく、有乳山、峰の淡雪、さむくぞあるらし）
やたのかがみ　ナ。八咫鏡。やたかがみに同じ。
やたらに　ソ。妄濫。みだりに。もののふんべつもせずに。
やち　ナ。野地。さそのごとくにて、くさおひさるところ。
やちぐさ　ナ。八千種。くさぐくあまさ。万二十（八千種に、草木を植ゑて、時ごとに、さかん花をし、みつゝ忍ばな）
やちしほ　ナ。八千入。幾度となく、あまさたびそむるをいふ。志ほとは、染汁にいるゝ數をいふ。後拾（色ふかき、袖の涙に、ならふらし、千入八千入、そむる紅葉は）
やちたび　ナ。八千度。いくたびともなくあまさゝびなるをいふ。古今（さざれ石、くいの八千度、かなしきは、ながるゝみづの、かへりこぬなり）
やちぢひめ　ナ。八千々姫。たくそたちぢひめに同じ。
やちゑ　ナ。榛木。木の名。ぞりをいふ。陸奥、南部にて、
やちほこ　ナ。八千矛神。おほくにぬしに同じ。古事記（夜知富許の、神の命は、やしまくに、妻まぎかねて）
やちまた　ナ。八衢。あまさのちまさ。万二（橘の、かげふむ路の、八衢に、ものをぞおもふ、妹にあはずして）
やちまたびこ　ナ。八衢彦。神の名。伊邪那岐、伊邪那美、二柱の大神の御子。この大神は、八衢に、おはして、根國より來るまがものをふせぎとゞめたまふ大神なり。

やちまたひめ　ナ。八衢姫。神の名。伊邪那岐、伊邪那美、二柱の大神の御子。この大神は、八衢彦大神と共に、根國より來る禍物をふせぎとゞめたまふ大神なり。
やちん　ナ。家賃。いへをかしさるものにとるもの。
やちゆう　ナ。夜中。よなか。さて、たゞよるをいふ。
やちよ　ナ。野猪。獣の名。ゐのしゝに同じ。
やちよおどし　ナ。野猪落。ゐのしゝをとるおとしあな。
やつ　ナ。奴。ひとをいやしめてよぶことば。竹取（かぐやひめてふ大盗人のやつが、人をころさんとするなりけり、家のあたりさへ、今はとほらじ）
やつ　ナ。谷。たにをいふ。相模、上總などにて、
やつ　ナ。八つ。よつに、よつをあはせさるかず。
やつ　ナ。八時。やつどき。ひつじのとき。うしのとき。
やつ　ナゲキ。唉。もい。越前の人のいふいらへのことば。
やつか　ナ。八束。いやつか。やつかひげ、やつかほのたぐひ、物のながきをいふことば。つかを見合すべし。
やつか　ナ。矢束。やのつか。やのの。
やつがしら　ナ。八頭。芋の名。むすいもをいふ。武藏にて、
やつかひげ　ナ。八束鬚。やつかのひげ。ひげのながきをいふ。古事記（八拳須至于心前啼伊佐知伎也）
やつかほ　ナ。八束穗。やつかのほ。いなほのながきをいふ。新古（神代より、けふの爲とや、八束穗に、長田の稻の、志なひそめけん）祝詞式（八束穗能伊加志穗爾）
やつがり　ヵ。僕。やつかれに同じ。遊仙窟（僕）

やつがれ　ヵ。僕。おのれ。みづからいやしめていふことば。鳥部山物語（やつがれこそ、その御父なりける人の御許へ、年頃さぶらひなれて、よくくまいり侍れ）
やつぎ　ナ。矢繼。さきのやにつぎて、のちのやを、つぎくにむなうをいふ。著聞廿（何の間にやつぎしけん云々、このやつぎのそやさに、海賊等おどろきて）
やつきざなる　ワ。ヒトリ。四。喪痍。いらう。せまむ。
やつぎばやに　ソ。矢繼早。やつぎをはやく。著聞九（やがて、おなじさまに、やつぎばやに射てけり）
やつくち　ナ。八口。小袖の仕立にいふことば。女、または小兒の小袖の、わきをあけてぬひふさがぬをいふ。
やつくり　ナ。家作。屋造。いへづくり。いへのかまへ。
やつこ　チ。奴。婢。ひとにつかへるゝひと。万七（住の江の、小田からすこ、賤つもなき、奴あれど、妹が御爲に、志ぬび田をかる）和名（婢和名夜豆古、女之卑稱也）
やつこあたま　ナ。奴天窓。そりさげのたぐひのあたま。
やつこどうふ　ナ。奴豆腐。とうふの、四角にきりて、水にひやして、醬油などをかけてくふものをいふ。
やつざき　チ。八割。つみびとをすらくにきるをいふ。
やつしろのり　ナ。八代苔。あまのりのたぐひ。肥後の八代川といふ河にいでする苔にて、色みどりなり。
やつす　ワ。カナ。四。窶。やつれしむ。すがたをかへてやつれしむ。玉葉（ふくかぜの、はそこぬはさを、まどるゝを、とはずへきなの、名をややつさん）伊勢（尼になりける

人ありけり、かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけん、賀茂祭みにいでたりけるを）
やつす　ワ。コナ。四。窶飾。なまめかしくよそほふ。
やづつ　ナ。箭筒。やをもりさるつゝ。
やつで　ナ。八手。灌木の名。この木は、やつの葉、ひとゝころにあつまりつくものにて、そのさま、軍配團扇の形のごとし。夏のころ、ちひさき花さく。
やつと　ソ。辛うじて。やうやくのことにて。
やつどき　ナ。八時。ひつじのとき。うしのとき。
やつとう　ナゲキ。掛聲。かけごゑによぶときのこゑ。
やつとこせ　ナゲキ。掛聲。かけごゑによぶときのこゑ。
やつはし　ナ。八橋。地の名。參河にあり。堀河百首（さゝがにの、くもでにみゆる、八橋を、いかなる人か、ときそめけん）伊勢（參河國八橋といふところにいたりぬ、そこを、やつはしといひけるは、水ゆく川のくもでなれば、橋を、やつわたせるによりてなん）
やつはし　ナ。八橋。名香の名。ちんの一種なり。
やつはながた　ナ。八花形。かゞみの、めぐりは、かどのやつあるものにて、そのさま、花のかたちに似たり。
やつぱし　ソ。矢張。やはり。もとのまゝに。そのまゝにて。
やつばら　ナ。奴原。やつこども。ひとをいやしめてよびなす、雅裝（それはならべて、みなみに、かゞみのすべ、やつれなくなるおほぼなるおく）
ことば。竹取（翁あらば、ふと射殺して、首の玉はとりてん、おそくくるやつばらを、まさじとのたまひて）

やつぼ　ナ。矢坪。やごろといふに同じ。
やづま　ナ。屋端。いへのたかし。夫木廿（みさくせば、ふもとのやづまも、なかりけり、淀野の沼に、ひける菖蒲を）
やつまと　ナ。八的。射術にいふ語。花、扇、小刀、楊枝などを、八所にたてて、馬をはせながら射るをいふ。
やつむねづくり　ナ。八棟造。破風の、四方に、やさうづ作りにせるもの。神社などのやづくりにあり。
やつめうなぎ　ナ。八目鰻。魚の名。形、うなぎに似て、くろくあをみて、目のつゞきに、なゝつの點あり。その狀、あさらも、目のならびつけるがごとし。北國の河などにおほくいでくといふ。
やつめかぶら　ナ。八目鏑。かぶらやの、あなた、あまさあけさるもの。射るとき、よくなりひゞくやうにしさるものなり。和名（八目鏑夜豆女加布良）
やつめさす　ミクラ。夜都米佐須。やくもたつに同じ。やつめ、やくもと、音もかよへば、かよはしいひしならんとぞ。古事記（夜都米佐須、伊豆毛多祁流が、はける太刀、つゞらさはまき、さみなしにあはれ）



やつやつし　サプ。窶。やつれてあり。
やつよに　ソ。彌世。よゝをかさねて。よをかさねて、なほくひさしく。万十（わがさるの、やへさくごとく、夜都與

やつ

国な、いませりみせ、みつゝありさん)

やつりやま ナ.矢釣山.山の名.大和國の高市の郡にあり.万三(矢釣山、こだちもみえず、ふりまがふ、ゆきさわぎどらふ、まゐりくらくも)

やつる ワ.ヒトリ.シ.ニ.蘂.やせおとろへ.すがたかはる.この語は、地方によりて、やつれるを下一段にいふ.古今(君まのひ、草にやつるゝ.古里は、まつむしの音ぞ、悲しかりける)竹取(ひとまのひて、ただ、舎人二人、めしつぎとしてやつれありきて、陸波におちたまひて)

やつれ ナ.蘂.やつるゝことをいふ.すがたのおとろへなりうるをいふ.源氏.若紫(ものどかにきこえさらずなるりは、何がりの御身のやつれにかあらん)

やつれすがた ナ.蘂姿.やつれたるすがた.源氏.末摘花(かやうの御やつれすがた、いひでかい御覽じつけん)

やつればむ ワ.ヒトリ.ロ.蘂.やつれたるさまにみゆ.源氏.宿木(たれも、さまなりはなり給ふ御ありさまの、いとやつればみ、たよりなるやがあるべき)

やつれる ワ.ヒトリ.シ.一.蘂.やつるを見るべし.

やつを ナ.八峯.あまたのみね.新六(やまきしの、やつをにたけの、はをみがく、つらくものをもひもなき)

やつをのつばき ナ.八峯椿.やつをにさける椿.東歌(なつりをの、やつをのつばき、つらゝかに)

やど ナ.宿.いへ.すみか.よるやどるところ.万三(みやびをと、わがいゆきなば、宿戸かゆき、わがいもをりて)

やど

そのみやびを(と)古今(色よりも、香こそあはれと、おもほゆれ、誰が袖ふれし、やどの梅ぞも)

やどおり ナ.宿下.やどおり.やぶいり.

やどかし ナ.宿貸.やどをかすひと.

やどがへ ナ.宿替.やどりをかゆるをいふ.

やどかり ナ.宿借.やどをかるひと.

やどかりむし ナ.寄居虫.虫の名.がうなに同じ.

やどぎ ナ.矢取.矢などの的にあたりたるを、とりかへすひと.

やどかり ナ.宿借.ひとにつかへて、いへのうちにすむひと.

やどす ワ.サ.四.宿.やどらしむ.後撰(ふく風に、ちらすもあらなん、梅の花、一夜やどさん)

やどせで ナ.八年兒.としのをさなき.万九(あしの屋の、うなひをとめが、八年兒の、かたおひのときゆ)

やどせん ナ.宿錢.やどるためにはらふぜに.

やどなし ナ.無宿.ひとつくやどのなきひと.

やどぬし ナ.宿主.やどのぬし.いへのあるじ.

やどひ ナ.宿.やどるをいふ.また、やどりびとをいふ.

やどひき ナ.宿引.さとりやの客などの、ひとをつれてやどにいるるもの.

やどひとり ナ.宿取.ひとにかはりてやどをとるもの.

やどひと ナ.雇人.やとひえ.やとひてつかふひと.

やどひにん ナ.雇人.やとひと.やとひてつかふひと.

やど

やどひぬし ナ.雇主.ひとをやとひてつかふぬし.

やどひびき ナ.雇人.やとひてつかふひと.

やどふ ワ.ハ.四.雇.傭.かねをはらひてつかふ.まろをあたへてひとをつかふ.宇拾(父母は、人々をやとひあつめて、舟をのりんとて、来てみるに、舟なし)

やどふだ ナ.宿札.やどりさるしるしのふだ.

やどもせに ソ.宿禅.やどもせまきまでに.堀川百首(やどもせに、あさごとはなを、ほすよりは、そをゆかで、かくべかりける)

やどもり ナ.宿守.やどのまもりをするひと.末木抄(たびをゆきし、あとのやどもり、おのくにまどくしるれや、けさはいまぎこなん)

やどり ナ.宿守.虫の名.ひぐらしをいふ.土佐にて.

やどや ナ.宿屋.たびびとをやどすいへ.旅籠をいふ.

やどり ナ.宿.やどとしてゐるところ.古今(花ちらす、風の宿は、誰か知る、我にをしへよ、ゆきてうらみん)

やどりうど ナ.宿人.やどりさるひと.著聞十(たぞさとへて、我はやどりびとにて候ふ、これの御釜をみれば、片釜やかりありて、としたるなし)

やどりぎ ナ.宿木.寄生.ほや.木の枝などに、他木のおひいづるもの.枳椇などにおほし.拾古(らつつれ、かりてみるとも、宿木の、ねもみぬをぞ、うきなたつらん)和名(寄生一名、寓生木、和名、夜止里木、一名、保夜)

やどりのつかさ ナ.宿官.五位になりたる外記などの、

やな

國繋に任じたるものなきむ.國司などにしておくをいふ.枕草八(受領は云々、やどりのつかさの權の守は、下野、甲斐、越後、筑後、阿波)

やどる ワ.ヒトリ.四.宿.やどとす.よるとまりてふす.古今(初瀬にまうづるごとにやどりける人の家に、ひさしくやどらでほどへてのちにいたれりければ)

やどろ ワ.ヒトリ.四.宿.やどるに同じ.

やどろく ナ.宿六.いへのあるじをいやしめていふことば.

やどわり ナ.宿割.やどるべきところのわりあて.

やどゐむし ナ.宿蘇.虫の名.かむなしをいふ.伊勢にて.

やどをとる ワ.ヒトリ.四.宿.たびにて、やどるところをさだむ.宇拾六(信濃の國ひくらといふところにやどりね.郡の司のもとにやどをとれり)

やな ナ.簗.うへのたぐひ.魚をとるために、河瀬などに木をよせならべて、水をせきとるをいふ.万三(このくれに、つみのさえだの、ながれこば、梁はうたずて、とらずかもあらん)和名(梁和名、夜奈、魚梁也)

やな ナ.柳.やなぎをいふ.梁江さし.

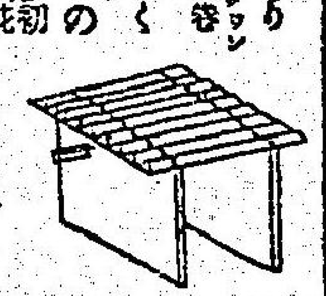
やな ナゲキ.ヨ.よといふに同じ.源作(よそやのの右近がさまやな、みづからいたぞかな)

やないな ナ.柳箕.あぶみのなどころ.下文を見るべし.今川大双紙(鞍の名所云々、くつぶみのまわりを、やないな、むつきなど、こまねといふ)

やないむ ナ.柳箕.やないばこに同じ.

やな

やないばこ ナ.柳筥.やなぎのきでつくりたるはこ.きる、硯、短冊、冠、巻柏、硯箱などをのする器.白木を、ほそくけづりて、三方にけづりあはせたる物.



やなぎ ナ.柳.木の名.河辺などにおふる木にて、枝やはらかに、ながくたれて、常にうちなびきたり.葉は、桃に似て、ほそく、まろやかならぬなり.春のはじめに、新芽めぐみて、茸みさる頃は、うつくしき.花さく.この木、その類おほし.和名(楊和名、夜奈木)

やなぎ ナ.柳.襲の色目の名.表は白、裏は青なるもの.(胡曹抄)又、表裏、ともに青なりともいへり.(雁衣抄)

やなぎいちご ナ.柳苺.草の名.葉のさま、柳に似て、形、細長く、面はみどり、裏はしろし.莖の高さ、五六尺ばかりにて、剣なし.春の末、あかく黄ばみたる花さき、夏のころ、あかく黄ばみたる実をむすぶ.

やなぎいろ ナ.柳色.あをくしてふかきみなるいろ.

やなぎかうり ナ.柳行李.やなぎのほそき枝をとりて、皮をさりて、編みあはしたるもの.

やなぎごし ナ.柳腰.ほそごし.たをやかなるこし.

やなぎごり ナ.柳行李.やなぎがうりに同じ.

やなぎさう ナ.柳草.草の名.いぶきとらのをに同じ.

やなぎさび ナ.柳錆.

やな

とくなりたるもの.老ひのところ見るべし.

やなぎたけ ナ.柳茸.茸の名.やなぎのいぐちにおふる茸.

やなぎだる ナ.柳樽.うるしぬりて、ひききえるやうになりたる樽をいふ.祝儀の事にもちふるものなり.

やなぎだる ナ.柳樽.むかしの、はいかいの、和のころ、録亭川柳といふ人のよみすてたるもの.

やなぎのまゆ ナ.柳眉.りうび.をんなのまゆの、うつくしきをいふ.

やなぎもろき ナ.柳腰.草の名.うたよみぐさに同じ.

やなくづれ ナ.梁崩.かけおとしたるやなのくづれおちたるをいふ.堀川次郎(うかねおほく、くずれし)

やなくひ ナ.胡籙.矢をもりて、せにおふもの.

やなす ナ.梁簀.やなのおひさ.おきてうをなすくふすだれのごときもの.和名(簗和名、夜奈須)

やなせ ナ.梁瀬.やなをうちたるせ.

やなぼり ナ.梁堀.

蹈るふすめゆの、やなほてりして）

やなみ ナ。矢頭。やのならび。また、やを、ゆみにつがふをいふ。金槐集（もののふの、やなみつくろふ、こてのうへに、あられたばしる、那須のしのはら）

やなり ナ。家鳴。いへの、ふるひてなりひゞくをいふ。

やに ナ。脂。あぶら。木よりながれいづるねばきあるのこりくまりたるもの。和名（松脂 萬豆夜爾）

やにこし サ。ヒ。脂濃。あくなし。ねばりてあり。

やにしる ナ。脂汁。やにといふに同じ。

やにえ ナ。家庭。いへむらに同じ。古事記（千葉の、葛野をみれば、もちたる、夜邇波もみゆ、國のほもみゆ）

やにえに ツ。矢庭。たゞちに、そのところにて。

やにれ ナ。楡。木の名。大木となる木なり。葉は、くみに似て皺あり。また、鋸歯あり。春夏のあひだ、うすあかき、ちひさき花さきて、さゝやかなる莢をむすぶ。この木は、若葉は、食物とし、膜は、糊とすといふ。この木、なほ、その類あり。和名（楡 和名 夜仁禮）

やぬし ナ。家主。いへのぬし。いへのあるじ。

やぬち ナ。家内。いへのうち。万九（くしもみじ、屋中もむくじ、くさまくら、たびゆく君を、いはふともひて）

やね ナ。屋根。いへのむね。万ロ（いさぶきの、黒木の屋根は、山ちかし、あすしもとりて、もちてまゐこん）

やねいた ナ。屋根板。やねにふくちひさきいた。

やねがへ ナ。屋根替。やねをふきかふるをいふ。

やねふき ナ。屋根葺。やねをふくを、業とするひと。

やねぶね ナ。屋根舟。やねあるちひさきふね。

やねや ナ。屋根屋。やねをふくを、業とするひと。

やのあさつて ナ。明々後日。あさてのつぎのひ。

やのつかひ ナ。矢使。やぶみ。また、いそぎのつかひ。

やのと ナ。屋戸。かど。万十四（たれぞこの、屋能戸おそぶる、にふなみに、我が兄をやりて、いはふこの戸を）

やのね ナ。矢根。やじりに同じ。

やのねいし ナ。矢根石。やじりのかたちしたるいし。

やのへ ナ。屋上。やね。和名（屋蓋 和名 夜乃古介）

やは ダ。ズ。[illegible]をかへさまにすることぞ。古今（春の夜の、やみはあやなし、うめのはな、いろこそみえね、香やはかくるゝ）同（いそのかみ、ふるのなかみち、なかなかに、みずばこひしと、おもはましやは）

やだ ナ。矢場。ゆみをいるところ。

やはい サ。柔。やはしを見るべし。

やはか ツ。豈。あに。いかでか。いづくんぞ。

やはぎ ナ。矢矧。やをつくるを、なりはひとするひと。

やはぎ ナ。矢矧。地の名。参河にあり。新六（梓弓、やはぎにとひ、やどりなば、あすやこえなん、とよの河水）

やはし サ。ヒ。柔。やはらかなり。おだやかなり。なめらかなり。この語は、今は、やはしとしをいはず。

やはす ワ。カ。円。和。なごむ。やはらにす。万十二（ちはやぶる、神をことむけ、まつろへぬ、ひとをも夜波之）

やはず ナ。矢筈。やのこすゑ。やのもとの、ゆづるにかくるところ。和名（筈 夜波須 箭受弦処也）

やはせ ナ。矢橋。地の名。近江にあり。堀川次郎（仁保照や、やはせの渡、する船を、幾十度みつ、せたの橋守）

やはた ナ。八幡。地の名。山城にあり。新撰古（八幡山、昔たれそめし、ためのうちに、なほ萬代と、松風ぞふく）

やはだい ナ。野馬臺。やまとをおやまりたるとなへ。

やはたぐろ ナ。八幡黒。もみがそのくろくそめなしたるもの。山城の八幡といふ地よりいだすゆゑにいふ。

やはき ツ。故。ことさらに。尾張のひとのいふことば。

やははだ ナ。柔肌。やはらかなるはだ。万二（たゞなづく、柔膚すらを、つるぎたち、身にそへ寝ねば）

やはん ナ。夜半。よなか。まよなか。

やばん ナ。野蛮。ものごとのひらけぬくにのひと。

やばん ナ。夜番。よるのばん。よるのまもり。

やはやはと ツ。柔々。やはらかに。のどやかに。源若菜（なつかしく、らうたげに、やはやはとのみみえ給ふ）

やはら ナ。柔術。ぢうじゆつ。やはらとり。うちものをもたずして、くみあひて、ひとをとらふるぢゆつ。

やはら ナ。飯。おものをいふ。羽前、羽後にて。

やはら ツ。徐々。やをら。そろりに。字拾（いもねられざりければ、やはらおきてたゝずみありくに）

やはらかなり サ。柔。かたくなし。おだやかなり。

やはらかに ツ。柔。かたくなく。おだやかに。のどやかに。鏡

閨巣（貫川の、せゞの、やはらたまくら、也波良加爾、ぬる夜はなくて、おやさくるつま）

やはらぐ ワ。ヒトリ。ロ。和。やはらかになる。源旬宮（かゞるほどに、すこしなよびやはらぎすぎて）

やはらぐ ワ。カナ。シニ。和。やはらかにならしむ。この語は、地方によりては、やはらげるを下一段にいふ。古今序（やまとうたは云々、男女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをもなぐさむるは歌なり）

やはらぐさ ナ。柔草。黄耆。草の名。葉は、槐に似て、槐よりもちひさくして、さきとがれり。また、花も、槐に似て、餅むみたる實をむすぶ。和名（黄耆 和名 夜波良久佐）

やはらげる ワ。カナ。シ一。和。やはらぐを見るべし。

やはらたまくら ナ。柔手枕。やはらかなるたまくら。催馬楽（貫川の、せゞの、や波良太万久良、やはらかに、ぬる夜はなくて、おやさくるつま）

やはらづつ ツ。徐々。すこしづゝ。源夕霧（やはらづゝひきいりさまひぬるけしきなれば云々、よし、今よりにくまぜさまふなよ、つらからんとてせさりさまひぬ）

やはらとり ナ。柔術。やはらを見るべし。

やはり ツ。矢張。もとのまゝに。そのまゝにて。

やひに ツ。野鄙。いやしく。ゐなかめきて。

やびらき ナ。矢開。はじめて、ゆみをいるをいふ。また、小兒の、はじめて、鳥獣を射るときするいはひ。貞丈雑記

やひらで ナ。八葉盤。あまたのひらで。神楽歌（也比良天な、手にとりもちて、我からかみの、からをぎせんや）

やひらで ナ。八平手。ひらでを、やつたくはいふ。神拜のときする事なり。大神宮儀式帳（八開手拍弖）

やひろ ナ。八尋。あまたのひろ。長きをいふ語なり。

やひろどの ナ。八尋殿。ひろきとの。古事記（八尋殿）

やひろぼこ ナ。八尋矛。ほこの、えのながきもの。

やぶ ナ。藪。草木の、しげりしげりたるところ。万代（御たらすゑ、冬野をさくる、かりびとの、いづれのやぶに、駒をかくさん）和名（藪 和名、也不）

やぶいしや ナ。藪醫者。せぎのつたなきくすし。

やぶいり ナ。藪入。ひとにつかはれたるひとの、正月十六日と七月十六日とに、暇を得て、家に歸るをいふ。

やぶか ナ。藪蚊。蚊の、藪などにいでくるもので、常の蚊よりもいづる事おそし。形よのつねの蚊よりもおほきくして、色くろずみて、脚に、縞のごとき斑ありて、人をさすことも、常の蚊よりもはなはだし。

やぶかうじ ナ。藪柑子。紫金牛。灌木の名。やまたちばな。山中の木陰などにいでくるもので、高さ五六寸なり、葉のさま、茶の葉に似て、うすくしてひろし。夏のころ、あかくちひさき花さきて、つぶらなる實をむすぶ。實、秋の末にいたりてあかくいろづく。

やぶがくれ ナ。藪隱。やぶのかげ。好忠集（藪隱、雉子のありか、うかゞふと、あやなく冬の、野にやたてれん）

やぶからし ナ。藪枯。蔓草の名。莖も蔓も、もじめのほど

赤くくろずみて、後、やうく、淡緑にかはる。葉は、かへでに似て、葉ごとに、鬚ありて、夏の頃、木などにまとひつきて、はびこる。また、夏秋の間、よひらの、あをみたる花さきて、くろずみたるちひさき實をむすぶ。

やぶさかなり サ。吝。ものをしみのこゝろあらし。

やぶさかに ツ。吝。ものをしみのこゝろありて。

やぶさし サ。ヒ。吝。やぶさかなり。字鏡（塚也、妬也、也不佐志）

やぶさめ ナ。流鏑馬。うまゆみの一種の式にて、馬をはせながら、物を射るもの。神祭などにする事なり。

やぶじまり ツ。八節結。あまりつよく、ゆるびなく。古事記（おほきみの、みこのあぢがき、夜布士麻理、あまりとほし、きれんあぢがき、やけんあぢがき）

やぶじらみ ナ。藪虱。虫の名。竹などの上につく虫にて、初生の程は、そのむれたるさま、粉をふりかけたるがごとくにて、後、虱に似たる灰色の虫となる。

やぶじらみ ナ。藪虱。草の名。ひるむしろに同じ。

やぶせき ナ。射芝。まとまうしの、とびくるやをふせぐものにて、つくりまはしてつくりたるもの。和名（射芝 和名、夜布世岐 以蒿爲之、或執塔者之禦矢也）

やぶそで ナ。[illegible]。草の名。葉は、麻の葉のごとくにて尖あり。莖は、圓くしてうすあかし。また、葉は、莖の節ごとに、みつづつつきて、春の頃、薄紫なる花さく。

やぶでまり ナ。藪手毬。木の名。枝はすぐに、竹のご

とくして、葉のつくところに、また、竹のごとき節あり。葉は、ほそくしてまさみあるに、鋸歯の如き刻あり。花は、きいろくちひさくして、手毬の花のごとし。

やぶなみのさと　ナ.藪並里。地の名。越中國、射水の郡にあり。万廿（夜夫奈美能、佐刀にやどり、わるさきめ、ことをつくむと、（をのにつけつや）

やぶにくけい　ナ.藪肉桂。木の名。たぶのきに同じ。

やぶにらみ　ナ.藪睨。不具の名。ものをみるひとみの、かためなりて、たゞしく、そのものにむかはぬもの。

やぶねたく　ワ.ヒトリ.四.船をたくこと。ふねをすゝむ。万七（おほぶねを、あるみにいだし、八船多気、わがみし子等が、まみは、まるしも）

やぶねのかみ　ナ.屋船神。とようけひめ、くゝのち、二柱の大神を申す。この二柱は、家を守りまします大神なり。

やぶはら　ナ.藪原。やぶの、ひろくとあるところ。皇極紀（もろくにゝ、ことごとくさとゆる、あきの野夫藪原）

やぶみ　ナ.矢文。ふみを、やにむすびつけて、いるをいふ。おわん物語（むかひ市をみて、おじやつきのぞ、その日。ちぢ.肥父のもとゝくへ、矢ぶみ来さりて）

やぶめ　ナ.夜分。よる。よなか。

やぶめうが　ナ.藪茗荷。草の名。春の末、莖を抽きいでて、めうがに似たる葉をいだす。のち、莖いでて、むひらのさるき花さきて、まるき實をむすぶ。

やぶる　ワ.ヒトリ.四.破る。こぼつ。くだく。みだす。なやす。そこなふ。万廿（まさみた、いはひ持ち来て、石もちて、都追伎破夫利、早川に、あらひすゝぎ）

やぶる　ワ.ヒトリ.二.破壊。取。こぼる。くだく。みだる。そこなはる。この国は、地方によりては、やぶるゝを下一段にいふ。宇拾十（大津といふ地にておいつきて、たぶれ、皇子の軍やぶれて、散々に逃げける程に）

やぶれがさ　ナ.破笠。草の名。やぶれすげがさに同じ。

やぶれかぶれ　ソ.破破。やけをおこして。

やぶれぐつ　ナ.破履。ひきてやぶれたるくつ。

やぶれごろも　ナ.破衣。つゞり。やぶれたるころも。

やぶれさうぶ　ナ.破菖蒲。かさねの色の名。表は萌黄にて、裏の紅梅なるものをいふ。

やぶれしやうが　ナ.破生薑。草の名。やぶめうがに同じ。

やぶれすげがさ　ナ.破菅笠。兎児傘。草の名。莖の高さ二三尺ばかり、葉の、ふるきにて、葉のかさに似たり。夏のころ、莖をいでて、葉の末につける。

やぶれそう　ナ.破僧。やぶれそうに同じ。七一職人歌合（やぶれそう、念ばしきをすれば、こぼるなの）

やぶれる　ワ.ヒトリ.シ.破壊。取。やぶるを見るべし。

やへ　ナ.八重。ものの、いくへともなく、かさなりたるを

いふ。後撰（ひとへなる、ひとへごろもは、やまぶきの、やへの色にも、なきならすけり）

やへうめ　ナ.八重梅。小唄の名。三味線まどにうたふもの。

やへがき　ナ.八重垣。かきの、やへにゆひめぐらしたるもの。古事記（やくもたつ、いづも夜幣賀岐、つまごみに、夜幣賀岐つくる、その夜幣賀岐を）

やへがき　ナ.八重垣。名香の名。らんの一種なり。

やへぎく　ナ.八重菊。きくのはなびらの、やへにかさなりたるもの。千載（やへぎくの、にほひにまさし、君が代は、千年の秋を、かさねてよとか）

やへぐも　ナ.八重雲。くもの、やへにかさなりたるもの。

やへこ　ナ.八重子。いくへともなくあつまるもの。天智紀

やへごとしろぬし　ナ.八重言代主。ことしろぬしに同じ。

やへたたみ　ナ.八重疊。たゝみの、いくへともなくかさねたるもの。神代紀（八重疊）

やへたたみ　マ.八重疊。いくへもなくかさねたるもの。万廿（八重疊、平群乃山に、四月）

と、五月のほどに、くすりなり。つなる時に）

やへたなびく　ナ.八重棚雲。やへにかさなりたるたなぐも。古事記（押分天之八重多那雲而）

やへなり　ナ.八重生。豆の名。あずきのたぐひにて、色みどりなり。莖の高さ一尺ばかりにて、豆は、夏より秋にいたるまで、たえまなくむすぶ。

やへの　ナ.八重野。その、かさなりておひたるもの。

やへひがき　ナ.八重檜垣。ひがきの、やへにゆひめぐらしたるもの。新六（年月に、さがけるむぐらの、やへひがき）

やへぶき　ナ.八重葺。やねの、やへにふきなしたるもの。拾穂集（やへぶきの、ひまさへあらば、あしの屋の、おとせぬ風は、あらじとぞおもふ）

やへむぐら　ナ.八重葎。むぐらの、いやがうへにおひしげりたるをいふ。後撰（やへむぐら、さしてし門を、いまさらに、なにゝくやしく、あけてまちけん）

やへやま　ナ.八重山。やまの、つぎつぎにあるをいふ。

やほ　ナ.八百。かずのあまたなるをいふ。

やほ　ナ.彌帆。おほぶねのへのかさにまつるちひさき帆。

やぼ　ナ.野夫。あなやさ。おなるもの。

やほか　ナ.八百日。あまたの日。拾遺（八百日ゆく、濱のまさごと、わがこひと、いづれまされり、おきつしまもり）

やほこ　ナ.八矛。あまたのほこ。万廿（田道間守、ときじくのかくの木の実を、八矛もち、まゐでこしときに）

やほたで　ナ.八穂蓼。ほの、あまたあるたで。

やほたでだ　マ.八穂蓼手。みづくでその所にひろきたむけかけていふ。万廿

やほち　ナ.夜發。たびたび、つぎつみのたぐひ。和名（遊行女婦、和名宇加禮女、一云、阿曾比。楊氏漢語抄云、夜發、保知加波羅比）

やほにほし　マ.八百丹吉。やほには、あをへのつちにて、やほによし、きづくる杵築の宮

やほのそら　ナ.彌帆。やほをたてるほばしら。やほを見合すなり。飛鳥記（かぜなぼふきをりて、御船のやほのはしら、ふきおりてけり）

やほばしら　ナ.彌帆柱。やほのはしらに同じ。

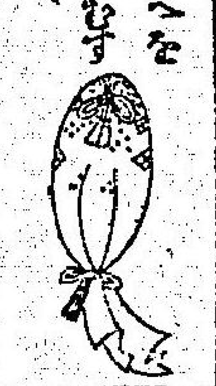
やほへ　ナ.八百重。かさなりのあまたなるをいふ。

やほへ　ナ.八百重。よろづのやさからなるをいふ。

やほやもの　ナ.八百屋物。やほやのあきなふもの。

やほよろづ　ナ.八百萬。かずの、かぎりもなく、あまたなるをいふ。万二（天地の、はじめの時し、久方の、天の河原に、八百萬、千萬神の、神つどひ、つどひいまして）

やぼろ　ナ.矢保呂。うつぼのうへをおほふものにて、そのさま、むすびたるふくろのごとくなるもの。



やま　ナ.山。おほつちのうへの、たかくなりたるところにて、そのうへは、みねといひ、そのまへを、ふもとといふ。万四（つきよみの、ひかりに来ませ、あしびきの、山をへだてて、とほからなくに）

やま　ナ.山。近江の比叡山をいふ。そこに、延暦寺あり。徒然（夜中ばかりなれば、山の座主なにくれの僧）二（山のために寺やるれ持りし）

やま　ナ.山。寺のことをいふ。常陸、上總などにて。

やま　ナ.山。行像。やましのするまつり。

やまあざみ　ナ.山薊。薊の一種。おほあざみのたぐひ。和名（大薊和名夜末阿佐美生山谷間者也）

やまあそび　ナ.山遊。やまべをあそびありくをいふ。

やまあひ　ナ.山間。やまのあひだ。風雅（山間に、おりたつくもの）

やまあらし　ナ.豪豬。獸の名。外國の獸なり。からだ、猪に似て、頭より背にかけて、馬のたてがみのごときながき毛あり。このものの、怒りいきどほるときは、その毛をさかだて、人をさすことの、矢のごとしといふ。

やまあらし　ナ.山嵐。やまのあらし。玉葉（山嵐の、すぎ

ぬとおもふ、夕暮は、おくれてさく、軒の松が枝)

やまあららぎ　ナ。辛夷。木の名。こぶし。春のすゑ、夏のはじめ、花さきて、花おちてのち、葉いづ。花は、むめのほどは、枝のさきはふくれたるものいできて、筆の穂のごとくなりて後は、ちひさき蓮の花のごとくなりてひらく。色は、あかきもの、しろきものありて、香は、すこし、蘭の花に似たり。和名(辛夷和名、夜末阿良々木、一云古不之波之加美。甘子可啖之)

やまあるき　ナ。山行。やまぶみ。やまあそび。

やまあゐ　ナ。山藍。藍の一種にて、山中に、おのづからおひいづるもの。万九(山藍もて、すれる衣きて、たゞひとり、いわたらす子は、若草の、夫かあるらん)

やまいかづち　ナ。山雷神。おほやまづみに同じ。

やまいぬ　ナ。山犬。豺。獣の名。おほかみのたぐひなり。形は、狗に似て、おほきくして、やせたり。人をそこなふなど、すべて、狼に似たり。たゞ、その異なるところは、狼は、群ありて、豺は群なしといふ。

やまいぬ　ナ。病犬。やみて、こゝろのくるひたるいぬ。

やまいも　ナ。山芋。野菜の名。やまのいもを見るべし。

やまう　ナ。病。やまひの、おんべんのとなへ。後拾(やまうに煩ひけるが、すこしおこたり侍りければ)

やまうつぎ　ナ。山空木。灌木の名。葉の状、ゐのくちに似て、高さ三四尺なり。夏のはじめ、穂をいだして、あかくしておほきなる花をひらき、花ののち、莢をむすぶ。莢の中には、ちひさき實あり。

やまうど　ナ。病人。やみたるひと。土佐(かぢとりのひごは、ふなぎみのやまうど、もとよりこちごちしきひとにて)

やまうど　ナ。山人。やまびと。やまざとにすみたるひと。

やまうば　ナ。山姥。やまをんなに同じ。

やまうた　ナ。山歌。小唄の名。三味線にてうたふもの。

やまうだら　ナ。蘞菝。草の名。葉の状、すこし、おほばこに似てほそながく、茎は、ひともじに似て、青く、むらさきばみたり。夏のころ、むらの花の、赤くくろみたるをひらく。和名(蘞菝和名、夜末宇波良、一云之々乃比乃木)

やまうま　ナ。山馬。馬の一種にて、山中に、おのづからいでくるもの。かたち、常の馬のごとくにてちひさし。

やまうり　ナ。山賣。ひとつにまとめてうるをいふ。

やまえんどう　ナ。山豌豆。草の名。いたちささげに同じ。

やまおくり　ナ。山送。のべおくり。そうむり。撰集抄三(骸をおさへて、最後のやまおくりして、なく／＼、煙となし、骨をひろひとりて、高野にとこころざし)

やまおしろい　ナ。山白粉。虫の巣なり。いぼたに同じ。

やまおろし　ナ。山颪。やまよりふきおろすかぜ。玉葉(いざとはば、こよひいさねん、旅衣、やまおろしふきて、袖はさゆとも)源若(法華三昧おこなふ堂の懺法の聲、やまおろしにつきてきこえくるいとたふとく)

やまが　ナ。山家。やまにあるいへ。やまざとのいへ。

やまがうじゆ　ナ。山香薷。らんぎくをいふ。京都にて、

やまかがち　ナ。蟒蛇。をろち。うはゞみ。へびの、きはめておほきなるもの。和名(蟒和名、夜末加々智、蛇之最大也)

やまかがみ　ナ。白蘞。草の名。葉は、くずに似て、莖のすゑは、いつひらづゝ並びつきていづ。夏の頃、ちひさき花さきて、秋のはじめ、實をむすぶ。この草、根は、玉子に似てながきものあり。和名(白蘞和名、夜末賀々美)

やまがき　ナ。山柿。しぶがきの一種、ささがきのたぐひ。和名(鹿心柿和名、夜末加岐、柿之小而長也)

やまかげ　ナ。山陰。やまのかげ。玉葉(秋風に、もとあらの小萩、露おちて、やまかげさむみ、鹿ぞなくなる)

やまかけどうふ　ナ。山掛豆腐。とろゝをかけたるとうふ。

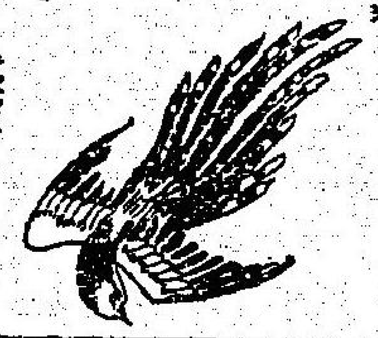
やまかご　ナ。山駕籠。ようつでかごのたぐひのかご。

やまかささぎ　ナ。山鵲。鳥の名。鵲の一種なり。かたち、常のかささぎのごとくにて、嘴と脚とはあかく、尾は、きはめてながくして、しなやかなるうつくしきもの。

やまがた　ナ。山縣。やまがたに同じ。古事記(夜麻賀多に、まける菘菜も、吉備人と、ともにしつめば、たのしくもあるか)

やまがた　ナ。山形。射場の、的のうしろにする垜にて、矢のとびくるをふせぐためにするもの。和名(山形和名、夜末加太、俗説、四尺大栗、耕布栗矢者也)

やまがた　ナ。山形。やまのかたちにつくりたるもの。中



いたく、左右は、やうくにまがりたるかたち。

やまかたつきて　ツ。山にかたよりて。万十(雪をおきて、梅をなこひそ、足引の、山片就而、いへゐせるきみ)

やまがたな　ナ。山刀。きこりのもちふるかたな。

やまがつ　ナ。山賤。樵夫。やまざとのひと。また、きこりのたぐひ。拾遺(やまがつと、ひとはいへども、ほとゝぎす、まづはつこゑは、われのみぞきく)

やまかづら　ナ。山蘰。まさきのかづらにてゆひたるかづら。古今(まきもくの、あなしの山の、やまびとと、ひともみるがに、やまかづらせよ)夫木二(まきもくの、あなしのひばら、春くれば、かすみをかけて、やまかづらせり)袖中抄(神楽するには、まさきのかづらにて、かづらをゆふを、やまかづらといふ)

やまがに　ナ。山蟹。いしがにの、いそまにおるもの。

やまがは　ナ。山川。やまにあるかは。古今(山川に、風のかけたる、しがらみは、流れもあへぬ、紅葉なりけり)

やまかひ　ナ。山峽。やまのかひ。やまのあひだの、せまくなりたるところ。万廿(夜麻可比に、さけるさくらを、たゞ一目、君にみせてば、何をかおもはん)

やまがへり　ナ。山返。たかの、やまにてとしへりたるもの。壬生二品集(ひきすゑよ、いらての鷹の、やまがへり、まだ日はたかし、こころそらなり)

やまかんむり　ナ。山冠。からもじのかしらへに、山の字を、かしらにかぶらせたるもの。岑、岸、嶺、巖のたぐひ。

やまがもの　ナ。山家者。やまがつに同じ。

やまがら　ナ。山雀。鳥の名。形、うぐひすに似て、頭は、しろく、また、あかぐろみたるところもあり。また、胸と、翅と、尾とは、くろく、腹はうすあかし。この鳥、よく、胡桃をくらふ。夫木廿(やまがらの、まはすくるみの、とにかくに、もてあつかふは、こゝろなりけり)

やまがらす　ナ。山烏。やまにすむからす。また、烏の一種、みやまがらす。千載(つらしとて、さてはよもされ、やまがらす、かしらはしろく、なる世なりとも)

やまがらめ　ナ。山雀。やまがらに同じ。拾遺物名(紅葉は、衣の色は、しみにけり、秋の山から、めぐり来し間に)

やまぎ　ナ。八巻。ほけきやうに同じ。新六(あひがたき、やまぎの法の、花の紐、むすぶ契は、むなしからじを)

やまぎ　ナ。山木。やまにそえたるき。新六(かざしには、たてる山木の、上枝は、花も紅葉も、ある時ぞなき)

やまぎ　ナ。山氣。やまのけのでるところ。

やまぎし　ナ。山岸。やまのかたそばのきし。

やまきず　ナ。山疵。もののきずの、こしらへいださずところにてつきたるもの。常に、陶器などのきずにいふ。

やまぎす　ナ。虫の名。こほろぎをいふ。伊勢にて、

やまぎは　ナ。山際。やまのきは。玉葉(霧のみ、そことみえねど、影うすき、月ののぼるや、秋のやまぎは)

やまぎり　ナ。山霧。やまにたつきり。万十(長月の、時雨の雨の、山霧の、いぶせきわがむね、誰をみばやまん)

やまくさ　ナ。山草。草の名。おにわらびに同じ。

やまくす　ナ。山樟。木の名。いぬくすに同じ。

やまぐち　ナ。山口。やまのくち。また、ものごとにいるはじまり。六帖(あさがりの、たちまがふ峰の、やまぐちは、かねてぞしるき、うつろなんとは)

やまぐちまつり　ナ。山口祭。そまびと、かりびとなどのするやまのかみのまつり。定家卿三百首(さとちかき、野邊の草より、たつ鳥は、山口祭、する程もなし)

やまくぢら　ナ。山鯨。ゐのしゝをいふかくしことば。

やまくづれ　ナ。山崩。やまのくづれおつるをいふ。

やまぐは　ナ。山桑。桑の一種。つみに同じ。

やまぐみ　ナ。山茱。木の名。いつきに同じ。

やまこ　ナ。猨。獣の名。ひゝのたぐひなるべし。猿の、百年を經て、あやしきわざをするものなりといふ。和名(猨和名、夜萬古、搜神記云、猨、百五百歲、則變爲玃)

やまごえ　ナ。山越。やまの、こえてゆくところ。源浮舟(むかしきこえん事は、いとわらきやまごえはなん侍れど、こと、ほどとほくは、おぼえずなん)

やまごし　ナ。山越。やまごえ。また、やまをこしてゆくをいふ。古今(かひがねを、ねこしやまごし、ふく風を、ひとにもがもや、ことづてやらん)

やまごと　ナ。山事。やましのするわざ。

やまごぼう　ナ。山牛蒡。草の名。いぬごばうに同じ。

やまごもり　ナ。山籠。やまなどにこもりゐるをいふ。

枕草三（おぼつかなきもの、十二年のやまごもりの法師のめおや云々、くらきに、ふみをくひなる）

やまさか　ナ.山坂。やまのさか。

やまざくら　ナ.山櫻。さくらの、やまにおひたるをいふ。但し、櫻の一種にて、その葉の、ちひさく、きはめてしろく、ちひさきひとへの花さくものあり。殊に、山におほければ、常に、山櫻といへり。

やまざくらど　ナ.山櫻戸。やまざくらのきにてつくれるとの、やまざくらど。新勅（名をきたにしみねのわらしも、霞とふる、やまざくらどの、あけぼののそら）

やまさけ　ナ.苔類。草の名。えびすぐさに同じ。

やまさち　ナ.山幸。やまのさち。やまのえもの。古事記一（山佐知母、己之佐知佐知、海佐知母、己之佐知佐知）

やまさつを　ナ.山猟夫。やまのさつを。やまにてかりをするかりうど。夫木抄（やまさつをが、ねらふ鹿木や、さびしからん、やまぢの月の、いでさかりする）

やまざと　ナ.山里。やまにあるひとざと。拾遺（春の、なりせば、霞とめて、山里にいて、春をさきまし）

やまざとびと　ワ.ヒトリ.カ.山里人。山里めきたり。源氏橋姫（やまざとびとるとかたうしら、…）

やまざとびと　ナ.山里人。やまざとにすみたるひと。源氏若紫（山里人にも、ひさしう、おとづれ、…）

やまし　ナ.山師。そまもり、かねほりのたぐひの、やまのかせぎをするひと。また、たしかならぬことを、おもひくはだつるひと。

やまし　サ.ア.疚。やましきに同じ。この語れ、今れ、やましいと、わらそへていふ。源挿（こころやましければ、ひるはおもしろう、いふもあやしうなまし）

やましい　ナ.疚。やましき見るべし。

やましたみ　ナ.山下繁。やまの、ふもとのかげにあるうみ。壬生忠岑（あきかぜの、ふきしくやまの、もみぢばの、やましたみづに、千鳥なくなり）

やましたみづ　ナ.山下水。やまの、ふもとのかげにあるみづ。古今（あしひきの、やましたみづの、こがくれて、たぎつこころを、せきぞかねつる）

やましな　ナ.山科。地の名。山城にあり。拾遺（山科の、山の岩根に、松をうゑて、常盤堅盤に、祈りつる哉）

やましば　ナ.山柴。やまのしば。新勅古（山里の、柴のすみかを、なびくなよ、たまにも、しばしの、こりをとし世に）

やましろ　ナ.山城。催馬樂の呂の曲の名。催馬楽（山城の、こまのわたりの、うりつくり、なよや、らいしなや、さいしなや、うりつくり、はれ）

やましろうかひ　ナ.山城使。山城の國司の、四月の賀茂祭の日、その式部に奉向するものをいふ。

やましろひと　ナ.山代彦。おほくに紀の神の御子。

やますげ　ナ.山菅。草の名。やぶらんに同じ。和名抄（部類（晉をけれ、人のものおもひ、やますげを、ところに、さけるふたり）

やますげの　マクラ.山菅乃。やますげれ、實をむすぶものなり。さると、みなちすらにかけてふれ、實ならどにかくるなり。また、みだるるにかくるれ、この草の、葉おりのあひて、繁さにみだれやすければなり。万四（山菅乃、實不成事を、吾によりて、いひし妹れ、たれとか寝らん）同十一（山菅、乱戀のみ、せしめつつ、あはぬ妹かも、年の經ぬつつ）

やまずみ　ナ.山住。やまざとのすまひ。新勅（ふるき御やまずみに、うつろひさせたまひし）

やませかぜ　ナ.山瀬風。せたかぜに同じ。

やませり　ナ.山芹。當麻。草の名。せりに似て、芹よりも、おほきくして、葉に、三枝あり。秋のころ、枝のあひだより、莖をいだして、うすむらさきの、ちひさき花さく。根れ、太りまろく、末れ、ほそくして、物の尾のごとくなり。香氣あり。常に、莖をもちふるものなり。和名（倉歸和名夜末世里、一云於保世里又云字萬世里）

やまぞだ　ナ.山側。やまのそば。やまにそひたるところ。

やまぞひ　ナ.山添。やまぎは。やまにそひたるところ。

やまだ　ナ.山田。やまの、たにもたれたるところ。古事記（あしびきの、山田をつくり、山たかみ、さらひを、つむることぞ、よばれなるつま）

やまだいこん　ナ.山大根。やまぢしやをいふ。溪月まで。

やまだいわウ　ナ.山大黄。草の名。いぶきとらのをに同じ。

やまだし　ナ.山出。みなもとの、あらきにあることをいふ。

やまだち　ナ.山賊。ぬすびとの、やまにかくれゐて、たびびとのにもつなどを、うばふもの。著聞十（ひきもとけて、たけてゆきければ、奈良坂にて、やまだちにあひけり）

やまだちばな　ナ.山橘。灌木の名。やぶかうじに同じ。萬葉十（あしびきの、山橘の、色に出でて、わが戀ふらくを、人知るらめや）古今（わがこひを、人しるらめや、しきたへの、枕のみこそ、しらばしるらめ）

やまたづ　ナ.山鈴。そまびとの、そまにてをの、もちふるきの名。古事記（きみがゆき、けながくなりぬ、夜麻多豆の、むかへをゆかん、まつにはまたじ）

やまたづの　マクラ.山鈴之。やまたづれ、そまにて、もちふる器なるが、ふりあげて、ものをむかふものなれば、むかふにかけていふ。古事記（君がゆき、けながくなりぬ、夜麻多豆能、牟加閇袁由加牟、麻都爾波麻多士）

やまだのそほづ　ナ.山田曾富騰。くえびこに同じ。

やまたんご　ナ.山團子。ともりのきをいふ。尾張にて。

やまぢ　ナ.山路。やまの、たにみくぬりたるところ。古事記（登美毘古自山多和引越御船逃上行也）

やまたのをろち　ナ.八俣大蛇。をろちの、かしらの八つあるもの。古事記（是高志之八俣遠呂智、年年來喫）

やまぢ　ナ.山路。やまみち。古今（世のうきめ、みえぬ山路へ、いらんには、思ふひとこそ、ほだしなりけれ）

やまつ　ナ.山苣。木の名。葉の形、ちさの葉に似たるものなり。萬十（いきのをに、おもへる我を、山ぢさの、花にか君が、うつろひぬらん）

やまつつみ　ナ.山芋。野菜の名。やまのいもを見るべし。和名（晉語、一名山芋和名夜末都以毛、俗云山乃以毛）

やまつか　ナ.山塚。やまとつつみ。揚案抄（たとひ七珍の財を、やまつかとつみたりとも、苦業やむべからず）

やまつくだ　ワ.ヒトリ.カ.山付。やまのかたにあり。

やまつたひ　ナ.山傳。草の名。いはがねさうに同じ。

やまつみ　ナ.山祇。やまのみやび。万二（足引の、山ゆきしかば、山人の、われにえしめし、多麻都刀ぞこれ）

やまつみ　ナ.山積。やまとりに同じ。万代（やまつみの、おそのなるの、尾鏡に、かげるこころや、みる山の鏡）

やまつみ　ナ.山祇。神の名。おほやまづみのかみ。また、たゞ山をまもる神をいふ。万二（たゞなづく、やまのやまの山神の、まつるみつきと、しるたれ、花かざしもち、秋たてれ、もみぢかざせり）

やまづら　ナ.山面。やまのおもて。散木（あさぼらけ、やまづら、ほのかになりける、をぐらのやまに、なくてぞ、まつる）

やまづろ　ナ.山杖。やまにてもちふるつゑ。やまでつくるつゑ。神樂歌（あふさかを、けさこえくれば、やまびとの、ちとせつけとて、たまうづゑ、呉れる杖、也万川恵ぞこれ）

やまて　ナ.山手。やまのかた。やまにちかきかた。

やまでら　ナ.山寺。やまにあるてら。夫木抄（霧ふかく、そこともみえぬ、山寺に、ひとり、ひびく、鈴の音哉）

やまと　ナ.大和。日本。にほんのおほな。大和れ、もと、ひとつの國の名なれど、神武の帝、ここをひらきて、みやこをさだめたまひしより、御代代の天皇のみやとどころなりしかば、終に、よばれて、日本の大名となれるなり。

やまと　ナ.山殿。つくねいものいふ。東國にて。

やまとうた　ナ.大和歌。みくにのうた。みそひともじのうた。古今集序（ものにつけて、いひいだせるなり。……）

やまとえ　ナ.大和繪。ゑをかけるうちに、ふるきくにぶりをうつしたるもの。

やまとおり　ナ.大和織。おほやまとにおりいだせるもの。

やまとごころ　ナ.大和心。みくにのこころ。やまとだましひ。源氏（さえをもととしてこそ、やまとだましひの、世にもちひらるるかたも、つよう侍らめ）

やまとごと　ナ.大和琴。わごん。あづまごと。十六絃あり。絃れ、ほそくして、琴の形に似て、ちひさく、かうばしき木にて作るものなり。和名（日本紀云倭琴用楽二字）

やまとだつ　ナ.大和火鉢。おきごたつに同じ。

やまとことのは　ナ.大和言葉。やまとうた。みそひともじのうた。玉葉（あきつしま、ひとのこころを、たねとして）

とほくつらさし、やまとことのそ】

やまとことのは　ナ.大和詞。やまとことば。みくにことば。

やまとしまね　ナ.大和島根。みくにのこと。おほやまとのくにをいふ。拾玉（あきしまや、やまとしまねや、君が世は、あらふみなれる、めぐみなるまる）

やまとしま　ナ.大和島。やまとのくに。やまとしまねに同じ。万十五（うなばらの、おきへにともし、いさる火は、あかしてともせ、夜麻登思麻見牟）

やまとしまね　ナ.大和島根。やまとのくに。おほやまと。おほやしま。万廿（いざ子ども、たはわざなせそ、あめつちの、かためし国ぞ、夜麻登思麻禰波）

やまとだましひ　ナ.大和魂。やまとごころ。また、たけくををしきところをいふ。百首和歌（[illegible]）[illegible]

やまとちかる　ナ.大和琴。さうしのつゆやうの名。守武千句（[illegible]）

やまとにしき　ナ.大和錦。織物の名。にしきといふに同じ。但し、唐織の錦にむかへて、大和織の錦をいふ。

やまとふみ　ナ.大和書。おほやまとのふみ。

やまとまひ　ナ.大和舞。神楽のたぐひ。横笛、篳篥などありて、八少女の、手に、榊をとりてまふなどあり。

やまとめ　ナ.大和女。やまとのをんな。万四（おほ日刻宮のさとせば、夜麻登女の、膝まくごとに、吾を忘らすな）

やまとめ　ナ.山止。やまにいることをとむるをいふ。

やまともじ　ナ.大和文字。かなもじ。ひらがな。撰集抄（漢字を、所々、大和文字を遊しまじられ侍り）

やまとよみ　ナ.大和訓。さとくん。みくにことのよみ。

やまどり　ナ.山鶏。鳥の名。形、きじに似て、雉子よりもおほきく、尾もまた、雉子よりもながし。また、頭と背と尾とはあかくして、翅の端は、まろき斑あり。また、尾に[illegible]。万十一（思へども、おもひもかねつ、あしびきの、山鳥の尾の、ながきこの夜を）和名（山雞[illegible]和名夜万土利）

やまどりぐさ　ナ.山鶏草。草の名。うむきくに同じ。和名（[illegible]）

やまどりの　ナ.[illegible]。山鳥の、夜ごとに、雌雄[illegible]

やまどりのをかがみ　[illegible]

やまとゐ　ナ.大和猪。すゐるのたぐひ。[illegible]

やまなか　ナ.山中。やまのなか。古今（をちこちの、たづきもしらぬ、山中に、おぼつかなくも、呼子鳥かな）

やまなし　ナ.山梨。木の名。木のさま、梨の木に似て、枝に刺あり。実は、梨のおほきさにて、そのあぢはひいとあし。万代（かひがねに、さきにけらしな、あしびきの、やまなしをかの、やまなしの花）

やまなすび　ナ.山茄子。防葵。草の名。葉も、枝も、あふひに似て、枝ごとに、みつの葉つけり。夏のすゑ、根のところより、茎ぬきいでて、そのさき、すこし、ひらきて、似たる花さく。和名（防葵、[illegible]）

やまにんじん　ナ.山人参。[illegible]

やまねぐさ　ナ.山根草。[illegible]

やまねこ　ナ.山猫。のらねこをいふ。[illegible]

やまの　ナ.山野。やまとの。貫之集（[illegible]）

やまのいも　ナ.山芋。野菜の名。葉のさま、すこし、くさのに似て、[illegible]

和名（[illegible]、一名山芋、和名夜万都以毛、俗云山乃以毛）

やまのいも　ナ.山芋。つくねいもをいふ。東国にて。

やまのおうな　ナ.山姥。姿草の名。あけびに同じ。散木（山女をみて、けふみれば、山のおうなぞ、あけびける、野のおきなをぞ、やさしとおもひし）

やまのかけぢ　ナ.山岸路。かけぢをいふに同じ。新六ニ（ふみまよふ、山のかけぢの、丸木橋、あらずなるらや、こひわたるべき）和名（[illegible]）

やまのかたそ　ナ.山片側。やまのかたそば。夫木十八（足引の、山のかたそひ、岩清水、下ゆく森の、陰ぞ涼しき）

やまのかひ　ナ.山峡。やまのあひだ。せばくなりたるところ。和名（峡、山間陝処也、俗云山乃加比）

やまのかみ　ナ.山神。やまづみに同じ。

やまのかみ　ナ.山神。いへとじをのゝしりよぶことば。

やまのかみのしやくぢやう　ナ.山神錫杖。草の名。きつねのしやくぢやうをいふ。[illegible]の田舎にて。

やまのすそ　ナ.山裾。ふもと。類聚菜（夜をこめて、たちくる山の、すそ[illegible]、あけてや[illegible]）

やまのたり　ナ.山曲。やまのくま。やまのいりくみたるところ。万廿（あしびきの、夜麻能多乎理に、このみる、あまの白雲、[illegible]）

やまのて　ナ.山手。やまのかた。やまによりたるかた。

やまのとね　ナ.山刀禰。やまぢち。[illegible]（旅人は、[illegible]、山のとね[illegible]）

やまのは　ナ.山端。やまのそば。伊勢（[illegible]も月の、隠るるか、山端にげて、いれずもあらなん）

やまのみち　ナ.山道。やまにある道。[illegible]

やまのみち　ナ.東山道。とうさんだうをいふ。北山抄

やまのみち　ナ.北陸道。ほくろくだうをいふ。西宮記

やまのもの　ナ.山物。きじ。やまどり。うさぎのたぐひをいふ。[illegible]

やまのゐ　ナ.山井。やまよりわきいづるみづの、おのづからたまりゐるもの。万十六（安積香山、かげさへみゆる、山の井の、あさきこころを、わがおもはなくに）

やまのをんな　ナ.山女。草の名。やまのおうなに同じ。

やまばた　ナ.山畠。やまの畠。[illegible]

やまはぎ　ナ.山萩。[illegible]

やまばと　ナ.山鳩。[illegible]

やまびこ　ナ.山彦。こだま。[illegible]

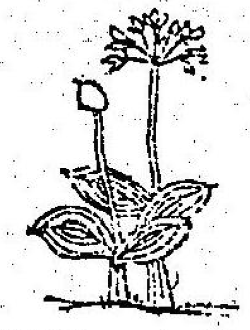
やまびと　ナ.山人。仙人。やまにすむ人。[illegible]

やまひ　ナ.病。[illegible]

やまふし　ナ.山伏。[illegible]

人と、人もみるがに、山賤せよ）拾遺（澤瀉を、ばさてえくれて、やまびとの、千年つけとて、きれる杖なり）

やまひともじ　ナ。山葱。草の名。葉れ、ぎぎうしの葉に似て、ぎぎうしの葉よりも、すこしまろし。この草、葉のあさひより、莖をさして、ひともじに似たる花をひらく。



やまびは　ナ。山枇杷。果の名。いめびはに同じ。

やまひめ　ナ。山姫。神の名。やまをまもりたまふひめがみ。古今（たちぬはぬ、きぬきしひとも、なきものを、なにやまひめの、ぬのさらすらん）

やまひめ　ナ。山姫。蔓草の名。あけび。圓大府集（刈栗れ、心よくこそ、おちにけれ、この山姫の、咲る顔みて）

やまびる　ナ。山蛭。蛭の一種。かさびるに同じ。

やまぶ　ザ。ヒトリ。四。罷。やむに同じ。夫木抄（奥山の、くさがくれなる、むさつもり、あられぬ繼に、やまぶ頃かな）

やまぶき　ナ。山吹。灌木の名。葉れ、ゆすらの葉に似て、なかくしてとがりて、春のすゑ、黄色なる花さく。花れ、一重なるもの、八重なるものあり。古今（今もかも、さきにほふらん、橘の、こじまのさきの、山吹の花）

やまぶき　ナ。山蕗。草の名。つはに同じ。和名（款冬、一名、虎鬚和名、夜末不々木、一云夜末布木）

やまぶき　ナ。山吹。染色の名。梔子のやうしたるいろ。氏族装束抄　また、襲の色目にて、表れ薄朽葉に、裏の、黄なるもの。胡曹抄

やまぶき　ナ。山吹。織色れ、經紅に、緯黄なるをいふ。胡曹抄　また、ふなをいふ。女の詞なり。

やまぶきいろ　ナ。山吹色。きいろ。くちなしいろ。

やまぶきにほひ　ナ。山吹匂。襲の色目の名。表れ、やまぶきにて、裏のきいろなるものをいふ。女官飾抄

やまぶきの　マクラ。山吹之。やまぶきれ、花の、にほひやかなるものなれば、にほふにかけていふ。万十一（山振之、爾保敝流妹が、そねいろの、赤裳の姿、夢にみえつゝ）

やまぶし　ナ。山伏。やまにやどるをいふ。後撰（鯨なき、雨ともさらん、山伏の、おつる涙も、ふりにこそふれ）

やまぶし　ナ。山伏。ほゆげんじや。山にふしなどして、佛道を修行するもの。七一職人歌合（やまぶし、これれ、出羽の羽黒山の、客僧にて候ふ、三の御山さんげい申し候ふ）

その図、七十一番職人歌合にみえたり

やまぶた　ナ。山豚。獸の名。ゐのししに同じ。

やまぶところ　ナ。山懐。やまあひの、くぼまりて、ふところのごとくなりたるところ。山家集（梅が香を、やまふところに、ふきためて、いりこん人に、しめよ春風）

やまぶぶき　ナ。山蕗。款冬。草の名。つはに同じ。和名（款冬、一名、虎鬚和名、夜末不々木、一云夜末布木）

やまぶみ　ナ。山蹈。やまをあるくをいふ。大和（ところ〴〵、やまぶみしありきて、おこなひたまひけり）

やまべ　ナ。山邊。やまのほとり。大和（てる月を、弓張としも、いふことれ、やまべをさして、いればなりけり）

やまべ　ナ。山部。やまのことをなさるひとむれのひと。

やまべ　ナ。魚の名。いくひのちひさきもの。

やまほうし　ナ。山法師。近江の比叡山の延暦寺といふ寺の僧にて、武むねしい、奈良法師とおなじく、神人の如きふるまひをせり。七一職人歌合（山法師、さかたつそまの月に、及ぶべき所こそおぼえね）

七十一番職人歌合にみえたる山法師の図

やまぼこ　ナ。山鉾。かざぼこのたぐひのねりもの。

やまぼたん　ナ。山牡丹。木の名。葉れ、くぬに似てまろく、また、皺を刻とあり。夏のころ、しろくちひさくして、南天に似たる花さき、秋のころ、實をむすぶ。

やまほととぎす　ナ。山時鳥。ほととぎすといふに同じ。万十八（ぬづらしき、君が來まさば、なけといひし、夜麻保等登藝須、なにか來なかぬ）

やままたやま　ナ。山又山。やまの、つぎつぎあるをいふ。

やままつり　ナ。山祭。やまのまつり。やまのかみをまつるまつり。新六二（あゝやとて、たらがつどひの、やまゝつり、けふのかりくら、むなしからんや）

やままゆ　ナ。山繭。かひこの一種にて、山などにおのづからいでくるもの。形、常の蠶に似て、頭おほきく、身みじかくして、くぬぎの葉などをくらふ。繭、常の

よりもおほきく、黄色にてひかりあり。

やまみち　ナ。山路。やまのみち。拾遺（春霞、たちたちかれゆく、やまみちれ、花こそぬさと、ちりまがひけれ）

やまみづ　ナ。山水。やまにあるみづ。また、やまとみづとのけしき。また、やまくづれよりおつるおほみづなどいふこともあり。後撰（ゆくさきも、なくなかれける、やまみづの、ひさまほしくも、おもほゆるかな）

やまみる　ナ。山海松。草の名。深山の石の上に、いでくるものにて、高さ一尺ばかり、葉なきさま、すこし海松のごとし。この草、ひとつの根より、數多の莖をいだして、まがりくねりて、あなを合せたるが如く、また、縮りてる、紺色なるをいふ。

やまめ　ナ。水蠆。蟲の名。形、すこし、蜻蛉に似て、翅なく、色くろずみて、夏の頃、よく、水上にうかびありく。この蟲、のちに、翅いできて、蜻蛉となる。されば、また、蜻蛉の卵の、水中にてかへりたるなりともいふ。

やまめ　ナ。魚の名。いくひのちひさきもの。

やまめ　ナ。寡婦。やもめをいふ。京都などにて。

やまめぐり　ナ。山廻。やまぶしなど、つぎつぎにみたけをめぐるをいふ。詞花（東山百寺をがみけるに、時雨しければよめる、もろともに、やまめぐりする、しぐれかな、ふるにかひなき、身とはしらずや）

やまめぐり　ナ。山廻。ふぐれをいふ。美濃、加納にて。

やまもと　ナ。山本。やまのふもと。堀川次郎（夕附日、さすや嵐の、山本は、ものさびしらに、猿さけぶなり）

やまもも　ナ。楊梅。木の名。果の名。葉れ、沈丁花に似て、めぐりに刻ありて、冬もおつることなく、春のころ、花さきて、實をむすぶ。實れ、核につきて、圓くつぶつぶてるさま、苺のごとく、夏はいたりて熟すれば、ときに、色わろく、むらさきくろみて、味、あまく、まろすし。

やまもり　ナ。山守。やまをまもるひと。万七（山守の、里へかよひし、山路ぞ、しげくなりける、忘れけらしも）

やまもる　ナ。山盛。うつそに、うづたかくもるをいふ。

やまもりべ　ナ。山守部。やまもりのことをもて、みかどにつかへまつるひと。古事記（山部、山守部）

やまよけごろも　ナ。山分衣。やまをゆくにきるころも。また、やまぶしなどのきるころも。古今（清瀧の、せゞのしらいと、くりためて、山分衣、おりてきましを）

やまらんび　ナ。山蘭。草の名。ぬいとらびに同じ。

やまわろ　ナ。山和郎。ひゝのたぐひのけもの。

やまゐ　ナ。山井。やまのゐ。拾遺雑秋（あしびきの、山井の清水、手にくめば、しづくも月の、影ぞやどれる）

やまゐ　ナ。山藍。やまあゐ。九條右大臣集（やまゐにて、すれる衣の、跡もなく、けふきつみねや、何の爲なる）

やまゑみ　ナ。なの名。おほゑみに同じ。

やまを　ナ。山緒。たけのたかさき總子など、狩衣にゆひつくるつな。獵装束（獵狩するのもせに答の、ふりぬれば、やまをはたたん、おつるさはなし）

やまをとこ　ナ。山男。深山にすむ怪物。形、人のごとくにて、男女ありて、身のたけ、一丈あまりもあり、腰のめぐりみれ、獸のかはなどをまとひ、鬼などならず、生ながらくらふといふ。また、越後などの深山にては、このもの、ときどきれ、獵人の小屋などにきたりて、酒ありといふ。猿に、猴のたぐひにもやあるべからん。

やまをんな　ナ。山女。やまをとこのところ見るべし。

やみ　ナ。闇。やみのひかりなくてくらきをいふ。また、ひたく、くらくして、もののあやのみえざるをいふ。古今（春の夜の、やみれあやなし、うめの花、いろこそみえね、香やれかくるゝ）

やみ　ナ。止。とまり。そのことのなくなるをいふ。

やみあがり　ナ。病上。やまひいえて、まだほどへぬころ。

やみうち　ナ。闇討。ひとしれずころすをいふ。

やみくもに　ナ。闇雲。みだりに。もののさけめもなく。

やみさかる　ワ。ヒトリ。四。病盛。さかりにやむ。續花譜名（世のひと、すこしやみさかりてのぼらせらるゝ。このほど、二位、このかたにてうせにけり）

やみしし　ナ。病猪。きずをおひたるしし。古事記（やすみしし、我が大君の、あそばしし、しゝの、夜美斯志の、うたき畏み、我がにげのぼりし、ありをの、榛の木の枝）

やみぢ　ナ。闇路。やみのみち。くらきみち。

やみつく　ワ。ヒトリ。四。病付。やまひつく。わづらひとなる。

やみにくる　ワ。ヒトリ。シニ。闇にまどふ。こころみだれくらみて、せんかたなくなる。源氏（おとどの、やみにくれまどひたまへるさまをみたまふもすき）

やみのうつつ　ナ。闇現。こころのくれまどひたるときのうつゝ。古今（うばたまの、やみのうつゝは、さだかなる、ゆめにいくらも、まさらざりけり）

やみのにしき　ナ。闇錦。よるのにしきといふに同じ。和泉式部集（ちりちらず、みるひともなき、やまざとの、もみぢはやみの、にしきなりけり）

やみのよ　ナ。闇夜。つきのひかりなくてくらきよ。落窪三（御前も、翁は、かゝる闇の身なれ、闇の夜に侍るべければ、おぼしまろらせんを思ひ給ふれど）

やみびと　ナ。病人。やまひにわづらひあるひと。

やみほる　ワ。ヒトリ。シニ。病惚。やみておろかになる。

やみやみ　ク。闇々。みすみす。まのあたりみながら。

やむ　ワ。ヒトリ。四。病。やまひにかゝる。なやむ。わづらふ。伊勢（いはでどもえわたでかへりけり、さてよめる云々、いといたうところやみけり）枕草十（我之が腸の、わづらひけるに、この明神の、やまいをさまやとて、歌よみてたてまつりけるに、やめさせたまひけん、いとをかし）

やむ　ワ。ヒトリ。四。止。已。そこまでにてとまる。もののつゞきたゆ。古事記（くぶつゝい、いしづゝいもち、うちてし夜麻牟）字拾二（おもひきてたづねきつれどけれども、その人さるきはずしなやみにけり）

やむ　サ。ヒトリ。シニ。止已。やましむ。そこまでにてとゞむ。もののつゞきをたつ。その語れ、彼方にふり、やめるを下一段にいふ。伊勢（如何せん、わが心やめ給へと、仏神にも申しけれど、いやまさりにのみ覚えつゝ）

やむごとなき　ソ。不得止事。とゞまることをえず。せんすべもなくて。続紀卅（獣共辛止爲徳止毛止事不得）

やむめ　ナ。寡婦。やもめに同じ。和名（寡和名、夜毛女）

やむやびと　ナ。医治者。あらすきくらひこねの神の御子。

やむやむと　サ。ワ。荏。やまし。やまひにかゝりてなやむがごとし。字鏡（殹殹也、加多久奈、又也牟々々志）

やむそ　ナ。鰥夫。やもをに同じ。和名（鰥夫和名、夜无乎）

やむをえず　ソ。不得止。やむことをえず。せんすべなく。

やんごとなし　サ。ヒ。無止事。やみがたし。すておかれず。後撰（二三日侍りて、やんごとなき事によりてまかりさらければ）空穂忠乞（そこはなやみさまふをあり。とぶらひにものせんといひしかば、やんごとなき事にこそあなれとて、あらぬさまにまかで）

やんごとなし　サ。ヒ。無止事。よのつねならず。たふとし。源東屋（あんじちの我の、やんごとなくおもひおきてさまへらんをこそ）徒然草（竹のそのふのすゑまで、人間のたねならぬぞやんごとなき）

やんま　ナ。蜻蛉。虫の名。おほうをいふ。

やんめ　ナ。病眼。そやりめをいふ。蹉跎にて、

やんや　ナゲキ。喝采。ほめそやしてよぶこゑ。

やんやあ　ナゲキ。喝采。ほめそやしてよぶこゑ。

やめ　ナ。矢目。やのたちたるあな。平家四（物具ぬぎすて、鎧にたちたる矢目をかぞへければ、六十三、うらかく矢いつところ、されどもいたでならねば）

やめ　ナ。止。とめ。そのことをなくなすをいふ。

やめる　サ。カケ。シ一。止。已。やむを見るべし。

やも　ナ。八面。やおもに同じ。

やも　テ。スエ。疑ふことば。こゝろを、かへさまにすることば。万六（をのこ也哉、むなしかるべき、よろづ代に、かたりつぐべき、名はたてずして）同三（ともゆくの、初瀬少女が、手にまける、たまはみだれて、ありといはずや八方）新古（いまさらに、雪ふらめやも、かげろふの、もゆる春日と、なりにしものを）

やもひ　ナ。病。やまひに同じ。散木（まくらにも、枝さしそへず、桃なれば、空はへけされ、はるやもひせり）

やもふ　ワ。ヒトリ。四。病。やむに同じ。万四（古の、ひとのの、ませる、吉備の酒、やもそれはすべな、貫きずたまはん）

やもめ　ナ。寡婦。やむめ。をうとなきをんな。竹取（この翁れ、かとやひめのやもあなるをなげかしければ、よき人にあはせんとおもひはかれども）

やもめ　ナ。鰥夫。やむを。つまのなきをとこ。伊勢（むかし、男、やもめにて居て、ながらぬ命の程に、忘るゝは、いかにみじかき、心なるらん）空穂田鶴村島（源宰相、男のやもめにて、そのこともつかひて）

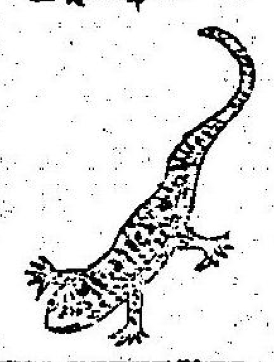
やもめがらす　ナ。病烏。たゞからすといふに同じ。烏は、うれえしき聲にてなくものなれば、それをのゝしりていふなりとぞ。夫木廿（にくらりし、やもめがらすの、うれしきは、一人ねる夜の、有明の空）撰集（病烏）

やもめずみ　ナ。寡居。つまもなくて、ひとりゐるをいふ。蜻蛉（やもめずみし給へる男の、ふみおこせて、つれづれつきて、ものおもふさましたるところ）

やもめびと　ナ。鰥寡。やもめのひと。源玉鬘（やもめなせの、ひさしかりつきかねたるやうもありかし）

やもり　ナ。家守。いへのまもりにつけるひと。

やもり　ナ。守宮。虫の名。形、とかげに似て、頭ひらく、色えびいろみて、くろくまだらなる文あり。常に、くづれたる家の壁のそぎなどにあて、夜になれば這ひいづ。



やもを　ナ。鰥夫。やむを。つまのをんななきをとこ。

やや　ナ。嬰児。あかご。みどりご。

やや　ソ。稍。漸。ややしく。やうやく。すこしばかり。万七（夏陰の、ねやの声にて、たちる尻たつ、そでまきて、せがためたゝば、差ほど、遠きたて）源幹（月やゝさしあがり、ふけゆる夜、わもしろきさ）

やや　ナゲキ。人をよびかくるこゑ。大和（やゝといへどいらへもせで、逃げて家に來て）いは忍し（やゝといへば、おどろきて、とく入りたまへといひて）

ややしだらく　ソ。稍暇。やうやくらくらく。歳暮廿六（院に、やゝまたらくして御出ありけるに）

ややむきし　サ。プ。稍久。良久。やうやくひさし。伊勢（やゝひさしくさぶらひて、いにしへの事など思ひいで）

ややすし　サ。プ。心なやまし。源浮舟（御馬にておそする心ちも、ものおそろしうやゝましけれど）とりかへこ（いふゞあらんと、いとつゝましうやゝましけれど）

ややむ　ワ。ヒトリ。四。心なやむ。繪經三（夜々瀰踰閇婆）

ややもすれば　ソ。動。ともすれば。なにごとにつけても。空穂下（さて、やゝもすればめされたまふさへ、世にもえ　づらなるなりなどおぼえたまふ）

ややもせば　ソ。動。ともせば。なにごとのあらんにつけても。狭衣（このごろ云々、やゝもせば、わが身も、人の御身も、いかならんとみだれまさりて）

ややにて　ソ。漸々。やうやく。やうやく。万五（たまさくも、ふけゆくなしに、漸々、からちつくほり）

ややよ　ナゲキ。人をよびかくるこゑ。新古（やよ時雨、もの思ふ袖の、なかりせば、木葉の後に、何をそめまし）

ややよければ　サ。彌多。いよゝお張ければ。古今（これはそれなる、さくらのちりかさ、やよければ、身いやしくて、年たかき、その　くるしさ）

やよひ　ナ。彌生。きさらぎのつぎのつき。玉蘂（春をまたふ、心の衣を、霞なる、やよひのくれの、端のこゑ）

やよや　ナゲキ。人をよびかくるこゑ。古今（やよやまて、山郭公、ことづてん、我世の中に、すみそびぬとよ）

やよろづ　ナ。八萬。かずのかぎりもなきをいふ。佛足石歌（この御あと、夜呂豆、ひかりを、はなちいだし、もろくすくひ、せさしたまはな、すくひたまはな）

やらい　ナ。矢來。やらひに同じ。

やらう　ナ。屋廊。いへのらう。源若菜（きよげなるやらうなどつゞけて、木立いとよしあるは）

やらう　ナ。野郎。わづのを。わなさうど。

やらう　ナ。野郎。わかをとこをいふ。東国にて、

やらう　ナ。野郎。かるたたぞこれをいふ。越後にて、

やらうあたま　ナ。野郎天窓。ひさびみを、ひろくそりあけたるをいふ。野郎の髪のさまなり。

やらかす　サ。カケ。四。爲。す。なす。もよほす。

やらず　ソ。不遣。あらすればよきに、あらせず。拾遺（ゆきやらで、山路くらしつ、ほとゝぎす、いま一聲の、きかまほしさに）玉葉（山の端を、いでやらぬより、影みえて、松の下てる、いさよひの月）

やらで　ソ。不遣。やらずて。やらずを見るべし。

やらひ　ナ。柵。まく。らかりのところ見るべし。

やらふ　ワ。カケ。四。遣。おひやる。おひそなつ。枕草八（さてと、もろれどなほ、おあつせば、たびくありくに）古事記（まこゝろなしことなるひとは、もやなどあきらびやら）須佐之男命

やらん　テ。スエ。疑のことば。やに同じ。千五百番歌合（谷）

隕、木葉が下の、埋木、氷れべやらん、音づれもなし）

やり ナ。槍。鎗。ほこのたぐひ。杖のごとくにて、ながくふとき柄に、両刃の刀をすげたるものにて、突くにもちふるもの。太平十五（鎗、長刀をさしかざして、散々につきけるを、耳理新左衛門、十六までうばうて）

やり ナ。酔狂。さけきちがひをいふ。豊後、府内にて。

やりあふ サ。ヒトリ。四。遣合。あらそふ。たゝかふ。

やりがんな ナ。槍鉋。かなの、つくやうにしたるもの。

やりくり ナ。遣繰。さまぐに、ふりかへてつかふをいふ。

やりくる ワ。カケ。四。遣繰。さまぐに、ふりかへてつかふ。

やりこめる ワ。カナ。シ一。遣込。いひやぶる。いひふす。

やりだま ナ。槍玉。やりのさきにてつくをいふ。

やりつける ワ。カケ。シ一。遣付。いひやぶる。いひふす。

やりて ナ。遣手。そのことをするひと。また、ものをあつかふひと。駿牛絵詞（いかにども、遣手は心づまりて、あらき足をもふみ、ころしをもつかふかして）

やりて ナ。遣手。くるしやのところ見るべし。

やりてだて ナ。遣手楼々。くるしやのところ見るべし。

やりど ナ。遣戸。ひきど。戸の、上下の溝にはめて、おしやりて、あけたてするやうにしたるもの。夫木十一（こよひさへ、こと志げしとて、あふ事な、ちかへやりどの、たてならぬのみ）枕草二（にくきもの云々、きるやりどなど、あらくあくるもいとにくし

やりとり サ。遣取。やるととると。

やりだ ナ。遣場。やるところ。つかはすところ。

やりそんず ワ。カケ。四。遣外。あやまつ。そこなふ。

やりばなし ナ。遣放。ものに、とりしまりなきをいふ。

やりぶすまをつくる ワ。ヒトリ。四。作槍衾。やりのほさきをつきならべて、ちかよせじとかまふるをいふ。

やりみづ ナ。遣水。庭のけしきをそふる為に、水を、小川のごとくにしてながしやれるもの。後撰（なきひとの、かげだにみえぬ、遣水の、そこはなみだを、ながしてぞこし）源氏若紫（やりみづに、かゞりびともし）

やりもち ナ。槍持。やりをもつともびと。

やりをんな ナ。遣女。くるしや。やりて。やりてぞふ。

やる ワ。カケ。四。遣。ゆるしむ。つかはす。おくる。古今八（おそれてふ、ことをあさには、やらじとや、なほにおくれて、ひとりさくらん）伊勢（男、きゝとりけるかりぎぬのすそをきりて、歌をかきてやる）

やる ワ。カケ。四。破。やぶる。伊勢（うへのきぬの肩をはりてけり。せん方もなくて、たゞなきになきけり）

やる ワ。ヒトリ。シ二。破。やぶる。こぼる。くだく。そこなふ。神楽歌（猿せけれ、袖こそ破れ、刀禰川の、いしはふむとも、いざ河原より、いざ河原より）

やるせなし サ。ヒ。無遣瀬。おもひをちらすかたなし。

やれ ナ。破。もののやぶれたるをいふ。

やれ ナゲキ。嗟。あれといふに同じ。

やれな ナゲキ。歌をうたふときの、ふしなどにいふことば。風俗歌（しほとりのたねに、也禮名、あるふれり。也禮名、たれらさいふ、ちどりぞさいふ）

やれなう ナゲキ。人をよびかくることば。

やろう ナ。薬籠。やくろう。くすりなど。

やまかゞし ナ。赤楝蛇。蛇の一種。あかゞいしやうに同じ。

やをとめ ナ。八少女。わきさのをとめ。風俗歌（也平止女、也平止女ぞ、たつや夜平止女）拾遺（珍しき、けふの春日の、やをとめを、神も嬉しと、忍ばらめや）

やをら ソ。徐々。しづかに。そろくと。空穂物語（御おとのかさより、やをらすべりいるを）蜻蛉（やをらたちはしりて、六寸ばかりある脚をきりこなちつ）

ゆ

のどよりいづるひとつのこゑにて、いとうとかよへるこゑなり。

ゆ ナ。柚。木の名。果の名。葉は、ほそながく、緑ふかくして、枝に、刺おほし。実は、くねんぼよりもまるく、おほきく、皮やはらかにして、熟するときは、黄色となる。和名（柚、爾雅集注云、柚、一名、櫾和名、似橙而酢、出江南矣）

ゆ ナ。湯。みづの、ひにあてて、わかしたるもの。またくすりのせんじたるもの。万廿（さすなべに、湯わかせ子ども、いちひ津の、檜橋よりこん、きつにあむさん）源氏葵（御湯まゐれなどさへ、あつかひきこえさせたまふを、いつならひたまひけんと、人々あはれがりきこゆ）

ゆ ナ。温泉。いでゆ。をんせん。古今（但馬の国の湯へまかりける時に）和名（温泉、兵部山川記云、假山縣有温泉、百病久病、入此水多愈矣、一云湯泉和名由）

ゆ ナ。淦。あか。ふなゆ。新撰集（こひしさは、とまりもあらた、ゆく船の、ゆはかくものは、なみだなりけり）

ゆ ナ。琴などひくに、いふことば。ひだりのてにて、ことのをおしあつかふをいふ。源氏若菜（ゆの音ふかく、いみじくすみてきこえつるを、この御てづかひは、またきまかそりて、ゆるらかにおもしろく）

ゆ ナ。エ。従。より。から。万三（御笠山、野辺従ゆくみち、こきだくも、あれにけるかも、ひさにあらなくに）

ゆあか ナ。湯垢。ゆのかす。ゆのおり。

ゆあがり ナ。湯上。ゆあみよりいでたるとき。

ゆあみ ナ。湯浴。ゆをあみて、みをあらふをいふ。土佐（十三日云々、男女、これかれ、ゆあみなどせんとて、あたりのよろしきところにおりてゆく）

ゆあらひ ナ。湯洗。ゆをもてあらふをいふ。舞の薄紙和田底延（こまは、ゆあらひしてぞおきはける）

ゆう ナ。柚。木の名。果の名。ゆに同じ。

ゆう ナ。勇。こころのよくて、ものにおそれぬをいふ。

ゆうき ナ。勇気。つよくいさましきこころ。

ゆうし ナ。勇士。ますらを。つよくいさましきつはもの。

ゆうたん ナ。熊胆。薬の名。くまのいに同じ。

ゆうづう ナ。融通。ゆづうに同じ。

ゆうぶ ナ。勇武。たけくいさましきをいふ。

ゆうべん ナ。雄弁。べんぜつのさかしきをいふ。

ゆうまう ナ。勇猛。たけくいさましきをいふ。

ゆうりき ナ。勇力。ちからの、つよくいさましきをいふ。

ゆえい ナ。輪廓。かつとまくると。

ゆえん チ。油煙。ともしびよりたつかすり。また、あぶらなどをふすべてとりたるすゝ。むらすみ見合すべし。

ゆえん ナ。由縁。ゆゑ。ゆかり。ちなみ。

ゆえんずみ ナ。油煙墨。まつのけぶりに同じ。

ゆおも ナ。湯母。めのとのたぐひ。神代紀（乳母、湯母）

ゆか ナ。床。いへのうちの、ひとのおきふしするところ。また、いへのうちの、たみをきさつらねたるところ。千載（おきふさく、なりにけらしな、きりぐす、ゆかのあたりに、こゑきこゆなり）

ゆが ナ。遊蝸。おほみかに同じ。和名（蝸蝸氏漢語抄云、遊蝸、由賀。今案、俗人呼大也。桶爲由加、乎介是辨色立成云、於保美加）

ゆかいた ナ。床板。ゆかにさきつらねたるいた。

ゆかう ナ。衣桁。いかうに同じ。

ゆがく ワ。カケ。四。湯。にえゆに、あわらくひたす。

ゆかけ ナ。笑籠。いかきをいふ。遠江にて。

ゆがけ ナ。弽。ゆみかけに同じ。

ゆかし サ。フ。閲。それとなくとなくとも、そらまほしくあり。なにとなくとなくとも、さらまほしくあり。この語は、今は、ゆかしいとはなそへていふ。後拾（こふひこそ、世にあるひとは、ゆかしけれ、いづこもかくや、月をみるらん）枕草四（くちをしく、この山のそでなきらずなりなん事と、まめやかにおもふほどは、ひとも、げにゆかしかりつるものをなどいふ）

ゆかしい ナ。闕。ゆかしを見るべし。

ゆかしがる ワ。カケ。四。闕。ゆかしくおもふ。枕草七（それはや、かれはやなど、おぼめきゆかしがりさまふに）

ゆかした ナ。床下。いへのゆかのした。

ゆかす ワ。カケ。四。行。やる。ゆかしむ。夫木六（あそびたる夜の、心ゆかしの、手習は、こひしとのみぞ、筆へかゝる）

ゆかず ワ。将往。ゆかんとす。尾張、遠江の人のことば。

ゆかた ナ。湯帷子。ゆかたびらを見るべし。

ゆかたびら ナ。湯帷子。ゆあみして着るきもの。建武年中行事（さて、御船に、御ゆかたびらめして、いらせたまふ）和名（内衣和名由加太比良）

ゆがみ ナ。歪。ひずみ。からの、ただしくなきをいふ。

ゆがむ サ。ヒトリ。四。歪。ひずむ。ただしきかたちをうしなふ。源氏末摘花（御くるまよせたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて）字鏡（喎由加牟）

ゆがむ ワ。カケ。シ二。歪。ひずましむ。ゆがましむ。この語は、縦方によりては、ゆがむるを、下一段にいふ。字拾二（かりぎぬのうしろは、帯にひきゆがめられたるまゝに、ひきもつくろはねばいみじうみぐるし）

ゆがめる ワ。カケ。シ一。歪。ゆがむを見るべし。

ゆかり　ナ。縁。よすが。あるべ。ちなみ。拾遺（このもとの、いろはいさくな。むさし野の、くさのゆかりと、ひとさるこそ去れ）源氏桐壺（おもひかけぬくさのゆかりに、かすかのさとりはすみ侍るなり）

ゆかだけ　ナ。□□。などのおほきなるもの。

ゆき　ナ。雪。あめの、ふゆさむきにあひて、こほりて、しろくなりてふるもの。万八（さかやどの、冬木のうへに、ふる雪を、うめのそのかと、うちみつるかも）

ゆき　ナ。雪魚。魚の名。たらをいふ。女の語なり。

ゆき　ナ。悠紀。大嘗會のとき、もちひなさるふみ、新穀をたてまつる國をいふ。大嘗會には、悠紀、主基をいふ、二國をうらなひさだめて、新穀を作りいづる事なり。

ゆき　ナ。靫。うつぼに同じ。万十一（大久米の、ますらをけなた、ささはたて、白梓をとりおほせ）靫負式（靫負伴男）

ゆきあかり　ナ。雪明。ゆきのひかりのあかり。

ゆきあし　ナ。雪足。さきあしに同じ。

ゆきあそび　ナ。雪遊。ゆきまろばしなどのあそび。源氏浮舟（心地もさむられて云々、さきたべの、ゆきあそびしるけそひのやうにぞふるひあがりけり）

ゆきあひ　ナ。行合。たびにゆきていであふをいふ。夫木八（五月雨を、ひさしくなりぬ、住吉の、ゆきあひの雲の、ひまやなからん）新古（夜やさむき、衣やうすき、かささぎの、ゆきあひの間より、霜やおくらん）

ゆきあひ　ナ。行合。亡魂の、人をおどろかすをいふ。和訓栞

ゆきあひきやうだい　ナ。行合兄弟。たねがはりのきやうだい。一つ腹にて、父のかはりたる兄弟をいふ。

ゆきあふ　ワ。ヒトリ。四。行合。ゆきてあふ。ゆきながらふといであふ。源氏蓬生（さられまし、けふはふれども、みしひとに、ゆきあふほどを、いつとたのまん）

ゆきいたる　ワ。ヒトリ。四。行至。ゆきつくていたる。

ゆきおこし　ナ。雪起。ふゆのころ、ゆきのふらんとするとき、おのづから、やまのなりひびくをいふ。飛驒こて、

ゆきおろし　ナ。雪颪。やねのゆきをおとすをいふ。

ゆきかた　ナ。行方。ゆくへ。ゆきさるかた。拾遺（玉造かる、雨の行方、さす杣の、なほくや人だ、うらみはさらん）

ゆきかひ　ナ。行交。かなたこなたゆきまじるをいふ。

ゆきかひぢ　ナ。行交路。ゆきかひのみち。古今（かりそめの、ゆきかひぢとぞ、思ひこし、今は限の、門出なりけり）

ゆきかふ　ワ。ヒトリ。四。行交。ゆきちがふ。かなたこなたゆきまじふ。古今（夏と秋と、ゆきかふそらの、かよひぢは、かたへすずしき、風やふくらん）

ゆきかへる　ワ。ヒトリ。四。往返。ゆきてかへる。伊勢（狐遅てと、棚無小舟、幾度、ゆきかへるらん、しる人もなし）

ゆきかよひ　ナ。行通。ゆきゝのかよひ。

ゆきかよふ　ワ。ヒトリ。四。行通。ゆきゝす。古今（をひせびて、うち寝る中に、行通ふ、夢のたゞちは、現ならん）

ゆきがらみ　ナ。□□。ゆきのもちおびをいふとぞ。

ゆきき　ナ。往來。ゆくとくると。閑花（山里は、ゆきゝの道も、みえぬまで、秋の木葉に、うづもれにけり）

ゆききえ　ナ。雪消。ふりさるゆきのとくるをいふ。また、ゆきぎえに同じ。源氏椎本（ゆきぎえにつみて侍るなりとて、澤のせり、峰の蕨などたてまつりたり）

ゆききのをか　ナ。往來岡。地の名。大和國。添上の郡にあり。新後撰（飛鳥川、ゆきゝの岡の、あきはぎは、けふふるあめに、ちりかすぎなん）

ゆききゆ　ワ。ヒトリ。シニ。行消。ゆきてかくる。ゆくへをいでてみえずなる。源幻（うき世には、ゆききえなんと、おもひつゝ、おもひのほかに、なほぞほどふる）

ゆききく　ワ。ヒトリ。カ。往來。ゆきゝす。

ゆきぐも　ナ。雪雲。ゆきのふるくも。夫木（晴曇り、ふりもつもらず、雪雲の、あらきやまに、月ぞさえたる）

ゆきくらす　ワ。カケ。ロ。行暮。ゆきつゝ、ひをくらす。ひのくるゝまであるく。土佐（海はあるれど、心はすこしなぎぬ、かくゆきくらして、とまりにいたりて）

ゆきくる　ワ。ヒトリ。シニ。行來。ゆくみちにて、ひくる。

ゆきぐれ　ナ。雪暮。ゆきふるゆふぐれ。夫木八十（宿かちん、行方もしらず、久方の、天の河原の、ゆきぐれの空）

ゆきげ　ナ。雪消。ゆきぎえ。万三（筑波根を、よそのみみつゝ、ありかねて、雪消の道を、なづみきつるかも）

ゆきげしき　ナ。雪景色。ゆきのふりふるけしき。

ゆきとんと　ナ。雪。こゆきに同じ。

ゆきころばし　ナ。雪転。ゆきまろばしに同じ。

ゆきしやう　ナ。雪起請。くらぶらのたぐひのきしやう。

ゆきしる　ナ。雪汁。ゆきのとけさるみづ。盛衰記（ゆきしるの水なれば、きつとへる事あるべからず）

ゆきすがら　ソ。路をゆきながら。堀川次郎（ゆきすがら、心もゆかず、別路は、なほふるさとの、事ぞ悲しき）

ゆきずり　ナ。行摩。ゆきちがひに、ものにふるゝをいふ。夫木廿（たびごとの、むさごの原の、ゆきずりは、夏野の草を、すゑめやれせぬ）狭衣二（とびかふ、虫、鳥のやうに、ゆきずりのすぐせある人やはあらん）

ゆきずりがひに　ソ。行摩交。ゆきずりに。

ゆきぞら　ナ。雪空。ゆきのふらんとするそらのけしき。

ゆきたつ　ワ。ヒトリ。四。行立。いきたつ。なりたつ。

ゆきだふれ　ナ。行倒。ゆきつゝたふれてしぬるをいふ。

ゆきだるま　ナ。雪達磨。ゆきにてつくりさるだるま。

ゆきちがひ　ナ。行交。行違。かなたこなたゆきまじるをいふ。また、ものどもの、たがひにいでおもぬをいふ。

ゆきちがふ　ワ。ヒトリ。四。行交。行違。ゆきちがひす。源竹川（ゆきちがふ車の音と、さきおふこゑぐも）

ゆきちる　ワ。ヒトリ。四。行散。ちりぢりにゆきさる。源総角（京には、さるべき所々に、ゆきちりさる眼ども）

ゆきつく　ワ。ヒトリ。四。行着。いたりつく。宇拾（狐は、変化ある者なれば、けふのうちにゆきつきていへるぞ）

ゆきつまる　ワ。ヒトリ。四。行詰。ゆきくてゆきれずなる。

ゆきどけ　ナ。雪解。ゆきげに同じ。拾玉（ゆきどけの、雫の音の、たえぬるは、よその嵐に、たはむしぬらん）

ゆきとどく　ワ。ヒトリ。四。行届。くまなくゆきいたる。

ゆきどまり　ナ。行止。ゆきてゆききるところ。

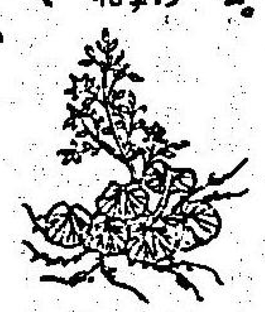
ゆきとまる　ワ。ヒトリ。四。行止。ゆくことをとまる。ゆきくてゆきれずなる。古今（世の中は、いづれかさして、わがならん、ゆきとまるをぞ、宿とさだむる）

ゆきなだれ　ナ。雪頽。やまなどにつもりたるゆきの、そるになりて、くづれてなだれおつるをいふ。

ゆきなり　ナ。行成。なりゆくまゝにまかするをいふ。

ゆきのうそぶき　ナ。雪上葺。やねに、ゆきのふりつもりたるをいふ。夫木八十（さびしさは、かさねてけりな、津の國の、あしのまろやの、雪のうそぶき）

ゆきのした　ナ。雪下。虎耳草。草の名。高さ五六寸ばかり、葉は、あふひの葉に似て、地につきてをゆ。花は、夏のころさきて、色うすあかくして、すこし、秋海棠の花に似たり。



ゆきのした　ナ。雪下。草の名。いもぎりさうに同じ。

ゆきのした　ナ。雪下。襲の色目の名。表は白に、裏の紅なるもの。西三條装束抄、胡曹抄　又、裏は紅梅なりともいへり。藻鹽草

ゆきのしたのこうばい　ナ。雪下紅梅。襲の色目の名。ゆきのしたに同じ。裏の紅梅なるゆゑにいふなるべし。

ゆきのしたのまつ　ナ。雪下松。まつのゆきに同じ。

ゆきのはだへ　ナ。雪肌。ゆきのごとくしろきはだへ。

ゆきのほとけ　ナ。雪佛。ゆきだるまのたぐひ。ゆきにてつくりさるほとけ。鹿苑王母集（日にそへて、雪のほとけは、きえぬらん、それも薪の、つきぬとやみし）

ゆきのまくら　ナ。雪枕。ゆきふるよのねどこ。夫木八十（山里は、松の梢に、秋ひて、月ぞさしいる、雪の枕に）

ゆきのみやま　ナ。雪山。せつさんに同じ。千載（などてかく、思ひそめけん、時鳥、雪の御山の、法の聲ゆゑ）

ゆきのやま　ナ。雪山。ゆきにてつくりさるやま。源頼朝（一年、中宮の御前に、雪の山つくられたりし）

ゆきのり　ナ。雪苔。むらさきのりをいふ。能登にて、

ゆきむづかし　サ。フ。雪華。ゆきよりもしろし。源末摘花（ゆきむづかしうしろうて、さをに、ひさひつき、こよなうそれさるは）蜻蛉（あなさも、ゆきむつびしき霜かなと、くらおほひしつゝ、隠蓑たのむべくめると）

ゆきなる　ワ。ヒトリ。シニ。行馴。なれなれにゆきこころ。源逢生（としごろひびつゝも、ゆきなれざりける人の、かくされぬる事を、いとこころぼそうおぼす

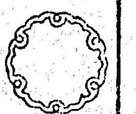
ゆきなら　ナ。雪平。つちやきのちひさきなべ。

ゆきひら　ナ。雪片。ゆきの、ひらくとしてふるもの。

ゆきふり　ナ。雪降。ゆきのふるとき。堀川百首（雪降に、白玖の鷹を、あはせてし、鈴の音こそ、遠なりけれ）

ゆきぶり　ナ。行觸。いきぶれに同じ。

ゆきふりかみ　ナ。雪降髪。うぶさひのうま。夫木（山鹿の、



ゆさぶる　ワ。カケ四。揺。ゆさ〳〵とうごかす。
ゆさん　ナ。遊山。そなみなどは、やまにゆくをいふ。
ゆさんぶね　ナ。遊山船。なぐさみのあそびにのるふね。
ゆざめ　ナ。湯冷。ゆあみしたるねつのさむるをいふ。
ゆさゆさと　ソ。揺々。ゆら〳〵と。宇拾八（とぞありて、この食すぐるは、ゆさ〳〵とゆるぐ）
ゆし　チ。柞。木の名。もそそは同じ。
ゆしあんず　ワ。カケ。カ。弾琴。ことをひく。但し、左右の手をつかひて、琴をひくはいふ。ゆを見合すべし。源若菜（ひるれ、いとひとき、げく、なほ、一度も、ゆしあんずるいさまもこころあるさましけれど）
ゆしゆつ　ナ。輸出。くにつものを、とつくにへおくりいだすをいふ。交易のうへにいふことばなり。
ゆじゆん　ナ。由旬。いちゆたゆんのところ見るべし。
ゆず　ワ。カケ。カ。琴をひくとき、ひざりのてにて、ことのをおしあつるをいふ。源紅葉賀（ちひさき御殿は、さしやりてゆしたまふ御てつき、いとうつくしければ）
ゆず　ナ。柚。木の名。果の名。ゆは同じ。
ゆすぐ　ワ。カケ四。洗。あらふ。すゝぐ。うらひきよむ。
ゆすぶ　ワ。カケ四。結。むすぶをいふ。東国のいにしへの方言なり。万十二（いものいもろ、我を忘のぶらし、まゆすひは、由須比しひもの、とくらくもへど）
ゆすぶる　ワ。カケ四。揺。ゆさ〳〵とうごかす。
ゆすゆすと　ソ。揺々。ゆさ〳〵と。著聞九（矢をむなちさるは、おにとる手、ゆす〳〵とをさらきて）
ゆすら　ナ。櫻桃。木の名。果の名。高さ四五尺ばかり、葉まろくとがりて、めぐりは刻あり。また、葉の面ふとみて、ほそき毛あり。春の初、ちろくあかさみさわちひさき花さきて、あかくつぶらかなる実をむすぶ。実は、豆のおほきさにて、澤のごとき條のとほりさる状、桃に似たり。味は、あまくして、ゆきはすこしすし。
ゆすらうめ　ナ。櫻桃。木の名。果の名。ゆすらは同じ。
ゆすり　ナ。揺。いひらけをして、ものをねだるをいふ。
ゆする　ナ。泔。くしけづるときの、かみをあらふみづ。また、かみをあらふをもいふ。源東屋（女君は、御ゆするのほどなりけり）竊能楽五（ゆするまうけせよ、ものへゆかんといひて、髪あらひけり）
ゆする　ワ。カケ四。揺。ゆさ〳〵とうごかす。万七（おほうみの、いそもと由須理、たつ波の、よらんと思へる、濱のきやけく）空穂藤原（その楽を、上下ゆすりてすれば、鳥も、そこれへりまうはそやされて）
ゆするつき　ナ。泔杯。くしけづるときの、髪をあらふ水をもるうつは。新古（久しうまうでこざりける頃、びんかきて、いでける、ゆするつきの、水いりながら待りけるをみて）
ゆするむち　ナ。土蜂。虫の名。蜂の一種、かたち、やまむちは似て、土の中は、ふかく、巣をつくりてすめり。和名（土蜂和名由須加知大蜂之在地中作房者也）

その図貞丈雑記よりうつせり。

ゆずゑ　ナ。弓末。ゆみのすゑ。万七（丈荒男の、弓上ふりおこし、かるさつの、野邊さへきよく、てる月夜かも）
ゆせん　ナ。湯煎。ものを、うつはものはいれながら、ゆはひさしてにるをいふ。薬を煮るなどにすること也。
ゆせん　ナ。湯銭。ゆあみのおしにおさむるぜに。
ゆたかなり　サ。豊饒。みちたり。たりたり。ゆるやかなり。
ゆたかに　ソ。豊饒。みちて。たらひて。ゆるやかに。古今（うれしきを、なににつゝまん、からころも、たもとゆたかに、たてといはましを）宇拾廿（そらおさるは、袴いできて、家のうちゆたかになりぬ）
ゆだけ　ナ。裄丈。きぬのひざりのかた。枕草五（ゆだけの方の御身をぬひつるが、そむきさまなるをみつけず、とぢめもしあへず、まどひおきてたちぬるは）
ゆたけし　サ。ヒ。豊饒。ゆたかにあり。万十二（うなはらの、由多気伎みつゝ、葦がちる、難波は年は、へぬべくおもほゆ）源東屋（ゆたけきいきほひをたのみて、父ぬしの、后ままもなしてんと思ひさる人々は）
ゆたけに　ソ。豊饒。ゆたかに。後拾（天の下、もとむ神の、みぞなれば、ゆたけはぞたつ、みづのひろまへ）
ゆだち　ナ。夕立。ゆみをいるとき、つゝもみ、ゆまそるをいふなるべし。新六（けふはみな、ゆだちのいての、外までも、すみのいろつき腰なれはけり）宇拾卅（ゆだちして、月をさしくらして、ちぞしありて）

ゆたつ　ナ。諭達。おほやけよりふれてさとすをいふ。
ゆだて　ナ。湯立。神楽歌の曲の名。神楽歌（皇神の、けさの神あげは、あふ人は、千年の命、ありとこそきけ）
ゆだに　ソ。湯。ゆるやかに。万二十（かくばかり、こひん物ぞと、きらませば、その夜は由多爾、あらましものを）
ゆだね　ワ。カケ。シニ。委。まかすべきをさを、ひとにまかす。この語は、地方によりては、ゆだねるを下一段にいふ。
ゆだね　ナ。齋種。なへしろのたね。苗代は、水口祭などしていみきよむるゆゑにかくいふ。万十五（青柳の、枝きりおろし、齋種まき、ゆゝしく君に、こひわたるかも）
ゆだねる　ワ。カケ。シニ。委。ゆだぬを見るべし。
ゆたのたゆたに　ソ。揺蕩。いたくたゆたひて。ゆら〳〵とゆらめきて。古今（いでわれを、ひとなとがめそ、大船の、ゆたのたゆたに、ものおもふころぞ）
ゆだま　ナ。湯玉。ゆの、つぶだちてたきあがりさるもの。
ゆたん　ナ。油単。うつもののきさはきくもの。また、からびつなどをおほふもの。空穂吹上（男は、ゆたんおほひさるたにはすゑざるはさせて）枕草六（さしあふぎするは、蹈歌の紵数をふみてたてるは、をかしきゆたんなれば、つようそちへられさけり）
ゆだん　ナ。油断。こゝろのゆるびがちにあるをいふ。
ゆたんぽ　ナ。湯婆。たんぽを見るべし。
ゆだめ　ナ。弓矯。ゆみためを見るべし。
ゆたゆたと　ソ。揺々。ゆら〳〵と。ゆらのたゆさは。
ゆつ　ナ。湯津。五百。いほつ。古事記（湯津爪櫛）
ゆづ　ワ。カケ。シニ。茹。ゆはひさしてあたゝくにる。また、ゆはひさしてむす。この語は、地方によりては、ゆでるを下一段はいふ。催馬楽（大芹は、国のさだもの、こぜりこそ、由天てもうまし）宇拾二（ひさげの湯はさしいれて、よくゆでてひきあげされば、色はこきむらさきいろなり）字鏡（煠奈入湯曰煠。煮也。奈由豆）
ゆついはむら　ナ。湯津石村。いしの、かぎりもなく、あまさむらがりてあるをいふ。万一（河の上の、湯都盤村は、草むさず、常はもがもな、常処女にて）
ゆづう　ナ。融通。ゆきゝひてとゞこほらぬをいふ。
ゆづか　ナ。弓柄。弣。ゆみづかは同じ。
ゆづき　ナ。湯坏。ゆとうは同じ。
ゆづき　ナ。弓槻山。山の名。大和にあり。続古（足痛川、河波たゝし、まきもくの、ゆづきが嶽は、雲たてるらん）
ゆつくり　ソ。緩。ゆるやかに。いそがずに。
ゆづけ　ナ。湯漬。ゆをかけたるおもの。枕草二十（とりなく、夜ふけてまとりとらずさらは、ゆづけだにくむせじ）宇拾七（重秀申すやう、冬はゆづけ、夏はみづづけまで、ものをめすべきなりと申しけり）
ゆつくりと　ソ。寛。ゆるやかに。おほのかに。
ゆつつまぐし　ナ。湯津爪櫛。くしのえの多げきくし。古事記（湯津々間櫛之男柱一箇取闕而）
ゆつのつまぐし　ナ。湯津爪櫛。くしのえの多げくあるもの。新勅（かつみれど、なほぞこひしき、わぎもこが、ゆつのつまぐし、いかでさゝまし）
ゆづら　ナ。弓弦。ゆみづるは同じ。
ゆづらふ　ワ。カケ四。譲。ゆづるは同じ。源常夏（かみは、あまたすけられ、あまれ、かみはなびきて、ことひろきさゆづらふらん）字鏡（譲由豆呂不）
ゆづり　ナ。譲。それがあるぞきて、ひとにすゝむるをいふ。源若菜（かをあらはさきゆづりなれど、このいむけなきき内親王ひとり、とりおきてさぐみおほして）
ゆづりじやう　ナ。譲状。ゆづるよしのかきもの。
ゆづりつく　サ。ヒトリ四。譲付。つぎはゆづりでつく。十訓四（火鉢なる火の、螢籠のへりはまとりつゝりけるが、やがてもきえざりけるを、あさましみくさまびける程は、やうくとゆづりつきて、大常はもえあがるを）
ゆづりは　ナ。交譲木。木の名。ゆづるはは同じ。枕草三（ゆづりはの、いみじうふさやかはつやめきたるは）
ゆづりわたす　ワ。カケ四。譲渡。ゆづりてこさしあたふ。
ゆづる　ワ。ヒトリ四。移。うつるをいふ。東国のいにしへの方言なり。万四十（あまのはら、不二の芝山、このくれの、とき由都利なば、あはずかもあらん）
ゆづる　ナ。弓弦。ゆみづるは同じ。万十一（梓弓、すゑの原野は、とがりする、君が弓弦の、たえんとおもへや）
ゆづる　ワ。カケ四。譲。それはありぞきて、ひとにすゝむ。続

足石歌(釋迦の御跡、いしにうつしおき、うやまひて、のちのほとけに、ゆづりまつらん、さゝげまつらん)

ゆづるうち ナ弓弦打。つるうちに同じ。筑紫舶(周)にのり云々、ゆづるうちをしつゝ、よめどりするやうに)

ゆづるは ナ交譲木。木の名。葉は、おほきに似て、葉の茎あかく、花はあをく、ひさくして、すこし、たちばなの花に似たり。万廿(あともひの、わしくるかどの、由豆流波の、ふゝまるときに)

ゆつろふ ワヒドリヰ四、移。うつろふなりいふ。への方言なり。万廿(まへのゆみ、きにさき月夜の、湯都呂波の、おもひやまらず、こひこそまされ)

ゆづゑ ナ弓杖。ゆんづゑに同じ。

ゆでくり ナ茹栗。くりの、ゆでてやはらかにしたるもの。宇拾十(田原にうづみてましゝやきぐり、ゆでぐりは、かきらもかどらず、おひいでけり)

ゆでもの ナ茹物。ゆでたるもの。和名(西宮記)

ゆでる ワタゲ二ヂ茹。ゆづを見るべし。

ゆとう ナ湯桶。ゆつぎ。おものの、ときにのちのむべきゆをもるうつは。木造りにて、柄あり。

ゆとうふ ナ湯豆腐。たうふのゆをゆでたるもの。

ゆとうよみ ナ湯桶読。ふたつのもじなる、うへの文字は、訓によみ、したの文字は、字音によむなりいふ。湯桶を、ゆとうとよむ、すなはちそれなり。

ゆどの ナ湯殿。ゆあみをするところ。まへ、くりやなるをもいふ。宇拾三(ゆどのゝたれめのをとおろして、例のゆどのへいりて)徒然草(鯉、松茸などは、御ゆどのゝうへにかゝりたるもくるしからず)

ゆとん ナ油団。かみの、ひろくあつくぬりあはせて、あぶらをひきたるもの。夏のころの敷物にもちふ。

ゆとり ナ湯取。ふねのゆをくみとるうつはもの。和名(宜和名由土利 流井中水之斗也)

ゆとりめし ナ湯取飯。おものをにるとき、そのゆをくみとりて、さらにむして、やはらかにしたるもの。

ゆな ナ湯女。ゆあみをするいへにあるうかれめ。

ゆなゆなき [illegible]

ゆに ナ湯煮。ゆをもてにたるもの。大草家料理書[illegible]

ゆにふ ナ輸入。交易のうちに、よそよりおくりいるゝこと。

ゆのあと ナ[illegible]。温泉のある山に、わきでたるあと。[illegible]

ゆのはな ナ湯花。ゆのゆに、おのづからうかぶもの。

ゆのみ ナ湯呑。ちやわんの、つゝのごとくなるもの。

ゆば ナ湯葉。大豆をすりて、豆腐を製する汁のごとくして、銅鍋のひろらなるにいれて、ゆるやかなる火にかけて、あたゝめて、汁のうへに、うすく、皮のむすびたるとき、とりて、かけほしたるもの。

ゆはだいろ ナ[illegible]。[illegible]

ゆはず ナ弓弭。ゆみのはず。[illegible]

ゆびぬき [illegible]

ゆだな ナ湯花。ゆのはなに同じ。

ゆだら ナ弓腹。ゆみはらに同じ。万三(あづさゆみ、弓腹ふりおこし)

ゆたり ナ[illegible]。せうぺん。[illegible]

ゆだりぶくろ [illegible]

ゆひ ナ結。やとひ。[illegible]

ゆひ ナ指。および。[illegible]

ゆひいれ ナ結納。ゆひなふに同じ。

ゆひからむ [illegible]

ゆびきり ナ指切。[illegible]

ゆひく [illegible]

ゆひく [illegible]

ゆびさす ワヒドリ四、指。[illegible]

ゆびをり ナ指折。[illegible]

ゆひなふ ナ結納。[illegible]

ゆびわ ナ指輪。[illegible]

ゆひまき [illegible]

ゆふ ナ夕。[illegible]

ゆふうら ナ夕占。[illegible]

ゆふかげ ナ夕影。[illegible]

ゆふかた ナ夕方。[illegible]

ゆふかづら ナ木綿鬘。[illegible]

ゆふがほ ナ夕顔。[illegible]

くして毛あり。夏の頃、志ろき花さきて、晝れ、志ほみ、夕れひらく。瓜も、かきうりのごとくにて、まろきもの、ながきものあり。枕草二（ゆふがほは、朝顔に似て、いひつゞけたるも、をかしかりぬべき花のすがたにて）

ゆふがみ　ナ。木綿髪。うまの、かしらのかみの志ろきもの。枕草二（馬は云々、げに、ゆふがみなども、いひつべき）

ゆふがり　ナ。夕狩。ゆふべのかり。ゆふさのかりくら。万一（朝猟に、今たゝすらし、暮猟に、今たゝすらし）

ゆふきじま　ナ。結城縞。織物の名。下總の結城といふ處より織りいだす木綿縞の類あるもの。

ゆふきつむぎ　ナ。結城紬。織物の名。下總の結城をいふ處より織りいだす紬にて、おほくは、絹をおりいだせり。

ゆふぐれ　ナ。夕暮。ひのくれ。伊勢（惜めども、春の限の、今日の日の、ゆふぐれにさへ、なりにける哉）

ゆふくれなゐ　ナ。夕紅。ゆふづくさ、にしのそらのあかくなるをいふ。金葉（入日さす、ゆふくれなゐの、いろみえて、山下てらす、いはつゝじかな）

ゆふくろ　ナ。弓袋。鞬。ゆみぶくろに同じ。平家（かつ、ゆふくろの緒にとて、白布五十反、おくられけり）

ゆふくろざし　ナ。弓袋差。ゆふくろもちに同じ。

ゆふくろもち　ナ。弓袋持。武家の役の名。騎馬にて、主君のゆふくろをもちて、主君の先を乘るものいふ。

ゆふけ　ナ。夕占。ゆふうらするつじうらのごときうらなひ。万十一（夕卜にも、うらにものれる、こよひだに、來まさぬきみを、いつとかまたん）

ゆふげ　ナ。夕餉。ゆふめし。ゆふさん。ゆふさりくふおもの。夫木廿（千代までも、民のけぶりや、たえざらん、鳥羽田のおもの、あさげゆふげに）

ゆふけい　ナ。夕景。ゆふぐれ。ゆふぐれのけしき。

ゆふげしき　ナ。夕景色。小唄の名。三味線にて歌ふもの。

ゆふげのけぶり　ナ。夕飯煙。ゆふげをかしぐけぶり。

ゆふけぶり　ナ。夕煙。ゆふぐれたつけぶり。ゆふげなかしぐけぶり。新千（すくもたく、にひしまもりが、ゆふげぶり、きえぬぞまあへ、身をこがしつゝ）

ゆふこく　ナ。夕刻。ひぐれ。ゆふぐれ。ゆふつかた。

ゆふごほり　ナ。夕氷。ゆふぐれのこほり。夫木廿（松陰の、岩の手向の、夕氷、なまをかけたる、幣とぞみゆる）

ゆふごり　ナ。夕凝。ゆふぐれ、志ものこりかたまるをいふとぞ。堀川百首（ゆふごりの、そぞれじもふる、冬の夜は、鴨のうはげも、いかにさゆらん）

ゆふごゑ　ナ。夕聲。ゆふぐれ、きこゆるこゑ。拾玉（旅衣、つまとふ鹿の、夕聲に、袖ぬれぬる、草枕かな）

ゆふざ　ナ。夕座。ゆふべのつとめ。八講などにある事なり。辨内侍日記（いそげたゞ、朝座夕座も、うちつゞき）

ゆふさなへ　ナ。夕早苗。ゆふぐれうゑるさなへをいふ。拾玉（うゑそつる、ふしみの小田の、ゆふさなへ、いつしかなびく、あきのはつかぜ）

ゆふさらず　ツ。夕不去。ゆふべごとに。よひ／＼に。

ゆふさり　ナ。夕。ゆふべ。ゆふさき。古今（二荒山といふ所にとまりて、ゆふさりのかれいひくひけるに）

ゆふさりつかた　ナ。夕。ゆふさり。古今（人の、花山にまうできて、ゆふさりつかた、歸りなんとしける時に）

ゆふされ　ナ。夕。ゆふさり。拾玉（ゆふされの、ながめぞ人や、志らざらん、たけのあみどに、庭の松風）

ゆふされば　ツ。夕去者。ゆふべになれば。古事記（彼方山、晝は雲とゐ、由布佐禮婆、風ふかんとぞ、木葉さやげる）

ゆふし　ナ。右方。みぎのかたをいふ。武藏、秩父にて、

ゆふしぐれ　ナ。夕時雨。名香の名。かんの一種なり。

ゆふしで　ナ。木綿垂。ゆふの志で。金葉（神垣の、みむろのやまに、霜ふれば、ゆふしでかけぬ、榊葉ぞなき）

ゆふしで　ナ。木綿志天。神樂歌の曲の名。神樂歌（由不志天の、神のおさきに、いなのほの）

ゆふしほ　ナ。夕潮。ゆふべさすうしほ。

ゆふじも　ナ。夕霜。ゆふべおく志も。壬生二品集（月さえて、夕霜こほる、笹の葉に、霰ふるなり、更科の山）

ゆふすずみ　ナ。夕涼。ゆふべのすゞみ。ゆふべのすゞしきところ。夫木（風かよふ、のもりの宿の、さむしろ、木かげならねど、ゆふすゞみせり）

ゆふだすき　ナ。木綿襷。ゆふにてつくりたるたすき。

ゆふたたみ　ナ。木綿疊。ゆふをたゝみたる、木綿の布のたみたるをいふ。さて、木綿は、つねに、神にたむくるものにて、たむくるに、たゝみて、手にささげてたむくるゆゑに、たむけ、たなかみなどにかけていふ。万六（木綿疊、手向乃山を、けふこえて、いづれの野邊に、いほりせん子等）同廿（木綿疊、田上山の、さなかづら、ありさりてしも、いまならずとも）

ゆふだち　ナ。夕立。なつのころ、ゆふぐれなどに、にはかにくもりてふるあめ。新拾（一方は、木々の木の葉を、ふきかへし、ゆふだちおくる、風ぞすゞしき）

ゆふだつ　ワ。ヒトリ。四。夕立。ゆふだちふる。夫木九（時鳥、こゑ水無月と、思へばや、ゆふだつ雲に、たちかへりなく）

ゆふだまぐさ　ナ。夕玉草。たけにおきたるつゆをいふとぞ。蔵玉集（月にきく、ゆふだまぐさの、あきかぜに、おきいつより、ねざめをぞまし）

ゆふつかた　ナ。夕方。ひのくれんとするころ。詞花末摘（ゆふつかた、内より、もろともにまうでゝまゐける）

ゆふづき　ナ。夕月。ゆふぐれみゆるゆみはりづき。

ゆふづきよ　ナ。夕月夜。ゆふづくよ。金葉（風ふけば、枝やすらんね、木の間より、ほのめく秋の、夕月夜かな）

ゆふづくひ　ナ。夕附日。ゆふひ。古今（ゆふづくひ、さすや岡邊の、松の葉の、いつともわかぬ、戀もするかな）

ゆふづくよ　ナ。夕月夜。ゆふぐれ、つきのあるころ。つきのまだかすかなるころのゆふべ。古今（ゆふづくよ、小倉の山に、なく鹿の、聲のうちにや、秋は來るらん）

ゆふづくよ　ナクラ。夕月夜。ゆふづくよの頃は、曉はやみなれば、あかつきやみにかけていふ。万十一（夕月夜、曉闇夜の、あさかげに、わが身はなりぬ、汝を思ひかね）

ゆふつくる　ナ。木綿作。神樂歌の曲の名。神樂歌（由布川久留、をなのそらにや、あさたづね、あさたづねや）

ゆふつけ　ナ。木綿著。ゆふつけどり。新勅撰（鶏ぞ、なくゆふつけの、諸聲に、おきふし音みぞ、なきて歸りし）

ゆふづけて　ツ。夕際。ゆふべになりて。頼川（大堂のまるのロ、ゆふづけて、こゝにまゐりきたり）

ゆふつけどり　ナ。木綿著鳥。ゆふをつけたるにはとり。下文を見るべし。袖中抄（ゆふつけどりとは、にはとりをいふなり。世の中さわがしき時は、四堺の祭とて、おほやけのせさせ給ふに、鷄に、木綿をつけて、四方の關にいたりてまつるなり）古今（逢坂の、ゆふつけどりも、わがごとく、人やこひしき、音のみなくらん）

ゆふづつ　ナ。太白星。星の名。ゆふぐれ、西の空にみゆるおほきなるほし。万十（夕星も、かよふ天路を、いつまでか、あふぎてまたん、つきひとをとこ）

ゆふづつの　ナクラ。太白星之。ゆふづつは、ゆふされ、西の空にみゆる星にて、この星は、ときにみありて、此方にみえ彼方にみゆる事あるゆゑに、かゆきかくゆきにかけていふ。万二（夕星之、彼往此去、おほふねの、たゆたふみれば、なぐさもる、こころもあらず）

ゆふとがり　ナ。夕鳥狩。ゆふぐれするとがり。

ゆふどころ　ナ。夕所。ゆふぐれ、なにとなく、もののあはれをきこえておもしろきをいふ。新六二（かへるさの、家路に急ぐ、市にいでて、夕暮の、民の聲かな）

ゆふながめ　ナ。夕眺。ゆふぐれのながめ。玉葉（雲とづる、宿の軒端の、夕眺、こひよりあまる、雨の音かな）

ゆふなぎ　ナ。夕和。ゆふぐれのなぎ。万四（あさなぎに、かこのとるよび、菜摘すは、かぢのおとしつゝ）

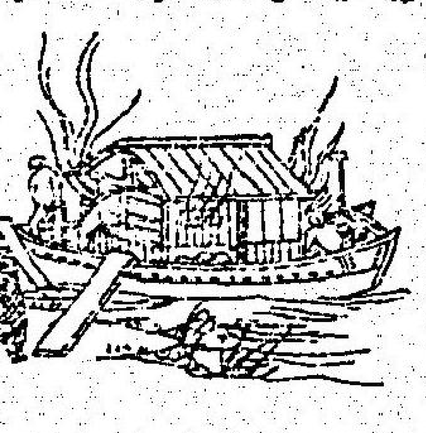
ゆふなみ　ナ。夕波。ゆふぐれたつなみ。新續古（明石潟、潮風あらき、夕波に、淡路かけて、鶴なくところ）

ゆふなみちどり　ナ。夕波千鳥。ゆふなみのうへをとびかふちどり。万三（あふみのみ、夕波千鳥、ながなけば、こころも志のに、いにしへおもほゆ）

ゆふには　ナ。夕庭。ゆふぐれのには。万廿（ゆふにはに、いでたちならし、葉庭に、ふみたひらけず）

ゆぶね　ナ。湯槽。ゆあみのゆをたゝふるふね。字鏡十（ゆぶねを、うつぶしになして）和名（浴斛由布禰）

ゆぶね　ナ。湯船。ふろの、ふねのなるにまうけたるものにて、ゆあみのもうとをとりておほまするもの。むかしは、ふなつきにて、こゝかしこにありしものなりといふ。



ゆふばえ　ナ。夕映。ゆふひのうつろひて、うつくしくみゆるをいふ。玉葉（さかりなる、みねのさくらの、ひとついろに、かすみもきえぬ、はなのゆふばえ）

ゆふばな ナ。木綿花。ゆふにてつくりたるつくりばな。女の、髪のかざりにつくるもの。万六(河瀬女の、つくる木綿花、三吉野の、瀧のみなぎは、さきにけらずや)

ゆふばなの マクラ。木綿花之。ゆふばなは、いにしへめでたきものなれば、さかゆるに冠らせていふなるらんといへり。万二(木綿花の、栄ゆる時に、わが大君、皇子のみかどを、神宮に、よそひまつりて)

ゆふはん ナ。夕飯。ゆふげ。ゆふさりくらふもの。

ゆふはれ ナ。夕晴。ゆふぐれ、そらのはれわたるをいふ。

ゆふひ ナ。夕日。ゆふべのひかげ。三藻(ゆふひくれは、相の色も、うつろひて、夕日の山に、雲ぞかゝれる)

ゆふひがくれ ナ。夕日隠。ゆふひのかくるゝところ。新拾(新あらき、山下萩の、葉たてて、夕日隠に、秋風ぞふく)

ゆふべ ナ。夕。ゆふぐれ。ひのくれんとするとき。万五十(たましひは、あしたゆふべに、たまふれど、あがむねいたし、こひのしげきに)

ゆふべ ナ。昨夜。ようべ。きのふのよ。源総角二(ゆふべも、けさも、御粥米をさゝぐる御誦経じられさせたまはず)

ゆふまぐれ ナ。夕紛。ゆふぐれ。源少女(御めのと、ひとところ、ぐるしうみて、宮にまゐらんとするなり、きこえたまひて、ゆふまぐれの人のまよひに對面せさせたまへり)

ゆふまし ナ。夕。ゆふべ。ゆふぐれ。散木(小黒崎、ぬきのねぬなも、ふみしだき、日もゆふましに、蛙なくなり)

ゆふまどひ ナ。夕惑。よひまどひ。よひにはやくきまどろむをいふ。源末摘花(ものとごつ老人ども、ざうしにまうでゝ、ゆふまどひしたる程なり)

ゆふまよひ ナ。夕迷。ゆふぐれのおぼつかなきをいふ。夫木雑(ふみならし、山のかげ路の、ゆふまよひ、音やさはゞの、谷川の水)

ゆふめし ナ。夕飯。ゆふげ。ゆふさりくらふもの。

ゆふやけ ナ。夕焼。ゆふぐれ、そらのあかくみゆるをいふ。

ゆふやま ナ。夕山。ゆふべの山。玉葉(あさ花を、のべの錦と、かへりみて、夕山いづる、春の旅人)

ゆふやま ナ。木綿山。山の名。豊後にあり。万十(をとめらが、はなりの髪を、ゆふの山、雲なたなびき、家のあたりみん)

ゆふやみ ナ。夕闇。ゆふぐれの、つきのいまだいでざる程をいふ。万四(夕闇は、路たづたづし、月まちて、ゆかせわがせこ、その間にもみん)

ゆふゆふと ソ。寛。ゆるらかに。ひろらかに。字鏡(人もすまうきなるうき…)

ゆぶる サ。カ四。揺。ゆるぐ。うごく。三二職人歌合(…一身、ゆふくをたれたるか)

ゆぶる … るひき、そのさく、かげまいよせじ、ひくらるるの、えさなゆぶらば、ちりもこそすれ)

ゆべし ナ。柚餅子。ゆのかわに、みそなどをつゝみておぶりたるもの。また、一種の菓子の如きもののあり。餅に、葛粉、砂糖などをまじへ、柚の香をうつしたる。

ゆほびかなり サ。寛。ひろし。ゆるらなり。源若紫(たゞ、海のおもてをみわたしたるほど、なんあやしく、ことところに似ず、ゆほびかなる所に侍る)

ゆほびかに ソ。寛。ひろく。ゆるらに。六帖(三吉野の、大川水の、ゆほびかに、あらぬものゆゑ、故のたつらん)

ゆまき ナ。湯巻。いまき。ゆまきと同じ。宇治拾(すけのおもと、いまき、ゆまきして、殿をまうける)

ゆまはり ア。ヒトリ。四。斎。ものいみ。祝詞式(忌部能弱肩、太多須伎取掛、持由麻波利仕奉幣帛乎)

ゆまふ ア。ヒトリ。四。斎。ものいみす。

ゆまり ナ。尿。ゆばりと同じ。

ゆみ ナ。弓。矢、竹などをおしまげて、弦をかけさるものにて、矢をはなちやるにもちふるもの。そのたぐひ、くさぐさあり。和名(弓和名、由美)…梓弓、槻弓、柘弓、眞弓なども、いへり。

ゆみ ナ。弓。射禮歌の曲の名。射禮歌(由美を名に、やなぐひに…)

ゆみかけ ナ。韘。ゆがけ。右手にかけて、弓弦をひく具のごときもの。和名(韘、和名、由加介、所以韘射弦)

ゆみし ナ。弓師。ゆみをつくるを、なりはひとするひと。

ゆみだめ ナ。弓矯。ゆみのひずみあるを、ためてなほす道具。和名(弓矯、和名、由美太米、所以正弓弩也)

ゆみたらう ナ。弓太郎。射ての、まづはじめにいづるもの。下文を見るべし。貞丈雑記(式の大的のとき、第一番に、大前にいでて射る人を、弓太郎といふ)

ゆみづ ナ。湯水。ゆとみづと。宇拾二(ものもくはず、湯…

水ものまで、こゝろえもなす、誦しさしてまつりて)

ゆみづか ナ。弓柄。弣。ゆづか。ゆみの、やをつかひていると き、てにぎるところ。和名(弣、和名、由美都加)

ゆみつくり ナ。弓造。ゆみをつくるたくみ。七一職人歌合(ゆみつくり、この弓は、弦をきられたるぞ)

ゆみづる ナ。弓弦。ゆみのつる。和名(弦、由美都留、弓弦也)

ゆみづゑ ナ。弓杖。ゆんづゑ。また、ゆみを、つゑのごとくするをいふ。撰集抄(あさむ者ならもの、いひて来て、ゆみづゑして、たゞずみけるを)

ゆみとり ナ。弓取。いくさびと。ものゝふ。さぶらひ。著聞二十(後所は、強盗いりさりけるに、ゆみとりは、法師をたてまつりけるか)七一職人歌合(ゆみとり、弾れ、矢は…あり、命れ、義によりてかろし)

ゆみならし ナ。弓鳴。つるうちと同じ。続草三(滝口のゆみならし、くつのおと、そゝめきいづるは)

ゆみのけち ナ。弓結。あらそひ。ゆみなどいるをいふ。源花宴(三月の二十日あまり、右の大殿のゆみのけちに、上達部、御子たちおほくつどへたまひて)

ゆみざ ナ。弓場。いば。ゆみをいるところ。

ゆみなぶ ナ。弓弭。ゆみのはず。ゆみのもしの、ゆづるをかくるところ。和名(釋名云、弓末日彌、和名、由美波数)

ゆみはり ナ。弓張。ゆみをはりづき。大和(てる月を、ゆみはりとしも、いふ事は、山邊をさして、いればなりけり)撰集抄四(五月の上のゆみはりは、疏間の山路の

為の音はきこえけり)和名(弦月、月之半名也。其形、一旁曲一旁直、若張弓弦、弦有上弦下弦)

ゆみはりぢやうちん ナ。弓張提灯。ちやうちんの、ゆみのごときものをかけてひらくやうにしたるもの。

ゆみはりづき ナ。弓張月。つきのかたちの、ゆみをはりたるごとくなりたるもの。陰暦の前後の、五日、六日のほどの月は、おほかた、その形はみゆるものなり。

ゆみぶくろ ナ。弓嚢。弢。ゆみをつゝむふくろ。和名(韜、和名、由美布久呂)

ゆみや ナ。弓矢。ゆみとやと。保元二(巴といふ女は、弓矢をとりても、打物とりても、すぐやかなり)

ゆみやのいへ ナ。弓矢家。ゆみとりの家。

ゆみを ナ。弓雄。ゆみとりと同じ。万九(紀の国の、むしろ、弓雄の、響矢もち、鹿とりなびけし、坂上まぞある)

ゆんぜい ナ。弓勢。ゆみのちから。太平六(ゆんぜいのほど、御覧ぜよと、たからかによばはる)

ゆんづゑ ナ。弓杖。たちひなどにつかれて、ゆみを、つゑとして、たちよりたるをいふ。盛衰記(家臣、かぶとをふりあふのけ、ゆんづゑつき)

ゆんで ナ。弓手。ゆみをもつかたのて。ひだりのかたのて。平家十(六國次が郷黨おちあひて、打刀を以て、忠度の弓手のかひなをうちおとす)

ゆめ ナ。夢。いめ。ねぶりたてみるさまざまのものゝごとをいふ。また、すべて、ものゝごとのそらなるをいふ。

ゆめ ソ。努。いさゝか。落窪二(装物は、この御衾着は賜ひせさりしな、ゆめゆめつゝみおきて侍りきて)

ゆめ ソ。努力。つとめて。つゝしみて。いましめていふことば。古事記(宮人の、あゆひの小鈴、おちにきと、宮人とよむ、里人もゆめ)雨若(ひかくしくきえなす人ありとも、ゆめこころおきたまふな、いまみなほしたまひてんとかたらひたまふ)

ゆめあはせ ナ。夢合。ゆめのうらなひ。ゆめときの、ゆめのよしあしをかうがふるをいふ。拾遺(夢よりぞ、こひしき人を、みそめつる、今はあはする、人もあらなん)

ゆめうつつ ナ。夢現。ゆめとうつゝと。伊勢(かきくらす、こころのやみに、まどひにき、夢うつゝとは、今宵さだめよ)

ゆめうら ナ。夢占。ゆめあはせ。ゆめのうらなひ。

ゆめがたり ナ。夢話。ゆめのものがたり。伊勢(いひいでんも便なきに、まことならぬゆめがたりをす)

ゆめさとがし サ。ク。夢聡。ゆめみさとくて、こころさときかし。源蜻蛉(人々も、夢さとがしくきこえさするくあり。よか御心地はまよろしからずおぼさるれば)

ゆめぢ ナ。夢路。ゆめのうち。また、ゆめのうちにてゆきかよふみち。古今(こふれども、あふ夜のなきは、わすれぐさ、ゆめぢにさへや、おひしげるらん)

ゆめちがへ ナ。夢違。こゝろよからぬゆめをみしとき、そのさがなきやうに、よくなしなほすをいふ。

ぬいあわせる　縫い合わせる

ぬいあわせる　縫い合わせる

ぬいあわせる　縫い合わせる

るしてけり）神代紀（弥許諾因易之時）

ゆるに　ツ。緩。ゆるらかに。謎非愁王（御ぐしのこちたく おほかるな、いとゆるにひきゆるせさまひて）

ゆるぶ　ワ。ヒトリ四。弛。ゆるくなる。源末摘（こゝろやすき、ひとりねの床にてゆるびにけり）

ゆるぶ　ワ。カケ。シ二。緩。弛。ゆるくす。源帚木（むげにうちゆるべみだれたるも、心やすくらうたきやうなれど）

ゆるまる　ワ。ヒトリ四。緩。ゆるくなる。太閤記（終日たゆみつかれ、大利を得ざるは、上下氣ゆるまり）

ゆるむ　ワ。ヒトリ四。緩。弛。ゆるくなる。ゆるぶに同じ。

ゆるむ　ワ。カケ。シ二。緩。弛。ゆるくす。ゆるぶに同じ。この詞れ、他方によりてハ、ゆるめるを下一段にいふ。

ゆるめる　ワ。カケ。シ一。緩。弛。ゆるくす。ゆるむを見るべし。

ゆるやかなり　サ。緩。寛。きびしからず。くつろぎてあり。

ゆるやかに　ツ。緩。寛。きびしからず。くつろぎて。

ゆるゆる　ツ。緩々。ゆるやかに。のどやかに。和泉式部集（庭のまゝ、ゆるくおふる、夏草を、わけてむつりに、こん人もがな）枕草二（あじろハおもしろせたる云々、ゆるくとひさしくゆけバいとをろし）

ゆるゆる　ツ。漸々。ゆらゆら。おおん物語（石火矢をうてば、楔もゆるくうごき、地もさけるやうすさまじいさりかは、鉄のよきき婦人なぞハ）

ゆるらかなり　サ。緩。寛。きびしからず。くつろぎてあり。

ゆるらかに　ツ。緩。寛。きびしからず。くつろぎて。源若菜（ゆるらかにうちふく風に、えならずにほひたる御簾のうちのかをりもふきあはせて）

ゆるりき　ツ。緩。ゆるく。ゆるやかに。のどやかに。

ゆるるかなり　サ。緩。寛。きびしからず。くつろぎてあり。

ゆるるかに　ツ。緩。寛。きびしからず。くつろぎて。枕草一（月も日も、かはりゆけども、ひさにふる、三室の山のといふことを、ゆるゝかにうちよみいだして）

ゆれる　ワ。ヒトリ。シ二。揺。ふるふ。ごとくにうごく。

ゆわう　ナ。硫黄。ゆのあわを見るべし。和名（流黄、本草跡云、石流黄、硫石液也、和名由乃阿和、俗云由王）

ゆわう　ナ。硫黄。つけぎに同じ。七一職人歌合（ゆわう、むきうり、ゆわう、簾々、よきえうぎ候ふ）

ゆわうぎ　ナ。硫黄木。つけぎに同じ。

ゆわうさう　ナ。硫黄草。草の名。くされだまに同じ。

ゆわかし　ナ。湯沸。やくわんにてちひさきもの。

ゆゐいち　ナ。唯一。ゆゐいちしんたうに同じ。

ゆゐいちしんたう　ナ。唯一神道。神道の一派。ほとけのみちをまじへぬもの。両部にむかへていふ稱なり。

ゆゐかい　ナ。遺戒。いましめのゆゐごん。

ゆゐごん　ナ。遺言。ひとのいまそのときいひのこすことば。狭衣二（むかしの御遺言おぼしはすれず、あそれはきこえさせさまひながら）

ゆゐしよ　ナ。由緒。ゆゑ。つたへきたるいはれ。

ゆゐせき　ナ。遺跡。むかしのひとののこしたるあと。

ゆゐてい　ナ。遺弟。なくなりたるひとのでし。撰集抄二（奈良の京、山階寺の僧にて、行賀僧都といふ人いまそかりける、平備大徳の遺弟にてぞ侍りける）

ゆゐまゑ　ナ。維摩會。公事の名。維摩經を講ぜらるゝ公事。下文を見るべし。公事根源（維摩會、是れ、十月十日より、十六日に至るまで、七日の間、興福寺にて、維摩經を講ぜらる。十六日ハ、大織官の御忌日なる故也）

ゆゐもつ　ナ。遺物。なきひとののこしたるかさみ。

ゆゑ　ナ。湯坐。ゆおも。めのとのたぐひにて、ちごをおほしたつるもの。雄略紀（湯人、此云泱衛）

ゆゑ　ナ。故。原因。わけ。すぢ。ゆかり。ちなみ。おこり。万四十（いろぼねに、霞なりそね、はかへには、由恐れなけども、子等はよりてぞ）源横笛（いまは、そのゆゑをなんえおもひさまへよう侍らねば）

ゆゑ　ナ。故。ため。万四（朝霧の、おほにあひみし、ひとゆゑに、命死ぬべく、こひわたるかも）源帚（そのみやいふかありし、木緒訪、心にかけて、そのことらんゆゑ）

ゆゑだそり　ナ。故障。さゝそり。空穂おて（よろづのゆゑだそりをいゝおきて、おぼしさちさまへる御参のひんなく、この度せずなりなバ、つひにせずなりなんことをおぼすに、たゞさとひにまどひさまふ）

ゆゑづく　ワ。ヒトリ四。故付。ゆゑありげなり。源末摘（古代のゆゑづきたる御さうぞくなれど、なほ、わかやかなる女の御よそほひにはにげなう）

ゆゑなつかし　サ。プ。故圓。ゆゑづきてなつかし。源花宴（かのあるじの扇れ、さくらのみへがさねにて、色あさきに、かすめる月をかきて、水にうつしたることゝれむか、あなれされど、ゆゑなつかしうもてならしたり）

ゆゑびと　ナ。湯坐。ゆゑに同じ。神代紀（湯坐）

ゆゑん　ナ。所以。ゆゑ。からぶみにてよむよみくせ。

ゆゑゆゑし　サ。プ。故々。ゆゑづきてあり。空穂上（これも、いときよげに、きやうぞきて。扇さしかくして、見しさるさま、いとゆゑゆゑし。年四十ばかりなり）

ゆゑよし　ナ。故由。ゆゑ。よし。ゆかり。おこり。万九（ゆゑよしきゝて、知らねども、にひものごとも、ねなきつるかも）源椎本（女ハ、なほ、人の心うつるばかりの、ゆゑよしも、おぼろげにてハもらすまじうこそ）

ゆをけ　ナ。湯桶。ゆをもりたるをけ。宇拾三（湯桶を、下にさりいれて、それが上に、碁盤をうちかへして）

ゆをけことば　ナ。湯桶詞。ゆとうよみのことば。

ゆをつかふ　ワ。ヒトリ四。浴。ゆあみす。ぎやうずゐす。

よ

のどよりいづるひとつのこゑにて、いとをとかさなれるこゑなり。

よ　ナ。節。たけなどのふしとふしとのあひだ。絶拾（けふよりハ、とくくれさけの、ふしごとに、よいなられと、おもはゆるかな）和名（兩節間俗云與）

よ　ナ。夜。あまつひの、そらになきあひだ。ひそれよりあかつきまでのあひだ。古今（月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる。夏の夜れ、まだ宵ながら、あけぬるを、雲のいづこに、月やどるらん）

よ　ナ。代。ひとの、そのくらゐにゐて、そのことをするあひだ。古今序（かの御ときよりこのかた、としハ百年あまり、代ハ十継になんなりにける）

よ　ナ。世。ひととひとのならびのあひだ。ひとのうまれてしぬるまでのあひだ。ひとのそこにゐるあひだ。古今（我のみや、世を鶯と、なきさびん、人の心の、花とちりなバ）段後拾（すみなび叙、いださへ我も、隠れなん、世ハうきものぞ、山の端の月）

よ　ナ。世節。ふしのおなじ。万一（君が世も、わが世もしれや、いはしろの、岡の草根を、いざむすびてな）

よ　ナ。世。陸。とき。をり。六帖五（みづがきの、ひさしき世より、戀すれバ、わが帯ゆるぶ、あさゆふごとに）榮花こてね（かくたゆむ世なき御いのりのきるしにやと、ものおそろしげに申しおもひされバ）

よ　ナ。四。よつ。ふたつに、ふたつをあはせたるかず。

よ　ナ。餘。よそ。ほか。あまり。のこり。

よ　ナ。余。われ。おのれ。みづから。

よ　ナゲキ。嗟。ああ。ひとへのこゑ。著聞九（入のめす御いらへにハ、男ハ、よと申し、女ハ、をと申すなり）

よ　ナ。ナゲキ。心にかんみてよびのかるとき、よぶこゑ。後拾（たえむつる、ものとみつゝ、さゝがにの、絲をたのめる、こゝろぼそさよ）萬葉集（わすれずよ、まさおもひしと、龍田の、下たくけぶり、あらむかぎりつゝ）

よ　ナ。ダスニ。然りなどとおぼするにいふことば。神樂歌（鶯れ、かけなどなきなり、おきよくく）古今（昔人れ、花衣はなりぬなり、苔の袂よ、乾きだにせよ）

よ　ケ。ズ。從。より。から。万四十（をつくその、ほげきぎ木の間欲、たつ鳥の、目ゆら汝をみん、さねざらなくに）

よあかし　ナ。夜明。いねずしてよをあかすをいふ。

よあきなひ　ナ。夜商。よるのあきなひ。

よあけ　ナ。夜明。よのあけんとするとき。

よあけがらす　ナ。夜明鴉。よあけになくからす。

よあそび　ナ。夜遊。よるのあそび。

よあみ　ナ。夜網。よる、あみをうつをいふ。

よありき　ナ。夜行。よるのあるき。榮花鳥部野（御よありきのきるしにや、いみじうもてなさせさまひて）

よい　サ。善美。吉。覧。よしを見るべし。

よいくさ　ナ。夜軍。よるのいくさ。よるのたゝかひ。

よいね　ナゲキ。呵。ゆらしてうちねかするにいふことば。

よいよい　ナ。病の名。ちゆうぶうのたぐひのやまひ。

よう　ナ。用。もちふるをいふ。また、すべきわざ。竹取（燕の、巣くひさらバつげよとのさまふ、うけさまはりて、何のようにかあらんと申す）後撰（枇杷左大臣、

ヨ侍りて、母の薬をもとめ侍りけれど）

よう ナ。暇。時の名。今やうのたびの、ときめて おそるべきときの名して、ぱんのくになどまいけてず。

よう サ。能。作用者。能、いでくべきいひなのうち けしきいふとき、そのかしらつけていふことを。

ようい ナ。用意。こころもちひ。ものごとのまうけ。空穂。上（おのづからきこえ申して、さらずさりとおもえん、おしきさんさまのようにせん きて）紫鈴（さるようい しさりけれど、うつひ、かずなつくして）

ようい ナ。庸医。やぶいしや。つたなきくすし。

ようかい ナ。溶解。かうそりのとくることに。

ようがん ナ。容顔。かほかたち。かほいろ。

ようぎ ナ。容儀。かたち。すがた。ようす。とりなし。

ようきん ナ。用金。ようにもちふるかね。

ようきやく ナ。用脚。銭。ぜにの異名。

ようくん ナ。庸君。おろかなるきみ。

ようげん ナ。用言。はたらきことば。

ようざう ナ。影像。ひとのすがたをかきたるもの。

ようざうかた ナ。夜。よる。よさり。土佐（十六日、けふ よるまうでて、都へのぼらせたまひけれど）

ようさり ナ。夜。よる。よさり。和泉式部続集（ようさりは なりて、大臣殿より、御ゆるしたてまつりたまへり）

ようさりかた ナ。夜。よる。よさり。空穂。藤原（さて、ようさりがた、他殿人してまうでん）

ようさりつかた ナ。夜。よる。よさり。多武峯少将物語（みやのこのみの後まで、人なまるつかで、ようさりつかた、月の遅みなるまたたよりして）

ようし ナ。用紙。ようしのかみ。

ようじ ナ。用事。ようす。ようのこと。

ようじん ナ。用心。こころくばり。きをつけること。

ようしや ナ。容赦。ゆるし。かんにん。

ようしよ ナ。用所。かはや。こうか。せつゐん。

ようしよく ナ。容色。かほかたち。みめかたち。

ようす ナ。容子。さま。ありさま。すがた。

ようすぎ ナ。用済。ようのすみたること。

ようずみ ナ。用済。ようのすみたること。

ようすゐ ナ。用水。もののようにもちふるみづ。

ようせずは ツ。能くせずば。さもなくば。枕草四（ようせずば、今年の初雪にもふりなましと）

ようたい ナ。容体。かたち。ありさま。とりなし。

ようだいぶる ワ。ヒトリ。四。容体をかざりつくろふ。

ようたし ナ。用達。ようたつに同じ。

ようたつ ナ。用達。あきびとの、そのつかひなどにいでいりして、かひものなどのおほせをうけたまはるもの。

ようだつ ワ。ヒトリ。四。用立。やくにたつ。もちふるにあり。

ようだつ ワ。カタ。シ二。用立。もちふ。まにあはす。

ようだん ナ。用談。かかりあるようのこと。

ようだんす ナ。用箪笥。さまざまのものをいるるたんす。

ようち ナ。夜討。たたかひなどに、よるうちいるをいふ。

ようち ナ。用地。そのことにもちふるところ。

ようど ナ。用度。いりめ。いりよう。竹取五郎物語（さらめて用途の限をたまはらん）

ようなし サ。無用。あるかひなし。いたづらなり。伊勢（その男、身をえうなきものにおもひなして）

ようにん ナ。用人。武家の役の名。金銀の出納をつかさどる役にて、家老をたすけ、とりつぎのおもきもの。

ようのさむらひ ナ。衛府侍。武家の職、将軍家の随身の如くにて、弓をもち、矢をおひ、用にのる侍をいふ。

ようふ ナ。用布。かはや。こうか。せつゐん。

ようぼう ナ。容貌。かほかたち。すがたかたち。

ようぶんしやう ナ。用文章。てがみのぶんしやう。

ようべ ナ。昨夜。きのふのよ。万四（あまをとめ、つねする君ハ、ひさかたの、昨夜の雨に、こりまけんかも）

ようべん ナ。用便。ようのたより。

ようむき ナ。用向。ようのこと。ようのおもむき。

ようめい ナ。容面。かほかたち。源平（けるは、けときやうきしてはりける人の御かたちを）

よか ナ。余暇。あまりとのかまひのひま。

よか ナ。四日。みつのつぎのひ。また、ひづきのよう。

よか サ。善。よくある。よしあり。落窪四（うへも申しさ

きひて、よかなりとのたまひてせられ侍りなど）

よかご ナ。鯖のちひさきものをいふ。相撲にて。

よかぜ ナ。夜風。よのかぜ。狭衣四（されども、ことより、かよひまなりしさましばしゅうるに、かくてのちともかくせるさまなり）

よかぜ ナ。夜風。よるのかぜ。未木（うれおるが、蓬の垣根の、きりぎりす、夜風なさむみ、聲よわるなり）

よがたり ナ。世語。よのなかのものがたり。よのなかのうへさ。新千（つひにさて、うきよがたりとなりやせん、せなるる袖の、涙ならねど）落窪集（かくさに）

よがなよつひと ツ。夜一夜。よもすがら。よあかしに。

よかなり サ。善。よくあるなり。落窪四（こそ申しさまひて、よかなりとのたまひてせられけり）

よかは ナ。夜川。よるせるる川。六帖三（篝火の、影しうつれば、ぬばたまの、夜川の水は、底もみえけり）

よかは ナ。横川。地の名。近江にあり。新古（都より、雲の八重たつ、奥山の、横川の水は、すみよかるらん）

よがぶり ナ。夜彼。よぎをいふ。陰陽などにて。

よかん ナ。餘寒。さるまなりてさえたりまるさむさ。

よがよつひと ツ。夜一夜。よもすがら。よあかしに。

よがら ナ。世柄。よのなかのありさま。

よがらす ナ。夜烏。よるなくからす。風雅（よがらすれたる梢より、ねきおちて、月ほのぐなる、暁のやま）

よがる ワ。ヒトリ。シ二。夜離。よかれす。後拾（とかくこそ、とろえもあらで、つらからば、よかれをこの、かさみせなどものせよ）新後（かならじと、いひしいつの、ちぎりまて、ふかむと人は、月なみるらん）

よかる ワ。ヒトリ。四。愉快。こころもちよくおもふ。

よがれ ナ。夜離。男の、夜ごとまかよひなれたる女の許まて、ときとしてゆかぬ事あるをいふ。玉にして、夫婦の、ひとつの家にすまざりしほど、かかることどももありしなり。古今（たが里に、よがれをしてか、時鳥ただここにしも、寝たる聲する）夜鶴（いとど、かくつらき御よがれの、ねざめくるおもひかなでつれ）

よき ナ。斧。なの、そまびとなど、きをきるもの。好忠集（奈山は、木こるをとりの、聲まるに、よきつつきれや、花のあたりに）和名（斧和名乎能、一云與岐）

よき ナ。善。ゆきなるいふ。北国などにて。万十（上野、いらほのねろに、ふる雪の、行すぎかねつ、妹が家の辺）

よき ナ。預期。かねて。いつまちまつることをいふ。

よぎ ナ。夜着。ふすまのたぐひ。そのおほいにものごとくして、おほきくして、そでをもつくりたるもの。

よきぢ ナ。避路。よくべきみち。万九（跡取、荒田小、涙たちぬ、いづのゆかん、臨時道なしに）

よぎなし サ。ヒ。無余儀。やむことをえず。

よぎみち ナ。避路。よくべきみち。深徴（さても、かの深いまをみちならなるを、御子のおほせられりしに、

けきえてんやとはとおみふまひて）

よきやう ナ。餘興。ものごとのすぐるおもしろみ。

よぎる ワ。ヒトリ。四。過。すぐ。ゆきすぐ。新若（よきりおおしましけるよしたるはなんひときまずる）

よく ナ。欲。ものをむさぼるこころ。

よく ワ。ヒト。四。避。さく。いでてあわぬやうにす。古今（よくるまをあつらへつる、ものならば、この一本ハ、よきよとやいはまし）後撰（秋風はむせよれとども、かりがねの、ものおもふひとの、やどをよかなん）

よく ワ。カタ。シ二。避。さく。いでてあはぬやうにす。この意のハ、地方によりて、よけるとも下一段にも。万ヲ（家人の使なるらし、春雨の、與久列ど我を、ぬらすおもへば）

よく ツ。能。うまく。たくみに。めでたし。ものごとにたへて。狭衣三（よくぞ、この事は、一首も、ひとくちのれそめざりける）道寄集（みすまた、和歌は、別の風情なし、よく、天狗のつくるにことを申しけり）

よくあさ ナ。翌朝。つぎのあさ。そのあくるあさ。

よくあつ ナ。抑圧。おさへつけておさめあはすることをいふ。

よくい ナ。欲意。草の名。つしだまに同じ。

よくげつ ナ。翌月。そのつぎのつき。

よくしつ ナ。浴室。ゆどの。ゆあみをするところ。

よくじつ ナ。翌日。そのつぎのひ。梅松論（二十三日の暮より、翌日二十四日まで、大雨にて大洪水なり）

よくしん ナ。欲心。ものをむさぼるこころ。また、欲やうよ

く、午後に（この女房をみて、欲心をおこして）
よくす　ナ。横臥。よこにかまへてをる。古事記（かしのふに、余久須をつくり、余久須に、かみしおほみき、うまらに きこしもちをせ、まろがち）
よくだちに　ツ。夜降。よふけて。万十（夜具多知尓、ねざめてをれば、河瀬とめ、心もしぬに、なく千鳥かも）
よくづら　ナ。欲面。ものをむさぼるかほ。
よくてう　ナ。翌朝。つぎの日のあさ。
よくど　ナ。沃土。こえつち。くさきのよくそだつつち。
よくとし　ナ。翌年。そのつぎのとし。
よくねん　ナ。翌年。そのつぎのとし。
よくだん　ナ。翌日。そのあくるひ。
よくばる　ワ。ヒトリ。欲張。よくばるに同じ。
よくぼる　ワ。ヒトリ。四欲。むさぼる。たるをしらず。おもふ。拾玉（こんなの、ちそんのあさまし、せこにほしくて、ぜにもつらぬや、この世ならじ）
よくめ　ナ。抜目。つねに、よしとおもひをるところにひかれて、よくないものもよくみゆるをいふ。
よくやう　ナ。抑揚。あげさげ。ほめることとそしること。
よくよく　ツ。翼々。ねんをいれて。やむことなく。
よくりう　ナ。抑留。おさへてとどむるをいふ。
よくわう　ナ。餘光。あまりのひかり。
よけい　ナ。餘計。あまり。また、なくてよきをいふ。
よけい　ナ。餘慶。よきむくいのむくい。

よけくも　ツ。好。よくも。万十（ふつしも、ひとゝなりいでて、あしけくも、與家久毛みんと）
よけみち　ナ。避路。よきみち。のがれみち。
よけん　ナ。餘言。かねごと。のちのおしへ。のちのことば。
よける　ワ。カク。ニ。避。よくをまもるべし。
よこ　ナ。横。みぎひだりのさしわたり。たてにたいする方。また、もののかたちの、たゞしからぬをいふ。朗詠集（ひきあらず、おほちかやまの、ふるすみ、すぐにのぼる、や、けぶりなるらん）万十（かきほなす、人の横言、しげきかも、あはぬ日まねく、月のへぬらん）
よこ　ナ。横。よこしまなること。
よこあひ　ナ。横間。よこのかた。よこのすぢ。
よこあめ　ナ。横雨。よこにふるあめ。新六（夕立の、折嶺すぎゆく、横雨に、小笹の間みだれて、露ぞおぼるる）
よこいと　ナ。緯。ぬのをおるに、たてにたいして、よこにとほすいと。
よこいる　ワ。ヒトリ。横入。よこよりいる。拾玉（雲小舟、ささのひまより、漕ぎ出で、横風さかむ、雪ちよこいる）
よこうち　ナ。一の名。やくひろのなをいふ。上臈の字。
よこかぜ　ナ。横風。よこにふくかぜ。
よこがほ　ナ。横顔。かほのよこよりみゆるところ。
よこがみ　ナ。小鏡光。するめをいふ。女の詞。禁秘御抄
よこがみ　ナ。鏡。くるまの方ぐくるまのまへをつくるむき。和名（輪名古加美 鏡前横木也）
よこがみやぶり　ナ。横紙破。かみのたてすぢを、すきめあり

てやぶれども、よこ紙やぶり、よこぎれ。ものごとをむりにするものにたとへていふ。平家三（入道相国のさしもよこがみをやぶられしも）
よこぎ　ナ。横木。よこにわたしたるき。
よこぎる　ワ。カク。四。横切。よこにさきぎる。よこにわたる。万十（春山の、横切くもの、いちしるく、これとるみして、人にしらゆな）夫木廿（風ふけば、雲のとたち、山の端に、月をみたるる、初瀬の山）
よこぐも　ナ。横雲。よこにたなびけるくも。新古（春の夜の、ゆめのうきはし、とだえして、峰にわかるる、よこぐものそら）
よこごと　ナ。横言。ひとの、いとをやぶりて、あしきさまにいふ。拾玉抄（かたぶきては、あやみおいて、ひとゝものちのとづらひて、みかくりけり）
よこさ　ナ。横さ。よこにいふ。よこさまに同じ。万十（たぼこなす、ひとの横言、しげけくも、あはぬ日まねく、月のへぬらん）
よこざ　ナ。横座。ひとの、ふつ、ひとをおしのけて、なにもあるなす。
よこさく　ナ。世心地。よのひとの、ねなやむよやうか。
よこさし　ナ。横指。よこにさすもの。女をいふ。
よこざま　ナ。横座。かみくら。むしろのよこのかほ、主のとのとこ。宇治拾（主のこを、ありとみゆる、犬、横座にゐたる、おぼえ）

また、この世の人のたとへ）
よこさに　ツ。横。よこさまに。たださくゆるをいふ。
よこさび　ナ。横錆。ゑさびの色の、よこにのこるもの。
よこさま　ナ。横様。よこのかた。よこのむき。拾遺（船の上のこのよこさまに、たぐひなきものとて）
よこさまあめ　ナ。横様雨。よこあめ。源氏（猿の侍ふこそ、さきのなかにやみたり）
よこしぐれ　ナ。横時雨。よこにふるしぐれ。
よこしぞら　ワ。ヒトリ。四。横行。よこにあるく。蜂などのゆくをいふ。古語記（この蟹や、いづくの蟹、もちつたふ、つぬがのかに、余許佐良布、いづくにいたる）
よこしとれ　ナ。横死。ひじきものの、そのものなるにあらぬもの。和名（鶏古須士之 色黄）成務紀（和北東日横）
よこし　ナ。横。よこよりいふ。女の詞なり。
よこしなび　ナ。横縞。よこにあるすぢ。夫木（風騒ぎ、冬の木間の、横時雨、あふ山まで、下葉をゆらん）
よこしに　ツ。夜越。よをこえて。夜来（君がため、よこしはつめる、七草の、なずなの花を、みてえのびませ）
よこしぶき　ナ。横吹。よこよりふくかぜ。
よこしま　ナ。邪。よこさま。ただしからぬをいふ。
よこしま　ナ。横島。よこにあるしま。
よこす　ワ。ヒトリ。四。讒。よこをいふ。さかしらして。風雅集（この御の、おそのめ、おやまます、かたるけらしも）万

十（ひとごとの、讒をきゝて、玉鉾の、道にもあはず、おもふわがせ）
よこす　ワ。カク。四。譏。おこすをいふ。寂然法
よこすがひ　ナ。横縦。よこにとほるすぢ。
よこそ　ワ。カク。ニ。寄。よこにあるもの。まよひしむ。
よこそむく　ワ。ヒトリ。四。横向。よこによるものなれ。
よこたはる　ワ。ヒトリ。四。横。よこになる。よこにふす。枕草（ひとく、なまなるもの、おほきなる木の、風にふきたふされて、根をささげて、よこたはれふせる）
よこたふ　ワ。カク。ニ。横。よこにたふす。みをそこでてつこの頃に、地方はよりて、よこたふると下二段にいふ。拾玉抄二（かくしらぬ、なかしらず、ありなるの世、かなる身をもまかりて、いつとなく、かきけき、ゆくさきとをる）
よこたへる　ワ。カク。ニ。横。よこたへる。
よこぢ　ナ。横道。よこみち。
よこちゃう　ナ。横町。ちまたのよこのちやう。
よこつけ　ナ。横付。よこよりつくるをいふ。
よこつばり　ナ。横綱鳥。けむりに同じ。
よこつら　ナ。横面。よこのほ。はほのよこ。
よこて　ナ。横手。よこのかた。ものをかざる。
よこでさう　ワ。ヒトリ。四。横走。でをうちならすいふ。
よこでる　ナ。横手。よこのかた。もののかまさらぬ。
よこと　ナ。讒言。よくのことば。あしざまにいふをするなり。万十二（あらたまの、年のをながく、あはずして、けがよこと）讒言紀（讒言）
よこなまり　ナ。横訛。よこよりなまる。
よこなまる　ワ。ヒトリ。四。訛。なまりていふ。ことばのよからぬ。
よこなみ　ナ。横波。よこにたつなみ。新六（蘆鶴の、鳴門をさして、かへる波の、よこ波の…）
よこなる　ワ。ヒトリ。四。横。よこになる。よこにふす。
よこね　ナ。横根。よこよりいでたる根。
よこはし　ナ。横走。よこにはしる。
よこひろし　ナ。横廣。よこのかたひろし。
よこぶえ　ナ。横笛。よこにして吹くふえ。
よこぶす　ワ。ヒトリ。四。横伏。よこにふす。
よこぼうやう　ナ。横暴。よこにあらくふるまふをいふ。
よこほふ　ナ。横行。よこにゆく。
よこぼん　ナ。横本。よこのかたのながき本。

ゐ（助詞）…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…の。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。…ゆえ。…ゆえに。…ゆえん。…ゆえんの。…ゆえんである。…ゆえんだ。…ゆえんです。…ゆえんでございます。…ゆえんでございました。…ゆえんでございましょう。…ゆえんでございますから。…ゆえんでございますので。…ゆえんでございますのに。…ゆえんでございますながら。…ゆえんでございますために。…ゆえんでございますほど。…ゆえんでございますくらい。…ゆえんでございますばかり。…ゆえんでございますだけ。…ゆえんでございますしか。…ゆえんでございますまで。…ゆえんでございますなど。…ゆえんでございますなり。…ゆえんでございますたり。…ゆえんでございますやら。…ゆえんでございますか。…ゆえんでございますよ。…ゆえんでございますね。…ゆえんでございますわ。…ゆえんでございますぞ。…ゆえんでございますな。…ゆえんでございますこそ。…ゆえんでございますさえ。…ゆえんでございますすら。…ゆえんでございますでも。…ゆえんでございますしも。…ゆえんでございますぬ。…ゆえんでございますず。…ゆえんでございますん。…ゆえんでございますう。…ゆえんでございますよう。…ゆえんでございますまい。…ゆえんでございますた。…ゆえんでございますだ。…ゆえんでございますです。…ゆえんでございますます。…ゆえんでございますない。…ゆえんでございますたい。…ゆえんでございますらしい。…ゆえんでございますべき。…ゆえんでございますはず。…ゆえんでございますつもり。…ゆえんでございますところ。…ゆえんでございますとき。…ゆえんでございますほう。…ゆえんでございますもの。…ゆえんでございますこと。…ゆえんでございますため。…ゆえんでございますわけ。

ゐ（接頭）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（接尾）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（感動）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（終助）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（間投）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（副詞）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（連体）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（接続）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゐ（感嘆）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（助詞）…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（接頭）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（接尾）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（感動）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（終助）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（間投）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（副詞）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

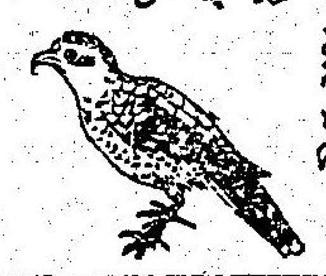
ゑ（連体）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（接続）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

ゑ（感嘆）…の。…に。…で。…から。…より。…と。…を。…が。…へ。…は。…も。…ば。…て。…ても。…ので。…のに。…ながら。…ために。…ほど。…くらい。…ばかり。…だけ。…しか。…まで。…など。…なり。…たり。…やら。…か。…よ。…ね。…わ。…ぞ。…な。…こそ。…さえ。…すら。…でも。…しも。…ぬ。…ず。…ん。…う。…よう。…まい。…た。…だ。…です。…ます。…ない。…たい。…らしい。…べき。…はず。…つもり。…ところ。…とき。…ほう。…もの。…こと。…ため。…わけ。

よしなし　ナゲキ旅。まゝよ。さもあらばあれ。よしなからねさることぞなり。新勅撰秋初（こゝろざしは、泉よりまさりなん、よしくみさま）枕草九（そらごとするなりけり、よしくとていらせさまひね）
よしよし　サブ。由々。よしづきてあり。源平盛衰記（法師なれど、いとよしくしうもづらしげなるさまにて）讃岐二（一うちなるさまひぬる、よしくしまへ、あてにあいぎやうづきたる御けはひもかはらず）
よしみ　ナゲキ旅。よしやに同じ。万十（たらちねの、母はきらふず、なにもさる、心は吉恵、君がまにく）
よしろいろくさ　ナ。夜白色草。灌木の名。ほさんの異名。
よしゑやし　ナゲキ旅。よしやに同じ。万三（弱かへば、妹からならん、縦黒八子、石は、ふむとも、我は二人ゆかん）
よす　ワ。カシ。シニ。寄。よらしむ。この語は、地方によりては、よせると下一段にいふ。万廿（葯師の、異聞のてこなに、実くも、我は余殺とふ、異間のてこなに）風雅（見渡せば、爪木の道の、松陰に、柴よせかけて、やすむ山人）
よす　ワ。カケ。シニ。寄。かこつく。つくる。たてまつる。この語は、地方によりては、よせると下一段にいふ。詞花（ところぐの名を、四季によせて、ひとくゞ、歌よみ侍りけるに）後撰（おもふ心ありて、前大政大臣によせて侍りける、たのまれぬ、うき世の中を、なげきつゝ、ひかげにおふる、身をいかにせん）
よす　ワ。ヒトリ。シニ。寄。よるに同じ。この語は、地方によりては、よせると下一段にいふ。新古（山風は、ふけどふかねど、白波の、よする岩根は、ひさしかりけり）
よす　ワ。カケ。四。止。やむ。やめにす。
よすが　ナ。縁便。たより。ちなみ。ゆかり。よるところ。たよりとたのむひと。佛足石歌（ひとの身は、得がたくあれば、のりの田の、与須加となれり、つとめもろく）源氏玉（むすめどもも、なのこどもも、ところにつけたるよすがどもいできてすみつきにけり）
よすがら　ソ。終夜。よもすがら。後拾（故里は、浅茅が原と、あれはてて、よすがら虫の、音をのみぞなく）
よすぎ　ナ。世過。よわたり。すぎはひ。なりはひ。
よすてびと　ナ。世捨人。ほうし。よをすてたるひと。
よすみ　ナ。四隅。よものすみ。よつのかど。
よせ　ナ。寄。おもひよせ。こゝろよせ。貴人などの、たのみとおもふをいふ。世の人より、心をよせて、たのみおもふるゝをいふ。源氏桐（一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、よせおもく、うたがひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆれど）栄花二（太政大臣は、御腹の親おもく、納刑の君やられど）
よせ　ナ。寄席。はなしなどの、あまたのひとをあつめて、はなしをしてきかせするところ。
よせかく　ワ。カケ。シニ。寄掛。もたせかく。よせておく。
よせき　ナ。寄石。ひせきに同じ。
よせぎざいく　ナ。寄木細工。さまざまのきを、ちひさくきりて、いくつもつぎあはせてするさいくもの。
よせく　ワ。ヒトリ。カ。寄來。よせてきたる。風雅（家苞に、貝などひろふと、沖方より、よせくる波に、衣手ぬれぬ）
よせざん　ナ。加算。算術にいふことば。幾個かある数を、ひとつにあはせてゆくをいふ。
よせづな　ナ。寄綱。ふねにつけてひきよするつな。万四（たこのねに、与西都奈延へて、よすれども、あにくやしづの、そのかほよきに）夫木三十三（岸ちかく、よせづなもへて、さす船に、こゝぞときりと、人むかふなり）
よせて　ナ。寄手。せめよせてくるてき。太平十（寄手も三百餘騎、相引に、左右へさつとひく）
よせどころ　ナ。寄所。うまをつなぐところ。宇拾二（阿原にゆきて、よせどころほりさてて、身をこもらさむと、櫓にまもりつけて）和名（和名抄、與勢都久呂）
よせぶ　ナ。馬酔木。木の名。あしびに同じ。
よせぶみ　ナ。寄文。ひとにおくるふみ。まさ、たよりのたぐひ。續世繼四（よせぶみをたてまつれ、あづけんなど侍りければ、よろこびにたてまつりけれど）
よせみや　ナ。寄宮。をやしろを、ひとつによせたるみや。
よせめ　ナ。夜攻。よる、てきをせむるをいふ。
よせる　ワ。カケ。シニ。寄。よらしむ。よすを見るべし。
よせる　ワ。カケ。シニ。寄。かこつく。よすを見るべし。
よせる　ワ。ヒトリ。シニ。寄。よる。よすを見るべし。
よそ　ナ。餘所。ほか。ほかのところ。とほきところ。將門記

（册まで、風の便に、それぞとふ、枝わかれせる、花のやどりを）狹衣二（かくなんときこえまし、とは、かくよそのものはいなしきこえてまつらざらまし）
よそうしだき　ナ。與總次高。いくらかをいふ。西國にて。
よそか　ナ。四十日。ひつきの名。土佐（ひと船の、綱手のながきを、春日を、よそかいかまで、我れへにけり）
よそぎき　ナ。餘所聞。よそのきこえ。輔親集（よそぎゝには、年しへぬれど、疎らず、心なれても、たのまるゝ哉）
よそげに　ソ。餘所のさまに。なれずがほに。よそくしく。新古（もみぢ葉は、おのがそめたる、いろぞかし、よそげにおける、けさの霜かな）
よそごと　ナ。餘所事。よそのこと。ほかのこと。
よそぢ　ナ。四十。こそひのかず。まさ、十をよつあはせたるかず。千載（たゞ、假字のよそぢあまり、なゝもじの内をいでずして、心に思ふ事を、ことばにまかせていひつらぬるならひなるが故にこそ）
よそひ　ナ。裝。よそほひ。輔伴紀（あさまの、ひかりわりと、人はいふと、君が器財比し、たゆたくありけり）
よそびと　ナ。餘所人。よそのひと。拾遺（勝爾伊勢かづく秋を、よそびとは、紅葉をもちふ、袖かともみん）
よそひぐさ　ナ。裝草。草の名。きくの異名。
よそふ　ワ。カケ。四。裝。とゝのふ。かざる。とゝのふ。万二十（いめみて、衣をとりき、装束間に、妹が使ぞ、さきざきらはけらる）源石明（船をよそひまうけて、船子、雨風やまば、この浦はよせよき、かたはて、ことの侍りしかば）
よそふ　ワ。カケ。シニ。比。よすに同じ。万八（あらかへば、碑もにくきす、ふしゑやし、世副流君が、にくからなくに）
よそふ　ワ。ヒトリ。シニ。比。准。くらぶ。なずらふ。この語は、地方によりては、よそへると下一段にいふ。貫之集（雨ふれば、北にたなびく、浮雲を、君によそへて、眺めつる哉）源氏桐（なつかしうらうたげなりしを思しいづるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき）
よそへる　ワ。ヒトリ。シニ。比。准。よそふを見るべし。
よそほか　ナ。餘所。よそをいふに同じ。
よそほし　サブ。嚴。いかめし。おごそかなり。拾芥抄（いともよくしう、きよげに、よそほしげに、下襲の裾ひきながく、ところせくさぶらひたまふ）榮花初花王（せうくの事などは、いふべきにもあらず、ましてはゞかりよそほしき御ありさま、いとゞところせげなり）
よそほひ　ナ。裝。とゝのへ。かざり。夫木（たなばたの、かざる朝日の、よそほひは、まづあけてみる、玉櫛笥かな）
よそほふ　ワ。カケ。四。裝。よそふに同じ。
よそみ　ナ。餘所見。よそのみえ。ほかよりみるところ。
よそみみ　ナ。餘所耳。よそのきこえ。まさ、きくともなしにきくをいふ。好忠集（よそみゝは、鹿のこゑをきゝしより、秋はかなしき、ものと知りにき）
よそめ　ナ。餘所目。よそのみえ。千載（卯の花の、よそめなりけり、山里の、垣根ならねば、ふれる白雪）
よそめ　ナ。餘所目。不具の名。やぶにらみに同じ。
よそもる　ワ。ヒトリ。四。論。やまのたかくおほきなるさまをいふとぞ。字鏡（論山高大貌也之、與曽毛留）
よそゆき　ナ。餘所行。ほかへいでありくをいふ。
よそよそし　サブ。餘所。よそのさまなり。したしからず。むつましからず。狹衣二（いとからくしく、よそくしからん御もてなしさては、かぎりあらん、いのちもながらへやるべくもあらんと、いみじうこゝろぼそくて）
よそよそに　ナ。餘所。よそめきて。したしからず。むつましくもなく。よそくしく。源氏須磨（二二日のほど、よそくにあかしくらすをりくだに、おぼつかなきものにおぼえ）
よそる　ワ。ヒトリ。四。寄。准。よす。なずらふ。万四十（山鳥の、をろの波尾に、鏡かけ、唱ふべみこそ、なに與曽利けめ）
よたう　ナ。餘黨。なかまの、いまだのこりたるもの。
よたか　ナ。夜鷹。蚊母鳥。鳥の名。ふくろふのたぐひの、たかににたるものにて、ひるはかくれ、よるはいでて、おやしきごゑをなすものなりとぞ。和名一（蚊母鳥 揚雄抄云 夜伏夜行鳴以爲怪者也 與多加）



よだけ　ナ。節竹。ふしあるたけ。古事記（節竹）
よだけ　ナ。衣にいふ語。ゆだけに同じ。山家集（よだけたつ、袖にたぐへて、忍ぶ哉、袂の瀧に、おつる涙を）
よだけし　サ。と。御山なり。おほざうなり。ことごとし。山家

集（けぶりたつ、ふじのおもひの、あらそひて、よだけきこひを、するがへぞゆく）源鈴虫（月やゝさしあがり云ぞ、うるはしかるべきをりふしハ、ところせくよだけきぎしきをつくして、かゝみに御覧ぜられさまふ）

よただ ソ。終夜。よもすがら。古今（さみだれの、空もとゞろに、ほとゝぎす、何をうしとか、よたゞなくらん）

よただどり ナ。終夜鳥。鳥の名。ほとゝぎすの異名。滑稽雑談

よたち ナ。鼬鼠。獣の名。いたちに同じ。

よだち ナ。與黨。あさふるとうぞくと。

よだち ナ。夜立。よをこめていでたつ。玉葉（あさおけの、山分衣、ぬれてけり、深きよだちの、露のしめりに）

よだつ ナ。與黨。あさふるとうぞくと。

よたんぼ ナ。狂酒。さけきちがひをいふ。大阪にて。

よためし ナ。代様。祭の名。尾張の熱田宮にあり。和訓栞

よたよた ソ。蹉跌。よろく。よろめきて。

よだり ナ。涎。よだれ。ちごのくちよりながるゝしづく。和名（津液與多利小兒多涎唾流出於頤下也）

よだれ ナ。涎。よだりを見るべし。

よだれかけ ナ。涎掛。ちごのおとがひのしたにかけて、よだれのながれおつるをうくるもの。

よち ナ。余知。おなじとしごろのともをいふとぞ。されどいろにぞやあり。万廿（この河に、朝菜あらふ子、なれもされも、余知をぞもてる、いでこたぶりに）

よち ナ。餘地。くつろぎ。あまりのところ。

よぢかし サ。ヒ。世近。ふむのすゑさかりし。のこりのよそひすくなし。源若菜（朱雀院の、今ハ、ひげに、よちかくなりぬるこゝちしてものこゝろぼそきを）

よちこら ナ。余知古良。おなじとしごろのともどちをいふとぞ。されどいろにぞやあり。万五（余知古良と、手たづさはりて、あそびけん、ときのさかりを）

よちづ ナ。輿地圖。せかいのづ。ちきうのづ。

よぢのぼる ワ。ヒトリ。四。攀上。とりつきてのぼる。

よぢゆう ソ。夜中。よもすがら。よどほし。

よぢりすぢりす ワ。ヒトリ。カ。身をひねりて、こなたへゆきかなたへゆく。宇拾五（左右の手さし、走りなかへて、いゝにせんくとよぢりすぢりするほどに）

よぢる ワ。ヒトリ。四。捩。ねづ。ゆがむ。もぢる。宇拾三（良秀がよぢりふどうとて、今に、ひとびとめであへり）

よぢる ワ。カケ。カ一。攀。よづを見るべし。

よぢねざし ナ。畋。をざしを見るべし。

よつ ナ。四。ふうつは、ふうつをあはせたるかず。

よつ ナ。四時。ようのとき。みのとき。ゐのとき。

よつ ナ。居兒。ゑさをいふ。備前などにて。

よづ ワ。カケ。カニ。攀。とりつく。のぼらんとする。この詞ハ、地方によりてハ、よぢるとも下一段にもいふ。万八（いさづらは、地にちらば、すべをなみ、攀てたをりつ）

よつあし ナ。四足。けだものをすべていふとなん。

よつあしぶね ナ。四足舟。通船の口段あるもの。船用集

よつかど ナ。四角。よつのかど。よつのすみ。

よつかど ナ。四角。よつじをいふ。越後、長岡にて。

よつかむし サ。フ。世付。よづきてみゆ。源夕霧（よづかむしう、かるぐしき御名のたちぬまじきをへ）

よつぎ ナ。世継。いへのあとめなつぐをいふ。

よづく サ。ヒトリ。四。世付。よごゝろつく。よごゝろをふる。源總角（かく、よづきてものしたまふなるよろこび申さんとのたまひて）浜松二（よづきぬ御ありさまなれバ、ほのぶさまはやおぼしならんと）

よつぐち ナ。四口。よつじをいふ。越後などにて。

よつげ ナ。四毛。鷹にいふことぞ。鷹の背のかさの毛。

よつしろ ナ。四白。馬の毛色にいふ詞。あしぶちに同じ。

よつだけ ナ。四竹。竹の、よつにきりたるを、左右の手にもちて、つゞにさりて、随におせて、にぎりならしつゝ、拍子をとるもの。

よつつじ ナ。四辻。ちまたの、よもにわかれたるところ。

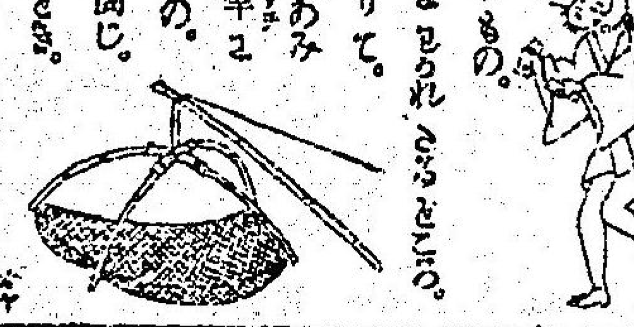
よつて ソ。仍。よりて。それによりて。

よつであみ ナ。四手網。うをゝとるあみなり。網の四隅に、竹をそりて、竿につけて、すくひやうにしたるもの。

よつでかご ナ。四手駕籠。あんだに同じ。

よつどき ナ。四時。みのとき。ゐのとき。

よつにておるるとり ナ。四別之鳥。みもとにおもるゝとり。親



子の數々にこゝろをたとへていふ。是れ、もろこし、桓山といふ地に、親鳥、よつの雛をうみてそだてみさりしが、その雛、やうやくおひたちて、翅のいできさるほどに、子は、親鳥にはなれて、四方に別れさるな、親鳥の鳴きかなしみさりといふ故事あるよりいひでたるなり。結節（よつにさるゝ、村鳥の、おのがちりぐゝ、すだちなれて、織りにとまる、すもりみも、何かいかひの、あるべきを、砕けてものな、思ふらん）

よつのうみ ナ。四海。よものうみ。新六（よつの海、波もしづかなる、御代なれバ、むかしの跡も、けふ供ふなり）

よつのおきな ナ。四翁。よさりのおきな。もろこし、漢をいふ代に、商山といふ地にかくれさりし四人の翁の、山よりいでて、恵帝といふ帝な、輔佐せし事あり。夫木卅（みやまより、いでてやきみに、つかへまし、よつのおきなの、いまもありせバ）

よつのたから ナ。四寶。ふのうてうしやうに同じ。

よつのたみ ナ。四民。ふのうてうしやうに同じ。ことゝよせ

よつのとき ナ。四時。はる、なつ、あき、ふゆ。古今序（天下おろしめす事、よつのとき、九返になんなりぬる）

よつのとなり ナ。四隣。よものとなり。夫木三（如何せん、四の隣の、宿にさへ、悲しむ聲の、たえぬうき世を）

よつのふね ナ。四船。遣唐使の船にて、大使、副使、判官、主典の乗りさるふね。万廿（四船、ふなのへならべ、たひらけく、はや、こさり来て、かへりごと、まうさん日に）

よつのへみ ナ。四蛇。土と水と火と風と。佛家にていふ語なり。佛足石歌（与都乃閇美、いつゝのものの、あつまれる、きたなき身をバ、いとひすつべし）

よつのまこと ナ。四信。佛經の語。佛と法と僧と戒と。拾玉（いそぎゆく、やどしかすらぬ、みちなれや、いつゝのしなの、よつのまことを）

よつのり ナ。四乘。船の、ちひさくして、三四人ばかり乗るべきものをいふ。伊勢、桑名などにて。

よつのを ナ。四絃。樂器の名。びはに同じ。新續古（ゆみそりの、なかぞの月の、影よりも、なほすみまさる、よつのをの聲）式子内親王集（つくづくと、猶さへぬれぬ、波のうへに、よぶりくすみし、よつのをの聲）

よつばぐさ ナ。四葉草。草の名。いなもりさうに同じ。

よつばひ ナ。四匍。てとあしとをつきてはふをいふ。

よつぱらひ ナ。酒狂。さけきちがひをいふ。京阪にて。

よつびく ワ。カケ。四。弥引。ゆみをよくひきしぼる。保元（よつびきて、しなつ矢か、御曹子のそばにかゝり、かぶとのまこうに射つけさり）

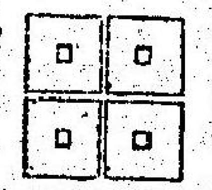
よつほど ソ。餘程。つよく。きびしく。はなはだしく。

よつま ナ。夜妻。よのびづま。かくしをんな。かくしをきて。催馬楽（いかにせん、をしのかたどり、いでてゆかバ、おやハありくと、さいなめど、よ川万さずめつや、さきんさちや）寶國集（異邦野に、なくなく夜のかずの、つもれるハ、戚もよづまや、つれなかるらん）

よつまぐさ ナ。四間草。木の名。ひのきの異名。藻玉集

よつまた ナ。四股。よつじをいふ。下総にて。

よつめ ナ。四目。けさのよつあるもの。よさみのあるなの、よつめさゝるもの。また、紋所の名にて、縦目の、方にかきなしさるものな、よつあはせたるもの。



よづめ ナ。夜詰。よるつめゐるなをいふ。

よつめがき ナ。四目垣。よつめのすきしあるかき。

よつめぎり ナ。四目錐。きりの、よつかどになれるきり。

よつめごろし ナ。四目殺。碁にいふことばなり。相手の石の、四方のすぢをかこみてとるもの。

よつめむすび ナ。四目結。よつめにむすびなすをいふ。

よつゆ ナ。夜露。よるのつゆ。よるのしめり。

よて ソ。仍。よりて。曾柏夢稗記（是をもてあそびて、其夕、老をわする、よて斎院を、笑花軒と號す）

よてい ナ。豫定。かねてよりのさだめ。

よてこ ナ。末子。すゑのこをいふ。陸奥、南部にて。

よど ナ。淀。みづのよどめるところ。万九（落ちたぎち、流るゝ水の、岩にふり、よどめる淀に、月の影みゆ）

よど ナ。淀。地の名。山城にあり。古今（眞菰かる、よどの澤水、あめふれバ、常よりことに、まさるわがこひ）

よどぎ ナ。夜伽。よるのとぎをするをいふ。

よどこ ナ。夜床。よるのねどこ。好忠集（寢覺る、夜床れ、山と、なりぬらし、秋の夜をへて、ぬる人もなみ）

よどこね　ナ。夜床寝。よるのねどこ。また、ねどこにふすをいふ。新撰六（呉竹の、よどこねちかき、風の音に、寝うつ雨れ、きゝもわかれず）続拾（竹ちかく、よどこねはせじ、鶯の、なく聲きけば、あさいせられず）

よどせ　ナ。淀瀬。よどみたる瀬。万七（宇治川は、與杼湍なからし、あじろびと、舟よばふ聲、をちこちきこゆ）

よどで　ナ。夜外出。よる、ほかにいづるをいふ。よる、いへをいづるをいふ。万二十（吾妹子が、夜戸出のすがた、みてしより、こころそらなり、つちはふめども）

よどともに　ツ。夜共。世共。よもすがら。よのをはるまで。続後拾（なにはがた、入江の蘆の、よとともに、月こそやどれ、秋の浦波）大和（一生に、男せでやみなんといふ事を、よとともにいひける）

よどの　ナ。淀野。地の名。山城にあり。拾遺（あやめ草、ふきそむる、淀野なれ、露の宿をぞ、人ぞかりける）

よどの　ナ。夜殿。よるふすところ。後撰（おく霜の、きおきを、おきぞすれ君がよどのに、よかれせましや）枕草二十（よどのに寝て侍りけるほどに、ほどなくやけ侍りぬべくなん）奥維紀（内寝）

よどほし　ツ。夜通。よをとほして。よもすがら。

よどみ　ナ。淀。みづのよどみたるところ。散木（白河の、よどみに宿る、月みれば、なびく玉藻ぞ、野となりぬる）和名（澱　訓與止美、俗用淀字、云與止、所謂淀澱也、云々、如淵而浅弱也）

よどむ　ワ。ヒトリ。四。淀。澱。とどこほる。ながれとまる。万五（松浦川、七瀬のよどは、與騰武とも、われは與騰麻受、君をしまさん）夫木五（こぎすぐる、船さへよどむ、こちして、堀江のかもづ、群さわぐなり）

よどり　ナ。世取。よつぎ。あととり。

よどる　ワ。カ。四。怒。あやす。などぎさむ。ほらそしむ。

よどろ　ナ。荊棘。おどろをいふ。紀伊などにて、

よな　ナゲキ。感辞のよに、感辞のなをそへたる辞にて、よといふに同じ。繁政集（されはよな、かくてもおなじ、くるしさな、ひとねざきより、おもひくべさで）

よなか　ナ。夜中。よるのもなか。万九（金門にし、人の来たてれ、夜中にも、身はたなしらず、いでてあひける）

よながし　ナ。夜長。よのあくることおそし。

よなき　ナ。夜啼。貝の名。へなたりに同じ。

よなき　ナ。夜啼。ちごなどの、よるなくをいふ。万二十（ちかせこに、こふとあらし、みどりごの、夜哭をしつつ、いねがてずくれ）同十（ほとゝぎす、夜喧をしつつ、せがせてを、やすいしなすな、ゆめこころあれ）

よなぐら　ナ。米庫。こめをおさむるくら。和名（廩　與祢久良）

よなべ　ナ。夜業。よるするわざ。よるのなりはひ。

よなむし　ナ。米虫。よねにいでくるくろくしてちひさきむし。和名（蛄蛘　和名與奈牟之）

よなよな　ツ。夜々。よごとに。古今（秋は来ぬ、今やまがきの、きりぎりす、よなよななかん、風のさむさに）

よならひ　ナ。世習。よのならひ。夫木六（如何せん、たゞなほざりの、よならひは、たのまぬ中をなげくなれ）

よならべて　ツ。夜並。よなく。よごとに。

よなる　ワ。ヒトリ。シニ。世馴。よのなかのことになれしむ。源夕顔（やうかへりて、よなれたる人ともおぼえねば）

よに　ツ。世間に。いかにしても。後拾（夜をこめて、鳥のそらねは、はかるとも、世にあふさかの、関はゆるさじ）大和（文は、世にみえまじ、たゞ、詞にて申せよといひければ、いとよく申しさぶらひなんと）

よにあふ　ワ。ヒトリ。ロ。世間にもちひらる。源桐（世にあひ、はなやかなる若人にて、思ふ事なきなるべし）

よにいづ　ワ。ヒトリ。シニ。世間になりいづ。

よにいる　ワ。ヒトリ。四。夜になる。夫木八（かねてより、草葉における、白露は、まだ夜にいらぬ、蛍なるらん）

よにかくる　ワ。ヒトリ。シニ。夜のほどにまぎれかくる。蜻蛉（夜にかくれ、来つるかひなく、紅葉の、月ありかくも、てりまさる哉）【空穂蔵開】（いかでこのわたりさぶらはんとて、夜にかくれていでさせたまや）

よにしらず　ツ。世にしらず。よのなかにたぐひなく。源桐（世にしらずさとくかしこくおはすれば、あまりにおそろしきまで御らんず）

よにつつみて　ツ。夜をこめて。よるあけぬに。源少女（鳥もなかなくなければ、夜はつゝみていそぎいでさせる）

よになし　サ。ヒ。世間になし。よにたぐひなし。空穂上（世になう、かうばしき風ふきにほはしたり）

よになす　ワ。ヒトリ。ロ。夜になす。日をくらす。いほぬし（紅葉の、えもいはずみえ侍りしかば、みくらし侍りて、夜になしていで侍るとて）

よににず　ツ。世のつねにはにず。竹取（かぐや姫のかたち、世に似ずめでたき事を、みかどきこしめして）

よにのる　ワ。ヒトリ。ロ。夜のけしきのおもしろきにうかる。朝忠集（天の戸の、あくる間をさへ、ゆるされで、きぎ世にのりて、かへりぬるかな）

よにまた　ツ。世間に。いかにしても。まことに。おぼくさむらず。宇治九（さて、この道明おきふやう、よまく、ねんごろにもてなして、ころぶしありつる讀經の聲をう、しろめたき心つかひせん事いとほしけれど）

よね　ナ。米。こめ。いねのみ。和名（米　和名與禰、粟實也）

よねぐら　ナ。米廩。よなぐらに同じ。

よねぶつ　ナ。夜念仏。よるとなふるねんぶつ。七十一番職人歌合（こゑちくさき、むじやうごゑ、ひときけとてぞ、へうさんの、あそくめぐる、月のよねぶつ）

よねむし　ナ。米虫。よなむしに同じ。

よねん　ナ。余年。のこりのとし。のこりのよはひ。

よねん　ナ。余念。ほかのおもひ。ほかにうつるこころ。

よねをありものにす　ワ。ヒトリ。カ。賭宿。そひぶしをかけものにす。ねざくを見合すなし。類聚雑要抄（賭宿）

よのかため　ナ。世固。よのなかををさむるひと。源若菜（ゆゑなども、こともなく、つひには、世のかためとなるべき人なれば、ゆくすゑもたのもしけれど）

よのさが　ナ。世性。よのなかのくせ。新千（玉とみし、露さへもろき、習にて、世のさがにこそ、虫もなくなれ）

よのたり　ナ。世饒。よのなかにあるまじらひ。

よのつね　ナ。世常。よのなかのつねにて、ことなることなきをいふ。枕草三（おかし、これよのつね、いふべくやある、いみじうこそはめでたけれ）

よのつねなり　サ。世常。つねのなみなり。つねにはかはらず。枕草二（高砂、をりかへしふかせ給ふは、なほ、いみじう、めでたしといふもよのつねなり）

よのつねに　ツ。世常。つねのなみに。つねにかはらず。

よのなか　ナ。世中。せけん。ひととひととのあひだ。万五（ねやどまで、来たちよばひ、かくばかり、すべなきものか、世間のみち）古今（ながれては、妹背の山の、中におつる、吉野の川の、よしやよのなか）

よのほどろ　ナ。夜程。よのほど。万四（夜之穂杼呂、いでつつくらく、數多度、なればわがむね、きりやくがごと）

よのめもねず　ツ。夜目不寝。よもすがらいねもせず。

よは　ナ。夜。よ。よる。古今（風ふけば、おきつしらなみ、たつたやま、よはにや君が、ひとりこゆらん）

よは　ナ。世。よ。よのひ。仏足石歌（釈迦の御跡、石にうつしおき、ゆきめぐり、敬ひまつり、せが与波をへん）

よは　ナ。余波。なごり。のこりのささなみ。

よはう　ナ。四方。あまねく。けるのよつあるをいふ。更科（おほきなる石のよもうなる中に、穴のあきたる中よりいづる水のきよくつめたき事）

よばう　ナ。豫防。かねてのふせぎ。かねてのようじん。

よはく　ナ。余白。もじをかきたるあまりのところ。

よはだ　ナ。夜肌。よるのはだ。六帖五（ひとりねの、よはだのさむさ、ちりそめて、昔の人ぞ、今もこひしき）

よばたらき　ナ。夜働。よるのはたらき。よるのなりはひ。

よばなし　ナ。夜話。よるのものがたり。宵々物語（御前本集、短夜咄出合の節は、一譲りさひ、或は幸若をよび）

よばなる　ワ。ヒトリ。シニ。世離。よにとほざかる。空穂菊宴（あやしく、などかよばなれたるすまひはしたまふ）

よばふ　ワ。ヒトリ。四。呼。よぶに同じ。常盤嫗物語（おみさよくとよばふれど、惣じて仏のおとづれなく、仏の耳のきこえぬか、うぐひすが聲のおとづれぬか）

よはひ　ナ。齢。とし。うまれてよりこなたの、よにあるあひだのとしつき。古今（年ふれば、よはひはおいぬ、しかはあれど、花をしみれば、もの思ひもなし）

よばひ　ナ。婚。私通。つまとせんといざなふをいふ。また、をとこをんなの、しのびてゆきあふをいふ。万十二（ひとのくには、結婚にゆきて、太刀が緒も、いまだとかねば、さよぞあけにける）源玉鬘（けさうびとは、夜はかくれたるをこそ、よばひとはいひけれ）

よばひびと　ナ。婚人。よばひをするひと。大和（そのよばひびとどもを、よびにやりて、親のいふやう）

よばひぶみ ナ。婚文。よばひをもとむるふみ。空穂藤原（いづれのよばひぶみのかへしならん、一度はれのうまきん、度々の中にこそ、一度もしうまさめ）

よばひぼし ナ。婚星。流星。りうせい。よる、ひかりものの、ほしのごとくにてとぶもの。夫木廿九（うらやまし、誰を御空の、よばひぼし、くるればいでて、光あるらん）

よばふ ワ。ヒトリ。四。呼。よぶに同じ。万五（あもところ、里長が聲は、ねやどまで、きたち呼比ぬ）拾遺（聲たかく、三笠山ぞ、よばふなる、天下こそ、たのしかるらめ）

よばふ ワ。カケ。四。婚。私通。つまとせんといざなふ。また、そことなく、あそびていでわふ。大和（式部卿の宮を、桂の御子、せちによばひたまひけれども）

よばん ナ。夜番。よるのばん。よるのまもり。辨内侍日記（権大納言は、夜番にまゐりて、萩戸にて、御あそび侍りしは、ただいまれ、何の時ぞを御たづねあれば）

よひ ナ。宵。よにはなりて、いまだほどへぬほど。允恭紀（わがせこが、來べき宵なり、ささがねの、蜘のおこなひ、こよひしるしも）後撰（あふつきを、何かいひけん、くるれば、よひもいとこそ、さびしかりけれ）

よひ ナ。醉。さけのゑひ。また、ふなやまひ。

よび ナ。預備。かねてそなへおくをいふ。

よひあかつき ナ。宵曉。よひとあかつきと。宇拾二（守殿は、その殿にいでゐる事をびし、これたてこめて、あかう せんといふ事を、あつまりていひあはせけり）

よびいだす ワ。カケ。四。呼出。よびて、ほかにいだす。

よびいづ ワ。カケ。シニ。呼出。よびいだす。源若紫（こちらふしさまるは、侍從の御てし、惟光をよびいでさす）

よびいる ワ。カケ。シニ。呼入。よびて、うちにいる。

よびかけ ナ。呼掛。こゑをかけてよぶをいふ。

よびがね ナ。呼鐘。ひとをよぶにならすかね。

よびぐらひ ナ。酒狂。さけぐらひをいふ。源須磨みて、

よびごゑ ナ。呼聲。よぶこゑ。夫木廿（むこの海は、蜑のよびごゑ、きこゆなり、網のあまさは、網引すらしも）

よびさか ナ。呼坂。地の名。駿河にあり。万廿（東路の、たごの欲姓左賀、越がねて、山にかねんも、宿れなしに）

よびさめ ナ。醉醒。さけのゑひのさむるをいふ。

よびじやう ナ。呼狀。ひとをよぶてがみ。

よびずて ナ。呼捨。ひとをよぶに、ただちに、その名をよびて、様などのうやまひことばをつけぬをいふ。

よびたつ ワ。カケ。シニ。呼立。こゑをたててよぶ。万九（御船子を、あともひたてて、呼立て、御船出なば）

よひづき ナ。宵月。よひにみゆるゆみはりづき。

よびつく ワ。カケ。シニ。呼付。よびよす。枕草六（さぶらひびとをよびつけ、物などいひふるけはひも、いとをかし）

よびつぐ ワ。カケ。ロ。呼次。つぎつぎによびつぐ。

よひと ナ。世人。よのひと。古今（かきくらす、心のやみにまどひにき、ゆめうつつとは、よひとさだめよ）

よひとよ リ。夜一夜。よどほし。よもすがら。土佐（日一日、夜一夜、あそぶやうにてあけにけり）

よびとよむ ワ。ヒトリ。四。呼動。よびごゑをとよむ。古今（抽入れ、宮木ひくらし、足引の、山の山彦、よびとよむ也）

よびとる ワ。カケ。四。呼取。よびよす。竹取（思ひさびつるこちせらひさらへて、翁をよびとりていふやう）

よびな ナ。呼名。通稱。つねによぶな。つねいふとな。

よひね ナ。宵寝。よひよりとくいぬるをいふ。

よひのま ナ。宵間。ひくれて、まだほどなきほど。

よひのみやうじやう ナ。宵之明星。ゆふべにみゆるあかぼし。

よびはなつ ワ。カケ。四。呼放。よびとく。よびいだす。源柏（殿はせうりさるる時も、他方にはなれ居させたまひて、君達むるりなぞ、よびはなちてみさせつりさまふ）

よひま ナ。宵間。よひのま。保實女集（冬川の、波のよひまは、こほれるを、風もておれる、あやかとぞみる）

よひまどひ ナ。宵惑。ゆふまどひ。よひにはやくまどろむをいふ。源朝（宮も、あくびうちしさまひて、よひまどひたし侍れば、ものもえきこえやらずとのさまふほどもなく、いびきとききしらぬ音すれば）

よびむかふ サ。カケ。シニ。呼迎。よびとる。よびよす。

よびやう ナ。餘病。ほかのやまひ。べつのやまひ。

よひやみ ナ。宵闇。よひの、つきのいまだいでぬころ。

よびよす ワ。カケ。シニ。呼寄。よびてきたらしむ。

よびわく ワ。カケ。シニ。呼別。ことところによびいだす。

よひゐる ナ。宵居。よひは、ひさしくおきゐるをいふ。夫木六（このひとを、まさましよりも、さびしきは、ものおもふころの、よひゐなりけり）

よぶ ワ。カケ。四。呼。こゑをかけて、こなたにきたらしむ。後撰（きが宿の、花はなななそ、よぶこどり、よぶおひありて、きみもこなくは）土佐（かみのたちより、よびに、文もてきたり、よばれていたりて）

よぶ ワ。ヒトリ。四。呼。稱。こゑをいだす。となへをなす。

よぶかし サ。ヒ。夜深。ひくれて、ほどもなし。いきざ、よひのほどなり。紫式部日記（まだよぶかきほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、御かうしまゐり）

よぶけ ナ。夜深。よなか。よのふけたるとき。

よぶこ ナ。呼子。よぶこどりに同じ。

よぶこどり ナ。呼子鳥。鳥の名。かささぎならず。或説に、鳩に似て、頭より尾にかけてうすぐろく、腹れ、あかきに、赤ぐみたる所ありて、嘴れ、脇よりもながくしてうすぐろく、脚れ、鳩よりもながくしてうすあかく、聲、物をよぶに似たる鳥あり、それならんともいへり。万十（こたへぬに、なよびとよめそ、喚子鳥、佐保の山邊を、のぼりくだりに）古今（遠近の、たづきもしらぬ、山中に、おぼつかなくも、呼子鳥かな）

よぶこぶえ ナ。呼子笛。ひとをよぶあひづにふくふえ。

よぶね ナ。夜船。よるのりたるふね。千載（湊川、よぶねこぎいづる、追風に、鹿の聲さへ、せきこさるなり）

よぶん ナ。餘分。のこりのぶん、すぎたるぶん。

よぶろ ナ。膕。よぼろに同じ。

よべ ナ。昨夜。きのふのよ。枕草四（誠にうれしき事の、よべ侍りしを、こころもとなく、思ひあかしてなん）

よほど ソ。餘程。つよく。きびしく。むなざしく。

よほよほ ソ。蹌踉。としよりのよろぼふさまにいふ。

よぼろ ナ。膕。ひつかがみ。ひざかしらのうしろ。空穂上（やつこのつかまりなるそのこぶ、髪も、よぼろぐちに）和名（膕和名、與曲脚中也）

よぼろ ナ。丁。にんぷ。にんそく。たみの、えだちにいづるもの。金葉（みつぎもの、もこぶよぼろを、かぞふれば、にまのさとびと、かずそひにけり）武烈紀（見丁）

よぼろくぼ ナ。膕窪。よぼろのくぼみ。仁德紀（膕壁）

よぼろすぢ ナ。膕筋。よぼろにあるおほきなるすぢ。宇拾六（そのうへ、よぼろすぢをたちられれば、にぐべきやうなしと、なくなくいひければ）

よまぜに ソ。隔夜。ひとよまぜる。ひとよおきて。六帖五（なまよさけは、枝さしかはず、篠蘿、よまぜにみえん、君れたのまじ）齋宮女集（二人、夜毎にまゐるべければも、いでさせらむせうらひあり、これはおそせんほどれ、よまぜにまゐりてみやづかへせよ）

よまつり ナ。夜祭。よるするまつり。

よまはり ナ。夜廻。よめぐりに同じ。

よまひごと ナ。獨語。ひとりごとに同じ。和訓栞

よみ ナ。黄泉。みまかりたるひとのゆくところ。万九（とほつくに、黄泉のさかひに、はふつたの、おのがむきむき、あまぐもの、わかれしゆけば）

よみ ナ。讀。いとを、たたみぬくかずにいふことば。

よみ ナ。訓。くん。からもじにつけたるくにことば。

よみあぐ サ。カケ。シニ。讀上。こゑたかくよむ。源少女（こゑげるひとのくしく、神さびてよみあげたるほど）

よみあはせ ナ。讀合。けうがふ。文字のあやまりなどをただすために、二人してよみくらぶるをいふ。

よみうた ナ。詠歌。よみたるうた。つくりたるうた。

よみうた ナ。讀歌。うたをずして、ただよむべく、つくりたるうたをいふとぞ。古事記（此二歌者讀歌也）

よみうり ナ。讀賣。あたらしきめづらしきことをかきつりて、よみあげつつうりありくをいふ。

よみかき ナ。讀書。ふみをよむともじをかくと。

よみかた ナ。讀方。よみてゆくすべ。

よみがへる サ。ヒトリ。四。蘇生。死にたるもの、ふたたびいきいづ。元輔集（さくらちるは、いきてもみゆる、ものならば、よみがへるとて、なほやうとまん）

よみきり ナ。讀切。ぶんのつづきのきるるところ。

よみきりてん ナ。讀切點。よみきりにつくるてん。

よみくせ ナ。讀癖。よみかたのわるきならはし。安齋隨筆

よみくち ナ。讀口。よみてゆくありさま。また、うたよみのなだたるもの。長明無名抄（千載集に、予が歌一首

(れり、させる雨代にもあらず、よみぢにもあらず)
よみびゐ　ナ。闇琴。よみあそぶこと。
よみじかし　サ。ヒ。夜短。よのあくることとやし。
よみす　ワ。カ。カ。嘉。よしとす。よしとおもふ。
よみせ　ナ。夜見世。よる、みせをいだしおるところ。
よみたむ　ワ。ヒトリ。シ二。讀溜。あまたよむ。ひとごとにはよむ。今物語(満坐、感歎して、この歌よみさめて、主も、歌美の餘に、國の所ひとつ、やがて賜ぜさりけり)
よみぢ　ナ。夜路。よるゆくみち。万十(岩根ふみ、夜道ゆきじと、思へども、妹によりては、忍びかねつも)
よみぢ　ナ。黄泉。よみのみち。みまかりさるひとのゆくみち。宗祇問答(たゞ、宰相をなん思ひ侍るに、よみぢも、やすくも趣るまじく、此の所のせきとなる心地し)
よみつく　ワ。ヒトリ。四。詠付。よみなる。つねによみてあり。源藤玉(よろづのさうし、うたまくら、よくあない知り、みつくして、そのうちのことばをとりいづるに、よみつきたるすちこそ、つようはかはらざるべけれ)
よみながす　ワ。カゲ。四。讀流。つぎくによみくだしてゆく。狭衣二(こゝろぼそくうちあげつゝ云々、我身時鳥現滑滞猶明泉などと、心にまかせてよみなだしさまへるに)
よみならふ　ワ。カゲ。四。讀習。よむことにならふ。源橋姫(法文などをよみならひたまへ、たふとびきこえて)
よみのくに　ナ。黄泉。よみといふに同じ。
よみびと　ナ。詠人。そのうたをよみさるひと。源蓬生(古歌とても、をかしき樣にえりいで、題をも、よみびとをもあらはし、心得さるこそ見所もありけれ)

よみひらく　ワ。カゲ。四。讀開。よみてさとる。よみてあきらめゆく。百業和歌(あくらしき、書をみるにも、くらぶらじ、よみひらきぬる、やまとことのは)
よみほん　ナ。讀本。よみならふにもちふるふみもの。
よみもの　ナ。讀物。よむべきもの。ふみ。きよじやく。
よみや　ナ。夜宮。よまつり。まさ、まつりをするまへのよ。
よみやう　ナ。讀樣。よむありさま。十訓二(百首よみやういならひさるをおほせごとありけれど)
よむ　ワ。カゲ。四。讀。算。くちにとなへて、こゝろにさとる。また、かずをかぞふ。万八十(いでて來し、つきひ余美つゝ、なげくらん、こゝろなきさよ)古今序(せみこひ、よむたるもつきじ、ありそうみの、はまのまさごは、よみつくすとも)源若生(歌うちよみ、おこなひなどいふ事は、いとむつかしくしたまひて)
よむ　ワ。カゲ。四。詠。うたをつくる。土佐(まろ、この歌のかへしせんといふ、おどろきて、いとおかしき事かな、よみてんや、よみつべくは、はやいへかし、といふ)源桐壺(亭子院のかゝせたまひて、伊勢、貫之によませたまへるやまとことのはをも、もろこしのうたをも)
よんどころなし　サ。ヒ。無據。やむことをえず。
よんべ　ナ。昨夜。ようべ。きのふのよ。土佐(よんべのうなゐもがな、銭こはん、そらごとをして、おぎのりせざをして、銭ももてこず、おのれさへこず)

よめ　ナ。娘。嫁。むすこのめ。むすこのつまとなりさるをんな。再宴歌(さとつみな、いできましけん、心こそ、やまとなでしこの、与咲とこそなれ)枕草四(ありがたきもの云々、志うとめにおもはるゝよめのきみ)和名(婦、爾雅云、子之妻爲婦 和名 與女 又云夫之婦也)
よめ　ナ。夜目。よる、ものをみるめ。万十(鶯の、春になるらし、春日山、霞たなびく、夜目にみれども)住吉(簀子によりかゝりさる姿、よめにも著くみえければ)
よめ　ナ。夜目。獸の名。ねずみをいふ。關西にて、
よめあつかひ　ナ。娵扱。志うとの、よめをもてなしあつかふをいふ。嫁花月(御よめあつかひのほど、いとおかしくなんみえさせたまひける)
よめい　ナ。餘命。あまりのいのち。のこりのよはひ。
よめいり　ナ。娵入。嫁入。よめとなりてゆくをいふ。
よめいりだうぐ　ナ。娵入道具。よめいりのだうぐ。
よめいる　ワ。ヒトリ。四。娵入。嫁入。よめとなりてゆく。
よめがさら　ナ。娵皿。貝の名。かさち、すこし、皿のごとくにて、おほきなるは、一寸ばかりなるもあり。この貝、そのたぐひ種々ありて、形も、すこしづゝかはれり。
よめがはぎ　ナ。娵萩。野菜の名。よめなに同じ。
よめがえし　ナ。草の名。そこねうつぎをいふ。甲斐にて、
よめがひ　ナ。娵貝。貝の名。あさひがひに同じ。
よめぐり　ナ。夜巡。いましめのために、よる、そこここをみめぐるをいふ。空穂蔵開(馬にのりて來つゝ、ゆづるうちならしつゝ、よめぐりするやうになん侍る)

よめご　ナ。娵御。よめをよぶとなへ。
よめとり　ナ。娵取。よめをむかふるをいふ。
よめな　ナ。娵菜。鶏兒腸草。野菜の名。春のはじめ、宿根よりもゆ。葉の狀、菊に似てうすくしてながし。秋のころ、菊に似さる花の、むらさきをふくみさる一重の花さく。帶に、若菜をつみて、くひものにするものなり。
よめのがふし　ナ。娵合子。國栗の様をいふ。上野にて、
よめのごき　ナ。娵御器。蒡草の名。ひめうりに同じ。
よめのさら　ナ。娵皿。草の名。いたかがみに同じ。
よめり　ナ。娵入。嫁入。よめいりに同じ。
よも　ナ。四方。四面。よつのおも。ひがしとにしとみなみときたとのむき。千載(ほとゝぎす、きゝもさられぬ、ひとこゑに、よものそらをも、ながめつるかな)
よも　ソ。何としても。とても。千載(誰もよも、まださきそめじ、梅の、君にのみこそ、音しむじむれ)字拾二(今は、にぐともよもにがさじとおぼえければ)
よもぎ　ナ。蓬。艾。草の名。茎はすくのびて、葉は、四方さびろがる。また、葉はいつゝにさされて、ひとつぐに尖あり。すべて、莖も、葉も、あをくしらむみさる草にて、秋のころ、葉のあそびより、穂をいだして、ちひさき花さく。この草、きそめて、そのたぐひおほし。万十八(あやめぐさ、余母疑かづらき、さかみづき、あそびなぐれど、泉川、ゆきげまさりて)和名(蓬、一名、莪 和名 與毛木)

よもぎ　ナ。蓬。襲の色目の名。表は薄萌黄に、莖のこき萌黄なるもの。又、裏は白に、或は青なりともいへり。
よもぎがしま　ナ。蓬島。ほうらい。せんにんのすむところ。夫木三十(いにしへも、名をのみきゝし、わたつみの、よもぎがしまを、たづねてしかな)
よもぎがその　ナ。蓬園。よもぎなどのおひしげりさるところ。堀川百首(さみだれは、草くちにけり、たがやどの、よもぎがそのに、ほさるとびら)
よもぎがそま　ナ。蓬杣。よもぎなどのおひしげりさるところ。後拾(なけやなけ、よもぎがそまの、きりぎりす、すぎゆく秋は、げにぞかなしき)
よもぎがにゐ　ナ。蓬庭。よもぎなどのおひしげりさるにわ。續千(たづねてぞ、とすれぬつきの、かげぞやどる、よもぎがにはの、つゆのふかきを)
よもぎがねや　ナ。蓬閨。よもぎなどのおひしげりて、あれさるやどのねや。夫木二十(つゆふかき、よもぎがねやの、ひまとぢて、ふるきまくらに、秋風ぞふく)
よもぎがほら　ナ。蓬洞。おりゐのみかど。續古(世をてらす、蓬が洞の、月影は、あきつしまねの、外もくもらじ)
よもぎがやど　ナ。蓬宿。よもぎなどのおひしげりてあれさるやど。堀川次郎(ひとりすむ、よもぎがやどに、秋來ては、きりぐくすこそ、ともはなきけれ)
よもぎのあと　ナ。艾跡。きうのあと。隆信集(この女も、ひるくふよしをきゝて、いひやりし、朝露の、ひる間はいつぞ、秋風に、よもぎのあとも、思ひみされぬ)

よもぎのかき　ナ。蓬垣。よもぎなどのおひしげりてあれさるかき。夫木一(あげうりし、よもぎのかきの、へだてには、さむらぬものは、冬にぞありける)
よもぎのかど　ナ。蓬門。よもぎなどのおひしげりてあれさるかど。夫木二十六(霜むすぶ、よもぎのかどの、あさとではさえてさしいる、ありあけの月)
よもぎのかみ　ナ。蓬髪。おどろのかみに同じ。
よもぎのしま　ナ。蓬島。ほうらい。せんにんのすむところ。夫木二十(まことにや、よもぎのしまは、かよふらん、つなはのるでふ、ひとはとにぞや)
よもぎのせど　ナ。蓬戸。よもぎなどのおひしげりあさりさるところ。夫木二十六(身はつゆの、風のかよひぢ、たづねすべ、よもぎのせきな、いかですゑまし)
よもぎのまがき　ナ。蓬籬。よもぎなどのおひしげりてあれさるまがき。夫木一(かこちねど、まがきのよもぎ、夏くれば、あさらのやどを、おひかくしつゝ)
よもぎのまど　ナ。蓬窓。よもぎなどのおひしげりてあれさるやど。夫木一(昔にして、いそにたどる、あられこそ、よもぎのまどの、ともとなりけれ)
よもぎのまろね　ナ。蓬丸寢。よもぎのやどのまろね。源東屋(かゝる蓬のまろねにならひさまさぬ心地は)
よもぎのやど　ナ。蓬宿。よもぎなどのおひしげりてあれ

さるやど。後拾（ことのはは、つけてもなどかとはざらん、よもぎのやども、わかぬあらしを）

よもぎふ ナ。蓬生。よもぎなどのおひしげりたるところ。源桐壺（かゝる御使の、よもぎふの露わけいりたまふにつけても、はづかしうなんとて）

よもぎふあらし ナ。蓬生風。よもぎふのうへをふきたるあらし。夫木九十（誰ゝ来て、みるべきものと、などやどの、よもぎふあらし、ふきはらふらん）

よもぎもち ナ。蓬餅。よもぎをつきまぜたるもち。

よもすがら ツ。終夜。よどほし。よひよりあかつきまで。千載（よもすがら、ものおもふころは、あけやらで、ねやのひまさへ、つれなかりけり）欽明紀（通夜）

よもつくに ナ。黄泉。よみといふに同じ。

よものうみ ナ。四方海。くにのめぐりのうみ。あめのしたといふに同じ。夫木廿（四方の海も、けぶりにきそふ、あまびさし、ひさしき千代は、きみぞさかえん）

よもや ツ。何としても。とても。まさかに。

よもやま チ。四方山。四面八面。よものやま。よもやも。堀川百首（よもやまの、冬のけしきは、なるまゝに、小野のすみがま、煙たちます）神楽歌（与毛也万の、まもりたのむ、梓弓、かみのたからは、今しつるかな）

よもやも ナ。四面八面。そのめぐりすべてをいふ。また、いづこものこるくまなきをいふ。

よやく ナ。豫約。かねてやくそくするをいふ。

よやな ナゲキ。歌をうたふをりにいふことば。

よよ ナ。代々。あまたのこ。新千（よゝのあとを、わすれずてらせ、みづぐきの、岡のあさぢの、秋の夜の月）

よよ ナ。夜々。あまたのよる。千載（やすらひは、ぬる夜もなくて、わかれぬる、よゝの手枕、いつかわすれん）

よよと ツ。人のなくこゑ。大和（返辞もせで、よゝとぞなきける）源横笛（いらへもせで、よゝとなく）

よよど ツ。涎のたるさま。源横笛（たゞくも、よゝとくひぬらしたまへれば）徒然草（まづ一度せさせよとて、酒をいださせれば、さしうけさしうけ、よゝとのみぬ）

よよのあと ナ。代々跡。よゝにおこりしことのあと。また、よゝにおこりしことのあとをかきたるふみ。

よよむ ワ。ヒトリ。四。老人の、歯のぬけたるは、ものいふくちつきをいふぞ。万四（もゝとせに、老舌いでて、與余牟とも、われはいとはじ、こひはますとも）

よらそる ワ。ヒトリ。シニ。縒りたるやうになる。夫木六（藤波の、よらそれぬれば、紫の、まきぞめきたる、松かとぞみる）狭衣一（組どものよらそれたるを、ひきかくひたる、二十人許たちさまよひつくろひさぶらふ）

より ナ。縒。いとなどをひねりてあはするをいふ。

より ナ。度。回。たび。夫木十（とふ人も、なき山里の、村時雨、ふるよりみより、数ゝすくな）欽明紀（三度）

より ナ。寄。綺羅。かきなどのどくのかたまり。

より テ。從。於。因。から。に。にて。を。おこりをいひ、くらぶなどいふなどにもちふることば。千載（音にのみ、きゝしれとの、おなならで、名よりもたかき、布引の滝）古今（雨により、田蓑の島を、けふゆけど、名はかくれぬ、ものにぞありける）万廿（ひとづまの、馬よりゆくに、おのづまの、かち徒ゆけば、みるごとに、音のみしなかゆ）土佐（水底の、月の上より、こぐ船の、竿にさはるは、桂なるべし）空穂蔵開（いとゆゝしうして、たの彼陰の家の前よりまうでさまふ）

よりあぐ ワ。カナ。シニ。縒上。ちからをいれてたくなす。長明無名抄（くびすぢをいらゝげし、聲をよりあげたるさまなど、いみじうこゝろづきなし）

よりあつまる ワ。ヒトリ。四。寄集。こゝかしこよりあつまる。

よりあひ ナ。寄合。たがひによりていであふをいふ。

よりいと ナ。縒糸。よりて、ひとつにあはせたるいと。

よりうど ナ。寄人。和歌所、記録所、侍所などの主典。また、武家の政所、問注所、侍所などの役人の、政務に預るもの。隆信集（和歌所の寄人に參りて、吉書そうすとて）

よりかかる ワ。ヒトリ。四。凭。よるといふに同じ。源紅葉賀（御ひざによりかゝりてねいりたまひぬれば）

よりかく ワ。カナ。シニ。縒掛。よりてかく。古今（青柳の、絲よりかくる、春しもぞ、亂れて花の、ほころびにける）

よりがら ナ。酒癖。ものつきに同じ。

よりき ナ。與力。ちからをそふるをいふ。また、奉行にしたがひて、事をとるもの。空穂藤原（御あくし、みそなら

寄りさまふれ、佛、神、おのゝくふりきしさまそん）

よりくづ ナ。撰屑。えりくづ。えらびたるあとのくづ。

よりけ ナ。西北風。にしきたのかぜをいふ。北國にて、

よりて ナ。澱子。ものつきに同じ。

よりこ ナ。綿繭。おめをいふ。安房、上總、常陸にて。

よりすがる ワ。ヒトリ。四。寄縋。よりてすがる。

よりつく ワ。ヒトリ。四。寄付。よりてつく。ちかづく。

よりづな ナ。縒綱。よりたるつな。夫木卅（浮橋は、竹のよりづな、うちそへて、小舟ならぶる、ふじの河波）

よりて ツナギ。仍。それによりて。千載序（傳教大師は、わがたつ杣のことむをのたまひ、よりて、世々の帝も、この道をすてさせたまはずや）新古序（きゝもらし、みおよむなどころもあるべし、よりて、古今、後撰の跡をおらさめず、五人のともがらをさだめて）

よりどころ ナ。據。もととするところ。たのみとするところ。枕草二（子どものこちまも、親のひるねしたるに、よりどころなく、すさまじくぞあるらし）

よりどり ナ。擇取。よきをえらびてとるをいふ。

よりぬき ナ。撰拔。よきをえらびいだしたるをいふ。

よりは ナ。綴羽。あめなどにぬれて、つばさのふりさるごとくなれるをいふ。夫木十（かへるさの、袖ぬらすらし、かさゝぎの、よりはにかゝる、天の河波）

よりびと ナ。寄人。よりうどに同じ。夫木卅（なしつぼの、むらじのあとは、たちかへり、わかのうらにぞ、なみのよりびと）十訓十（和歌所の寄人にて候ふべきよしを、後鳥羽院より仰せられけれど）

よりふす ワ。ヒトリ。四。寄臥。よりてふす。新六（漁火の、消のほは、よりふせれ、わが影をさ、みる由もなし）

よりぼり ナ。夜着。よぎをいふ。陸奥、豊後などにて。

よりまし ナ。憑子。ものつきをいふ。豊後などにて、

よりよく ナ。餘力。もちひておまれるちから。

よりより ツ。時々。をりをり。ときどき。夫木廿（妹がくる、いとねの里の、たまき山、よりくこゝは、やどり給ふ哉）古今序（まさ、すぐれたる人も、呉竹の代々にきこえ、片糸のよりよりにたえずぞありける）

よる ナ。夜。あまつひの、そらになきあひだ。ひぐれよりあかつきまでのあひだ。万五（うつゝには、あふ由もなし、ぬばたまの、用流の夢にを、つぎてみえこそ）

よる ワ。ヒトリ。四。依。頼。寄。つく。ちかくなる。たのみにおもふ。万二（秋の田の、ほむけのよれる、かたよりに、君に因りなゝ、こちたかりとも）源夕顔（よりてこそ、それかとも見め、たそかれに、ほのぐみつる、花の夕顔）

よる ワ。ヒトリ。四。凭。憑。よりつく。おしかゝる。源帚木（人々もらふ、あなかまとて、けふそくによりおはす）

よる ワ。ヒトリ。四。縒。よるに同じ。古今（蟬羽の、ひとへにうすき、夏衣、なれはよりなん、ものにやはあらぬ）

よる ワ。カケ。四。縒。いとなどをひねりてひとつにあはす。万十（かたよりに、絲をぞわがよる、わがせこが、花橘を、ぬかんと思ひて）古今（なくとおもふや、こゝろも絲は、よられたれ、ちる花ごとに、ぬきてとゞめん）

よる ワ。カケ。四。揀擇。える。よきをぬきとる。

よる ワ。ヒトリ。四。因。ちなむ。もとゝなる。

よるのおとど ナ。夜殿。よるのおましどころ。よるはねさせたまふところ。宇拾六（御格子もいまだあげぬに、この女よるのおとゞよりいでてたてるをみれば）

よるのおまし ナ。夜御座。よるのおましどころ。伊勢（今宵の、たゞはさぶらひなんと申したまふや、御子よろこびたまひて、よるのおましのまうけせさせたまふ）

よるのころも ナ。夜衣。よるきるころも。よる、ふすときさるところも。古今（いとせめて、こひしきときは、ぬばたまの、よるのころもを、かへしてぞぬる）

よるのとの ナ。夜殿。獸の名。きつねをいふ。但し、關西などにて。

よるのにしき チ。夜錦。よるきるにしき。みるひともなくて、そのかひなきをいふたとへ。古今（みる人も、なくてちりぬる、奥山の、紅葉は夜の、錦なりけり）

よるのひと ナ。夜人。獸の名。きつねをいふ。但し、西國にて、日くれてのちいふことばなり。

よるのもの ナ。夜物。ふすまなどの、よるふすときさるものの。伊勢（ともだち、これをみて、いとあはれとおもひて、よるのものまでおくりて）

よるのもの ナ。夜物。獸の名。ねずみをいふ。上野にて、

よるのをすくに ナ。夜之食國。つきよみに同じ。古事記一（汝命者所知夜之食國矣事依也）

よるぞすがらに ソ。終夜。よもすがら。古今（戀死と、するわざならし、射干玉の、夜はすがらに、夢はみえつゝ）

よるひかるたま ナ。夜光玉。たまの、よる、ひかりをはなつもの。夫木六（よるひかる、たまをながすと、みえつるは、何くぞりゆく、ほたるなりけり）

よるひる ナ。夜晝。よるとひると。万二（やそとらが、夜晝といはず、ゆく道を、我はことぐく、宮路とぞする）

よるべ ナ。寄方。たより。よすが。古今（よるべなみ、身をこそとほく、へだてつれ、心は君は、よりはしむのを）

よるべのみづ ナ。寄方水。神祇のまへにおきさる瓶に、雨水のたまれるをいふとぞ。夫木卅（月影は、さえけらしな、神垣や、よるべの水は、つらゝゐるまで）

よるよなか ナ。夜中。よるのよなか。榮花峰月（御くどもの、度ごとは、よるよなかもいはずたてまつらせさせ給ふ）

よるよる ソ。夜々。よごとに。月清集（露やどす、ふるぎを庭の、あるじまで、よるよる虫の、おとづれぞする）

よるゐ ナ。餘類。なごりの、いまだのこりさるもの。

よるをひるに ソ。夜も、ひるのごとくをしつゝ。竹取（男共の中にまじりて、夜を晝になしてとらしめ給ふ）榮花さま（調度ども、夜を晝に（いそがせ給ふ）

よろく ナ。騒。かさりをいふ。越奥、南部にて。

よろける ワ。カシ。蹣跚。よろめくに同じ。

よろこだし サ。プ。可喜。よろこぶべくあり。

よろこび ナ。喜悦。こゝろに、こゝろよくおもふをいふ。また、ことほぎをいふ。古今（假にはかうむりたまはれりけれど、よろこびはいひつかずとて）落窪二（ものをたまはせさりしなん、よろこびきこえます）

よろこびごと ナ。喜事。いはひ。ことほぎ。

よろこびなき ナ。喜泣。よろこびはたへずして、なくをいふ。源明石（都の人も、御供の人も、夢の心地して、ゆきあひ、よろこびなきもゆゝしきまで、たちさわぎさり）

よろこぶ ワ。ヒトリ。カナ。四。喜悦。こゝろに、こゝろよくおもふ。夫木卅（よろこぶも、なげくもおなじ、すぐる世を、などかくいとふ、こゝろなるらん）伊勢（かの女、大和國の方をみやりて云々、からうじて、大和人こんといへり、よろこびて待つに、たびくすぎぬれど）

よろこぼし サ。プ。可喜。よろこばし。済寧紀（悦哉）

よろこぼふ サ。カチ。ロ。喜悦。よろこぶに同じ。伊勢（男、京へなんまゐるとて、くりそらの、あねその松の、人ならば、都のつとに、いざといはましをといへりければ、よろこぼひて、思ひけらしとぞいひをりける）

よろし サ。プ。宜。可。よし。とゝのひてよし。かなひてよし。ことはさろくもあらず。よのつねにてあり。この語は、今は、よろしいをそへていふ。雄略紀（こもりくの、初瀬の山は、いでさちの、與盛斯企やま、はしりでの、與盛斯企やまの）宇拾八（よろしき罪ならばこそ

それたすくべき方もかまへめ、これは、心もおよび、口にてものいふべき様もなき事なれば如何せん）

よろしい サ。宜。可。よろしを見るべし。

よろしなべ ソ。宜並。よろしくならびて。つぎくに。万卅（あれこそ、神の御代より、與呂之奈倍、この橘を、ときじくの、かくのこのみと、なづけけらしも）

よろしめ ナ。宜女。よきたんな。雄略紀（春日の、かすがの國に、くはしめを、ありときゝて、まきさく、檜の板戸を、推ひらき、我いりまし）

よろづ ナ。針魚。さよりに同じ。和名（針魚 和名沼羽利、一云與呂豆）

よろづ ナ。萬。千を十あはせさるかず。また、かずのあまさなるをいふ。新千（萬年、千年なるらふ、緊すなり、神もひさしく、世をまもるらし）空穂上（いとま申して、よろづをすてて、ふづのにこもり侍り）

よろづとせ ナ。萬歳。まんねん。かぎりもなくひさしきをいふ。新千（よろづとせ、わがせをうちらふ、これすなり、かみもひさしく、世をまもるらし）

よろづに ソ。萬。さまぐに。宇拾（その後、そのかねとりの男は、いづちともなくうせにけり、よろづにたづねけれども、行方もしらずやみにけり）

よろづよ ナ。萬代。かぎりもなくひさしきよ。万二（高光る、日のみこの、萬代に、國しらさまし、島宮はも）

よろひ ナ。具。ひとそろひにそろふものをいふ。されば、ひとよろひは、そのひとつ。源若菜（らでんのみづし、ふさ

よろひは、御ころもをそよつすゑて）

よろひ ナ。鎧。甲。たゝかひのとき、身のかさめに著るもの。革にて造り、或は、金にて造りさるものなどあり。和名（鎧 和名與路比 釋名云、甲者似物之有鱗甲也）

よろひいし ナ。甲石。石の名。ひむつぼに同じ。

よろひがに ナ。甲蟹。蟹の一種。あさひがにに同じ。

よろひぐさ ナ。甲草。白芷。草の名。葉のさま、花のさまなど、すべて、川芎に似て、川芎よりおほきなり。たゞ、その葉なる所は、葉の色、川芎よりもうすくして、香氣なきのみなり。和名（白芷 一名、白芝 和名、加佐毛知、一云與呂比久佐）

よろひどほし ナ。鎧通。よろひをつきとほすちひさきかたな。短刀にて、大小の刀のほかにさして、敵をくみうちのときの用にもちひしをいふ。

よろひびつ ナ。鎧櫃。よろひをおさめおくひつ。

よろひむし ナ。甲蟲。介虫。蟹、龜、海老などのたぐひ、すべて、せなどに、かさき皮ある虫をいふとなへ。

よろひむしや ナ。鎧武者。よろひをきさるむしや。

よろふ ヒ。ヒトリ。四。具。そろふ。とゝのふ。よろひをきる。万一（大和には、村山あれど、取與呂布、天のかぐやま、のぼりたち、國見をすれば）空穂國譲（女御の君、をしきの、すゞみをみさまへば、例の鶴二羽、よろよろひてあり、松をひろひ、左大臣の手にてかきさまへり）

よろぼはし サ。プ。蹣跚。ほとくよろぼひそんとしてあり。萩玉（手は、なかなちてよろぼひしけれど）

よろぼふ ワ。ヒトリ。四。蹣跚。よろくす。ほとくたふれんとす。仁徳紀（よろまじき、河のくまぐ、與呂朋臂ゆくかも）落窪一（ひと忍びていでまほり、つゝやみにて、よろぼふく、道のあしきを、よろぼひおもするほどに）

よろめく ソ。ヒトリ。ロ。蹣跚。よろぼふ。よろくす。

よろよろ ソ。蹣跚。おなさにゆき、こなさにゆき。あしのたちどの、さだまらずして、たしかならぬをいふ。

よろん ナ。輿論。よのなかのあまさのひとのろん。

よわい サ。プ。弱。よわしを見るべし。

よわかた ナ。弱肩。よわくこきかた。顯輔式（屈部能弱肩尓、太多須支取掛氏持由斂彼此仕奉弊帛乎）

よわげ ナ。弱氣。よわきこゝろ。よわきけしき。

よわげさ ナ。弱氣。よわげなるさま。枕草卄（もやなそつけて、のどかにすげさるもののよわげさよ、たえなば、何にかならん、ふさおちいりなんを）

よわごし ナ。弱腰。おびしむりに同じ。

よわし サ。ヒ。弱。ちからなし。たゆみやすし。もろくあり。古今（尊きものゝたて、つゆの命こそ、よわからし、やまのにしきの、おればかつちる）夾穂俊（父やまひづきぬ、父、よわくおぼゆるときに、むすめをよびて）

よわたし ナ。終夜。よもすがら。万十（めづらしくなくほとゝぎす、あやめぐさ、たまぬくまでに、ひるくらし、夜和多之きけど、きくごとに、こゝろうごきて）

よわたらひ ナ。世渡。よわたり。撰集抄一（よわたらひのともしく侍りしまゝに、かくまかりなりさりき）

よわたり ナ。世渡。とせい。よをすぐしてゆくをいふ。

よわたる ワ。ヒトリ。四。夜渡。よるをわたる。よるわたる。万三（子等が家路、やゝまどほきを、ぬばたまの、夜渡月に、きほひあへんかも）夫木廿（うちわびて、千鳥なくなり、稲川、よわたる風の、身にやしむらん）

よわみ ナ。弱目。よわめに同じ。

よわみそ ナ。弱味噌。おにみそに同じ。

よわむ ワ。カチ。シニ。弱。よわくなす。

よわめ ナ。弱目。よわりさるとき。源夕霧（もののけなども、かゝるよわめに、ところうるものなりければ）

よわよわし サ。プ。弱々。きはめてよわし。

よわりはつ ワ。ヒトリ。シニ。弱果。よわくなりはつ。

よわりめ ナ。弱目。よわめ。よわりさるとき。

よわる ワ。ヒトリ。四。弱。よわくなる。夫木十（秋の霜も、をれふしにける、白露は、やどりよわるか、有明の月）

よゐ ナ。夜居。よもすがらおきゐるをいふ。源柏木（夜居の加持の僧などのこゝちすれど、まだ、げんつくべきもの、おこなひにもあらねばかさきらいさけれど）

よゐのそう ナ。夜居僧。よゐをするそう。枕草六（むつかしきもの、男のこゝろのうち、いとさとき夜居の僧）

よゐこめて ソ。夜籠。よごもりならしめて。きさよもあ

けぬ。後拾（よをこめて、とりのそらねは、はかるとも、世にあふさかの、せきはゆるさじ）

よをつつむ ワ。ヒトツ。四。世をさくる。源氏（あながちに世をつつむも、さすがに[illegible]）

よをとほす ワ。ヒトツ。四。徹夜。よひよりあかつきにいたる。枕草七（夜をとほして、普賢講などおこなひあかさん）

よをひにつぐ ツ。夜も、ひるのさまにしつゝ。

よをへて ツ。世をへて。新古（まろしなき、けぶりを雲に、まがへつゝ、世をへて不二の、山ともえなん）

よをり ナ。節折。六月と十二月との大祓のときある事にて、竹をもて、主上の御長などの寸法をとらるゝを、下文を見るべし。公事根源（節折云々、上部、竹の節を、庭中の席上におく、節折の命婦、竹をもてまゐりて、御長よりはじめて、所々の寸法をとりて、宮主に[illegible]つとむるなり）新古（水無月の、けふくれはての、よをりこそ、君が千年の、数にそへける）枕草八（えせもののところうるをりの事、正月のおほね、行幸のをりのひめまうちぎみ、みなづき、しはすの晦のよをりのくらうど）

よをりのくらうど ナ。節折蔵人。よをりのみやうぶをいふ。枕草八（えせもののところうるをりの事云々、六月十二月のつごもりのよをりのくらうど）

よをりのみやうぶ ナ。節折命婦。よをりにさぶらふみやうぶ。よをりを見るべし。年中行事歌合（節折の命婦と

いふものあり、[illegible]、二度たゞ[illegible]や、これ、御代よりさだまりぬ）

よをのがる ワ。ヒトツ。四。遁世。よをすつる。よのひとをすつる。元輔集（[illegible]）

ら

ら は、らりるれろの行の、はじめのこゑなり。されば、りるれろの、おやこゑとか、さだめらるゝもじなり。

ら ナ。羅。うすものに同じ。類聚名義抄（うすもの、ら、[illegible]おなじからのくみ）和名（[illegible]）

ら ナ。[illegible]。[illegible]のかひをいふ。

ら ナ。等。など。ども。拾遺（[illegible]、田舎しはべりける[illegible]）

ら ナ。[illegible]。[illegible]

らい ナ。雷。いかづち。かみなり。

らい ナ。[illegible]。島の名。[illegible]

らいう ナ。雷雨。いかづちなりて、あめふるをいふ。

らいかやく ソ。来客。[illegible]

らいくわ ナ。雷火。かみなりおちてやくるをいふ。

らいげつ ナ。来月。こんげつ。このつきのつぎのつき。新花山（この月は、[illegible]の事あれば、[illegible]）

らいさうせ ソ。[illegible]。枕草八（[illegible]）

らいし ナ。[illegible]。[illegible]

らいし ナ。礼紙。[illegible]。下文を見るべし。貞丈雑記（[illegible]）

らいしう ナ。[illegible]。[illegible]

らいしゆん ナ。来春。こんしゆん。このはるのつぎのはる。

らいせ ナ。来世。こんよ。[illegible]

らいだう ナ。礼堂。[illegible]

ろ。[illegible]（[illegible]）

らいてう ナ。雷鳥。鳥の名。らいのとりに同じ。

らいてう ナ。来朝。とつくにのひとの、そのくにのつかひなどの、みかどにまゐるをいふ。

らいどう ナ。雷同。なにのおもひもなくて、ひとのいひしにしたがふをいふ。

らいねん ナ。来年。こんねん。ことしのつぎのとし。[illegible]（来年こそは、[illegible]）

らいのとり ナ。雷鳥。鳥の名。越前の白山にて、[illegible]

らいはい ナ。礼拝。[illegible]をいふ。[illegible]（[illegible]）宇治拾（[illegible]）

らいはいだう ナ。礼拝堂。らいだうに同じ。

らいばん ナ。礼盤。[illegible]をいふ。[illegible]

らいねん ナ。来年。こんねん。このとしのつぎのとし。

らいびやう ナ。癩病。病の名。[illegible]

らいふ ナ。[illegible]。[illegible]

[illegible]

らいめい ナ。雷鳴。[illegible]に同じ。中務内侍日記（[illegible]）

らいらく ナ。[illegible]。[illegible]に同じ。

らいもん ナ。[illegible]。[illegible]

らいらく ナ。磊落。[illegible]

らいりん ナ。来臨。[illegible]

らう ナ。[illegible]。[illegible]に同じ。五代帝王物語（中門の[illegible]）

らう ナ。牢。ひとや。[illegible]

らう ナ。[illegible]。[illegible]

らう ナ。[illegible]。[illegible]（[illegible]）

らう ナ。[illegible]。[illegible]

らうあん ナ。[illegible]。[illegible]に同じ。[illegible]（天下の[illegible]）

[illegible]

らうえい ナ。朗詠。詩歌などの[illegible]。十訓（[illegible]）

らうえう ナ。[illegible]。[illegible]

らうか ナ。廊下。[illegible]

らうかい ナ。[illegible]。[illegible]

らうがはし ナ。[illegible]。[illegible]（[illegible]）

らうかん ナ。[illegible]。[illegible]に同じ。

らうがん ナ。老眼。[illegible]

らうくん ナ。[illegible]。[illegible]

らうけ ナ。[illegible]。[illegible]（[illegible]）

らうご ナ。老後。としおいてののち。[illegible]（[illegible]）

らうこう ナ。老功。としおいたるひとの[illegible]。

らうさいでら ナ。[illegible]の名。[illegible]

らうし ナ。[illegible]。[illegible]

らうじん ナ。老人。おいびと。としよりたるひと。

らうしや ナ牢舎。ひとや。また、ひとやにいるをいふ。
らうしやう ナ勞症。らうがい。
らうじゆう ナ郎従。いへのこ。らうどう。
らうす ワ、聾す。ほねをる。
らうず ワ、弄す。もてあそぶ。なぐさみものとす。源氏
らうする ナ老する。としよりて、おとろへるをいふ。
らうせう ナ老少。としよりとこども。
らうぜき ナ狼藉。らんざつ。また、もののみだれたるさまあるをいふ。平家(何者ぞ、らうぜきなり、そくびつけて押しやれ)
らうぜきもの ナ狼藉者。らうぜきをするもの。
らうそう ナ老僧。としおいたるそう。
らうたがる ワ、可愛がる。らうたくおもふ。かわゆがる。源氏夕顔(三位の君のらうたがりたまひて)
らうたし 可愛し。かわゆし。あいらし。あはれなり。源氏空蝉(とにかくに、あはれと思ひし人の、なりけん方も…)
らうぢゆう ナ老中。武家の役の名。としよりと同じ。江戸幕府の職名として、天下の政務をつかさどりたるもの。
らうぢよ ナ老女。みやづかへのをんなのかしら。
らうどう ナ郎等。さむらひ。但し、徳家にての呼なり。

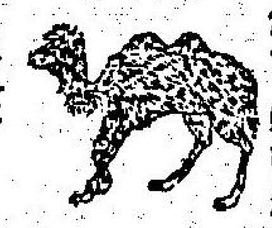
らうもう ナ老耄。もうろく。ほれぼれ。
らうぞく ナ郎族。
らうだん ナ浪人。らうにんと同じ。
らうにやく ナ老若。としよりとわかもの。
らうねん ナ老年。としより。おいたる年。
らうば ナ老婆。おうな。おいたるをんな。
らうばい ナ狼狽。あわてふためくをいふ。
らうひ ナ老病。おいのやまひ。
らうぼ ナ老母。としよりたるはは。
らうや ナ牢屋。ひとや。
らうやく ナ老若。
らうやぶり ナ牢破。らうをやぶりてにぐるをいふ。
らうらう ナ朗朗。こゑのさわやかなるをいふ。
らうらうし 労労し。ものなれてあり。紫式部日記

らうれん ナ老練。としおいたるひとのねんごろ。
らうろう ナ牢籠。
らうろうのなさけ
らうなり ナ老成。
らかい ナ羅蓋。うすものにて作りたるきぬがさ。竹取
らかん ナ羅漢。仏の名。あらかんと同じ。
らかん ナ羅漢。
らくえふ ナ落葉。おちば。
らくがき ナ落書。おとしぶみのたぐひ。
らくがん ナ落雁。
らくいんきよ ナ楽隠居。
らく ナ楽。こころのやすくしてたのしきをいふ。
らく ナ酪。
らくき ナ落暉。

らくせい ナ落成。できあがり。なりとどのひ。
らくしよく ナ落飾。かざりおとすこと。
らくしよ ナ落書。おとしぶみ。
らくしゆ ナ落首。
らくしゆ ナ落手。てにいることをいふ。
らくせう ナ落掌。おちさるの、せめられてやぶるるをいふ。
らくさ ナ落差。
らくてい ナ落胆。
らくだ ナ落札。おちふだに同じ。
らくせい ナ落成。おこしてなしに同じ。
らくさい ナ落外。みやこのほか。みやこのめぐり。
らくくわしやう ナ落花生。草の名。
らくくわ ナ落花。ちりさるはな。
らくがん ナ落雁。
らくしやう ナ落城。

らくだ ナ駱駝。獣の名。
らくたのまけ
らくだい ナ落第。
らくたん ナ落胆。ちからをおとすをいふ。
らくちやく ナ落着。ものごとのおちつくをいふ。
らくちゆう ナ洛中。みやこのうち。
らくにち ナ落日。
らくはく ナ落魄。おちぶるるをいふ。
らくめい ナ落命。いのちをおとすをいふ。
らくやう ナ洛陽。みやこ。
らくやき ナ楽焼。

らくらく ツ楽楽。たのしく、こころやすく。
らご ナ羅睺。
らし
らしやうもん ナ羅生門。
らしや ナ羅紗。織物の名。
らしやめん ナ羅紗綿。
らち ナ埒。



らち

野の、馬場(ゆふ、らちの外なる、人のこゝろ(れ)

らちがあく ツ。ヒトリ口。埒明。はかどる。はかゆく。

らちもなし サ。ヒ。無益次。らつしもなしに同じ。

らつきよ ナ。辣韭。野菜の名。おほみらに同じ。

らつきやう ナ。辣韮。野菜の名。みらに同じ。

らつこ ナ。猟虎。海獣の名。蝦夷の海におほき海獣にて、かたち、狸に似て、四足みじかく、毛色くろくあをみて、きはめてやはらかなり。このもの、そのおほきなるは、四五尺あまりなるもありて、常に、魚をとり、またよく、昆布などをもくらふといふ。

らつしもなし サ。ヒ。無益次。みだりなり。きはもなし。

らつぱ ナ。乱破。すつぱ。また、ぬすびとをいふ。(戦国には、らつぱといふ盗人を、多くめしおきて、敵を困ずる事あり。五代記に、氏直、乱破二百人扶持し給ふ中に、一人の頭者あり、彼が名を風魔といふ)

らつぱ ナ。喇叭。笛の名。たうじんぶえに同じ。

らでん ナ。螺鈿。あをがひに同じ。源若菜(らでんのみづしふさよろひに、御ころもでこようずゑて)

らに ナ。蘭。草の名。ふぢばかまに同じ。源藤袴(かゝる便にとや思ひよりけん、らにの花の、いとおもしろきをもちてまゐりけるを、御簾の端よりさしいれて)

らふ ナ。臘。ねんこうといふに同じ。

らふ

らふ ナ。蝋。あぶらのこりかたまるごときもの。櫨の実などよりとりて、火をともしなどするものなり。

らふ ナ。鑞。すゞ、なまりなどの、とろしかるものにて、かねをつぎあはするにもちふるもの。

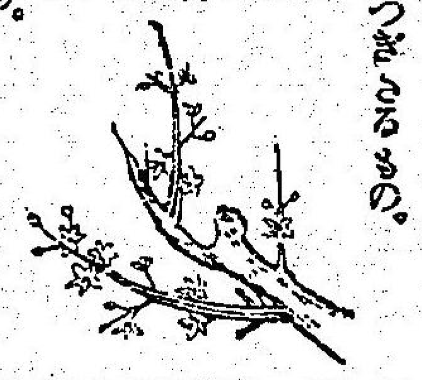
らふげつ ナ。臘月。しはすの異名。

らふせき ナ。蝋石。石の名。やはらかなるいしのつやゝかなるもの。常に、印をほるなどにもちふ。

らふそく ナ。蝋燭。らふの、ひをともすやうにしたるもの。燈心を心として、蝋をかけて、筒の如くしたるもの、糸を心として、筒に流しこみたるなどあり。

らふづけ ナ。鑞付。らふをもてつぎたるもの。

らふばい ナ。蝋梅。灌木の名、からうめ。木は李のごとく、葉は桃のごとくにて、冬の末、黄色にて、蝋のごときひかりある花をひらく。香氣、すこし、梅に似て、殊にきよらかなり。



らま ナ。ツケ。語のならべにもちふるのみにて、こゝろなきことぞ。綏靖紀(天皇大命良麻止詔)

らまさう ナ。羅摩草。かゞみをいふ。京都にて。

らむ テ。スケ。現在の想像をいふにもちふる辭にて、らめとも、はたらく。また、歌などには、そのあるゆゑをはかるところにもちふ。古今(袖ひぢて、むすびし水の、氷れるを、春たつけふの、風やとくらん)同(久方

らん

の、光のどけき、春日に、靜心なく、花のちるらん)

らん ナ。蘭。草の名。ふぢばかまに同じ。

らん ナ。亂。みだれ。よのみだれ。よのさわぎ。

らんかん ナ。欄干。てすり。おばしま。

らんぎく ナ。蘭菊。草の名。高さ七八寸ばかり、葉は、蘭に似てあつく、またせばくしてながし。秋の頃、葉の間より、ほそき穂をいだして、淡紫なる花をひらく。

らんぎやう ナ。亂行。みだりなるおこなひ。

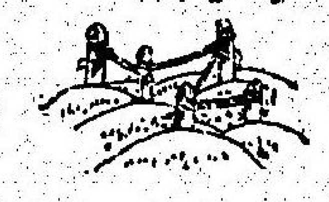
らんぐひ ナ。乱杭。さまざまのたゝかひ。あまたの杭を、とゝろにうちめぐらして、縄をはりたるものにて、敵のかけひきを、自由ならしめぬためにまうくるものなり。

らんぐん ナ。亂軍。いりみだれたるたゝかひ。

らんぐわい ナ。欄外。けいのほか。わくのほか。

らんけう ナ。辣韮。野菜の名。おほみらに同じ。

らんご ナ。亂碁。碁の石を、指にてつけておほくとりたるを勝とするたはぶれ。尻盆拾遺(圓融院のみかど、一品宮にさぶらはせたまひて、らんごとらせさせたまひけるに、まけわざを、七月七日に、かの宮より、内のだいばんどころにたてまつられける)経世縫七(さざれいしまで、らんごひらふ音などきこえける)



らんごく ナ。亂國。たゝかひなどありてみだれたるくに。

らんじやう ナ。亂聲。音楽に、太鼓、笛、鉦鼓を、はやくならすをいふ。また、相撲、競馬などのとき、勝方に

らん

て、鉦をつき、太鼓をたゝきなどするをいふ。榮花音樂(かくて、亂聲をさへあそばせされば、いとゞいみじうおどろくしく、いかなる事と思へば)源螢(打毬楽、落蹲などあそびて、かちまけのらんざうどものゝしるも、夜にいりはてて、何事もみえずなりはてぬ)

らんざつ ナ。亂雜。まとまりなくみだれたるをいふ。

らんしん ナ。亂心。こゝろのくるひみだれたるをいふ。

らんじや ナ。蘭麝。らんのかとじやかうと。

らんしやう ナ。濫觴。もののおこり。もののはじまり。

らんじやう ナ。亂聲。らんざうに同じ。竹取五節倫調(すそれらは、なんをとりて、いろいろのこゑをたてならべて、らんじやうひまなくしてひしめきあふ)

らんじやたい ナ。蘭奢待。名香の名。らんの一種なり。但し、この名は、聖武のみかどの、御物の東大寺にある、めでたき香は、東大寺の文字をかくして、蘭奢待となづけさせたまひしより起れりといふ。

らんしゆつ ナ。濫出。みだりにいづるをいふ。

らんす ナ。蘭子。名香の名。らんの一種なり。

らんせい ナ。亂世。たゝかひなどありてみだれたるよ。

らんだ ナ。懶惰。おこたりてたゆみがちなるをいふ。

らんたふば ナ。卵塔場。そとばのたちたるところ。

らんたふ ナ。卵塔。そとばをいふに同じ。

らんない ナ。欄内。けいのうち。わくのうち。

らんにふ ナ。亂入。みだりにいるをいふ。

らん

らんぱ ナ。亂破。らつぱに同じ。

らんばう ナ。亂暴。あれはたらくをいふ。

らんりようき ナ。蘭陵鬼。鬼の名。下文を見るべし。源若十(永承元年の春、蘭陵鬼をいふ鬼、京中にみだれて、十歳以前の少者、十に八九はとりうしなはれけれど)

らんぞこ ナ。鍍箱。せんじのかなものをいるゝ、ふたつ、丈貝記監貴詩(蘭箱の箱に、砂金千両いれてつかはす)

らんびき ナ。蘭引。あまうりうき。酒などをむして、そのゆげのごとくにてたちのぼるを、露のごとくさまして、まとめさせてとる器。そのたぐひ種々あり。

らんぴつ ナ。亂筆。ふでづかひのさだかならぬをいふ。

らんぷ ナ。洋燈。ともしびをいるゝうつは。硝子にてつくりたるもの。

らんぶ ナ。亂舞。まひ、能狂言のあひだにする舞などをいふ。公事根源(八節會の後、宿の如し。節會の後に、童盤の亂舞なり)

らんま ナ。欄間。てんじやうとかもゐとのあひだをあけて、すかしなどにしたるものにて、ぬのもあるなどをもちひたり。

らんまん ツ。爛漫。花などのさかりにみだれさけるをいふ。

らんよ ナ。鑾輿。みかどののりものをいふ。

らむ テ。スケ。現在の想像をいふにもちふる辭の、らむ のそちらきなり。らむを、そのむすびにもちふる辭の、らむとき、まされ、どやなどにかけていふとき、らめとまはりてもちふ。古今(あさみどり、糸よりかけて、白露を、玉にもぬける、春の柳か)

なみだ川、身さへながると、きゝばたのまん)

らもん ナ。羅門。さだかならず。但し、垣の上の方にあげたる蓋なるらん、ともいへり。枕草子(すいがい、らもん、塀などの上に、かけたる絹の類のこぼれのぞりて)

らりようわう ナ。羅陵王。舞楽の曲の名。この舞は、もろこし、北齊の蘭陵王をいふが、出陣の舞なりといふ。

らる ワ。スケ。有らるといふべきかはりにおきたる辭にて、作用言を、うけらるゝといふとき、うやまひていふとき、いたはりていふとき、ことをじりにつけていふ。古今(おなじ御時せられける菊合に、洲濱をつくりて、菊の花うゑたりける)源若菜(去年のやる時、おもひいでられて、戯るたはぶれなり)

られう ナ。羅綾。らうは、さるはすゞしのうすぎぬにて、綾は、あやなり。

り

り

ささはあれていづるひとつのこゑにて、るとのかよへるこゑなり。

り ナ。理。すぢ。わけ。ことわり。拾玉(すみよしと、思ふべき人に、この世をすつる心ぞ)

り ナ。利。もうけ。もとでのたよりよきをいふ。

り ナ。利。くわいさ。りそく。りえき。

り ナ。里。みちのりにいふ語。さとに同じ。

り ワ。スケ。有りといふべきかはりにもちゐたる辭にて、作用言を、過去の語にいふとき、あるにかはりてもちふ。て

とむじりはうけていふ。古今(みさぶらひ、御笠とまうせ。宮城野の木の下露は、雨にまされり)

りあげ　ナ.利上。質をおきて、銭をかりたるとき、期限にいたりて、まづその利息のみを納めおくをいふ。

りあひ　ナ.理合。わけあひ。わけみち。

りう　ナ.龍。たつに同じ。龍手(鐘の中より、鋳うまれたるもの)

りうあん　ナ.留案。くわいふなどの、定まらずして、暫はさしとどまりて、議をきめかぬる人はなん侍りけるなど思ふらんやう。

りうい　ナ.留意。こころにとめて、おもひをかくることをいふ。

りうえい　ナ.柳営。将軍家のすむ大殿をいふ。

りうか　ナ.流下。ながれくだること。

りうかう　ナ.流行。はやり。よにおこなはるるをいふ。

りうかびやう　ナ.流行病。はやりやまひに同じ。

りうがく　ナ.留学。とつくににゆきてまなぶをいふ。

りうがん　ナ.竜顔。たつのみかほに同じ。保元(新院、拝謁の御座を設し、竜顔すぐるる。みつほし(りおます)

りうがんにく　ナ.竜眼肉。果の名。竜眼といふ木のみにてさうもの、木の高さ、二三丈ばかり。枝のさま、葉のさま、すもも、荔枝に似たりといふ。実のおほきさ、茘枝の実におなじ。皮のごとくして、肉の甘きこと蜜のごとし。

りうぎ　ナ.流儀。其道の、うちにいふ節にて、その家ならではのみちなるひとをいふ。

りうきうい　ナ.琉球藺。琉球藺、さつまいもなどをいふ。畿内にて、たたみおもてに、常にはさまざまに、備後表と共にいふ。

りうきうおもて　ナ.琉球表。琉球蘭にて織りたるたたみおもて。

りうきうがすり　ナ.琉球絣。さつまがすり。大島紬の織地の、かすりを織りいだせるもの。琉球よりおりいだす。

りうきうつむぎ　ナ.琉球紬。琉球よりおりいだす一種のつむぎ。

りうきうちく　ナ.琉球竹。竹の一種、さんちくに同じ。

りうきんくわ　ナ.立金花。水草の名。葉は、ゆきのしたの葉に似て、面つやありて、夏の末に、むらさき色なる花さく。

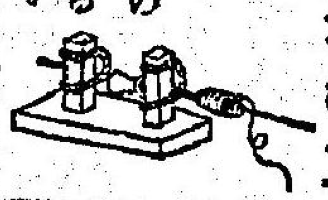
りうぐう　ナ.竜宮。たつのみやに同じ。

りうぐうじやう　ナ.竜宮城。たつのみやに同じ。

りうげのくわん　ナ.流外官。内舎人、官掌のたぐひ。すべて、相当の位なき官をいふとぞ。貞丈雑記

りうげん　ナ.流言。ねなしごとのうはさ。

りうご　ナ.竜吼。(こよりいふか)龍のほゆるさまの鉦のもの。そのさま、すこし鼓の胴に似たり。



りうこ　ナ.竜鼓。鉦鼓、もてあそびものの名。下文に見るべし。骨董集(野守鏡上巻にいふ。りうごをきそすと居情をめぐらすとき、その鼓おなじ事にて侍り。りうこは、よくまぎれて、とりとも、橋のうへにはうれしたりて、

なげあぐるなどもおなじ)

りうごう　ナ.林檎。木の名。果の名。りんご。葉も、花も、海棠に似てまろし。夏のすゑ、実をむすぶ。実は、李に似てひらたくして、香あり。あぢはひ、梨に似て、さらにあまし。和名(林檎和名利宇古宇、俗云林檎也)

りうこし　ナ.竜骨車。たにみづをひくぐるま。

りうさん　ナ.硫酸。硫黄と酸素とのかはりたるもの。

りうさん　ナ.流産。はらごもりのこの、そのうまるべきまへにくだりしをいふ。

りうじのまつり　ナ.臨時祭。りんじのまつりに同じ。(石清水の、りうじのまつりのつかひにて)

りうじん　ナ.竜神。あめをつかさどるかみ。

りうせい　ナ.流星。よばひぼしを見るべし。

りうそく　ナ.流俗。よのならはし。拾遺(りうぞくの、色これあらず、梅の花、珍重すべきものとこそみれ)

りうたい　ナ.流体。ものごとのとどまらぬをいふ。

りうたう　ナ.竜胆。草の名、りんだう。りんだうに同じ。葉は、笹に似て、秋のすゑに、節のかたはらに、あをくむらさきなる花さく。和泉式部集(りうたん、りんだうの花、ひとなみに、みてしがな、かれやはつる、霜がくれつつ)

りうたん　ナ.竜胆。かさねの色目の名。表は蘇芳にて、裏は青なるをいふ。西三条装束抄(表は蘇芳、裏は濃きをいふ。かれむらさきなりともいへり)

りうつる　ナ.流通。ゆきかよひて、とどこほらぬをいふ。

りうど　ナ.立冬。りつとうに同じ。ふゆにいるをいふ。

りうとうずる　ナ.竜吐水。みづでつぼうに同じ。

りうなう　ナ.竜脳。薬の名。ふとりゆの、樹のもとより、ふきいだすにかはのやうなるもの。

りうのひげ　ナ.竜の鬚。じやうがひげの名。

りうび　ナ.柳眉。やなぎのまゆに同じ。

りうびん　ナ.隆鼻。又、流鼻。そのむかしのたかきはなにて、おくりものともしてなん。うけん二曲など、おくのそそを、四ひんくして、まそとて、りうびんを、二枚をきて。

りうびんむしろ　ナ.隆鼻筵。りうびんに同じ。

りうべつ　ナ.留別。たびにたちてゆくひとの、あとにとどまるひとに、わかれをつぐるをいふ。

りうまちす　ナ.僂麻質斯。病の名。ふうしつ。手足の節々の、ときどきいたむやまひにて、腫をかもす事もあり。

りうん　ナ.理運。ことはり、おもひのままなるをいふ。十訓抄(運の事の相違ありて、約束の日の期数あるほどに、さる様にてあるらめと、思ひなるもあらむ)

りうめ　ナ.留目。きはめてすぐれたるもの。

りうもん　ナ.竜紋。織物の名。おやのたぐひ。地あつく、緒にけなくして、なめらかに、文をなせり。

りうよう　ナ.流用。ゆづりて用ゐるをいふ。

りうりう　ナ.流々。つぎつぎに同じ。

りうれんす　ナ.流連。あそびにふけりて、帰ることをわするるをいふ。

りうゑう　ナ.覇王。りきわう、後金右大臣家(時によりすれば民の歎なり、八大龍王、あめやめたまへ)

りうかうす　ナ.理解。さとりのみちをたどるをいふ。

りがい　ナ.利害。りがい。よきとあしきと。

りかい　ナ.理解。もののことわりを心得るをいふ。

りえんじやう　ナ.離縁状。りえんのあかしの書きもの。

りえん　ナ.離縁。えんをきるをいふ。夫婦の上にいふ。

りえき　ナ.利益。くどく。まうけ。とくぶん。

りかう　ナ.利口。ものいひのさかしきをいふ。

りかく　ナ.理学。もののことわりをきはむるがくもん。

りかた　ナ.利方。りをとなるかた。とくぶんとなるすぢ。

りかん　ナ.離間。ひとのなからひをさくるをいふ。

りき　ナ.利器。よきうつはもの。

りきう　ナ.離宮。みやのほかなる所。

りきし　ナ.力士。ちからびと。すまうとり。

りきしや　ナ.力者。ちからびと。すまうとり。十訓抄(すなはち、五人の力人なりて、山を掘り、牛を引く。みなもし登山たびらかなる事になりぬ)

りきじん　ナ.力人。ちからびと。懸な動りうるものにて、侍のごとく、なり集せり、貞丈雑記(御おきて、たた二人が外きこへもなし、いにしへをかもしとてやべ、此くちすなるやと)

りきむ　ナ.力む。ちからをいだす。みづからつよがる。

りきん　ナ.利金。りそくにいるぜにをいふ。

りきよ　ナ.離居。はなれてすむをいふ。

りきりやう　ナ.力量。ちからのかさ。ちからのつよさ。

りく　ナ.陸。くが。みち。みづならぬところ。

りくあげ　ナ.陸揚。みづより、くがへあぐるをいふ。

りくかう　ナ.陸行。くがをゆくをいふ。

りくぐん　ナ.陸軍。りくのたたかひをもちゐるいくさ。

りくしん　ナ.六親。むつのしんぞく。父、母、兄、弟、妻、子。

りくぞく　ナ.陸続。たえまなくつづく。

りくち　ナ.陸地。りくのところ。くがのところ。

りくつ　ナ.理屈。ことわり。だうり。太閤記(落人の正真なるや、りうなやいなや)

りくつくさし　ナ.理屈臭。ことわりめきたる。

りくつめ　ナ.理詰。りくつにてせめてゆくをいふ。

りくりよく　ナ.戮力。ちからをあはするをいふ。

りくろ　ナ.陸路。りくのみち。くがのみち。

りぐさい　ナ.理外。つねのことわりにかなはぬをいふ。

りけんぐ　ナ.利剣。よき剣。するどきつるぎ。

りこ　ナ.利己。おのれのためばかりをはかるをいふ。

りこう　ナ.利口。もののおもひのたくみなるをいふ。著聞集(一切衆生も、かうる本の心のまとあるをいふ。よなぎりたるひと)

りとん　ナ.利鈍。するどきと、にぶきと。

りさい　ナ.罹災。わざはひにかかるをいふ。

りさん　ナ.離散。はなればなれにちるをいふ。

りし　ナ.吏師。官吏の名。都督にてつかさの名。

へ、五位に叙せられたり。源夕（せやうよ）。御ゆのの身の飾りて、ものけなどもおらひすてける終焉の、やまどりりして、且もいひじをつくりあるを）

りし　ナ利子。りそくといふに同じ。

りしやう　ナ利生。佛菩のめぐみ。夫木抄（後の世の、彌陀の利生だ、かぶらやにおなみおもしの、月照や）

りじゆん　ナ利潤。りえき。まうけ。とくぶん。

りす　ナ栗鼠。獸の名。形、ねずみに似て、ねずみよりもおほきく、毛の色、うすぐろし。常に、梢の穴にすめり。このもの、身かろくして、枝をつたひ、木の實をとりくらふ。また、鳥のたまごをも。

りす　ワ、とすりか利。もうくさる。をそく、かそやすにおよぶ。今昔（すりを西のにぞりうるまに、米寺なすりいれてのませて、搦ませしてあるんや）

りすう　ナ里數。みちのり。一里二里とかぞふるかず。

りする　ナ利水。みづのかよひをよくするをいふ。

りそく　ナ利息。ぜにをかるるむくいにあたふるぜに。

りたう　ナ利刀。よくきるるかたな。

りち　ナ律。物の音のこゑの名にて、秋冬の時にかなふるこゑをいふ。源氏（秋の音こえ、女のものやわらかにかきならして、簾の内よりきこえたる）

りちぎ　ナ律儀。すなほにて、おこなひのきよきをいふ。

りちぎもの　ナ律儀者。すなほにておこなひよきもの。

りつ　ナ律。つみをきめるみちにおこなふ法。

りつ　ナ律。[illegible]

りつか　ナ立夏。なつのせつになるをいふ。

りつくわ　ナ立花。いけばなのたぐひ。花の枝などを、おほきなるかめにさして、山水の景色をうつすもの。

りつし　ナ律師。僧官の名。りしに同じ。

りつしう　ナ立秋。あきのせつになるをいふ。

りつしん　ナ立身。よにいでてさかゆるをいふ。

りつしんべん　ナ立心偏。かんじの偏の名にて、心の字を、たてにかきなしたるもの。快、情、悟、性、恨、等のたぐひをいふ。

りつしゆう　ナ律宗。宗門の名。[illegible]はじめてひろめたる宗門なり。

りつしゆん　ナ立春。はるのせつになるをいふ。

りつしよく　ナ立食。[illegible]

りつさう　ナ律僧。りつしゆうの僧。沙石集三（[illegible]）

りつたう　ナ立刀。かたなの字の名にて、刀の字を、りのごとくかきなしたるもの。刑、列、剛、削のたぐひ。

りつとう　ナ立冬。ふゆのせつになるをいふ。

[illegible]

下も、すべておなじすがたであるをいふ。

りつぱなり　ナ立派。きらやかにてうつくし。

[illegible]

りつぷく　ナ立腹。はらたつる。

りづめ　ナ理詰。だうりをおしてせむるをいふ。

りつりやうきやくしき　ナ律令格式。むかしのおきてをかきたるもの。[illegible]

りてい　ナ里程。みちのりに同じ。

りとく　ナ利得。もうけ。とくぶん。

りはい　ナ離杯。わかれのさかづき。

[illegible]

りひ　ナ理非。ことわりとひがこと。

[illegible]

くせて、[illegible]のかざものどもをつくるる）

りぶぜん　ナ立願。ぐわんだてと同じ。

りふじんに　ヲ理不盡。[illegible]

りぶん　ナ利分。とくぶん。まうけ。りえき。

りべつ　ナ離別。わかれ。きもの、りえん。

りん　ナ鈴。れいを見るべし。

りん　ナ輪。[illegible]（花のりん、[illegible]）

りん　ナ釐。[illegible]一分の十分の一を一釐といひ、[illegible]一釐の十分の一を一毛といふ。[illegible]

りんう　ナ霖雨。ながあめに同じ。

りんか　ナ隣家。となりのいへ。

りんか　ナ臨終。[illegible]

りんかう　ナ臨幸。[illegible]

りんかう　ナ輪講。[illegible]

りんがう　ナ臨郷。となりのさと。となりのむら。

りんき　ナ悋氣。ねたみ。そねみ。やきもち。

りんき　ナ臨機。ときのぐあひ。ときのもやう。

りんきおうへん　ナ臨機應變。ときのあひにしたがひて、ほどよくとりおこなふをいふ。

りんきかう　ナ悋氣講。[illegible]

[illegible]

りんくわう　ナ臨江。[illegible]

りんげつ　ナ臨月。うみがつきに同じ。

りんげん　ナ綸言。みことのり。みかどのおほせ。

りんご　ナ林檎。木の名。果の名。りんきうに同じ。

りんご　ナ臨期。[illegible]

りんざい　ナ臨済。[illegible]

りんさう　ナ輪藏。[illegible]

りんし　ナ綸旨。せんじ。みことのり。

りんじ　ナ臨時。ときにのぞみてすること。[illegible]

りんしう　ナ臨終。いのちのをはるとき。[illegible]

[illegible]

りんじのまつり　ナ臨時祭。[illegible]

りんじやう　ナ臨場。[illegible]

りんしよく　ナ吝嗇。[illegible]

りんず　ナ綸子。絹物の名。[illegible]

りんせき　ナ隣席。[illegible]

りんせん　ナ臨戰。[illegible]

りんだう　ナ龍膽。草の名。りうたんに同じ。

りんだく　ナ輪宅。[illegible]

りんてつ　ナ輪鐵。[illegible]

りんどう　ナ林道。[illegible]

りんびやう　ナ淋病。病の名。[illegible]

りんもう　ナ厘毛。[illegible]

りんり　ナ倫理。ひとのみち。[illegible]

りんりん　ヲ淋漓。[illegible]

りんりんど　リ。凛々。するどきさまにいふことば。

りんゑ　ナ。輪廻。佛經の語。世の中の衆生の、善悪の報にて、いきかへり、生かはりて、車の輪のごとくめぐりてやむ時なきをいふ。拾遺愚草（心うき、さきときまりまし、世なれば、りんゑの輪のいまやまもるらん）

りやう　ナ。靈。れい。ひとのみたまの、たゝりをするもの。源氏柏木（このものゝけあらそふべくねんじきこえ云々、うらなひよりけん女のりやうこそ、まことは、さる御さまの、身にそひさるならば）

りやう　ナ。龍。もののかみ。まさ、とりやう。

りやう　ナ。糧。かて。ひやうらう。

りやう　ナ。領。さびものとして出むるをいふ。

りやう　ナ。兩。秤の目方にいふ語。薬などには、その目方四匁を一兩といひ、銀には、六十匁を一兩といふ。

りやうあん　ナ。諒闇。みかどかくれさせたまひて、東宮をもじめさてまつり、天下の人、ことごとく喪にこもるをいふ。榮花月宴（いせんかさなくおどろくしう、内にも、東宮にも、みな御服あるべければ、諒闇たちされど、これ、殿上人などもうずにびをそきさる）

りやうえん　ナ。良縁。よきえん。につかはしきえんぐみ。

りやうか　ナ。良家。いへがらのよきいへ。

りやうかけ　ナ。兩掛。旅にたづさふる行李。ちひさき櫃の、杖の前後につけて、になふやうにしたるもの。

りやうがへ　ナ。兩替。かねなぜにをとりかふるをいふ。

りやうがへや　ナ。兩替屋。りやうがへを、業とするいへ。

りやうぐ　ナ。靈供。ほとけにそなふるおもの。

りやうくち　ナ。兩口。くちの、ふたところにあるをいふ。

りやうけ　ナ。靈氣。ものゝけ。空穂國譲（りやうけなどにひて、ものまぬらずなんありつるを）

りやうけ　ナ。領家。ほんじよ。諸國にある公家の領地を支配するもの。太平二（武家より、公家を、ないがしろにし奉ることもなければど、所には、地頭つよくして、領家はよわく、國には、守護おもうして、國司はかろし）

りやうげのくわん　ナ。令外官。官の、大寶令にのせられぬものにて、内大臣、中納言などのたぐひをいふ。

りやうし　ナ。令旨。東宮、三宮、親王などのおほせをかきたるもの。太平七（大塔宮の令旨をたまはりて、この素志を達すべきといひさまひければ）

りやうしう　ナ。領袖。かしらぶちたるひと。

りやうしう　ナ。領收。うけとり。うけをさめ。

りやうしん　ナ。兩親。ふたおや。ちゝとはゝと。

りやうしん　ナ。良辰。きちにち。めでたきひ。

りやうじん　ナ。良人。をうとをよぶとなへ。

りやうしゆ　ナ。領主。りやうちのぬし。

りやうず　ワ。カ。カ。領。おさむ。とる。さがものとす。空穂上（おなじやうなる宮達のことひ りやうじたまへど）宇治拾二（この家の娘は、されて領じて三年になりぬるを云々、かくおそろしきものにりやうぜられたりける所にまありける、おやまちなりとかこちければ）

りやうずせん　ナ。靈鷲山。さしのやまに同じ。

りやうせん　ナ。兩全。ふたつながらまつたきをいふ。

りやうたう　ナ。裲襠。衣の名。うちかけに同じ。

りやうたん　ナ。兩端。ふたつのこと。これかれのこと。

りやうち　ナ。領地。りやうしてゐるところ。

りやうて　ナ。兩手。もろて。みぎひだりのて。

りやうど　ナ。兩度。にど。にへん。ふたたび。

りやうとく　ナ。兩得。ふたつのとく。たがひのとく。

りやうない　ナ。領内。りやうぶんのうち。

りやうにん　ナ。兩人。ふたり。ふたりのひと。

りやうはう　ナ。兩方。ふたかた。こなたとかなたと。

りやうぶ　ナ。令法。木の名。はたつもりに同じ。

りやうぶ　ナ。兩部。りやうぶしんたうに同じ。

りやうぶしんたう　ナ。兩部神道。神道の一派。ほとけのみちをまじへたるもの。唯一にむかへていふ稱なり。

りやうぶん　ナ。領分。りやうち。りやうしたるところ。

りやうぼ　ナ。令法。木の名。りやうぶをいふ。播磨にて、

りやうみん　ナ。良民。おきてなどをまもるよきたみ。

りやうめ　ナ。量目。そうりめ。そうりにかゝるめくさ。

りやうめん　ナ。兩面。うらとおもてと。

りやうもく　ナ。量目。そうりめ。そうりにかゝるめくさ。

りやうやう　ナ。兩様。ふたつ。これとかれと。

りやうやく　ナ。良薬。きゝめのよきくすり。

りやうりやうし　サ。ナ。カ。勞々。らうらうしに同じ。枕草二一（小舎人は、ちひさくて、髪のうるはしきが云々、かしこまりてものなどいひたるぞ りやうりやうしき）

りやく　ナ。利益。佛のめぐみ。散木（長如來といふ菲打の、甚うつなみて、長如來ぞ利益とも、しける哉）

りやく　ナ。略。はぶくをいふ。ことをそぐをいふ。

りやくぎ　ナ。略儀。ことをそぎたるぎしき。

りやくご　ナ。略語。はぶきたることば。

りやくじ　ナ。略字。ふでかずをはぶきたるもじ。

りやくしき　ナ。略式。ことそぎたるぎしき。

りやくす　サ。カ。カ。略。はぶく。ことそぐ。

りやくひつ　ナ。略筆。ことそぎたるかきざま。

りやくふく　ナ。略服。りやくぎのいふく。

りやくぶん　ナ。略文。ことそぎたるぶんしやう。

りゆう　ナ。龍。りうを見るべし。

りよ　ナ。呂。物の音のしらべの名にて、春夏の時にかなふものをいふ。源川竹（つまどおしあけて、人々、おなじきを、いとよくかきあはせたり。女の琴にて、呂の歌は、かうしもあはせぬをいとしとおもひて）

りよう　ナ。龍。たつに同じ。宇拾十（この池より、りようのぼらんずるなりといふ額をたてけるを）

りよう　ナ。綾。織物の名。あやに同じ。枕草十一（人々あつまりてきくに、この聟人となれる聟の、りようの袴、黒半臂などいみじうあざやかにて）

りよう　ナ。利用。りえきとなるやうにもちふるをいふ。

りようち　ナ。陵遲。みちのおとろへさるをいふ。

りようとうげきす　ナ。龍頭鷁首。みかどの乗らせたまふ一對の船にて、ひとつの舳には、龍の頭、ひとつの舳には、鷁の首をきざみつけたるもの。源胡蝶（龍頭鷁首を、からのよそほひに、ことごとしうしつらひて）

りようまちす　ナ。僂麻質斯。りうまちすに同じ。

りようり　ナ。鯪鯉。よろひむしのたぐひ。首は、鼠の如くにて、頭より尾にいたるまで、三角なる甲ありて、鱗の如くならびつけり。但し、腹には、甲なくして、毛の如きものあり。まさ、咲はとがり、舌は長くして、水にも陸にもすむといふ。

りようわう　ナ。陵王。らりようわうに同じ。

りよかう　ナ。旅行。たびにいでたつをいふ。

りよかく　ナ。旅客。たびびとに同じ。

りよそく　ナ。利息。りをふくこと。

りよぐう　ナ。旅寓。たびのやどり。

りよぐわい　ナ。慮外。ぶれい。もつてのほか。兒教訓（けつくいろふしそやしさて、二人の若衆すゝめつゝ、はきつむさせてきらふこそ、かへすぐもりよぐわいなれ）

りよくわん　ナ。旅館。たびのやど。たびのやどり。

りよけん　ナ。旅券。たびあるきのてがた。

りよじん　ナ。旅人。たびびとに同じ。

りよしやう　ナ。旅裝。たびじたく。たびよそほひ。

りよしゆく　ナ。旅宿。そらやど。たびのやどり。

りよちゆう　ナ。旅中。たびのうち。たびのあひだ。

りよてん　ナ。旅店。そうやど。たびのやどり。

りよひ　ナ。旅費。ろよう。たびのいりめ。

りよりつ　ナ。呂律。ものねのしらべ。もののてうし。

りりしい　サ。ヒ。律々。かひぐしし。おごそかなり。

りれき　ナ。履歴。ひとのへてきたりしらいれき。

りろん　ナ。理論。だうりのろん。まさ、ものごとを、ただとせりのひとすぢをもてろんじゆくをいふ。

りねん　ナ。吏員。やくにん。つかさびと。

りゑん　ナ。梨園。俳優。やくしやの異名。

る

きさはふれていづるひとつのこゑにてルとうとかきなれるこゑなり。

る　ワ。パ。ス。ナ。流。るのかしらごゑを云ぶき云る語にせ、もるといふに同じ。古今（惜ごとは、なかるゝ河を花とみて、をられぬ水に袖やぬれなん）大和（袖をぬれ、かさはりにくされて、ところぐなし）

るりさう　ナ。瑠璃草。草の名。葉は、よめなに似て、めぐりは、鋸歯のごとききざみあり。秋のころ、紫苑に似たる穂をいだす。この草、にはひきそめてせるくさし。

るけい　ナ。流刑。刑の名。ながしものにするつみ。

ゆきあかり　名　雪の反射で明るく感じること。

ゆきあそび　名　雪の中で遊ぶこと。

ゆきあらし　名　雪を伴って吹く強い風。

ゆきいた　名　雪の上に板を敷いて滑るもの。

ゆきうさぎ　名　雪国で作る、うさぎの形をした飾り。

ゆきおとし　名　雪が木の枝などから落ちること。

ゆきおれ　名　雪の重みで木の枝が折れること。

ゆきおろし　名　山から吹き下ろす雪まじりの風。

ゆきかき　名　雪を掻き寄せる道具。

ゆきかぜ　名　雪を伴って吹く風。

ゆきがこい　名　雪から守るために囲うこと。

ゆきがた　名　雪の降る方角。

ゆきがっせん　名　雪合戦。

ゆきかべ　名　雪で作った壁。

ゆきぐつ　名　雪の上を歩くための履き物。

ゆきぐに　名　雪の多い地方。

ゆきぐも　名　雪を降らせる雲。

ゆきげ　名　雪の積もっている様子。

ゆきげしき　名　雪の景色。

ゆきげた　名　雪の上を歩くための履き物。

ゆきごえ　名　雪の降る時の気温。

ゆきごおり　名　雪が凍ったもの。

ゆきごし　名　雪の降る中を行くこと。

ゆきごもり　名　雪に閉じこめられること。

ゆきさき　名　雪の降る先の地方。

ゆきしまく　名　雪が激しく降ること。

ゆきしょう　名　雪の降る様子。

ゆきしろ　名　雪の積もった色。

ゆきすだれ　名　雪が降る様子を簾に見立てた語。

ゆきぞこ　名　雪の底。

ゆきだおし　名　雪の重みで倒れること。

ゆきだるま　名　雪で作った人形。

ゆきつり　名　雪の重みで枝を吊ること。

ゆきどけ　名　雪が解けること。

ゆきどけみず　名　雪解けの水。

ゆきなだれ　名　雪崩。

ゆきのした　名　虎耳草科の多年草。

ゆきのはて　名　雪の降る果て。

ゆきのひ　名　雪の降る日。

ゆきばな　名　雪の花。

ゆきばれ　名　雪が降った後の晴れ。

ゆきひら　名　雪の降る平地。

ゆきぶえ　名　雪の降る笛の音。

ゆきぶかい　形　雪が多い。

ゆきぶかし　形　雪が多い。

ゆきぶかみ　名　雪が多いこと。

ゆきぶすま　名　雪を布団に見立てた語。

ゆきぶり　名　雪の降り方。

ゆきべ　名　雪の降る辺り。

ゆきぼう　名　雪の降る坊。

ゆきぼうし　名　雪の降る帽子。

ゆきぼたる　名　雪の降る蛍。

ゆきまく　名　雪の降る幕。

ゆきまち　名　雪の降る待ち。

ゆきまつり　名　雪の降る祭り。

ゆきみ　名　雪の降る見。

ゆきみず　名　雪の降る水。

ゆきみち　名　雪の降る道。

ゆきみどり　名　雪の降る緑。

ゆきみぶね　名　雪の降る船。

ゆきみやげ　名　雪の降る土産。

ゆきむかえ　名　雪の降る迎え。

ゆきむし　名　雪の降る虫。

ゆきめ　名　雪の降る目。

ゆきめがね　名　雪の降る眼鏡。

ゆきもち　名　雪の降る餅。

ゆきもの　名　雪の降る物。

ゆきやけ　名　雪の降る焼け。

ゆきやま　名　雪の降る山。

ゆきよけ　名　雪の降る避け。

ゆきよけぼう　名　雪の降る避け坊。

ゆきよけぼうし　名　雪の降る避け帽子。

ゆきよけみの　名　雪の降る避け蓑。

ゆきよけやね　名　雪の降る避け屋根。

ゆきよけやま　名　雪の降る避け山。

ゆきよけゆき　名　雪の降る避け雪。

ゆきよけゆきだるま　名　雪の降る避け雪だるま。

ゆきよけゆきぼう　名　雪の降る避け雪坊。

ゆきよけゆきぼうし　名　雪の降る避け雪帽子。

ゆきよけゆきみの　名　雪の降る避け雪蓑。

ゆきよけゆきやね　名　雪の降る避け雪屋根。

ゆきよけゆきやま　名　雪の降る避け雪山。

ゆきよけゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪。

ゆきよけゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪帽子。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきみの　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪蓑。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやね　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪屋根。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきやま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪山。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきだるま　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪だるま。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼう　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪坊。

ゆきよけゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきぼうし　名　雪の降る避け雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪

れいびと　ナ。例人。れいのひと。つねのひと。與花月（高明の親王をきこえさせし、今の源氏まで、例人になりておもずるぞなりたまひにける）

れいぶく　ナ。禮服。ぎしきのときもちゐるころも。

れいぶん　ナ。例文。れいのぶん。つねにかくもんく。

れいへい　ナ。例幣。かんなめまつりに同じ。公事根源（例幣とは、伊勢大神宮へ、御幣を奉らせたまふ、每年の御事なるによて、例幣とは申すなり）

れいまゐり　ナ。禮參。ゐやれいのさんけい。

れいもつ　ナ。禮物。ゐやれいにおくるおくりもの。

れいもつ　ナ。靈物。れいあるもの。くしびなるもの。十訓六（玄象は、玄上宰相の琵琶なり云々、昔より靈物にて、内裏燒亡の時も、人のとりいださねど前に飛びいでて、大庭のむくの木の末にぞかゝりける）

れいやう　ナ。羚羊。獸の名。かもしかに同じ。

れいやう　ナ。例樣。つねのさま。竹取（かぐやひめすゑんまれ、れいやうにはれみにくしとのたまひて）

れいやく　ナ。靈藥。きゝめのふしぎなるくすり。

れいらく　ナ。零落。みのおちぶるゝをいふ。

れいり　ナ。怜悧。りこう。こゝろのさときをいふ。

れいろうと　ナ。玲瓏。ひかりすきとほりて。

れう　ナ。料。まうけ。そのようにそなへおくるもの。枕草五（例のきぬさしいざしきを、常よりもとほくおしやりて居されば、あれれ、離びれうぞといへば）字拾計（つよくなまみて、なんのれうは、その老法師など、かくれせさむるぞや云々とのたまひければ）

れう　ナ。寮。つかさ。へや。なりどころ。ちやしき。

れうかい　ナ。了解。さけのさとるをいふ。

れうけん　ナ。料簡。かんがへ。かんにん。

れうし　ナ。料紙。ようし。そのれうにもちゐるかみ。新古（書きおきたる文ども、經のれうしになさんとて）

れうし　ナ。寮試。だいがくれうのしけん。源少女（れうしけさせんとて、先づ御前にて試みさせたまふ）

れうぜんと　ソ。瞭然。あきらかに。くもりなく。

れうぢ　ナ。療治。やまひをなほすをいふ。榮花鳥野（くすしはかゝりきつすれば、すそくにおもしますなりとて、そのかさのれうぢどもをつかうまつれば）

れうもん　ナ。寮門。だいがくれうのもん。源少女（れりもんは、上達部の御車ども、かずしらずつどひたり）

れうり　ナ。料理。さかななどをこしらふるをいふ。

れうりちやや　ナ。料理茶屋。れうりやに同じ。

れうりどしらへ　ナ。料理拵。れうりといふに同じ。

れうりにん　ナ。料理人。れうりを、なりはひとするひと。

れうりや　ナ。料理屋。れうりを、なりはひとするいへにて、ひとの、ゆきて、さかもりなどするところ。

れうる　ワ。カ。四。料理。れうりをす。

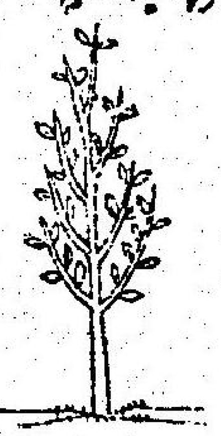
れきし　ナ。歷史。よゝのあとをかきたるふみ。

れきだい　ナ。歷代。よゝ。だいだい。

れきれき　ナ。歷々。いへがらのたふときをいふ。

れきれきと　ソ。歷々。あきらかに。ありくと。

れだまのき　ナ。列森樹。木の名。高さ一丈あまり、梢にほそきすこえをいださず。そのさま、烏芋の莖に似たり。この木、夏の初、黄色なる花さきて、莢をむすぶ。



れち　ナ。列。れつ。ぎやうれつ。空穗藏開（春宮には、若宮居たまひにけり云々、巳時まで、れちひくべう侍る）

れつ　ナ。列。れち。ぎやうれつ。

れつけん　ナ。列見。二月十一日の公事。下文を見るべし。公事根源（列見、上卿、辨、少納言、外記、史など參りて、太政官にて行へる公事なり、六位以下の藝能ある者をえらびて、式部、兵部の二省より率して參れるを、上卿の、それをめしよせて、器量、容儀をみる也）

れつざ　ナ。列座。ならびてすわるをいふ。十訓一（その時、成通卿參議にて列座していふ、年頃、籠居のおひざ、公事御忘却の云々、尤も道理なりといふ）

れつす　ワ。ヒトリ。カ。列。ならぶ。つらなる。

れつせき　ナ。列席。れつざしたるところ。

れつでん　ナ。列傳。ひとのでんをかきならべたるもの。歷史のうちにいふ語。でんを見合すべし。

れつぷう　ナ。烈風。はげしくふくかぜ。

れにし　ナ。孺子。れんじ。まどのなかにまうけたるかうし。和名（櫺字亦作欞、和名連子也）

れふ　ナ。獵。かり。また、すなどり。

れふし　ナ。獵師。かりびと。明衆（れふしにも、あらぬ也れこそ、わふ事を、きもしの松の、もえこがれぬれ）

れふしゆう　ナ。獵銃。かりにもちふるてつぱう。

れふせん　ナ。獵船。れふぶね。すなどりのふね。

れふだ　ナ。獵場。かりば。また、すなどりするところ。

れふぶね　ナ。獵船。あさなぶね。すなどりにもちふるおほきふね。山家集（宇治川の、をやせおちまふ、れふぶねの、かづきにちかふ、こひのむらまけ）

れん　ナ。聯。むしらかくしに同じ。

れん　ナ。廉。あさひのやすきをいふ。

れんいん　ナ。連印。れんみやうにて、いんをおすをいふ。

れんか　ナ。廉價。やすね。やすきあたひ。

れんが　ナ。連歌。つゞけうた。ふたりして、うんぶふのさまにはよみなすうた。例へば、一人、上句にてよみかくれば、一人は、こたへて、下句をよむたぐひ。日本武尊の、新治、筑波をすぎて、幾夜か寝つるとのたまひしときは、おさへのひと、下句をつぎて、かゞなべて、夜には九夜、日には十日をといへりしたぐひなり。拾内侍日記（有明の月くまなくて云々、御おほくろにて、御連歌ありしこそ、いとやさしく侍りしか）

れんがし　ナ。連歌師。れんがをするひと。七一職人歌合（れんがし、こひをびて、かみにたむけの、つらねうた、あふさやまで、ちらしものにせん）

れんぎ　ナ。楝木。すりこぎをいふ。畿内、西國などにて。

れんぐわ　ナ。煉瓦。れんぐわせきに同じ。

れんぐわせき　ナ。煉瓦石。瓦の一種、かるくやきなしたるものにて、つみかさねて、家などをつくるにもちふ。

れんぐゑ　ナ。蓮華。れんげ。はすのはな。

れんげ　ナ。蓮華。れんぐゑ。はすのはな。

れんげざ　ナ。蓮華座。はちすのうてなに同じ。

れんげう　ナ。連翹。灌木の名。いたちぐさに同じ。

れんげさう　ナ。蓮華草。草の名。れんげさうに同じ。

れんげつゝじ　ナ。蓮華躑躅。躑躅の一種、いせつゝじに同じ。

れんげだな　ナ。蓮華花。草の名。莖は、さいかしの葉のごとく、莖れ、蔓ぞみて、地にそひてそびこる。この草、春の頃、莖の節より、ちひさき莖をいだして、うすむらさきなる花をひらく。花の狀、すこし、蓮華に似たり。

れんこん　ナ。蓮根。はちすのね。

れんざ　ナ。連坐。まきぞへ。つみのかゝりあひ。

れんし　ナ。連枝。えだ。ぞく。きやうだい。

れんじ　ナ。孺子。れにしに同じ。大鏡三（中門の廊のれんじよりのぞかせたまへば）

れんじつ　ナ。連日。ひごとに。まいにち。

れんじまど　ナ。孺子窓。れんじのあるまど。

れんじやく　ナ。連雀。あきうどの、かねなどをかけ、れんみやくにしてかるをいふ。

れんじやく　ナ。連雀。鳥の名。狀、すゞめに似て、頭と胸とはあかぐろみ、翅は黒くして、黄と白との斑あり。また、頂の上に、ながき毛ありて、冠の如し。この鳥、おほきなるをひはさきとありて、形、すこしづゝ異なり。

れんしよ　ナ。連署。れんみやう。また、武家の役の名まで、執權の職をたすけて、天下の政務をあつかふもの。

れんず　ワ。ヒトリ。カ。戀。こひしたふ。ものはなれてあり。源語（宮などの、れんじたまへる人にて、いとところあつきおそれをつくし、いひなやましきまふに）

れんせい　ナ。連綴。こゝにつれてゆくをいふ。

れんせん　ナ。連戰。つゞきてたゝかふをいふ。

れんせんあしげ　ナ。連錢葦毛。馬の毛色にいふ語。とらげのさしけあるあしげ。和名（連錢驄、楊氏漢語抄云、連錢驄、虎毛周波、一云斑馬、斑駁、謂之連錢驄、漢語抄云連錢驄又云驊驄馬、今案、俗云連錢葦毛是）

れんせんさう　ナ。連錢草。草の名。つぼくさに同じ。

れんぞく　ナ。連續。たえずつゞくをいふ。

れんだい　ナ。蓮臺。いへのうちの、たかくかまへたるところ。下文を見るべし。貞丈雜記（れんだいといふは、今の世に、上段といふ座敷なり、一段たかくして、前に、御簾をかくる、御際臺といふなり）

れんだい　ナ。蓮臺。はちすのうてなに同じ。

れんだい　ナ。輦臺。ひとをのせて、かたにをさゝするもの。

板ヲ、二本の枋をつけたるかきものなり。

れんたいげん ナ。連體言。文法にいふ詞。ひとことばことばおほく、ことそなどの、なこそむすびつくところ。

れんち ナ。廉恥。いさぎよくして、はぢを知るをいふ。

れんぢやく ナ。戀著。ふかくこひしたふをいふ。

れんぢやく ナ。連著。ものをになひありくあきびと。

れんちゆう ナ。簾中。きさきのこと。だいじんところ。中將内侍日記(殊ニはきつくろひたる御簾あり。斎宮、御びん、北山院大納言ふえ、などれんちゆうなり)

れんちゆう ナ。連中。くみ。なかま。くみあひ。

れんちよく ナ。廉直。すなほにして心きよきをいふ。十訓四(廉直をいふは、いひつる事を、さなき由にあらがひせず、あらざる事を、ありがほにもてなさず)

れんぱん ナ。連判。れんみやうにて、いんをおすをいふ。

れんだん ナ。連判。武家の役の名。れんしよに同じ。

れんぺい ナ。練兵。てうれん。たゝかひのけいこ。

れんぺいじよ ナ。練兵所。れんぺいをするところ。

れんぼ ナ。戀慕。ひとをこひしたふをいふ。

れんま ナ。錬磨。きたふをいふ。ねりみがくをいふ。

れんみん ナ。憐愍。めぐみ。あはれみ。

れんみやう ナ。連名。なを、ならべてかくをいふ。

れんめい ナ。連名。れんみやうに同じ。

れんめんと ツ。連綿。たえまなくつゞきて。

れんようげん ナ。連用言。文法にいふ詞。ひとことばに、さましむなどの、むすびつくことばにつゞくところ。

れんらく ナ。連絡。つらなりつゞくをいふ。

れんり ナ。連理。きのえだの、ほかのところにてつゞきたるもの。吾妻鏡(世々のたましひのかさとならんとす、ならびとしさまふべくば、れんりの契をなさん)

れんるゐ ナ。連累。まきぞへ。かゝりあひ。

れんれん ツ。戀々。こひしたひて。わすれがたくて。

れんれん ツ。連々。ひきつゞきて。うちつゞきて。

れもん ナ。檸檬。果の名。木のさま、佛手柑に似て、實は、まろくして、柚のちひさきに似たり。汁おほく、香氣ありて、橘の如し。

れもんすゐ ナ。檸檬水。さたうみづに、れもんの汁を、砂糖水などにそゝげて、そゝぎたるもの。味、ほそく、蜜柑の汁のごとし。

ろ

舌はふれていづるひとつのこゑにて、ルとおをかよはするこゑなり。

ろ ナ。櫓。ふねをおしてすゝめてゆくだうぐ。和泉式部集(ろもおさで、風にまかする、蜑舟の、いづれの方によらんとすらん)和名(櫓所以搖船也)

ろ ナ。樓。たかどのに同じ。

ろ ナ。顱。頭のむねのあたり、やまひ。和名(顱俗云頭顱也)

ろ ナ。助。語のならびにもちゐるのみにて、こゝろなきことば。万葉十(小竹原の、うらふく風の、おとすなり、鹿しけ子呂を、思ひすぐさん)同十(あらそよれ、妻子のせりたつ、おもはず呂、年の八年を、まてど來まさず)

ろ ナ。爐。床をうがちて、火桶のごとくしたるところ。

ろ ナ。廬。いほ。いほり。徒然草(最勝講の、御聽聞所なる廬、御ろうのろとこそいふを、かうろといふ。くちをしとぞ、ふるきひとはおほせられし)

ろいろ ナ。蠟色。くろきうるしぬりのひかりあるもの。

ろう ナ。樓。たかどのに同じ。

ろうかく ナ。樓閣。たかどのに同じ。

ろうきよ ナ。籠居。いへにこもりゐるをいふ。平家一(徳大寺殿云々、大納言を辭して、籠居とぞきこえし)

ろうけ ナ。酒の名。むかし、西洋よりきたりしもの。太閤記一(ぶどう酒、ちんだ、ぶだうしゆ、ろうけ)

ろうげつ ナ。朧月。おぼろづき。うすくくもれるつき。

ろうこく ナ。漏刻。みづどけいを見るべし。

ろうさう ナ。綠衫。六位の人のきるみどりの袍。伊勢物語(いときよらなるろうさうのうへのきぬをみいでてやるとて)新古今(この六位、ろうさうをたてまつるとて、紫のうへも、よそまのみきく、身にしあれば、みどりのそでも、なにはありせん)

ろうじやう ナ。籠城。しろにたてこもるをいふ。

ろうず ツ。カナ。弄。もてあそぶ。あざける。蜻蛉(御よろこびなどおこするひとも、かへりては、ろうずるこゝちして、ゆめうれしからず)源氏(ことは、かろめろうぜ

ちからはそれをおぼしなすとも)

ろうせん ナ。樓船。やかたぶねに同じ。

ろうえ ナ。綠衣。みやうぶんにて、みどりなるもの。

ろうま ナ。野菜の名。きうりをいふ。近江にて。

ろうまけう ナ。羅馬敎。てんしゆけうに同じ。

ろうまじ ナ。羅馬字。よこもじに同じ。

ろうらく ナ。籠絡。たくみに、ひとのこゝろをそゝのかして、わがこゝろのごとくするをいふ。

ろぎん ナ。路銀。ろよう。たびのいりめ。

ろかいのない サ。艪櫂のない。よるべなし。上總の人のいひとこそ。

ろく ナ。祿。かづけもの。また、つかふびとにたまふたまもの。竹取(力をつくしたる事すくなからず、あるは、ろくいまだたまはらず)落窪一(これは、いつよりもよくめでれよ、ろくは、衣きせてまつらん)

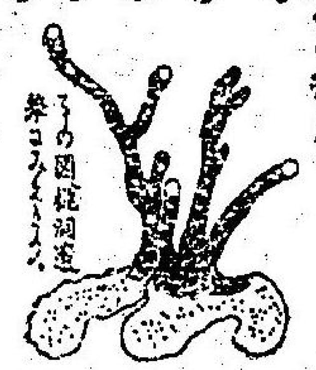
ろく ナ。六。むつ。みつは、みつをあはせたるかず。

ろく ナ。六道行成。やさずがりをいふ。大阪にて。

ろくう ツ。陸。たゞしく。すぐに。ゆるやかに。

ろくかく ナ。六角。かどのむつあるかたち。

ろくかくし ナ。鹿角芝。菌の名。れいしのたぐひなり。かたちは、鹿の角に似て、すこしひらたく、色は、くろむみたるところ、むらさきがみたるところなどありて、そのひかりつやゝかなり。



その圖桃洞造

ろくかせん ナ。六歌仙。むかしのうたのひじりをよぶなにて、常には、在原業平、僧正遍昭、喜撰法師、大伴黒主、文屋康秀、小野小町の六人をいふ。

ろくぐわつ ナ。六月。みなづき。さつきのつぎのつき。

ろくこつ ナ。肋骨。あばらぼね。かたはらぼね。

ろくこん ナ。六根。むつのまなこ。眼、耳、鼻、舌、身、意。佛家の説にて、これをきよむなどいふ事あり。

ろくさい ナ。六齋。ものいみをするは、むかしごとはするをいふ。きさ、京都の西南の村々よりいでて、念佛踊する者をいふ。六齋日よりいでたる名なるべし。和訓栞

ろくさいにち ナ。六齋日。きやうじんなどのものいみをすべきむゆのひ。月毎の八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日の六日をいふ。

ろくしやう ナ。綠靑。顔の色目の名。表は紺に、裏の蘇芳なるをいふ。きさ、裏は紫なりともいへり。助無智秘抄

ろくじ ナ。六時。ねんぶつをおこなふむつのとき。あさ、ひなか、ひぐれ、よひ、よなか、ごや。空蟬あて(殻をなち、鐘たちて、このみ、松の葉をすきて、六時間なくおこなひて)源氏明石(晝夜の六時のつとめは、みづからのをちすのうへのねがひなるもの)

ろくじのみやうがう ナ。六字名號。南無阿彌陀佛の稱。

ろくしやう ナ。綠靑。繪具の名。みどりいろをなむなるもの。あをにを見るべし。和名(綠靑、一名、碧靑綠靑俗)

ろくしやく ナ。六尺。おふこをいふ。九州にて。

ろくしやく ナ。陸尺。貴人の駕籠をかくかごかき。

ろくしやく ナ。陸尺。また、酒をつくるいへのおとこをいふ。東國にて。京都にて。

ろくたう ナ。野菜の名。ひるをいふ。關西にて。

ろくだう ナ。六道。むつのみちに同じ。平家十(淺國の玄弉三藏は、さとりの前に、ろくだうをみき)

ろくだう ナ。六道行成。やさずがりをいふ。和泉などにて。

ろくだうせん ナ。六道錢。佛家にて、なきびとをはふるとき、六道錢とて、六文の錢を、棺にいるゝをいふ。

ろくだうみち ナ。六道行成。やさずがりをいふ。越後にて。

ろくぢざう ナ。六地藏。六ざうはうじの、ろくざうはくずりてめぐりもるもの。ぢざうを見合すべし。

ろくに ツ。陸に。たゞしく。すぐに。ゆるやかに。

ろくぬすびと ナ。祿盜人。なすこともなくて、いたづらに、ろくをうけてゐるものをよぶことば。

ろくふ ナ。六府。ろくゑのつかさに同じ。

ろくふ ナ。六腑。ひとのはらわた、ゆゐぶくろのたぐひ。和名(六府、白虎通云、六府、大腸、小腸、胃、三焦、膀胱也)

ろくぶ ナ。六部。僧の、諸國をめぐりて、六十六部の法華經を、六十六箇國の寺々にをさめありくもの。

ろくまく ナ。肋膜。あばらぼねをうちつゝむうすきまく。

ろくやをん ナ。鹿野苑。ほうのその。釋迦の、はじめて、道をときしところ。拾遺雜外(ろくやをん、てらす朝日の、雪きえて、春のひかりも、まづやみちびく)

ろくろ　ナ轆轤。くるまなどのからくりをわけて、ものをまろくけづりなすだうぐ。また、そのたぐひのさうさをいふ。(ろくろにひきて、まろくこしらへ)
ろくろ(て)　和名(轆轤輾子器　阿伊米木俣也)
ろくろ　ナ轆轤。そろそんなどをいふ。
ろくろがな　ナ轆轤鉋。ろくろにつけて、ものをけづりなすかな。和名(轆轤鉋　久流加奈)
ろくろぎり　ナ轆轤錐。まはしぎりに同じ。
ろくろく　ッ碌碌。なにのおぼえすることもなく、まじめにおやくに。
ろくろくび　ナ轆轤頸。妖怪の名。ぬけくび。くびの、ながくぬけ、また、みじかくちぢみなどするもの。
ろくろざいく　ナ轆轤細工。ろくろをもちゐるさいく。
ろくろし　ナ轆轤師。ろくろざいくするひと。
ろくろせん　ナ轆轤線。ろくろをのせてひく。
ろくろびき　ナ轆轤挽。ろくろをひきて、くろびきの物つくるひと。
ろくゐ　ナ六位。くらゐのところ見えてべし。
ろくゐのくらうど　ナ六位蔵人。くらうどの、ろくゐなるもの。六位の蔵人は、地下なれども、殿上をゆるされて、殿上の雑務をつとむるなり。
ろくゑのつかさ　ナ六衛府。むつのゑふ。左右の近衛府、左右の衛門府、左右の兵衛府をいふ。竹取(六衛のつかさ合せて、二千人の人を、竹取が家につかはす)
ろくゑふ　ナ六衛府。ろくゑのつかさに同じ。
ろげん　ナ露顕。あらはれ。また、あらはし。
ろこつ　ナ露骨。骨の外にいでて、欠舌するもの。
ろし　ナ路次。みちのついで。みちのたより。今川大双紙(路次にて、…左の方へうちよけて、禮をするなり)
ろじ　ナ露地。せどなどいふ。
ろたい　ナ露台。やねなきうてな。(ろだいの前に植ゑられたるぼうたんの、からめきおかしき事)公事根源(節会の儀)
ろちう　ナ路中。みちのほとり。
ろてい　ナ路程。みちのり。
ろとう　ナ路頭。みちのほとり。
ろどん　ナ魯鈍。にぶくおろかなるをいふ。
ろなう　ッ無論。もちろん。いふまでもなく。
ろばう　ナ路傍。みちのかたはら。
ろばん　ナ露盤。塔の九輪の下の台をいふ。
ろびらき　ナ炉開。ふゆ、ろをひらきそむるをいふ。
ろん　ナ論。あげつらひ。ことのすぢをのぶるをいふ。
ろんかく　ナ論客。ろんをするくせあるひと。
ろんぎ　ナ論議。ほとけのみちのろん。
ろんご　ナ論語。書の名。
ろんじ　ナ論事。ろんをなすこと。
ろんず　ッ論。ろんをなす。あげつらふ。
ろんせつ　ナ論説。ろんとせつと。
ろんだん　ナ論断。あげつらひてさだむること。
ろんなう　ッ無論。もちろん。
ろんなし　ッ無論。いふまでもなし。
ろんぱ　ナ論破。ろんじてやぶる。
ろんぶん　ナ論文。ろんをしるしたるふみ。
ろんり　ナ論理。ことわりをあげつらふこと。

ろ

ろ　のどよりいづるひとつのこゑにて、うこわとかきなれるこゑなり。
ろ　ナ呂。和名(律呂)
ろ　ナ炉。ひをおこすところ。
ろ　ナ櫓。ふねをこぐだうぐ。
ろ　ナ魯。くにの名。
ろう　ナ楼。たかどの。
ろうかく　ナ楼閣。たかどの。
ろうかう　ナ漏刻。みづどけい。
ろうきょ　ナ籠居。こもりゐること。
ろうさい　ナ労瘵。やまひの名。
ろうしゃ　ナ聾者。みみしひ。
ろうじゃう　ナ籠城。しろにこもること。
ろうせい　ナ老成。
ろうそく　ナ蝋燭。
ろうだい　ナ楼台。たかどの。
ろうたん　ナ壟断。
ろうてい　ナ籠底。
ろうどう　ナ労働。
ろうにん　ナ浪人。
ろうや　ナ牢屋。ひとやをいふ。

めになりて、何事も、王手をいひてたちさりぬ）

わうてき ナ 横笛。よこぶえ。やうでう。

わうど ナ 王土。わうのくに。みかどのくに。

わうど ナ 黄土。きなみなるつち。埴といふ土なり。水にてさらして製しうるものにて、塗物などにもちふ。

わうに ナ 黄丹。染色の名。紅花と梔子とにてそめたるいろ。縫殿式。浅き梔子のごとき色なり。弾正式

わうにようご ナ 王女御。皇女などの、女御にならせたまへるを申す。源氏少女（兵部卿の宮きこえし、今は式部卿にて云々、御むすめ、ほいありてまゐりたまへり、おなじごと、王女御にてさぶらひたまふを）

わうねん ナ 往年。むかし。いぬるとし。すぎしとし。

わうのまひ ナ 王舞。てんぐのかほのごとく、はなのたかきおもてをいふ。神社の祭にかぶる仮面にて、猿田彦神の面に似せるものなりといふ。

わうばい ナ 黄梅。灌木の名。高さ四五尺ばかり、木に、枝あり、節ありて、すこし、蔓草に似たり。春のはじめ、黄いろにて、梅に似たるちひさき花さく。

わうばく ナ 黄蘗。木の名。きはだに同じ。

わうぼふ ナ 王法。わうのおきて。みかどのおきて。

わうばん ナ 椀飯。さんにもりたるいひ。いにしへ、饗應にもちひしものなり。源氏宿木（さんじき五十具、碁手のぜに、わうばんなどは、よのつねの様にて）讃岐二十（酒、肴、わうばんかなすゑてこれをすゝむ）

わうふく ナ 往復。とりやり。ゆきかへり。

わうぶん ナ 横文。よこもじに同じ。

わうへい ナ 横柄。おごりたかぶるをいふ。

わうへん ナ 往返。ゆくとかへると。

わうめい ナ 王命。わうのめい。みかどのおほせ。

わうらい テ 往来。ゆきゝ。ゆきゝのみち。

わうらいもの ナ 往来物。世話字、または、手紙の文などをあつめてかきたる冊子をすべてよぶとなへ。

わうれん ナ 黄連。草の名。かくまぐさ。茎の高さ一尺ばかり。葉ごとに、みつの葉つきて、冬にいたるまで枯ばむことなし。夏のころ、黄色なる花さきて、黄色なる実をむすぶ。根も、また黄色にて、節をつらねたるがごとし。この根は、常に、薬にもちふるものなり。

わうろく ナ 女王禄。正月十一日の公事なり。下文を見るべし。公事根源（むかしは、王四百二十九人、女王二百六十二人とさだめられて、餘年は、けふ、禄を給はりけるとぞ。女王禄と、字にはかきたれど、たゞ、王禄とぞよりよみて、女の字を略するぞ。口傳とするなり）

わうわう ヮ 往々。ときどき。ようく。

わうゐ ナ 王位。わうのくらゐ。みかどのくらゐ。

わおのれ カヘ 我己。なんぢ。のゝしりてよぶことば。宇拾十（くびは、刀をあてていふやう、わおのれが、人の命をたち、その肉を食などする者は、かくぞある）

わおもと カヘ 吾御許。わがおもと。なんぢにむかひて、そのをんなをよぶことば。今昔（これもまたおとなしくて、わおもとも、子をとられき）

わか ナ 少。わかきもの。わかき。わかし。源氏（わかの御心ありさまやと、らうたくみたてまつりたまひて）

わか ナ 和歌。やまとうた。みそひともじのうた。拾遺（康保三年、内裏にて、子日せさせたまひけるに、殿上のをのこども、和歌つかうまつりけるに）

わが カヘ 吾。我。あが。われが。われの。万三（ひさかたの、あめゆく月を、つなにさし、我おほきみは、きぬがさにせり）神楽歌（みてぐらは、我にはあらず、あめにます、とよをかひめの、みやのみてぐら）

わが カヘ 我。なんぢが。鄙語などのひとのことば。

わかい ナ 和解。なかなほりに同じ。

わかい テ 若。わかしを見るべし。

わかいしゆ ナ 若衆。わかきひとをよぶことば。

わがいへ ナ 我家。催馬楽の曲の名。催馬楽（和加伊倍は、とばりちやうをも、たれたるを）

わかいもの ナ 若者。わかいしゆといふに同じ。

わかうかのめ ナ 若宇迦能売。とようけびめに同じ。

わかうど ナ 若人。わかきひと。伊勢（むかしのわかうどは、さるすけるものおもひをなんしける）

わかえ ナ 若枝。わかきえだ。堀川次郎（賤の男が、かりてそやせる、ならつゞじ、若枝に花の、さきにける哉）

わかえびす ナ 若夷。としのはじめにまつるえびす。年の

はじめに、夷子の像をかきてうりありく事あり。

わかおひすがた ナ 若生姿。をさなきすがた。隆信集（ひとのむすめのいときなきをみて云々、なほ、このわかおひすがたをすれがたかりけれど）

わかおや ナ 若親。わかきおや。空穂蔵開（御くしゆりかけさり、わかおやも、いづれとなくめでたし）

わがかど ナ 吾門。わがかど。万十二（和加々都の、五本柳、いつもいつも、おもがこひすな、なりましつしも）

わがかどに ナ 我門爾。催馬楽の律の曲の名。催馬楽（和加々止爾、わがかどに、うたもののすそぬれ、きたるのすそぬれ、あさなつみ、ゆふなつみ）

わがかどを ナ 我門乎。催馬楽の律の曲の名。催馬楽（和加々止乎、とさんかうさん、ねるをのこ、よしこそさるらしや、よしこそさるらしや）

わかかへで ナ 若雞冠木。襲の色目の名。表は淡萌黄にて、裏は薄紅梅なるものをいふ。また、表は薄青に、裏はくれなゐなりともいへり。胡曹抄、装束抄

わかがへに ソ 若きかひに。万十六（いゆ鹿を、つなぐ河辺の、わかくさの、身の若かへに、さねし子等はも）

わかがへる ワ ヒトリ ロ 若返。わかきにかへる。をさなびわかくなる。万六（いそうなの、また若返、あなにやし、ならのみやこを、またもみんかも）

わかかへるで ナ 若鶏冠木。わかきかへるで。このきのかへるで。万十四（こもちやま、和可加敝流氏の、もみづまで、ねもさ我れ思ふ、汝れあどか思ふ）

わかがみ ナ 若髪。わかきひとのかみ。源氏初音（いにしへ、さかりとみえし御若髪も、年頃におとろへゆき）

わかがらう ナ 若家老。わかどしよりに同じ。

わかぎ ナ 若木。おひたちて、まだとしへぬき。万四（春雨を、待とはなしや、わが宿の、若木の梅も、未含めり）

わかぎ ナ 若気。わかきこゝろ。としをとらぬこゝろ。

わかぎみ ナ 若君。をさなききみ。源氏若紫（この若君、をさなごゝちに、めでたき人かなとみたまひて）

わかきんだち ナ 若公達。わかききんだち。源氏胡蝶（殿上の若公達などうちつれて、あまたたちそひや）

わがく ナ 和学。こくがく。みくにまなび。

わかくさ ナ 若草。めどちのくさ。伊勢（うらわかみ、ねよげにみゆる、若草を、人のむすばん、事をしぞ思ふ）

わかくさ ナ 若草。襲の色目の名。表はうすあをにて、裏はこきあをなるものをいふ。胡曹抄、装束抄

わかくさの サクラ 若草之。わかくさは、わかくうるはしくして、人にめでらるゝものなれば、つまにひめづらしおもひつくなどにかけていふ。古事記（和加久佐能、都麻能美許登、ことのかたらひごとも、こをば）万廿（若草乃、新手枕を、まきそめて、夜をやへだてん、にくゝあらなくに）同三（まそかゞみ、わらぎてみれど、春草之、猿目頰四す、わがおほきみかも）同廿（あおなみの、おもひまつむし、若草乃、四眼西、きみによりこひやあるさん）

わかくさやま ナ 若草山。山の名。大和国、添上の郡、春日山の北にあり。好忠集（春日野の、わかくさやまに、たつ雉子の、けさの羽音に、目をさましつる）

わかぐり ナ 若栗。わかきくり。くりのみの、いまだおゆくせぬもの。夫木廿九（世の中は、秋になりゆく、わかぐりの、まぶるくや、ゑみてすぎなん）

わかげ チ 若気。わかぎ。わかきこゝろ。

わかごま ナ 若駒。わかきこま。源氏（にほどりに、形をならぶる、若駒は、いつかおやめに、ひきわかるべき）

わかごも ナ 若菰。めどちのこも。古今（山城の、淀のわかごもは、かりにだに、こぬ人たのむ、我ぞはかなき）

わかごもを マクラ 若薦乎。わかごもは、刈りとるゆゑに、かりにかけていふ。万三（殯殿乎、獵路乃小野に、しゝこそは、いはひをろがめ、鶉こそ、いはひもとほれ）

わかざかり ナ 若盛。わかきさかり。源氏椎本（そのかみの、わかざかりとみ侍りし人は、数すくなくなり侍りにける末の世に、おほくの人におくれ侍る命を）

わかさぎ ナ 若鷺。魚の名。長さ五六寸ばかり、河、また、海よりいでくるものにて、形、たなごに似て、色あをし。

わかざくら ナ 若桜。わかぎのさくら。神楽歌（おほきみの、ゆきとるやまの、和何佐久良、おけく）

わかさくら ナ 若桜。履中のみかどの大和の宮の名。

わかし サヒ 若。いできて、ときをふることすくなし。また、をさなきをいふ。つたなきをいふ。この語は、今は、

とりいで、しだいはいふ。万廿（妹も背も、和可佐子どもゝ、なおどちは、さわぎなくらん）源紅梅（かきあそせさわぎかけれど、拍子たゞふす上手めきたり）

わかじに　ナ。若死。とし若くて死ぬるをいふ。風雅集（このひとゝ云ゝ、中納言にてわかじにゝして）

わかしゆ　ナ。若衆。わかうど。さて、ちごの、かほのうるはしきものにて、てらなどにてつかふもの。見聞集（友の若衆をかたらひて、日々に幾度もつかみあひ）

わかしらが　ナ。若白髪。わかきひとの白髪。

わかす　ワ。カテ。四。沸。わかしむ。万廿（さすなべに、湯和可世子ども、櫟津の、檜橋よりこむ、きつにあむさん）散木（湯わかして、人のむかへければまゐりけるに）

わかす　サ。カケ。シニ。沸。わかしむ。榮花錦玉（いゝで、湯すこしおみんとおぼせらるれば云々、かねやすは、たゞとくくわかせてまゐらせよと、女房いひければ）

わがせ　ナ。我兄。わがきみ。わがぬし。俗には、女の、男をさしみてよぶにいへども、男どちにてもまたいふ。

わがせこ　ナ。我兄子。わがせに同じ。万廿（和我勢古が、国へましなば、時鳥、なかん五月は、さぶしけんかも）

わかたう　ナ。若黨。としわかきさむらひ。

わかたか　ナ。若鷹。わかき。鷹の、野にてそだちたるもの。和名（鷹、廣雅云、一歳名之黄鷹、浴云和加太加）

わがたたみ　マクラ。我疊。わがたゝみ、たゝみをいふよしは、同じ。よて、たゝみをいふより、へにかけていふよしは、ともざうみの所にいへるがごとし。万八（吾盤、三面乃河原の、瀬のうらは、かはおりなると、なく蛙かも）

わかだち　ナ。若立。ひこばえ。夫木廿（かれたてる、柳のくひぜの、若立は、いろづくとみし、葉ぞちりぬる）

わかだつ　ワ。ヒトリ。四。若立。ひこばゆ。わかくみゆ。枕草七（柳の木などのわかだちて、いとわかやかにさしいでたる、片方はあをく、いま片枝はこくつやゝかなど）

わがたつそま　ナ。我立杣。わがすむやま。わがゐるやまぞら。千載（おほけなく、うき世のたみに、おほふかな、わがたつそまに、すみぞめのそで）

わかち　ナ。分別。けぢめ。とりわけ。

わかちめ　ナ。分目。わけたるところ。

わかつ　ワ。カケ。四。分別。わけてをなう。わくるにもくばりなす。源紅葉（きんだち、けいしなどをもじめ、さるべきかぎり、ところもとなかちくつかうまつらせたまふ）土佐（としごろ、よくくらべつるひとゞくなん、わかれがたくおもひて、ひめもすにとかくしつゝ）

わかづく　ワ。ヒトリ。四。若付。わかやぐ。榮花山花（かゞなりうつくしうめでたくてわかづきしたまふべき人をとおぼしうしてしもいみじき事をせさせたまひ）

わかつり　ナ。機。たるの、あやつりてゆくところ。それのからくりのところ。和名（機云々。機坊之登和加豆利）

わかつる　サ。カテ。四。機。あやつる。わざつります。

わがどう　カ。我等。われら。吾輩の人のいふことなり。

わかどころ　ナ。和歌所。別當、開闔、寄人などの官人あり。歌の撰集の事をつかさどるところにて、村上のみかどの天暦のころ、はじめておかせたまひたり。

わかとし　ナ。若年神。わかやまどの時の御子にて、稲をはじめて、たなつものをまもらせたまふ大神なり。

わかどしより　ナ。若年寄。幕府の、老中につぐもの。

わかとの　ナ。若殿。わかきみ。としわかきとの。

わかどり　ナ。若鳥。ひなどり。としわかきとり。

わかな　ナ。若菜。わかくさの、もろのもじめ、つみて、くひものとするもの。万八（難波江に、人のゆければ、おくれ居て、春菜つむ子を、みるがかなしさ）大和（正月の七日の日、若菜たてまつりたまひけるに）

わかな　ナ。若魚。わかなごに同じ。

わかなご　ナ。若魚子。ぶりのちひさきもの。

わかなへ　ナ。若苗。さなへ。夫木七（君がため、にまのさとびと、うちむれて、とるわかなへや、万代のため）

わかなへいろ　ナ。若苗色。染色の名。若色をいふ。源氏物語求抄（きさ、襲の色目の名にて、表裏、きるは、濃きもえぎなるをいふ。草薙　源宿木（なでしこと、おぼしきほそなが、わかなへいろのこうちき、しゐり）

わかぬ　ワ。カケ。シニ。綰。まろくたわめなす。大和（かうぞしき紙に、髪を、すこしかいわがねてつゝみけり）

わかね　ナ。若音。わかきこゑ。夫木二（鶯の、宿まためそむる呉竹は、まだふしなれば、わかねなくなり）

わかね　ナ。若根。わかくさなどのね。金葉（難波潟、蘆のわかねの、しげければ、心もゆかぬ、船出をぞする）

わかのうら　ナ。和歌浦。地の名。紀伊國の海部の郡にあり。古今（わかのうらに、しほみちくれば、かたをなみ、あしべをさして、たづなきわたる）

わかば　ナ。若葉。めざしのは。あたらしくなりて、わかくもえいでたるは。風雅（ひさかりあがる、やまのすそのの、ゆふぐれは、わかばの末を、わたるかぜぞふく）

わかばえ　ナ。若生。わかだちに同じ。榮花若枝（年をへて、まちつる松の、若生は、うれしくあへる、ねの日子）

わかびと　ナ。若人。わかうど。源梅枝（ゆゝしと、そろうどきさまふわかうど、世におほかりける）

わかぶ　ワ。ヒトリ。カニ。若。わかくみゆ。源夕顔（ものおそろしうこそあれと、いとわかびていへば）

わがふ　ナ。和合。なかひにむつびあへるをいふ。

わがへ　ナ。我家。わがいへ。万五（わがの野に、なくやうぐひす、なつけんと、和何幣のそのに、梅が花さく）

わかまつ　ナ。若松。としのわかきもちゐる、こまつ。

わかまつ　ナ。若松。襲の色目の名。こうがさねに同じ。

わがまま　ナ。我儘。ほしいまゝにふるまふをいふ。世継五（わがまゝなる御心にて、ひがくしき事どもし）

わがみ　カヘ。我身。なんぢ。あるゞきのひとをよぶことば。

わかみづ　ナ。若水。としのはじめに、はじめてくむみづ。年中行事歌合（春をえて、けふたてまつる、わかみづは、千年のかげや、まづうつらん）

わかみどり　ナ。若緑。まつのわかきのみどり。

わかみどり　ナ。若緑。襲の色目。まつがさねの異名。四季色目

わかみや　ナ。若宮。皇子。また、皇族の御子のいとけなくおはしますを申す稱。また、その神社にまつりたる神の御子を、社を異にしてまつりたるところ。

わがみをつむ　ワ。ヒトリ。シニ。我が身にくらべて、ひとのうへをあはれむ。山家集（たのもしき、道にはいりて、ゆきしかど、わが身をつめば、いかゞとぞおもふ）

わかむしや　ナ。若武者。としわかきむしや。太平九（十六になりける若武者、父をうたせじとやおもひけん）

わかむらさき　ナ。若紫。あらたにおひいでたるむらさき。後撰（まざきから、おもひそめてき、わかむらさきの、ねをたづねらん）

わかん　ナ。和漢。やまとともろこしと。

わかん　ナ。和姦。をとこをんなのわたくしのたはけ。

わかんどほり　ナ。皇族。みかどのちすぢ。落窪一（わかんどほりの君とて、母もなき御むすめおはす）空穂梅花笠（御めのと三人、一人はわかんどほり）

わかめ　ナ。若布。海草の名。ひろめのたぐひのやはらかなるもの。万十四（ひるがさの、磯の和可米の、たちみだえ、我をまつなも、きぞもこよひも）

わかもの　ナ。若者。としわかきひと。

わかやかなり　サ。若。わかし。めづらし。なまめかし。枕草六（もえぎのかさもんのわかやかなる御衣たてまつりて、扇を、つとさしかくしたまへり）

わかやかに　ソ。若。わかく。めづらしく。をさなく。源宿木（うちおほどきて、わかやかにてまぎるゝ事なきほどに）

わかやぎだつ　ワ。ヒトリ。四。若。わかくみゆ。枕草二（安親の宰相なども、わかやぎだちて、すべてたふとき事のかぎりもあらずと、おかしきものみなり）

わかやく　ナ。若役。わかうどのつとむべきやく。

わかやぐ　ワ。ヒトリ。四。若。わかくみゆ。わかくもてなす。散木（としおいぬらんをおもふ人の、としをかくして、わかやぐをきゝて）拾遺三（かひぐしく、水のたちなみに、わかやかせたまひて、やがて院號ありしかば）

わかやまくひ　ナ。若山咋神。むやまどの時の御子。

わかゆ　ナ。若鮎。わかきあゆ。万代（わかゆつる、玉島川の、やなぎかげ、夕風たちぬ、ふなむしかへらじ）

わかゆ　ワ。ヒトリ。シニ。若。わかくなる。万六（いにしへゆ、人のいひくる、おいびとの、變若とふ水ぞ、名におふたきつせ）拾見集（よろづ代も、ひとのわかゆる、菊のうへは、まゆをひろげて、とをきつみな）

わかゆゐ　ナ。若湯坐。ゆゑに同じ。古事記

わかり　ナ。了解。こゝろにさとらるゝをいふ。

わがり　ナ。我許。わがもと。わがいへ。万九（久方の、天の河瀬に、船うけて、こよひか君が、我許来まさん）

わかる　ワ。分。解。さとらる。あきらく。いでく。

ひかる　ワ、ヒトリ。シニ分別。ことなれぐゝはなる。ひとつくゝはなる。この語は、地方よりて、ひとれるを下二段にいふ。万葉「世の中はつねかくのみと、和可礼ぬる［illegible］」

ひかれ　ナ、別れ。［illegible］

ひかれいづ　ワ、ヒトリ。シニ分出。ひとれていづ。

ひかれぢ　ナ、別路。ひとれてゆくみち。古今「［illegible］」

ひかれのくし　ナ、別櫛。いつきのみや［illegible］

ひかれのそで　ナ、別袖。ひとれをなしみて、なみだをのごふそで。［illegible］

ひかれのきぬ　ナ、別衣。［illegible］

ひかれのみち　ナ、別路。ひかれぢに同じ。［illegible］

ひかれみち　ナ、分道。［illegible］

ひかれめ　ナ、分目。ひとれめ。ひとかれめ。

ひかれる　ワ、ヒトリ。シ二別。ひかるを見るべし。

ひかれせかれに　ア、別々。ことなれぐゝに。べつべつ。

ひかをかし　ヤ、ワ、若樫。［illegible］

ひかかぜ　ナ、若風。［illegible］

ひかなえ　ナ、若苗。［illegible］

ひかまる　ナ、分丸。［illegible］

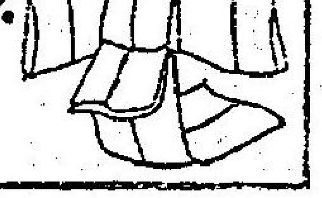
ひかなる　ナ、分。［illegible］

ひがもの　ナ、鰥寡者。［illegible］

ひがもち　ナ、別道。［illegible］

ひかあがる　ワ、ヒトリ、シニ涌騰。ひきたちあがる。

ひかあけ　ナ、四開。［illegible］



和名（［illegible］）

ひかあけのころも　ナ、闕腋衣。ひかあけに同じ。

ひかいらつこ　ナ、若郎子。［illegible］

ひかいらつめ　ナ、若郎女。［illegible］

ひかいへ　ナ、腋家。［illegible］

ひかえかる　ワ、ヒトリ。シ二枝分。［illegible］

ひかえる　ワ、ヒトリ。シ二涌返。［illegible］

ひかがみ　ナ、腋鏡。［illegible］

ひかくさ　ナ、腋臭。［illegible］

ひかくね　ナ、腋根。［illegible］

ひかざし　ナ、腋差。［illegible］

ひきだち　ナ、腋立。けるじのぼらに同じ。

ひきづき　ナ、腋突。［illegible］

ひきつけ　ナ、腋付。［illegible］

ひきつぼ　ナ、腋壺。［illegible］

ひきね　ナ、腋寝。［illegible］

ひきはら　ナ、腋腹。［illegible］

ひきぼね　ナ、腋骨。［illegible］

ひきまへ　ナ、［illegible］

ひきまくら　ナ、［illegible］

ひきみ　ナ、［illegible］

ひきみち　ナ、［illegible］

ひきめ　ナ、［illegible］

ひきもと　ナ、［illegible］

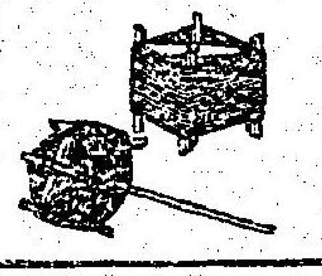
ひきもとに　［illegible］

ひきあか　［illegible］

ひきさし　［illegible］

ひきすがく　ワ、ヒトリ。［illegible］

ひく　ナ、［illegible］



ひく　ワ、ヒトリ。四、涌。［illegible］

ひく　ワ、カリ。分。別。［illegible］

につけつゝ、うつる心こそ。千載（に逢ひもせ、わけぞ
わらん、梅の花それともみえず、春の夜の月）

わぐ　ワ、ギ、グ、分。別。わかれしむ。まされざらしむ。けち
めをつく。この頃、地方によりて、わけるを下一
段にいふ。冬の夜の月。夫木廿（天風、おなじ空より、やる雲に光
をわくる、冬の夜の月）拾遺愚草（勝るされ、おぼる
袂の、露そひて、わけつる野辺に、夜もふけにけり）

わぐ　ワ、ガ、ギ、ク、綰。わがぬ。まろくたるのさす。

わくご　ナ、稚子。若子。わかきをのこ、わらはのたぐひ。
万廿（稲つけて、かゝるわが手を、こよひもか、殿の稚
久胡が、とりてなげかん）武烈紀（みなそゝく、おびの和
倶胡な、あさり、づなありと）

わくて　ナ、塞手。わくてといふに同じ。夫木二十（我がから
わくての紐の、糸四、命なくて、年をへぬらん）

わくぢ　ワ、カ、腿緒。わくむ。わぶ。空穂物語（まさの君の君は
を遂て、みなからわみてもしるめらし）宇治十（

わくでら　ナ、璞頭。ものゝまさほおぼろなるをいふ。
薄色の衣の、うかしらに、香しきをまらせ、さらけれ

わくぶり　ナ、蠕蚓。ひきくさるなるをいふ。西鶴によ
ふらつなるからわみみて、酷まあそみて

わくむすび　ナ、蠕蛇結。きようせびのにに同じ。

わくん　ナ、句鵑。やまさるみ。みくにしのよみ。

わくめだた　ワ、蠍通。たまさるに、万三（和久真巖良、人を
いれめるを、ひとなみに、あれもつくるを）夏炒（なる

りの、念むて、玄翔をおしこつめくそもつゝきに、わ
くちの人にあるは、いやいとつそおもひつれ）

わけ　ナ、苔。すぢみち。ぬるを。まはの名前をいふ。

わけ　ナ、接。たとも、ひとをいふみしてよびたるなり
とぞ。万八（戯奴がため、わが手もすまに、春の野に、
ぬけるつかなぞ、めしてえませ）

わけ　ナ、誤。まげ。もとうの文のもくさるもの。

わけあひ　ナ、鏡合。わけ。わけいり。わふな。

わけいる　ワ、ヒ、レ、ル。分入。わけてはいる。拾遺愚草（わけ宿
の、光と去りて、分れはれ、月影なふし、窓山達の秋）

わけがれ　ナ、さるならず。紫花玄（風官の御はく、
わけしき、ここのひとひとのそ、みなむすびふろくて、旅枝に
つけて、成入ふるもうらず）

わけから　ナ、さるならず。紫花初（わちら入々れ、目ふ
めくら、お逢くゝ世のつねのわけぎらなそいふもの。

わけぎ　ナ、分葱。ひともじの一種、ちひさきもの、春の末
根をわけてうゑれば、夏の頃、よくまげるものなり。

わけて　ワ、ス、レ、ル。分。ひとわけてよる。ことの。

わけとり　ナ、見習。ひとしくふみしてふるものな。ひと
りさきしみ、ひとりきうむたるなをいふ。

わけまへ　ナ、分田。わけてくわけるけすなり。

わけみち　ナ、岐路。すぢみち。ものごのわかれみち。

わけめ　ナ、分目。わくるさかひ。わけさるところ。決式は（ひ
とびとみのなし、かわりなく、わけめ、かんなし、なきに云
や、つくりさきりふくをせ、とみそ）

わけもの　ナ、褪物。（きをとげてつくりものなり。

わける　ワ、ケ、シ、分割。わかれしむ。わくを見をみぞ。

わご　ナ、稚子。若子。わくごに同じ。

わご　ナ、我子。わが子。これ。万十（かけまくも、そのちなをふる事も、
かしこし、かへなる、和其おほきみの、うちなびく、そる
のもしめれ、やちくさに、たなきなびき、山みれて、み
のきもしく、河みれて、みのさやけく）

わごせ　ナ、我御前。わなたをさしみていふことば。平
家一（扇合の者こて、すこみいされまるをせしな、
わごぜの申さまよって召さされてる候やう）

わごん　ナ、和琴。やまとごとに同じ。

わごりよ　ナ、我御料。わなた。貴前の人のいふ詞。

わごれ　ナ、我御料。なんぢ。そなた。幾内の人のいふ語。

わざ　ナ、業事。ひとのする、しわざ、よろくむすびするをいふ。

わざ　ナ、業事。こと。わざ。わざくれ。万十（人麻呂、されど
もまことに、おもひかへ、人もことつへ、この由を、うしと
く時の、むしろしらず、はらめの行事を、古今序（世の中
にある人、ことわざしげきものなれば）

わざ　ナ、法事。なりそひ。ほふじのひとのとぶらひ。伊勢（わざ

しければ、ゝするわざもなりけり）

わざ　ナ、法事。ほふじ。なきひとのとぶらひ。古今（下出
雲寺に、人のわざしける日、真静ほうしの導師
にていひける詞を、歌によみて、小野小町が許に）

わさいひ　ナ、早飯。わさきのいねのいひ。

わさきた　ナ、遊臥。わさなどの、ゆくかなくうかひし
てあるをやりらる。字鏡（題和佐、是標舵（荒師）

わさき　ナ、稲先。うのくびに同じ。

わざごと　ナ、作用言。動詞。わざをいふことばをいふ。
をを。みるきくうつ、とるなどのたぐひ。

わさぶすき　ナ、早講。すきのそやく、ほをいだしたる
もの。輯政集（いでにけり、あさの大野の、わさぶすき
まいかなけらの、たまそなもなな）

わさだ　ナ、早田。いねの、そやくいでたる田。万（石
上、ふるの早田を、ひでずとも、まかさもまさよ、もり
つゝをらん）神樂歌（あげまきを、和佐多にやりて）

わさつの　ナ、痕杖。かせづゑ。つゑのさきに、わさのつの
をつけるもの。夫木（わさげの丈、かたにかけさ
る、かもさろを、けふのみのれを、まちつらけり）

わざと　ツ、故。ことさらに。まめて。とりわけて。源氏帚木
る事、さねんにおぼるるとも云々。耳にも、目にもとま
いで、よ、わざとなくきりつくさんなど

わざとがまし　サ、ブ、故さらめきたり。紫花

ざとさきまし、やさしなくもてなしさとく

わざとだつ　ワ、ヒ、レ、ロ、故さらめきてみゆ。枕草十（節な
る人まもとはずいて、わざとどうちて、小舎人童のつまぐ
しきを、是ちらくしひきせていゝちあきて

わざとめく　ワ、ヒ、レ、ロ、故さらめきてみゆ。源初（わざ
めきよしあるひさけに、侍従な

わさなへ　ナ、早苗。さなへ。好忠集（わさなへを、宿もる人
に、まかせおきて、我れ花もる、いそぎをぞする）

わざはひ　ナ、災。禍。まがごと。よろしからぬこと。
むべきこと。和訓栞

わさび　ナ、山葵。野菜の名。葉のさまます
こし、ふきに似て、ひとりつやゝかなり。
根は、まるみなる節のごとき
さきて、味、からしに似たり。和名（山葵和名和
佐比）

わさびおろし　ナ、山葵卸。わさびをすりくだくもの。形
ちひさき笠のごとくにて、面に、刺をつけたり。

わざびと　ナ、俳人。わざをきするひと。神代紀（俳人）

わさほ　ナ、早穂。わさきのいなほ。万八（吾妹子が、業と
つくれる、秋の田の、早穂の縵、みれどあかぬかも）

わざもの　ナ、和物。はさけのものをそなへていふ。

わざもの　ナ、業物。利刀。けらのもの。きときかな

わざわざし　ツ、故さらめきたり。わざとめきし。頼始（何ゟ

れ、わざくしく、かまへもありなんなど
いふ）大鏡下（入道殿の御供を申さんと思ふほどさ
云々、わざくしく、わざくしうきゆれど）

わざをぎ　ナ、俳優。わざをきのたぐひ。かんがりのきわ
なとをなしてうるひまなとりふ。神代紀（俳優）

わし　ナ、鷲。鳥の名。かたち、鷹に似て、鷹よりもおほ
きく、翅みじかく、尾なくして、そのおほきなるは、人
をもつかみて、くふ事ありといふ。万四十（筑波根に、
かなく、和之の、音のみをか、なきわたりなん、あふと
いなしに）和名（鷲、大鵬也和名於保和之）

わし　カ、私。わたくし。せつや。

わしづかみ　ナ、鷲摑。わしの、ものをつかみとるごとく、い
きほひたけく、あらくしくつかみとるをいふ。

わしのたかね　ナ、鷲高嶺。わしのやまといふに同じ。山
家集（さとりえし、こころの月の、あらはれて、わしの
たかねに、すむにぞありける）

わしのみね　ナ、鷲峰。わしのたかねに同じ。新後拾（靈の
笙、八年の秋の、月を見て、その光ぞ、心にすむ）

わしのやま　ナ、鷲山。天竺にある山の名。わしの山ともいふ。釈迦
の、道をときしところ。後拾（わしの山、へだつる雲
や、ふかゝらん、すむなる月をみぬかな）

わしのやま　ナ、鷲山。山の名。近江にあり。拾玉（鷲山、
音のみきし、峰なるに、うすき雲の、跡の有りける）

わしん　ナ、和親。むつび、したしむをいふ。

わしりで ナ。走出。はしりいでに同じ。雄略紀（こもりくの、はつせの山は、いでたちの、よろしき山、わしりでの、よろしき山の、こもりくの、はつせの山は）

わしる ワ。ヒトリ。四。走。奔。はしるに同じ。西国寺摂百首（身をまかせ、つられにふさぬ、狩の鳥、つばさをたれて、世にはわしりぬ）建武年中行事（内弁、のんのつかさをめす、宛唯して、わしりすゝみて）

わす ワ。ヒトリ。カ。和。やはらぐ。なれむつむ。

わす ワ。カケ。カ。和。ひとのこゝろにこたへて、こゝろをつくる。散木（鹿の声をきゝて、俊重がよめる、山里は、つまよぶ鹿の云々、これを和し侍りけるうた）

わする ワ。カケ。四。忘。おぼえざることなうしなふ。こゝろにとゞまらずなる。万十二（和須良牟と、野ゆき山ゆき、われくれど、わがちゝはゝは、わすれせぬかも）

わする ワ。カケ。シ二。忘。おぼえざることをうしなふ。こゝろにとゞまらずなる。この語は、地方により、わすれると下一段にいふ。万一（おほどもの、みつの浜なる、忘貝、家なる妹を、忘て思へや）伊勢（かたみこそ、今はあだなれ、これなくは、わするゝ時も、あらましものを）

わすれがたみ ナ。忘れぬかたみ。かたみとなりて、わすれがたきものぞ。古今（あるでこそ、おもなん中は、わすれなめ、そをだにのちの、わすれがたみに）

わすれがひ ナ。忘貝。貝の名なるべけれどさだかならず。但し、今は、おほくは、うきをわするゝなぐさみにひろふ

かひをいふ。万二十（和歌の浦に、袖さへひちて、忘貝、ひろへど妹は、わすられなくに）

わすれぐさ ナ。忘草。草の名。くわんざうに同じ。万三（忘草、わが紐につく、かぐやまの、ふりにし里を、わすれぬがため）和名（萱草、一名、忘憂、和須礼久佐、俗云如環藤二音）

わすれぐさ ナ。忘草。草の名。おしの異名。

わすれじも ナ。忘霜。春の末におく霜をいふ。

わすれぬよすが ナ。不忘縁。むかひめをいふ。源氏帚木（さるところにても、わすれぬよすがとおもうたまへんは、たのもしげなく、さしすぐいたりと、心おかれて）

わすれみづ ナ。忘水。ものかげなどをながれて、ひとにはしられぬみづ。詞花（すみよしの、浅澤小野の、わすれみづ、たえだえならで、あふよしもがな）

わすれる ワ。カケ。シ一。忘。わするを見るべし。

わせ ナ。早稲。はやくみのるいね。万十（をとめらは、ゆきあひの速稲を、かる時に、なりにけらしも、萩の花さく）和名（稲云、今按、稲熟有早晩、取其名、和名早稲、和勢、晩稲、於久天）

わせあは ナ。早粟。はやくみのるあは。宇鏡（稷 和世阿和）

わせい ナ。和製。にほんにてつくりいだすもの。

わせだ ナ。早稲田。わせをうゑたるた。

わせんじやう カヘ。吾先生。そこ。なんぢ。宇拾十一（わせんじやうは、いかで、この鮭をぬすむぞといひければ）

わそう カヘ。吾僧。そうにむかひて、そのそうをよぶことば。宇拾十（わそうの、かしらやかひなにとりつきさ

りつる児どもは、誰ぞ、何ぞとといへば）

わた ナ。綿。繭。かひこのまゆを、やはらかにつむぎたるもの。また、くさわたをつむぎたるをもいふ。万三（しらぬひの、筑紫の綿は、身につけて、いまだはきねど、あたゝけくみゆ）和名（綿、和名、和太）

わた ナ。腸。はらわたに同じ。

わだ ナ。曲。うみ、かはなどの、めぐりいりてよどみたるところ。夫木廿（かはせには、おのゝつくる、ふしなを、ひとつにくさる、あさごほりかな）枕草十（なゝわだにまがりたる玉の、中とほりて、左右に、口あきたるが、ちひさきをたてまつりて）

わたいれ ナ。綿入。わたをいれたるころも。

わたう カヘ。吾党。そこ。なんぢら。宇拾十（仲胤、きゝて、やゝ、わたう、連歌をばつかぬとつけたるぞかし）

わたうし ナ。和唐紙。にほんにてすきたるたうし。

わたうち ナ。綿打。くさわたを、やはらかにうちなすたぐひ。また、そのわざをなりはひとするひと。

わたか ナ。魚の名。近江の湖水にいでくる魚にて、かたち、ますに似て、あおみ、ますよりはおとれり。

わだかまり ナ。蟠。こゝろのまがりくねりたるをいふ。

わだかまる ワ。ヒトリ。四。蟠。つぶらをくむ。くちなはの、まがりくねりてゐるをいふ。宇拾四（この蛇も、のぼりて、かたはらにわだかまりふしたれど、これをみつけたるひとなし）和名（蟠、和太加末流、龍蛇臥貌也）

わたぎぬ ナ。綿衣。わたいれ。わたをいれたるきぬ。枕草九（夏をばしるわたぎぬの、汗の香などかわきて、すずしのひとへはひきかさねてきたるもおかし）

わたくし ナ。私。おほやけならぬをいふ。おもてだゝぬをいふ。夫木六（旅をゆきし、跡の宿守、おのおのに、わたくしあれや、けさはいまだこぬ）枕草四（わたくしにも、いみじきよろこびいそぎなどかさらひて）

わたくし カヘ。私。われ。おのれ。義経記五（わたくしは、何のゐこん候はねば、一先おちさせたまふべし）

わたくしあめ ナ。私雨。あまぐれの、ときならずしてなりくふるをいふ。相模の箱根山などにて。

わたくしいくさ ナ。私軍。わたくしごとのいくさ。

わたくしごと ナ。私事。おほやけならぬこと。伊勢（伊勢の斎宮は、内の御使にてまゐれりければ、かの宮は、すきごといひける女、わたくしごとにて）

わたくしざま ナ。私様。わたくしごと。源須磨（わたくしざまには腰のべてなど、物のきこえひがくしかるべきを、今は、世中、ゆるさるべき身にも侍らねば）

わたくしもの ナ。私物。わたくしにもちゐるもの。だいじにおもふもの。そんなめのたぐひ。落窪一（心にまかせておぼすらんよりは、わたくしものにて、わがところにすませさせてまつらん）渡松四（こゝろやすきわたくしものなりやと、うれしうおぼえて）

わたくり ナ。綿繰。くさわたのさねをのぞくだうぐ。

わたけ ナ。綿毛。けだもののけの、わたのごときもの。

わたこ ナ。綿子。こどものきるわたいれのそでなし。

わたこ ナ。綿子。魚の名。近江の湖水にいでくる魚にて、身まろく、鰭ほそく、色あをく、脂おほく、腸にがし。

わたし ナ。渡。職。わたりに同じ。

わたし カヘ。私。わたくし。われ。おのれ。

わたしせん ナ。渡銭。わたしぶねにてわたらふぜに。

わたしで ナ。渡場。ふなわたしなどのところ。

わたしぶね ナ。渡船。わたしばの、ひとをのせてわたすふね。夫木廿六（わたしぶね、ゆきのたゆさは、あらずがれ、たびごとわたす、わたりなりけり）

わたしもり ナ。渡守。わたりもりに同じ。古今（ひさかたの、天の河原の、わたしもり、君わたりなば、かぢかくしてよ）和名（渡子和名和太之毛利、一云和太利毛利）

わたす ワ。カケ。四。渡。わたらしむ。佛足石歌（この御あとや、よろづひかりを、はなちいだし、もろくすくひ、和多志たまはな）堀川次郎（おぼつかな、からなでしこを、こゝまでは、たれかわたして、うゑそめけん）

わたす ワ。カケ。四。渡架。まるぶらしむ。万十（機物の、ふみきもちゆきて、天の河、うちなし渡、君がこんため）

わたす ツケ。ナリ。四の。渡。やる。とほす。万三（住の江の、えなつにたちて、見渡せば、むこの泊ゆ、いづる船人）

わたせ ナ。渡瀬。わたりぜ。かはせの、わたるべきところ。堀川百首（きりたちて、わたせもみえぬ、佐保川の、ち

るべれよその、ちどりなりけり）

わたたび ナ。水天蓼。灌木の名。またたびに同じ。また、きんまを見るべし。和名（木天蓼、和名、和太々非）同（藭蘿、本草云、藭蘿、一名、藭蘿、和名、和太々非）

わだち ナ。轍。くるまのたつところ。くるまのとほりたるあと。夫木廿九（なぐるまの、道の小野松、たやともせ、わだちもみえず、日はくれにけり）

わたつうみ ナ。渡津海。うみをいふに同じ。海は、人のわたるところなれば、わたつうみの意にて、かくいひならべるなり。伊勢集（わたつうみは、ふかきこゝろの、なかりせば、何かは君を、うらみしもせん）

わたつくり ナ。綿造。わうぶりのとき、わたをぬらして、なきがらをあらふひとをいふとぞ。日本紀神代紀（以鷦鷯為哭者、以鵄為造綿者）私記（ワタツクリ）

わたつみ ナ。渡津海。わたつうみに同じ。万一（渡津海の、豊旗雲に、入日さし、今夜の月夜、あきらけくこそ）

わたつみ ナ。綿津見。おほわたつみに同じ。

わたつみのかみ ナ。渡津海神。りうじん。うみをまもらせたまふかみ。和名（海神和名、和太豆美乃加美）

わたつみのくに ナ。渡津海国。たつのみやに同じ。

わたどの ナ。渡殿。ほそどのに同じ。源桐壺（うちはし、わたどの、こゝかしこの道に、あやしきわざをしつゝ）

わたなか ナ。海中。うみのうへ。万一（ありねよし、対馬のわたり、波中に、幣とりむけて、はやかへりこね）

わたぬき　ナ。綿拔。わたいれの、わたをぬきて、あはせぎぬとしたるもの。字鏡（袷、未絮衣也、合乃古呂毛、又和太奴支）

わたのき　ナ。綿木。草の名。くさわたに同じ。

わたのそこ　ナ。海底。うみのそこ。万七（綿之底、おきこぐ舟を、邊によせん、風もふかぬか、波たゝずして）

わたのそこ　ヤクラ。海底。わたのそこ、うみのそこなれば、ふかしにかけていふ。万五（和多能曽許、意枳都布可延の、うなかみの、こふのさらに）

わたのはら　ナ。海原。うみの、ひろくとほきところ。

わたぼうし　ナ。綿帽子。わたにてつくりたるぼうし。女の、婚禮のときなどにかぶるものなり。

わたぼうし　ナ。綿帽子。やはらかなるゆきの、わたのごとくまどふるものをいふ。東國、また九州にて、

わたばな　ナ。綿花。わたのつくりばな。男踏歌のとき、かざしにもちふるものなり。源竹川（にほひもなく、みぐるしきわたばなも、かざすひとがらにみわかれて）

わたまし　ナ。移轉。やうつり。ひきこし。著聞十一（室町御所を、光明峰寺入道殿、前備中守行親に仰せて修理せられけり、寛文三年十月二十七日御わたましあり）

わたん　ナ。和談。なかなほりのはなしあひ。

わたゆき　ナ。綿雪。わたのやうなるゆきをいふ。北國にて、

わたらす　ワ。ヒトリ。四。渡。わたりたまふ。おはします。きさきの、ゆきたまふ。源紅梅（なりよくわたらせたまへると、よろこびきこえさせたまふ）著聞一（この客人は、誰にてわたらせたまひしぞと、人にたづねければ）

わたらひ　ナ。渡。よわたり。なりはひ。夫木三十（賤の男が、おのがわたらひ、いとなみて、炭竈、ゆききしるなり）大和（年頃、わたらひなども、いとわろくなりて、家もこぼれ、つかふ人なども、さくある所にいきつゝ）

わたらひぐさ　ナ。渡種。わたらひのくさはひ。よわたりのまとゐ。躬恒集（たまくしげ、ふたみの浦に、すむあまの、わたらひぐさは、みるめなりけり）

わたらふ　ワ。ヒトリ。四。渡。わたるに同じ。空穂祭使（これは、みな、あてびと、すきものども、いさらみ、まさにわたらふ心もなし、たゞ、物の音を、ふやうずにひき、和歌を、いさらみは、人のそしりはとらじ）

わたり　ナ。渡濟。ふねをかよはして、ひとをわたすところ。夫木廿六（にほてるや、矢橋のわたり、する船を、幾度みつる、瀬田の橋守）和名（渡、和名和太利、和渡瀘也）

わたり　ナ。邊。あたり。ほとり。催馬楽（やましろの、こまのわたりの、うりつくり、われをほしといふ、いかにせんなよや）源夕顔（六條わたりの御忍びありきのころ、内よりまかでたまふなかやどりに）

わたり　ナ。直徑。さしわたし。すぐゝさしわたしたるへだゝり。

わたりあふ　ワ。ヒトリ。四。渡合。あひてはなりてたゝかふ。

わたりがは　ナ。三途川。さんづがは。古今（なく涙、あめとふらなん、わたり川、水まさりなば、かへりくるがに）

わたりがひ　ナ。渡貝。たまきりの一種。おほきなるもの。

殻は、紫ばみてつやゝかなるに、花形の文あり。

わたりがゆ　ナ。渡粥。椀飯。わうばんをいふ。雨栄（渡粥の光武紀よみをふる日、わたりがゆの椀おほきにまうけて、ふみつくる、まゝのあしさ）

わたりぐさ　ナ。渡草。わたりものといふに同じ。

わたりぜ　ナ。渡瀬。かはぜのわたるべきところ。古事記（ちはやびと、うぢのわたりに、和多理是に、たてる、あづさゆみ、まゆみ、いきらんと、こゝろはもへど）

わたりぞめ　ナ。渡初。はしなどの、あらたにできたるとき、いはひのぎしきに、はじめてわたるをいふ。

わたりで　ナ。渡出。わたりぜに同じ。仁徳紀（ちはやびと、宇治のわたりに、和多利瀘に、たてる、梓弓まゆみ）

わたりのやま　ナ。渡山。山の名。石見にあり。万二（おほふねの、渡乃山の、紅葉の、ちりのまがひに）

わたりば　ナ。渡場。ふなわたしなどのところ。

わたりぶね　ナ。渡船。わたしぶね。わたしぞの、ひとをのせてわたすふね。夫木三十（わたりぶね、それともみえず、あさぼらけ、みつのなかけて、かすむ河波）

わたりもの　ナ。渡者。ほうこうにんの、ねんきをとりかへて、つぎつぎにほうこうしてありくもの。

わたりもり　ナ。渡守。わたりのまもりをするひと。また、わたしぶねのふなをさ。万十（渡守、ふねわたせをと、よぶこゑの、いたらねばかも、かぢのおとせず）和名（渡子、和名和太之毛利、一云和太利毛利）

わたる　ワ。ヒトリ。四。渡。こなたよりかなたにゆく。こえてゆく。すぎてゆく。うつりてゆく。神功紀（遠方の、あらまつむら、まつむらに、和多利ゆきて）万廿（心には、思ひほこりて、ゑまひつゝ、和多流あひだに）

わたる　ツゲ。四の。下二。渡。なべてつゞきゆく。万十（天の原、ふりさけみれば、天の川、霧立渡、きみは來ぬらし）

わなたと　ツ。戦々。おそれて、ふるふさまにいふことば。狭衣二（まろびいできたまへれど、たゞ、御丁のかたびらにまとはれて、さくりやつけられんとおぼすに、おそろしくて、わなゝくとふるはれながら）

わちがひ　ナ。輪違。紋所の名。ふたつの輪の、うちちがひたるさまをゑがきたるもの。

わちき　カヘ。私。わたくし。東國の遊女のいふことば。

わつか　ナ。サ。纔。わづかなるもの。わづかなり。

わつかなり　サ。纔。すこしなり。いさゝかなり。

わつかに　ツ。纔。すこしに。いさゝか。榮花鶴（ひなびけの、すけさるにいふ、云々、たいひとつたてて、きろきたうせんに、おものひめおきてすこしもりて）

わつかやま　ナ。和豆香山。山の名。大和にあり。万三（ちろふに、とねりよそひて、和豆香山、みこしたらして）

わづくる　ワ。ヒトリ。四。輪作。わのごとくまろくなる。

わつそく　ナ。太刀を、すぢらひにおふをいふ。武家故實（太刀を、わつそくにかけると申すは、まばりかけたる如くに、右肩より、左脇の下へかけるを申す）

わつと　ソ。泣きたつこゑ。おめん物語（そのおとにて、わつといふてなく聲が、よなくしておじやつた）

わつな　ナ。羂。わらなはのくゝりてよぶとなへ。

わつぷ　ナ。分賦。わりつけ。わりあてし。

わづらはし　サ。ブ。煩。ものうし。いとはし。こゝろぐるし。ことの語は、今は、わづらはしいをそへていふ。拾遺（白露の、おくつまにする、をみなへし、あなわづらはし、人な手ふれそ）竹取（宮仕つかうまつらずなりぬるを、かくわづらはしき身にて侍れば）

わづらはしい　サ。煩。わづらはしを見るべし。

わづらはしがる　ワ。ヒトリ。四。煩。わづらはしくおもふ。狭衣四（さりや、かくのみひまなからんは、いかゞと、わづらはしびるやうにて、ひきそばめて）

わづらひ　ナ。煩。なやみ。くるしみ。源若菜（事どもそぎすてて、世の煩あるまじくと、おぼせ給へど）

わづらふ　ワ。ヒトリ。四。煩。なやむ。くるしむ。狭衣四（常盤と申すところに、ねんごろにかたらひ侍るべき尼の、わづらふ由うけたまはりし、とぶらひ侍らんとて）

わづらふ　ヲチ。四。下二の。煩。なやむ。万五（かにかくに、おもひ和豆良比、音のみしなかゆ）榮花初花（世にありわづらひ、つまぐらみ、人よりはみじめし）

わとの　カヘ。吾殿。ひとにむかひて、そのひとをよぶことば。大鏡八（かゝる事ども申すも、吾殿のきゝわかせたまへば、いとゞ、今すこしも申さまほしきなり）

わどる　ワ。ヒトリ。四。輪取。わのごとくまろくなる。

わな　ナ。羂。とり、けだものなどをとらふるために、なはなどを、わのごとくむすびなして、そのすみへさるあななどにかけおくもの。また、ひもなどの、まろく、わのごとくむすびたるをもいふ。古事記（莵田のたかきに、しぎ和那はる、わがまつや、しぎはさやらず、いすくはし、くぢらさやる）落窪草（いれひも、狩衣のひもなり。わなにしてさしいるゝひもなり）

わなく　ワ。ヒトリ。四。絞。くびれて死ぬ。垂仁紀（自經）

わなゝかす　ワ。カケ。四。戦慄。わなゝかしむ。源玉葛（年をへて、いのるこゝろの、たがひなば、かゞみの神を、つらしとやみんとわなゝかしいでたるを）

わなゝきごゑ　ナ。戦聲。わなゝきたるこゑ。源手習（うちしはぶき、あさましきわなゝきごゑにて）

わなゝく　ワ。ヒトリ。四。戦慄。おそろしくてふるふ。源夕顔（この女君、いみじくわなゝきまどひて、いかさまにせんとおもへり）狭衣三（ひきとゞめさせたまひぬるも、手のみわなゝかれて、とみにぞたてられぬ）字鏡（慄和奈々久）

わなゝく　ワ。ヒトリ。四。撃。そゝくるをいふ。枕草四（ひとさだすぎ、ふるぐしき人の、髪なども、われにはあらねば、ところどころわなゝきちりぼひて）

わなみ　カヘ。吾儕。われ。われら。われども。

わなり　ナ。輪形。わのかたち。まろきかたち。

わなゝなき　ソ。戦慄。おそろしくて、ふるふさまにいふ

ことぞ。平家五（わなくとふるひければ、臣下、これをあやしんで、刑人なんど、君のかたはらにはおかず）

わに　ナ。鰐。動物の名。水にもすみ、陸にものぼるもの。形、とかげに似て、おほきなるは、實に丈あまりなるもあり。觜のながさ、三尺あまりもありて、そのときこと、及のごとくなりといへり。和名（鰐、味具切韻云、鰐和名、似鼈有四足、喙長三尺甚利齒、虎及大鹿渡水、鰐擊之皆中斷）

わにあし　ナ。鰐足。わしどりのくせにいふことぞ。あるくとき、わしのつまさきの、うちべにむくを、うちわにといひ、そとべにむくを、そとわにといふ。

わにぐち　ナ。鰐口。すゞのたぐひ。寺の本堂の窓にさげさる鉦にて、下にむかひて、横にさけさる口ありて、紐をつけて、うちならすやうにしさるもの。

わにぶか　ナ。鰐鰹。魚の名。ふかに同じ。

わにふだう　カヘ。吾入道。にふだうにむかひて、そのにふだうをよぶことぞ。盛衰五（かくのさまを吾入道れ、いかに、王孫とてそなのりさまへども）

わにようだう　カヘ。吾女房。にようばうにむかひて、そのにようばうをよぶことぞ。沙石集三（誠にや、吾女房のなげきなを、法師とふらむぞとて、恨みさまふなるといへれ）

わぬ　カヘ。吾。われ。われら。万廿（うぶこなれ、和奴にこふなも、たびつくの、ぬがなへゆけば、こふしかるなも）

わぬし　カヘ。吾主。ひとにむかひて、そのひとをよぶことぞ。宇拾三（なほおそろしくおぼえていらず、わぬし、まづいれくといひさって、今宵もなほいらず）

わのり　ナ。騎乘。馬を、鞍のごとく、のりめぐらすをいふ。

わび　ナ。侘。おやまちをわぶるをいふ。

わびうた　ナ。侘歌。わびしきこころをよみさるうた。竹取（ふみをかきてやれども、かへりごともせず、わびうたなどかきてやれども、かへしもせず）

わびごと　ナ。侘言。わびていふことぞ。源蜻蛉（わびごとどもを、かきあつめさまへる御ふみを）

わびどり　ナ。侘鳥。わびてよぶとり。大和（曉れ、木綿付鳥の、わびどりは、おとらぬ音をぞ、なきて歸りし）

わびし　サブ。侘。つらし。くるし。こころぼそし。たのしくなし。この語れ、今れ、わびしいといふをそへていふ。古今（おほかたの、秋くるからは、わが身こそ、かなしきものと、おもひしりぬれ）源玉鬘（おゆびさるもなく、とくつくろひされど、あしのうちうごかれず、わびしけれど、せんかたなくてやすみさまふ）

わびしい　サ。侘。わびしを見るべし。

わびしむ　ワ。カケ。シニ。侘。わびしくおもはす。山家集（寝覺する、人の心を、侘しめて、時雨るゝ音れ、悲かりけり）

わびしらに　ッ。侘。わびしげに。古今（侘しらに、猿ななきそ、足引の、山のかひある、けふにやはあらぬ）

わびずまゐ　ナ。侘住居。ものわびしきすまゐ。

わびびと　ナ。侘人。わびしきひと。まづしきひと。万九（家人れ、音はなきつゝ、かさりつぎ、ねぢびつぎくる、なとめらが、おきつきところ）宇拾十（男、かさひざをつきて、わびぶとは侍り、さむさのたへがたく侍るは）

わびる　ワ。ヒトリ。カニ。侘。わぶを見るべし。

わぶ　ワ。ヒトリ。カニ。侘。つらくおもふ。くるしくおもふ。こころぼそくおもふ。たのしみなくおもふ。また、あやまちをなげきて、なだめられんとこふ。この語れ、地方にはよりては、わびると上一段にいふ。万四（小夜中に、ともよぶ千鳥、ものおもふと、和備をるときは、なきつゝもとな）大和（國のつかさ、たみつかれ、くにほろびぬべしとなんわぶるときこしめして）

わぶ　ツグ。アワ。侘。なやむ。わづらふ。万十（さとどほみ、戀和備にけり、まそかがみ、おもかげさらず、夢にみえこそ）大和（御さとありしところにも、音もしさまざでなれば、いとわぶれはなんなきさぶなる）

わぶん　ナ。和文。みくにぶりのぶんしやう。

わぼうし　カ。吾法師。ほうしにむかひて、そのほうしをよぶことぞ。著聞十（なほまさみつめて、吾法師めが、ひとをなぶりして、人こそあらめ、おもてをならべさるものは、ころうつして、ねこさめみするは）

わぼく　ナ。和睦。なかなほり。むつまじくなるをいふ。

わみやう　ナ。和名。みくににてよぶとなへ。

わん　ナ。椀。がふし。おものをもるうつはもの。

わん　ナ。灣。いりえ。いりうみ。うらのめぐり。

わんだく　ナ。小兒のわがまゝにふるまふをいふ。

わんりよく　ナ。腕力。うでづく。ちからづく。

わんわん　ナ。犬。いぬをいふ。小兒のことばなり。

わめく　ワ。ヒトリ。日。叫。わめく。おほごゑによぶ。

わやく　ナ。枉惑。わるさをするをいふ。九州にて。

わやく　ナ。和譯。みくにことばにうつしかふるをいふ。

わやわや　ッ。噪や。かしがましくさわぐをいふ。

わら　ナ。藁。いなぎらのほしさるもの。宇拾十五（下種の狩衣袴を、藁さまひて、わらぐつをはきて）

わら　ナ。蕨。わらびをいふ。女のことばなり。藤人藤芥

わらう　ナ。藁。わらぢ。わつぢ。ことば。

わらうづ　ナ。藁履。わらぐつに同じ。宇拾二（ひらめしぐ、ふるしきれ、ふるわらうづ、ふるぐつ）

わらがみ　ナ。藁紙。わらをまじへてすきさるかみ。

わらぐつ　ナ。藁履。わらり。わらにてつくりさるくつ。拾錄三（院の御前官達など、わらぐつとやいふものたてまつりて）和名（履名、和良久豆（以字亦作屬和名、和良久豆草履也））

わらさ　ナ。魚の名。ぶりの、いまだちひさきもの。

わらざ　ナ。圓座。わらふだに同じ。著聞六十（さいほうひとつ、腰敷わらざ一枚をもちて、いそぎいきおちて）

わらざうり　ナ。藁草履。わらにてつくりさるざうり。

わらし　ナ。小兒。こどもをいふ。陸奥などにて。

わらしべ　ナ。藁稭。わらすべに同じ。

わらす　ワ。カケ。ロ。破。こはす。ふさこはつ。

わらすべ　ナ。藁稭。わらのほのつきてありしところ。宇拾七（あるはものもあらず、手ににぎられさるものをみれば、わらすべといふもの、たゞ一筋ににぎられさり）

わらぢ　ナ。草鞋。わらぐつの、ひもをつけさるもの。

わらぢくひ　ナ。草鞋食。わらぢのくひずれ。

わらづ　ナ。草鞋。わらぢに同じ。

わらづと　ナ。藁苞。わらにてつくりさるつと。

わらにんぎやう　ナ。藁人形。くさひとがたに同じ。

わらのげけ　ナ。藁草履。わらぐつ。わらぞうり。

わらは　ナ。童。をさなきこども。男女の十歲あまりなるをすべていふ。万七（この岡に、くさかる小子、然なかりそ、ありつゝも、君が來まさん、みまくさにせん）

わらは　ナ。童。めしつかひのこども。源夕顏（黄なるすゞしのひとへがさねなかく着なしさるわらはの）

わらは　カヘ。妾。をんなの、みづからよぶことぞ。宇拾十三（この女のいふやう、わらはれ、この守のむすめにて侍りしが、羊になりて侍るなり、けふのいのちを御まへさらたすけさまへといふに）

わらはあそび　ナ。童遊。わらはべのあそぶをさなきあそび。夫木廿（たけうまを、つゑにもけふれ、あそぶかな、わらはあそびを、おもひいでつゝ）

わらはおひ　ナ。童生。わらはのときのおひさち。枕草子十（まづ、それはいかにとてとどれ、仲忠がわらはおひのあやしさを、せちに仰せらるゝぞなどいへば）

わらはかす　ワ。カケ。咲。わらはしむ。宇拾卅（わらはんとさまあらば、わらはかしまゐらせてまつりてんと）

わらはげ　サ。童めきさり。落窪（いかにおもほしさわらんとてなげば、あな、わらはげやとて、わらふ）

わらはげたり　サ。ヒトリ。カ。童めきさり。榮花つぼみ（と、ならずれば、御かくれあそびのほどを、わらはげさることして、それぞ、ある事ぞ、おぼされける）

わらはげて　ッ。童めきて。源胡蝶（ちひさきれ、わらはげてよろこびしるは、あふぎなどもおとして）

わらはごころ　ナ。童心。わらはのこころ。をさなきこころ。源若紫（なほ、わらはごころのうせぬにや、あらん、われもむつびきこえてあらまほしきを）

わらはでゐ　ナ。童殿居。わらはのよぶをさなきこころ。新六五（御牧野の、くさわけぶゑの、わらはでゐ、おなじまとのみ、よそへてぞきく）

わらはし　サブ。可笑。わらふべし。をかしくあり。盛衰十（めしくとびて、頭を損じて、にがみいりさりけるかほのけしき、いとわらはしくぞみえける）

わらはすがた　ナ。童姿。わらはのすがた。源桐壺（御童姿いとかへまうくおぼせど、十二にて元服しさまふ）

わらはずまひ　ナ。童相撲。わらはのとるすまう。

わらはずゐじん　ナ。童隨身。わらはのずゐじん。源標（か

わらのおまへの御れいをまねびて、わらはのさうぞくをそめ、みづらたまはりてまひける、らをおもしげにのぼりそめて、みづらゆひて、むらさきのにほひなきものを（うつくしげなり）

わらはてんじやう　ナ　童殿上。たかききはの家の男兒の、まだ元服せぬほど、禁中の作法をみならはむために、殿上の奉仕をすることなり。源氏少女（さきの世の童殿上なども）

わらはともだち　ナ　童友達。わらはのときの友だち。新古（をさなくより、わらはともだちにて侍りける人の、としごろへてゆきあひたる、ほのかにて、七月十日ごろ、月にきほひてかへり侍りければ）

わらはな　ナ　童名。わらはのときの名。

わらはなき　ナ　童泣。わらはのやうになくことをいふ。

わらはだひ　ナ　童厭。わらはをやしなひて、そのむくいをうくるもの。

わらはべ　ナ　童部。わらはに同じ。和名（童部）。

わらはべ　ナ　童部。めしつかひのわらは。源氏（ありけれど、わらはおもしげにて、四人まゐりたり）

わらはまひ　ナ　童舞。わらはの舞なり。朝覲行幸の時などに、殿上わらはのまふなり。

わらはやみ　ナ　瘧病。病の名。えやみ、おこり、ひとひまぜなどいふ。和名（瘧病）。

わらび　ナ　蕨。野菜の名。山にはゆる草にて、春のはじめに芽をいだす。その芽、人の拳をさけざるがごとくにて、後にひらきて、かさのごとくになる。根は粉にして食ふ。

わらび　ナ　藁火。わらをたくひ。

みえぬ、草の名なり。

わらひいる　ワ　笑入。いたくわらふ。

わらひがほ　ナ　笑顔。ゑがほに同じ。

わらひぐさ　ナ　笑種。ものわらひのたね。世の人のわらひぐさとなる。

わらひさかゆ　ワ　笑榮。ゑみさかゆに同じ。

わらひとりやうす　ナ　笑上戸。

わらひだけ　ナ　笑茸。茸の名。秋の頃いづる茸にて、くへば、笑ひとまらずして、心も狂ふごとくなるといふ。

わらひで　ナ　藁手。わらにてつくれるもの。

わらひなき　ナ　笑泣。わらひてなくなり。

わらひにす　ワ　笑死。

わらひのもと　ワ　笑本。わらひのたね。

わらひほん　ナ　笑本。おそくづの草に同じ。

わらひゑ　ナ　笑繪。おそくづのゑに同じ。

わらふ　ワ　笑。わらふ。

ふ。枕草（みくしげどのの御さうしにて、かみじうこらひさるべく）

わらぶき　ナ　藁葺。わらにてふきたる家なり。

わらふだ　ナ　圓座。わらにてつくりたるしきもの。

わらぶで　ナ　藁筆。わらにてつくれるふで。

わらべ　ナ　童部。わらはべに同じ。

わらむしろ　ナ　藁筵。わらにておりたるむしろ。

わらんぢ　ナ　草鞋。わらぐつに同じ。

わらんべ　ナ　童部。わらはべに同じ。

わらや　ナ　藁屋。わらぶきの家。

わらやかなり　ナ　笑。にぎやかなり。

わらゆかた　ナ　藁。

わりご　ナ　破子。檜の薄板にて作りたる器。

わり　ナ　割。わること。

わりあひ　ナ　割合。

わりいん　ナ　割印。

わりかへ　ナ　割替。

わりご　ナ　破子。旅などにもちゆく食物を入るるうつはもの。土佐（わりごもたせて来たる人）

わりさく　ナ　割。

わりせん　ナ　割錢。

わりとほす　ワ　割通。

わりつけ　ナ　割付。わりふりて付くること。

わりつゆ　ナ　割。

わりな　ナ　割。

わりなし　ナ　無理。ことわりなし。

わりなし　ナ　無理。すぢなし。せんかたなし。

わりに　ワ　割。

わりふ　ナ　割符。

わりまへ　ナ　割前。

わりむき　ナ　割。

わりぬ　ナ　割。

わりわかつ　ワ　割分。わりてわかつ。

わる　ナ　割。こはす。

わる　サ　悪。

ぬ、笠取の山）宇拾十（頭うちわられぬとおぼゆれば）にそうは、かさとりさまはふとよりされば）

わる ワ.ヒトリ.ラ.二 割。破。わる。こはる。おのづからくだく。おのづからやぶる。この語は、地方によりては、われると下一段にはいふ。万十二（きうしよう、ものをおもへばこゝむねは、破れてくだけて、こゝろもなし）

わるい 形.悪。わるしを見るべし。

わるうたら ナ.悪く。悪くなど、ようなどやく。

わるがしこし 形.ヒ.悪賢.狡猾。わるさことにかしこし。

わるくうし 形.ヒ.悪矣。いとわるしく。くらし。

わるくせ ナ.悪癖。わるさくせ。いやしきくせ。

わるくち ナ.悪口。ひとを、あしざまにいひなすないふ。

わるごたち ナ.悪御達。くちさがなきにょうぼ。わるさこたち。

わるさ ナ.悪作。わるさわざ。わるさたはぶれ。

わるし 形.ヒ.悪。よろしの反対。この語は、今は、わるいとしないにはいふ。源幻（人を、あそれと心をめんれば、いまそうるべき事を、いにしへよりおもひ得て）とき。源竹（こちぢきの、おちまりの、これるか、ともやさうりし給きさもれ、紫のゆかりとも似ずめれど）

わるじやれ ナ.悪洒落。いやしきしやれ。

わるたくみ ナ.悪巧。わるさたくみ。わるさかんがへ。

わるぢゑ ナ.悪智慧。わるさちゑ。

わるもの ナ.悪者。わるさなするもの。さたおこなひのつたなきもの。源帯木（上手は、いと、いまはかひこは、わるのは、おしそぬところ出だすめる）

われ ナ.割。たひは、わりはけなきないふ。

われ ヒ.我。わるる人の、みづからの名にかへてよぶことば。万十二（ますらをと、思ゆき山ゆき、和例くれど、せらちそうへ、すれぼたも）

われ ヒ.我。なんだ。おのれ。堀川百首（藤鉾、あきのうければ、われもさぞ、なきよすがら。なきあらしつる）

われ ナ.割.破。われた。とむけ。やぶれ。

われおとらじと ワ.我不劣。われまけじと。源柏木（われおとらじと、おしさぐの事どもをきいづめり）

われがしこに ツ.我賢。われかしこにして。われいと、たかぶりて。源手習（うるれしてなんものしさまふめると。われがしこうにおぼしのたまひてかさなるを）

われかのけしき ナ.我彼気色。われかともあらぬけしき。われともあらぬさま。源桐壺（いとど、なよくと、われかのけしきにてふしたれど）

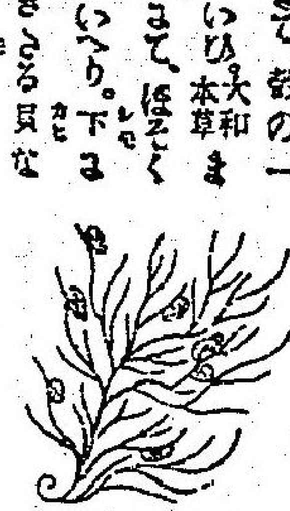
われかのこゝち ナ.我彼心地。われかひとかおもひわかれぬこゝち。われともあらぬこゝち。源柏木（かんの君は、われかのこゝちして、おぼゆる）

われかちに ツ.我勝。たがひにまさらむ。

われかのさま ナ.我彼様。われかひとかおもひ分かれぬさま。われともあらぬさま。源夕霧（君は、ものもおぼえさまへず。われかのさまにておもひたり）

われがひ ナ.破貝。われたるかひ。夫木廿（和歌浦、わるるくだけの、破貝も、ひろへる数に、まじりぬる）

われから ナ.動物の名なれど、さだかならず。蔵鉛には、藻につきある貝にて、殻の一片なるものなりといひ、大和本草には、藻につくる虫にて、はなはだちひさきものなりといふ。下にいはゆるは、藻につきある貝なり。古今（あまのかる、藻にすむむしの、われからと、音をこそなかめ、世をばうらみじ）



われぎ ナ.破木。われたるき。夫木廿（三尾山や、植のぬれの、片節は、すてられながら、なほこそすれすれ）

われきき ナ.割木。たきぎをいふ。上方、越後などにて。

われさきに ツ.我先。われおくれじと。玉葉（八重葉、秋ののこゝろは、風の色あかで、我先にとや、肩もなきける）

われて ツ.破。わりなく。あながちに。万廿（たらちまゆ、いでくる水の、岩にふれ、われてぞおもふ、妹にあはぬ夜は）伊勢（二日といふ夜、をとこ、われてあはむといふ。女も、また、ひとあはじとも）

われと ツ.我。てづから。夫木廿一（みづから、われと、やれはれ、夢の世の、闇をてらして、いづる月かげ）

われにいへ ツ.我にいへ。我どうへのことなれば、ひとまれこと、われはうきなを、うちみせばこゝろはれぬことはいふ。拾遺（われといへば、人のはれ、つらきなはひとのためとそ、のらさりしを）

われとでがたに ツ.我みづから。われてつら。

われにもあらで ツ.我をにすれて。宇拾十（ふらくはけれども、われにもあらでさもせざりければ）

われかほなり ナ.我顔。われひとりとほこれるさまなり。源少女（われかほなるきにさぶらひなど）山水ども、木ぶるなどさせ、うつしてに

われかほに ツ.我顔。われひとりとほこれるさまに。源木帯（なほとの、かんたちめなどまでなりのぼりぬる

われたかほに ツ.我、おもほえず家内をかざり、人にはおとらじと（初より、われひとともひとかくのごとく、へりくだり、めざましきものにおとしめそねみさまふ）

われひ ナ.破樋。われたるひ。倉泉附千首（かけひさす、竹のわれひは、もる水の、絶えずまされ、その人のなき）

われぶね ナ.破船。われたるふね。

われひと ナ.吾人。われとひとと。ひとわれども。

われぼめ ナ.我褒。みづから、そのみな褒むるをいふ。つみぬる身の、浅しきは、諸はよする、汝こそぜなきらうべ（女は、后になりても、何ならせん、このひとは、ものほめられんのみぞ、あてやるべき事なれ、かしこくおもひよりはけりと、われほめをなんいひちらし居へまゐるもひとあとれなり）

われめ ナ.破目。われたるところ。

われもかう ナ.吾木香。草の名。あかをけもに同じ。久安六年百首（野辺ごとに、ひとをゆるされぬ、われもかう、こやいまやうの、ひとのこゝろを）

われもわれも ツ.我我。

われもわれもと ナ.我我。

われら ヒ.我等。われどもの。拾玉（五月雨の、ふりすさみぬる、小山田は、われもくと、とる早苗かな）かくて、おもしろきやうならんとかいたれ

われる ワ.ヒトリ.シ.割.破。われを見るべし。

われわれ ヒ.我我。われら。わたくしども。

わろ ナ.和語。わるさ。

わろ ナ.ガ.悪。わろきもの。わろさこと。源手習（近きさの心やかくさゞ思はしきなど心ひとつをかくさふ）

わろし 形.ヒ.悪。わるし。よくなし。たしかなし。古今（女おやもなくなりて、家もいとわろくなりゆくあひだ）

わろし ナ.ヒ.悪。あし。紫式部日記（あらはの御衣ばかりはうちわたして、調度なども、例の事なれども、いまめかしうまさりおかしきを、ありもなれてうくすべきにもあらぬぞわびしけれ）

わろびたり ナ.悪。わろくあり。わろきさまなり。源末摘花（いとかうまれさらん、こゝろづきなくわろびたらと、中將は、まさしてこそ出でられけり）

わろびる ワ.ヒトリ.ラ.二 悪。おくす。おそれてすみらぬ。平家二（大剛の者なりければ、ちとも、色も変ぜず、わろびたるけしきもなく、居なほりあざわらひて）

わろもの ナ.悪者。わろきこゝろなるもの。まことなきのなきもの。源帯木（すぐれて、男も女も、わろものは、わづかにしれるかたのことを、のこりなくみせつくさんと思へるこそ、いとほしけれ）

わゝく ナ.騒乱。みだれ。さわぎ。明恵上人伝（罪過をなりをおこなひ、右頂かうりきをしさます。いかにも、人の心がさわしく

わゝく ワ.ヒトリ.シ.四 散亂。破綻。ちりくになる。やぶれみだる。万五（糸もなき、布かたぎぬの、みるのごと、わゝけさがれる、かゝふのみ、肩にうちかけ）空穂上吹（つきの布の、ほつけさがれるつくろひて）

わゝくる ワ.ヒトリ.ラ.四 騒乱。さわぎみだる。蒙図十（八十余人同意して云々、殿中はさわけ立ちけり、或は入にもいわせて、わゝくりけるが、あまりにたゞすさまじ。京中さわぎみだれ、わゝけりけるも。蔵経一（少将のすゞろ、わゝけかけて、かきくらめてふし給）

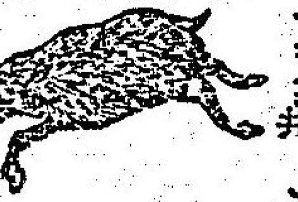
わゝし ナ.ガ.騒。さわがし。かしがまし。拾歌五十（隨身の、としくのしれば、御殿なおさらと）

わゝらぐに ツ.乱。みだれて。万八（玉はぬき

すたむらん、秋萩の、うれ和な長鶏賦、おける白話）
ゐゐん ナ。和韻。ひとのつくりたる詩の韻の字をもちひて、その詩にこたふる詩をつくるをいふ。
ゐゐ ナ。猥褻。きたなきもの。下訓四（林国ノ護法なりきて、腹をたたきて、鉢鐶をかりはさずをみて、夢さめて、腹いゆ、ゐゑ、むしろにみてり）
ゐをとこ カヘ。吾男。をとこにむかひて、そのをとこをよぶことば。字拾七（ゐをとこ、彼國にありし時はいそで、此國にてかくいふれ、稀き事なりといひけれど）
ゐをんな カヘ。吾女。をんなにむかひて、そのをんなをよぶことば。字拾七（ささのとこそいふべきに云々、なぞ、さをんなかささかといふべき事く）

ゐ

のど より いづる ひとつ の こゑ にて、う と い と かよはせる こゑ なり。



ゐ ナ。豕。獣の名。形、犬に似て、くちさきながく、足みじかし。また、耳ちひさくして、身こえたり。常に、食物の料に、人家にかふものなり。和名（猪、一名、豕、和名、為井）
ゐ ナ。猪。獣の名。くさゐなき。猪、ぶたに似て、身おほきく、足ながく、牙の、口の外にいでたるさま、象のごとし。この獣、いかるときは、毛さかだちて、針のごとくなるといふ。拾遺（いかりゐの、石をなくみて、かみこしは、きはのふみこそ、おちふさりけれ）
ゐ ナ。亥。ひよみの名。ゐぬのつぎにあたるもの。また、よるのよつどき。
ゐ ナ。蛆蝿。虫の名。みみずに似ておほきなるもの。和名（蠅蝿和名、為、俗用其説似蚓而大者也）
ゐ ナ。藺。水草の名。さぎのしりさし。菰に似て、ほそくしてかたし。つねに、むしろとして、席に織るものなり。和名（藺和名、為、辨色立成云、莞似蒲而細堅宜為席）
ゐ ナ。井。たにひくみづをたたへたるところ。また、あさゆふのみづをくむために、つちをほりて、みづをたたへたるところ。和名（井、鑿地取水也、和名、為）
ゐ ナ。胃。くそぶくろ。ゐぶくろ。いきもののむらのなかにあるもので、くひたるものをうくるもの。
ゐ ナ。威。ゐくわう。いきほひ。
ゐあかす ワ。カナ。四。居明。ゐて、よをあかす。枕草六（あかつきはものぐさりして、ゐあかしてみれば）
ゐあつまる ワ。ヒトリ。四。居集。あつまりてゐる。源氏（女房、三十人ばかりおしこりて、こき、うすき、にびいろどもを著つつ云々、うちしほされつつゐあつまりたるぞ）
ゐあひ ナ。居合。剣術の一種、すわり居て、ながき太刀をぬきて、人とたちあふなどの術をいふ。
ゐあひぬき ナ。居合抜。ゐあひのわざをするひと。
ゐあを ナ。位襖。あをに同じ。令義解（位襖頭無襴之衣也）
ゐかい ナ。位階。くらゐ。くらゐのしな。
ゐがい ナ。遺骸。なきがら。なきがね。
ゐかう ナ。遺稿。志にたるあとにのこりたるさうかう。
ゐかくる ワ。ヒトリ。シニ。居隠。ゐてかくる。みえぬやうにすわる。源氏（ひとりは、柱に、すこしゐかくれて）
ゐかはる ワ。ヒトリ。四。居替。かはりてゐる。源氏（不断経の、暁方のゐかはりたる聲のいとたふときに）
ゐがひ ナ。居飼。うまやのとねりにつげるもの。
ゐかん ナ。遺憾。のこりをしくおもふをいふ。
ゐかん ナ。遺勘。おほせにたがひたるつみ。十訓六（主命によりて、宣旨をかへりみず、一矢に射候ひぬ、この上は、いかにも、遺勘のがれ候ふべきにあらず）
ゐがん ナ。胃癌。病の名。かくゐのひとつのやまひ。
ゐかんがう ナ。閣金剛。ゐこんがうに同じ。
ゐき ナ。位記。くらゐをたまふよしのかきもの。
ゐぎ ナ。威儀。いかめしくよそほひたるよそほひ。
ゐぎし ナ。威儀師。僧官の名。凡僧のかみにたつもの。また、法會のとき、伴僧の先にたちて、威儀をととのふる僧なりともいへり。狭衣二（何者ぞくととへば、仁和寺に、なにがしゐぎしと申すひとなり）
ゐぎのないみやうぶ ナ。威儀内命婦。ゐぎのみやうぶ。
ゐぎのにようだう ナ。威儀女房。ゐぎのみやうぶ。
ゐぎのみやうぶ ナ。威儀命婦。ぎしきのとき、そのぎしきをととのふることにあづかるみやうぶ。大和（監命婦、朝拝の威儀の命婦にていでさりけるを、弾正の御子

みゝさまひて、にほうにまきひけさうじさまひけり、御ふみありける御かへりごとに）
ゐきよく ナ。委曲。くはしく。つぶさに。
ゐきれ ナ。居切。あしのゆびなどにつきたるきず。
ゐぐち ナ。猪口。茸の名。秋のころ、野山にいでくる茸にて、そのさま、松茸に似て、裏黄色にて、ちひさき孔ならびつけり。毒ありといふ。食ふべからず。
ゐくび ナ。猪頸。くびの、みじかくてすくみたるをいふ。
ゐぐひ ナ。猪杙。ゐぜきにうちたるくひ。古事記（みづたまる、ふるみの池の、堰杙うち、ひしがらの、さしけるしらに、ぬなはくり、はへけくしらに）
ゐぐひ ナ。居食。なすべきなりはひもなくて、ただ、あるものをくひへしてのみすぐるをいふ。
ゐくん ナ。遺訓。いひおき。ゆゐごんのをしへ。
ゐくん ナ。偉勲。すぐれたるいさを。
ゐぐら ナ。居坐。あじろがりの、のぼりこすをとりゐるをとこ。堀川百首（ひをのよる、たびこそきらふ、田上や、ゐぐらにうてる、あじろぎのぬの）
ゐくらす ワ。カナ。四。居暮。ゐて、ひをくらす。源氏（胡蝶 まさも然すたちよらせたまはでなんかしといへば、すなはちゐくらさんも怪しかるべければ踊りなんとす）
ゐくわう ナ。威光。いきほひのかしこむべきをいふ。
ゐげげ ナ。藺草屐。ゐのげげ。ゐにてつくりたるざうりにて、いにしへ、そうなどのはきしものなり。
ゐげた ナ。井桁。ゐの、よもをかこひたるよこぎ。下の絵は、紋所にて、井桁を、ひしの形に、ゑがきなしたるものなり。
ゐげふ ナ。遺業。ひとののこしたるげふ。
ゐけん ナ。威権。ゐくわうとけんぺいと。
ゐご ナ。圍碁。ごのあそび。徒然草（圍碁、雙六このみ、あかしくらす人は）十訓二（戌日、寝殿にて、圍碁をうつあひだ、追入あり、犯人、刀をぬきて）
ゐこぞる ワ。ヒトリ。四。居集。ゐあつまる。発心集八（ひとおほくゐこぞりて、いみじうにぎやかなり）
ゐこそだ ナ。鉄盲。ていけん。そうらうのことぞ。
ゐごぜん ナ。圍碁盤。ごばんといふに同じ。字拾三（それどうへは、圍碁盤をうちかへしておきて）
ゐこむ ワ。ヒトリ。四。居籠。すわりこむ。紫式部日記（いま、さとよりまゐるひとびとは、なかなかゐこめられず）
ゐこん ナ。遺恨。くちをしくおもふをいふ。また、としひさしく、うらみをむすびてゐるをいふ。平家一（加階こえられさぶらひぬるこそ、遺恨の次第なれ）
ゐこんがう ナ。閣金剛。ゐげげに同じ。蜻蛉日記（くらゐのひとにゐこんがうさるべし、あしぜにくろぬり）
ゐさい ナ。委細。くはしく、こまやかなるをいふ。
ゐさいそく ナ。居催促。そこにゐてのさいそく。
ゐざうらう ナ。居候。かかりびとに同じ。
ゐざうり ナ。藺草履。ぞうりを見るべし。
ゐざま ナ。居様。すわりてゐるさま。
ゐさん ナ。遺産。おやなどののこしたるざいさん。
ゐさん ナ。違算。かんぢやうのたがひたるをいふ。
ゐざらひ ナ。尻。志り。せのきさの、すわるとき、きさにつくところ。和名（尻和名、俗云井佐良比、臀也、尻之利）
ゐざり ナ。宋底。からすきのそこにつくるものにて、つちにつくところ。和名（宋底、為佐利）
ゐざり ナ。膝行。あしたたずしてゐざりゆくもの。
ゐざる ワ。ヒトリ。四。膝行。ひざをつきてゆく。すこしづつゆく。須松二（御几帳の許にゐざりよるに、やがて、つつきておそしはけり）土佐（からぶねをひきつつのぼれども、河の水なければ、ゐざりにのみゐざる）
ゐし ナ。遺志。志にたるひとのこころざし。
ゐしき ナ。違式。おきてにたがふをいふ。
ゐしき ナ。尻。志り。ゐざらひ。
ゐしつ ナ。遺失。うしなふをいふ。とりおとすをいふ。
ゐしん ナ。維新。もののあらたになるをいふ。
ゐじやく ナ。胃弱。ゐのよわきをいふ。
ゐしよ ナ。遺書。かきおき。ゆゐごんのかきつけ。
ゐずくまる ワ。ヒトリ。四。居蹲。ゐながらすくむ。
ゐすくむ ワ。ヒトリ。四。居竦。ゐながらすくむ。すくみてゐる。栄花若枝（女房達、ゐすくみて、たつこともいとものびし云々、みな、いきて、ものもおぼえずよりふしぬ）
ゐずまひ ナ。居住。ゐざま。すわりてゐるさま。枕草三（

たゝひざまづきてゐやゐやしくゐずまひには、御前の方にむかひて）同七（碁を、やんごとなき人のうつとて云々、おとりたる人のゐずまひも、かしこまりたるけしきに、遠盤よりはすこしとほくて）

ゐずとり ナ.居坐。うごかずてそのまゝにゐるをいふ。

ゐすてる ワ.ヒトリ四.居坐。うごかずて、そのまゝにあり。

ゐせい ナ.威勢。いきほひ。ゐくせう。宇拾三（大宮司の威勢、國司にも勝りて、國の者どもおぢおそれたり）

ゐせう ナ.遺詔。ゆゐごんのみことのり。

ゐせき ナ.井堰。たはひくみづをせきたるところ。新後拾（大井川、ゐせきの水や、氷るらん、早瀬はそしの、聲きこゆるなり）和名（服虔云々、以土遏水也和名、井堰木）

ゐせきやま ナ.井堰山。山の名。伊賀國の山田の郡にあり。新続古（なべれいづる、なみだゐせきを、さゝへて、ゐせきの山な、けふこゆるかな）

ゐぞく ナ.遺族。なくなりたるひとのけんぞく。

ゐたく ナ.遺託。ゆゐごんするをいふ。

ゐだけ ナ.居丈。すわりたるたけ。榮花.根合（うるさて、あまりゆゝしき御髮かな、もしすぎば、ゐだけにもなりぬべきなどおほせられて）空穗.吹上（ゐだけ三尺ぞありのまろがねのてまいめ、口あふげて、やつすゑて）

ゐだけだかに ツ.居丈高。ゐだけたかくのびあがりて。榮花.根合（かるほどにものしさません人の、ゐだけだかには、かみすぐなるまで）母我物語六（よしもりゐだけだかには

なり、年ほどものうき事はなし、よしもりがよそひ、二十ざまもせらくれ、御ぜんにはそむきれし）

ゐたち ナ.居起。たちゐ。ゐるとたつと。

ゐたつ ワ.ヒトリ四.居起。ゐさらす。源.桐壺（ゐさらち、おぼしいとなみて、かぎりある事は、事をそへさせたまふ）

ゐたつ ワ.ヒトリ四.居立。ゐりてむ。おりさつ。空穗.藏開（さる人の、心にはいれて、ゐさらさまひける事なれど）

ゐち ナ.位置。おきむ。ならべすゑたるところ。

ゐぢ ナ.維持。もちこたへてゆくをいふ。

ゐつき ナ.居着。そこに、むかしよりゐるをいふ。

ゐつく ワ.ヒトリ四.居着。すみなれておちつく。宇拾三（この塚の傍ちかくれ、下種などもえゐつかず、むつかしき事ありといひつたへて、おほかた、人もえゐつかねば、そこれ、たゞ、そのつゝひとつぞある）

ゐづつ ナ.井筒。ゐのめぐりをかこひたるつゝ。伊勢（隣の男の許より、かくなん、つゝゐづゝ、ゐづゝにかけし、まろがたけ、すぎにけらしな、いもみざるまに）

ゐつづけ ナ.居續。つゞきてながくゐるをいふ。

ゐつどふ ワ.ヒトリ四.居集。ゐてぞる。つどひてゐる。

ゐで ナ.井手。ゐぜきに同じ。新後（初瀬川、ゐでこすなみの、音よりも、さやかにすめる、秋の夜の月）

ゐで ナ.井手。地の名。山城にあり。玉之葉（春の日れ、ゆきもやられず、蛙なく、ゐでの渡に、駒をとゞめて）

ゐでのしたおび ナ.井手下帶。男女の、別れてのち、ふさゝ

びめぐりあひて、契をむすぶをいふ。是れ、むかし、内舍人なるひと、山城國の井手のさとりにて、いとけなき女子に、帶をときてとらせたりしに、年をへて、それをまるしに、その女子と契を結びたりといふ故事あるよりいひいでたる事なり。玉葉（ときかへし、井手の下帶、ゆきめぐり、あふ瀬うれしき、玉川の水）

ゐでん ナ.位田。くらゐによりてたまふたどころ。

ゐでん ナ.遺傳。おやのちすぢよりつたはりくるもの。

ゐど ナ.井戸。ゐ。みづをくむために、つちをほりたるところ。夫木三十三（さみだれは、ゐどのうそでの、みづこえて、入江のすどり、いまやたつらん）

ゐどがは ナ.井戸側。ゐどのめぐりにいるゝつゝ。

ゐどがへ ナ.井戸替。ゐどをさらふるをいふ。

ゐどこ ナ.居所。ゐどころ。ゐるところ。

ゐどころ ナ.居所。ゐるところ。すめるところ。狭衣二（すこしはなれたる所の、かみさうじなどぞありにて、あらくしきかりそめの居所とみえたり）

ゐどばた ナ.井戸端。ゐどのそさ。ゐどのほとり。

ゐな ナ.猪名。地の名。攝津にあり。後拾（有馬山、ゐなのさゝむら、風ふけば、いでそよ人を、忘れやはする）

ゐなか ナ.田舍。たゐなか。田畑をつくる人のゐるところ。みやこを、とほくはなれたるところ。万三（昔こそ、難波居中と、いはれけめ、今は都と、みやびにけり）

ゐなかうた ナ.田舍歌。ゐなかびとのうたふうた。

ゐなかうど ナ.田舍人。ゐなかのひと。伊勢（ゐなかうどのうたにては、あまれりやたらずや）

ゐなかことば ナ.田舍語。ゐなかうどのなまりことば。

ゐなかざけ ナ.田舍酒。ゐなかうどののむさけ。

ゐなかざぶらひ ナ.田舍侍。ゐなかのさぶらひ。ゐなかの、みやびをさとらぬさぶらひ。著聞廿七（或田舍侍の申しけるは、この事とふめん、いとやすき事なり）

ゐなかじむ ワ.ヒトリ四.田舍染。ゐなかめきてみゆ。

ゐなかせかい ナ.田舍世界。ゐなか。ゐなかのさと。更科一（ゐなかせかいの人ぞはみるものを）

ゐなかだち ナ.田舍立。ゐなかにておひたちたるもの。著聞廿七（この如しは、田舍だちのものなれば、さだめて、やうありてこそいふらめとおもひて）

ゐなかのつき ナ.亥中月。ねまちのつぎのよのつき。

ゐなかび ツ.田舍。ゐなからくをいふ。作用言なり。されば上二段にはたらく（き詞なれども、ゐなかびの外には、例をみいでず。空穗.樓上（今も、ゐなかびずよくしく）源.玉鬘（いといたくこそゐなかびにけれな）

ゐなかびと ナ.田舍人。ゐなかのひと。源.玉鬘（ゐな いみじや、ゐなかびとはておもしろきまさましよなど）

ゐなかふう ナ.田舍風。ゐなかうどのいやしきふう。

ゐなかぶし ナ.田舍武士。ゐなかざぶらひに同じ。

ゐなかむしゃ ナ.田舍武者。ゐなかざぶらひに同じ。十訓二（隣もかへりみぬ田舍武者の、一人ありけるが）

ゐなかもの ナ.田舍者。ゐなかうど。枕草九（いやしげなるもの云々、ゐなかものいやしきなり）

ゐながら ツ.坐りたるまゝに。古語（坐）

ゐなかわざ ナ.田舍業。ゐなかのわざ。源.須磨（碁、雙六の盤、てうど、たぎの具など、ゐなかわざにはなして）

ゐなかわたらひ ナ.田舍渡。ゐなかにかよふをいふ。伊勢（ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでてあそびけるを、おとなになりにければ）

ゐなほる ワ.ヒトリ四.居直。すわりなほして、かたちをあらたむ。源.若菜（宮も居なほり給ひて、御物語しきまふ）

ゐなみ ナ.居並。すわりてゐるならび。

ゐなむ ワ.ヒトリ四.居並。ならびてすわる。源.葵（みなさまうのぼりて云々、かのゐなみくんじたりつるけしきどもぞ、おもれればおもひいでられきまふ）

ゐにん ナ.委任。ゆだねまかするをいふ。

ゐぬ ワ.カチ.シニ.率寢。をんなをともなひてふす。古事記（沖津鳥、かもどく島に、我が率寢し、妹は忘れじ、よのことごとに）万十六（たちばなの、寺の長屋に、我が率寢し、うなゐはなりは、髪あげつらんか）

ゐねう ナ.圍繞。めぐりをとりかこむをいふ。枕草六（子どもなめりとみゆるせうときそのこの、おとしううちさうぞきたるせうとなどして、さぶらひのものども、あまた、かしこまりゐねうしたるもをかし）

ゐねぶり ナ.居眠。すわりながらねむるをいふ。著聞六十

（下人、黒戸のかさの御廐のほとりに、ゐねぶりして候ひけるが、にはかにむしりたちて）

ゐのあし ナ.織殺。機の具。たてはかけたるたていとのもとにつけて、おりなすほどづゝまきつけてゆくもの。和名（織殺、機之卷絹者也、漢語鈔云井乃阿之）

ゐのいひ ナ.牛膝。ゐのくづち。宇鏡（牛膝乃久豆知、又為乃伊比）

ゐのくち ナ.井口。ゐぜきの、たには、みづをひくくち。

ゐのくづち ナ.牛膝。草の名。莖れ方にて、節あり。葉れ、ひゆの葉に似て、すこしながくして、葉のさきとがれり。秋のころ、節のうへより、穗をいだして、花をひらく。和名（牛膝和名、爲乃久豆知、節似牛膝、故以名之）

ゐのげ ナ.藺草履。ゐげげに同じ。

ゐのこ ナ.豚。獸の名。ゐといふに同じ。

ゐのこ ナ.亥子。げんちよ。十月の上の亥の日をいふ。この日、餅をくへば、病なうけずとて、餅をつく事あり。源.葵（そのよさり、ゐのこの餅まゐらせたり）

ゐのこづち ナ.牛膝。草の名。ゐのくづちに同じ。

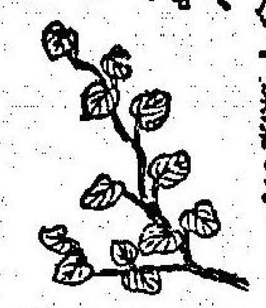
ゐのこども ナ.亥子[illegible]。ちりみだれたるくろくる

ゐのこもち ナ.亥子餅。ゐのこのひのもち。著聞八十（ゐのこもちをよめりける、何よりも、心はぞつく、ゐのこもち、ぴんとうすなる、ものとおもへば）

ゐのしし ナ.猪。獸の名。ゐを見るべし。徒然草（おそろしきゐのしゝも、ふすゐのとこといへばやさしく）

ゐのしたけ ナ.猪茸。菌の名。かなたけに同じ。

ゐのしゝむしや　ナ。猪武者。むやりそのむしやの、ものゝわきまへもなく、ひたすらにすゝむをいふ。源氏ニ（そむひらみずのゐのしゝむしやなり）
ゐのつめ　ナ。猪爪。襪の具。ゐのあしに同じ。
ゐのと　ナ。猪頭。襪の具。まねきをいふ。遠江にて、
ゐのこづち　ナ。猪膝。梓草の名。葉は、ふさまろみの葉に似て、根は、芋のごときものあり。色はくろくあかみて、きれば、あかき汁なるといふ。和名（猪膝和名爲乃止々木）



ゐのなか　ナ。井中。みづをいふ。女の詞なり。禁裏女房内々記
ゐのふ　ナ。胃腑。ゐといふに同じ。
ゐはい　ナ。位牌。なきひとのみたましろ。亡者の戒名をかきさる板の、すゞるやうにしさるものなり。
ゐはい　ナ。違背。そむきたがふをいふ。
ゐはう　ナ。位袍。おほうの、くらゐによりてきるもの。安齋随筆（位袍とは、一位より初位まで、おのく定りさる袍の色あり。その位の袍を、位袍といふ也）
ゐひ　ナ。委靡。よわりて、なえくとしさるをいふ。
ゐふう　ナ。威風。いきほひの、ひとをおそふをいふ。
ゐぶくろ　ナ。胃。ゐといふに同じ。
ゐふたぎ　ナ。韋棋。ゐんふたぎに同じ。枕草子九（あさりかほなるもの云々、ゐふたぎのあけきさりしさる）
ゐぶつ　ナ。遺物。ゆゐもつ。かたみのもの。

ゐへん　ナ。違變。やくそくにたがふをいふ。
ゐま　ナ。居間。あさゆふ、つねにゐるへや。
ゐまち　ナ。居待。ねまちのまへのよ。
ゐまちづき　ナ。居待月。ねまちのまへのよのつき。十八日の夜の月。万三（座待月、あかしのとゆれ、ゆふされば、しほをみさしめ、あけされば、しほをひしむ）
ゐまちづき　ナイラ。居待月。あかしはかけて（いふれ、月の縁によりてなるべし。万三（座待月、開乃門ゆれ、ゆふされば、潮をみさしめ、あけされば、しほをひしむ）
ゐまちのつき　ナ。居待月。ゐまちづき。新六（我のみぞ、ねられざりける、刈菰かく、居待の月の、稀にへぬれど）
ゐまゐる　ワ。ヒトリ。四。居廻。めぐりにならびゐる。宇拾二（鬼どもいできたり、ゐまはりて、酒のみあそびて）
ゐみづ　ナ。井水。ゐのみづ。ゐどのみづ。
ゐん　ナ。院。おりゐのみかどのおはしますところ。また、おりゐのみかどをもまうす。源少女（せんじのもとに、ところせきまでおぼしやれる事どもあるを、院は、みぐるしき事におもほしのたまへど）
ゐん　ナ。院。いへ。やかた。伊勢（その院のさくら、ことにおもしろし、その木の下におりゐて、枝ををりて）
ゐん　ナ。韻。よみてなさひれているひゞき。また、漢字のすべてを、そのひゞきによりてわけさるものにて、それを、また、平聲、上聲、去聲、入聲のよつにすぶる事ありて、詩などに、平韻といふは、平聲の韻、仄

韻といふは、上聲、去聲、入聲をあはせていふなり。
ゐんぐわい　ナ。員外。さだめさるひとかずのほか。
ゐんげ　ナ。院家。もんぜきにつゞくたふときてら。
ゐんざん　ナ。院參。ゐんのごしよにまゐるをいふ。
ゐんざんしゆう　ナ。院參衆。ゐんざんするくぎやう。
ゐんじ　ナ。院司。おりゐのみかどにつかへまつるつかさ。源氏藤裏葉（太上天皇になずらふる御位えさせたまひて云々、わらしの例をあらためて、院司どもなどなり）
ゐんしゆ　ナ。院主。てらのあるじ。おゆうぢのそう。
ゐんず　ナ。員數。かずといふに同じ。
ゐんぜん　ナ。院宣。おりゐのみかどのみことのり。平家五（福原の新都へのぼらうに、三日にすぐまじ、院宣うらどふは、一日の逗留ぞあらんずらん）
ゐんち　ナ。韻致。おもむき。ものごとのおもむき。
ゐんちやう　ナ。院廳。ゐんのちやうに同じ。
ゐんのごしよ　ナ。院御所。おりゐのみかどのごしよ。
ゐんのちやう　ナ。院廳。おりゐのみかどの、あやのしさのまつりごとをきこせさまふところにて、大別當、執事、年預、判官代、主典代などいふ官人あり。
ゐんふたぎ　ナ。韻塞。ふるき詩の韻字をかくして、その韻字はいかなるをあてしむるたはぶれ。源榊（ふみつくり、ゐんふさぎなどやうのすさびわざどもをもしなど、心をやりて、宮仕をもをさくしたまはず）
ゐめい　ナ。違命。ゆゐごんのおほせ。

ゐもり　ナ。井守。虫の名。形、とかげに似て、頭おほきく、尾みじかし。常に、井のほとりなどにすめり。このものの、雌雄のつるみさるをとらへて、黒燒にして、人にかくれば、ほれぐすりになるといふ。夫木二卅（ゐぐくうの、かさなるうへに、かさなるは、ゐもりのあるし、かひはあらじな）字鏡（蛸井毛利）

ゐもり　ナ。居守。そこにゐて、まもりてゐるをいふ。夫木（たにふろみ、とじろの小田に、ゐもりしし、それはそぞろ、おろろほのいね）
ゐもりのくろやき　ナ。井守黒燒。ゐもりの、雌雄のつるみさるをとらへて、くろやきにしさるものにて、その人に、ひそしれずかくれば、男は、女をおもひ、女は男をおもふこゝろおこるといふ。ゐもりのところ見るべし。
ゐや　ナ。禮。れい。うやまひ。ぎやうぎ。
ゐやう　ナ。居樣。すわりさま。ゐるありさま。
ゐやく　ナ。違約。やくそくにたがふをいふ。
ゐやくきん　ナ。違約金。ゐやくのときあさふるかね。
ゐやごと　ナ。禮辭。れい。うやまひ。ぎやうぎ。
ゐやじり　ナ。禮。ゐやじろに同じ。
ゐやじろ　ナ。禮代。れいにたてまつるもの。祝詞式（船居作給部禮、悦己備遊志矣、禮代乃幣帛乎）
ゐやび　ワ。禮。ゐやをなすをいふ。作用言なり。されば、上二段にもはたらくべき詞なれども、ゐやびの外には、例

をみいでず。段紀六（神答乎毛禮夜備衣那利）
ゐやまふ　ワ。サ。四。敬。うやまふに同じ。舒紀廿（并毛夜毛倦怠己止無久、隔美麼未比仕奉都々侍利）
ゐややかなり　サ。敬。うやうやし。土佐（かへりごとす、家の人の、いでいりにくげならずゐややかなり）
ゐややかに　ツ。敬。うやうやしく。
ゐやゐやし　サブ。敬恭。うやうやしに同じ。顯註枕（あなかしこと、ゐやゐやしくかしこまりて）
ゐらう　ナ。慰勞。いさをりなぐさむるをいふ。
ゐりよく　ナ。威力。ゐくわうにておさふるをいふ。
ゐる　ワ。ヒトリ。カ一。居。あり。すむ。すわる。小大君集（陸なるらし、まさゐる人も、なきものを、殊になき名も、たつぞ佗しき）顯紅葉（七月にぞ、居ゐさまふめりし）
ゐる　ワ。ヒトリ。カ一。坐。ふね、すなにつきてうごかず。散木（とりひをいへるところにて、船の、ゐてくださりけるに）和名（廣韻云、艖船著沙不行也）
ゐる　ワ。ヒトリ。カ一。醉。たり。うきておちつかず。歯の、酢にいさめられさるにいふ。和名（醉鄢波井、齒傷酢也）
ゐる　ワ。タケ。カ一。率。つれてゆく。ともなひてゆく。さそひてゆく。蜻蛉（えまねられ、おはしましぬものならば、もろともに率ておはしましね）伊勢（あくた川といふ河を、率ていきければ、草のうへにおきさりける露を、かれは、なにぞとなんをとこにとひける）
ゐれい　ナ。違例。やまひにて、つねのごとくならぬをいふ。おほくは、貴人のうへにいへり。

ゐろう　ナ。遺漏。もれおつるをいふ。
ゐろく　ナ。位祿。くらゐによりてたまはるろく。公事根源（位祿定、是れ、奉公の勞によりて、群臣百官に、祿をたまふ事なり、一上、陣の座につきて、位祿の文をみる、大辨、目錄をかく、その外ことなる事なし）
ゐろり　ナ。圍爐裏。ろといふに同じ。
ゐなむ　ワ。ヒトリ。シニ。居並。むられてゐる。むられてならぶ。枕草子七（みな、かうどのをとてたんなゐとけて、殿上人など、よきひとぐゝおほくゐなみて）
ゐゐん　ナ。委員。そのことをゆだねらるゝやくにん。

ゑ

のど より いづる ひとつ の こゑ にて、う と え と かさなれる こゑ なり。

ゑ　ナ。餌。うゑ、とりなどにあたふるくひもの。拾遺（むしゞの、なきゐるはせんと、かまへさる、おしあゆがすな、ねずみとるべく）和名（餌和名、以食誘魚爲也）
ゑ　ナ。繪。ふでにてかきさるそなとりなどのかたち。万十二（とがい妻も、繪にかきとらん、いづまもが、旅ゆく我れ、みつゝ忍ばん）源夕顔（紅葉、やうくいろづくほど、繪にかきさる樣に、おもしろきをみわたして）
ゑ　ナ。會。ほとけまつりなどのよりあひ。榮花音樂（さきぐ〜の御堂の會に、彼れ、みなまつくふせつれど）

ゐ　ナゲキ。よ。や。万葉（かみつけぬ、佐野のくゝたち、をりはやし、あれはまたん恵、ことしこずとも）

ゐあはせ　ナ。絵合。ゑのよしあしをたゝかはするあそび。

ゐい　ナゲキ。唯。ゐい。いらへのこゑ。貞丈雑記（三條一統にいふ、そうないたちあふなれ、やとこたへ候ふ、めしつるものなどへは、ゐいとこたへ候ふ）

ゐいし　ナ。絵石。くせもんせきに同じ。

ゐいせい　ナ。衛生。みを、すこやかにするためは、くひもの、きものなどに、こゝろをもちふるをいふ。

ゐいん　ナ。会陰。ありのとわたりに同じ。

ゐいり　ナ。絵入。さしゑのいりたるもの。

ゐうゐう　ナゲキ。吐きいださんとするこゑ。字拾（おほきなる骨、のどにたてて、ゐうゐうといひける程に、とみにいでざりければ、くつうして、終に死に侍り）

ゐが　ナ。垣下。かいもとあるじに同じ。源氏竹川（たいきやうのゐがのきんだちなど、わきさつどひたまふ）

ゐかう　ナ。回向。なきひとをとぶらふまつり。狭衣若菜（おほしすてつとも、ありがたき御ゑかうのうちには、まづこそれとおぼれになど、おほくきこえさまへり）

ゐかき　ナ。画工。ゑをかくを、なりはひとするひと。

ゐがく　ワ。ヒトツ。四。画。ゑをかく。ゑにかく。枕草子（人の家につきぐしきもの云々、中のむん、さらふさ、ひちをりさるらう、ちくあう、ゐがきさるひそけ）

ゐかた　ナ。絵方。ゑかき。ゑをかくやくにん。

ゐがひ　ナ。絵貝。うゝがひのたぐひ。下文を見るべし。嬉遊笑覧（絵貝は、歌貝の形にして、名所の絵をかきて、付合といふものにてあそするなり）

ゐがほ　ナ。笑顔。ゑらひがほ。ゑみたふくみたるかほ。

ゐがら　ナ。餌殻。ゑのから。後京極殿三百首（みゐ庭に、せが身の上と、思ひけり、ゑがらを捨つる、野邊の鷹飼）

ゐき　ナ。穢氣。けがれさるき。十訓一（もし、穢氣もこそあれといひて、下人をいれてみするに、中門の廊の前に、車をたてさり、死人をいれさりけり）

ゐぎぬ　ナ。絵絹。きぬの、ゑをかくにもちふるもの。

ゐぐ　ナ。野菜の名。葉は、蘭に似てちひさく、根は、ゐろくちひさき芋ありて、味ゑぐしといふ。きさ、芹の一名なりともいへり。万葉（君がため、山田の澤に、ゑぐつむと、ゆきげの水に、裳のすそぬれぬ）

ゐぐい　サ。蔹。ゑぐしを見るべし。

ゐぐいも　ナ。蔹芋。芋の名。ゑといもに同じ。

ゐぐし　ナ。咲酒。ゑけといふに同じ。酒は、のめば、心うきさちておもしろくなるものなれば、ゑみぐしの意にて、かくいふとぞ。古事記（すゝこりが、かみし御酒に、我ゑひにけり、ことなぐし、ゑぐしに、我ゑひにけり）

ゐぐし　サ。ヒ。蔹。蔹。あくのあぢそひをいふ。その語は、今は、ゑぐいとしをいはいふ。和名（蔹俗語云恵久之）

ゐくぼ　ナ。靨。さらふとき、いでくるほゝのくぼみ。和名（靨和名恵久保 面小下也）字鏡（靨黒子也、波々久保、又恵久保）

ゐくり　ナ。瓜の名。ゑくりをいふ。四國にて、

ゐぐる　ワ。カケ。四。刳。つきこみてひねりまそす。

ゐげにち　ナ。道解日。ちとせふなどのいみのひ。和訓栞

ゐごころ　ナ。絵心。ゑをかくてち。

ゐごひ　ナ。餌乞。ゑをこふをいふ。鷹栞（ゑごひする、かたしざの、霜枯の、野はなちぞ、早く手にすゑん）

ゐざう　ナ。絵像。ゑにかきたるざう。

ゐざうし　ナ。絵草紙。さしゑあるさうし。

ゐさし　ナ。餌刺。たかの餌にする小鳥をさすをいふ。

ゐさしさを　ナ。餌刺竿。ゑさしにもちふるさを。また、その小鳥をさすを、なりはひとするひと。

ゐし　ナ。絵師。ゑをかくを、なりはひとするひと。源語桐壺（ゑにかける、楊貴妃のかたちは、いみじき絵師といへども、筆かぎりありければ、いと匂ひなし）

ゐじ　ナ。衛士。衛士府に屬せるものにて、宮門のまもりをするもの。諸國の軍團より、一年づゝ、かはるぐ、都にまゐるを、衛士といひ、三年づゝ、かはるぐ、筑紫の守にゆくを、防人といふ。詞花（御垣守、ゑじのたく火の、夜はもえて、昼はきえつゝ、ものをこそおもへ）

ゐじき　ナ。餌食。ゑとしてくふくひもの。

ゐじふ　ナ。衛士府。左衛士府、右衛士府といふ二府あり。二府に、督、佐などの官人ありて、衛士の事を掌れりしが、後に、あらさめて、衛門府と稱へられさり。

ゐじま　ナ。絵島。地の名。淡路にあり。稽古（あらしふく、

ゑじまをかけて、みさせれば、霞のうへも、とりあつめひ。沖津白波）

ゐしやく　ナ。會釋。ゑぎ、れいぎ。あいさつ。とりあつかひ。そさ、頭松一（人の心なさけなく、ゑしやくすくなき、そさ、かゝるせらいはおもせんもおそろしう）諸艶二（院宣の御使にて、さまぐ、ゑしやく申しければ）

ゐす　ワ。カケ。カ。怨。ゑんず。うらみをいふ。空腹上（かくのごまそせば云々、いと心うく、たえぶれにくゝ、かゝる事はおほせらるべしやはとて、ゑじきこえさまへば）

ゐすがた　ナ。絵姿。ゑにかきさるすがた。

ゐすごろく　ナ。絵雙六。をなとりなど、さまぐのゑをかきあつめて、すごろくのごとくしさるもの。

ゐそらごと　ナ。絵空事。ゑはかくものにて、ことさらに、まことのものにたがへてかくことあるをいふ。著聞十一（おそくつの絵などを御覧も候へ、その物の寸法は、分にすぎて、おほきにかきて候ふ云々、ありのまゝの寸法にかきて候はゞ、見所なきものに候ふゆゑに、ゑそらごとゝは申す事にて候ふ）

ゐた　ナ。穢多。ゑとり。牛馬の皮をはぎなどを業とする、一種のさまざまのものにて、たゞびとは、常に、まじらふ事もせぬもの。ゑとりのところ見合すべし。七一番人歌合（ゑた、このかもれたいまいのな）

ゐたくみのつかさ　ナ。畫工司。中務省の被管にて、絵の事をつかさどるところ。後は、内匠寮に併せられさり。

ゐたむら　ナ。穢多村。ゑたのいへのみあるところ。

ゐちごじし　ナ。越後獅子。ゑちごよりいづるしゝまひ。

ゐちごちぢみ　ナ。越後縮。からむしにておりさるちぢみのぬの。越後國の名産にて、諸國にいださるものなり。

ゐちごぬの　ナ。越後布。ゑちごちぢみに同じ。

ゐちゆうふんどし　ナ。越中褌。みじかきふんどし。

ゐづ　ナ。絵圖。くにところなどの、ゑにかきさるもの。

ゐづく　ワ。ヒトツ。四。嘔吐。むく。ゑうくとよぶ。

ゐづつみ　ナ。餌包。たかの、むねに、ゑをたてるをいふ。

ゐづひき　ナ。絵圖引。ゑづをつくるを、業とするひと。

ゐつぼにいる　ワ。ヒトツ。四。笑ひきようず。字拾十（あるひと、みなながら、すゞろに、ゑつぼにいりにけり）保元（顔、すてぶる、ゑつぼにいりおそす）

ゐつぼのくさい　ナ。咲斎會。きらひきようするくさい。盛衰廿（俗も、俗も、ゑつぼの會にてありけり）

ゐつらかす　ワ。カケ。四。嘲。あざける。霧飛記（嘲恵都良可志）

ゐつりさを　ナ。餌釣竿。ゑさしざをに同じ。和訓栞

ゐど　ナ。穢土。きたなきせかい。佛家にて、浄土にむかへて、人のすむ世界をいふ。平家二（ゑどをいとひ、ぶやうどをねがふと、ふかくおもひのさまふこそ）

ゐど　ナ。穢土。くそをいふ。字拾二（四條の北なる小路に、ゑどをまる云々、げすどもきさなかりて）

ゐどく　ナ。會得。がつてん。こゝろにさとるをいふ。

ゐとり　ナ。餌取。屠兒。ゑた。いにしへ、鷹の餌をとりなどせし者にて、後世の穢多といふ者なり。今昔（この持ち来さる物をくふをみれば、牛馬の肉なりけり。然、これをみるに、怪しき所にも来にける哉、我れ、餌取の家に来しなりと思ひて）和名（屠兒和名恵止利屠牛馬肉、取鷹鶏餌之義也。殺生及屠牛馬肉取賣者也）

ゐどる　ワ。カケ。四。綵取。いろどる。殿中申次記（くもぐくの様に、ゑどり候ひて、きく、ふのふなど、絵にかきて）

ゐなが　ナ。鳥の名。かささぎ、四十雀に似て、背うすあかく、背翅のさきに、くろき紋あり。また、尾は、ふろき所とくろき所とありて、ほがらかにさへづる）

ゐなく　ワ。ヒトツ。四。呻吟。うめく。字鏡（呻吟也、恵奈久、又佐万与不）

ゐなまき　ナ。裂。かますをいふ。肥前、島原にて、

ゐにす　ナ。槐。木の名。ゑんじゅ。葉は、あふちの葉に似て、材きめてかさし。夏のころ、黄ばみさるちひさき花さきて、後は、實をむすぶ。和名（槐和名恵爾須）

ゐぬ　ナ。狗。いぬのこのちひさきもの。和名（犬、一名、狗、爾雅集注云、狗和名恵沼、又與犬同 犬子也）

ゐぬのこぐさ　ナ。狗尾草。草の名。莠莠、粟に似てちひさく、穂も、粟に似て短そながし。和名（狗尾草恵沼能古久佐）

ゐのぐ　ナ。絵具。ゑをいろどるにもちふるもの。

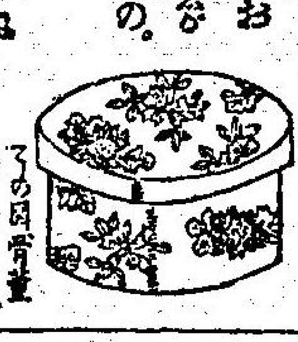
ゐのこ　ナ。狗。ゑぬ。いぬのこのちひさきもの。撰集抄二（さながらあらそざるにて、ゑのこな聞にはいさき侍り、人、ありさまにたちてはらひなぶりけり）

ゐのこぐさ　ナ。草の名。ゑぬのこぐさに同じ。

ゐのころ　ナ。狗。ゑぬ。いぬのこのちひさきもの。

ゑのころぐさ ナ。狗尾草。草の名。ゑのこのをさに同じ。
ゑのころやなぎ ナ。狗柳。かはやなぎをいふ。京都にて。
ゑば ナ。餌食。なとりにするためにあたふるゑ。
ゑばみ ナ。餌食。くものすをいふ。豊後などにて。
ゑばうし ナ。烏帽子。ゑぼしに同じ。著聞十(頭巾、座をたちて、関所へゆきて、くりすゑ、烏帽子かけ)
ゑばけ ナ。絵刷毛。ゑをかくにもちふるはけ。
ゑはす ワ。カナ四。酔。ゑはしむ。源蟲末(そらゑひをしさまひて、みだりがはしくまひゑはしさまふを)
ゑひ ナ。酔。よひ。さけをのみて、こころのうるはしをいふ。また、ふなやまひをいふ。空穂蔵開(誰もえとがめ給はじ、神も祭めさましむや、酔の音をなどいへば)
ゑひくさる ワ。ヒトリ。四。酔腐。どろのごとくゑふ。
ゑひごこち ナ。酔心地。ゑひたるここち。源花宴(ゑひごこちに、みすどもおぼえさまひければ)
ゑひごと ナ。酔言。酔事。ゑひていふことぞ、ゑひてするわざ。土佐(今のあるじも、前のも、手とりかはして、ゑひごとに、心よげなる事していでにけり)
ゑひさまたる ワ。ヒトリ。シニ。酔乱。ゑひまたる。さけにゑひて、こころみだる。字鏡(酩酊 恵比佐万太古流)
ゑひさまたる ワ。ヒトリ。シニ。酔乱。ゑひて、こころみだる。発意集(つまづきも、なくて今年は、かずさしつ、ゑひさまされて、けふはかへりぬ)
ゑひざめ ナ。酔醒。さけのゑひのさむるをいふ。

ゑひしる ワ。ヒトリ。シニ。酔痴。さけにゑひて、ものもおぼえずなる。源少女(大将、さうづきさしさまへれば、いさうゑひしれてをるかほつき、いとやせぐくなり)
ゑびつ ナ。絵櫃。櫃のおほきなるものにて、標などをゑがきてうつくしくいろどりさるもの。盧遊祭などにもちふるものなり。


この図骨董集より写す。

ゑひつぶる ワ。ヒトリ。シニ。酔潰。さけにいたくゑひて、みうごかれずなる。
ゑひなき ナ。酔泣。なきじやうごの、なくくせのあらはるるをいふ。万三(あなじらみて、さかしらするは、さけのみて、酔哭するに、なほしかずけり)
ゑひのる ワ。ヒトリ。四。乗酔。さけにゑひ、さるきようにのる。後撰(まらうど、あるじ、酒あまたびの後、ゑひにのりて、子どものうへなど申しけるついでに)
ゑふ ナ。衛府。近衛府、衛門府、兵衛府をいふ。
ゑふ ナ。衛府。ようのさむらひに同じ。平家一(北面は、上古にはなかりけり、白川の御時、はじめておかれてよりこのかた、ゑふどもあまたさぶらひけり)
ゑふ ワ。ヒトリ。四。酔。さけをのみて、こころのうるはしをいふ。また、ふねなどにのりて、かしらおもく、こころちなやましくなるをいふ。催馬楽(酒をたうべて、たべゑうて、たふとこりんぞ)夫木(ころぶねに、ゑふ人ありと、きこゆれ、もろひにとまる、けふはやあるらん)

ゑぶ ナ。餌符。もののしるしにつくるふさ。
ゑぶくろ ナ。餌袋。鷹の餌をいるるうつわもの。また、人の、食物などをいれてたづさふるもの。金葉(このきむうつ、ましろの鷹の、ゑぶくろに、をきゑもささで、かへしつるかな)空穂俊蔭(ほしいひ、たゞすこし、ゑぶくろにいれて、いとえのびておはす)

この図貞丈雑記より写す。

ゑふで ナ。絵筆。ゑをかくにもちふるふで。
ゑふのかみ ナ。衛府督。近衛府、兵衛府の長官。伊勢(この男のこのかみも、ゑふのかみなりけり)
ゑふのさむらひ ナ。衛府侍。ようのさむらひに同じ。
ゑふのすけ ナ。衛府佐。近衛府、兵衛府の次官。伊勢(それを便にて、ゑふのすけどもあつまり来にけり)
ゑぶみ ナ。絵踏。徳川将府のころ、切支丹宗をとゞめられし時、耶蘇の像をゑがきたるを、箱にをさめ、諸人の前にすゑて、ふむは崇めぬしるし、ふまぬは崇めざるしるしとして、人ごとにふましめさるをいふ。
ゑぼし ナ。烏帽子。かむりのたぐひにて、かしらにかぶるもの。宇拾廿(通済あをさてさきて、前よりまろびおちけるほどに、ゑぼしおちにけり)
ゑぼしおや ナ。烏帽子親。げんぷくの儀式のとき、烏帽子をきせそむる人にて、烏帽子名をもつくる事なり。
ゑぼしかけ ナ。烏帽子掛。さしきのとこのむしろにうちつるなりくぎにて、ゑぼしなどをかくるもの。また、ゑぼしかけは、かくるゑぼしのひもをもいふ。

ゑぼしがひ ナ。烏帽子貝。貝の名。たひらぎ。殻は、くろくあをみて、本はひろく、末はすぼみて、その形、すこし、烏帽子のかたちに似たり。また、殻の内方に、肉の柱ありて、その色あかくつややかなり。

ゑぼしな ナ。烏帽子名。げんぷくのとき、ゑぼしおやのつくる名。いにしへは、男子、元服のとき、はじめて、本名をつくる事にて、元服の前の名は幼名といふ。
ゑぼしのつつ ナ。烏帽子筒。ゑぼしの、かしらをいるるところ。下文を見るべし。貞丈雑記(ゑぼしのつつといふ事、ただ、頭のいる所の総名なり、曽我物語巻六に、たちまへや、御前、すけなりもいでんとて、ゑぼしのつつおしさて、ひされのゑもんひきつくろひ)
ゑぼしをり ナ。烏帽子折。ゑぼしをつくるを、なりはひとするひと。七十一職人歌合(ゑぼしをり、今時の御ゑぼしは、ちささりてつかまつり候ふ)
ゑぼん ナ。絵本。ゑのほん。さしゑあるさうし。
ゑま ナ。絵馬。うまをゑがきたるがく。神社にをさむる額なり。馬をたてまつることにかふるなるべし。
ゑまきもの ナ。絵巻物。ものがたりなどのことをゑがき、さしゑをして、まきものとしたるもの。
ゑまし サ。フ。可咲。ゑむべくあり。栄花初花(御前にさぶらふひとぐくも、ゑましうみたてまつるに)

ゑまだう ナ。絵馬堂。やしろの、ゑまをかくるところ。
ゑまはし サ。フ。可咲。ゑましに同じ。万十八(油火の、光に見ゆる、わがかづら、さゆりの花の、恵麻波之伎香母)
ゑまひ ナ。咲。ゑみ。わらひ。万四(おもそめは、妹が咲儛を、いめにみて、心の中に、もえつつぞをる)
ゑみ ナ。咲。わらひをふくめるをいふ。新六(何事を、思ひけりとも、しられじな、咲の中にも、刀やはなき)
ゑみがちに ゾ。咲勝。ゑむことおほく。
ゑみがほ ナ。咲顔。ゑみをふくみたるかほ。源葵(げに、何心なき御ゑみがほぞ、いみじううつくしき)
ゑみぐさ ナ。女蔵蔓。草の名。莖のさま、葉のさまなど、すべて、おほゑみに似たり。但し、おほゑみは、莖あをく、ゑみぐさは、莖むらさきなり。ともに、薬にもちふるものなり。和名(文蔵葉 和名、恵美久佐、一云安麻奈)
ゑみこだる ワ。ヒトリ。シニ。咲みかたぶく。いたくゑみにゑむ。字拾一(横座の鬼、盃を、左の手にもちて、ゑみこだれたるさま、ただ、この世の人のごとし)
ゑみごゑ ナ。咲声。ゑみたること。枕草八(局のもとにて云々、怪しくて、これたぞといへば、ゑみごゑになりて)
ゑみさかゆ ワ。ヒトリ。シニ。咲栄。ゑみほさかえたり。古事記(青山に、日がかくらば、ぬばたまの、夜はいでなん、朝日の、恵美佐加延来て、たくづのの、しろきただむき)源末摘花(老人ども、ゑみさかえてみたてまつる)

ゑみのまゆ ナ。咲眉。ゑましげなるまゆ。源夕顔(しろききなぞ、おのれ、ひとり、ゑみのまゆひらけたる)
ゑみひろぐ ワ。ヒトリ。シニ。咲広。くちをひろげてわらふ。めのとの童子(ゑみひろげて、のどのあなみえ)
ゑみひろごる ワ。ヒトリ。四。咲広。ゑみにゑむ。いたくゑむ。とりべ一(いとどいみじくおぼして、ゑみひろごりて、今まで、御断などもせざりける事を謝ぎさまひて)
ゑみまがる ワ。ヒトリ。ロ。咲みかさぶく。いとどゑみにゑむ。万九十(青柳の、ほそき眉根を、咲麻我理、朝影みつつ、をとめらが、手にとりもてる、まそかがみ、ふたかみ山に)
ゑみまけて ワ。咲みかさぶきて。落窪三(いとかなしう、らうらうじくおぼえて、ゑみまけて、こちくとのたまへば)栄花疑王(おやしの殿の男さへ、ゑみまけ、うれしげにおもひたるさま、いへばおろかに)
ゑみゑみと ゾ。咲々。ゑみがほに。著聞廿(光の中に、年よりたる姥の、ゑみゑみとしたる形をあらはして)
ゑむ ワ。ヒトリ。四。咲。わらひをふくむ。にこやかになる。万九(望月の、みてるおもわに、花のごと、咲てたてれば)源須磨(いみじう、みるにゑまれてきよらなり)
ゑむば ナ。蜻蛉。虫の名。あきつに同じ。和名(胡黎、一名胡離 和名、恵無波、蜻蛉之小而黄也)同(赤卒、一名絳騆 和名、阿加恵無波、蜻蛉之小而赤也)
ゑん ナ。圓。貨幣の称にて、銭を、百あつめたる数をいふ。おほらく、いにしへの両の称のごとし。

ゑんあう　ナ。鴛鴦。水鳥の名。をしに同じ。

ゑんあうのふすま　ナ。鴛鴦衾。いもせのともねするふすま。鴛鴦は、雌雄ともなれぬ鳥なれば、鴛鴦の衾といふときは、夫婦の衾といふこゝろにもなるなり。

ゑんが　ナ。垣下。かいもとあるじに同じ。源宿木（ゑんがの御子たち、上達部、大饗にかとらず）

ゑんかく　ナ。遠隔。とほくへだゝるをいふ。

ゑんきん　ナ。遠近。をちこち。とほきとちかきと。

ゑんくわつに　ソ。圓滑。まろくしてなめらかに。

ゑんけい　ナ。遠景。とほくみるけしき。

ゑんけん　ナ。遠見。とほみ。みとほし。

ゑんげん　ナ。淵源。ふちとみなもとと。

ゑんこう　ナ。猿猴。猿の一種。てながざるに同じ。

ゑんごく　ナ。遠國。をんごく。とほきくに。

ゑんざ　ナ。圓座。わらふだに同じ。中務内侍日記（すのこに、圓座をしく。關白、大臣のはあつゑんざ、そのほかの公卿のはうすゑんざなり）

ゑんざい　ナ。冤罪。ぬれぎぬ。むじつのつみ。

ゑんざむし　ナ。圓座虫。虫の名。わまひこに同じ。

ゑんざん　ナ。遠山。とほやま。とほくにみゆるやま。

ゑんじゆ　ナ。槐。木の名。ゑにすに同じ。

ゑんず　ワ。カゲ。カ。怨。うらむ。うらみをいふ。源寄木（つれなきさまをみせて、れいのむらむらゑんずるに）

ゑんする　ナ。淵酔。せちゑなどのゝち、おほうちにてせさせらるゝうたげ。十訓三（太子の難波宮をかこめりしに、太子、淵酔によりて、この事を志りたまはず）

ゑんそく　ナ。遠足。とほみちをあるくをいふ。

ゑんたう　ナ。遠島。刑の名。をんる。しまながし。

ゑんぱう　ナ。遠方。とほきかた。とほきところ。

ゑんぺい　ナ。援兵。たすけのつはもの。すくひのへい。

ゑんらい　ナ。遠来。とほきところよりきたるをいふ。

ゑんりよ　ナ。遠慮。かねてよりよくおもんぱかるをいふ。また、ものごとをひかへつゝしむをいふ。

ゑんろ　ナ。遠路。とほきみち。平家五（遠路の間で候へば、土産、粮料ごときものも、大切にさぶらふ）

ゑもと　ナ。絵元結。いれもとゆひに同じ。

ゑものがたり　ナ。絵物語。ゑのものがたり。源蓬（ゑものがたりのすさびにてあかしくらしたまふ）

ゑもん　ナ。衛門。こんゑのたぐひ。衛門府に属せるものにて、専ら、宮門の内をまもる事をつかさどるもの。

ゑもんのかみ　ナ。衛門督。ゑもんふのかみ。

ゑもんのすけ　ナ。衛門佐。ゑもんふのすけ。

ゑもんふ　ナ。衛門府。左衛門府、右衛門府といふ二府あり。二府に、督、佐、尉、志、府生などの官人ありて、宮門の守衛をつかさどる。但し、近衛は、もはら、宮門の内を警衛し、衛門は、もはら、宮門の外を警固す。されば、近衛を、内衛といひ、衛門を外衛ともいへり。

ゑやう　ナ。絵様。ゑなどりなどの、ゑにうつしいだしたるもの。源胡蝶（とびちがふ蝶の、波の文に、もんをまじへたるなど、ものゝゑやうにもかきとらまほしき、まことに、斧の柄も朽ちつべうおもひつゝ）

ゑらく　ワ。ヒトリ。四。歓笑。ゑらぐ。よろこびたのしむ。續紀廿（黒紀白紀能御酒乎、赤丹乃保仁多末倍惠良伎）

ゑらふそく　ナ。絵蝋燭。らふそくに、むなどりなど、いろいろの絵をかきて、うつくしくいろどりたるもの。

ゑらゑらに　ソ。咲々。ゑみくと。よろこびたのしみて。万十九（とよのあかり、みしせすけふは、ものゝふの云々、惠良惠良爾、つかへまつるを、みるがたふとさ）

ゑり　ナ。襟。うをとるもの。ふしづけに同じ。

ゑり　ナ。彫。ほり。きざみ。源行幸（例のおなじすぢの歌ありけり云々、御手は、昔だにありしを、いとせりなうしゞみ、ゑりふかう、つようかたうかきたまへり）

ゑりいた　ナ。彫板。かさぎ。せんぎ。せんくう。

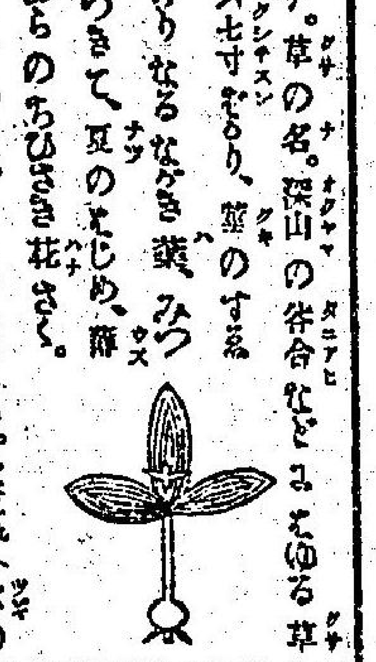
ゑりいる　ワ。カゲ。シ二。彫入。ほりいる。きざみつく。平家三（文字をばゑりいれ、きざみつけたりけれど）

ゑりもの　ナ。彫物。ほりもの。ほりつけたるもの。

ゑる　ワ。カゲ。四。彫。鐫。ほる。きざむ。ちりばむ。ほりものをなす。佛足石歌（よきひとの、まさめにみけん、御あとすらを、われはえみず、いしにゑりつく、たまにゑりつく）万廿（門たてて、戸はさしたれど、ぬすびとの、穿あなより、いりてみえけん）

ゑる　ワ。ヒトリ。四。歓笑。ゑらぐに同じ。字鏡（嘲惡留）

ゑれんさう　ナ。草の名。深山の谷合などに生ゆる草にて、高さ六七寸ばかり、茎のすゑに、三寸ばかりなるながき葉、みつづゝならびつきて、夏のはじめ、薄紫なるよひらのちひさき花さく。



ゑらふ　ワ。ヒトリ。四。歓笑。よろこびたのしむ。枕草九（次の間に云々、御文とりつぎ、たちゐ、ふるまふさまなど、つゝましげならず、ものいひゑらふ）狭衣二（めのとの、こゝろゆきて、ものいひ、ゑらひなどするをきくに、ねたうかなしきも世の常なり）

を

のどよりいづるひとつのこゑにて、うとおとかさなれるこゑなり。

を　ナ。男。夫。をとこ。また、をうと。古事記（やちほこの、神のみこと、我れもよ、女にしあれば、汝をきて、男はなし、汝をきて、つまはなし）風雅（鳥かへる、谷のとぼそに、雲ふかし、爪木こる男の、道やたえなん）

を　ナ。尾。をり、けだものなどの、志りにひきたるながきもの。新六二（高砂の、山の山鳥、をのへなる、をつをの垂尾、ながくこふらん）和名（尾和名、鳥獣尻長毛也）

を　ナ。尾。峯。みね。また、ふもと。古今（やまざくら、をがみにくれば、ほろがすみ、みねにも、をにも、たちかくしつゝ）古事記（其長度谿八谷峡八尾而）

を　ナ。苧。あさ。また、なが〳〵うみつゞけたるあさ。万三十（をとめらが、をけにたれたる、績麻なす、長門の浦に、朝なぎに、みちくる潮の）和名（麻和名乎、一云阿佐　枲麻也）

を　ナ。緒。ひもなどの、ものをむすぶにもちふるもの。また、すべて、ものの、なが〳〵つゞきゆくつゞきをいふ。万二（あづまどの、のざきの箱の、荷の緒にも、妹が心は、のりにけるかも）同廿（あらたまの、年の緒なく、いつまでか、わがこひをらん、命しらずて）

を　ナ。峰。をねをいふ。下総などにて、

を　ナゲキ。嗟。むい。いらへのこゑ。著聞八（人のめす御いらへには、男は、よと申し、女は、をを申すなり）

を　ナゲキ。ふ。ものを。万二十（足引の、山よりいづる、月まつと、人にはいひて、妹まつ我乎）古今（終にゆく、道とはかねて、きゝしかど、昨日けふとは、思はざりしを）

を　クヌエ。動作を、そこにすゑとらしめる意にもちふる辞にて、さ、によりなどの意にもちふるもあり。古今（花の色は、雪にまじりて、みえずとも、香をだに匂へ、人のしるべく）十六夜日記（あけぬなる、海の上を、ふとほそき月いでたり）源若菜（女は、春を憐むを、ふるき人のいひおき侍りける、げにさなん侍りける）

を　ツケ。辞の志らべにもちふるのみにて、こゝろなきこともあり。但し、まれには、命令のよのこゝろにもちふるをきあり。万十（さをもり、船こぎせ乎と、よぶ聲の、いさらねばかも、かぢの音せぬ）古今（萩が花、ちるらん小野の、露霜に、ぬれてをゆかん、さよはふくとも）源蜻蛉（くるしとおぼして云々、のどにをとなぐさめたまふ）同篝火（こよひは、まくづきなどこゝろしてを）

を　ツチ。小。ちひさき。すくなき。をす、をぐるまなど。

をい　ナゲキ。唯。いらへのこゑ。また、よびかけにもちふることあり。源玉鬘（つらくおもむれんを、なほ、ほけ〳〵しき人の、神かけてきこえひがめたまふなりやと、ときゞきす、をい、さりくとうなづきて）

をいくさ　ナ。男軍。つよきいくさ。神武紀（男軍）

をいや　ナゲキ。唯。いらへのこゑ。源宿木（常陸前司殿の姫君の、初瀬の御寺にまうでてかへりたまへるなり、むしめも、こゝになんやどりたまへりしと申すに、をいや、きゝしひとなりとおぼしいでて）

をいをい　ナゲキ。唯々。いらへのこゑ。また、よびかけにもちふることあり。癸花月（かくしけなき、ひとなきとえたまへば、をいく、さなりくとのたまふ）

をう　ナゲキ。驚きてさけぶこゑ。宇拾四（別の事に候はず、民部大輔五位の鼻あかきにてこそ、志り申しされといひたりければ、をうといひてにげにけり）

をうし　ナ。牡牛。をとこのうし。

をうと　ナ。夫。をとこ。をんなのつれあひのをとこ。和名（夫白虎通云、夫猶扶也。以道扶接也、云々和名乎宇止　一云古乎止）

をうとのをとこ　ナ。夫。つれあひのをとこ。水鏡（かの妻の女、いみじくおちて、男に、これうちころしてよと

いひしども、をうとのをとこときらざりき）

をうな　ナ。女。をんな。古今序（たとへば、絵にかける女をみて、いたづらに、心をうごかすがごとし）

をうなご　ナ。女子。をんなのこ。源若菜（をうなごを、おぼしてん事よ、いとかゝるべきなむなりけり）

をうをう　ナゲ。號きてさけぶこゑ。宇拾四（この足の代に、など足をきれ、往生すべき相ある者の、足きられていくでらみんや、をうをうとをめきければ）

をか　ナ。岡。ちひさきやまのごとくにて、ひくくしてたひらかなるところ。古今（みづくきの、をかのやかたに、妹とあれと、寝てのあさけの、霜のふりはも）

をか　ナ。陸。くが。りく。みづならぬところ。夫木廿五（鳴海潟、をか廻りて、ゆく人は、都の宿に、何をかたらん）

をかがみ　ナ。尾鏡。をのかゞみ。やまどりのをの、みづにうつれるをいふ。万代（やまどりの、をろの長尾の、をろかゞみに、かゝるこゝろを、みるやとほづま）

をかきつ　ナ。小垣内。かきつといふに同じ。万九（小垣内の、あさをひきほし、いもなねの、つくりきせけん、しろたへの、ひものをとかず）

をかぎり　ナ。岡縣。木の名。葉、花、実、すべて、桐のごとくにて、材のさま、桐のごとくやわらかならず。

をかごえ　ナ。岡越。をかの、こえてゆくところ。やまごえの、たぐひ。夫木廿二（をかごえの、みちをくるしみ、かむそびの、あするの方な、ゆきてあそばん）

をかし　ナ。犯。つみ。すまじきことをしさるをいふ。宇拾四（いみじき悪人にて、ひとやに、七度ぞいりたりける云々、いくそばくのをかしをして、かくて七度までいりあさましゆゝしき事なり）

をかし　サフ。可笑。をそなり。をらふべし。この語は、今は、をかしは、いをそへていふ。源紅葉（中将、をかしきをねんじて、ひきたてまつる屏風の許によりて、ごほごほとたゝみよせて）字鏡（可咲、見咲兒阿奈乎加之）

をかしい　サ。可笑。をかしな見るべし。

をかしがる　ワ。ヒトリ。四。笑しくおもふ。をらはんとす。

をかしみ　ナ。笑しくおもはるゝあぢはひ。

をかじようき　ナ。陸蒸汽。おかじようきしやに同じ。

をかす　ワ。カケ。四。犯。侵。冒。すまじきことをなす。いたくまじきことをなす。がいとなるべきことをなす。大和（ことくにの人の、いたづらに、この国のつちをなん、なすべきといひて、さまざまなるときに）神代紀（冒風波）

をかだ　ナ。岡田。をかたといふに同じ。

をかた　ナ。因。ねやをいふ。武蔵などにて、

をがたま　ナ。木の名。さだかならず。古今（三吉野の、吉野の瀧に、浮出る、泡をがたまの、きゆとみつらん）

をかぢ　ナ。陸路。をかのみち。くがのみち。

をかつつじ　ナ。躑躅の一種。につつじに同じ。堀川次郎（くれなゐの、ふりでの色の、をかつゝじ、妹が裏袖に、あやまされける）和名（躑躅、和名止豆々之、一云乎加豆々之）

をかつびき　ナ。陸引。をかびきに同じ。

をかつら　ナ。楓。木の名。葉はまろくして、みつの岐あり。春のころ、きろき花さきて、實をむすぶ。この木、葉に、あぶらありて、その香かうばしといふ。和名（楓、一名槭、和名乎加豆良、爾雅云、有脂而香謂之楓）

をかととき　ナ。桔梗。草の名。ききやう。ありのひふきを見るべし。本和（桔梗、和名阿利乃比布岐、一名乎加止々岐）

をかのべ　ナ。岡邊。をかのほとり。拾遺（岡邊や、いつともわかぬ、松風の、身にはしむほどに、秋は来にけり）

をがは　ナ。小川。ちひさきかは。新六（おのづから、岸にまさる、山水の、すゑは小川に、なりにけるかな）

をかふら　ナ。牡瓦。つゝかふら。かはらの、やのむねにうつぶけてふくもの。和名（瓦、和名乎加波良、牡瓦也）

をかび　ナ。岡邊。をかべに同じ。万五（梅の花、ちりまがひさる、乎加肥には、うぐひすなくも、春かたまけて）

をかびき　ナ。陸引。とりてはつられてきらくもの。

をかふ　ナ。岡生。をかにはゆるもの。夫木廿（東野の、をかふの稻葉、いでされば、何を糧と、すぐる世ぞ）

をかべ　ナ。岡邊。をかのほとり。新六六（夏ふかき、をかべのあふち、さけりあひて、この里人ぞ、ゆふすずみする）

をかぼ　ナ。陸稻。稲の一種。をかいねに同じ。

をかまがへる　ナ。蟋蟀。ひきがへるをいふ。安居、上総にて、

をかみ　ナ。岡見。十二月のつごもりの夜、蓑笠を着て、木の末にのぼり、我が家にむかひて、いはひごとする

をいふとぞ。また、かくすれば、来年あるべき事、あらもにみゆといふ。堀川百首（ことざまの、おぼつかなさに、をかみすと、こぞみなからも、さしなこすな）

をかみ　ナ。陸見。よそめ。そぞめ。かたそらめ。

をがみ　ナ。拝。ぬかづきて、うやまひをするをいふ。夫木（拝する、片目に、妹が見れつゝ、いづらゝは心、清水の瀬）

をがみいる　ワ。ヒトリ。四。拝入。ふかくをがむ。源玉鬘（をはらに、手をひきをなきず、をがみいりてをり）

をがみうち　ナ。拝打。ひさひにふりあげてうつをいふ。

をがむ　ワ。カケ。四。拝。ぬかづきて、うやまひをするをいふ。土佐（人にとへば、八幡の宮といふ。これをきゝて、人々をがみ奉る。山崎の橋みゆ。嬉しき事かぎりなし）

をかめ　ナ。陸目。よそめ。そぞめ。かたそらめ。

をかん　ナ。悪寒。やまひにてさむけだつをいふ。

をかもち　ナ。岡持。ひらさきをけの、さげてもつもの。

をがもの　ナ。陸物。をかにいでくるもの。

をがや　ナ。小萱。ちひさきかや。新六一（野邊みれば、小萱が下は、うらがれて、秋くれぐさに、なりにける哉）

をがら　ナ。麻幹。あさがらに同じ。

をぎ　ナ。荻。草の名。あしのたぐひのちひさきもの。万十（葦邊なる、荻の葉さやぎ、秋風の、ふきくるなべに、雁なきわたる）和名（荻、字亦作萩、和名乎木、與薍相似而非一種矣）

をぎ　ナ。男木。きの、をとこさるもの。

をぎかぜ　ナ。荻風。をぎにふくかぜ。をぎにやどりさるかぜ。和泉式部物語（ねざめねば、きかぬならん、荻風は、ふきざらめやは、あきのよなく）

をぎなえ　ナ。招揺。たらをなつくるためにつくるなど。

をぎにくし　サ。ヒ。難招。まねきぐさし。役操（をが為に、をきにくらりし、鴉の、ひとの手にありと、きくは實か）

をぎはら　ナ。荻原。をぎの、ひろくしげれるところ。浙手（ふくかぜの、おとのみ、あきの、かさみにて、しもがれそつる、にそのをぎはら）

をぎむし　ナ。尺蠖。虫の名。しやくとりむし。形すこし、蠶に似て、蠶よりちひさし。この虫、ゆくときは、頭と尾とを、ひとところにかゞめよせて、ながくはしのべてゆく。和名（尺蠖、説文云尺蠖、和名乎岐無之、屈伸虫也）

をぎみ　ナ。招餌。をの、たちをよびよするためにあたふるもの。拾遺（むしろの、をとおまにせんと、かまへさる、おしあゆがすな、ねずみとるべく）

をく　ワ。カケ。四。招。まねく。まねきよす。万十九（月たちし、日より乎伎つゝ、うちしのび、まてどきなかぬ、ほとゝぎす）夫木八十（ふるゆきに、ともむれからず、去るべしと、をけども見えず、ましらふのたか）

をぐき　ナ。小岫。くきに同じ。万四十（武蔵野の、乎具奇がきぎし、たちわかれ、いにし宵より、せろにあはなふよ）

をぐさ　ナ。小草。ちひさきくさ。伊丹集（をがせこが、きませりつるか、みぬ程に、夏の小草も、かさまよひせり）

をぐし　ナ。小櫛。ちひさきくし。また、くしといふに同じ。万九（きみなくは、なぞ身よそはん、くしげなる、つげの小櫛も、とらんと思はず）

をぐつ　ナ。麻鞋。くつの、あさにてつくりさるもの。和名（麻鞋、顔氏家訓云、麻鞋一提、麻鞋、和名乎久豆、辨色立成云、麻鞋、以麻爲之）

をぐな　ナ。童男。をのこらこ。景行紀（童男、此云烏具奈）

をぐら　ナ。小倉。地の名。山城にあり。古今（夕月夜、小倉の山に、なく鹿の、聲のうちにや、秋は暮るらん）

をぐらし　サ。ヒ。小暗。うすぐらし。夫木五（あさぢふも、雀隠に、なりにけり、うら木の本は、をぐらかりけり）

をぐらす　ワ。カケ。四。小暗。かきくらす。源総角（かきくもり、日影もみえぬ、奥山に、心をぐらす、ころにもあるかな）

をぐるま　ナ。小車。ちひさきくるま。また、たゞ、くるまといふに同じ。夫木三十三（やまざとの、あさまさびゆる、小車に、こゝろやりさる、あゆきのころ）

をぐるま　ナ。旋覆花。草の名。葉のさま、柳に似て、花は、黄色なるが、すこし、菊に似たり。この花、日のさすかたにむきてかさぶく事あり。唐葵はこれをもいふなるべし。からあふひのところ見合すべし。

をぐろ　ナ。小畔。ちひさきくろ。また、たゞ、くろといふに同じ。散木（やまさとは、むれせぬきりの、いぶせきは、小田のをぐろに、うづらなくなり）

をけ　ナ。桶。みづなどをいるゝうつものにて、いにしへは、つゝのやうにならべて、たがをかけてかさめさるものの。いにしへ、麻をうみていれしゆゑに、麻笥といへ

え

えいえん　名・形動　永遠　(いつまでも変わらないこと)

えいが　名　映画　(映画館で上映する、物語などを写した動く画面)

えいが　名　栄華　(権勢を得て、ぜいたくな生活をすること)

えいきゅう　名・形動　永久　(いつまでも変わらないこと)

えいぎょう　名・自サ　営業　(利益を得るために、継続的に仕事をすること)

えいこく　名　英国　(ヨーロッパ北西部の島国)

えいこくじん　名　英国人　(英国の国籍を持つ人)

えいご　名　英語　(英国・米国などで使われている言語)

えいこせき　名　永久歯　(一度生えると抜けない歯)

えいじ　名　英字　(英語を書き表すのに使う文字)

えいじしんぶん　名　英字新聞　(英語で書かれた新聞)

えいしゃ　名　映写　(スクリーンに映画などを映すこと)

えいしゃき　名　映写機　(映画などを映すための機械)

えいしゃく　名・自サ　英爵　(英国の爵位)

えいしゅう　名　英雄　(すぐれた能力で人々から尊敬される人)

えいしょう　名・自サ　詠唱　(歌うように声を長く引いて唱えること)

えいせい　名　衛生　(健康を守り病気を防ぐこと)

えいせいてき　形動　衛生的　(衛生に適しているさま)

えいぞう　名　映像　(映画やテレビなどに映し出される像)

えいぞく　名・自サ　永続　(いつまでも続くこと)

えいたい　名・副　永代　(いつまでも)

えいたいばし　名　永代橋　(東京都江東区と中央区を結ぶ橋)

えいたいやく　名　英帝国　(英国の国家)

えいたん　名・形動　詠嘆　(感動して声を長く引いて言うこと)

えいたんし　名　詠嘆詞　(感動を表す品詞)

えいたんてき　形動　詠嘆的　(詠嘆の意味を含むさま)

えいたんふ　名　詠嘆符　(感嘆符)

えいちゅう　名・自サ　詠誦　(声を長く引いて詩歌を読むこと)

えいてん　名・自サ　栄転　(より高い地位に転任すること)

えいびん　名・形動　鋭敏　(感覚などが鋭いこと)

えいぶん　名　英文　(英語で書かれた文章)

えいぶんがく　名　英文学　(英語で書かれた文学)

えいぶんぽう　名　英文法　(英語の文法)

えいぼ　名　英母　(英国の母)

えいぼ　名　英母　(英国の母)

えいぼ　名　英母　(英国の母

をたてられば、なほなほれる代ぞ、ひきうしろるべき）孤水嚢（月ハ、有明にて、光なきなされるものから、影ほのやかにみえて、なまくおもしろきあけぼのなり）

をさむ　ワ。カケ。シニ。治。納。をさめをさむ。この語ハ、地方によりてハ、をさめるを下一段といふ。万十二（をさまらる、ひなも乎佐牟流、ますらをや、何らものもふ）同九（をさめてか、あたらひびけて、うちこし田を、かりてをさめん、くらなしの縁）新六二（ひとすぢりハ、心をふかく、をさめおけ、斧の柄つくる、ほども忘られじ）

をさむ　ワ。カケ。シニ。戒。をさむるに同じ。源氏明石（かぎりあれバ、例のをさむるはなかめくさてまつるを）

をさむし　ナ。蔵虫。虫の名。あきむしに同じ。

をさむるつかさ　ナ。治部省。卿、輔、丞、録などの官人ありて、諸氏の姓を正し、また、五位よりうへの人の婚姻を監みるたぐひをもじめて、諸陵の事、外國人の事などをつかさどる。和名（治部省乎佐牟留都加佐）

をさめ　ナ。長女。をうな。和名（専領二字讀乎佐女大宇女、乎佐女）

をさめ　ナ。長女。きもをんな。くりやめ。枕草一（をさめ、みくそやうど、たびしかららをいふまで、いつらハ、それをもちかくれさりし）同廿（をさめが、ちらぬのにおさとりなをとりて、もちて、あす、さをへいらんといひてかくしおきたりけるが、いかがしけん、犬のみつけて）

をさめ　ナ。納。をさめ。をさまり。をさまい。

をさめつくるつかさ　ナ。修理職。大夫、亮、進、屬などいふ官人ありて、内裏の修理にかかるよろづの事をつかさどる。和名（修理職乎佐女豆久里加佐）

をさめどの　ナ。縫殿。みかどの御衣などををさめおくところ。紫式部日記（上より、御使などあり云々、をさめどのより國々の絹どもをいださせて、この人々にたまふ）

をさめる　ワ。カケ。シニ。治。納。をさむを見るべし。

をさなはし　ナ。冠。かむりをいふ。甲斐にて。

をさなき　リ。大凡はいふことにて、あまり、あまりはれ、おほらか、ふくれなどの様まて、打指のうへはもちぬ。万葉（との野は、をさなきならそり、乎佐乎左も、靼なへ子ゆゑは、長はところそえ）浜松二（中納言ハ、おいぼれる上は、ものおもひのみして、をさなくいできじらひさまふ事もなし）栄花藤原（婿はなりさまつと、をさなく、聞えさまへども、ものしさまたず）

をさをさし　サ。ブ。長々。なれてあり。たくみにてあり。かしこくあり。をさなくしも、おもほえず）夫木三（やまくつの、あさてはかけて、おるそのの、をさをさしきれ、なが身なりけり）伊勢（されど、まだなれけれバ、文もをさなくしらりず、こともいひしらず）

をし　ナ。鴛鴦。水鳥の名。かもち。鴨より小さくして、背は、剣羽といふ羽あり。そのさま、扇をひろげたるやうなり。また、金身は、文ありて、頭は、ながき毛あり。頭は、くれなゐの絲のごとき毛あり。この鳥、

常は、雌雄ならびゐて、はなれたなることまれなり。新六三（いけみづは、をしのつるぎぞ、そなへて、つまあらそひの、はしきむけしき）和名（鴛鴦和名乎之、雌雄未嘗相離、人得其一、則其一思而死、故名匹鳥也）

をし　サ。ブ。愛。惜。めづべし。をなちなくあり。この語ハ、今ハ、をしいを、いをそへていふ。後拾（よそながら、をしき櫻の、にほひらな、誰よが宿の、花とみるらん）

をし　ナゲキ。鳴をさづむること。源氏宿木（聞きうづきさきげて、をしとのさまるこころひもてなしさへ、何のおほやけごとなれど、ひとに似ず）

をしい　サ。愛。惜。をしを見るべし。

をしか　ナ。牡鹿。をこの志か。拾遺別草（露ふかき、萩の下葉は、月さえて、なじらなくなり、秋の山里）

をしかぞ　ナ。草。もみなぞ。和名（草和名乎之加波、杂皮也）

をしがも　ナ。鴛鴦。をしに同じ。夫木廿（こころせよ、つなさを悲きて、をしぐるの、たもしきさゐむ、岸の白波）

をしき　ナ。折敷。へぎいたををりかめて、つくりなるける、さなるほんにて、かはらけなどをすうるもの。源氏宿木（おなこのすのこより、まらも来て、御湯などまゐらせへまへとて、をしきどもも、なりつぎてほしいる）

をしけし　サ。ビ。惜。をしに同じ。源氏胡蝶（紫の、ゆゑは心を、ある、ふちは身なげん、名やいをしけき）

をしきめ　ナ。章鼓。さめのかその、やそらかにこしらへたるもの。宗五大双紙（をしさめ、あるさめなどかけるる、

をしよりきる人ハをうれ侯ひし）

をしうり　ナ。宛鳥。赤黒の名。をしに同じ。

をしね　ナ。小稲。をしねをいなといふ。新勅（片岡の、林の木の葉、いろづきぬ、早田のをしね、いまやからまし）

をしふ　ワ。カケ。シニ。教。をさの道びきをなす。この語ハ、地方によりてハ、をしへるを下一段といふ。古今（をならうず、かぜのやどりに、たれのきる、をれまをしへよ、ゆきてうらみん）枕草一（をうもまなしへらることそなどけはいすれば、ゆみじくもらえせさまひて）宇治十（されバ、それををしへんとて、をしへられてかへりのほりぬ。くちをしき事かぎりなし）

をしへ　ナ。教。あるべきみちびき。源氏若菜（ひとのをしへのきよは、にそむきたづねいり侍りつれど）

をしへかた　ナ。教方。をしへのみち。をしへの来ろ。

をしへぐさ　ナ。教草。をしへのためし。数千（かりくらず、とびの鷹の、教草、あすもやおなし、跡をたづねん）

をしへご　ナ。教子。でし。もんじん。をしへおうくなひた。

をしへのには　ナ。教庭。ものまなびするところ。

をしへる　ワ。カケ。シニ。教。をしふを見るべし。

をしほやま　ナ。小塩山。山の名。山城にあり。古今（大原や、小塩山も、けふこそハ、神代の事も、思ひいづらめ）

をしむ　ワ。カケ。四。愛。惜。めづ。をなちがるくおもふ。拾遺（いまよりハ、紅葉のもとに、やどりせじ、をしむにたびの、日数へぬべし）同（さくらむな、そこなるかげぞ、をしまるる、ちづるひとの、ひとの音をおもへば）

をしる　ナ。緒絲。いんろうなどのその、ゆるぬためは、たまなどに、あなをあけて、ひもを通してたむるもの。

をしろ　ナ。尾白。馬の毛色にいふことばにて、馬の尾のみしろきをいふ。和名（騅馬乎之路能宇麻馬尾白也）

をしをし　ナゲキ。鳴をさづけること。枕草一（ひのおましのかさまに、おらのまゐる、かしおをたてし、けいひちなど、をしをしといふこゑき）

をす　ナ。雄。牡。をとこ。鳥、獣、魚、蟲などにいふ。

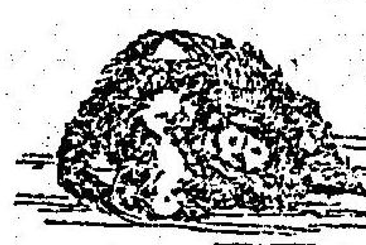
をす　ナ。小簾。ちひさきすだれ。きさ、たぐ、すといふは同じ。新後撰（小簾よりは、つるひ来て、小簾の間もあきらせぞふく）

をす　ワ。カケ。四。食。飲。着。飾。めすに同じ。万廿（すめろぎの、御命の、みこと、佐已乏乎須、くにのまほらに）

をすくに　ナ。食国。めしをきす国。古事記（夜之食國）

をせなかに　ソ。背。をせをかへをいふなどいふをも、いふ。とむならバ、おのの理なるべし。源氏夕顔（まづ、ねさけの、たそう、みせなむは、みえ、みまふ、いこ）

をそ　ナ。獺。獣の名。形は、狐に似て、色あをぐろし。常は、河辺の岸の穴などにすみて、魚をとりてくらふ。和名（獺和名乎宇蘇、獺居山中、食魚獲者也）



をそ　ナ。虚言。うそ。いつそり。そらごと。ねなしごと。万廿（鵲とふ、於保乎杼里の、まさでにも、来まさぬ君を、ころくとぞなく）

をそだぶ　ワ。ヒトリ。シニ。小兒のあまゆるをいふ。落窪一（今、まれしありて、あけんつひでにとのこまふは、をさなく、あれ、おしぼちてんともちらのこしれど）

をそろ　ナ。虚言。をそに同じ。万四（あひみては、月もへなくに、こふといはば、乎曾呂と我を、思ほさんかも）

をだ　ナ。小田。たといふに同じ。夫木（谷ふかみ、ところの小田は、居げしてまれはそだてる、おろかにの稲）

をだうか　ナ。男踏歌。をとこのふかに同じ。四季物語（今は、やう、その事そぎゆきて、たゞ、めでたう、をかしうのまねび、追儺めしの節の物あげ云々、左右のみつまやのつかさのくらべうまなどのみのこり）

をだけ　ナ。男竹。たけの、やどりなるもの。

をだけび　ナ。雄詰。をたけび。語説集（齋衍威之嶮語為多稽眉）

をだち　ナ。小太刀。ちひさきたち。万九（ところをは、まけてわらじと、かきそきの、小劒とりはき）

をだはらぢやうちん　ナ。小田原提灯。ちやうちんの、ほそながくして、をりこむやうにしたるもの。

をだはらひやうぎ　ナ。小田原評議。ひやうぎの、ひさしくなりて、つひにさだまらずしてやむをいふ。これハ、むかし、北條氏の、小田原は籠城せるとき、降るべし降るまじの評議ありしが、つひは、きだまる事もなくて、や